

奇譚クラウス



新しい風俗文藝誌

作 鬼 六 団



決 定 版

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

|| 略号「花決定版」 || 定価一、〇〇〇円 ||

△ 内容主要見出し一覧 △

第一章 発端 第二章 恐ろしい探偵 第三章 美人の脱走 第四章 華麗な来客 第五章 救済者の失 第六章 救済者の失 第七章 悪魔の地獄 第八章 恐怖の地獄 第九章 淫蛇の執念 第十章 色事子の受難 第十一章 美津子の受難 第十二章 落室の秘密 第十三章 脱走の秘密 第十四章 華やかな宴 第十五章 地獄屋敷へ 第十六章 翻弄されるカッブル 第十七章 一千万円の身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 奇妙な三々九度 第二十五章 飼育される白い動物 第二十六章 悪魔と悪女の悪業 第二十七章 屈辱の地獄 第二十八章 逃走の恐怖と失敗の結末 第二十九章 悪鬼達の残忍な所業 第三十章 落花無残の修羅場 第三十一章 淫らな美女の調教 第三十二章 すすまじいショーの展開 第三十三章 汚水にまみれた宝石 第三十四章 華々しき美女の屈伏 第三十五章 対峙する美女と美女 第三十六章 あくどい陥穽 第三十七章 羞恥図絵の展開 第三十八章 清純な令嬢の屈辱 第三十九章 人身御供の令夫人 第四十章 深窓の美少女とズベ公 第四十一章 小夜子への執拗な調教 第四十二章 変性色事師の登場 第四十三章

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい穢の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなく汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。
〒558 暁出版株式会社宛

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以來二十數年、多くの女性愛読者の方々の告白の投稿やモデルの応募によって、数多くの貴重な作品が誌上を賑わし、風俗文獻誌としての絢爛たる金字塔を、打ち立ててまいりました。真摯で研究熱心な本誌読者の方々の期待に、応えて写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか御遠慮なく勇気を出して御応募下さるよう、お待ちしております。

○本誌愛読の女性の方でしたら、国籍、未婚の別、年齢など一切問いません。遠近に拘らずお申込み願います。採用させて頂いた方には、謝礼として一回につき壹万円以上拾万円まで、即金にてお払い致します。

○応募されました方々の個人的な秘密の漏洩は、御本人の許しがない限り絶対致しません。故、御安心の上、御応募下さい。尚、告白文をお書き下さった際は別に原稿料を、資料を提下さった方には謝礼を併せて、お支払い致します。尚、お申込みの傾向などを出来るだけ詳しくお書き添え下されば幸甚に存じます。

○撮影いたしました写真は、誌上掲載を原則とはしておりますが、若し御都合によって発表を望まれな場合は、その旨添記下されば改めて打ち合わせしたいと思ひます。助手や介添えとしての出演、若しくは編集部資料作成について、のプレイ出演などの役に任じて頂きたいと思ひます。その際の報酬は、改めて個々に御相談に応じたいと思ひます。

○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体重などは必ずお書き添え願います。写真があれば同封下されば好都合ですが、お手元に適当なものがないければ結構です。

○申込先。大阪市住吉郵便局私書箱第41号

賞金

入選作品	第一席	二十萬円	1篇
入選作品	第二席	十萬円	1篇
入選作品	第三席	五萬円	3篇
入選作品	第四席	三萬円	5篇
入選作品	第五席	二萬円	10篇
佳作優秀作品		一萬円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

一、形式は小説、創作、読物などのフィクション、インクでも告白、体験、手記のようなノック見談やレポート、写真、画、参考資料などが実に歓迎します。布下されば幸いです。(資料に限り返戻の求めに応じます)手紙、随筆、論説、意見、戯曲など、如何なる形式のものでも最も得意とされるものを選んで御執筆下さい。幾多のS・M作家を輩出させて本誌の誌面を野心的にある読者の方は登竜門として試みて下さい。

▽規定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作品に限ります。原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上、三百枚迄に制限致します。

一、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載し入選と同時に規定の賞金を贈呈致します。尚掲載の際、発表に支障ありと思われる個所を削除することもあります。

故、原稿御入用の方は前もってコッピをとつておいて下さるようお願い致します。

一、懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿と區別するため、第一頁に「懸賞」とお書き下さい。ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所（又は連絡先）は必ずお書き願います。

応募者の氏名を公開したり他へ洩したりなどは絶対に致しません故、御安心下さい。永続性のある奇くに作品を発表して、貴方の力量と手腕を、どうか發揮して下さい。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第四十一号「暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種便）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断わり致します。

奇譚クラブ

昭和四十九年一月二十日印刷 昭和四十九年二月一日発行 二月号 (第二十八卷第二号) 毎月一回(一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大島特別換承認雑誌第二〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly by
Akatsuki Shuppan
Osaka Japan

2

¥400

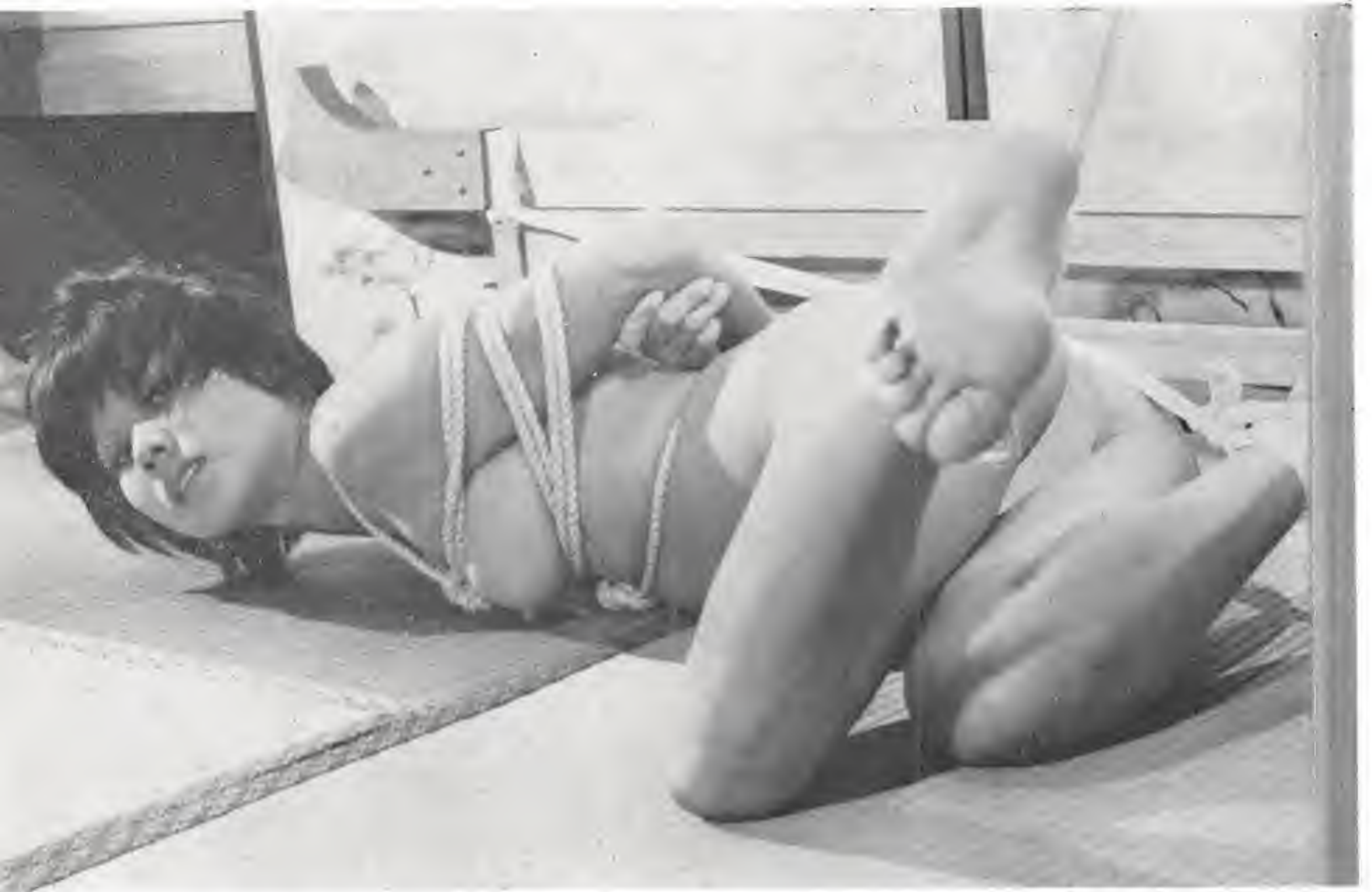
甘美で肉迫的なプレイ展開

〔塚本鉄三・撮影〕



排尿さらし者の譜

△深田菊子▽



昭和四十九年 二月号目次

△第二十八卷第二号
通刊第三二二号▽

「縦縄に晒す裸身のひとに想う」△笠井奈保子▽……小岩草一郎……(21)

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ
『ああ、M女狂えり』〔苗木陽子〕の巻……塚本 鉄三……(22)

敗戦秘話『蝮のマリー登場』……鈴鹿 晶子……(54)

北満哀歌『私は結婚が恐ろしい』……竹迫 誠也……(63)

浣腸病患者の告白『縛り方教室』……山口とき子……(66)

とき子の自縛「縛り方教室」……小川 左門……(74)

按摩の六さん「暗闇地獄の物語」……千葉 青鬼……(78)

連載小説『大噴火』△第六十四回▽……鶴崎 好夫……(86)

私の履歴書「青年期のゴムマント挿話」……秋津新次郎……(90)

連載創作『S M 企業』(第五話)……岩元 浩……(100)

奇妙なマゾ「暗闇、穴」悪霊に魅せられた男……前河恵一郎……(106)

S & Mの考察『塚本鉄三論……点描』……風流極道軒……(114)

連載・S時代小説『紫 蘭の門』(30)……志手原 茂……(126)

告白「グゾキ」とS Mプレイ……三浦 敬一……(132)

夫婦・MS「妻の純子を久々に縛りて」……弾 文夫……(148)

プレイ報告「耽奇房」我楽多控(第十一回)……辻村 隆……(136)

『午前零時の悦楽』(後)……鬼山 絢策……(152)

ゴム愛好家の呼びかけに答えて「外国製ゴム下着のことなど」……岩手 信夫……(166)

連載・M派交友録(47)『グラマーな猛女』……吾妻 竜一……(172)

山田氏に答えて「洩らせ、のびのびと」……泉 一郎……(181)

S小説新人シリーズ『夜の叫び』……久留木 栄……(186)

受難を待つおんな(後)『M子再来』……苗木 陽子……(202)

浩が行く『産業スパイは美人秘書』……とやまかずひこ……(206)

畜化願望の女「ルポの「写真と記事」にしばれて」……千束美能留……(212)

マニアのノート「この醜くて美味なるもの」……

〜甘美で肉迫的なプレイ展開〜〔塚本鉄三・撮影〕

排泄さらし者の譜☆汚辱に 塗みれた女体☆吊られゆく 片足の行方☆股裂きの刑	深田 菊子
捕えた野性的な牝	山原 京子
肥満体の肉を攻める☆白豚 の肉づきのよさ☆狂ったム チ打ちの果て	苗木 陽子
悦虐にすすり泣く乙女☆端 正を打ち破るもの	梨花悠紀子
閨責めのワンカット	中河 恵子
すべてをさらけだして	南 加津子
下半身へのいたぶり☆陶醉 の表情	笠井奈保子
海老縛りの苦悶	玉木 章子
喘ぎが聞える一瞬	前田真知子
後手の表情	西条 紀代
愉悦の表情	松本 たえ
弾みと張りの女体☆悦楽の 宴が終って	福井 桃子
二つの足の裏	鈴木千鶴子

イメージギャラリー「ドッグショー・プログラム」室井
亜砂路(60)◎「浴後のいたぶり」岡たかし(77)◎「テ
ィータイム・サービス」四馬孝(95)◎「謁見の儀式」マ
エダヒオミ(103)◎「裏切りの報酬」岡たかし(118)◎「燭
台」小川茂正(122)◎「誘拐ムード演出」三鷹I・O(129)
◎「艶火の点る部屋」四馬孝(142)◎「商談成立」岡たか
し(160)◎「診察時間」原由貴子(168)◎「皮搾衣の軋み」
四馬孝(193)◎「観察素材」マエダヒオミ(198)◎「四疊
半のモテぶり」岡たかし(210)◎「剥玉子」小川茂正(216)
目次フォト……………深田菊子・高村浩子



美貌のサジスチン春日ルミの偽らざる告白
舌人形とのMプレイ……………春日 ルミ……………(220)

読者通信……………編集部選……………(266)

奇クサロン (288)

僕は玉木章子さんが大好きだ 「猿轡と浣腸への招待」……………羽村 真介	SMに関する私の持論……………西宮 利夫
奇譚クラブに思う……………嵐 竜次	女禪美について……………村山 生
城章夫様へ 余呉湖に遊ぶ……………荒尾 慶子	少年の禪姿の美しさ……………岸田 輝太
サロン落穂抄……………塚本 鉄三	塚本鉄三氏提唱の「SM研究会」に寄せて……………青木 順一
奴隷妾の恍惚の歌……………北川まりこ	片桐様へ誌上プレイの便り……………末広 節男
「トイレ」での写真撮影は……………山口老婆生	白豚に憧れたボク……………藤川冬一郎
飼育妻の能力を試したい……………中村 信宏	SM一年生の提案……………川西 研生
浣腸の好きな女の子……………門田 益夫	通信 ひぎやくのうたげ……………小杉 千恵
マゾヒストの異常な生活……………懸 信子	編集部だより……………木村 信介
告白「オムツと私の生活」……………日下部 登	鎌倉氏の「浣腸についての疑問」に思う……………竹迫 誠也
短信往来 苗木陽子さんへ……………佐賀 武男	イメージ画「セット一式」……………前田ヒオミ
新刊の奇クを手にして思う……………春木 順次	私の「新案飼育調教法」……………西村 夢真
子を孕んだウィーナス……………大原 奇男	緊縛随想 慶子さまは神様……………東山 映史
私の求めるM女性……………山形須 奇男	最近の緊縛映画から……………



捕えた野性的な牝

〈山原京子〉



肥満体の肉を攻める

＜苗木陽子＞



吊られゆく片足の行方



汚辱に塗みれた女体

〈深田菊子〉



〈深田 菊子〉



白豚の肉づきのよさ

〈苗木 陽子〉



悦 虐 に す す り 泣 く 乙 女

〈梨花 悠紀子〉



狂 っ た ム チ 打 ち の 果 て

〈苗木 陽子〉



〈梨花 悠紀子〉

端正を打ち破るもの

トカットのめ責閨



中河恵子



〈南 加 津 子〉

すべてをさらけだして



海老縛りの苦悶

△玉木章子▽

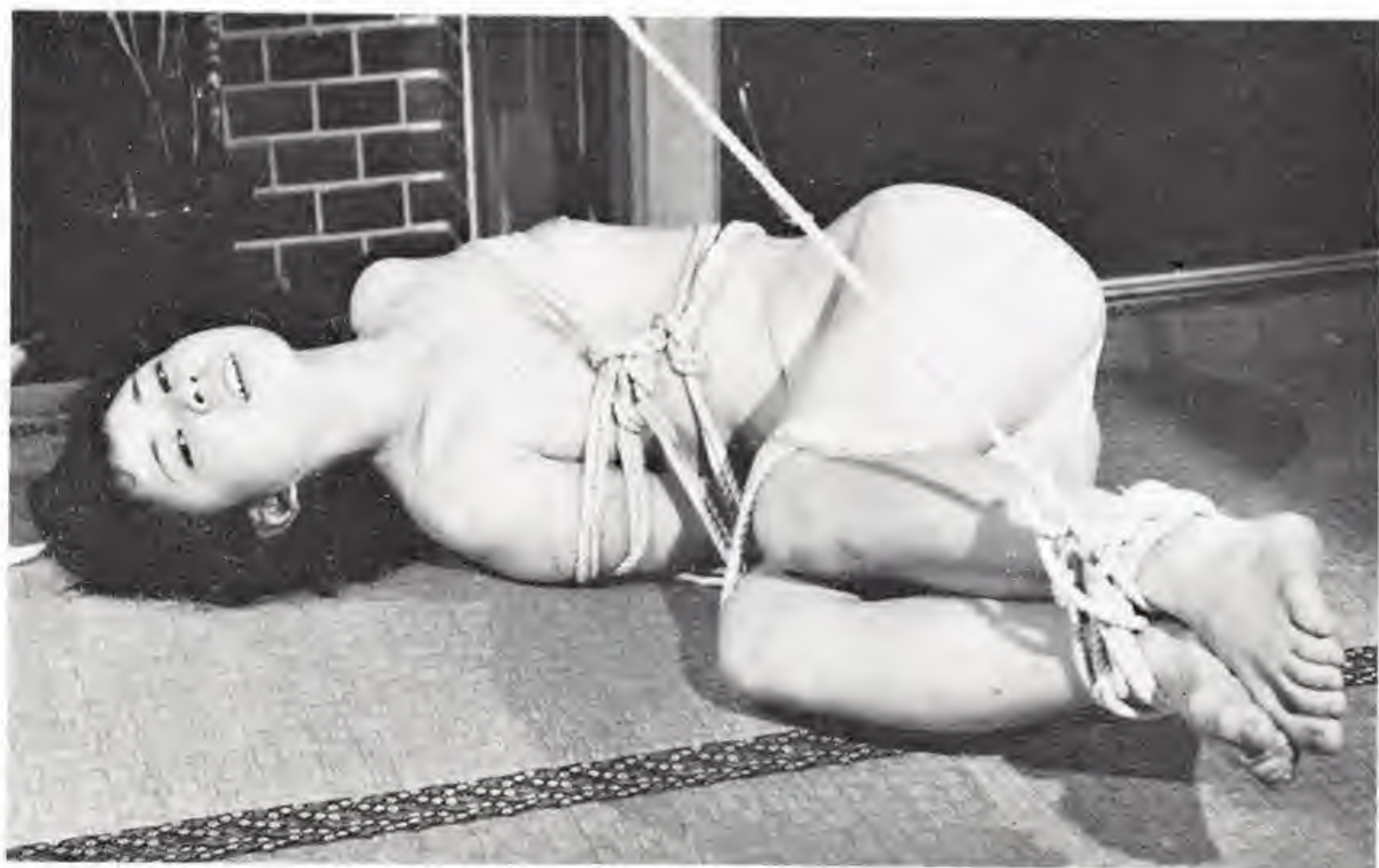


下半身へのいたぶり

＜笠井奈保子＞



喘ぎが聞える一瞬



△前田真知子▽

△西条紀代△



後手の表情



△松本たえ△

愉悦の表情



△笠井奈保子△

陶醉の表情

弾みと張りの女体



△福井桃子▽

悦楽の宴が終って

＜福井桃子＞



股裂きの刑

△深田菊子▽



二つの足の裏

△鈴木千鶴子▽



奇

譚

ク

ラ

ブ

1974

2月号

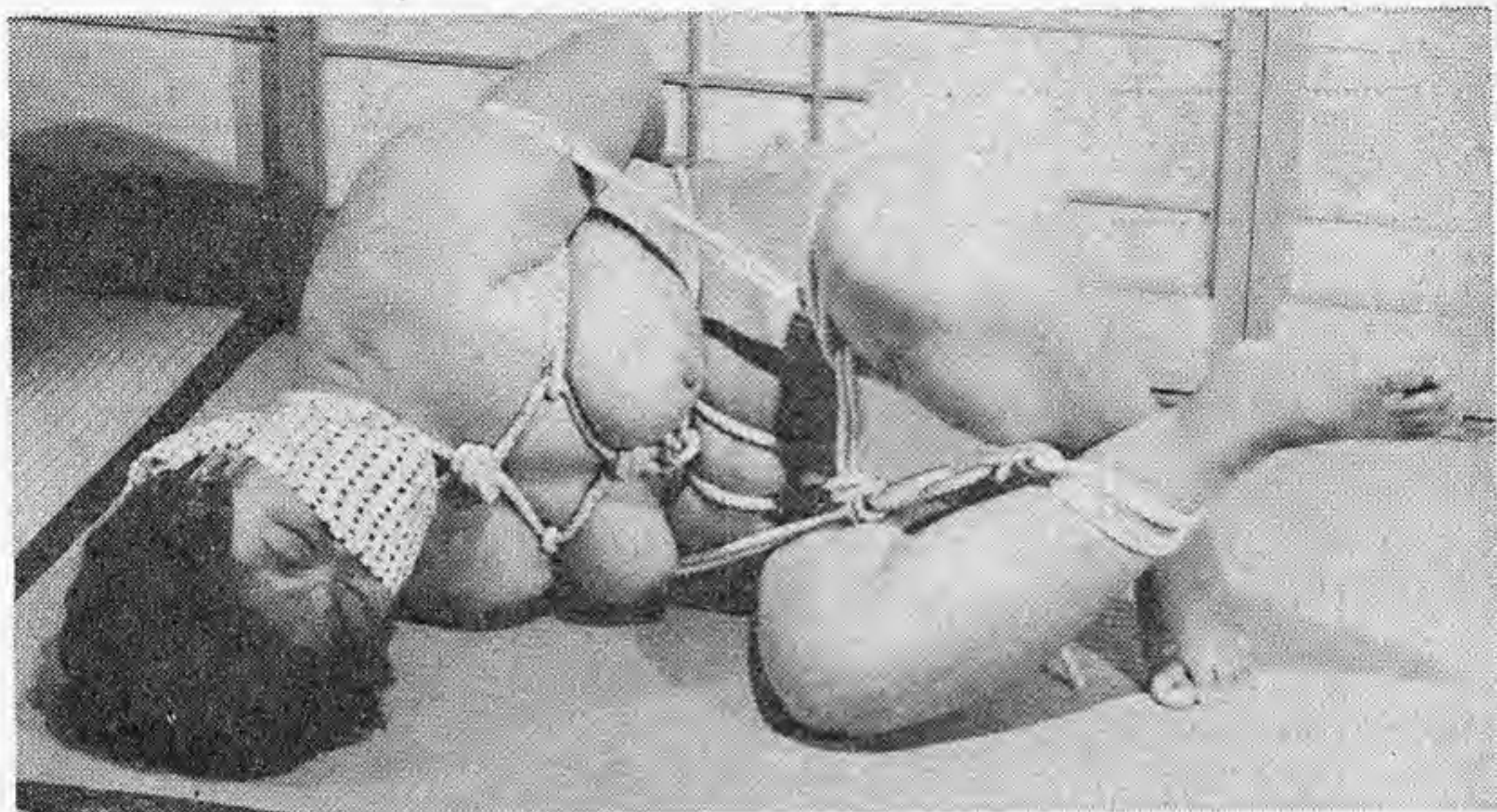
<第28巻 第2号・通刊第312号>

君は、麗しき裸身のひとである。均齊のとれた君の若々しい、その肢体を眺めていて、僕は、その如何にも素人じみたところが好きになった。裸身が好きになったばかりでなく、縄に対する感受性が抜群に豊富なところが、特に、僕は気にいった。縦縄に、自分の女体

……縦縄に晒す裸身のひとに想う……モデル……笠井奈保子……

が真っ二つにされた羞かしさに耐えながら、それでも、縄の喰い込んだ伸びやかな姿体の前面を惜しげもなく晒している君に、僕は限りない憧れの念を抱く。この世にある美しさという美しさは、君の裸身に結集されたような気がするのである。(小岩草一郎・記)





「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

ああ、M女狂えり

苗木陽子の巻
深田菊子

塚本鉄三

縛られ、責められ、苛められたいと願うマゾ女性の生態は、まことに変転滑脱まさに多彩を極めている。その生々しい実態を一つ一つ剔抉してゆくことは、多大の興味のある作業だが、また一面、非常に困難で危険な仕事でもある。私は身を挺して、その難物、マゾ女性の一角に、やっと辿りついたのであった。

徹底した禿山作戦

苗木陽子と気狂いじみたS.M.プレイを展開して二十日ほど経った日の夕刻だった。

突然、彼女から電話が掛かった。

先日、の別れ際に、彼女が自分の家の電話番号をメモに書いて呉れたので、私も電話

番号を刷り込んだ名刺を渡しておいたのだ。

苗木陽子の話によると、町内の頼母子講で今、倉敷まで来ているが、明日、岡山では是非逢いたいという誘いであった。

倉敷市で大原美術館、倉敷民芸館、倉敷考古館、倉敷歴史館なんかを見て、今夜は倉敷国際観光ホテルに宿泊、明日は観光バスで鷺

羽山へ行くことになっているが、自分は驚羽山へは行かないつもりだから、その時間を利用して、SMプレイをやるうというのだ。

岡山駅で十一時に落ち合う約束をした。

その日――。

私は手提鞆にカメラ一台にストロボ二個、縄、ムチ、電気カミソリ等を入れた軽装で、新幹線で岡山へ向った。乗ってしまえば、新大阪駅から一時間余り、全く早いものだ。

駅前で食事をすまし、タクシーを走らせてホテルへ落着くと、私は僅かな時間でも惜しむかのように、彼女の裸に挑んでいった。

なにしろ彼女は、午後五時十六分、岡山発の特急で、頼母子講の連中と一緒に帰ることになっているのだから、ほんの三時間余り、真昼のSMプレイの情事を楽しめるだけなのだ。

裸にした時の苗木陽子は、豊かな肉塊が、小山の連なったように、見事な起伏をみせていた。衣服を剥いで畳の上どころがすと、真白い肌が煙ったよ

うに、ぼやけて、私の目の前に、美しいオブジェとして展開した。

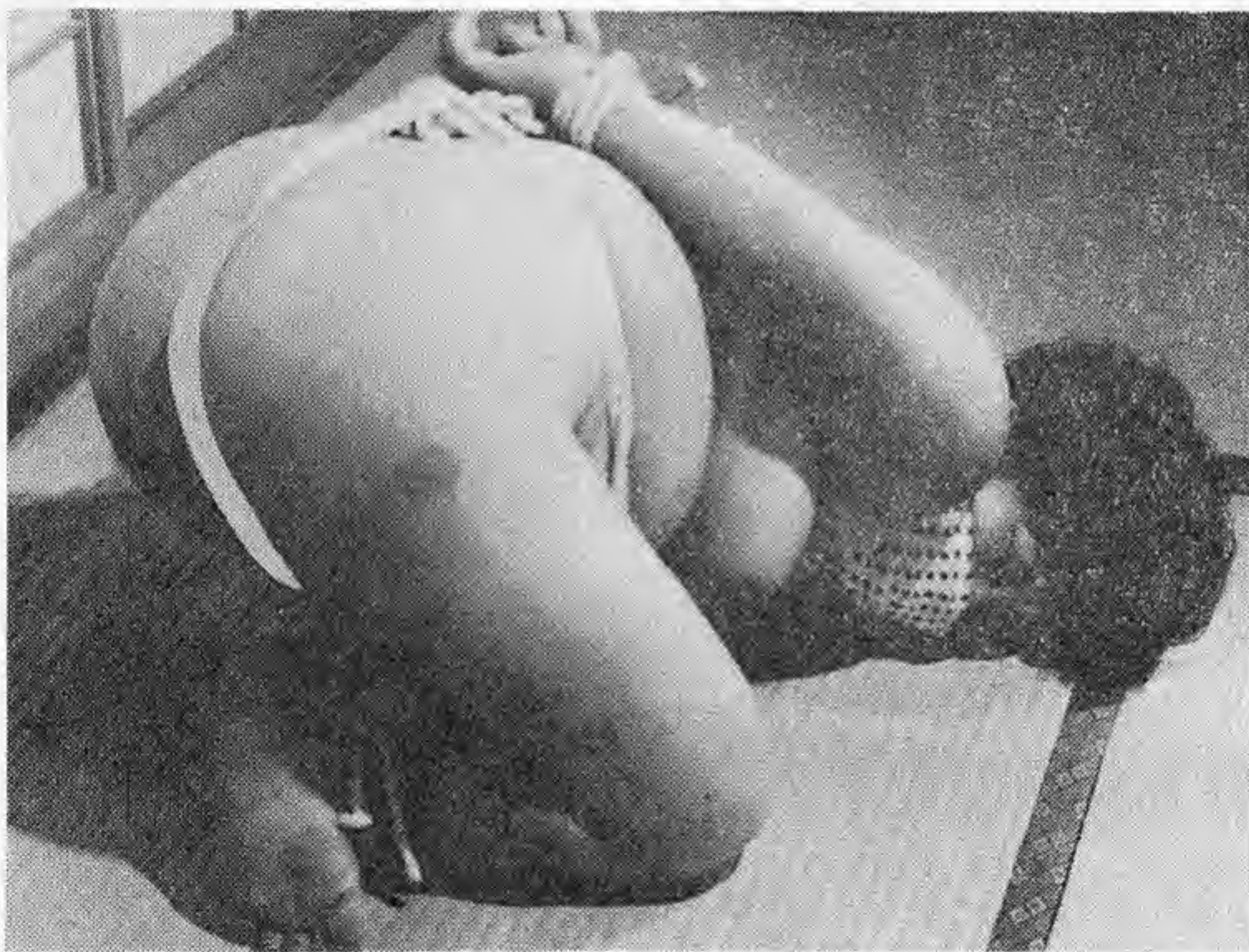
「ま、待って、待って。それは、それは、縛ってからにして頂戴」

その時の私の眼は、白豚の死骸を襲う秃鷹かハイエナのように見えたかも知れない。

脂肪の塊のような爛熟した女体を見ると、私の好色の心は、いやが上にも逸りたち、いきりたってきた。自分の肌で、この女盛りの肉塊を抱きすくめ押さえつけ、肌と肌との摩擦による陰と陽との静電気を発生させたいと思っていた。

「SMプレイ」と言っただけで、所詮、それは陽と陰との相反する性質の十と一とが相引き合う行為に外ならない。そんな短兵急な思いが、私に縄を忘れさせ、裸形と裸形のままで、自分の好きなように、自分の思った通りに、この女盛りの脂ぎった女体を、料理したいものだ、私をかりたてていた。

私は縄を彼女の豊かな柔肌に情容赦なく掛けていった。手加減しなくたって、このマゾ女は、縄目がきつければきつい程、女体を燃え上らせるのだから、白肌がくびれる程に思いつきり、





縄を締めつけていいのだ。

「ああ、縛られると、気持がいいわ」

縛り上げるなり、その場に、くずれるよう

にして坐った彼女の口から嘆声が出た。

私は手にしたムチを発止と、彼女の肩先に

打ち下した。続いて、二打、三打……。

「うっ、ううう。ああ、いい気持！」

苗木陽子の上半体が、ぐらぐらと揺れたかと

思うと、のけぞるように仰向けに、どたりと

倒れた。パツと両方の脚が宙に白く舞って、

一瞬、私の目に、薄黒くもやっている剃毛の

あとを晒すと、そのまま畳の上を、ころころ

と、右に左に、ころがった。

そうだ。あの日から一カ月近く経っている

のだ。電話では、チクチクしてたまらないと

言っていたが、もう相当、伸びている筈だ。

「お写真は撮らなくてもいいから、もっと、

もっと責めて！ 私の身体がバラバラになっ

てしまうまで、責めて頂戴」

後手高手小手縛りのまま、畳の上を、ころ

がるように悶えている苗木陽子の裸身を、三

度、四度と閃光を走らせてシャッターを切っ

ていると、訴えるような吐息が、彼女の口か

ら切なく洩れてきた。

ピシッ、ピシッ、ピシッ……。

私の右手のムチは、見事に盛り上った臀部

に炸裂して、小気味よい音を立てる。手元に

返ってくる快い手ごたえ。

臀部から太股、太股から脇腹へ、そして、

再び、肉づきのよい臀部の小山へと、切れ味

のよいムチの穂先を打ちすえてゆく。

「あああ、ぶって、ぶって……。ぶたれると

身体中が、とろけそうに気持がいいの。ぶっ

て、ぶって、ああ、もっと、ぶって頂戴！

ああ、やめないで、やめないで。もっと、も

っと、きつく、ぶって頂戴！」

私はムチを揮いまくった。顔以外は、陽子

の女体のどこでも、容赦なくムチを当てた。

彼女は仰向けのまま、次第に、のけぞって

腰を浮かし、両膝を開いていった。

さっきは、私の視線から、かくすようにしていた剃毛のあとは、今や、私の目の前に、はつきりと露呈してきたのだ。

ムチの連打は、彼女をして、全身を弓のようにならしめてしまい、背中から、お尻にかけて、完全に畳から浮いてしまっている。ピンと緊張した肉の橋は、ムチという刺戟によって支えられているといってよい。それは、私の手にしたムチにとって、絶妙の攻撃目標であった。脇腹と臀部めがけて、ひいっ、ふうっ、みいっ、よお……と、数えつつ打つ。

「ぶって、ぶって。もっと、きつくぶって。」

ああ、ぶたれたら、気持ちがいいの。ねえ、ぶって頂戴！ やめちゃ嫌よ。あああ……」

女体のブリッジは、今や極端なまでに凄味を増して頭と踵とだけで全身を支えている。

私はムチを投げ捨てて、そり返っている彼女の足先の方へ近寄っていった。

「どうだ。大分、生え揃ったようだな。今日の一つ、仕上げというかい？」

「見ないで、見ないで、お願い。見ないで」

苗木陽子は、そう言いながら、畳につけている両足の裏に力をこめて、更に、お尻を高く持ち上げ、両膝を徐々に開いてゆくのだっ

た。私は彼女の言葉を意に介せず、その生えかけた灌木の山へ掌を這わせていった。

「まだ、こんなものだったのか。もっと生えてると思ったのになあ。どうだ？ あれから彼氏に逢ったのかい？」

「いいえ、一度も、お逢いしません」

「何故、逢わないんだ？」

「だってエ、だってエ、こんな童女のような姿じゃ、お逢い出来ませんわ」

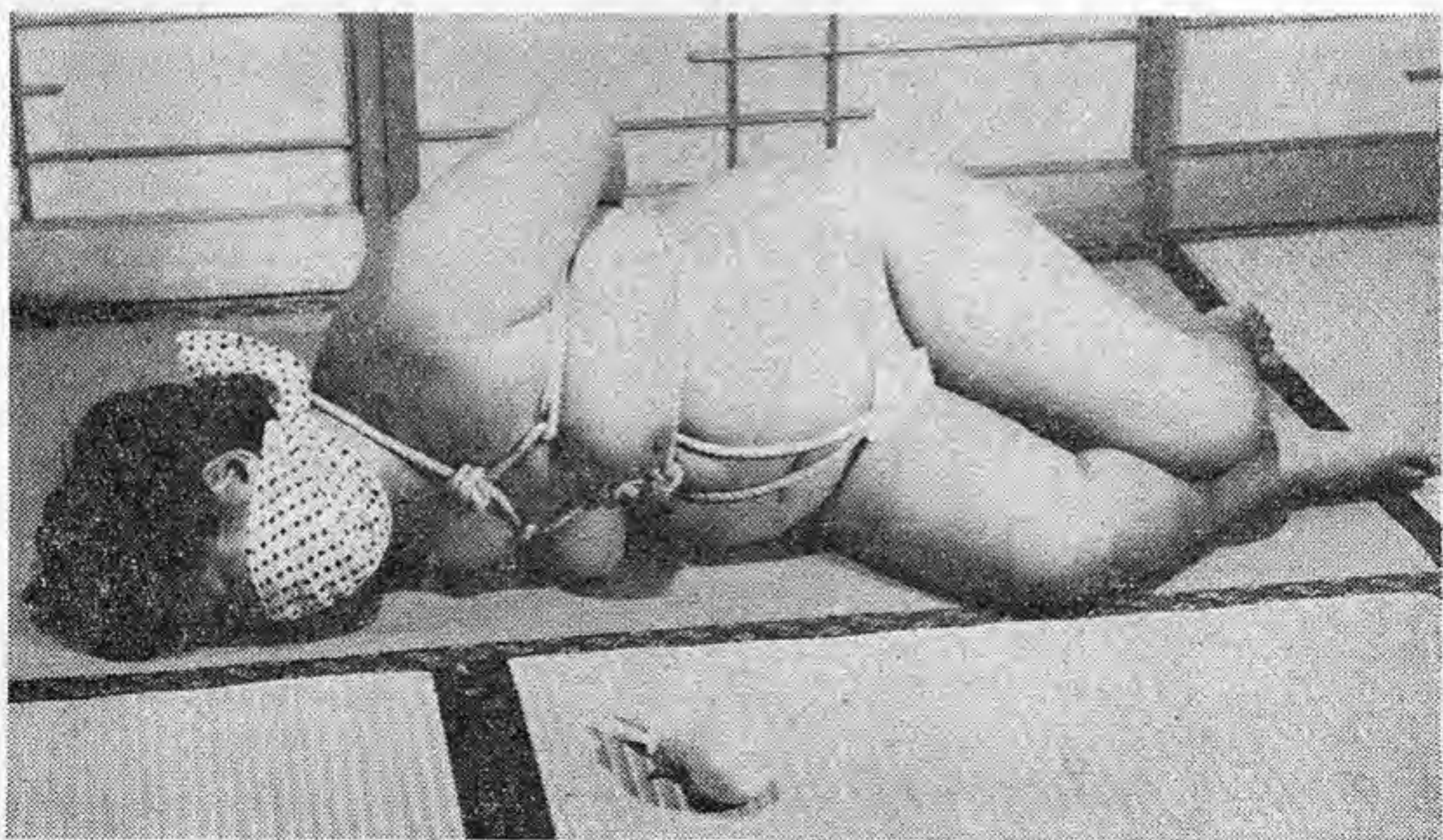
「剃られていたら、恋人にも、逢えないって言うんだな。それだったら、尚更、剃ってやりたいな。彼氏に逢えないようにしてやりたいんだ。こうしてな」

私は、隠し持っていた電気カミソリを、さっと取り出した。

ピチピチピチ、ピチ……物の弾けるような軽い音がしたかと思うと、忽ちのうちに、白肌が一面にひろがってゆく。

「うう、ううう、剃らないで……」

彼女のブリッジは続く。弓のように腰を浮かして、立膝がぶるぶると慄えている。



なにしろ、生えかけで短いのだから、作業は至って早い。私は尚も丹念に、カッティングの網目を彼女の肌の上に這わしてゆく。

徹底した禿山作戦だ。

千古斧鉞を入れざる密林を伐採するのと違って灌木の疎林を刈りとって行くのだから、忽ちのうちに、面白いように、白い肌の起伏が明らかになっていった。

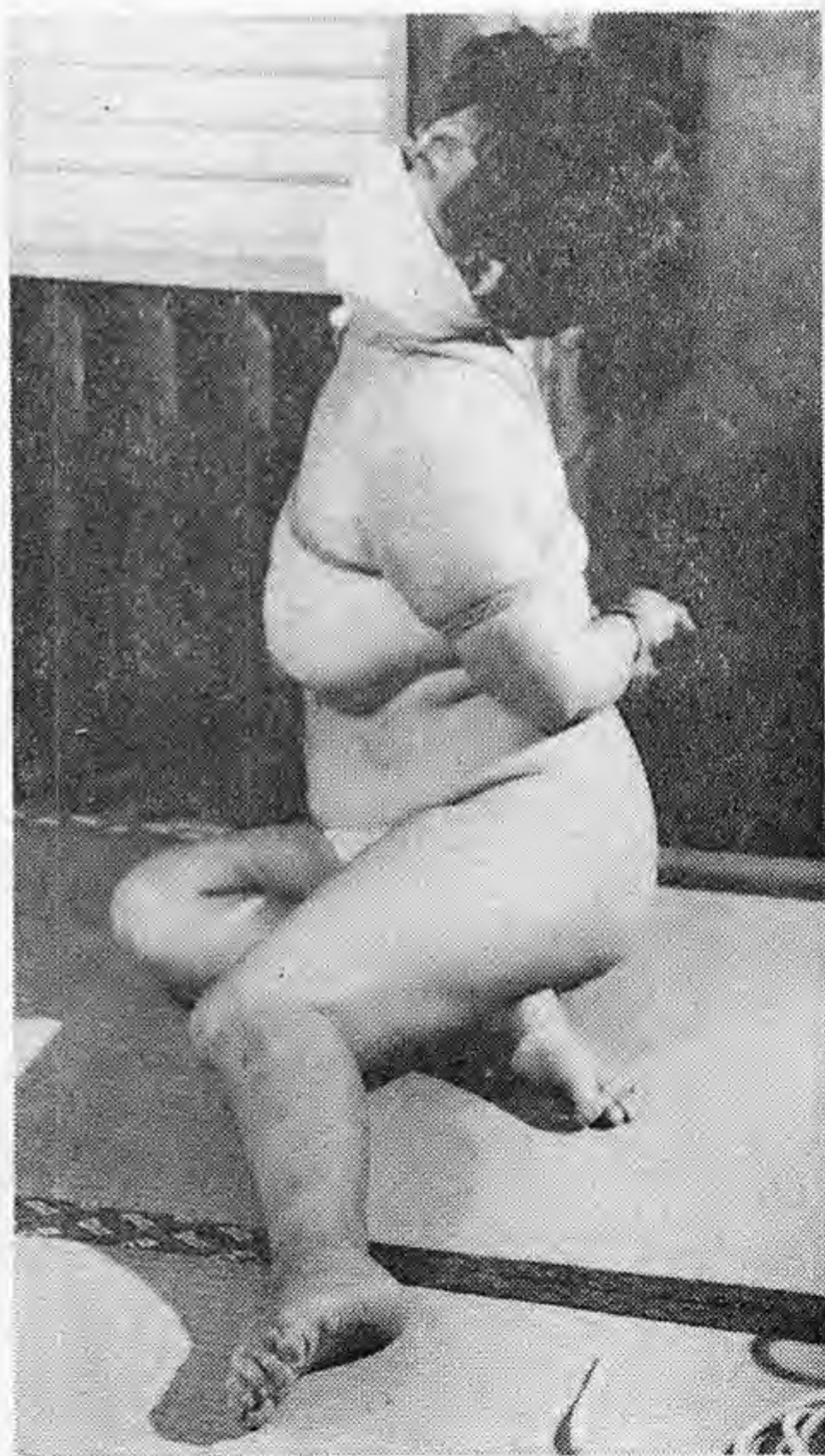
「こんなところを、沢山の男の人達に見られたい。見てほしいの。見世物になりたの。ああ、沢山の人に見てほしいわ」

「沢山の男の人に見られたいのか？ 女の人にだったら、どうだ。こんなところを見たいって言う若い女の人がいるのだが、どうだ、見て貰うか？」

「女の人には、いや。ねえ、男の人達に見て貰って。責めの好きな男の人がいいわ。こんな私を、みんなで責めてほしいの。そしたら私、燃えて、燃えて、燃え上ってしまうわ。ねえ、男の人達に見て貰って……」

カミソリは丘陵地帯を終ると、やがて峡谷地帯や陰微な谷間へと穂先を進めていった。

執拗に、丹念に、そして、時には意地わるく、時には殊更、乱暴に私の手が動くと共に私の目は餌物を狙う鷹のように、らんらんと



輝き、腰の起伏を舐めまわしていった。

「見て欲しいわ。ああ、沢山の男の人達に見て欲しいの。女の人にでもいいわ。男の人達の方が好きだけど、若し、貴方が、どうしても、女の人でないとはいけないうるんなら、女の人にでもいいわ。見て貰って、見て貰って。見て欲しいのよ」

私が黙っているの、彼女の囁言が、私の禿山作戦の作業と共に続いてゆく。

完全な白肌だ。それこそ、一木一草、残っ

ていない、玉の肌の砂丘地帯の出現だ。丘陵地帯はいいが、峡谷地帯の作業は難渋を極めた。雨季の到来の前の乾季のうちに、すべての作業を完了しておく筈が、いち早く雨季が訪れ、やがて、それが激しい豪雨となった。

泥濘の中での、この掃蕩作戦そうとうが如何に困難なものであるかは、禿山作戦を遂行された方であつたら、よく御存知のことと思う。

なにしろ、膝を没する泥濘ばかりか、降り続くスコールに、全身ずぶ濡れになって進軍

するのだから、戦車のキヤタビラにも泥に混じった灌木がまつわりつき、作戦行動は、遅々として進まなかった。

丘陵地帯での先刻の快進撃が嘘のような停滞である。いや、むしろ、その泥濘地帯での停滞を楽しむ風さえあった。ここで私は、遂に愛用の戦車を放棄した。機動力を捨てて、愈々徒歩作戦に移行したのだ。

手にしたのはゾリンゲンの毛抜きだ。これは、抜けば玉散る氷の刃の日本刀のように、どんな微細な毛でも挟んだが最後、確実に迅速に葬り去ってしまうのだ。

「ああ、抜いたら、生えなくなっちゃう」
いち早く、私の行動を察した苗木陽子は、夢幻の境地から、現実の三十一才の未亡人という女性の立場に戻ったのだ。

プレイの中の臆言か、或は現実の女性に立



ち返っての叫びなのか――。

目を上げれば障子の向うは明るかった。

許容態勢充分の女性を目の前にして、私の方が耐えておられなかった。

毛布一枚ない堅い畳の上だったが、肉づきのよい苗木陽子のクッションは決して悪くはなかった。

岡山駅から新大阪駅へ戻る列車の中で、私は、ついさっきのあの苗木陽子との狂態を思い浮かべていた。

彼女は西へ、私は東。

苗木陽子は、きつと晴々とした顔で、頼母子講の一行と一緒に、一路、北九州へ向っているに違いない。私と同じように、思い出し笑いをしながら、あの激しかったSMプレイのことを反芻しているだろうか。

六甲山トンネルの長い長い暗闇の窓の向うに、鮮かなSMプレイの光景が、一つ一つ、スライドの映像のように目に浮かんだ。

縛られた裸身を、ムチ打たれながら、畳の上を芋虫のように転がっていた苗木陽子。

『芋虫ころころ、芋虫ころころ……』

ムチでコマ回しのように、白い女体をころがしていった、あの快さ。にぶく、霞んだように白く輝く肌の美しさ。転がるたびに、微妙な変化を見せる肌の美しさ。それは、私にとって新鮮なSMプレイの発見だった。

自分の目で、じかに眺め、そして写真に撮影してみても、はっきりと描写されていた、あの肌のトーンの見事な美しさ。それが紙に印刷されることによって、すべて消し飛んでしまっているのは悲しかった。

やはり、じかに、同好者の目で見て貰い、そして、その場で、その美しさを批評して語り合う楽しさが最上である。せめて、それが多くの人に無理だとしても、肌のニュアンスの失われていない印画紙焼付の写真でも彼女の肌の微細な点を見て欲しいものだ。

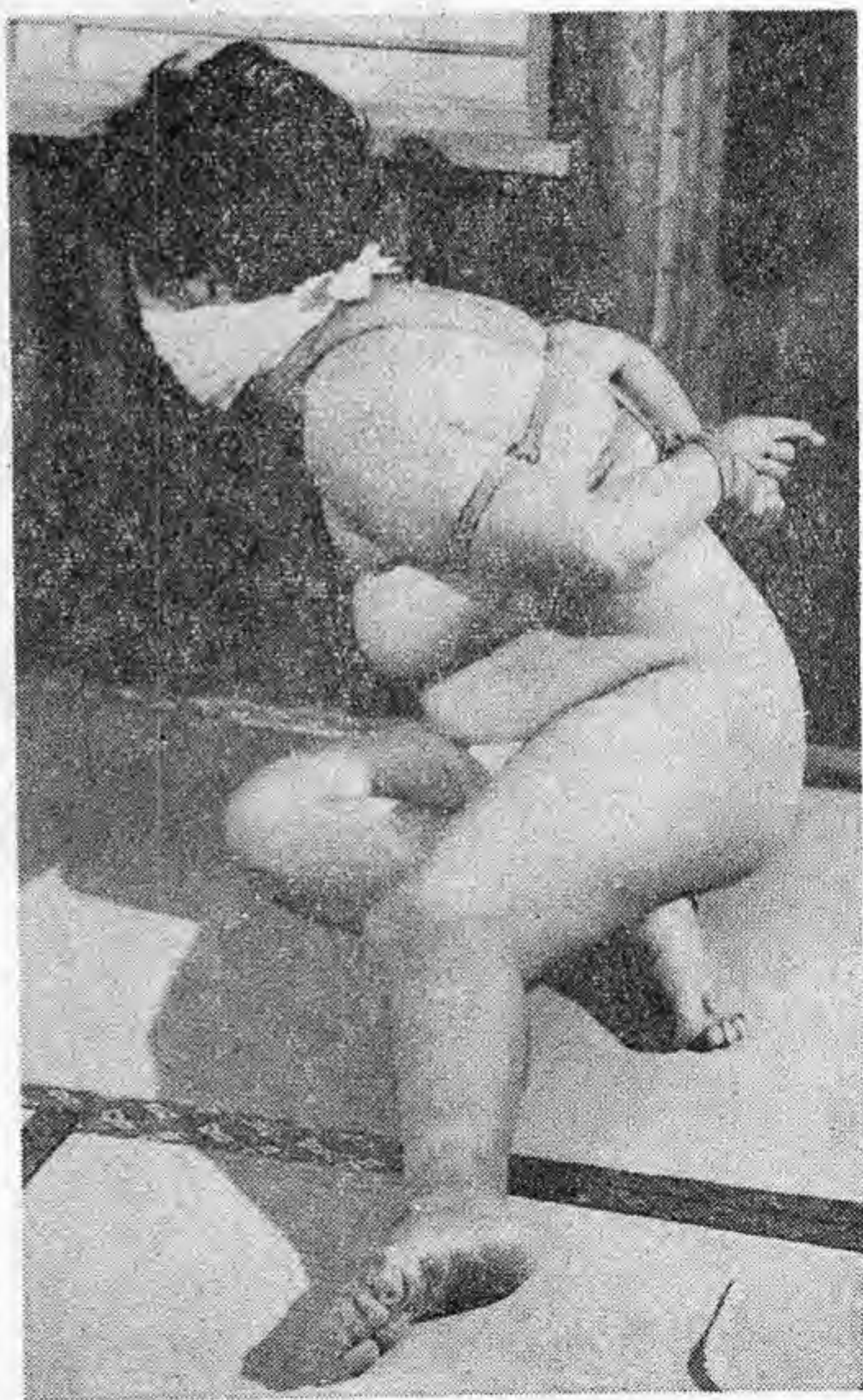
八芋虫コロコロVの次に、目に浮んだ映像は両手を吊られて立った苗木陽子の肥満体の姿であった。尻と言わず、背中と言わず、私の手にした鞭は、情容赦なく彼女の肌の上に、炸裂していった。

音高く、肌に弾けるムチ打ちの快感。悶え狂う女体。彼女の体内はマグマのように燃えたがり、その噴火口は噴火寸前だった。

悦び、呻き、悶える彼女に、私もまた、見ているだけでは済まなくなっていた。

「ぶって、ぶって！ もっと、ぶって。思いっきり力一杯、ぶって頂戴。ねえ、お願い。ぶって、ぶって、ぶって……」

苗木陽子は、縛られて吊られた両手を中心



にして、くるくると狂ったように舞った。

臀部ばかりではない、もう、何処をムチ打っても、彼女は、もがき狂って悦虐の叫び声を挙げた。いや、実際にムチの穂先を肌にあち当てなくても、私の掛声だけで呻いた。

「さあ、今度は腋の下へムチが飛ぶぞッ」

「うう、ううう、やめないで。もっと、ぶって。きつく、ぶって、ぶって。お願い」

「これで、どうだ。ホラ、お尻だぞ」

「ああ、気持がいい、気持がいい。身体中がとろけそう。ぶって、ぶって。あああ……」

ムチの先が、臀部から太股へ、そして、太腿のつけ根へと回るにつれて、彼女の狂いようは、益々激しくなった。

彼女は主役で、私は完全に道化師の役割だった。狂うだけ狂うと、ぐったりと、縄にぶら下ったように、のびてしまった。

素早く両手の縄を解くと、くたくたと、く



ずれかかる女体を抱いて、別室のベッドの上へ運んだ。

「ねえ、私を、私を括ってからにして……」

熱く燃えさかっている女の肌だった。

ベッドは窓際にあった。

私は窓を全部、開け放った。

「あら、そんなことをしたら、みんな見えて

しまうじゃないの」

「人に見られたいんじゃないのかい？」

こんなに素裸で縛られて、身動きも出来ないところを。そうじゃなかったのかい？」

「いやいや。見られるのは、いや。早く窓を

閉めて、お願い。窓を開けてちゃ、外から見えるわ。ねえ、閉めてったら……」

「さっきは、見られたいって、言ってたくせに、このざまは何だ。こうしてやる」

私は苗木陽子をベッドの上に引き起した。

「ああ、そんなことをしたら、外から見られるわ見られるわ。見えてしまうわ」

「そんなに見られたくないんだったら、余計に見せてやりたいな」

「いや、いや、見られるのは恥かしい」

揉み合っているうち、いつの間にか、私は彼女をベッドの上に押えつけていた。

「ああ、見られるわ。窓を開けているから、すっかり見られてしまうわ。ああ、こんなところを見られるのは恥かしい、恥かしい。見られてしまう。ねえ、見られてしまうわ」

彼女の噺言は、いつまでも続いていた。

私は腕時計を見た。まだ充分、時間のあるのを確めてから、ゆっくりと窓の外を見た。

外は明るくて、遠く岡山城が見え、近くには向い側のビルの窓ガラスが陽光に映えていた。下に目をやれば、プラモデルのような車が、すいすい、走っているのが見える。

苗木陽子の女体は、柔らかくて、そして素朴な故郷の味がした。私は、そこに没入している時だけ安堵し、安住できた。凄い快感があるのに、決して果てることはなかった。

身体中の充実感が、その一点に集中し続けているという緊張は、私にとっては、たまらない満足感であった。

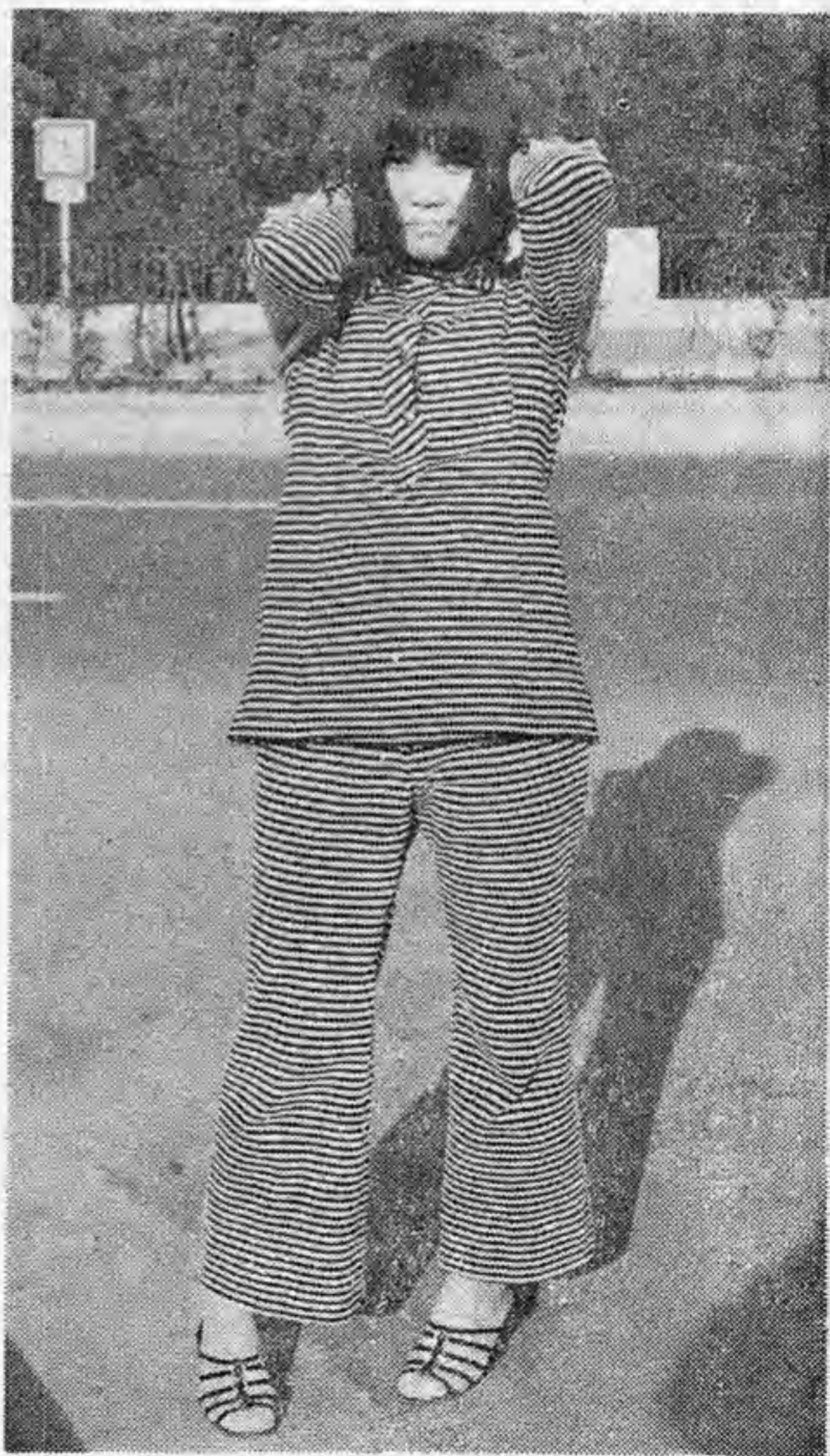
「ねえ、窓、締めてよ。外から見られるわ」「見られたって、いいじゃないか。どうせ、何処の誰だか、わかりやしないさ。それに、岡山なんて、もう二度と来るか、来ないかわかるもんか。ねえ、そうだろう」

私は、その時の苗木陽子の顔を、じっと見た。そこには、娘時代の彼女の倣をチラッと見た思いがした。それは、含羞^{はにかみ}とも恥じらいとも言えない得もいえぬ風情であった。

「ねえ、妾^{めかけ}って、好色な女でしょう。密室の中で、こんなに縛られて責められているところを、また男の人達に見られたいなんて。でも、妾は、そうされたくって、仕方ないんですもの、どうしようもないわね。SMの味を知ってしまったら、もう忘れられないわ」

窓から吹き込んでくる風は冷たく、そして爽々しかった。私は最後まで窓は開けたままだった。

「ねえ、今度は、いつ逢って下さるの？ 妾は、電話して下さったら、身体の都合さえつけば、いつでも、どこへでも、お伺い致しますけど……」



「そうだね、一度、二人でSMプレイ旅行っていうのをやりたいものだね。そうして、各地の同好者の方々を呼んで、陽子のマゾぶりを見て貰うんだな」

「妾も、旅行、大好き。是非、連れていって下さいね。楽しみにしていますわ。次には、犬の首輪にくさりで、犬のように扱ってほしいですわ。それと、首枷に手枷っていうのも好き。妾って、ほんとうに動物的に出来ているのね。飼育次第では、一体、どんなになる

かしら。空怖ろしいくらいだわ」

別れ際に、そう言って、目を輝かせていた苗木陽子の明るい顔が忘れられない。私は近いうちに、必ず彼女を、あつと言わすような責めをやってみようと考えていた。

女封筒の主

苗木陽子と別れて帰ってきたとき、凄く疲れている筈なのに、一向に疲れていないのが我ながら不思議なくらいだった。



帰って、机の上の手紙の束を手にとると、一通の可愛い女封筒が、ポロリと手元に落ちてきた。手にとって裏を見ると、「深田菊子」と細い、かすれたような字で書いてあって、小さな角封筒がはちきれそうに、便箋が詰っていた。私は、すぐに封を切った。

☆

長い間、ごぶさたいたしましたがお変りございませんか。お別れしてから、ほんとうに長い日がたったような気がします。

いかがお暮しかと、気になっていながら、字を書くことが、あまりえてではありませんので、つい、ごぶさたしてしまいました。

喫茶店へパートで勤めたり、ガソリンスタ

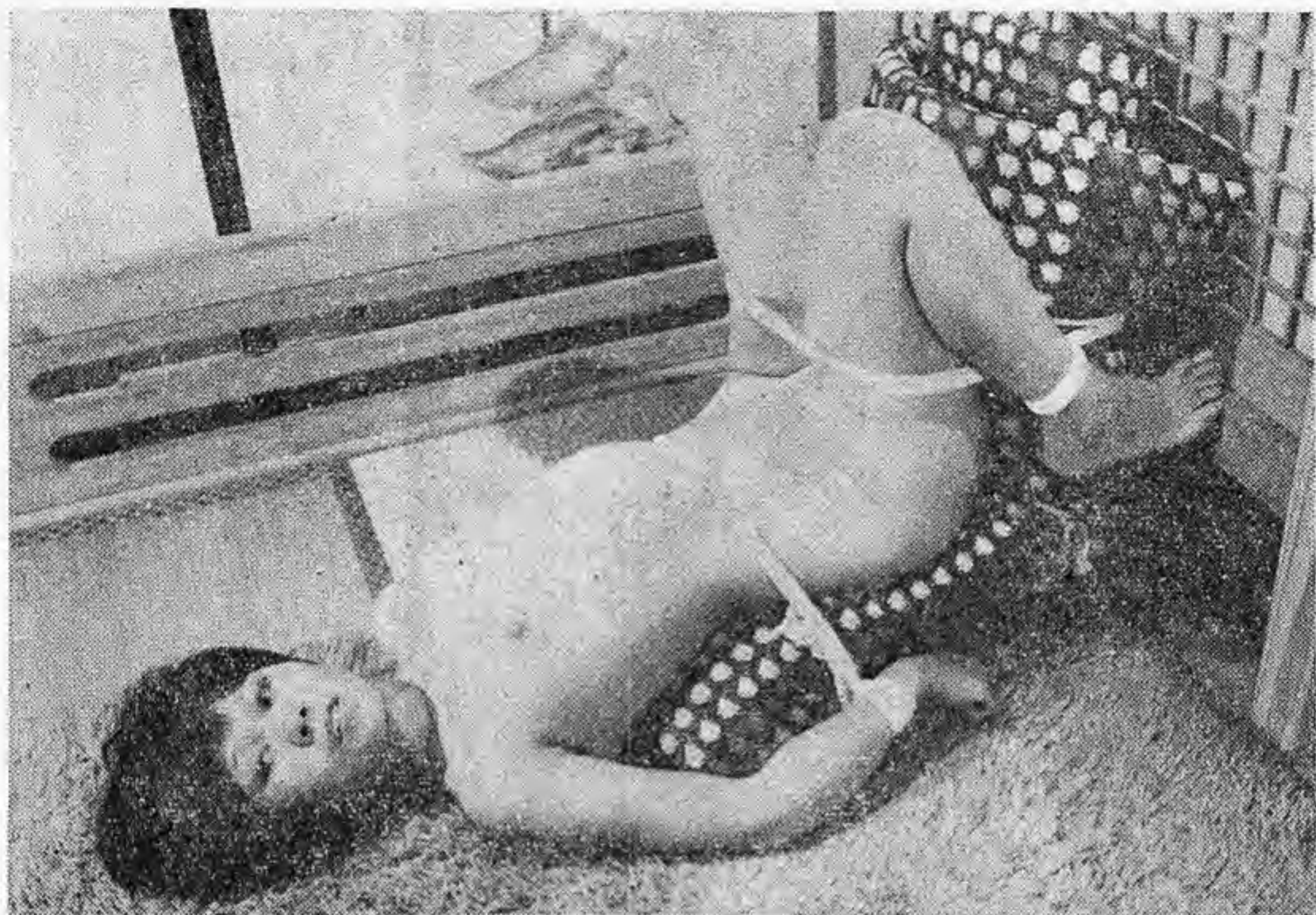
ンドへ臨時の手伝いに行ったりしていましたが、今年の春から、新しく国道沿いに出来ました洋食専門の高級レストランに勤めております。一階が駐車場、二階が食堂になっていて、樹にかこまれた落ちついたところです。名刺を入れておきますので、近くへお越しの節は、お寄り下さいませ。

今日、おたよりしましたのは、先生に、ぜひ、お願いしたいことがございまして、こうしてペンを持った次第でございます。

お願いと申しますのは、他でもありませんが、一度、先生にお会いしていただきたいのです。お忙しいところを、大へん申しわけないのですが、ぜひお願いいたします。

お逢いして、どうしても先生に、もう一度いじめていただきたいのです。こんな思いはここ何日もの間、ずっと、私の心のなかをしめておりました。そして、このお願いの手紙を書くのにも、三日も四日も、考えてしまいました。どうか、この私の切なる願いを、お聞きとけ下さいませ。

このレストランは、お客さんがよい人達ばかりで仕事も楽で、毎日たのしく暮しておりますが、それだけに平凡な生活の連続です。あれから五人ばかりの方とSMプレイをし



したけれど、その後はお逢いする機会もなく、そのままになっていきます。

私は、もう一度、乱暴にあつかわれて先生のナグサミモノにされたいのです。そんなことを考えるだけでも、私の体がふるえます。

乳房やお腹に、ギリギリと喰い込んだ縄、大きく左右に開かされた足。私は、そんなにされてみたいのです。

十月三日の水曜日は定休日なので、この前に待ち合わせをしましたエスカルゴにて一時三十分から正午まで、お待ちしております。一方的なお願いですが、お越しいただけないでしょうか。朝寝坊の私ですが、必ず待つておりますからよろしくお願いいたします。それから、もう一つお願いですが、今までのような写真撮影をやめて、ただ、私をいじめていただけないでしょう

か。お会いしてから、お願いしようかと思っ
ていましたが、恥かしいので手紙に書いてしましました。

股間縛り、流腸、アヌス責め、エビ責め、ムチ打ち、ローソク責め、乳房責め、などなど、どんな苛酷な責めでも、先生のお好きなやり方でしたら、どんな方法でも甘んじて、お受けいたします。ただ、どんな場合でも、写真をお撮りにならず、私を思いきり縛り上げた上で、いじめ抜き、責め抜いてほしいのです。私は先生のナグサミモノになりたいのです。写真のモデルとしてではなく、私は先生の奴隷になって弄ばれたいのです。

この私の切なる願い、必ず、お聞きとけ下さることを菊子は信じております。

九月二十八日

深田 菊子

塚本先生

☆

深田菊子からの手紙を読んで、私の身の内に熱い鉄の塊りがよぎっていったような気がした。恥かしながら、手紙を読んでいるうちに、みるみる、その部分が大きく固くなってきた。これはまた、なんということなのだろうか。電話を聞いただけで亢奮したり、手紙

を読んだだけで、気分を出すなんて、我ながら幼稚きわまりないと反省させられる。そう思いながらも、一面、この身体の火照りは、また、どうしたことなのだろう。

彼女の指定した十月三日は、私に、どうしても手の放せない用事があったので、彼女に電話して、次の定休日の十日にして貰おうと思ったが、彼女は十日の祭日には友達と一緒に京都へ遊びに行く予定があるとのことと、結局、十七日に逢うことを約束した。

十七日、この日は生憎、朝から雨だった。街路樹のプラタナスは、びしょびしょに濡れ、舗道は雨に光っていた。しかし、考えようによっては、こんな雨の日の方が、しっぽりと落着いてSMプレイに耽ることが出来るのかも知れない。

深田菊子は、真赤なスーツに、真赤なバッグを持ち、赤い雨傘、そして赤いレインシューズを履いていた。赤一色で統一した装いが色の白い彼女に似合っていて可愛いかった。「今日は、写真を撮らないって、約束だったね。なぜ、写真が嫌いになったの？」

「だってエ、写真を撮ってばかりいてちゃ、肝腎のプレイが思うように出来ないもの」「うん、そうか。だったら、こうしようじゃ

ないか。プレイをやるときはプレイに熱中するとして、写真は写真で、また別に撮るとしたら、どうだい？」

「それだったら、いいわ。でも、写真を撮ることにばかり、熱中されたりしたら、私つまらない——」

そう言って深田菊子は、寄り添うように身体を近づけてきた。一緒に話しているだけでも楽しいムードを醸し出す娘だ。

「若い男の人なんか、私に合わないみたい」

そんなことを独り言していた彼女。たしかに、彼女はスロースターターでもある。第一次から第二次。そして、第三次あたりから調子を出し初め、第四次から第五次あたりで、絶妙の感度を示す彼女であってみれば、早漏気味の相手では、きっと不満なのだろうか。



私は、この深田菊子と、もう何回ぐらいS
Mプレイをやったろうか。奈良から京都へド

ライブしたこと。琵琶湖で泳いだり、モータ
ーボートを走らせたこと——、どを思

い出すと、懐かしくもあり、また他人でないとい
う近親感を覚えるのだっ
た。

私が初めて、彼女の裸
身に挑んだとき、流石の
私も、香ぐわしい白い肌
に魅せられながらも、一
瞬、躊躇した。余りにも
若々しくて美しい輝くよ
うな肢体を目の前にして
逡巡せざるを得なかった
のだ。そんな私の心の中
を、いち早く見抜いた彼
女は、華やかに身体を開
きながら救いの言葉をか
けてくれた。

「私だったら、気にしな
くて、いいのよ」

そして、私の耳元で小
さく囁いた。

「私、妊娠しないように
……しているの。だから

心配しなくなつて、いいのよ」

そのとき、女神のように見えた彼女の微笑
が、今でも忘れることが出来ない。

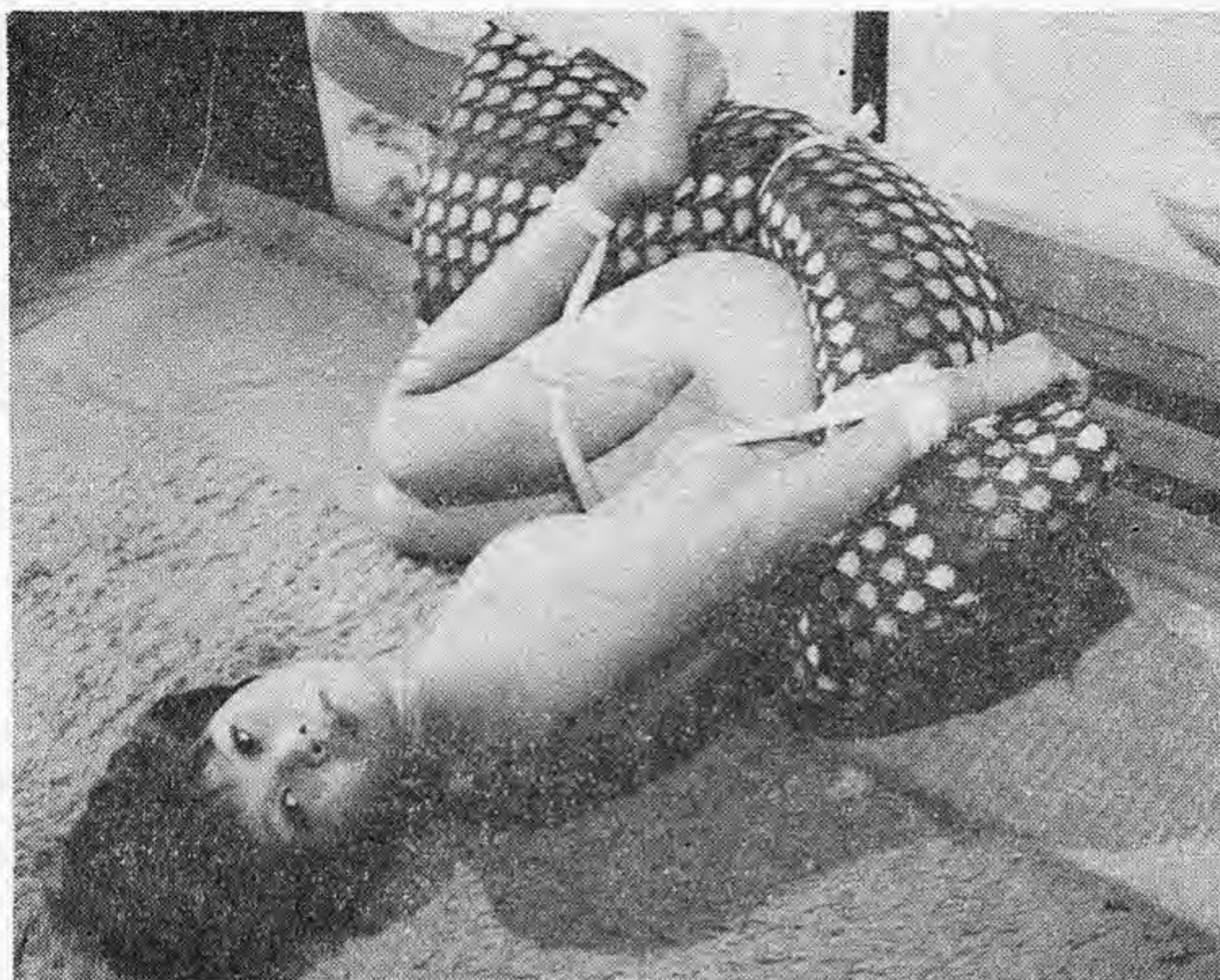
この前、深田菊子とSMプレイをやつてか
ら、すでに数カ月の月日が経っている。その
間、彼女の身上に、どのような変化があつた
か私は知る由もないが、目の前にした彼女は
この前と少しも変わってなくて、相変わらず若
々しくて、生牛乳のような甘酸っぱい体臭を
全身から放っていた。

私のお腹を足で蹴とばしたときの、あの足
の裏の温かさを、今、再び思い出させるよう
な彼女の、なよなよとした肢体である。

「恥かしいからいや」と言う彼女に、無理矢
理、オシメをたっぷり当てがひ、生ゴムの
オシメカバーを、穿かせると、ベッドの布団
の中へ追い込んでおいて、私も裸になって、
彼女の傍へ足を潜らせていった。

「菊子。今度ね、SM研究会って、いうのを
開こうと思っているのだよ。それでね、菊子
も、そのゲストとして招こうと考えているん
だけど、来て呉れるだろうね」

「なんなの？ そのSM研究会って言うの。
よかったら、出さして頂くわ。今までのにも、
何人もの読者の方と、お逢いしてるんですも



の。私は、慣れているつもりよ」

「そうだね、菊子のことを、私達がM女だとか、マゾだとか勝手に好き放題なことを言っているけど、本当は、大人しくて、真面目な、ありきたりのお嬢さんだものね。外見から見ただけじゃ、わからないんだよ。それでね、SMの好きな者、まあ言えば同好者だが、そんな人達が集って、いろいろとM女の謎について研究しようっていう会なんだよ」

「面白そうね。でも、私なんかが出席して、何か、お役に立って？」

「立つどころの騒ぎじゃないよ。菊子のようなSMに理解のある女性に実験台の主役として登場して貰ってこそ、有意義なんだ。まあ差し当り、僕に呉れた手紙のことなんだけどもあれが、どこまで本当なのか、そんなことも試してみたくなるんだよ。読者の中には、マゾの女性なんて、この世には居ないと言う人もいるしね、菊子なんか、僕に時々手紙は呉れるけど、余り原稿なんて書かないだろう。だから、実際に、同好者の方々に、菊子の生姿を見て貰うということは、そうした面でも無意味じゃないと思うね」

「わあ、恥かし。あの手紙のことは、もう言わないで。ああでも書かないと、貴方、来て

呉れなかったでしょ。私、退屈だったし、今の平凡な生活に、あきあきしてるのよ。私って女が、どんな女か、今から責めてみられたら、よくわかるんじゃないの」

「そりゃ、僕は、よくわかるよ。だが、今言ってるのは、同好者のことなんだ。そんな人達の前でも、あの手紙に書いたようなことを、やってみせるかい？」

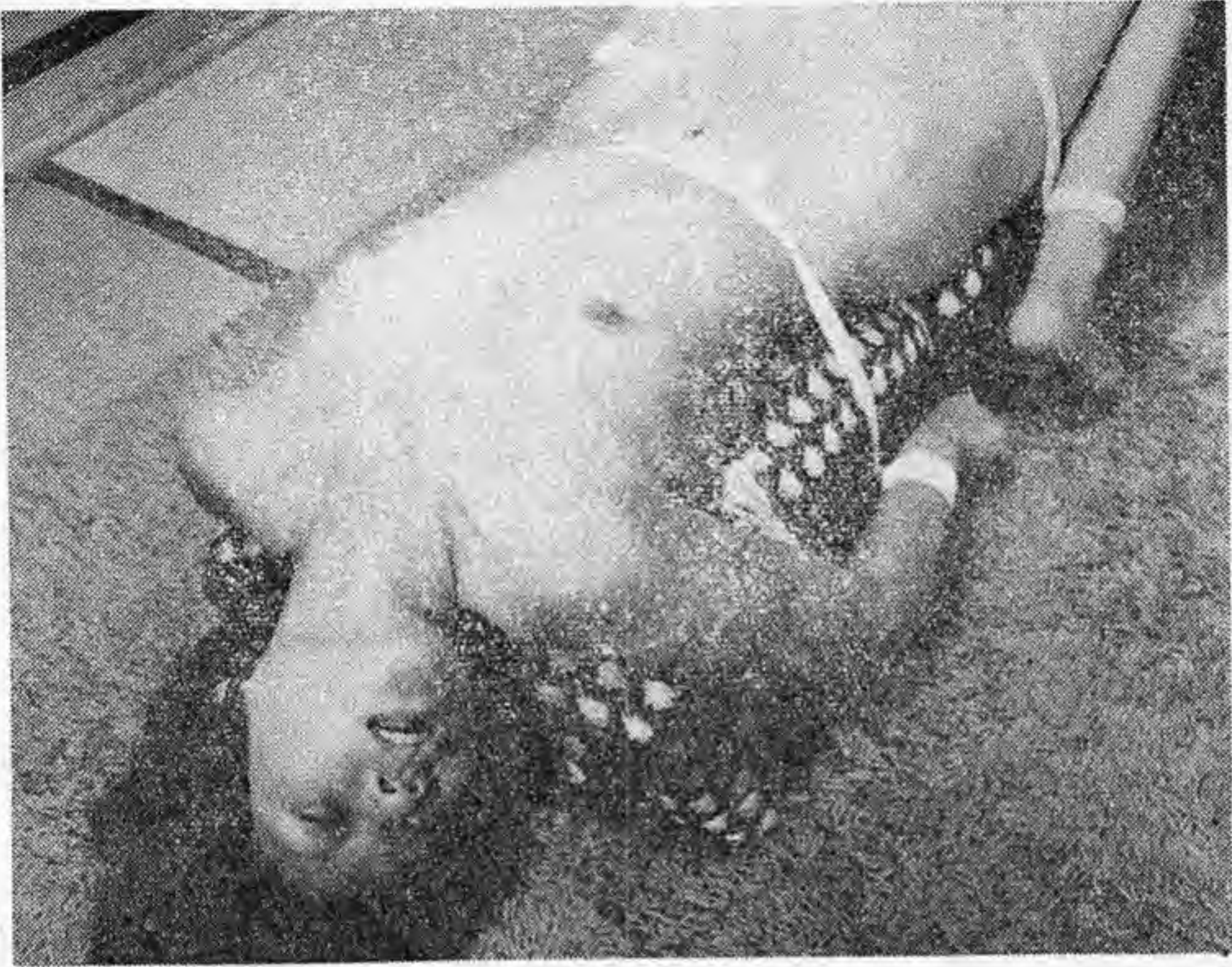
「ええ、出来るだけのことは……」

深田菊子が、そう答えたとき、私は彼女の顎の下、咽喉仏のあたりに唇を這わせていった。香ぐわしい生牛乳の匂いのする体臭を胸いっぱい吸い込みながら、耳たぶを噛む。

「ああ、擦ったい。いや、いや、いや」

自由な手を挙げて、私の頬を軽く打つ。彼女の手が挙が





ったところで、私は更に布団に潜り込んで彼女の腋の下へ鼻を寄せる。

「菊子は腋臭^{わきが}じゃないんだね。ここの匂いも生牛乳のようだな」

「私が、腋臭^{わきが}の方がいいの？」

「そういうわけじゃないけど、菊子のような奇麗な娘の腋臭^{わきが}を、嗅いでみたくてね」

「まあ、悪趣味な方……」

「悪趣味の方は、まだまだこちらの方が、ひどいものだよ。さあ、ぼつぼつ、このオシメの中で出してみるかいい？」

私は体温でヌメヌメと柔らかくなった生ゴムのオシメカバーに手をやって叩いた。オシメを何重にも当ててあるので、そこは、ふくらと膨らんでいる。

「ひやあ、こんな中へ……出すの。それは無理だわ。とても、出来やしないわ。いくら貴方に言われたって出ないものは出ないわ」

「そりゃそうだ。出来ないものは仕方がないな。よし、それだったら、出来ないものを、これから出来るようにしてやるとするか」

「ええっ、な、なにをするの？」

「なにもしないさ、只、縛るだけさ」

私は布団をパツとめくると、手元にあった紐で、彼女の手首を手早く後手に括り、二の腕から胸へ回して結んだ。いつの場合でも、お尻以外は温かい女。その冷たい筈のお尻には、幾重にもオシメが巻かれ、その上にオシメカバーを穿かされているのだ。

「どうだ、素直に出してしまわないと、身体中を噛みまくって歯型だらけにしてしまうがそれでも、いいかい？」

私は菊子の耳元で囁いて、先ず、耳たぶに歯を当てる。上下の前歯でジューツと手加減しながら、歯先を皮肉に喰い込ませる。

「いいい、痛い、許して……」

耳たぶを噛んでから、襟首を伝って、グミのように赤らんだ乳首に歯を当てる。歯茎を伝って、ジーンと快感が身体に泌みわたる。

「フー」と熱い吐息が、菊子の口から微かに洩れたが、「痛い」とは言わなかった。

前歯ばかりか犬歯の方まで乳首をころがして、さんざんに噛みまくった。

「まだ出さないんだな。このオシメの中へ、思いつきり、出してみるんだ。トイレへ行ってるつもりでな。さあ、出せ、出すんだッ」

「そんなこと言ったって、無理だわ。出ないもの、仕方がないわ」

「出そうと思えば、出るだろう」

私は菊子の足下へ回り、両股を大きく開かせようとした。彼女は、そうさせまいとして足をバタバタさせる。途端に、柔らかな足の裏が、私の頬に触れた。温かい感触だ。

「こいつ奴、蹴ったな」

私は両手で菊子の右足首を掴んだ。

逃げようとして、ピクピクと動く足の指に思わず口を当てていた。口の中にはお張ると中指を噛んだ。足の甲には力をこめて歯を当てた。もうそれからは、足の指や甲ばかりではなく、胫から太股へと噛んでゆく。

「いや、いや。噛んだら、いやっ」

口では、そう言っているても、もがくと、歯が肌に喰い込んで一層、痛くなるので、彼女は噛まれる度に静かになる。私が上下の前歯を噛みしめると、それにつれて、菊子もまたじっと痛さをこらえている風だった。

「もうこの辺で、出してみるか？」

真白い菊子の肌に、赤い歯型が、あちこち

に、次第に数を増してゆく。それは、まるで椿の花をまいたように艶やかだった。

「ねえ、出しますから、噛むのだけは、おやめになって。もう、たまらないもの……」

「そうか、それだったら、出してごらん」

布団をかぶると、右手をオシメカバーの上へ当て、左手で菊子の首を抱え込むと、心持ち上気した彼女の顔を覗き込んだ。

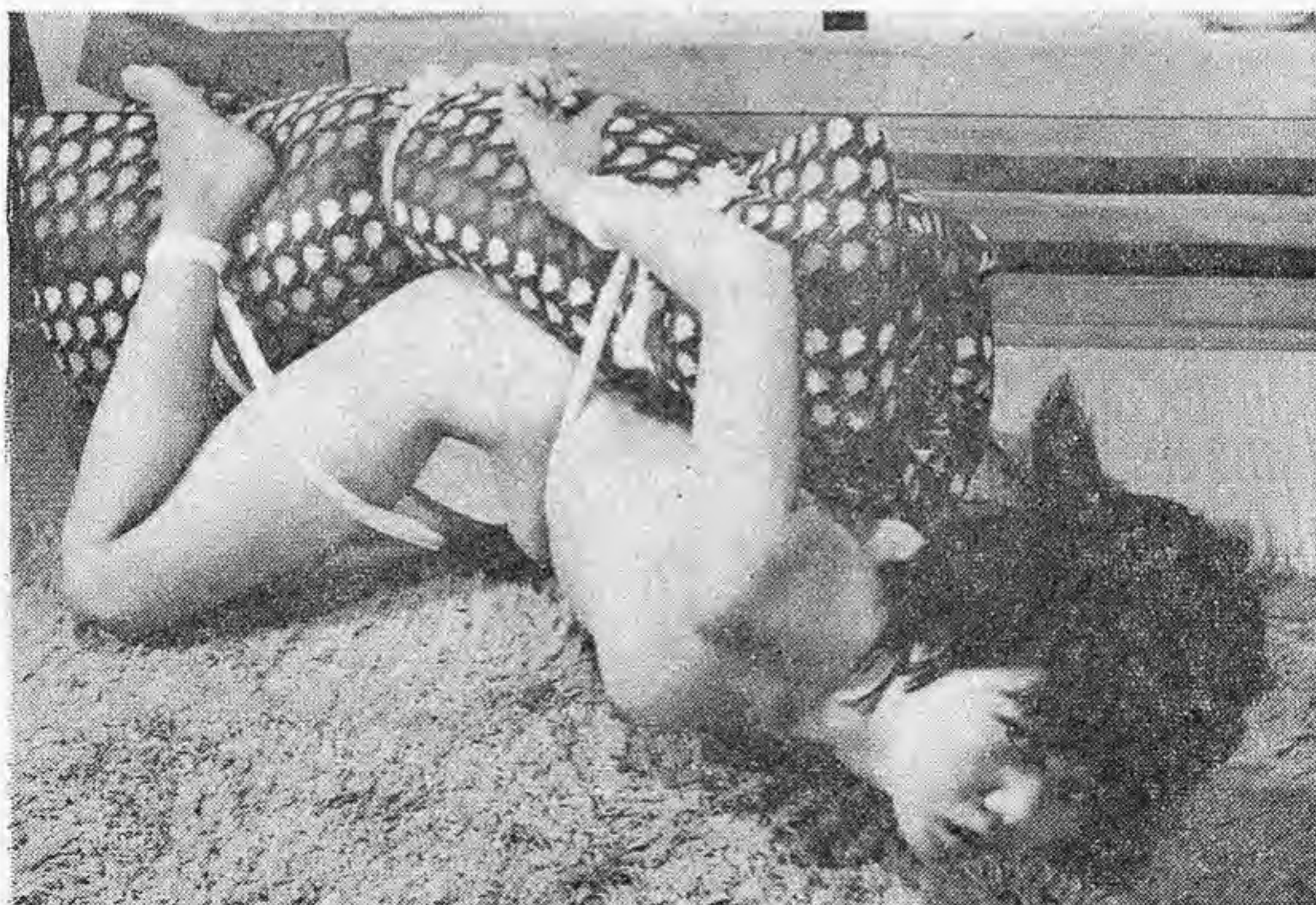
「羞かしいから、私の顔を見ないで……」

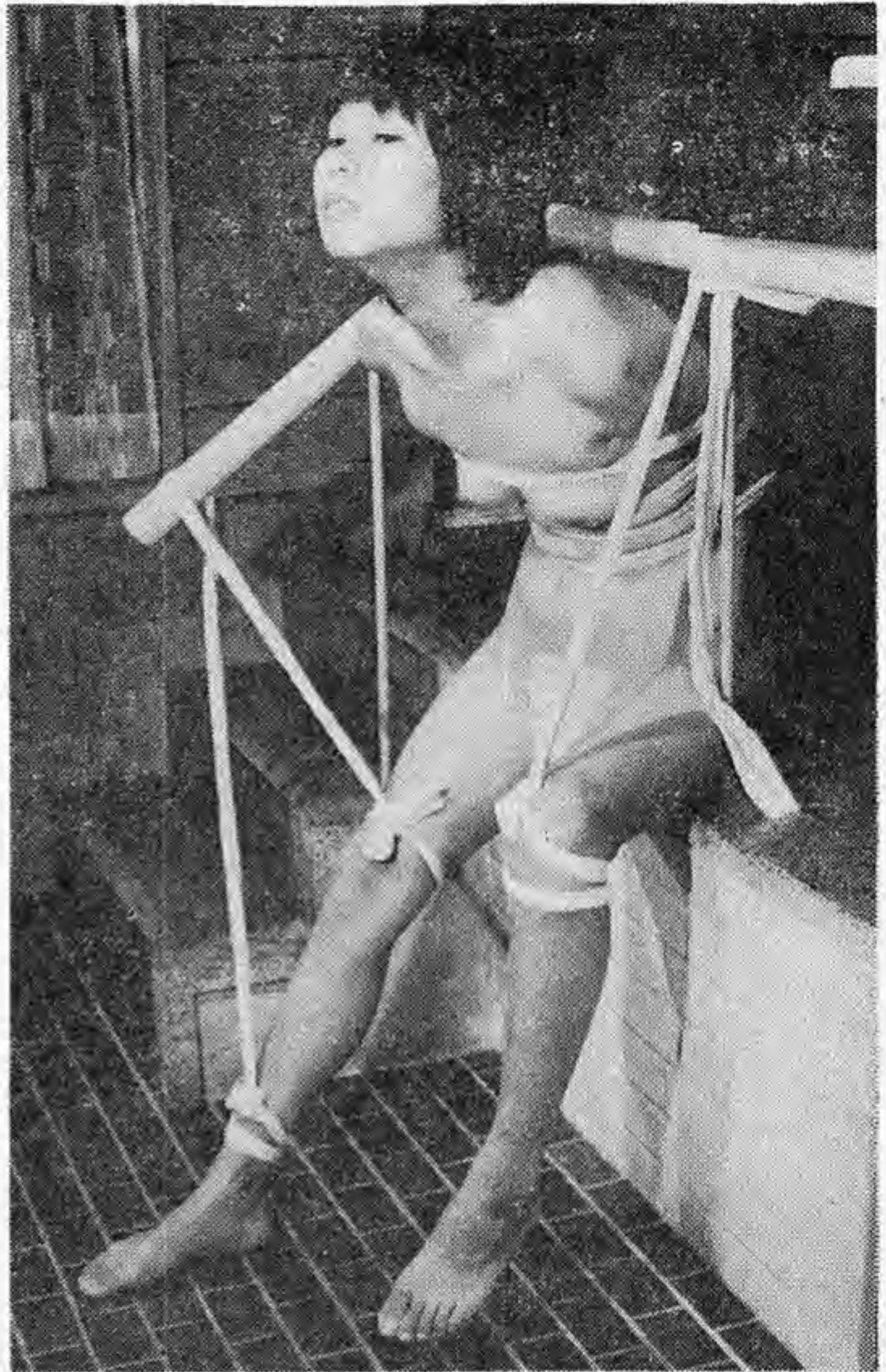
菊子は、じっと目をつぶって全身を固くしたのが、寄り添っている私には、よくわかった。

と、そのとき、ジョーッと激しい水流の勢いが、私の右手に伝わってきた。

「ああ、とうとう、やったナ」

私の言葉に、一瞬、止まった水流は、今度は前より一層





激しい勢いでオシメの中を渦巻いているのがよくわかった。

私は、そのときの菊子の顔を、じっと見つめていた。含羞^{はにか}んだ中にも、穏やかで可愛い顔つきだった。

すっかり出し終ってしまおうと、菊子は、私の腕の中に顔を埋めて、すすり泣いていた。

「ひどいわ、ひどいわ。こんなことを、させ

るなんて……。ひどすぎるわ」

私は布団を頭からかぶると、掛布団の中へ潜り込んで、オシメカバーのボタンを手さぐりで、はずしだした。

ムツとするユバリ（尿）の臭い。生温かい感触。それは、えも云えぬ匂いと感触。口の中が、ムズムズして、思わず生ツバが、次から次へと出てきて、口一杯になる。

あゝ、なんというエキセントリックなムードだろうか。鼻が曲りそうな臭気が、とてもたまらない魅力なのだ。五官の中で、嗅覚の演ずる役割りを、今や思い知った気持だ。

ボタンを全部はずしてから、ベトベトのオシメを、オシメカバーに包んでおいて、植木鉢の置いてある石を敷いた植込みへ投げすてた。お尻は尿で濡れて、ほかほか湯気が立ちたままだ。そのお尻へ、私は両手を当てて、掬い上げるように持ち上げた。

甘ったるい菊子の尿の匂いが、あたり一面に、ほのかに漂っている。それに混じって、人の肌にむれた生ゴムの臭気が、なんとなくむず痒いような、それでいて、ねっとり、ねばりつくような粘っこさで、私の肌に、じかに伝わってくる。

尿に濡れた菊子のお尻は、ねとねと私の掌に、へばりつき、餅のような感触だ。

「ねえ、早くお風呂へ行かせて。身体を洗ってこないと気持が悪いわ」

だが、私は許さない。嗅覚の次には、オシメカバーにむれたお尻と腰部の肌の異様な感覚を存分に楽しむ。いわば、これは五官の内、触覚の悦楽に他ならない。

掛布団を、はねのけて、菊子のお尻を掬い

上げて更に、上へ上へと持ちあげる。両手は背中で括られてしまっているの、お尻があらがるにつれて、自然と脚は左右へと開いてゆく。プンと鼻先の痺れるユバリ（尿）の匂いが、私の心を嗜虐へと、ゆさぶる。

「あああ、お風呂へ行かせて。それが、いけなければ、せめて、トイレへでもゆかせて」菊子の哀願もよそに、私の両手は彼女のお尻を、高々と目の高さにまで掬いあげてしまった。ホカホカと湯気が立ちのぼり、あたり一面、靈気に満ち満ちているようだ。

私は、その一点に目をやった。

ああ、なんという美しさであろうか。

今の今まで、幾十人、幾百人の女体を眺めてきたが、色といい、形といい、これほど、可憐な観音様は、またとあろうか。

漂っていた五彩の雲が晴れてしまうと、嗅覚の次に、私の視覚を楽しませてくれるカラフルで微妙極まりない髪が、そこにあった。

妙なる雅楽が、私の耳に絶え間なく快い刺激を与えていた。天国の入口というものは、果して、このようなものであろうか。

私の五官は、あまりの快感に痺れきっていた。手に感覚はなく、目は霞み、耳は聴えなく、も早や、何の匂いもしなくなっていた。

ただ、粘ったようになっていた口だけが、目の前に光り輝く観音様の御体に向って、吸い寄せられるように引かれていった。

ああ、なんという素晴らしい味であろうか。

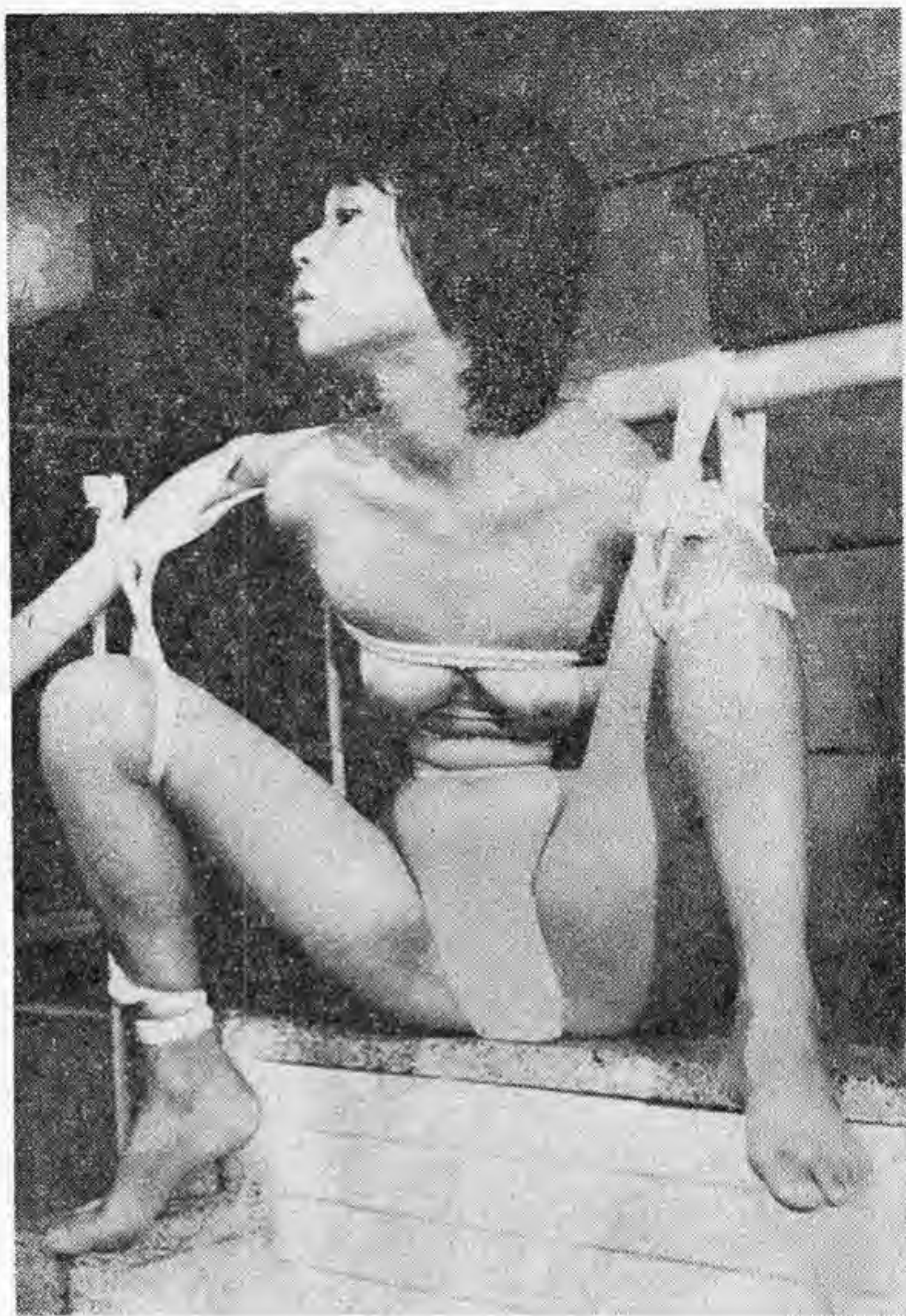
これこそ、絶妙不可思議な言うに言われない味覚であった。それは若い女の尿の味でもなかった。形からくる味でもなかった。

この世の中に、こんな味覚があること自体不思議であった。それは、今の今まで、私の一度も味わったことのない醍醐味だった。

「お風呂へ行かせて、ねえ、お願い。お風呂へ、行かせて。オフロへ……」

菊子の哀願の言葉が次第次第に細くなってやがて、語尾が弱々しく消えていったのは、





あながち、私の聴覚が駄目になったためばかりではなさそうだ。

味覚から、やがて舌先と唇の微妙な触覚へと蘇り、目が見えだした。その私の目に、のけぞったような菊子の上気した顔が、神々しく映った。痺れていた手の感覚が戻ってみると、掌がべったりと、菊子の臀部にへばりつ

いたまま、離れないでいた。

観音様の前にひれ伏して、^{おろ}拝がむ心が、そ

のまま、そのときの私の心であった。

いつまでも、いつまでも、私は、ずっと、そうして、いたかった。いつまでも……。

夢幻と現実

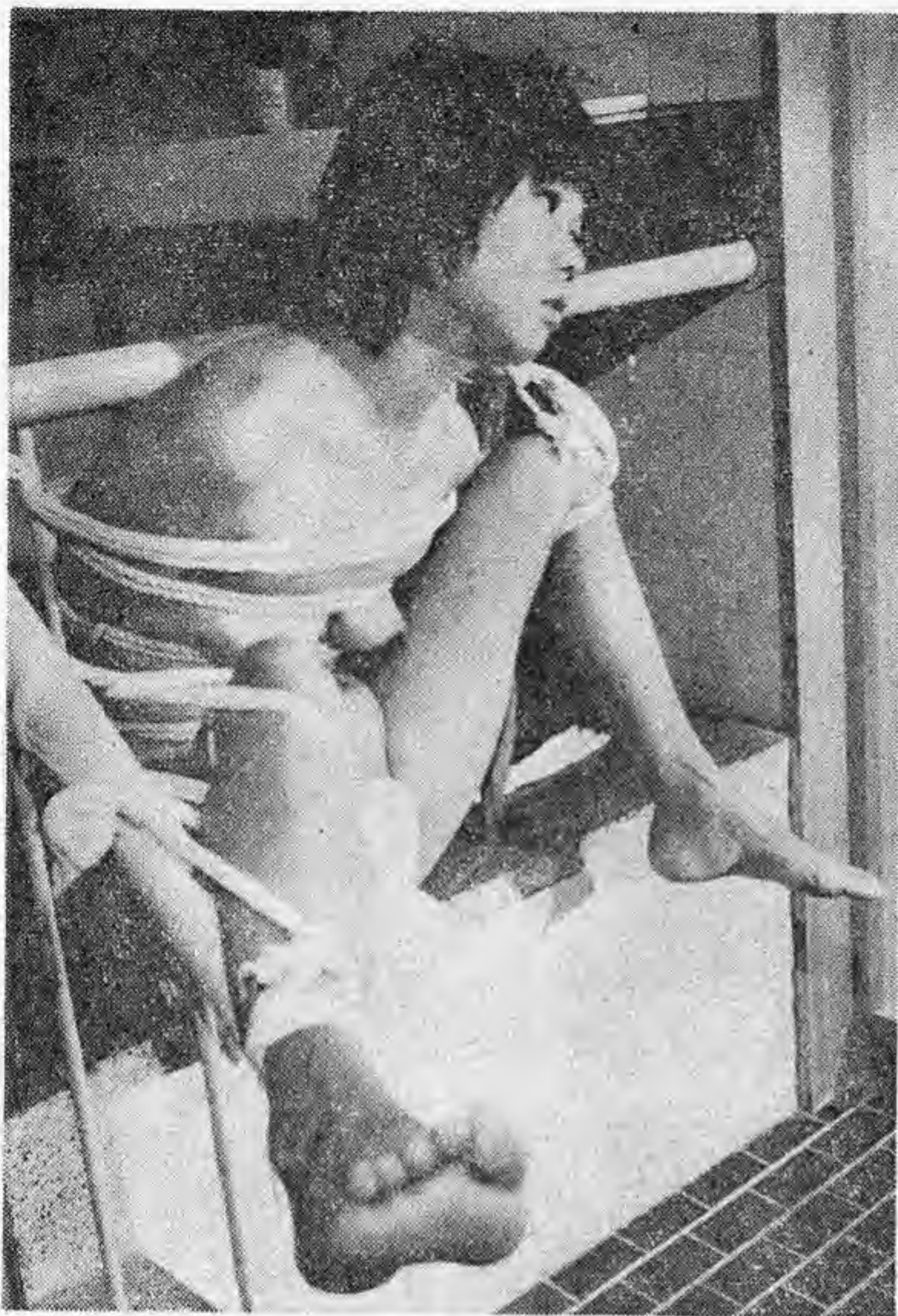
どの位の時間であつたろうか。二人とも、意識不明のままだった。観楽の果て、失ってしまった意識が、徐々に戻り始めるときの、けだるいような快楽は、また素晴しかった。頭の方が半ば醒めているのに、手足がまだ痺れたままだった。いや、身体そのものの存在が、まるで意識されないのだ。眠っているのか、醒めているのか、はっきり判らないまま、ただ、快感だけが五体の隅々に埋れ火のように残っていた。

このような状態で、いついつまでも、いたかった。柔らかくて温かい、ふわふわしたものに包み込まれている感触は、まるで母親の胎内に宿っているときのような、ひどく安堵した気持であった。

だが、そうした状態は、そう長くは続かなかった。目がはっきりしてくると、そこに紐で括られた菊子の現実の姿があった。

——ああ、そうだ。写真を撮らなくっちゃ。急速に、私の意識は現実に戻った。

「写真は、一枚も撮れませんでした」じゃ、済まされない。「カメラ」と「ペン」のライターとしての自覚が私を、はね起こさせた。写真撮影は撮らないでプレイばかりしたいVと願っていた彼女。しかし、必要に迫られた私



は、「写真撮影」という一つのSMプレイのジャンルの中へ菊子を誘い込んでいった。

「ねえ、今度は、どんなこと、やるの？」

「巻布団責めとでも言うのかなあ、こんな風に敷布団を丸めて縄で縛っておくだろう。そして、この巻布団に菊子を縛りつけるって、寸法なんだ。それからの責めは、今のところ

秘密だけれど、後でのお楽しみって、ところだ。どうだ、面白いだろう？」

「ええ、面白そうだけど、余り、ひどいことはしないで。それに、お風呂へは行かして下さらないの？」

「そうさ。今日は、もう最後の最後まで、お風呂へ行かさないよ。菊子の菊花が、どのよ

うに変化するかを見届けるまではね」

「あら、それ、何のこと？」

「うん、まあ、種を明かせば、菊子の体温を計ってやろうっていうことだけなのさ」

「まあ、体温って、体温計で計るんでしょ」

「そうだよ。菊子も知ってるだろうけど、日本では体温は腋の下へ挟んで計るね。外人は口にくわえて計るわけだが、僕のSM式検温法というのは違うのだよ。ホラ、こんなに太くて長い棒状の検温器を菊子のアヌスに挿し込んで計るってわけなんだよ」

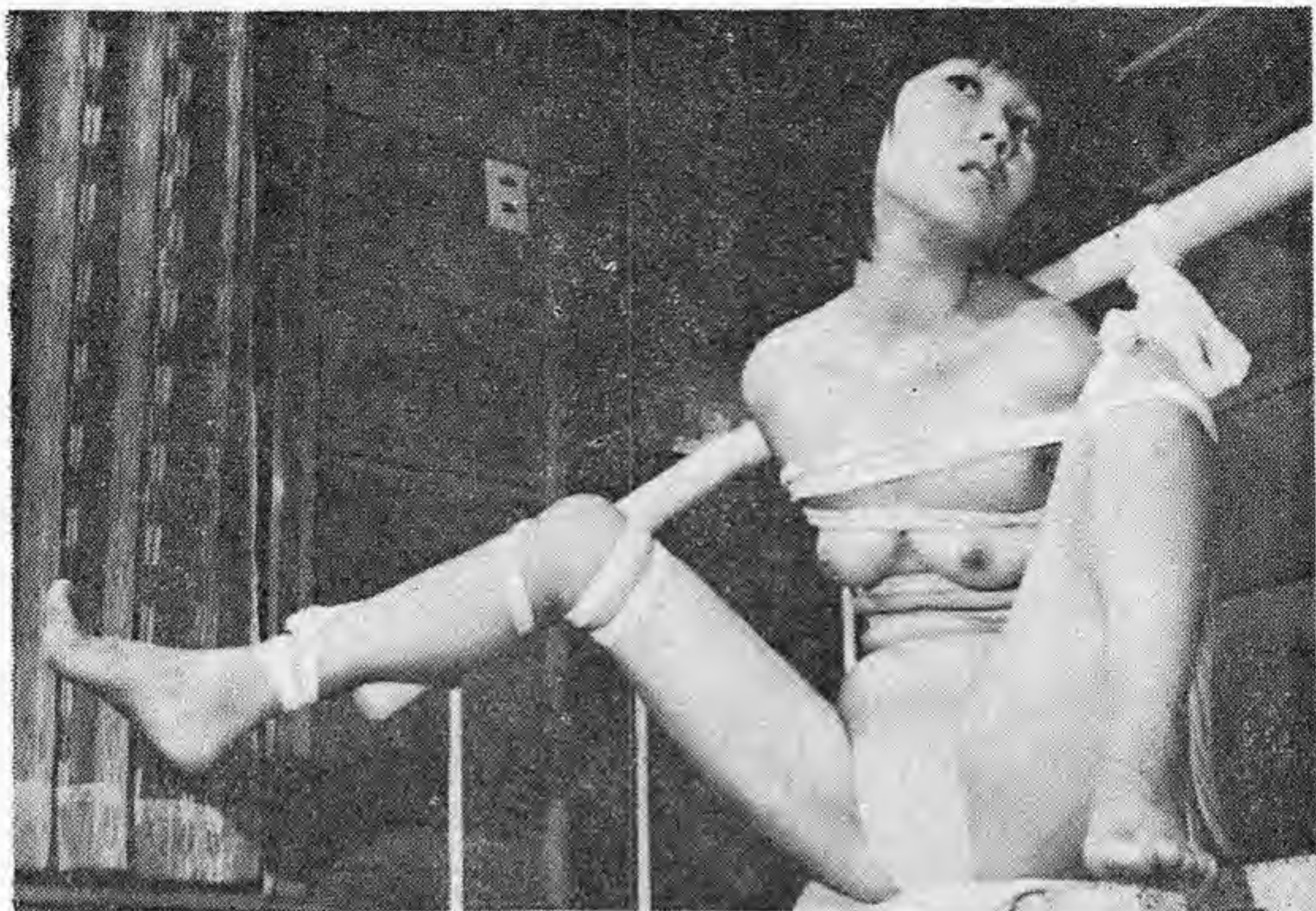
「うわあ、凄い。そんな長いもんが、みんな入ってしまうの。怖いわ、怖いわ」

「全部、入れなくても、このアルコールの入った赤い玉の部分だけが直腸に入れば、体内の温度が、ばっちり計れるんだよ。菊子は、アヌス責めが好きなんだろ？ だから、こんな検温の方法って、素晴らしいと思うよ」

「じゃあ、いいわ。でも、痛くないで」

私は納得した菊子を巻布団に括りつけてゆく。それは女体の荷造りをするようだった。

殊更、アヌスが露呈するような縛り方をする。それがM女に対する礼儀というものだろう。特に菊子のようにアヌス責めの大好きな女にとっては、最高の贈り物なのだ。



総体に毛の薄い菊子。しかも、その薄い毛さえ、フランク人形のようにカールした亜麻色なのに、このあたりまでくると、完全に姿を消してしまつて、ただ、放射状の規則正しい髪だけが、ピンク色に染まつて、小じんまり微笑んでいるのだ。それは山かげの茂みの中に、ひっそりと咲く隠花植物さながらだ。

菊子の菊花が、なぜ、これほどまでに魅惑的なのだろうか。それは、長い間、陽かげに育つて隠されていた秘宝だからなのか。

唇を当てて、食べてしまいたくなる可憐さであり、指先で、ちよいと触れてみたくなるような茶目っ気のある少女の瞳でもあった。

きゅっと口をつぐんでいるところは、少しお澄ましのよくな真面目さがあり、それでいて、四方八方へ手を伸ばし

た触手の髪は、まるでアコーディオンプリーツのように、美しい縞紋様を誇らし気にしている風だ。

ああ、なんという魅力的な美しさなのだろう。これこそ、生き物なのだ。死んだものにこんな美しさって、ある筈はない。

私は、棒状の検温器を手にすると、そっと菊花の中心部へ寄せていった。触れるか触れないか——その途端、菊子は急に暴れだして布団を背負ったまま畳の上をころげまわる。

「そんなに動きまわると、見えるぞ」

カメラを手にした私は、手持ちのままですトロボの閃光を、次々に発火させる。動きが止まると、足の爪先で菊子の脇腹や、あらぬところを擦り、その生温くて、こよなく柔らかい感触を楽しみながら、布団を背負って縛られた菊子のポーズを変えていった。

「いや、いや、物凄いエッチ。そんなところを擦っちゃ、いや。エッチなこと止めて!」

「それだったら、大人しく、じっと検温させるんだな。いいな、菊子」

「ええ、仕方ないわ。計って頂戴」

私は菊子のお尻を持ちあげておいて、太くて長い硝子棒の先を湿らせ、可愛い菊座に当てがい、きゅっと力を入れる。軽い抵抗感

を突き破ると、あとは、するするっと、吸い込まれるように中へ入ってゆく。

「動く検温器が折れるぞ。じっとしてるんだ。五分間の辛抱だ、いいな」

私は検温計の硝子棒を、くるくると回して温度の目盛りを見る。といって、これは、体温を計るものじゃなくて、水温を計る温度計だから、目盛りは摂氏0度から100度迄ある。

今見ると20度の少し手前だ。見ているうちに、20度を越して25度になった。それから30度迄は少し時間がかかった。赤いアルコールの目盛りの線まで硝子棒を押し込んでみる。

私の眼は温度計の目盛りと、硝子棒をくわえたアヌスの周辺に、注がれている。35度を過ぎて36度を少し越した附近で血のように赤い線が、はたと止まった。

「36度5分ぐらいだな。平熱だよ。菊子の身体は健康体だ。何処も異常はないだろう？」

「ええ、今のところ、別に……」

「メンスは正常？」

「はい、それは、もう、きっちりと二十八日目毎に毎月ありますわ」

「そうか、それは何よりだ。じゃあ、一つ、さっき話した『SM研究会』のメンバーの人達の前で『V検』をやってもらうための予行

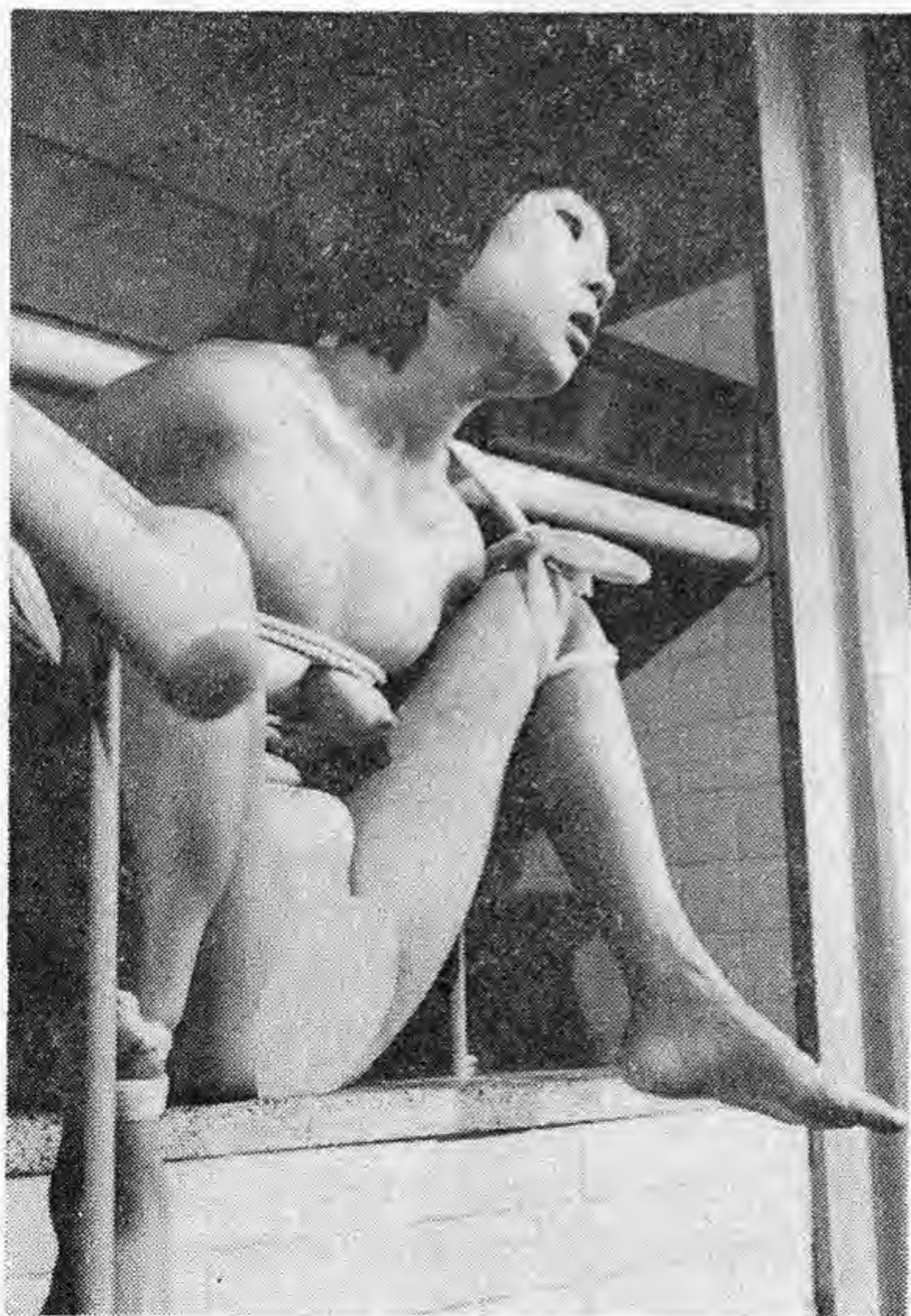
演習をやってみようかね」

私は温度計を、くるくると回してから、さっと抜いてケースに入れると、菊子を縛っていた紐を解いた。彼女は布団の上で身体の安定を失って、よろよろと畳の上どころがる。

私は、抱えあげるようにして、浴室へ続くタイルの上へ連れてきた。浴室は階段を登っ

て一段、高いところにあるが、ここは一面タイル張りになってるので、たとえ小便を飛ばしたって、あとの始末は容易なのだ。

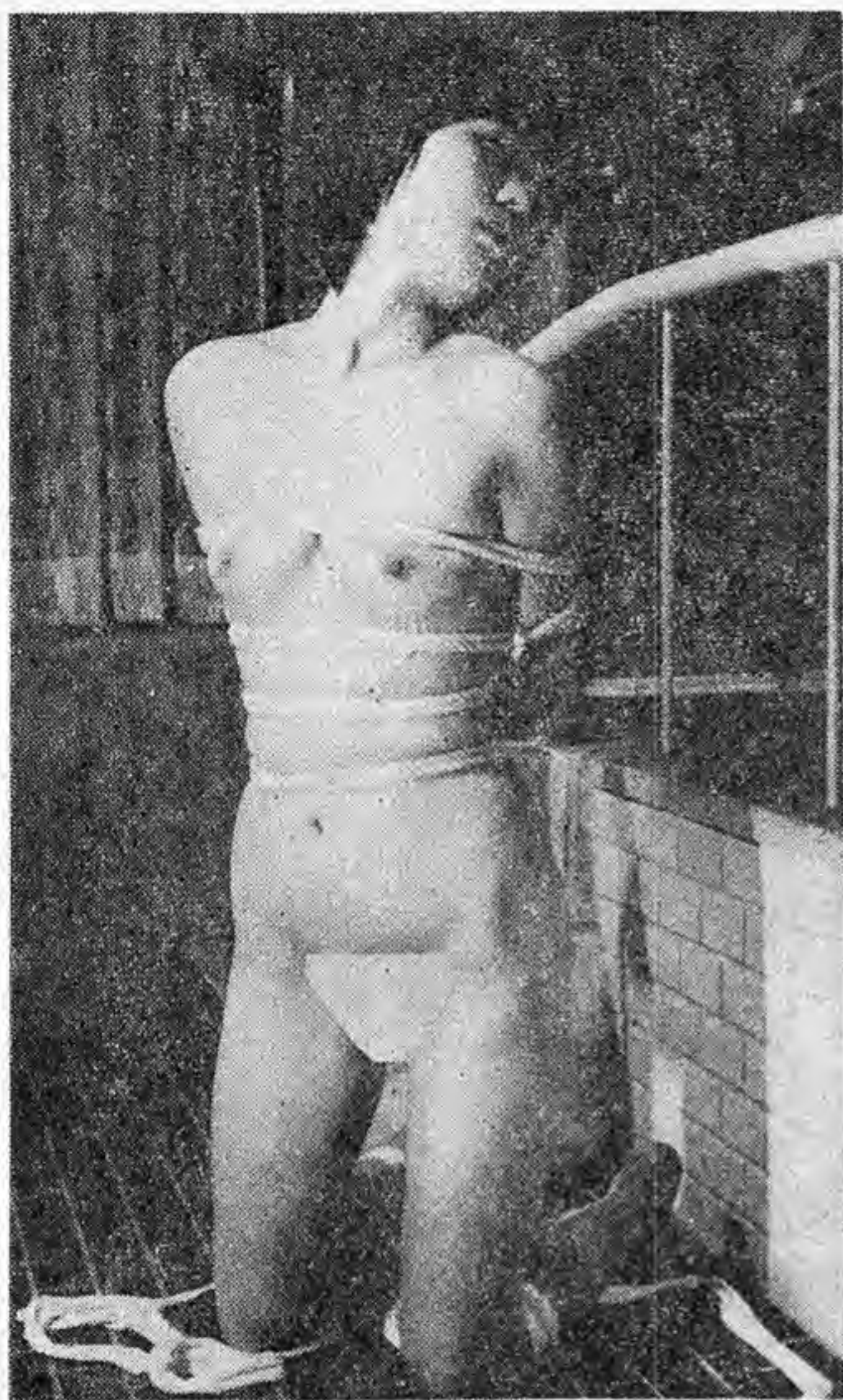
足の裏に、べたっと吸いつくような冷たいタイルの感触は快い。私も裸になった。たとえ菊子の放つ尿を、身体に受けてもいいように。いや、生温い菊子のユバリ(尿)を、全



身に浴びたいというのが本音だったのかもしれない。人のやらない異常なことをやろうとしていることに、異常な亢奮を覚えた。

「菊子には、これから『SM研究会』の重要なゲストとして、出席して貰わなくちゃいけないから、その際に、まごつかないように、今、ここで、実験をやってみようね」

「あら、どんなことをするの？」
菊子が不安気に尻込みするのを、後手に縛



って追い立て、手摺りに両脚を大きく開かせて縛ってしまう。高さは一メートル足らず、そう高くはないのであるが、身体が手摺りを背負う格好になって前屈みになるため、前へ倒れそうになって、ひどく不安がるので、上半身も、かっちりと紐で手摺りに固定する。

これで菊子は、あられもなく両足を左右に大きく開いたまま縛りあげられて、身動きも出来ないのだ。だが、M女深田菊子にとって

は、これは望むところのポーズでもあるのだろう。若し、マゾっ気のない女性だったら、とても、こんなポーズは耐えられない筈だ。

私はタイルに腰をおろして、足を思いきり開いたまま晒されている菊子を見上げた。

「菊子は、こんなポーズで研究会の人達に身体の間々まで見て頂くんだ。いいね。特にV検では出席者全員に、色や形、その他、いろんなことを、批評して貰うんだ。どうだ、こんなプランって、楽しいだろう？」

「いやよ、いやよ。菊子、こんなにして責めてって、頼んだ覚えはないわ。早く解いて、降して頂戴。お願い」

「駄目、駄目。まだ、これから、いろんな面白い責めをやるんだ。さっきはオシメの中へ出しただろう。今度は、このままの格好で、思いっきり……出すんだ」

「無理よ、無理よ。そんなこと、出来やしないわ。足が痛くなったのよ。早く解いて……」

「よし、よし。すぐ解いてやる。そのかわりこれから僕の言うことをやってみるんだよ。

さあ、足の拇指を動かしてごらん。右だけじゃない、両方共だ。それから、次は、お腹をふくらませて、そうそう、その調子……」

「ねえ、これで、いいの？」

「今度は、顔を上げて、目をつぶってごらん。どんなことがあっても、目を開いては、いけないよ。僕がよしと言うまではね」

私は、やおら腰をあげて、大きく脚をひろげたまま縛られている菊子の前へ近づく。

「あああ、何をするのよ？」

「何もしないさ。口は開いてもいいが、目は閉じているんだよ。カラーで色や形を、ぱちりと撮ってやるかわりに、僕の目で、とっくりと見てあげるからね。色は鮮やかなピンク色で、形は……」

私の人差し指と拇指は、するすると蛇の鎌首のように伸びる。

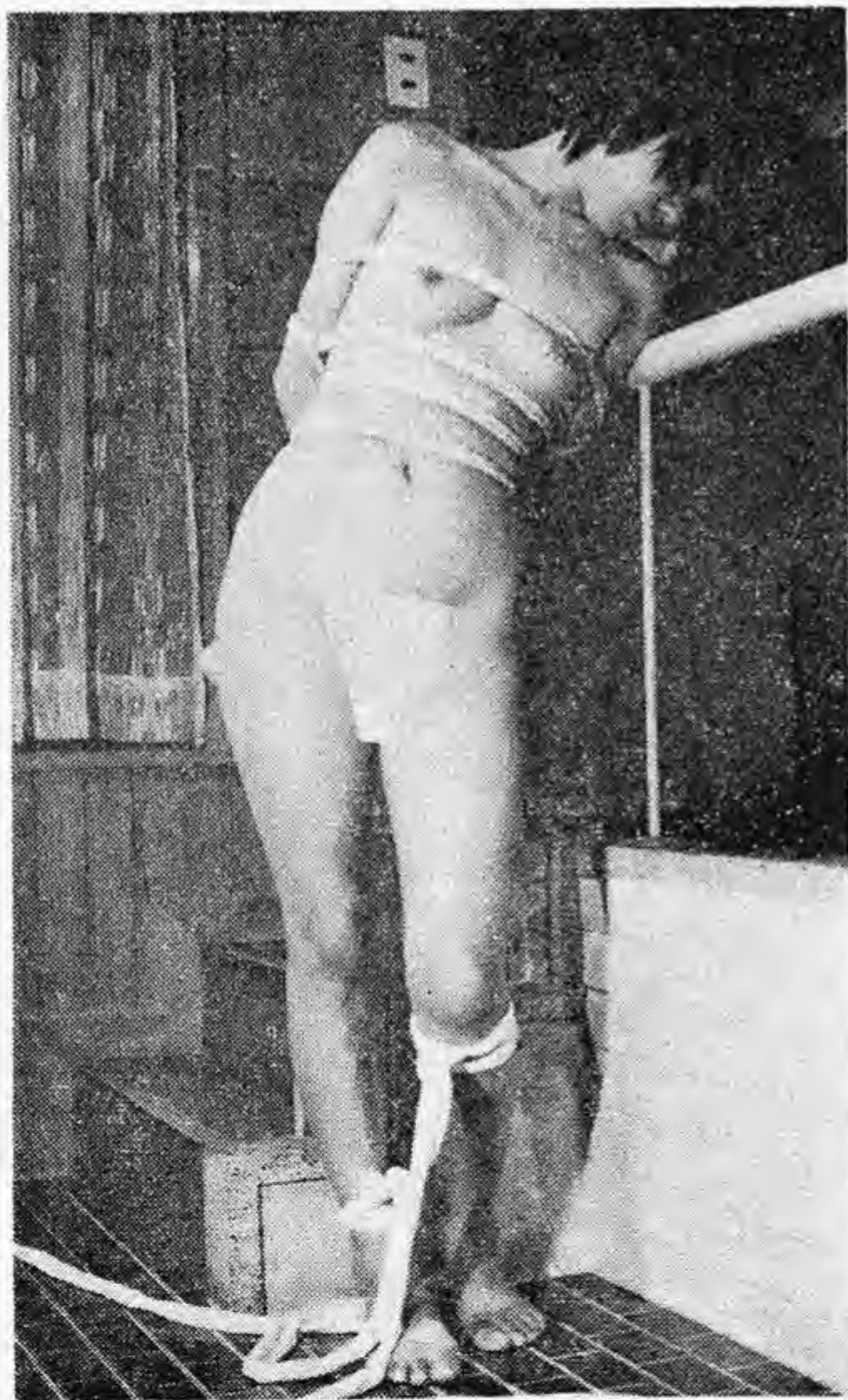
「いやよ、いやよ。そんなこと言っちゃ」

「目は開けたらいけないよ。口の方は、そのときの感じを正直に喋ってごらん」

「ひどいわ、ひどいわ。そんな……」

彼女の語尾は、そこで途切れた。顔がのけぞって、目は固く閉じたまま、荒い息を吐いている。

「研究会の人達が、じっと目をこらして、見詰めているんだよ。そして、責めによって菊子のカラダが、どのように変化するのか、注目しているんだ。どう？　こうして、身動き出来ない姿で見られている感じは？」



「知らないっ、そんなこと聞くなんて。じらさないで、早く、責めてよ。見られているだけだったら、いや。早く、イジメテ……」

そう言って菊子は仰向けていた顔を横に伏せる。宝石のような整った髪がライトで、きらきらと輝き、甘酸っぱいような体臭が、あたり一面に漂ってくる。

手も足も、全く自由のきかない深田菊子。もう、私の悪戯な触手の前に、逃げることも

身をかくすことも出来ないのだ。じっと目を閉じたまま、なすがままにしているより外に仕様が無いのだ。

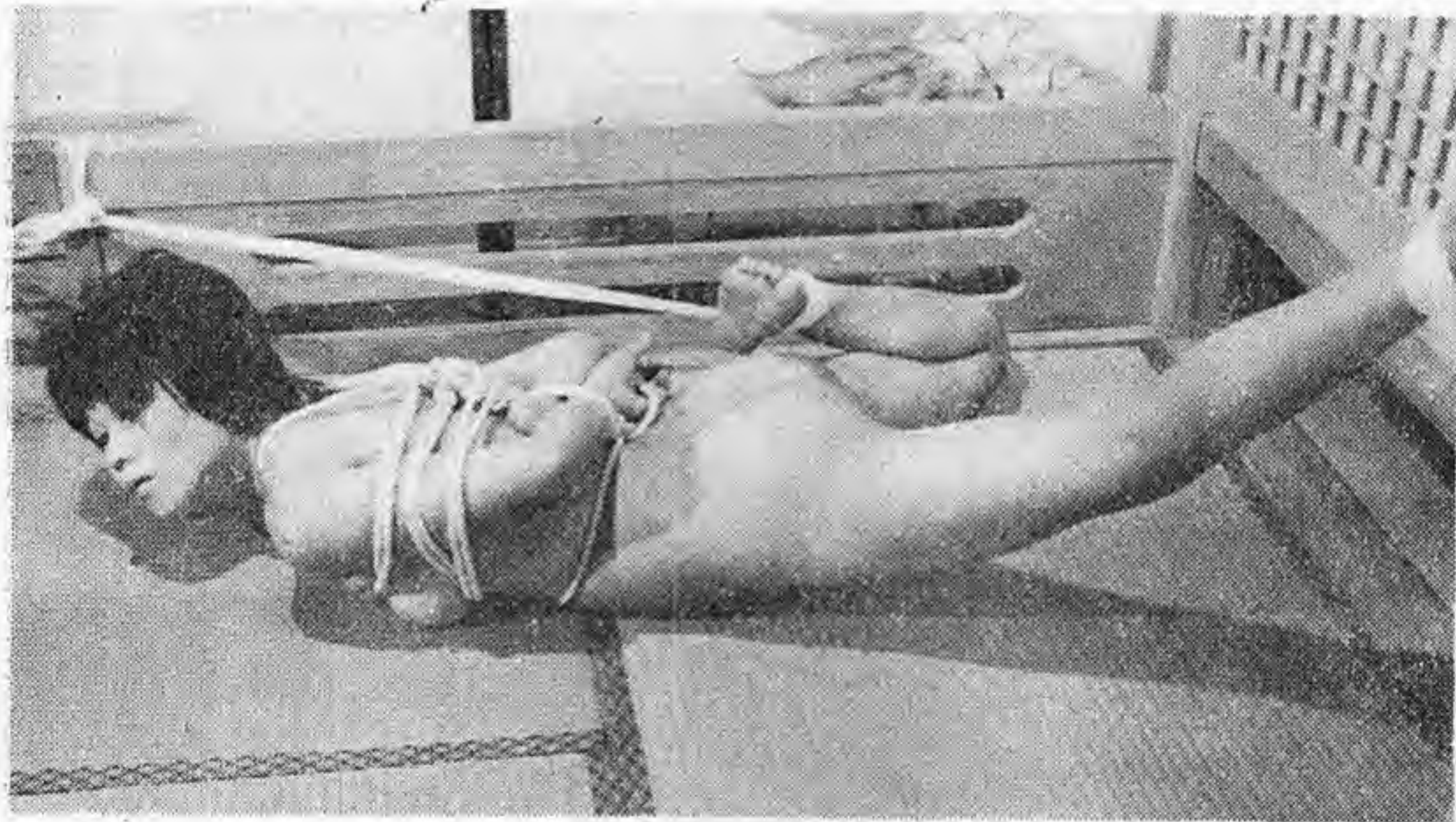
こんなに若くて、美しい菊子の女体を、思うままに弄戯できるのは、なんという幸せであらうか。だが、一人で眺め、楽しんでいるのは、なんとと言っても勿体ない。

私は嘗て、同好者の一人と、一緒になって彼女を責めたときのことを思い出していた。

その同好者は、火のついた巻煙草をくわえさせたり、火のついた蠟燭を燭台のように立てたりしたが、ボーカルフエイスの菊子は、そんな危なっかしい責めに対しても、特に驚いたふりも見せなかった。場合によっては、大切な部分の肌を火で焦がすような危険があるので、私は、いざというときには、すぐに対処出来るよう待機していたのだが、そんなポーズのまま、彼女は喜々として、カメラの前に全身を晒していたのであった。

そんな彼女のいじらしいばかりの姿を見ると、私の嗜虐心が一層、あふりたてられてくるのだ。私の提唱した「SM研究会」の参加希望者の中には、豊富な経験を持つベテランの責め手も何人とかくいる。そういう人達と一緒にあって、深田菊子のようなM女の謎を解いてゆくのも愉快なことだ。

大体、私がこの深田菊子をゲストの第一番に推したいことは、時間的に自由なのは勿論のこと、なんといっても、絶対に相手の気に触れるようなことを言ったり、したりしないという性質の円満さを挙げることが出来る。接していても、いつも、なごやかな気持ちにさせられるのは、彼女の性格の良さと育ちの良さが然からしむるところであろう。



「ねえ、私、身体が冷えてきたの。お風呂へ入らせてほしいわ」

タイルの上へ縛って晒したまま、大分、時間が経っている。足もとのタイルからも冷々とした空気が忍び寄ってくる。殊に今日は、秋雨なので、冷えがひどいようだ。そういえば、裸のままにいる私も、いささか、身体が冷たくなってきたようだ。

「よしよし、それじゃ縄を解いて、お風呂へ入れてあげよう。そのかわり、さっきは、オシメの中へ出しただろう。今度はね、このままの格好で、思いっきり飛ばしてごらん。僕が此処で、見ていてあげるから……」

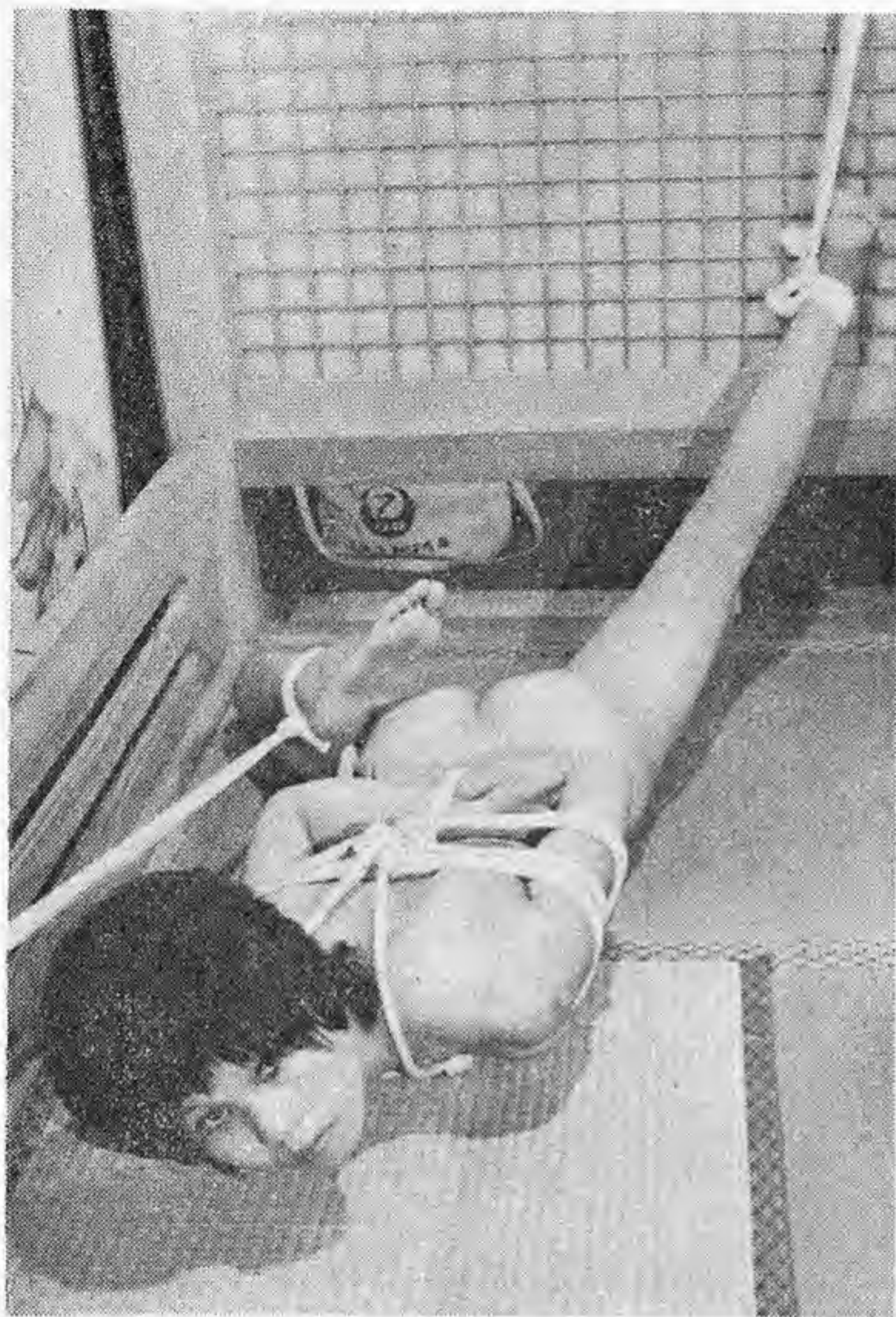
「あら、そんなのってないわ。第一、ついさっき、全部出してしまったところよ。いくら冷えたからって、そんなに出不いわ」

「そうか、出なきゃ、このままで出る迄、待とうか。早く出せば出す程、早く縄を解いて貰えて お風呂へ入れるんだぞ」

「あーあ、どうしても、出さなきゃ、いけませんの？ 困ってしまったわ、妾」

「SM研究会の人達にも、見て頂かなくちゃいけないからね。その練習のためにも、今、ここで予行しておくのがいいんだよ」

「だったら、目をつぶっていて下さる？ そ



うしたら私、思いきって、やっってしまうわ。
ねえ、目をつぶっててね、きつとよ」

私は目を閉じ、すぐに薄目を開く。彼女は
うつむいて、両足先をそろして全身に力を入
れる。下は一面タイルだ。この前のように、
布団の中でバスタオルに込み込ませたときや
ついさっき、オシメの中へ洩らしたときと違

って、オープン楽しさがあった。
「そんなところで覗いてたら、かかっても知
らないわよ」

彼女の掛声が、かかった。

切羽詰まった尿意が溢れるという感じでは
なかった。菊子が私の命令に迎合して、それ
までに溜まっていた膀胱内の液体を、無理に

外部へ排出しているといった水流の勢いであ
った。むくむくと水晶の玉が、襷の中から盛
り上ったかと思うと、キラキラと光り輝き、
迸り出たかと思うと、途切れ、途切れたかと
思うと水玉の連続となった。

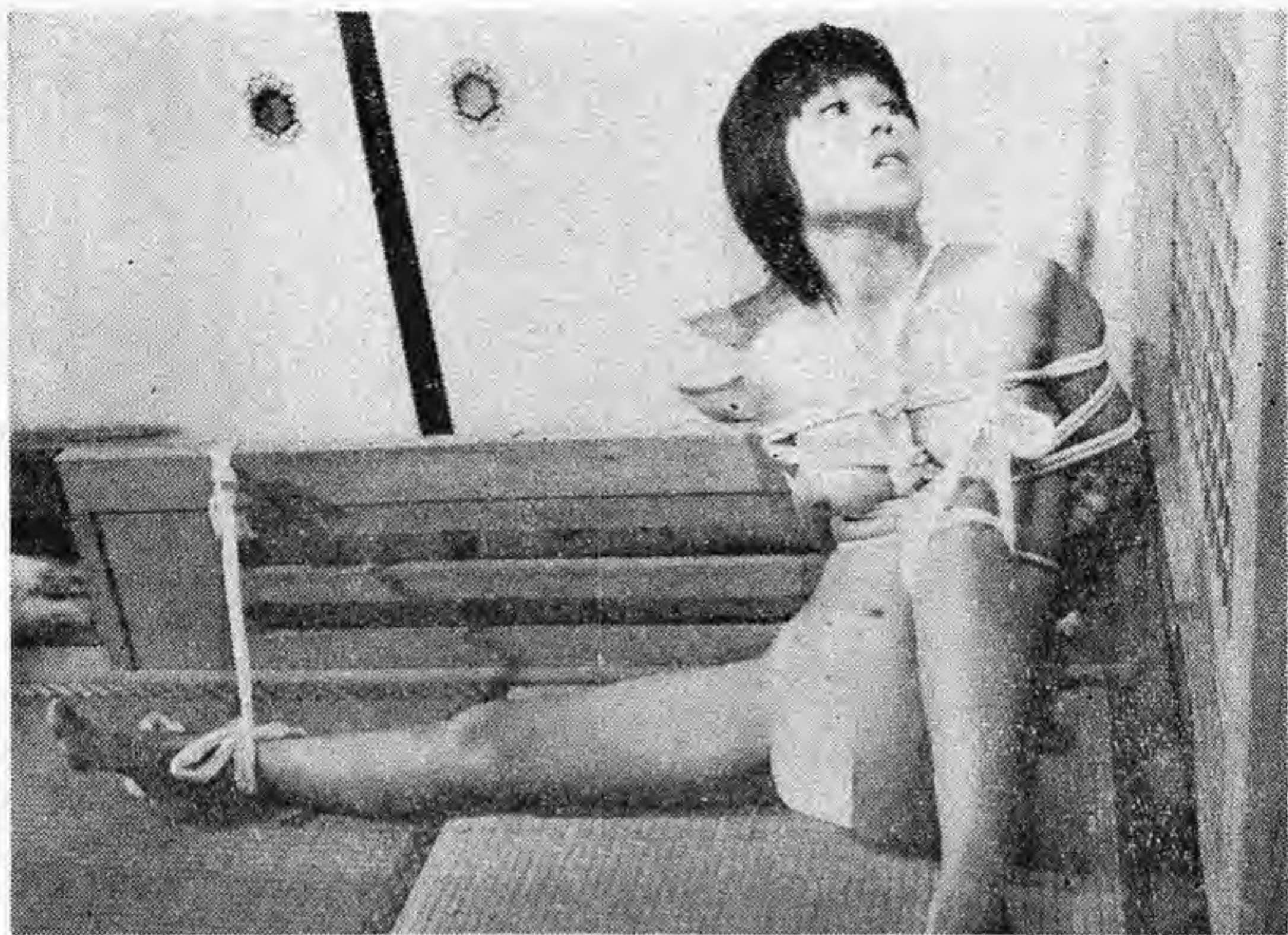
それは、下から見上げている私にとって、
何物にも替え難い魅惑的な眺めであった。こ
んなところを眺められるなんて、なかなか、
あるもんじゃない。

水玉の連続が終ると、あとは、こぼれるよ
うな美しい真珠が、ぽつり、ぽつりと、した
たり落ちた。甘酸っぱい湯気の香りが鼻をつ
いて、しぶきが私の胸に細かい霧となってか
かる。タイルを這ってきた水流は、私の足裏
を、じわじわと濡らす。

細大洩らさず、初めから終りまで眺めつく
された彼女は、羞らいを満面に浮かべたまま
足を開いたポーズで、じっとしていた。

チヨロチヨロと、最後の一滴が、黒いタイ
ルにこぼれ落ちるのを見届けてから、私は彼
女を縛っていた紐を解いて、携帯用のビデを
手にすると、浴室の扉を押した。

この部屋の浴室は、階段の踊り場の上の空
間を使って設備しているためか、洗い場はび
っくりする程広く、相撲が取れそうな位であ



る。浴槽も四、五人は一緒に入れるくらいの広さである。窓を開け放ってあったので湯気は籠っていなかったが、湯の栓を開き放しにしてあったので、浴槽のふちを溢れた湯が、ざあざあと洗い場へ流れていた。

菊子と抱き合うようにして浴槽へ飛び込むと二人分の湯が洗い場へ溢れ出る。私は彼女の背後へ回りながら、携帯用のビデを足の間から放す。空気を含んだ白い球体は、浮力によって激しい勢いで、水面に飛び出す。

「わあっ、びっくりした。それ、なに？」

菊子は、好奇心に目を輝かせて、一方に鳥の嘴のような凸起のついた奇妙な球体を手に取って、お手玉のように回わしてみせる。

「これはね、ビデといって

洗滌する道具なんだよ。こうして、お湯を吸い込んでおいてから、ここを握るとね、ほらこんなにお湯が出るだろう。手を放すと、また吸い込むんだ。このツバのところまで、ぴったりと押し込んでおいて、洗滌液の出し入れをすると、こぼれずに、うまく洗えるってわけさ」

棒状の凸起の先端に近い横穴から、本体を握るたびに、勢いよく湯が迸り出る。

「どうだね。今ここで、一つ、これを使ってみるかな」

「いやン、いやン。そんなのって、ないわ」菊子は口では、そう言って軽く拒否していたが、頸をのけぞらして私の肩に当て、浮力で軽くなった下半身を、ふわっと浮かして、私の膝の上に、のせてきた。

湯をいっぱい吸い込んだビデは、私の手の中で水中を潜ってゆく。

一回、二回、三回……。

温湯は間断なくカラシから流れ出て、浴槽から溢れた湯を補給している。今はもう、すべて、触覚の世界であった。視覚もなく嗅覚もなく、また聴覚もなかった。ましてや味覚など有る筈もない。私の五官は触覚にだけ集中していた。只、唯一の感覚は、指に伝わっ

てくるなんとも言えない触覚のみであった。SMプレイに於ける触覚の役割り、それは又なんと妙なるものなのか。

「僕はね、いつも、こんなことを考えているのだよ。菊子のように、若くて美しい女の子の身体の外側も内側も奇麗に奇麗に洗って、そうしておいて、ハンバーグかオムレツなんかを詰め込んで、ロうつしで食べるんだ。どんな素晴らしい味がするだろうと思うと、胸がわくわくするんだよ」

「まあ、エッチ。そんなお話って、聞きたくないわ。それより……」

語尾が途切れて、菊子の両足が湯の表面に近く浮き上ってきた。まわりは、すべて湯である。ツバをびったり当てがっていなくてもお湯がこぼれる心配がないことをいいことに私の動作は次第に乱暴になっていった。

すらりと伸びた菊子の脚が水面に浮んだり沈んだりしながら、やがて、ピンと突っ張ったように強^{こわ}ばり浴槽のふちへ足の裏を当てて上半身を私の肩越しに、のけぞらした。

途端に、白い球体は私の手元を離れて、ころりと浴槽の底へ沈んでいった。それを拾う余裕もなく、私は菊子の背に押されて、あとずさりした。太股や臀部の筋肉が筋ばったよ

うに固くなっていた。その緊張が緩むと菊子の裸身は、ゆっくりと湯の中に沈んだ。

「身体の表面を石鹸の泡を立てて洗う人は多いけれど、身体の中を、こんなに奇麗に洗う人って少ないだろうね。さあ、どんなに奇麗になったか、見てあげようね」

私は菊子を抱えあげて洗場のタイルの上へ長々と寝そべらせる。濡れたままの白い肌はヌメヌメと妖しく電光に映えて、なまめかし

く私の目を捉える。今までの、浴槽の中での触覚一辺倒から、今度は視覚が重要な役割りを果たすことになってきた。

長湯で、のぼせるくらいに温まった肌にはタイルの冷たさが快い。私もまた、そこに腹這いになったのだ。洗いに洗った部分に対して、唇を当てて、その妙なる味覚を存分に味わいたかったからに他ならない。

窓から吹き込む十月半ば過ぎの風は、いさ



さか冷たい筈であった。筈であった——とい
うのは、冷たい筈の風が、少しも冷たく感じ

ないで、むしろ快くさえ、感じたのだ。

窓の外では、相変わらず秋雨は風さえ混じえ

て降りしきっていたが室内
は春のようだった。

石鹼を手にすると、彼女
の肩口から乳房、腋の下、
お腹へと、塗りつけていっ
た。太股からお尻へ、そし
て再び太股へ戻って、その
つけ根へ石鹼を塗りたくっ
ていると、擦ったがって動
くので、お尻のあたりが泡
立ってきた。

面白がって腋の下を擦る
と「ううう」と呻いて、俯
伏せになる。私は菊子のお
尻へ跨って頸すじから背中
へと万遍なく石鹼の手を這
わせ、時折り、その手を脇
腹に伝わせて、乳房の方へ
も回してゆく。

ぬめぬめとした石鹼まみ
れの菊子の肌が、まるで爬
虫類のように妖しく感じら
れる。動けば動くほど、も

がけばもがくほど、泡が立ってきて、やがて
私の身体も、その白い泡沫の中に包まれてし
まう。私は、石鹼の泡の中で菊子を抱きしめ
ていた。

タイルの上をヌルヌルと滑り、肌と肌とも
石鹼で滑った。泡は益々カサを増してゆく。
浴槽から湯が流れてくるので、私はいつまで
も石鹼を補給しなければならなかった。

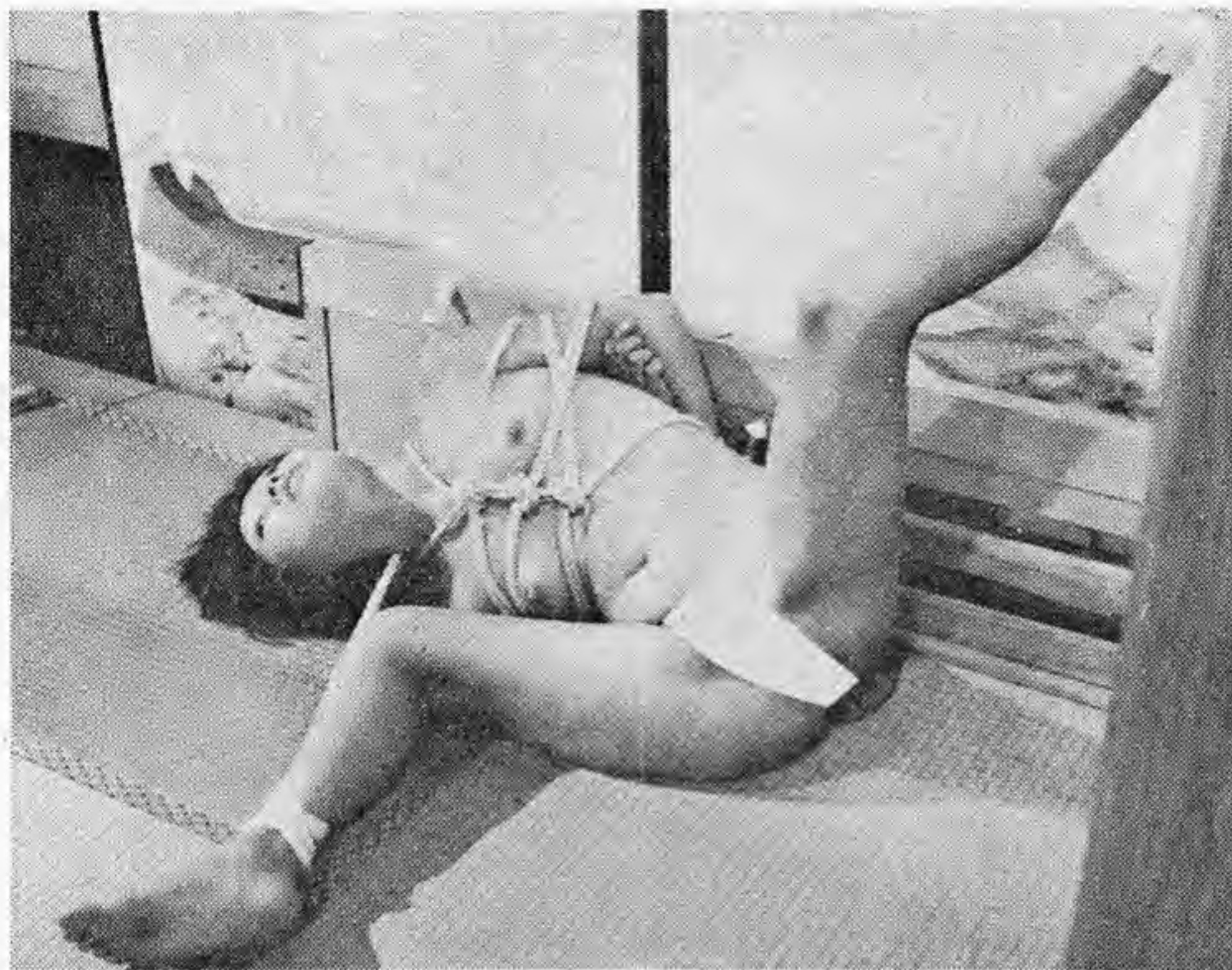
タイルの上を滑りながら、二人は這いまわ
った。菊子の足へも石鹼を塗ろうとして、私
は、つるりと石鹼を落した。それはタイルの
上を走って洗い場の隅の方へ逃げていった。

それを取ろうとして私は滑り、危うく、菊
子の腋の下に手をやって尻餅をつくのを防い
だ。石鹼を拾うのを諦めて、泡だらけの菊子
を仰向けにした。泡は愈々増え、動けば動く
ほどカサを益した。石鹼玉がフワフワと浴室
内を、いくつも、いくつも漂いはじめた。

凄く羞かしい縛り

浴室を出てくると、さっき菊子が放尿した
タイルの上を歩かねばならない。私は二枚あ
るバスタオルの中の一枚を、さっとタイルの
上へ敷いて、素早く向う側へ渡った。

「菊子。今度はね、少し変った縛り方をして



写真を撮りたいんだが、構わないかい？」

「ええ、いいわ」

彼女は両手を後へ回して「縛られ」のポーズをとる。至極従順で物わかりがよい女だ。いや、それよりも、私が「縛る」と言ったときの菊子の態度のなかに、なんともいえない色気というか、媚態というか、男心をぐっと掴んで放さない魅力が、にじみ出た。

逃げまどう女を、力づくで縛りあげるというのでない以上、縛りあげておいてから、女の身体に責めを加えるより仕様がな。そして、なんとしても、何枚かの緊縛写真を撮って帰らないことには、ルポに載せる材料にも事欠くことになる。どうしても、写真だけは撮っておきたい——という心が逸っていながら、そのとき、ふっと、私の心中に魔がさした。それは、甘酸っぱいような臭いが、私の鼻をくすぐったのが悪かったのだ。

ベッドの頭の方に、びしょびしょになったオシメが、オシメカバーに包まれたまま、放ってあったのが、臭いの根源であった。

両手首を背後で紐で括ると、そのまま、菊子をベッドの方へ追いたてていった。

内外とも奇麗に洗った女体である。白い敷布の上へ仰向けに寝ころがせて、掛布団を頭

からかぶって、その中へ潜り込んでいった。

両足は自由だが、両手は背中で括られているので使うことは出来ない。オシメの臭いに触発されて、私は、この物分りのよい娘を、思いつきり辱かしめ、いじめ、弄び、そして泣べそをかかしてやりたくなった。

掛布団を頭からかぶったのは、寒いからではなかった。やはり暗闇の方が、あくなきハレンチな行為が、やり易いからだった。

菊子が風呂から上ったばかりであるように私もまた風呂から上ったままの姿だった。

後手に括られて両手の自由にならない素裸の女の布団の中へ、助平きわまりない男が潜り込んでいったら、どんなことになる。これは、またとない見物ではなからうか。

さて、Sの皆さん。皆さん



だったら、こんな場合、どのような責めをなさるだろうか。

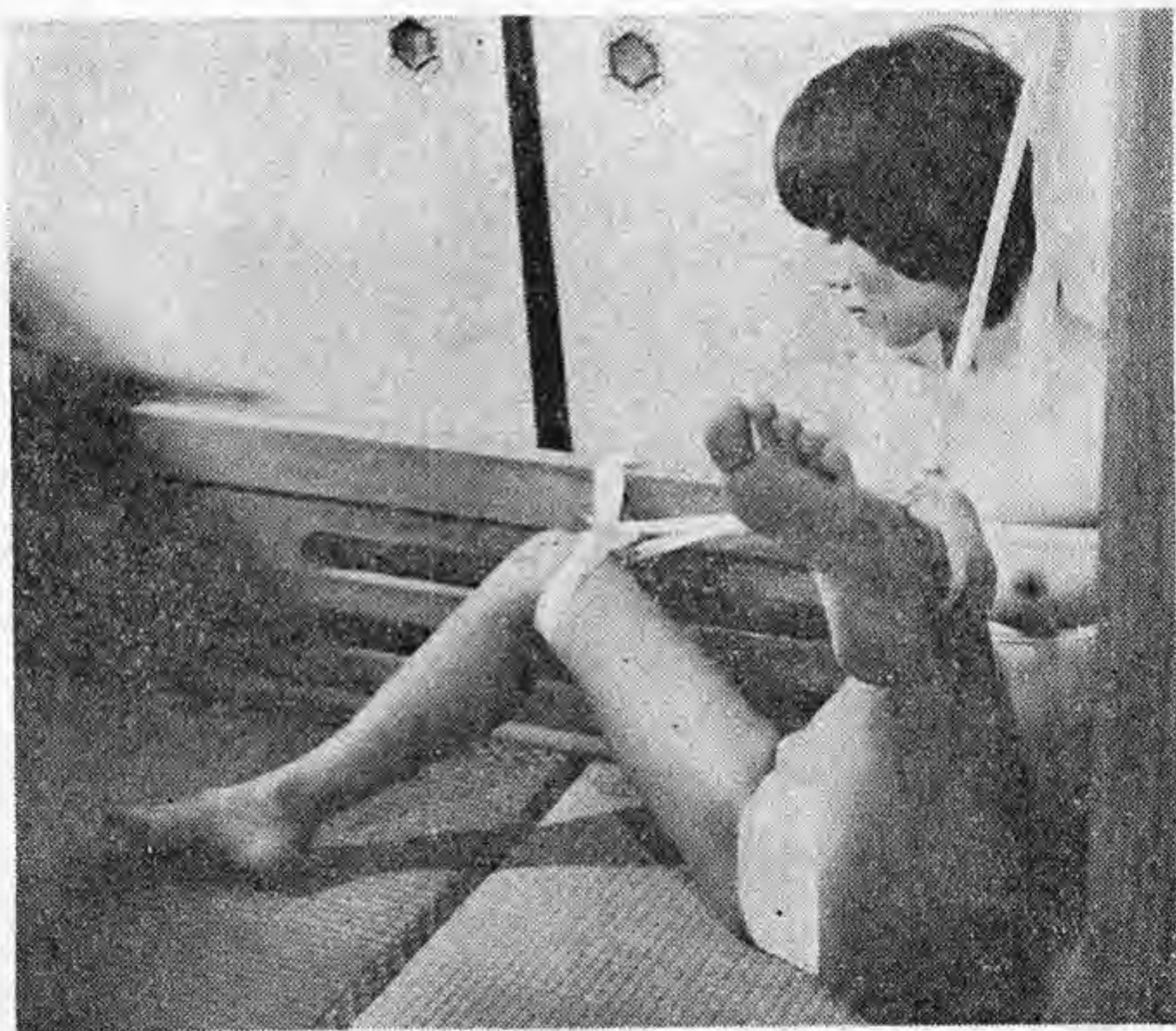
私も、空想の中では、ああもやりたい、こうもしたい、という夢を描いたことは幾度となくある。

今、ここに、まことに理解のある女性、いや、自らの手で、便りを寄越して『イジメテホシイ』と言ってきた女が、この布団の中に、全裸で縛られて寝ているのだ。

今こそ、平常のSの夢を実現させるチャンスではないのか。そして、満天下のマニアの血を沸かせ肉を躍らせる会心のルポを書くべきではなかったか。

絶好の機会であったにも拘らずそのときの私の心を占めていたのは、残念ながら、少しでも早く、彼女の身体の中へ入ってしまいたいという焦りの気持ばかりであった。

両手が縛られている彼女が自由になるのは長くて撓やかな足であった。バタバタと、手加減しながら私の胸や腹を蹴り、それを手で払いのけられると、観念したように、私を



上半身で受け入れてしまった。唇で咽喉のあたりを吸いまくり、両手の指で、腋の下や脇腹、お臍のあたりを、擦りながら、かすかに化粧石鹸の匂いのする肌を嗅

いだ。

「ク、ククク、クク……」

彼女の口から、擦ったさを耐える叫喚が洩れると、身をくねらせて、私の指先を、お臍から、お尻の方へと誘っていった。

布団の中に寝ている菊子の裸身の、もう、どんなところでも汚くはなかった。唇は顎の下を離れて、次第次第に下へ下へと下っていった。指で擦ったあとを唇が追って、舌と歯が、そのアシスタントの役目をした。彼女の望んでいるように苛めてやりたい――。

そんなことが念頭にありながら、結局私が深田菊子にアタックしたのは、余りにも、ありきたりのノーマルな行為であった。只、両手を縛っているということだけが、違うといえば言えたし、SMといえ、言えなくもなかったが、『イジメル』ということは決して、こんなことである筈はない。

深田菊子の並はずれた美しさが、ワザワイしたのだろうか、私は目がくらんだように、暴走してしまったのだ。勿論、私にとってはそれは、それなりに、痺れるような官能の満



足感もあったし、征服感もあった、十二分に楽しい、ひとときでもあった。

彼女にしても、抑えに抑えていたものが、これを機会に、堰を切ったように爆発したような激しさであった。山は一度ではなくて、確実に三度は訪れた。

私は余力を残しながらも、後の雰囲気を感じ

っと楽しんでいた。なんとしても、まだ何かの写真を撮らねばならないという気持が、私を自制させた。じっとしているのに、内部が動き、私は限らない法悦境を味わった。

それなのに、何か横道へそれてしまったような異和感が残っていたのは、なんとしたことだろう。だが、深田菊子は、終ってしまう

と、晴々とした表情で、そのまま、縛りの祭壇へと立った。私の移り香が散逸するのを虞れるように、いそいそと内股で歩いた。

それからの紐と縄は、暴虐の限りをつくして、彼女の花開いた裸身を羞恥地獄の底へと追いやった。今の今まで、男を受け入れていた女体の、両方の足首を紐で括って、操り人形のように、自由自在に、思いのまま、捻じ曲げ、開き、閉じ——して責めた。

今日の菊子は、一回もトイレへは行かせていない。一度はオシメの中へ、そして、もう一度は、手摺りに縛りつけたままで、用を足させたのだ。もう金輪際、トイレなんかは使わせないぞ——。次に尿意を催したら、便器の中へでも、やらせるとするか。

開股縛りには、今の今だから、私もいたく興味があった。菊子が恥かしがって、逆らえば逆らうほど、紐を操って彼女の脚を開いたり閉じたりさせるのは面白かった。凄く恥かしがるのに、「終ってから、トイレへ行くのは惜しいような気がするの。だから、このまま、じっとしているわ」と言う菊子は両手を揃えて頭の上で縛られて鴨居に固定され一言の不服も言わず、それが当然かのように、ひたすら、そこに晒されていた。



敗戦国の奴隷として異国に抑留された哀れな日本女性たちは、勝ち誇った大男たちの犠牲となってしまった。その気まぐれな楽しみのために、なぐさみものとなって、美しくも清純な女体を、思いのままに弄ばれなくてはならなかった。これは敗走した関東軍に取り残された悲惨な日本女性の辿った苛酷きわまりない運命の悪戯の一ページである。恨みをのんで異境の果てに散った幾万の日本女性の冥福を心から祈る。

孝

敗戦秘話

北満悲歌

蝮のマリ―登場

鈴 すず

鹿 か

晶 あき

子 こ

緊急の全員集合をかけられ、急

いで応接室へ集まった捕われの私たちは、中にいた女の人を見て、みんな、一様に、アッと恐怖の目を睜みはったのでございます。

その女の方は、お八重さんと親しそうに話をしていましたが見ますと、彼女の首すじから胸、お腹にかけて、無気味な蛇が、五、六匹も、とぐろを巻いているのです。

お八重さんは、私たちが入口で恐怖に立ちすくんでいるのを見る

と声をかけました。

「さあさあ、素っ裸の奴隷さん。遠慮しないで、中にお入りなさいよ。今日は、とっても素敵な方を紹介してあげますから……」

その女の人と顔を見合わせて、気持よさそうに笑い合っております。

部屋の中には、二十人ばかりのロシア軍将校が集まり、トランプをしたりウオッカを飲んだり、思い思いのことをしております。

智恵子先生は、私たちみんなが部屋の中へ入るのを見とどけられると、入口の壁の所に一列に並べ、「気を付けっ」と号令を掛けました。私たちは、その号令に合わせて、もう

ロシア軍将校の前へ出た時には、すっかり習慣になってしまっている——あの恥かしい、
「氣を付けの姿勢」そう、全裸のまま、両手を頭の後で組み、胸を張り、両脚を大きく左右にひろげて、下腹部を前へ突き出すという淫らな姿勢——をとったのでございます。

私たちが一斉に、その姿勢をとるのを見ると、蛇を首に巻いていた女の人は、お八重さんの肩を叩き、「まあまあ、お八重姐さん、うまいこと仕込んでいるじゃないの。恐れ入ったわ」と言って愉快そうに笑うのでした。
「ホホホ、そうかしら。あんたに褒められて私、光栄だわ」

お八重さんは万更でもない様子で、私たちの方を、一瞥すると、にやにやしながら、
「よろしいわ」

と、大きく頷きました。私たちは両手をほどこき、突きだしていた下腹部を引っ込めて楽な姿勢をとったのでございます。お八重さんは、私たちの前を行ったり来たりしながら、
「今日は、今も言ったように、皆さんに、とても素敵な人を紹介します。あなた達を訓練するために、わざわざ、ハルピンからお呼びしたんですよ」

と、いかにも優しそうに、猫なで声で言い

部屋の片隅で、体にまといつく蛇を弄んでいた女の人を手招きしました。

「この方はね、宮崎真理子さんといって、ハルピンでは、なかなか人気のあった人なんですよ。まだお年は三十になるかならないかっという所なんですけど、一声かければ、忽ち何十人という命知らずの荒くれ男達が、すぐに寄ってくるという大姐御でね。私もハルピンにいた時には、随分とお世話になったものなのよ。皆さんも、こんな素晴らしい方に、いろいろ、手をとって教えて貰えるなんて、幸せですわねえ、オホホホ……」

「まあまあ、お八重姐さん、ご丁寧なご紹介で恐れいます」

宮崎真理子と呼ばれた女の人は、首からずり落ちそうになる青大将を巻きあげながら、私たちの前へ立ちました。

「皆さん、生れたまんまの姿で、殿方の前へ立っている気持は、どうですか？ オホホ、とっても、嬉しそうですね。私は、今、お八重姐さんが言ったように、宮崎真理子っていう、ケチな女ですがね。それでも、ハルピンじゃ、自分で言うのは、おかしいんだが、
「マリーの」といって、暗闇街じゃ、ちいっとは売れた顔なんです。この間から、た

びたび、お八重姐さんから手伝いに来て欲しいって電話で口説かれましてね。はるばる、やってきたって訳なんですよ」

そう言って蛇を手を持ち、大坂夫人の前へニューツと突きだしたのでございます。

「きゃーっ」

不意をつかれた大坂夫人は、素頓狂な悲鳴をあげ、隣の高松夫人に、しがみつきます。夫人の派手な悲鳴につられて、それまで、思い思いに遊んでいたロシア軍の将校たちが、一斉に、こちらを向きました。

「ははは、奥さんは蛇が、お嫌いのようですわねえ。私にとっては、とっても可愛いペットなんですけれど、まあ、そのうちに、あなたも、これが可愛いくて、たまらなくなるでしょうよ。オホホホ……」

マリーさんの体に、まといついた蛇は、ズルズルと動きまわりながら、真赤な舌を出して、彼女の頬や首筋をペロペロとなめまわしています。それを如何にも可愛いんだ、というように、蛇の頭をなでて見せるのです。

長く描いた眉、どぎついアイシャドー、長いつけ睫、毒々しい程真っ赤な口紅。お化粧一つを見ても、陰のきつい、見るからに妖婦タイプでございます。ノーフレンチのブラウ

スからのぞく二の腕には、気味の悪い蝮の入れ墨が、チラチラ見えています。

「マリーさん、そんなことをしてないで、早く、なんで、あんたが、ここへ来たのか、説明してあげなさいよ」

お八重さんも蛇は苦手なんでしょう。蛇がとどかない所まで、後ずさりしていました。「それもそうねえ。じゃあ説明するわ。あのね、お八重姐さんは、私にとっては大先輩ですね。ハルピンにいた頃に、いろいろ世話になってんのよ。それがね、今度、あんた達に、なんだかんだと、教え込まなくっちゃ、ならないんだけど、一人で困ってるから、是非、助けてくれって、声をかけられたってわけなのよ。私もあっちゃ忙しい身体なんだけど折角の大姐御の頼みだから、こうして、やって来たんだよ。だから、頼まれた以上、ピシピシ仕込むわよ」

厳しい口調で言うのでございます。「お八重様。私たちに、いろいろ仕込むって言うのは、一体、何をでございますの？」

智恵子先生は、訊ねられました。

「ハハン、まだ、ピンとこないようだよ。マリーさん、もっと詳しく説明してやらなきゃあ、いけないようね」

「はいはい、わかりました。あのねえ、奥さん方。仕込むことってのはネ、いろんなショーのお稽古をするんですよ」

「ショーですって？」

「ええ、あんた達は敗戦国の奴隷でしょう。

奴隷は戦勝国のご主人を喜ばすためには、せ一杯の努力をしなければいけませんわ。そのために、あんた達の肉体を使って、楽しいショーのパーティを開いて、ご主人様に、ごらんに入れるんですよ」

「そのショーって、一体、どんなことをすれば、いいんですの？」

先生は、尚も不安そうに訊ねられます。

「智恵子先生、そんなことは、このマリーさんにまかせておけばいいのよ。マリーさんはその道のベテランなんだから、ショーのことについてだったら、どんなことでも知ってるわ。そのうちに、手をとって、親切に教えて呉れるから楽しみにしているんだね」

お八重さんが横から口を挟みました。

「そうねえ、お八重姐さん、この人達には、口でいくら言っても、わからないようね。早速、実地に教え込んでみましょうか」

マリーさんは、くると後を顧み、机の上に置いてあった将校たちが食べ残したバナナ

を手にしていました。

「ねえ、お八重さん、このバナナを使ったものなんか、面白いんじゃない？」

「いいじゃないの。久し振りに、マリーさんの調教ぶりを、とっくり見せて貰おうかね」

そう言いながら、お八重さんはロシア軍将校の所へ行き、何やら説明していましたが、やがてバナナを一房、持ってきました。

「マリーさん、ロシアの旦那方も、期待してるぞって、言ってるわよ。張りきって——」

「ふふふ、男って、日本人も朝鮮人も、満人もロシア人も、みんな一緒ね。女の体で変ったことをするって言うのが喜ぶんだから……。でも、旦那方に期待されてるって知ったら、このマリーも、腕によりを掛けなくっちゃあね。呼んで頂いた手土産がわりに、張り切って、ごらんに入れるわ」

「その調子よ。こいつらのことは構わないから、徹底的に仕込んでごらんよ」

「はいはい、かしこまりました」

おどけて言ってみせてから

「ちょいと、あんた。さっきは、随分、うれしそうな声を挙げてたけど、名前は、なんて言うのよ」

大坂夫人を指さしたのでございます。

「はい、大坂と申します」

大坂夫人は、直立不動の姿勢をとって答えました。

「ふん、大坂ねえ。年はいくつ？」

「はい、二十五でございます」

「じゃあ、もう結婚してるわねえ」

「はい」

「マリーさん、大坂はね、今、妊娠三カ月なのよ」

お八重さんが口ぞえをしました。

「じゃあ、あの方は、すべて経験済みっていうわけなのね。それじゃ丁度いいわ。あんた一寸、ここへ来てごらん」

手招きしました。大坂夫人が、おそろおそろ、前へ出ました。

「そのバナナを一本取って、皮をむきなさいな」

「はい」

大坂夫人は、言われた通りに、バナナを房から一本もぎとり、皮をむいたのでございます。すると、マリーさんは、にやにやと意味あり気に含み笑いしながら言うのです。

「それを、突っ込むのよ」

「ええっ？」

命令された大坂夫人は、一体、何のことや

らわからず、けげんな顔をして、マリーさんの顔を、まじまじと見詰めているのでした。

今まで騒いでいたロシア軍将校たちも、急に静かになり大坂夫人を見つめています。

「そのバナナの剥き身を、突っ込みなって、言ってるんだよ」

「えっ、突っ込むって、どこへですの？」

「にぶい女だねえ、女の体で、突っ込むって所は、ここしかないじゃないかっ」

マリーさんは、手に巻きついていていた蛇の頭で大坂夫人の前を指したのでございます。

「きゃーっ」

大坂夫人は上半身をのけぞらして、蛇の鎌首を避けながら甲高い悲鳴をあげました。

「ひいーっ、嫌でございます。そんなこと、

私には、とても、出来ませんわ」

「どうして……？」

「だってえ、そんな恥かしいこと、人様の前で、とても出来ませんわ。それに、固いでしょう。マリー様、どうか、お許しを……」

大坂夫人は顔を真青にして、全身をガタガタふるわせて哀願しています。

「結婚して、妊娠までしている女が、これくらいのが出来ないって、おかしいわ」

「でも、そんなこと、今までにしたことが、

ございませんもの……」

「当たり前だよ。だから、教えてあげるって、言ってるのさ。簡単なことなのよ。ただ、バナナを差し込むだけでいいんだからね」

「いやです、いやです。私には、絶対に、そんなことは出来ません。いやです」

大坂夫人は激しく首を振って、怖気づいたように拒絶しています。

「ハルピンで私が教えた女には、あんたみたいに、聞きわけのない女は、一人だっていなかったわよ」

「だって、だって。私には、そんな大それたことをする勇気なんか、ございませんわ」

「こんなやさしいことが、出来ないって、言うのね」

「はい、どうか、お許し下さいませ」

「どうしても、嫌だっていうのね」

「はい、マリー様、どうか、それだけは、お許しになって下さい」

「甘ったれるんじゃないよっ」

がらりとマリーさんの態度が変りました。その声の大きかったことと言ったら、傍にいた私たちでさえ、びっくりして飛び上ったほどでございます。哀願していた大坂夫人の頬で、バシッと大きな音がしました。

「この野郎っ、こちらが始めてだと思って、おとなしくしてりゃ、つけあがりくさって。

この蝮のマリーを見そこなうんじゃないよ。お前らみたいなトーシローになめられたんじゃない、これから先のしめしがつかねえ」

平手打ちを喰わしておいてから、大坂夫人を怒鳴りつけました。

「お八重姐さん、最初から、こんなことはしなくなかったんだけど。この野郎を、一発、ひどい目に合わせてもようござんすか。なんのかんと言って、言いわけをしやがる。このまま引きさがったんじゃ、わちきの気が済まないんでござんすよ」

「ああ、構わないって言うことよ。調教は、あなたにまかせてあるんだから、煮て喰おうと焼いて喰おうと、好きなようにおしよ」

「最初に、このマリーの調教方針を、ガアンと見せつけておかなくっちゃ、これから先、やりにくくて、しょうがねえや」

「そうそう、そりゃそうだわ。大体、この頃のこいつらと来たら甘やかし過ぎてんのよ。マリー、いい機会だわ。構わないから、徹底的に、しごいておやりよ。そうでないと、こいつらは、つけ上ってしまうんだから……」

「じゃあ、姐さん、済まないけど、こいつの

両手を縛って吊り、両足を大きく開かせておくれよ」

マリーさんは、残忍な笑みを浮かべながら体にまといついている蛇を撫でています。

「ねえ、マリー様、私が悪うございました。

あなたのおっしゃるように致しますから、どうか、お許し下さい」

大坂夫人は身をもんで泣き声で頼んでいますが、お八重さんは李さんにも手伝わせ、泣き喚く大坂夫人を殴りつけながら、見るまに両手首を揃えて縛りあげてしまいました。

そして、応接机の上に立たせ、縛った両手を天井から下っていた鉄の輪に括りつけてしまったのでございます。両脚は足首にロープを掛けて左右に無理矢理、大きくひろげ、ロープの端を机の両端の脚に固定してしまいました。丁度、ロシア軍将校の方へ向いて、高い壇上で女の内臓の奥まで見せるように両脚を思いきり大きくひろげ、両手を高々と挙げているような格好になったのでございます。

「止めて、止めて下さい。私、どんなことでもいたしますから、こんな格好だけは、お許し下さい。ああ……」

手足を縛られ、自由を全く失ってしまった大坂夫人は、泣きながら激しく、お尻を揺す

って、訴えています。

「ふふふ、大坂。今更、いくら喚いたって、もう遅いよ。このマリーを一度、怒らせたらどれぐらい恐ろしいか、とっくりと見せてやるからな」

マリーさんは如何にも憎々しげに、両手吊り開股縛りで泣き叫んでいる大坂夫人を見上げて、あざ笑うのでございました。そして私たちの方を向き、じろりと睨みつけました。

「これっ、あんた達っ。このマリー姐さんを甘く見ると承知しないよ。なめやがると、どんな目に会うか、今から、この女を徹底的にいたぶりつけてやるから、ようく、見ておくれだぜ、わかったな」

「はい」

私たちは恐ろしさに身をすくめました。

マリーさんは、体にまといついていた蛇を一匹ふりほどき床の上に置きました。

「ようく見ておきな。私の蛇使いの腕前は、ちょっと、そこいらでは見られない名人芸なんだからな」

傍に置いてあったハンドバッグを取り、中から万年筆ぐらいの太さの棒を取りだしました。その棒は金属製で折りたたみ式になっており、先を引っぱると、一メートルばかりの

長さになったのでございます。棒の先端には白い小さな球がついています。マリーさんは今度は薬のチューブを取り出し、その白い球へ、どろりとしたクリーム状のものを塗りつけたのでございます。

「今から、面白いスネーク・ダンスを見せてやるからね」

マリーが言いますと、お八重さんがロシア軍将校たちに通訳します。将校たちはドツと手を叩き口々に何か叫んでいます。

「大坂、お前も、よく見ておくんだよ。後から、たっぷり可愛がってやるからね」

マリーさんは、棒を床に這っている蛇の頭の上に構えました。

「ほらほら、可愛い蛇さん。そらっ、立つのよ」

と言いながら、棒を少し宛、上へあげますと、床に長くなっていった蛇が、ぐいと鎌首を持ちあげ、徐々に体を伸ばしてゆきました。

「おお、よく出来たわねえ。私の言うことをよくきく点では、人間より、あんたの方が、遙かに上だわねえ」

棒の先を上げたり下げたり、左へやったり右へ回したりすると、あらあら不思議、蛇は鎌首をもち上げたまま、まるでダンスをする

ように体を動かします。

「そうそう、とっても、よく出来たわ。じゃあ、ご褒美をあげましょうね。さあ、蛇ちゃん、この先を舐めてごらん」

鎌首を持ちあげた蛇の鼻先で、棒の先の白い球をチラチラさせますと、蛇は首を振りながら、ペロペロと真っ赤な舌を出して、球の先に塗ってあるクリームを舐めるのでした。

「お利口なこと。じゃあ、次は、おねんねするのよ。はい、長くなって床に寝るのよ」

棒の先の白い球を床の上に、すりつけるように置くと、首を持ち上げていた青大将は、ぱったりと床に長々と伸び、一本の縄のようになりました。

「よしよし、今日は、とっても、よく言うことをきくわね。じゃ、次はジャンプよ」

さっと棒を上へ振りあげますと、蛇は野ねずみを見つけた時のように、ピューッと斜め上へ跳躍したのでございます。

「マリーさん、あんた、相変らず、蛇使いの腕は見事なものねえ」

お八重さんは感心しきったように言いました。ガガリニコフ情報中尉も、感歎したような声を挙げています。私たちも、マリーさんの素晴らしい蛇の操りぶりに、恐ろしさも忘

れて、じいっと見入っておりました。

「でもね、こんなのは、まだ序の口ですわ」
自慢の鼻をうごめかしながら、尚も蛇を操ってみせるのでした。手が右へ動けば蛇もまた右へ行き、走れと合図すれば、スルスルと前へ進みます。中でも見事だったのは、二度

三度と、続けて全身を宙に跳ね躍らせるダンスを見せた時でした。その時は、将校たちだけでなく、私たちでさえ、思わず手を叩いておりました。

「さあ、大坂。とっくりと見たらどうねえ。今から、この蛇を使って、たっぷり、楽しい思いをさせてあげるからね」

操っていた蛇を取り上げると、自分の首に巻きつけてしまいました。そして、別の五、六十センチばかりの小さな蛇を体からはずしました。

「まあ、最初のことだから、この小さい奴で勘弁してやろうかねえ」

「ひえーっ、蛇、蛇を、どうなさるのっ？」
大坂夫人は、はっと我に返り、魂切るような悲鳴を挙げました。

「はっはは、この可愛い蛇ちゃんを、あんたに巻きつかそうっていうのさ」

わざと大坂夫人の鼻先に蛇の首をつきつけ

僕のイメージ画集 『ドッグショー・プログラム』 室井亜砂路

ヤ回 奴隷妻

牝犬コンテスト

南会の辞

健康診断

吠声くらべ

ポーズ

忠実度

珍芸

ムチ打ち忍耐度

排泄実演

審査結果発表

表彰式

南会の辞

(参加者)
紀川夫妻・土田夫妻・伊勢夫妻
青木夫妻・三浦夫妻・早坂夫妻
佐野夫妻・山本夫妻・南夫妻
増田夫妻・岡谷夫妻・安井夫妻
渡部夫妻・長谷田夫妻・中津夫妻
小竹夫妻・田宮夫妻
(順不同)



るのです。

「いや、いや。怖いわ、勘忍……」

必死になって、狂ったように全身の力をこめて体を激しく揺すります。

「ふふふ、大層、お困りのようねえ」

「許して。ねえ、私、どんな事でもいたしま

すから、許して。智恵子先生、山口さん。あなた達からも、お願いしてみてっ」

「いくら喚いたって、このマリーが、一旦、決心した以上は、絶対に許さないわよっ」

「そ、そんな事言わないで、許して下さい。マリー様っ、お願いっ。おおお……」

大坂夫人が大声で泣き喚いているのを見た李さんが声を出しました。

「コノ女、往生ギワノ悪イ奴ダ。イツマデモギヤアギヤア、騒グナッ」

言いさま、鞭をふりおろしました。

「ひいーっ」

皮の撓やかな長い鞭は、大坂夫人の豊かな臀部に、小気味よい音を立てたかと思うと、二重三重に巻きつき、喰い込みます。大坂夫人は絶叫を挙げ、不自由な体をくねらせて、必死に痛みを耐えています。マリーさんは、そんな李さんを手で制してたしなめました。

「李さん、いいのよ。私って、こんな風に怖がって、泣き叫んでいる顔を見るのが、とっても好きな女なのよ。さて、皆さん。お待ちかねのようだから、ぼつぼつ始めようかね」

言いながら、手にした蛇を、さっと大坂夫人の足首に、からませたのでございます。

「きゃーっ」

大坂夫人は、切り裂くような悲鳴と共に、大きくひろげていた両脚を硬直させました。

「や、やめてっ」

夫人は吊られた手を激しく揺さぶり、天井を仰いで号泣します。それを見ていたマリさんは、いよいよ面白くなったという風に、にたにた、笑っているのです。

「駄目だわねえ。これ位で怖がってちゃ。今に、もっともっと、面白いことをしてあげるのよ。それに、あんた、私のすることを、じっと見ていなきゃ駄目じゃないの。折角のお仕置が効果があがらないわ」

私達の方へ、じろりと視線を走らせたマリさんは、私を手招きしました。

「あんた、机の上へあがって、大坂の頭を下へ向けさせておきな。そして目を開いて見ているかどうか、監視してるのよ」

私は狼に狙われた小羊のように、否応なしに机の上にあがり、大坂夫人のうしろに回ると頭を押えつけておりました。

「晶子さん、せめて、それだけは……」

「奥さま、ごめんなさい。晶子だって、こんなことは、したくないんですのよ」

私にとっても、こんなことをするのは、それはそれは、辛うございました。でも、今嫌だなんて言ったら、それこそ、どんな苛酷な懲罰が待っていることでしょう。

「奥さま、晶子だって、本当に辛いのでございますわよ。でも、こうしなくちゃ。ねえ、わかって頂けますでしょう、奥さま」

私も血を吐く思いでございました。

「いや、いやっ、マリ様。もう、お止めになって下さい。お願いですっ」

蛇は棒の指図通りに、大坂夫人の足首から徐々に上へあがってゆきます。

「ひゃあ——、怖い、怖いわあ」

じいっと見ていた李さんは、大坂夫人が目を閉じているのを目ざとく見つけました。

「コラッ、大坂、目ヲツブツテチャ駄目じゃないか。晶子、オ前ハ、ナニヲシテイル。ナマケテイルト承知シナイゾ」

怒声をあげました。私も懸命です。

「奥様、どうか目を開けて下さいまし」

「だってえ、晶子さん、私、怖いよ。とっても気持ち悪くて、見てられないわ」

「でも、目を開けていないと、また叱られますわよ」

「私、蛇っていったら、小さい時から、名前をきくだけでも身ぶるいする位だったの。それなのに、こんなに足に這わせるなんて……」

「奥様、しばらくの辛抱でございますわ。ねえ、だから、我慢なさって。ねえ、奥様、目

を開けて、じっと下を見るのですよ」

ロシア軍将校たちも、かたずをのんで、マリさんの操る棒の先の白い球の行方を目で追っています。蛇は妖しく舌なめずりしながら、ズルズルと、大坂夫人の雪のように白くて、ぼつてりと肉づきのよい太腿を徐々に、せりあがってゆくのでした。

「ほらほら、私の可愛い小蛇ちゃん、新しい女の味はどうですか？」

白い球を上げたり下げたりして、蛇を自由自在に操るマリさんの手並みは鮮かです。

蛇は白い球につられて、もう腿の付根の所まであがってまいりました。

「ひいーっ、もういやっ、止めてえ」

その時の大坂夫人は物凄い力でございました。お尻を無我夢中で振るたびに、後にいた私は、跳ねとばされそうになるのです。

「大坂さま、余り、お暴れにならないで。私机の上から落とされそうになりますわ」

「だってえ、だってえ、蛇が、私の……下腹の……所まで来ているのよお」

「奥様、そんなに、お身体を、お振りにならないで——」

「ひゃあー、見て、見て。蛇が、私の……ほら、こんな……所まで来てるのよー」

「はははは、大坂。いくら喚いたって、お尻を振ったって、それは無駄だよ。お前の体に巻きついてる蛇には、何の役にも立たないよ。それよりも、動く興奮して、かえって喰いつくかも知れないよ」

マリーさんは意地の悪い笑みを浮かべながら、大坂夫人の腿のつけ根あたりで、その小蛇を遊ばせています。

「お、よしよし、小蛇ちゃん、中々上手に出来ましたわねえ。じゃあ、ご褒美に、あなたの大好きな所を味あわせてあげようね」

ポケットから、さっきの薬のチューブを取り出し、指先に絞り出しました。

「さあ、みんな、よく見るんだよ。蛇は穴に潜るのが好きなんだけど、今日の所は最初だから、入口の所まで勘弁してやる。今度あたいの言う事をきかなかった奴は、子宮の奥にまで蛇を突っ込んでやるからね。そのつもりで覚悟しておくんだな」

そう言いながら、両脚を左右に大きく開かされている大坂夫人の神祕の森附近に、べつとりと指の薬を塗りつけたのでございます。

「きゃーっ、な、なにをなさるのよ。マリー様、ひどいわ、ひどいわ。そんなことをなさるなんて……。ひいーっ、許して……」

「ふっふふ、だから、今日は入口だけと言っただろ？ さあ、小蛇ちゃん、これから、いいものをあげるよ。嬉しいでしょう」

マリーさんは淫虐な目を光らせて、白い球を腿の付け根から次第に次第に、上へあげてゆくのでございました。

「お八重姐さん、この女が、目をはっきり開けているか、どうか、しっかり見張っていて下さいな」

「ええ、いいわ。マリーさん、しっかりやるのよ。頑張ってる」

「まかしといて……」
お八重さんは机の下から大坂夫人を見上げるように監視しています。

「きゃーっ、怖いっ、もう、蛇が、そこまで来ているのよ。誰か、助けて……」

大坂夫人は凄い汗です。噴きだす脂汗で、体は、べつとりと濡れています。もう、さっきから、何度も何度も、大声をあげて絶叫し続けているので声も哽れてきています。

私は余りの無惨さに、目をそむけながら、大坂夫人の頭を押えつける真似だけをしていましたら、下から見上げていた、お八重さんに見つけられてしまい、太腿を、思いきり抓られてしまいました。

「こらっ、晶子、お前まで、目をつむることはないだろう。もっと真面目に言われた通りやらないか。それとも、お前も、こんなに、してほしいのかいっ」

「は、はい、悪うございました」

私も、もう泣いておりました。蛇は、ギリギリ……と、薬を塗りつけた中心部へと近づいてゆきました。

「さあ、小蛇ちゃん。今日は入口だけで我慢するのよ。その代り、次には、たっぷり、女の味を味あわせてあげますからね」

マリーさんの差し出す棒の先の白い球は、ぐるぐる神祕の森の上で円を描いていましたが、さっと、振り下されたのです。

「それっ、小蛇ちゃん、飛びつくのよ」と――、蛇は矢のように跳躍しました。

「ひゃあーっ、助けてえ」

大坂夫人は、断末魔の絶叫をあげ、一瞬、四肢を硬直させたかと思うと、次の瞬間、口から泡を噴き出して、首をがっくりと落し、全身の力を抜いてしまったのでございます。

「ふふふ、とうとう参ってしまったようね」

マリーさんは、蛇に大坂夫人のクリームをペチャペチャ舐めさせながら、悪魔のような薄ら笑いを洩らすのでございました。

カット・マエダヒオミ



☆浣腸病患者の告白

私は結婚が恐ろしい

——竹 迫 誠 也——

男性に映るらしい。

処が、私をして結婚を遅らせている理由は私が人一倍、浣腸好きである事だ。上司や知人も結婚話に、よい返事をしないので「君は隠れた好きな人でもいるのか」と感ずること

さえある。しかし、これ等、私の事を心配してくれる親切で善良な人々に、まさか「浣腸が好きだから」とは、たとえ口が裂けても言えることではない。

見合したうちの数人の女性は、むしろセックスを許すような態度に出る事さえあった。たしかに、モータールまで行き体を惜しげもなく開いてくれた女性もいた。しかし、私が求める口は前の方ではなく、後の方なのだ。

お互いにセックスするような体位になりながらも、私の指は自然と彼女のアヌスを愛撫

しているのだ。他の男性ならば乳房を、或は乳首を口にふくみながら、徐々に右手をくびれた腹の方へ、そして思わず手が届いたようなフリで、彼女のVのあたりを、ゆっくり愛撫するのが常である。

結婚を前提として、何のためらいもなく体を開いてくれた彼女も、このようなセックス過程を想像していたのであろうが、私の中指が、或は人差指が、想像の場所とは全く逆のアヌスを撫でると、あっと驚くのも無理もない事だ。

今迄の殆どの女性が、「イヤッ、そんなこと駄目。イヤッッッッ、駄目、駄目ッ」と思わず、わめいて、ガバツと起き上るのだ。こうなると、女性として燃えようとしていた体が水をぶっかけたように冷たくなり、「そん

私は二十八才、俗にいう男の結婚適齢期。上司の課長や部長は勿論のこと、周囲の知人関係も色々心配してくれ、嫁の話を持って来てくれるので、人情の厚さを感じさせる。

一流企業ではないにしても、上場会社に勤めるバリバリの営業マン。一メートル八十二センチ、体重六十六キロと適度な体格。一ツ橋大学の経済出。ピンはダンスからキリはゴルフまでたしなむ私に、結婚話が多くあるのは当然であろう。見合も七回。いわゆるハタから見れば、一応、現代ッ子らしい素晴らしい

な変な事をする人、ワタシ知らない。貴男とは、何もなかったとして私、これで帰りますッ」と、身づくろいもあわただしく帰っていった女性が何人かいた。私のアヌス責めは完全に失敗に帰してしまった。

間にしつかりした仲人をたて、見合いとしては極めて真面目に、しかも当人同士、この人となら一生を共にして、とまでという感情が湧き、正に万々才の過程をたどっていたのが、例の浣腸ぐせのため、あたたら良縁が吹飛んでしまった事が何回あっただろうか。

またダンスで、或はゴルフで知り合った良家の子女（と思われる）と、お互いに交際し「ワタシの得意の田楽煮を貴男に食べさせたわ」と言って、喜々として、私のアパート（二部屋、バストイレ付、家賃三万千円）に来て、「アラ、男性の部屋にしては割に男臭くないわネ。貴男の真面目さが胸に伝って来るようだワ」と、男性の部屋を訪ねた事は始めてといて、狭い部屋をハミングしながら楽しそうに手にふれる無心の彼女——。

その手のふれた洋服タンスの引き出しに、いちじく浣腸をはじめ、百CC浣腸器、二百CC浣腸器、二千CCイルリガートル、エネ

マシリンジ、アヌス栓、腔開口器、15号カテーテル、食酢、グリセリン液、ドナン……等々。何時でも浣腸が出来るようにと、アテネ上野店、パラダイス北欧、クライマックス等で買ってきた色々なアヌス用品が、ぎっしり詰まっている事は彼女は想像だにしない。

そして彼女が炊事場で得意な田楽煮をつくってくる間に、こっそりと、いちじく浣腸の栓を抜いて、いつでもスグ浣腸ができるようにと、座ブトンの下にひそませ、彼女が体を許してもよいと、恐らく心にきめているような仕草を食事の時にも匂わせ、また、二人で肩を寄せ合ってテレビをみている時も、私の愛撫を待つような風情なので、ささやきながらロツケするのも時間の問題——。

お互いに若い体が燃え始め、なんの抵抗もなく、最後のパンティもスリと脱げ、あとは厳粛な瞬間を待つのみ。しっかりと抱擁し合っている時、私の手は座ブトンの下にひそませていた、いちじく浣腸を、そろりと取り上げ、彼女の親にも見せた事のないキューツとしまったアヌスに一挙に注入する。

その頃になると、燃え始めていた彼女も、コトの意外な展開に一瞬とまどい、「ネエ、

何か変だわ。貴男、何をしたの」「いいや、何もしないよ。君が余り可愛いので、ボクも夢中で何か、わからないんだよ」とか何とか、うまく言い逃れはしたものの、暫くして彼女の腹の中に、言うに言えない異常感が突如として襲って来る。

「アラッ、貴男、何かしたワネ。イヤッ！ 変だワ、イヤーダッ。そんな事イヤヨ。どうしよう。まア、イヤヨ、駄目ッ……」とか何とか、色々な事を呟く彼女も、愈々激しく迫って来た便意は、どうしようもなく、恥をしのんでトイレへ、かけ込むのである。

「貴男って、変態ダワ。もう、おつき合いするのいやヨ」と、そそくさと帰る彼女も何人かいた。彼女たちからみると、有望株をつかんだと喜び、素敵な（外面だけの）男性と結婚出来ると信じていただけに、意外な一面私のアヌス責めと浣腸趣味を知って、気も動てんさせた事は無理もない事だ。

外見はガッチリとした体格で、心はやさしい。しかも上司にも評判のよい猛烈営業マンの私に、まさか浣腸気があるとは、誰でも予想さえ出来ないだろう。それだけに、特に結婚の相手として、心にまで決めた女性からみ

ると、私の浣腸グセは何ものにも勝るショックであったのだろう。何人かの女性が「貴男の顔を見るのもイヤッ、二度と見たくない」と言った気持が判る気がする。

私には、五年來つきあっているというよりか、浣腸づきあいをしている女性がいる。だが、彼女とは、あくまでも浣腸づきあい、結婚なんて、お互いに口にもしない。「貴男は、いつ結婚してもいいわヨ。でも、私との浣腸だけは続けてネ」と、全く浣腸妾として割り切っているのだ。お互いに、なんのわだかまりもなく、週休の土曜日から日曜にかけて体がクタクタになるまで、色んな浣腸プレイに耽溺するのだ。前記の様々な浣腸用品はその為のものである。

この浣腸を無二の楽しみにしている私に、再び見合の話が持ち上り、去る十月十日の祭日、見合をした。現在、大妻女子大に在学中の二十二才になる才媛との事。しかし、私が一見した処では、才媛といった高ぶった処がなく、桜田淳子を少し大人にしたような明るい現代っ子らしい雰囲気、得意が漬物づくりと言うのも、母親の躰の良さというものが感じられて好感が持てた。

ゴルフの話からテレビ番組の話など、他愛のない会話を交わしたが、その間、私の頭には、彼女のあのふくらとした臀部に、二百CC浣腸器で浣腸したら、どんな顔で「トイレへ行かせて」と哀願するのだろうかなどと想像してみる。そして、彼女のアヌスは、どんな形をしているだろうか。彼女のチマチマしたアヌスに、一口ソーセージを挿入したら、どうだろうか等々、会話とは思いつかない空想が次々と頭をかすめていった。

彼女全体の姿体から見て、正に浣腸向きのムードを持っているのにゾッコン参った事は言う迄もない。色白で、爪には今はやりのマニキュアさえせず、なんの飾り気もない、紺とクリーム色のツートンカラーのツーピースを楚々として着こなし、話をしてる間の大部分、下を向いているような、今どき珍しい淑やかな女性と思った。

こういった女性こそ、浣腸してヒーヒー言わせる事は、私の夢でもあった。しかし、浣腸をしたら恐らく彼女も、私の悪癖に驚いて破談する事は間違いないだろう。彼女だけは浣腸しないように出来るだろう。いや、彼女という宝玉を得る為には浣腸は絶対駄目だ。

もし浣腸病が起きたら、五年來続けている浣腸妾にぶっつけければよいではないか、と、つい勝手な事を考えてしまう。

私も二十八才。今迄、何回となく見合し、且つ、つき合ってきた多くの女性より、遥かにすぐれている彼女を、どうしても得たい。しかし、当初は、彼女に浣腸する事は我慢できても、日夜床を共にしている間、私の人差し指が或は中指が、自分の意志とは逆に、自然に彼女のアヌスをまさぐるのではなからうかと、危惧する。

彼女にだけは浣腸をしてはいけない。彼女を浣腸妻にしてしまっただけではない。という強い意志が起ってくる反面、だからこそ、彼女を何としても押えつけ、猿ぐつわを、かまして、グリセリンとドナンの強烈な浣腸液で責めてみたいという気持が、私の心を悪魔のように占めている。

嗚呼、私は是非、彼女と結婚したい。しかし、私の体の中に同居している浣腸気が恐ろしい。私は結婚すべきだろうか。

十月二十四日、午後一時四十八分
東京駅八重洲地下街喫茶「バリ」にて

竹迫誠也記す。



——とき子の自縛——

縛り方教室

山口とき子

一、縛り方と解き方

前回の自縛教室では、私のつたない体験をもとにして自分で自分の身体を縛る方法を、発表させていただきました。“こうしたらもっと楽に”、“こうしたらもっと完全に、と、いろいろな手順を考えながら縄を巻きつけては解き、解いてはまた巻いたりして、なんとか自分でも満足する緊縛を、自分の身体にすることができるようになりました。

自分の身体を縛ることに苦勞するなんて、正常な人からみれば正に異常なことですが、

一旦、自縛の魅力にとりつかれてしまうと、限りなく欲が出てなかなか満足できません。

私の自縛の最終の目標は、他人に縛られるのと全く同じ状態にすることに、ほかなりません。それがためには、よく手順を考えながら無駄のないように縄を掛けていかねばなりません。それに、その時々縛られ方によって“まず、ここを縛って、次に縄の輪を作って……”と計画的にしないと、一旦縛ったところをまた解いて違う箇所を縛ってから前の所を縛るという無駄が生じます。それに私が再三、書いております“ほどけなくなる危険”

も頭に置かねばなりません。他人に縛られたと同じように縛り、しかも最後には自分で解ける縛り方を完成させなければなりません。身体に巻きつけた縄が、十分ぐらいで解ける程度、三十分ぐらいかかる場合、一時間以上の場合など、いろいろ考え、その時の状況に合わせて縛り方も決める必要があります。

二人のプレイであっても同じことが言えますが、使用する縄の数、縛り方、その強弱によって、解ける時間に違いがあるのは当然です。一本の縄で、足首から膝から胸まで、ぐるぐる巻きに縛ったといったでしょう。最後

の結び目を解くの、どのくらい時間がかかるかによりますが、それさえ解ければ、あとはパラッと全部の縄は解けます。それが短くとも、一カ所を一本の縄で縛るという方法で丁寧に縛った場合や、上半身でも、ぐるぐる巻きではなく、脇のところで一つ一つ、結び目を作る方法で縛った場合には、縄の数や結び目の数に比例して、解く労力は倍になります。

さらに、解く作業の難易を左右する最も大きな要素は、矢張り後手の縛り方です。他をいくら丁寧に縛っても、両手が自由なら、その時間は、かかりませんが、後手から脱する時間が長い程、苦勞も多いといえます。

いずれにしても、その時と場合によって、いろいろと加減をしなければなりません。前に書きましたように、一本の縄で全身を、ぐるぐる巻きに縛る方法は、縛り終えた時は、かなりの緊縛感がありますが、そのうちに一カ所でも緩んでくると全体の縄がたるんで、なにか締まりがなくなつて、がっかりしてしまいます。その点では、自縛教室でも書きましたように、「亀甲縛り」というのは一本の縄の数カ所に結び目を作って首から股間に廻し、首の後ろで、それを通し、さらに、その

縄を左右に振り分けて、二の腕から胸にかけて亀甲型に縛っていく方法ですが、出来上ると相当の緊縛感があり、私の好きな縛り方の一つですが、その割には使う縄の本数が二、三本ですので、一カ所を解くと全体が解ける良さがありません。

その他でも「縛る」と「解く」との関係では、いろいろと細かいところに注意せねばなりません。縛っているときは夢中ですので、知らぬうちに相当に無理をしてしまうようとして、両手を狭い輪の中に突込んだりすると、いざ解くときに大変苦勞したり、さらに思いもかけないトラブルが起つたりします。

私の経験から一番、恐いのは、腕から後手がしびれてくることで、これは腕の縛り方の強さに関係してくるようです。よく正座をしていると足がしびれて、何か自分の足でないような感じになりますが、それと同じように感覚がなくなると、いくら、焦っても駄目です。なんとか腕の縄を、ずらして血行を良くし、しびれを直すはかありません。そんなことから失敗した直後は、万一の場合を考えてなるべく近くにナイフとか、はさみを置くことにしていますが、二、三回、無事に終ると、その用意も、しなくなり、また後悔する

ことになるのです。また、上半身だけの縛りでは行動の自由がありますので気が楽ですが足まで縛って解けなくなると、とても不安になります。そのような不安も心理的に興奮の種となつたりして、私はなんて我が儘な女なのでしょう。

二、後手縛り

(一) 前回の「自縛教室」でも、後手の縛り方については可成りくわしく図解して、ご説明しました。しかし、なんといっても後手縛りは自縛の最大のポイントでもありますので若干重複する点もあるかもしれませんが、気のついたことを書いてみました。

両手を除いた部分は、どんなところでも、どんなに厳しくても、まず普通の体格の人なら自縛することは容易です。ただ、どんなものでも全く初めての場合は、なかなかうまくいかないことがあります。特に二の腕を胸と一緒に巻く分ってきます。特に二の腕を胸と一緒に巻き締めるのは、ちょっと練習がいると思います。私は和服の帯を締める要領で、最初はゆるく縄掛けしてから、両手で引張って締めする方法（前回図解しました）を、とっていますが、むしろかきつけられ縄の一方をタンスの取

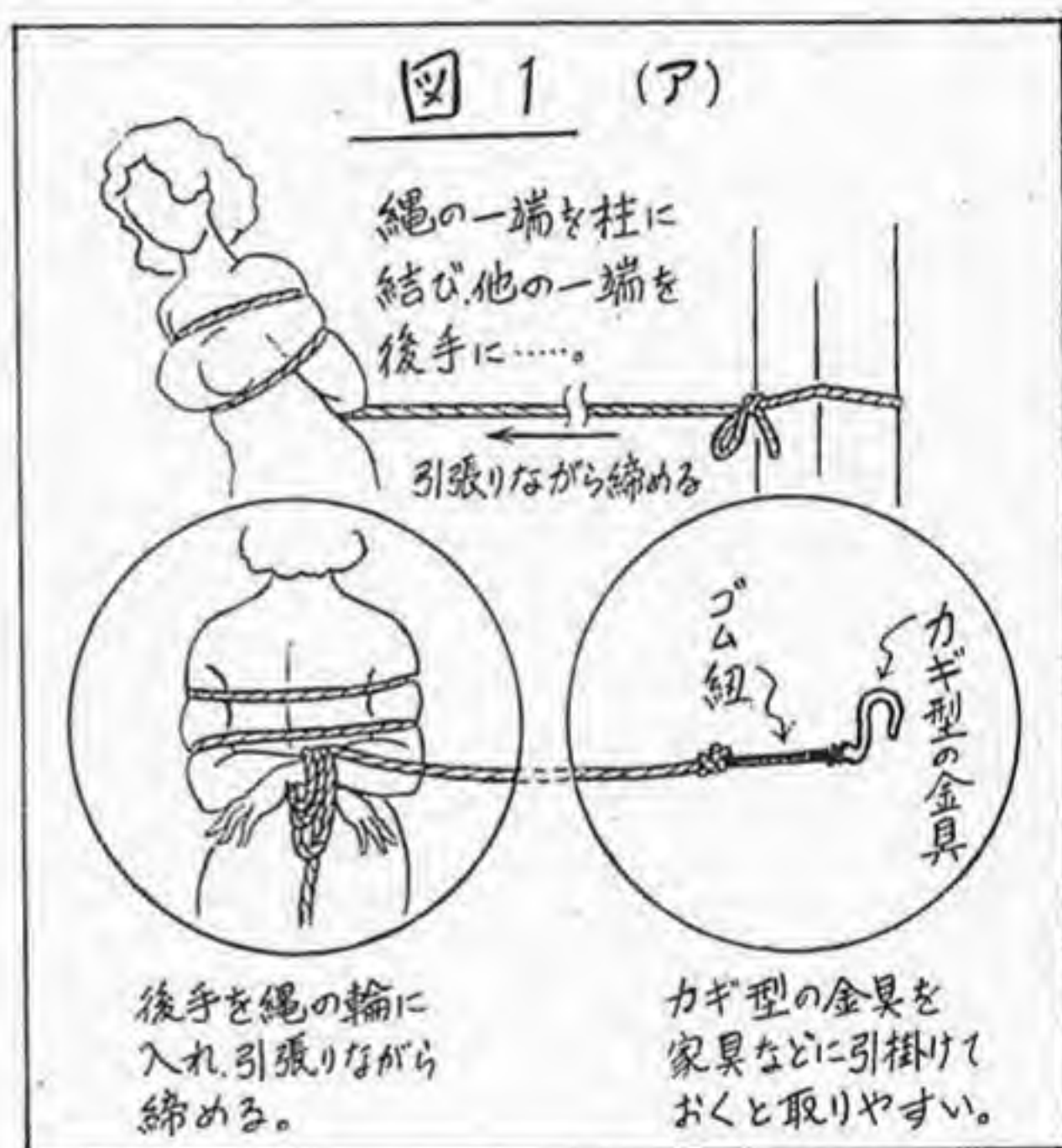
手にでも引掛けて、他端を身体に縛り、ぴーんと縄を張りながら腕もろとも身体に巻きつけていっても、それだけではできません。

乳房の上下にでも縄掛けして、手を後ろに組んで鏡をのぞき込むと、縛られ姿のようには見えますが、勿論それでは満足できないのは当然です。全く初めてなら別として、段々に自縛の魔力に取りつかれてくると、ただ型だけというのは写真を撮るのならともかく、悦虐の面からは完全な拘束が要求されてまいります。

その点では、いくら他の部分を厳重に縄掛けしても、結局は後手の縛りとなるのです。前手縛りも、たまには変化があつて、よろしいのですが、矢張り、後ろに廻した両手首が背に高々と吊り上げられて胸が、ぐっと前に突き出るような、いわゆる高手小

手という縛り方が最高ですし、私の自縛教室が到達しようとしている最大目標なのです。そうは言っても、なかなか容易ではありません。時々これが自縛の限界なのかも、と思ったり、矢張りパートナーに縛ってもらわなければ……などと考えたり。

後手縛りについて前回で説明した方法は、



首、又は胸に縄の一端を結びつけてから、その縄で、西部劇にでてくる投縄の束のように何重かに縄の輪を作り、後ろに廻した両手首をその輪の中にこじ入れて、指先を使って縄を引張りながら締める方法でした。そうすると、一端が首などに固定されているので、輪の大きさが小さくなるにつれて、両手首は合わさったまま締まる理屈になります。十分に締めたら、余った縄を胸に巻いてある縄とかときには足首に縛ってある縄などを通して適

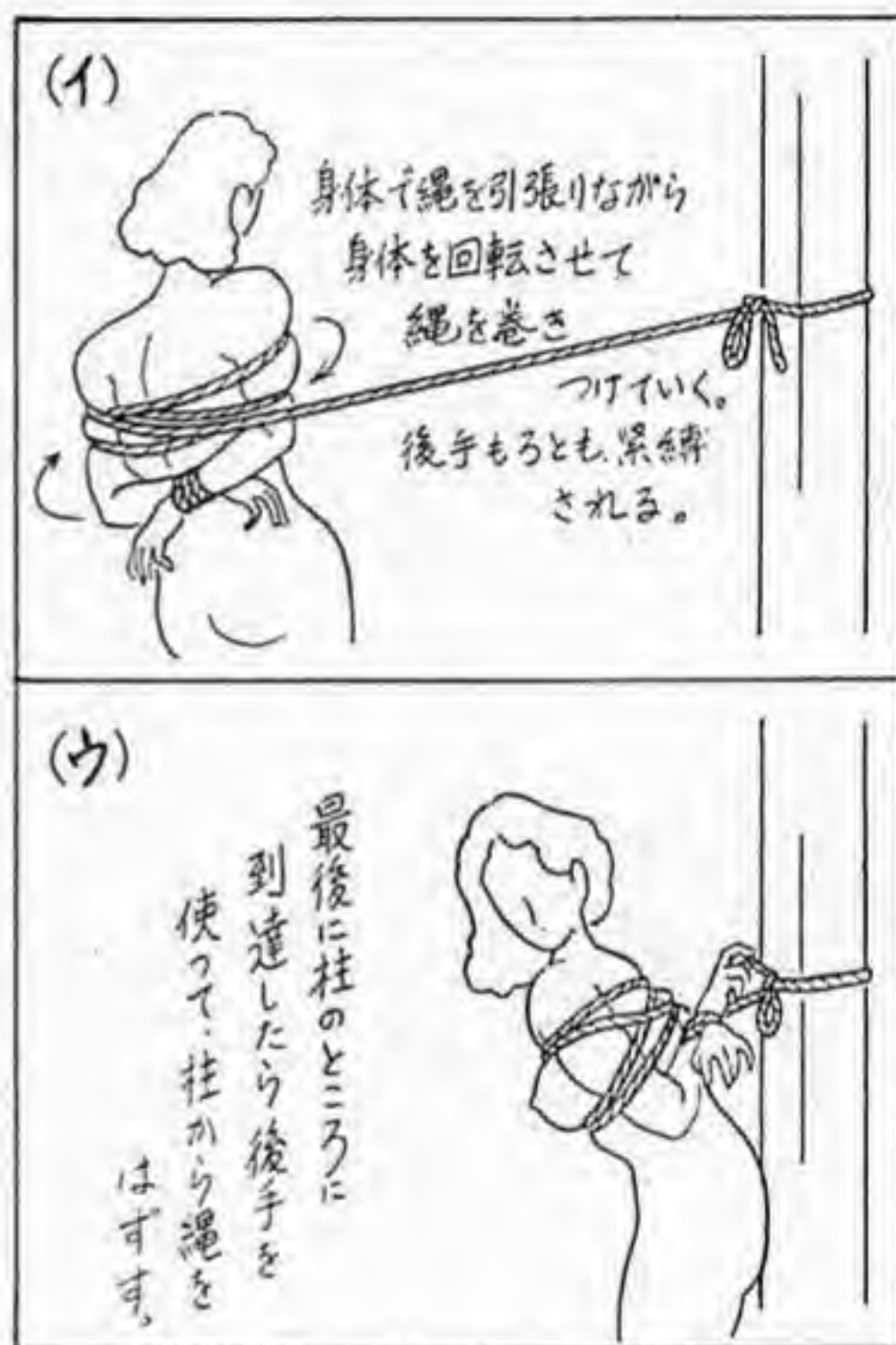
当に引張り、また通してというふうには繰返して、最後にどこかの部分にでも結んでおきます。これらを、縛られた後手の指でやることになります。確かに慣れるまでは大変ですが、その道の好きな人であれば、すぐ上手にでき、締めつけ具合によって、他人に縛られるのと全く変わりありません。最初に縄の一端を自分の身体どこかに結んでおく代りに、柱とか家具に結びつけ、もう一端を片方の手首に結び、同じ要領で輪を作り、背後に廻した手首を入れて、柱につないである縄を身体全体を使って引張りながら、後手首の輪を締める方法もあります。

後手が厳しく締まったら、身体を回転させて縄を強く引張りながら、腕もろとも乳房の上下や首に巻きつけていきます。この方法は、後手の締め方は勿論、肉がくびれる程の緊縛が容易にできます。ただ、最後に柱のところまで身体を回転させていったときに、柱の結び目を、うまく解くのが、むずかしいのです。身体に縄を巻きつけたまま、柱にながれた気持で立っているだけならよいのですが、柱の結び目を解き、その解いた縄を身体どこかに留めることが、上半身の緊縛が

強いので、なかなか、むずかしいのです。ぐるぐる身体を廻し、それにつれて上半身が後手もろとも縛られていって、最後に、いざ柱から縄をはずそうとしても、その結び目が身体の前면에あったりすると、後手では届きません。そうかといって、或程度、余裕をつくって柱から縄をはずすと、緊縛がゆるんでしまう、おそれがあります。

そこで私は工夫して、普通の縄

の一端に三十センチぐらいの長さの、ゴム紐（なるべく太いもの）を継ぎ、そのゴム紐を柱に結んでおく方法を考えました。そうすると、ゴムの弾力によって柱の結び目に後手が届くようにできるのです。更に後手で柱の結び目を解くのが、なかなか大変ですので、ゴム紐の先にカギ型の金具を取りつけて家具のどこかに引掛けておき、容易に、はずせるようにしました。これは、はずした後は、それを身体の他の部分の縄に引掛けておくこともできるので、とても便利です。身体には、あらかじめ縦横に縄が掛けてありますので、なるべく縦の縄に引掛けると、ゆるみませんし



ブラジャーの吊り紐やバンドの部分にかけておいても、よいでしょう。（図一）

（ロ）後手縛りの方法は、まだいろいろと考えられると思いますが、要は背後に廻した両手首が組合され、少々のことでは緩まないということ。さらに欲をいえば、その後手が、できるだけ首筋の方へ高く吊り上っている状態にすることができればよいのです。後手の縄が緩まないようにするためには、そこを固結びにするのが一番よいのですが、なかなかそこまではできません。しかし、これも思い切って強引にやれば、ある程度、できます。私の方法ですと、後手が十分に締まったら、

余った縄を首から縦にきている縄に通して二、三回、結びます。（図二）

また、指先を使って作業するのが不得意な人は次の方法をためしてください。

まず縄の真中あたりに何重かの輪を作り、でき上ったら、それを軽く一重結びにしておきます。それを畳の上に置き、一方の端を柱に結び、他の端を自分の足首に結びます。後手になって両手首を輪の中に入れたら、身体を柱から離れる方向に身体と足をつかって引張ります。柱から足首に連結してある縄は引張られて後手首を締め、最後は一重結びが、その上を締めることになります。

前にお話したように、単に縄の輪の中に両手首を突込んで締めるのと、あらかじめ一重結びを作っておいて、それを締めるのとの違いですが、一重であっても結び目を作っておくと、それだけ、緩まないことになりました。あとは後手で柱の縄を解いて適当に処理するか、そのまま柱に繋がれた状態のままにするか、どちらでもよいです。（図三）

どのような縛り方であっても後手縛りは自縛の最大のポイントですので、練習に練習を重ね、ここを思うように縛ることができれば

自縛の九割は成功したといえましょう。

三、いろいろな縛り方

身体と両手両足の縛り方の基本的なことは前回、ご説明しましたし、亀甲縛りについても書きましたので、今回はそれ以外の変型の縛りについてお話しします。

(1) えび縛り

いわゆる海老責めという縛り方ですが、まず、男の人のように、あぐらを組んで座ります。組んだ両足首を縛りますが、太ももを合せて縛るわけにはいきませんので、ももの方まで縛りたいときは別々に、ももに縄を強く巻きつけます。足首を縛ったら、その縄は少し余分に残しておきます。次に上半身に縄を巻きます。これは今まで話しましたように、自分の好きな縛り方をします。足首を縛ってから、上半身を縛るのが、やりにくい場合には順序を逆にして、上半身の縄がけをしてから座って、足首を縛ります。そこまでやったら、足首を縛った縄の余分を首に廻し、できるだけ身体を足首の方にかがめて、それを首の後ろか、又は前方に戻して足首に結びつけます。この段階では両手が、まだ自由です。で、なんとかやれると思います。上半身を



縛るときに、二の腕まで嚴重に搦めていると縄を首に廻したりする仕事に苦勞します。また、普通でも、なかなか顔が足首につくようにはまいりませんし、特に自縛の場合は、そこまでは無理ですが、それでも十纏か二十纏ぐらいの間隔までは十分、接近できると思います。縛り終えると首に廻した縄が、とても痛く、できればハイネックのセーターのようなものを着ていた方が無難です。

ここまでやると、時間が経つ程、苦しくなってきましたので、素早く後手縛りをしなくてはなりません。私は、あらかじめ別の縄を首に結んで背の方へ垂らしておき、それを例のように輪を作って、両手首を入れて締めるよ

うにしております。なお、前回ご紹介した、「縄手錠」を利用すると手軽にできて、身体の横縄に後手を吊るすだけでよいので便利です。

これでえび縛りができたわけですが、女はあぐら座りに慣れていませんので、とても苦しいです。自分の姿を鏡で見ようとしても顔が上げられませんので、できれば柱か家具などに寄りかかって、足首を上げるような格好でいた方が楽です。もっとも恥かしい姿を、さらけ出したような、とても人には見せられない格好ですが、自縛なので、その心配はないといえます。えび縛りは、あぐらに組んで縛られた足が邪魔して横にはなれないので、首を垂れるか、足を上げるかしか、できません。したがって変化には乏しいけれど、縛ったまま、じっとしていると、自分が女囚になって拷問されているような気になります。

(2) 逆えび縛り

この縛り方は私の好きなものの一つです。乳房や腹部が、畳や床に必要以上に触れるので、興奮の度合も高いようです。逆えび縛りといっても、ただ普通のように縛り、後手と足首とを背中て連結するだけのことで、特別変型とはいえませんが、この連結が自縛では

なかなか、むずかしいのです。身体全体を丸太棒のように縛り上げた場合に、足を背後に折ることは自力では、なかなか出来ません。

だから、まず足の縛りは、なるべく足首だけにした方が、よいと思います。足首と後手を縛ったらう、つぶせに寝ます。この場合、後手の縄は少し余分に垂らしておいて、足を折り曲げて連結して結びます。ただ、後手に届くぐらい足を曲げるのが大変で、できるだけ身体を、そり返ってやる必要があります。なお、それがむずかしい場合は、寝ないで後手と足首を縛ってから正座すると、足首に手が届きます。この方法は、足首を縛ったまま正座することが多少、むずかしいだけで、あとは、うまくいくようです。

この縛り方にも、例の「縄手錠」を使っにかぎ金具を足首の縄に引掛けるのが最も簡単です。逆えば縛りは、後手と足首が連結されているので、必然的に後手首が緊縛されるしなかなか、よいものです。ただ全然、動けませんので、写真を写すような場合は苦劳します。

(3) 柱縛り、椅子縛り

柱や椅子に自分を縛るのは、まず足首から順々に縛りつけていき、最後は柱や椅子の背

図2 後手の縄の留め方



に両手を廻し、背後に背負うようにして縛ります。ただ全く動けませんので、変化に乏しいといえましょう。

(4) 吊り

吊りについては前回にも書きました。鴨居のようなものの下に椅子を置き、その上に乗って自縛していくわけですが、この場合の要領としては、あらかじめ太いロープを鴨居から垂らしておくことです。足首から上半身まで縛っていったら、次に用意しておいた鴨居からのロープを胸を縛った縄に結びつけるか

ロープそのもので腕や胸を縛ります。それから後手縛りをやって、最後に足を椅子から、はずすわけですが、椅子を蹴倒したりすると宙吊りのまま縄を解かなければならなくなるので、注意が肝心です。それとロープは、なるべく胸に近いところを縛るようにしないと万が一、首にでもかかると、命にかかわることにもなります。身体全体の緊縛感と、ぶらぶら揺れている時の不安感でスリルのあることが最高です。

四、猿ぐつわ

最後に、私の大好きな「猿ぐつわ」について少し書いてみます。

女の身で猿ぐつわが好きなんて、人には言えないことですが、私は、あの鼻口を覆われた息苦しさというか圧迫感というか、そういう感じが大好きなのです。勿論、猿ぐつわというものは発声を封ずるためのものなので、その役目さえすればよいわけで、それならば出来るだけ簡単で、しかも効果のある方法がえらばれるのが当然でしょう。だから手拭い一本を歯と歯の間に噛ませてうなじで結ぶ方法が、最近では、もっとも多く使われますし奇クのグラビアをみても殆どが、その方法で

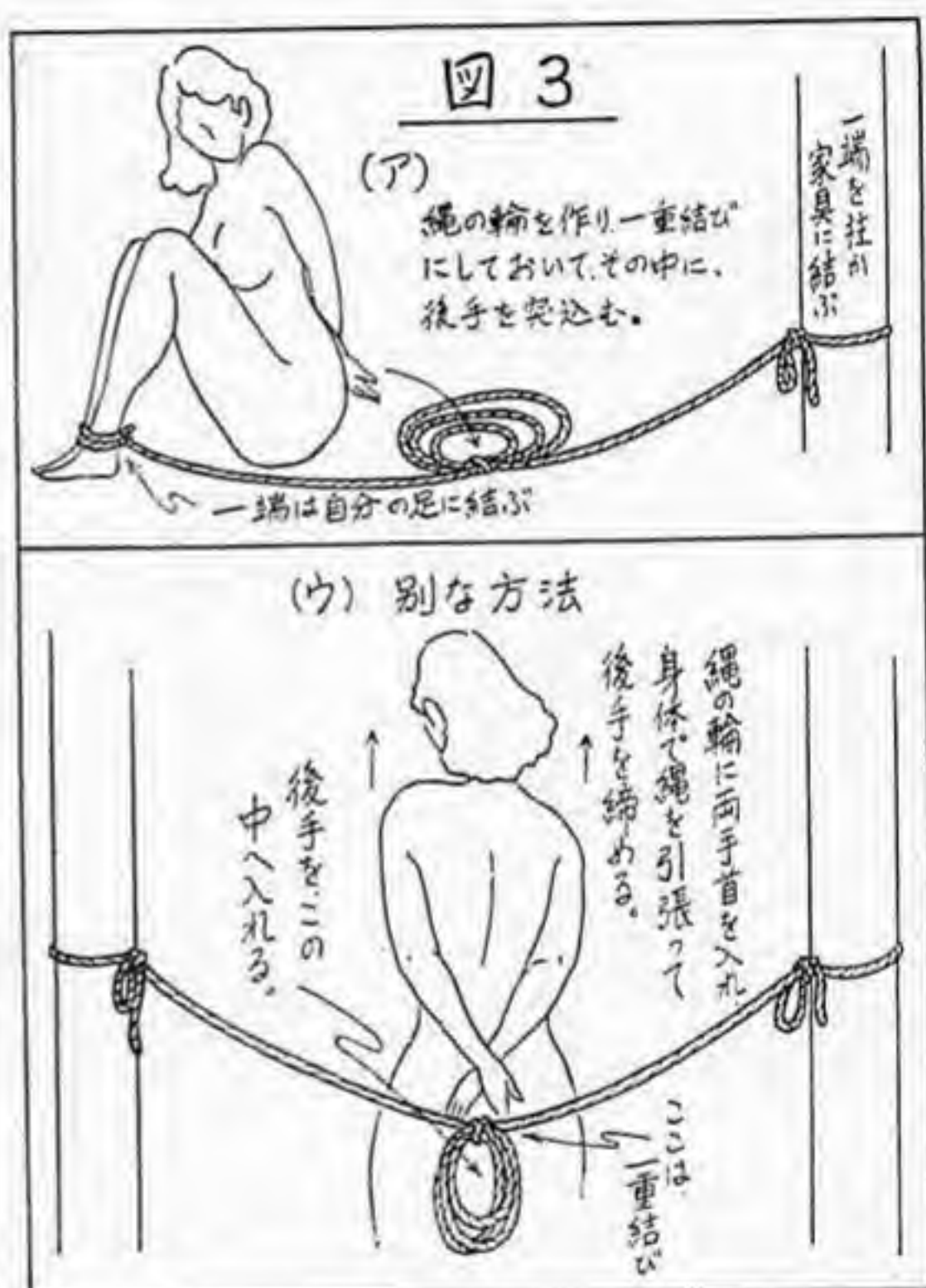
モデルの人が猿ぐつわをされているようです。『猿轡を咬ませる』

なんていう表現からすれば、それが本来のものかも知れません。映画やテレビのシーンでも、以前は鼻口を覆う式のものが多かったのに、最近では咬ませる式のもので、大部分のようです。確かにその方がリアルですし、顔の表情を出すという点では、すぐれています。

このほか、口だけを覆い、鼻は出しておくもの。棒を銜えさせるもの。縄を噛ませるもの。ひどい

のになると、歯の間を割って、縛った縄を柱に結びつけるという、猿ぐつわと頭部の縛りを併用したものがあります。また外国の写真を見ると、皮製の猿ぐつわやピンポン球のようなものを口中に突っ込んだり、人間とは、まあいろいろと考えるものだと思心してしまいます。いずれにしても加虐者が相手と責める一つの手段です。むしろ苦痛を与えるようなものが流行ってきたようです。

ただ私の場合は、自縛の一つの過程として自分の口に猿ぐつわをはめるのですから、苦しいだけのものとか、他から見て美しく見え

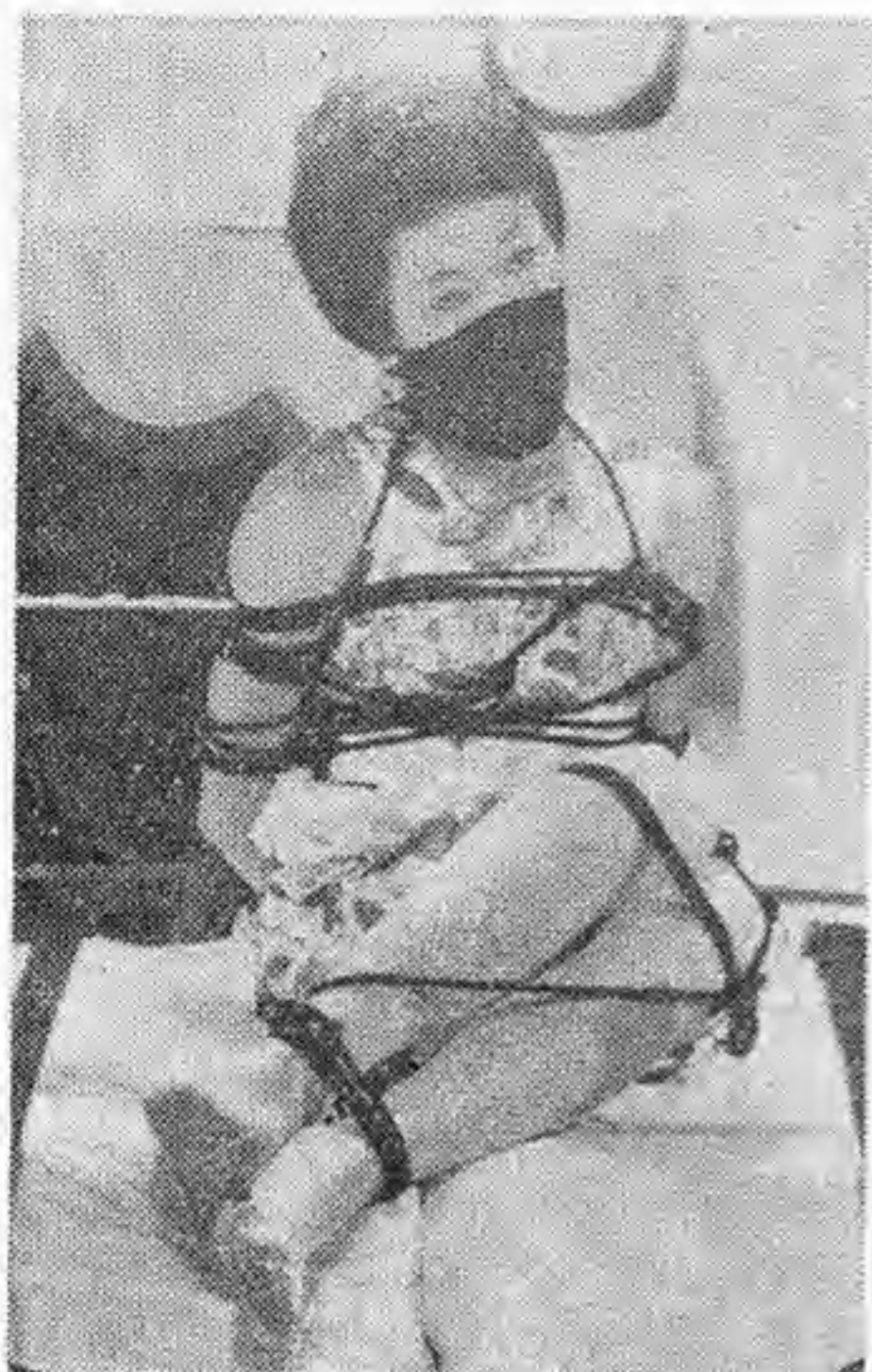


るとか、いうことより、自分自身がそれによって、ある種の快感を覚える程度のものでなければなりません。私は自縛する場合には必ず猿ぐつわをします。私にとっては身体の縛りと猿ぐつわとは、切っても切れないもので、どちらがなくても物足りないし、快さは半減します。

また、猿ぐつわは手足を縛ってからでは出来ませんので、必ず自縛の最初の作業になります。それだけに、どんな方法でも可能なので、鏡に自分の顔を写しながら、いろいろな方法で猿ぐつわをしているときが一番、楽し

いときです。割箸の両端に紐を結びつけて口に咥えたり、ピンポン球を買ってきて、その球に穴をあけて紐を通し、口に含んで頭の後ろで結んだり、先に書きしましたように柱の前に座り、縄を口に噛んで、それを柱に廻し、三重ぐらい口を割るように柱に縛りつけたたりしたこともあります（頭が固定されて、とても変な気持）。いまい番、欲しいと思っているのは、皮製の猿ぐつわですが、なかなか手に入りません。

本や写真でみる限りの、いろいろな方法のためしてみました。私自身の目的や感じからは、矢張り鼻口を覆う、猿ぐつわが最もよく、私の自縛の九割は、この方法です。息苦しさというのは被虐の、もっとも大きな要素ですし、それがためには、他の方法では満足が、いかならないのです。ネックチーフとか豆しぼりの手拭いとかで、鼻口と一緒に覆い、強く頭の後ろで結ぶと、もう体の底から快感が湧いてきます。ただ、絹のような布やウールのようなもので力一ぱい縛ると、通気性が悪いので、息苦しさばかりで我慢できないとき



もあります。この意味では綿の手拭いが理想的です。タオルは、ちょっと緊縛感に欠けるようです。私はネッカチーフも好きですが、それは色彩が豊かで、それで自分の顔半分が覆われると、なんだか楽しさが増す気になります。また真黒い猿ぐつわもムードがあつてよいものです。普通には豆しぼりの日本手拭いがよいようですし、私のつたない自縛写真も殆ど、これを使っています（豆しぼりの手拭いは、わざわざデパートに買いに行ったものです）。

鼻口を覆う猿ぐつわは、発声の問題を別にすれば、自虐の意味では一本の手拭いだけで縛ればいいわけですが、そうすると大掃除の

ときのほこり、除けや、普通のマスクと何ら変わらないともいえましよう。自縛の一環としての猿ぐつわですので、もう少しリアルに猿ぐつわらしい方法をとった方が心理的にも効果があります。そこで、口中にハンケチなどを押込み、その上を腰紐などで幾重にも縛って鼻口を覆うという方法を、一番よく使います。

一人プレイの自縛で発声を封ずるのも変な話ですが、それでも深夜「ウウウ……」と声ならぬ声をあげて、もがき廻るときには、本格的な猿ぐつわの方が気分がでます。ただ、その経験のある方は、ご存知でしょうが、口中に布切れを入れられて、その上を厳重に縛

られると、時間が経つにつれ、それは苦しいもので、少量ならまだしも、少し多い目に入れると、唾液が全部、吸いとられてカラカラに渴ききってしまった喉が、ひりひりしてきます。口中が渴いているのに、口端からよだれが、ぽとぽとと垂れてくるし、それにつれて、その上を覆っている手拭いも濡れてきて気持ちが悪くなってまいります。

多分、人には見られない顔だろうと思います。が、そのぐらいの猿ぐつわを嵌めた翌朝は、頬に縄の跡がつくし、顔は、むくんでみえるし、お勤めに出るのが困る程です。

五、今宵また

今宵また、とき子は手足を縛られて、無造作に畳の上に投げ出されています。足首から膝に、更に太股と、中細のロープで要所要所を縛られ、それは腹部から胸へと廻って、最後に首に二巻きして結ばれています。背後に廻って組合された両手は全身の重みに押しひしがれて、もうしびれ切っています。ときどき向きを変えようとするのですが、なにしろ棒のようになった身体では、そう簡単にはいきません。とき子は呻き、もがきます。とき子の顔の下半分は厳しい猿ぐつわに覆われて唾液に濡れて苦しそう。『助けて！』『早く縄を、ほどいて！』虚しい独り言。

夜は、しだいに更けて、窓の隙間から入ってくる夜風がカーテンを、ゆすります。涼しい夜気が膚にふれるにもかかわらず、とき子の凹凸になった半裸の身体から、じっとりと汗が、にじんできます。『誰か来て！』（もっともって私を縛って！責めて！）

——（おわり）——

カット・岡 たちし



按摩の「六さん」の話

暗闇地獄の物語

小川 左門

かまらせながら、気易く話かけてきました。

「当時、私は大工としちゃ、年は若かったが一人前だったし、一日一円五十銭の日当を貰えば、五十銭もありゃあ三度のメシも腹いっぱい喰えるし、あとの一円で姫買いはオンの字でやした。相部屋で回しを取られたって、朝迄御ゆっくりという寸法でサア。おまけに吉原^{なか}なんぞときたら、馴染みの女が、見返り柳の処迄、送ってきて呉れてよ、また来てね待ってるわよ。とかなんとか、ポンと背中の一つも叩かれちゃ、裏を返さねえわけにゃ、いかねえってもんだ。アハハハ」

六さんは、私が適当に合槌をうって返事す

るので調子にのって話し続けます。

「とうとう、そんなわけで嬢^{かかあ}も持たず、道楽の果てが、風眼っていう業病をわずらいやしてネ、いくら目医者に通ったって、治りやしねえ。天罰というのか、親不孝の罰というのか、最後は、こんな生れもつかぬ盲って、わけです。最初の中は、えい、畜生奴、いっそ死んじまおうかと思っただ事が、何度あったか知れやしねえ。

便所へ行きたって手さぐりでしょう。三回程、糞壺に足をつつ込んだ事もあるし、情ねえったら、ありやしねえ。今迄可愛がってやった女だって、こっちが盲になっちゃ、ハナ

「旦那、私も、若い頃は、さんざん遊んだものでサ。その頃の東京は、今とは違って、吉原、州崎、新宿、千住から玉の井、亀戸迄、何処へ行ったらって、遊びには不自由しねえ、有難え時代でしたからね」

関東は上州に近い、とある鄙びた温泉宿で呼んだ按摩。そう、たしか六さんとか言っていました。慣れた手つきで私の肩へ手をつ

も引っかけてくれねえ」

「フンフン、そんなもんかねえ」

「今じゃ居ねえが、その頃、浅草の観音様のまわりじゃ、乞食が沢山いてよ。右や左の旦那様と、一銭二銭の合力をやっていたもんでサ。仕方ねえから、私もその仲間入りをしたってわけでした……。ところが一月ばかり経ってから、イヤな事が起きちゃってネ。

ほかでもねえ、私がまだ大工で働いていた頃、近所の駄菓子屋の娘で、染ちゃんというのが、観音様へお参りにきたのサ。勿論、私は染ちゃんが来たってことは、盲だから見えやしねえ。相変らず、右や左の旦那様とやってたら、ポンと、一銭玉が頭に当るじゃねえか。思わず、お有難うございます、と頭を下げて、さて、金はどこへいったかと、手さぐりで探したが、どこへ行ったか分らねえ。すると、その娘が下駄で「ここよ」とポンと蹴った奴が、私の頭に当たったのサ。間の悪い時は悪いもんで、駒下駄で私の口まで蹴とばされてしまったんでサ」

「そりゃ、ひどいね」

「そして私も、思わずアイタタと叫んだ所、その娘も、私の顔を見て、アラ、あんだ大工

の六さんじゃないの、と言いやがる。はて、お恥かしい次第だが、どちら様でと言ったところ、その娘の色男らしい奴が一緒だったとみえて、何だ、染ちゃん。お前、乞食を知っているのかと言いやがった。トタンに、染ちゃんという娘、なんで私が乞食なんか知ってるわけがないでしょう？ と、男と二人でドンドン行ってしまいやがった。

口惜しかったサ、今思い出してもサ。

それから、もう金輪際、乞食なんかやるもんかと、その日ぼっきり、乞食の足を洗い、さて、これから如何しようかと考えたが、盲じゃ按摩にでもなるより仕方あるめエ、という事になって、やっと取った一張羅の着物を着て浅草橋の袂にあった按摩の師匠を訪ねて、わけを話して、住込みで置いて貰ったってわけです。

それからが大変、何処のどいつだか、何百人から何千人の肩から足迄揉んだか、数知れやしねエ。勿論、女も其の中にゃ、相当いやしたよ。

どうも、女、殊に中年の女ときたら、図々しい奴が多くてネ。揉み方が下手だの、其処のところを、もっと揉めだの、好き放題ぬか

しやがってサ、それで料金は当り前、チップなど一銭だって寄こしやしねエ。

まだ、年寄りの隠居のじじいや、ばばあの方が、ずっと気が利いていて、後で丁寧に、御苦労さんと言って、煙草銭の一つもはずんで呉れる人もいたがね」

「ふんふん、そりゃ、苦労したね」

「それから、歌の文句じゃねえが、流れ流れて、今、この温泉へ来たってわけだが、あっしも、もう六十六だし、これから先、生きて、五、六年というところサ。まあ、死ぬ迄、人の足を揉んで、死ねば死んだで、あの世へ行ってもエンマ様の足を揉まされるかも知れねえと思うと、がっかりしまさあ。

それはそうと、此の頃、テレビという奴が出来てヨ、客はテレビ見ながら、こっちに足を揉ましてるんだから世話はねエ。何を聞いたって、返事もしやがらねえ。癪だが、これも商売と思えば仕方がねえヨ。

それに、どういふものか近頃は、あっしの孫みたいな女が良く呼びやがってサ、さんざん、揉ませた挙句、面白半分じゃないかと思っただけで、素裸になりやがるんサ。こっちが盲だと思ってるだろうが、あっしにはすぐ

わかってしまうネ。

二号かバーのホステスか、総体に女の客は助平でケチン坊が多いさネ。チップなんか呉れた女は、いくらもいやしねえ」

「按摩をとる女の客なんて言うのは、そんな下心があるのと違うかね」

「そうでさア、近頃はまた変わったアベックの客が来やがってネ。初めは男の方を揉ましてサ、次には女の方を揉ませやがるんだ。そりゃ、まあいいんだが、今度は二人で床の上でアレを初めやがるんだ。そして其の最中に、足を揉めと言いやがる。なんたって、こっちは盲だもんな、仕方がねえやナ。万事承知で足を揉んでやるとサ、気が入った時、女の方が色気たっぶりの声を出しやがって、頭を蹴飛ばしやがる」

「お前さんも、結構、楽しんだんじゃないかっ
たかい？ うふふふ」

「そんなもんじゃござんせんや。盲はカンと耳が鋭いって言いますからね。それからそういう奴からは料金を三倍、貰うことにしますが、向うは、さんざん良い思いをして、あつしの前でいちゃついてやがるんですから全くふざけた、はなしでやすぜ。こっちは、い

くら盲だたって、まるで踏みつけられ放しと
いうところでさア。これも、昔、道楽三昧に
過した罰かも知れねエ。

「そうそう、此の間、来た小股の切れ上った
めかけ
妾みたいな女には、さすが道楽者の俺も、お
ったまげたよ。揉まされるのは、こっちの商
売だからいいんだが、内股とアソコばかり
揉ませやがる。それが、餅肌でポチャポチャ
としてやがってサ、こう手の平に吸いつくよ
うでやしてね」

「そりゃ、按摩冥利につきる話じゃないか」

「そうですがね、旦那。なにしろ、七月の暑
い真盛りでさア。只さえ暑いのに、若い女の
股倉へ首突っ込んで、汗だらけになって揉ん
でる自分が哀れになってしまつてネ。いい加
減のところ、奥様、もう時間ですが」
「つ
て言う、時間なんかいいから、もっと揉め
と、ぬかしやがる。それで、ヘイヘイ承知し
ましたと、又汗だらけサ。」

揉んでるあつしの肩へ両足を掛けてサ、手
めえはテレビかなんか見くさつて煙草をふか
してやがるんだ。イヤになったネ。二時間ば
かし揉んだら、按摩さん、もういいわよ」
「って、片足で俺の頭を押しやがる。くさった

ネ。それでいて、"じゃ、二時間ね"と時間
だけの金しか寄越さねエ。

「奥様、骨を折ったんだから、少し、色をつ
けてやって下さいよ」と言ったら、"じゃ、
この次に頼んだ時にね"って、しゃあしゃあ
として、一銭も出しゃしねエ。実際、馬鹿に
してやすヨ。」

全く、近頃の若い女は柄が悪くなったもん
でやすネ。御苦労さまの、ひとことも言やし
ねエ。いや、旦那、済みませんネ、愚痴ばか
り、こぼしちまつて……」

「いや、いいんだよ。面白い話があったら、
もっと聞かして貰いたいね」

「近頃で、一番ひどい目にあったのが、旅館
の女中頭でSという女サ。前にも二、三度、
揉んだことがあるんだが、其の日に限つてア
ソコを揉んで呉れつて言うんです。女盛りの
ムンムンする股倉へ首入れて、一生懸命サ。
暑いのと、女特有のアソコの臭いには参った
ネ。暑くって額は汗びっしょりでさア。やり
切れねえんだが、商売となりや仕方がねえ。
手で額の汗、拭き拭き、また揉んでるってわ
けでネ。やっと時間が来て、やれやれ、と思
って一服しようとする、又、他の室のお客

さんから、お呼びでさす。

あわてて、其の客の室へ飛び込んだのはいいが、「おい、按摩さん。お前の顔は、どうしたんだい？ 血だらけじゃないか。どこか怪我でもしたんじゃないか」と言われて、初めてわかったんだが、女中頭の奴、メンスの

最中に揉ましがったんだ。それを知らねえ悲しさに、汗が出るので額をこすったもんだから、何のことはない、顔中メンスだらけって云うわけサ。

大笑いになって、あわてて洗面所へ駆け込んだんだが、いや、その気持の悪かったこと



イメージギャラリー

『浴後のいたぶり』

岡

たかし

と言ったら、ありやしねエ。全く、盲じゃねえと出来ねえ大失敗の巻でサ。後にも先にもこんな馬鹿げた話は、旦那の前ですが、人様には出来ませんヨ」

「按摩さんも楽じゃないね」

「近頃の女は男をいじめて喜んでいるんです。あ。あの女中頭だって、あっしの顔を一目見りゃ、わかりそうなもんを、黙っていやがるんだからネ。冗談じゃねえ、あっしだって、いくら爺で盲だって、これでも、男ですからネ。そりゃあ、いじめられても悪かあねえ、なんて気分になれるような、いじめられ方ならハナシは別なんですが、他人様にわかるような、いじめ方をして楽しまれちゃ、型なしってところさす。

おや、旦那、こんな沢山チップを貰っちゃって、済みませんネ。

旦那も、お見かけしたところ、アノ方も、お嫌いじゃないように、指の先でチラリチラリと感じさせて頂きやしたが、今度、お見えになりやした時は、とっておきの珍しいお話をさせて頂きやす。ハイ、どうも、お退屈さまで、有難うございやす。ヘイ、どうも、こんなに沢山、頂きました……」(おわり)

隸従の保証

数日して、有明は二人のガボン娘を連れて
目白にある山本邸を訪問した。

レセプションで、娘たちに日本の家庭に触
れる機会を与えて欲しいと有明が言いだした
とき、山本が即座に、それなら自分の私邸に
来たらいいと招待したのである。

女子大通りに面した大きな二重門を通過して
車は玄関脇に着いた。

そこで不思議なことが起ったのである。



第六十四回

今まで盛んに吠えていたペットのコリーが
何故か吠えるのを止めて、一目散にマリアの
手に飛びついて行つたのである。

どんなに変装していようと、犬は忽ち半年
前にいなくなった主人を認めたのである。

「マリアは不思議と犬に好かれるのです」

有明が困った様に、とりなした。

「そうですか。動物に好かれる人は、おやさ
しいと申しますから、マリアさんも、きっと
いい方なのでしょう」

山本夫人が、お世辞をいった。

マリアは、つんとして、微笑を見せなかつ

た。そして、かつての愛犬を、かたく抱きし
めていた。すっかり両親の態度に失望した百
合子は、私邸訪問をひどく嫌つただけれど
も有明が無理矢理に連れてきたのである。

「それにしても姉妹一度に啞にされてしまつ
たとは、哀れな話ですな」

シックな応接間の深々とした皮の肘かけ椅
子に腰をすえた山本大臣は、生ジュースを飲
みながら有明に言った。

二人は夫人の案内で、応接間を素通りして
手入れの行届いた芝生に出ていた。

「奴隷を買う金持は」有明が答えた。「女奴隷が啞であることを好みます。何故なら秘密が洩れないし、思う存分サディスティックな欲望を満たすことが出来るからです」

「あの娘たちもそんな目に会ったのですか」「いいえ。最初に売り出されたとき、私が買いましたから、二人とも、まだ生娘のままです。行く行くは傷ついた声帯を治療して、充分な教育を受けさせてやりたいと思います」

有明は、ヌケヌケと嘘を言った。

「なんでしたら私の方で、お世話をさせていただいても、よろしいですよ。妻も、たった一人の娘をなくして、淋しがっているのですから」

山本大臣の皮肉な提案に、有明は、

「有難いお言葉です。しかし、ガボン娘には矢張りガボンで暮らせ、ガボンでよい結婚相手を見つけさせたいと思います。それに、二人ともタイプ力は確かで、私の秘書としても仲々有能なですよ。ハハハハ……」

と笑いにゴマ化す他はなかったのである。

山本夫人は、無理にフランス語で案内していただけれども、ふと、二人ともいくらか日本語がわかるような気がしてきた。そこで

「あちらの五葉の松は、古いもので……」

と、わざと違う方に顔を向けて日本語で言ってみて見た。すると、姉のマリアがハッキリと視線を本当に五葉の松のある方向へ向けたのである。

山本夫人の心に何やらモヤモヤしたものが泛び上ってきた。それは母性特有の本能だったかも知れない。

彼女は相変らずムツツリと押し黙っている二人を二階に案内した。ロビーから鍵の手になっている階段を上がって、とっつき部屋が、かつて百合子のものであった。

その部屋で、彼女はテレビのボール箱に押し込まれ、ひそかに運び出されたのである。

(第15回参照)それはともかく、その部屋で彼女は多感な少女時代を過した。感慨がない筈はないのである。部屋は全く変わっていなかった。

小さなスエーデン製の人形があった。彼女のたった一回の北欧旅行。その楽しかった思い出が、突如、堰を切ったように溢れ出てきた。ソツと人形の頭に触れる。熱い涙が自然に流れ出てきた。

不意にマリアは身を翻して、階段をかけ降

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその材質に応じて、五段七階級に分類され巧妙に統制管理されていた。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。絶世の美女、山本百合子は有明の貴妃となるべき一等女囚として特訓を受けていた。その仕上げとして、彼女はガボン娘マリアに変装させられ、妹に扮したアマゾン女兵ジャンヌとともに有明と東京へ潜入する彼女の両親、今を時めく通産大臣山本良蔵夫妻と会い、ハッキリけじめをつけるためであった。

り、化粧室に飛び込んだ。理由のわからない涙を山本夫人に見られて、疑われるのを懼れたからである。ところが、その唐突な行為よりも、きわめて自然に化粧室に入ったことの方が山本夫人をびっくりさせてしまったのであった。何故なら、まだどこにお手洗いがあるか教えてなかったからである。

何となくマリアの姿に出奔した愛娘、百合子の面影がハミングして見えた。山本夫人はそれを又もや迷いが生れたのだと考えた。実際、百合子を失った直後、彼女は、神経を損い、色々な幻想に悩まされたし、街を歩いて

いても、一寸でも百合子に背丈の似た娘を見ると、その姿が百合子に変わってしまうという錯覚を数え切れない程、体験していた。

それが、半年も経って、ようやく平静に戻ってきていると思っていたのに、今また、不意に戻ってくるとは——山本夫人は、マリアが百合子であるとは想像も出来なかったので自分の精神が再び異常を来したのだと信じ込んでしまった。

応接間へ戻ってきた夫人の顔色を見て、山本大臣は驚いて立上った。

「どうしたのか。顔色が真青だよ」

気分が悪いので失礼したいという夫人の挨拶を聞いて、有明は早々に辞去することにした。遂にマリア、すなわち百合子は、有明の課した苛酷な拷問（テストというより、百合子にとっては拷問だった）を耐え抜いたのである。

蛇足ながら、山本夫人は、それ以来、懊々とし寝たり起きたりの生活を送った挙句、約半年程して死んでしまうのであるが、その時自殺説が出た位だったが、遂に真相はわからないまま終った。山本大臣が、すぐに内縁の妻を自宅に引き入れて週刊誌に叩かれたこと

も自殺説の生れる原因だったかも知れない。

夫人は死ぬ直前、夫に言ったという。

「いつかいらっしゃったアフリカの娘さん。

あれは、きっと百合子だったのですよ」

「バカをいうな。君の錯覚だよ」

山本は、テンから相手にしなかった。夫人は淋しそうに顔を、そむけた。これが、この夫婦の最後の会話だったらしい。

「よく頑張ったね」

ホテルへ帰ってから有明は、ただひとことしか言わなかったのだけれども、百合子は、天に昇ったような幸福感を覚えたのである。

もどかしいのは、だからといって彼女の待遇が変わるわけではなかったということであった。相変らず昼間は一室に閉じ込められ、夜は隣のベッドの性宴を、縛られたまま聞いていなければならぬ。

実をいうと、有明の試験は、まだ第一ラウンドが終ったに過ぎないのであった。

二、三日して、外から帰ってきた有明は、久しぶりに三人で食事をしよう、と言い出した。服を着ることを許された二人は、運び込まれた素晴らしい食事に目を瞠った。ホテルの料理ではなく、マキシムからシェフを出張さ

せて特別室のキッチンで調理させている。

「このひとを知っているね」

給仕が食事のあと片付けをして出て行くのを待ちかねたように有明は一枚の顔写真を見せた。食後のコニヤックで、ほんのりと顔を染めた（とはいっても、マスクの下での話であるが）百合子は、

「はい。お茶のお友達……」

と言いかけてハッと身体をこわばらせた。

「まさか——まさか、この方を……」

「そうさ」

ニべもなく有明が肯定する。

その娘、辻本真知子はジャンヌと同じ十八才で短大一年生である。父親は「君の名は」に因んで彼女の名前をつけたという程度の人物だが、いわゆる新興の不動産財閥の一人である。一人娘を金にあかせて育てたことは当然だが、真知子はそれ程スポイルされることもなくスクスクと、素直に育っていた。

ロータリークラブの交換高校生に選ばれてオーストラリアで一年を過ごしてきたのが、当人よりも親の自慢の種となった。その真知子が、ハイソサエティばかりのお茶のお稽古場で、山本大臣の娘、百合子と仲良しになった

ことも、父親の虚栄心を大いに満足させたといえよう。年下の真知子は、百合子を姉のように慕っていた。

そこで百合子の蒸発は、彼女にとって大変なショックとなった。彼女は広い自室のランドピアノの上に、百合子の写真を今でも飾っている。

「君は、いずれ自分の奴隷や召使いを必要とするようになる。この娘を、その一人に、してあげようと思うんだがね」

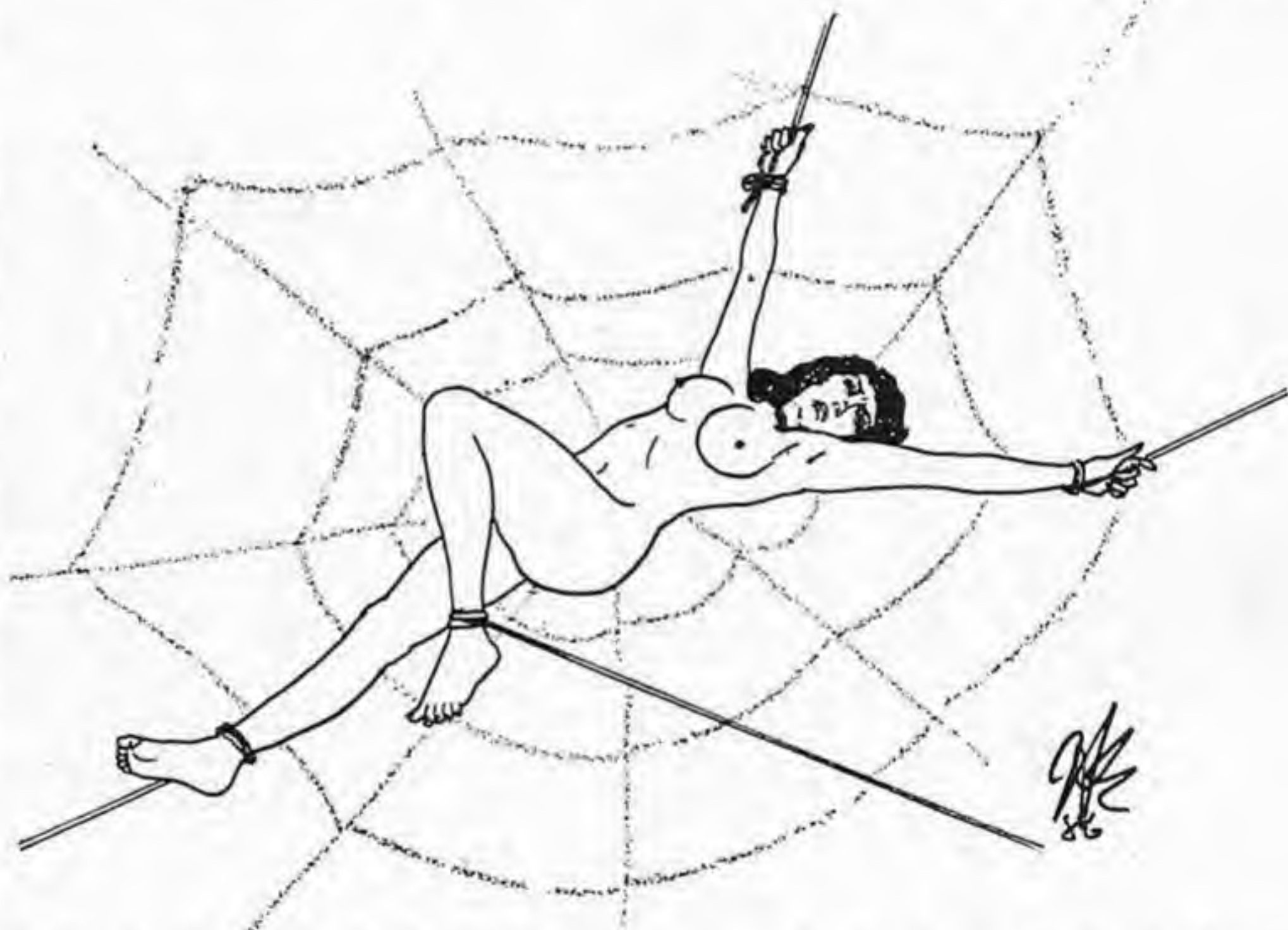
「マッちゃんは駄目です。可哀そうです」

百合子はもう泣き声になっていた。「わたくしは召使なんか要りません。奴隷だって持ちたくはございません」

有明が、諄々と諭すように言いはじめた。

「これも、試験の一種だと思って貰おう」

抑揚をおさえた声音だったが、それがかえって百合子を怖れ戦かせる。有明に屈服した女達が、誰しも一度ならず経験する不思議な圧力だった。言いつのろうとし



た百合子の唇が、氷ったように動かなくな

「アブラハムは吾が子イサクを唯一神、ヤーベに捧げなければならなかった。ヤーベはアブラハムに、信仰の証(あかし)を求めたのだ。私も君に、私に対する隷従の保証を要求したいのだ」

「でも、父や母に会っても、わたくしは心を変えませんでした。それでも、このわたくしを信じてはいただけないんですか」

「信じているさ」
有明は、あっさりと言ったのけた。

「それならば、どうして、マッちゃんまで捕えようとおっしゃるのですか」

両手をよじり合わせ、拝むように有明をみつめる哀願の様子を、むしろ楽しそうに眺めながら、有明が答えた。

「理由は二つある。一つは、君のいわゆるマッちゃんが、私の好みに合ったからだ。君がいても、いなくても、マッちゃん是我的コレクションに加えられるべき材質の持主だよ。第二に、君は、これによって苦しむことが出来る。苦しみは、すべての進歩の根元だ。そして最高の苦しみに耐えた人のみが、最高の幸福を感じること

ができる。ほら、モンテクリスト伯が、マクシミリヤンに言ったじゃないか。君が責め抜かれ、苦しみ悲しみながら地上のモラルを克服したとき、君は始めて貴妃となり、私の愛人となる資格が認められるのだよ。わかったね」

百合子にとって、今更、有明に見棄てられるという、一事に勝る絶望は、あり得なかった。たとえ、人を殺せといわれたとしても、（そしてそれは大いにあり得ることであったが）彼女はその命令に服従しなければならぬと思う。そう決心してみると、昔の友達を誘拐することなど何でもないではないか——とも考えられてくる。確かに、こんな思い切り方が浮んでくるだけ、百合子の洗脳が進んできたともいえよう。

心の懊悩を顔面いっばいに表わしながら、口をきくことも出来ず、ただ、うなづくばかりの哀れな百合子だった。

痺れ薬

辻本真知子は、両親の危惧を押し切って運転免許を取得してしまった。満十八才になったばかりである。ただし、はじめのうちだか

らというので、買って貰ったのは極く普通のブルーバードUであった。

「お姉さま」の山本百合子が、自分を裏切つて、誘拐の手先になったとは露知らない真知子は、今日もお茶の稽古をするS会館に車を駆った。地下駐車場へ入ると、余裕たっぷり

のスペースには人影もない。お稽古を二時間程して戻った頃には、あたりは薄暗くなり始めていた。

車をスタートさせて青山通りに出たとき、突然、懐かしい声が耳にとび込んできた。

「マツちゃん、わたくしよ。百合子」

「えっ」

と叫んで、あたりを見廻したけれども車内には誰も乗っていない。あまりのことに、ゾーッと背筋が凍る。注意力をなくしたハンドルさばきで、車が大きく蛇行し、後続車からのクラクションに脅かされる。あわてて車をもとに立て直すが、新米のドライバーのこととて容易ではない。

「気をつけて真っすぐ前を見て走って頂戴。わたくしは、あなたの車のトランクに入っています。だから、心配しないで……」

幽霊ではないとわかって、真知子はホッと

安心した。そして、急に胸が、ふくらむような気がして、嬉しさが、こみあげてきた。

何か言うに言われない事情があつて、顔を見せられないのだらうと思うと、何とかして慕しい百合子を助けてあげたいという気持で心臓がドキドキしてきた。

「まっすぐホテルHへ行つて、地下三階のパーキングに降りて下さい」

百合子の声が行先を告げたとき、真知子は易々として車をホテルHに向けたのである。そのホテルは美しい日本庭園があることで知られており、真知子も何回となく、その芝生で野立てをした経験があつた。したがって、少しもためらわずに地下三階に着いた。

エンジンをとめると、百合子の声が一そうハッキリとなった。小さな拡声器を利用しているらしいけれど、それがどこに取付けてあるのか、サッパリわからなかった。

「階段のわきに、お手洗ひがあるでしょう。そこへ先にいらして待って下さい。三つ叩いたら、わたくしを入れてね。ア、それからキーは、そのまま……。誰にも見られないように、早く」

さすがにホテルHの便所は一コマ一コマが

ゆったりとした空間をとっていた。

真知子には、百合子を待つ二、三分が、ひどく長いように感じられた。

コツ、コツ、コツ。

ノックの音で、扉を細目に開く。

「アッ」

と叫ぶ真知子の口を封じるように、

「シーッ」

という声は紛れもない百合子の声。それなのに、押し込んで来たのは、見も知らないアフリカ女ではないか。

「心配しないで、変装してるんだから。それより、はやく貴女もこれをかぶって……」

嫌も応もなかった。顔にスッポリと薄いゴムが貼りつけられた。派手なダスターコートが今まで着ていたスーツをかくすと同時に、体型を変える。膝までかくれるようなブーツをはかせ、手にも手袋をはめる。最後にモジャモジャに縮れた髪をかぶせられると、

「サ、はやく」

と、うながされる。

おどろいたことに洗面所の鏡に映った自分の姿は、もはや辻本真知子ではない。隣に立っている百合子が、ガボン女性としか見えな

いのも同様に、辻本真知子自身も、アフリカ

人になり切ってしまったように見えた。

エレベーターを上げる。

かなりの人々が出たり入ったりするけれども、こうした国際ホテルではアフリカ女性などを珍しがる雰囲気はない。特別室への廊下で行き会ったメイドなどは、有明の二人の秘書が帰ってきたのだと信じて、ていねいにお辞儀をしたくらいだった。辻本真知子は、ここではジャンヌ、すなわち小林敏子が変装しているガボン娘のユリーとしか考えられなかったのである。

二人は、ジャンヌに迎えられ、重いマホガニーの扉を通って、有明の住む特別室に入った。そして、すぐ左手にある百合子の寝室に案内される。

「ごくろうさま。さあ、もう脱いでもいいのですよ」

やさしく言われた真知子は、いそいでカツラを外し、コート、手袋、ブーツなどもとって、ようやく元の姿に戻る。黒いエナメル靴は百合子が買物袋に入れて持ってきていたものでそれを受けとって履いた。

ホッとしたところへ、ユリーに扮したジャンヌがコーヒーを運んできた。

「ユリーさん、こちらは、わたくしのお友達の辻本さんです」

予め打合せておいた通り、百合子は真知子を、わざと英語で紹介する。にっこり微笑を泛べたジャンヌは、それでもヒト言もいわずに部屋を出て行ってしまった。

急に、コーヒー茶碗を持っていた手が、ダランと下がってしまった。絨氈の上に茶碗が転がって、呑み残しのコーヒーが、こぼれるのが見えたのだけれど、それを拾おうとする腕が言うことをきかない。

気分は悪くないのに、力が抜ける。グングン、虚脱感が拡がって行く。

「どうしたの。しっかりして……」

と驚く百合子に、

「助けて。手足が動かせないの——」

と言おうとして、ただ

「アウ、アウ、アウ……」

と呻いただけであった。

何も知らされていなかった百合子は、ただオロオロするばかりだった。後ろめたさと同じ時に、有明が何かしたに違いないと、胸のしめつけられる思いである。

そこへ、ノックもせず当の有明が入って

きた。ガボン娘のマスクをとり、身体中のメイクアップを剥がしたジャンヌが、何と全裸の女をかついで入ってきた。

「心配するな。筋肉だけが痺れる薬を入れておいたのだ。時間がくれば、元通りになる」

と有明に言われても、友達を裏切った自分の行為の浅ましさに動転した百合子は、ヘタヘタと床に坐り込んでしまった。

真知子はベッドの上で次々と身につけたものをムシリ取られていった。

抵抗しようとしても、手足が動かないのでどうにもならない。ののしろうとしても空気が洩れるだけで言葉にならぬ。ただ、湧き出る涙だけが、乙女の悲痛な苦渋を雄弁に物語っていたのである。

しかし、そんなことで躊躇する有明ではない。最後のショーツまで、スルスルと足首から抜きとられた。

待っていたように、それを受けとったジャンヌが、床に転がした裸女に穿かせた。脱がして行ったのは逆の順序で、その女は真知子の着ていたものをスッカリ着込んでしまう。ダイヤモンドの指環まではめて

しまった。女は眠らされているらしく、呼吸はしているが、気のつく様子がない。



「手落ちはないね」

と確かめる有明に、ジャンヌは

「ハイ。血液型も同じ、体型も殆ど変りございません」

と軍人調で答える。メイクアップをとったので、もとのアマゾン女兵の調子にかえってしまっただけらしい。

真知子は、まるで品物のように、ひっくりかえされたり、捻じられたりして徹底的に調べられた。

特に、一個だけ白歯に嵌めてあった金冠がコジリ取られたときは、痺れた神経さえ飛びあがる程の痛さだった。その金冠は、眠っている女の同じ歯に押し込まれた。有明は携帯用のドリルまで持ってきていたのである。

ガボン政府の紋章が画かれ、「外交公用」の文字がプリントされたジュラルミンケースに、女は身体をまるめ押し込まれた。

「さて、お次は、こっちだ」

と真知子の方へ向き直った有明の目に射すくめられたようになった彼女は、思わず知らず腰のあたりを濡らしてしまっ

た。大体、筋肉が弛緩してしまっているのだから、どうしても洩れやすいのである。

「おやおや、もう粗相してしまったのかね」
苦笑した有明は、予め用意してあった紙オムツをあてがってしまう。

ジャンヌが、ポリエチレンのシートを床にひろげた。真知子の裸身が、その上に投げ出される。

缶入りのスプレー塗料が、真知子の全身に吹付けられ、全身を黒く染めてしまう。今までジャンヌが着けていたユリーのメイクアップが全部、真知子のものとなって、あたらしいユリーが誕生したのである。

目立たぬGパン姿にサングラスをかけたジャンヌと一緒に、手押車に乗せたジュラルミンケースを押して、有明は出て行ったが、しばらくすると戻ってきて、呆然としている百合子に、

「さあ、あと二時間もしたら出発だよ。すぐ仕度を、し給え」

そして、サッサと電話をとって、病人がいるから車椅子を持ってくるように言いつけるのであった。

荷物は、いつでも発てるよう荷造っておけ

と言われていたので問題はなかった。支払いにしても、大使館が決済するので、心配はない。飛行機の座席だって、ファーストクラスなのだからリザーブする必要もない。

知らない人の目から見れば、あの元気だったユリーが病氣になったとは思えなかったろうが、本当のところはジャンヌのユリーが真知子のユリーにすり変ってしまったのである。

外交官公用旅券の効果は絶大なもので、自動車のまま飛行機の側に取りつけ、パーサーに抱えられた病人は、慎重に二人分の座席をとって横に、ねかされた。このパーサーとて辻本真知子の誘拐に腕を貸したとは夢にも思っていないことであった。

「小林さんは、どうなさったのですか」

オズオズと百合子が小声で、たずねた。香港行のパンアメリカン845便が、もう機首を南に向けた時であった。

「ああ、ジャンヌのことか。あれは別行動を取る。明日、香港で一緒になるよ」

有明は無造作に答えただけだったが、ジャンヌこと小林敏子の引受けた役割は、正に大仕事だったのである。

真知子の洋服を着た女は、来るとき彼女がそうしていたように、トランクに投げ込まれていた。

真知子の車は、さりげなく東京を抜けて千葉県へ、木更津から、さらに南下して南総の山奥に入る。

予め慎重に選んだ山間の、人里離れた森の中に車を入れる。そこで、ひっそりと夜を明かし、東の空が白み始めた頃に指図通り行動を起す。

すなわち、女をひきずり出し、車から十メートル程はなれた凹みに入れ、車から抜きとったガソリンをかけて焼いてしまう。指紋、足跡などは真知子のものしか残らないようにしておいた。特に顔などは原型のわからない程に焼き焦がさなければならぬ。

それを確認してから、すぐ近くを流れる川の中を歩いて三十分程、降り、そこに前日から置いてあったレンタカーに乗って東京へ帰ったのである。

数日後、焼死体は発見され、車のナンバーから身元がわかり、辻本真知子は焼身自殺と断定された。

〔私の履歴書〕

（ゴムマントへの憧れ）

青年期のゴムマント挿話

鶴

崎

好

夫

（写真は梅川幸子さん提供のもの）



ゴムマントを求めて

私の青年期は血なまぐさい戦争の中に、生き続けました。やがて、太平洋戦争もますますはげしさを増し、学生達は学業半ばにして軍の生産工場へ勤労働員されて行きました。

私達中学生も近くの軍需工場へ動員されることになりました。その工場の作業は私達中学生と上級の女学生、女子工員、大学生、そして、小人数の男子工員によって行われました。雨の日、工員と大学生の二十人ばかりの男子が、黒いゴムのマントやゴムの合羽を着て出勤してくるのを見た私は、工場へ行くのが大変、たのしくなりました。

物資が不足勝ちの頃とて、特にゴム製品はなかなか手に入らなかった時なので、通勤途中、ゴムマントを着ている工員さんに「今時よくゴム合羽が手に入りますね」と聞くと、「軍需工場なので配給があって、くじ引きで当たったんだ。女子工員にも当たった人があって男物だけど、着ている人もあるよ」と話してくれました。

それから暫くした雨の日、通勤電車に乗った私の前に、黒いゴムマントを着てゴム長をはき、フードを目深にかぶった人が居ました。どんな人かと思い、近づいて体をマントにすり寄せるようにして前に回りました。



ちらっと見ると、フードから二本のお下げがたれているのが目に入って、ハッとしました。女の子だったのです。それも同じ職場でいつも顔を合わす女子工員だったのです。

私と顔を合わせた彼女は、フードの頭をびよこんと下げて、「お早ようございます」と会釈して、にっこり笑いました。私は返礼するの、やっとなほど、顔がほてって仕方がありませんでした。

それから、雨の日には、必ず早く家を出て、電車を何台も待って、その女性と同じ電車に乗り合すようにしました。いつも、に

ここにきて挨拶を交わすゴムマント姿の彼女が、たまらなく好きになってしまいました。

その頃も、ずっと続いていた私の夢精のストリーの中のおばさんに代って、ゴムマントを着た可憐な彼女が、私の夢の中に出て来るようになったのも、その頃です。

戦争は日を追って激しさを加え、空襲の恐れも迫ってきました。工場では裏の空地に、三十人ぐらい入れるし字型の防空壕が作られました。両側に入口があり、内部は下に板を敷きつめゴザも用意してありました。

その日は日曜でしたが、私は当番だったの

で工場へ出勤しました。いつくるかわからぬ空襲に備えて、いつも一人は工場に詰めていなければならなかったのです。

その日も朝から雨がしとしとと降っていて午後三時頃、一回空襲警報の発令があつて、私は防空壕へ退避しました。ゴザを敷いて奥の壁にもたれているまま、私はつい連日の作業の疲れで、うとうととしてしまいました。

反対側の入口から入ってきた人の気配と話し声で私は転寝から目がさめました。一人が男で一人が女であることが、すぐわかりました。先方は暗い奥に座っている私に気がつかず、私もまた、出るに出られず、じっとしたままにいました。

二人の話の様子は、すぐにわかりました。間もなく学徒出陣で戦地へ行かねばならない男性が、愛人の女性に愛のちぎりを交してから行きたいと要求しているのです。

女性は、その情熱に負けて、ここまでついて来たのでしょうか。「それだけは勘忍して」と涙声でしゃくり上げながら拒んでいるのに「君も許すといって、ここまで来たはずなのに」と、未練そうな男の声が聞えました。

女性の忍び泣きの声に混じって、二人の身体動く、ごそごそという音を耳にした私は角から、そっと覗いてみて、びっくりしました。そこに薄暗い電灯に照らし出されて抱き合っている二人は、二人共、黒いゴムマント

を着ているのでした。

男の方は同じ職場に勤労働員されてきている大学生で、女性はいつも通勤電車で逢った、あの可愛いらしい女子工員とわかったとき私の胸は早鐘のように高鳴り始めました。

私は、そこで、それから繰りひろげられた二人の愛情交歓の姿を、くまなく見てしまったのです。

押し問答の末、やがて男性の情熱に負けた女子工員は、「戦争から帰ってきたら、必ず結婚してくれるわね。それだったら、貴方の望まれることは、どんなことでもきくわ」と泣きながら大学生に、すがりついたのです。

「僕は一生、君以外の女には手を触れないと決心しているのだから、もし、君が、どうしても嫌というなら無理にと

言わないよ。でも体を許し合うことは、本当の愛情を確かめ合うことなのだから、もし君が許してくれるのなら、僕も君の処女がほしいし、僕も君に童貞を捧げたいのだ」

「もう嫌なんて言わないわ。貴男が、それまで私を愛して下さるんなら、早く、早く、貴男のものにして……。今日は、貴男に、どんな事をされてもいいと思つて来たんだけど、恥かしいから、つい、嫌つて言ってしまった



の。ごめんね」

女子工員は、そう言つてゴムマントを脱ごうとしました。大学生は、そのままがいいと言つてゴザを敷いた上にゴムマントを着たまの女を寝かせ、ゴム長をぬがせてから、モンペと下着をとりまた長靴をはかせました。

彼女は、その間中、恥かしそうに身をくねらせながら、マントの前を両手で合わせて身体が光にさらされないようにしていました。

やがて男は、彼女と同じようにゴムマント

を着たまま下着を取ると長靴をはいて、彼女の押えているゴムマントの前を押しひろげました。彼女の激しい息づかいの中に、恥かしいという、とぎれとぎれの言葉。そして、ガサガサ、ゴソゴソというゴムマントのこすれる音が、私の耳に入ってきます。

ゴム長をはいた彼女の足が、空に浮く様な姿勢になった時です。彼女の口からああ、あつという呻き声が洩れました。見ると、ゴムマントのフードの中の顔をうしろに、のけぞらしていました。彼女は齒を喰いしばつて目をつむり、必死になつて、何かを、こらえているようでした。

その姿は、とても、この世の人とは思えぬほど、神々しいものに見えました。揺れる二人のゴムマント、本当に夢のような光景でした。

やがて身体を起した男性が、ハンカチを取り出して女の体の汗をぬぐっていました。

「これで、二人は結ばれたのね」

女はまだ、しくしくと泣いていました。

黒光りのするゴムマントが激しく揺れ動く美しい愛の営み。それは本当に神々しいものでした。身動きすら出来ない状態で、目の前に二人の愛の姿を眺めて、私は気も遠くなるような興奮を感じていました。

私は自分が、その大学生と入れ替ったような風に錯覚し、ゴムマントを着て、憧れの女性と何しているような気持になって、自分自身を制することが出来なくなり、二度も精を洩らしてしまいました。

やがて、すべてが終り、身づくろいをした二人は、ゴムマントを着たまま、寄り添うようにして戸外へ出て行きました。ゴムマントを着た二人の後姿を見守っていた私は、なんと素晴らしい光景なんだろうと思ひ、羨ましくもまた、嫉ましく思いました。

私も、必ずあの女子工員のように、ゴムマントを着て、喜んで体を許してくれる恋人がほしいと思いました。そして結婚したら、必

ずゴムマントを着て、お互いに心から満足したいと願ひ、いろいろ楽しい思いを、めぐらせました。

私は直ぐに、そこを出て行くのが惜しく、二人がほん今までゴムマントを着て寝ていたゴザの上に横になって、さっきのあの素晴らしい光景を、もう一度、頭の中に思い浮かべていました。

一カ月ほどして、その大学生は学徒出陣で出征して行きました。一人残されたその女子

工員のしょんぼりした顔が、その理由を知る私には、一層可哀そうに見えて仕方がありませんでした。

しばらくして、通勤電車の中でも、職場でも、彼女の姿が見えなくなりましたので、親しくしている友達に聞いてみましたところ、
「身体を悪くしたので、工場をやめて、田舎へ帰ったそうだ」という返事でした。口うるさい年輩の女子工員達の間では、彼女が妊娠してたらしいという噂を言いふらしていました。それを聞いた私は、なんとも言えない淋しい気持になりました。

それからの二人の消息については、それ以後、私には何の噂さえも耳にすることは出来ませんでした。

あんなに深く愛し合っていた二人を、無惨にも離れ離れにさせてしまった戦争というものを、本当に、いまいふ思いました。そして、この世の無常というもの、その時、しみじみと感じたものでした。

私の思春期は、暗くてみじめな戦争中でしたが、やがて敗戦とともに、戦後の混乱期を迎えて、いろいろのことにぶつかり、私のゴムマントへの執着も、新しい展開を見せるのでした。



カット・マエダヒオミ



ピノキオにとっては、このところ余り面白くない毎日が続いた。二匹の女奴隷が、あまりにも従順すぎるのである。

兄貴から鞭を使うことを禁じられているから、些細なことを口実に、これだけは許されている電気鞭、電氣鞭でお茶をにごしてはいるのだがどうもピノキオにとって電気鞭は、威力がありすぎて面白くないのである。

ピシッ！ と音をたて、白い柔肌に纏いつくムチ。みるみるうちに、そこは赤いみみずばれで染まってゆく。必死で哀願をくり返しムチを逃れようと苦悶する女の姿は、ピノキオの加虐趣味を、いやが上にも高めるのであった。奴隷の調教師にとって、その奴隷が従順になることは、調教の必要がなくなるということなのである。し

連 載 創 作

S

M

企

業

第五話——奴隷四号捕獲——

秋 津 新 次 郎

かも、ここ半年位は、新しい奴隷を仕込むことは兄貴の計画には入っていないそうだから、実に張り合いがないのだ。

そんなピノキオにとって、思いがけない獲物として、ある女が、うつった。

滋賀県の雄琴トルコからの帰り道、何気なく立ち寄った京都の河原町のスナック街で、久江を見つけたのである。恰度、お客を送って表まで出たのであろう。通りがかりに見たので久江は気付かなかったが、ピノキオは、その店の名を脳裡に、やきつけた。思い出すたびに歯ぎしりしたくなる憎い女、それが久江だった。

二年前のことである。ピノキオも人並に女に惚れた。ミナミの小さな洋酒喫茶に勤めている久江に惚れたのである。まだ田舎から出

て来て間のないらしい久江は、うまく誘えば一ころでコマセそうにピノキオには思えた。チンピラの身で、随分無理をして毎日のように通っては久江の関心を惹いた。ようやく休みの日を聞き出し、デートの約束をとりつけたのに、当日、ピノキオは見事にスッポかされたのである。

「ごめんなさい。急な用事が、出来ちゃって……」

と、にっこりして言われれば、それ以上、なじることも出来ず、再度のデートを約束した。

だが、その日も約束の場所へ久江は、やって来なかった。頭にきたピノキオは、むしゃくしゃしながら久江の勤め先である洋酒喫茶を覗いてみると、久江はシャアシャアと出勤していたのである。

「ごめんなさい。マスターから〇〇ちゃんが急に休んだから、出てくれて頼まれたの」

大抵の男なら、これで諦めるものである。だが頭に血がのぼっているピノキオは、

「なにい！ そうか。それじゃあ、マスターをよんでくれ。おめえの言ってる事が本当かどうか。聞いてやる」

いくら勘の鈍いピノキオにも久江の言っていることが口実だぐらいは察しられた。店に居合わせた客や、ボーイやウェイトレスたちが成り行きを見守っている。もう今さら、あとへは引けなかった。

「そう。あんたって鈍い人だわね！」

ほんの小娘だと思っていた久江から、思いがけない冷笑を浴せられたピノキオは、ますます逆上した。

「なにイ！ おい、なめるなよ！……俺をなめると……」

「なにさ。それで凄んでるつもりなの？ ああね、もしあたいのこ

と、どうかしたいんなら、大内組の石橋さんに訊いてからにした方がいいわよ。なんなら今、電話しましょうか。それとも、石橋さんの息がかかっていると知って、あたいを、くどく勇気があるの」

ピノキオは目の前が真暗になりそうな威圧感を味わった。知らなかったとは言え、迂闊な話だった。石橋というのは大内組の大幹部で、ピノキオの親分である大森組長とは兄弟分の盃をしている大物である。ピノキオから言えば、叔父貴にあたる人で、その人の息がかっていると聞かされては、一先ずその場は引き下がらざるを得なかった。

「くそっ、久江の奴、石橋の女^{スケ}だったのか」

久江の言っていた事が、単なるハツタリでなかった事は、調べて、すぐにわかった。しかし大勢の人の前で、いい若いもんが、小娘だとなめていた女に、ていよく、あしらわれた無念さは、堅いしこりとなって、いつまでもピノキオの胸に残った。

その久江が、大内組の若い男と出来て、石橋から逃げ出したと言う噂を聞いたのが半年程前である。久江の姿を京都で見た時、すぐにでも石橋に知らそうと思ったのだが、それ位の事では腹の虫が納まらなかった。

一旦ヤクザの女になって、あろう事か、その組の若い者と逃げ出したりしたら、どんな目に合わされるか久江だって知らない筈はない。急に姿を消しても世間が不思議とも思わない女、そんな女はそうザラにいるものではない。だが、今の久江なら誘拐してもいいのではないか。兄貴がどう言うかわからないが、久江の事は一度、兄貴に話してみる価値がある。うまく誘拐出来れば、あのときの苦い屈辱も思いっきり復讐出来るのだ。

一度は本気で惚れてふられた女である。その女を、素裸にひんむき、ムチと縄とで、いたぶり尽し、従順な奴隷に仕込む場面を想像しては、ピノキオは激しい加虐の血を沸かした。

×

×

久江は低い呻き声を立てて気がついた。頭が、ずきずきと疼く。まだ、はっきりとしない意識の中で身を起そうとして、自分が後ろ手に縛り上げられているのに気がついた。（どうしたのかしら。そうだ、夢を見てるんだわ……）

縄りのつかない思考力で、夢と現実が混沌とした中で無意識に身を起そうと、もがきながら、まだ夢の中にいる自分を信じていた。だが、それも頭の痛みが少しずつ薄らいでいくとともに、胸と後ろ手に喰い込む縄の痛みが一足とびに現実へ引き戻した。

昨夜、自分を指名した客が、大森組のピノキオと知って、まるで鳥が飛び立つようにして店をやめ、アパートを引き払って外に出たとたん、待ち構えていた車に引き込まれ麻酔薬がかがされたのだ。

いずれ、石橋の差金に決まっている。でも、まさか命まで取られないだろうと、久江はまだ少し、自分の置かれた立場を甘く見ていた。組を抜け出した女に対するリンチの現場には何度か立合わされたが、いずれもチンピラがヒモの売春婦であった。組の大幹部の愛人である自分を、いくらなんでも、あんなひどい目には合わないだろうと、タカをくくっていてもいたし、まさか自分を誘拐した相手が、大内組の石橋とは何の関係もない相手で、これからSMPプレイのマゾ奴隷に仕込まれる境遇になろうなどは、夢にも考えてもいない久江であった。

この部屋に連れて来られて、どの位の時間が経ったのか、縛られ

た両手は、もう血の気を失ってしまっていて、しびれきっていた。突然、ドアの鍵をはずす音がして、男が入って来た。ピノキオである。

「目が覚めたようだな」

右手に皮鞭をぶら下げ、ベッドの上に衣服をつけたまま縛り上げられた久江に、ニヤツと歪んだ笑みを泛べて近づいた。

「何よ、ほどいて頂戴！ もう覚悟したわ。石橋を呼んで頂戴」
「ふっふふ。相変らず気の強い女だな。喰らえ！」

きっかけを待ち構えていたピノキオのムチが、激しく弧を描いて久江の身体に舞いおりた。

「ヒッ！ 何すんのよ」

何のために振りおろされたムチなのか、久江は恐怖よりその意味を図りかねて戸惑った。

「何をするか……無理もないな、俺がこの日を、どれだけ待っていたか知らないだろうからな。いつまでベッドに寝そべってやがる、おりろ！」

ビュツと空をさいたムチが、立て続けに久江の身体に振りおろされて音をたてた。

「アッ、いたい。やめて！ やめてよ！」

「やかましい、ベッドから、おりろ！」

ビシッ、ビシッとムチは、たて続けに久江を襲って音をたてる。

「ヒッ、ツウ！ ヒエッ！」

命じられたからなのか、苦痛から逃がれるためなのか、久江の身体は音をたててベッドから転がり落ちた。

「グウッ」

落ちた拍子に、したたか腰を打ったらしく久江は鈍い呻き声をあげた。それでも、後ろ手に縛られた身をもがきながら、何とか起き上がるうと膝で、いざった。ミニスカートの膝がまくれあがり、淡いブルーのパンティが、あからさまに、のぞく。

ピノキオは、ぞくぞくする快感に身を慄わせながら、じっとその姿態を見つめた。

「おきろ！」

業をにやしたピノキオは、久江の髪の手をつかむと、その場に引き据えた。

「い、いたい！ どうしてこんな目に合わすのよ。石橋の言いつけなの？ 石橋を呼んでよ！ お前なんか、こんな目に合わされる理由はないわ！」

二年前の久江には、まだどこか、うぶさ加減の残っていたものだったが、二年の歳月は久江を、したたかな女に育てたようである。お前呼ばわりをされたピノキオの自尊心が二年前の屈辱の古傷から血を、したたらせた。

「石橋か……何か勘違いしてやしねえか。石橋なんか関係ねえんだぜ！ 二年前と同じ俺だと思ってやがるのか。あの時は、よくもチンピラ扱いをしてくれたな」

久江は、はじめて得体の知れない立場に置かれた自分を悟った。てっきり石橋が自分をラチしたのだとばかり思いこんでいたのだ。石橋が関係ないとなると、このチンピラは二年前にふられた事を根にもって自分を誘拐したことになる。その信じられない程の執念深さを考えた時、激しい恐怖を感じずにはいられなかった。

「それじゃ、あんた。あの時のことを……」

「そうよ。よくも人前で恥をかかせてくれたな。俺が今日という日を、どれだけ待っていたか。これから、うんと思いい知らせる」ムチを両手で、しならせ、ニヤニヤと薄笑いを泛べるピノキオに久江は思わず哀願の言葉を口にした。

「ね、悪かったわ。でも、あの時は仕様がなかったのよ。あんただってわかるでしょう。あの時、私は石橋の女だったのよ。いくらあんたが好きでもどうしようもなかったのよ」

「へえっ、俺が好きだったって？」

「そうよ。でも、ね、わかって」

「うそをつけ！」

激しい怒声と共にムチが振りおろされる。

「ヒイッ！ やめて、ぶたないで」

ミニスカートから、むき出した膝を、したたか打たれた久江は、仰向けに、ひっくり返った。だらしなく揺げられた両足のあいだを狙って、ピノキオのムチの、にぎりが襲いかかる。

「うぐっ！ ヒエッ！ や、やめて、ああ」

後ろ手の手首が、自分の体重を受けて痛いのか、久江はブリッジのように身をそらして許しを乞う。さんざんに悲鳴を挙げさせておいてピノキオは、ようやくムチを引いた。

「どうだ、少しは応えたか。俺に惚れただど？ 今更そんな言葉に俺が乗るとでも考えたのか。見えすいた事を、いいやがって」

どうせ一時のがれの言い訳とわかっていても、見えすいた嘘をついた久江を、今度はどう、いたぶってくれようかと、舌なめずりをするピノキオである。

「おきろ！ まだムチがほしいのか！」

激しい叱咤に、震え上がった久江は、あわてて不自由な姿勢で身を起した。さすがに気の強い久江も、たて続けに襲ってくるムチの痛みと、執拗なピノキオのいたぶりに涙を流していた。

「ね、ねえ、もう許して。私が、ほしいのなら自由にしていいいわ。ね、お願いだから、もうぶたないで」

「なにい？ 私がほしいなら自由にしていいたと？ ふざけるな。おめえの許しなんかいる今の俺かよ。おい、謝まるなら謝まり方を教えてやる。どうか私を抱いて下さい、お願いします。と頭を下げる！ そうすれば抱いてやらないでもねえぞ！」

「そ、そんな……いや！ もうやめて」

「やめてだと？ そんな言葉づかいは、ここでは通用しねえんだ！ よくおぼえておけ！」

ピシッ！ と激しい音がして久江の首筋にムチが鳴った。

「ギエッ！ ヒイッ」

余りの激痛に、またもや、ひっくり返った久江は、もう起き上がる気力さえ、なくしてしまった。

「どうした、立たねえのか！」

ひっくり返ったまま、肩で息をしている久江に、はげしい舌うちをしたピノキオは、髪の毛をつかんで引き起した。久しぶりのムチ打ちの快感に、ピノキオの嗜虐性が更に熱く躍動して、その熱気のはけ口を求めて、うごめいた。

久江が後ろ手の縄尻を引かれ、ピノキオのムチに追いたてられながら、隣の奴隷部屋に連れ込まれたのは、それから三十分も経ってからだ。さんざんムチで打たれ、もう立っているのが、やっとという身体で無理に引き立てられて奴隷部屋についた時、その場へ

くずれるように坐り込んでしまった久江である。

突然、連れ込まれた新しい女を見て、一瞬、戸惑った二匹の女奴隷に、激しいピノキオの叱咤が、とんだ。

「どうした、挨拶は」

薄いパンティとブラジャーだけの姿で、二匹の女奴隷がバツタのようにとびついてピノキオの靴に口づけをする。珍しく二匹とも自由な姿だった。

「よし、新入りだ。ここでの俺に対する礼儀を教えてやれ。一号、俺のベルトをはずせ」

一号の手がピノキオのベルトにかかる。

先程からの激しい加虐の興奮に、もうピノキオのサディストとしての血は今にも暴発せんばかりに沸き返っていた。

「よし、やれ！」

「はい、ご主人様、ありがとうございます」

一号は、さもうれしそうにピノキオの前に進み出て唇を突き出し屈辱の奉仕をする。

「よし、三号と交代しろ」

三号が代ってピノキオの前に跪く。

「よし、やれ！」

「はい。あ、ありがとうございます」

噛みついてやりたいほどの、この憎い男に対する衝動を必死で、こらえ乍ら、三号が奴隷のみじめさに身を慄わす。

久江は朦朧となりそんな意識の中で、悪い夢を見ているような気持だった。その光景は、あの吹けば飛ぶようなチンピラだったピノキオが、ここでは絶対の王者として君臨しているということを、久

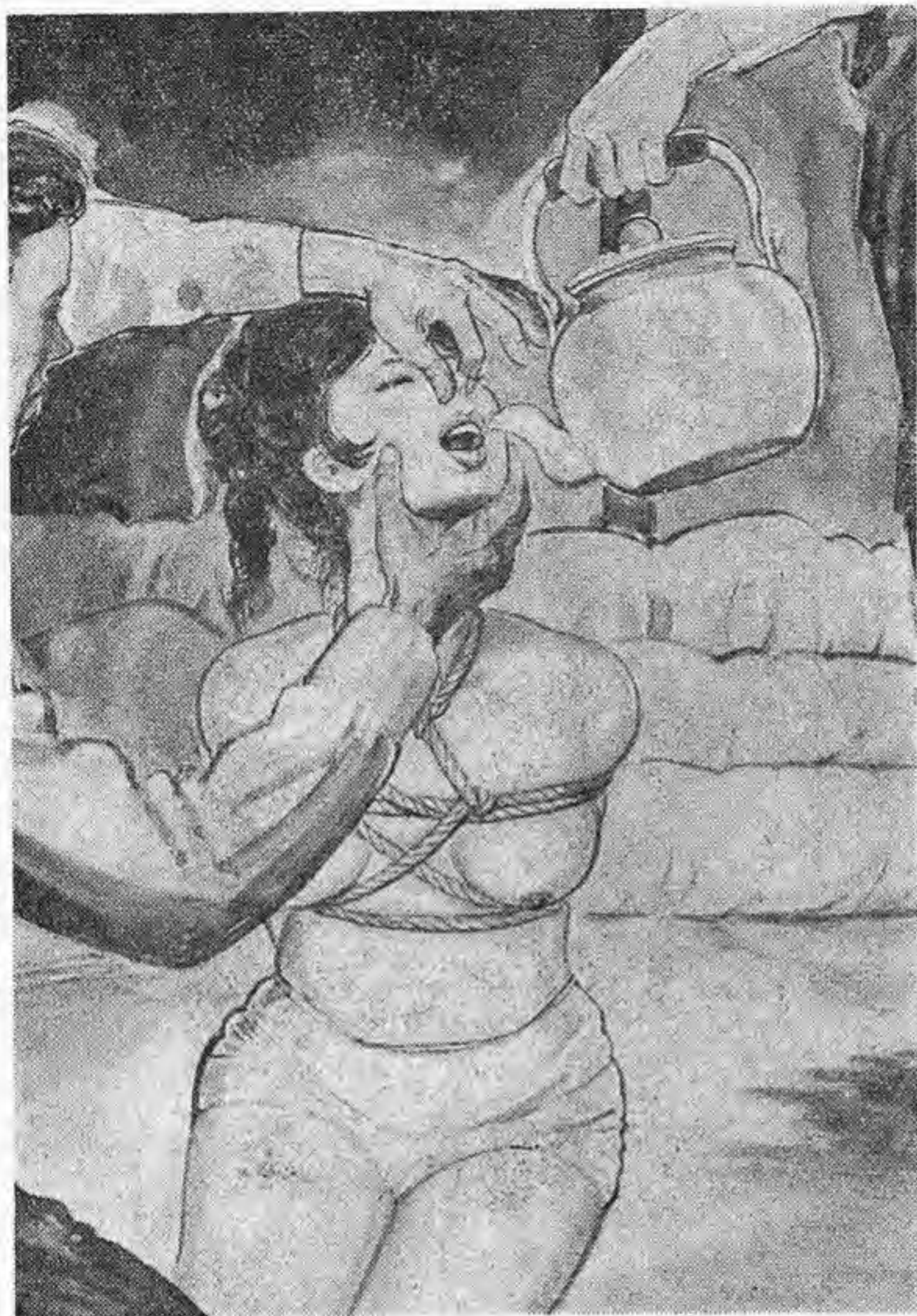
江に、たたき込むには十分だった。

×

×

本番を明日に控えて、ようやく細部の打合せが終わった。カモになる客に対する手配や、会場に使うキャバレーの照明の使い方。当日、客に着せる覆面や衣裳など、ピノキオ、ボロ武、修一の三人は

周到に準備を整えた。一号と三号の仕上りには問題ない。あとは逃亡を防ぐためにしない用心と、美紀との、打合せである。四号の久江は、まだ明日、使える状態ではない。「それじゃ、おれは帰るぞ。明日があるんだから、お前たちも身体を休めとけ」



イメージギャラリー

『ティー・タイム・サービス』

四馬

孝

と、修一が帰って行ったあと、残された、ぼろ武と、ピノキオは、もう何もする事はなかった。

「俺、ちょっと四号の調教をしてくるからな」
ピノキオが修一の帰るのを待ちかねたように言った。

「まだやるのか？ 好きだなあ、お前も……」
あきれ顔にボロ武が苦笑するのに、

「どうだ、お前も付き合えねえか。このところ少し、ごぶさたってえとこじゃねえのか？」

言われた通り、ここ数日のボロ武は、明日の準備のために忙しい毎日だった。

「そうだなあ」

「よし、行こう！」

ボロ武の同意を得て勢い込んだピノキオは、壁に掛かった皮鞭と電気鞭を手にとると、いそいそと隣の奴隷部屋へ向かった。

鍵があき、入って来た二人を迎えた奴隷女のうち二匹は、あわててピノキオとボロ武の靴に唇を這わせた。一号と三号である。

「どうした四号！ なぜ挨拶をせん」

意地悪いピノキオの声に、ビクツと肩を震わせた久江は、その場を動かなかった。

ユニホームともいうべき、透けて見えるほどの薄いパンティとブラジャー一枚の姿で、一号と三号から、この奴隷部屋のしきたりを教えられた久江だったが、それを拒んだ時に、どのような結果が待ち構えているのかは、知るよしもなかった。

「一号、三号！ どうしたんだ四号は？ ちゃんと教えてやらなかったのか？」

「いいえ、ご主人様。ちゃんと教えたんですが……ね、お願いだから、ご主人様に、ご挨拶をして頂戴」

一号が、四号の久江に哀願のまなざしを向けた。

久江は、まだこの場の成り行きを甘く見ていた。自分が言う事を聞かないために、一号や三号が、どのような目に合わされるのか、又、ピノキオの加虐が、目的のための手段などではなく、加虐自体を楽しんでいる事など知りようもない事だった。

「言いわけはいい！ このムチが、ほしいのだな」

手にした電気鞭を、ぐうっと一号につきつけるピノキオである。

「ヒエッ！ お、お許し下さい。どうか、そのムチだけは……私がわるうございました」

両手を床につけ、恥も外聞もなく土下座をする一号の様子が、電気鞭の威力を知らない久江にとっては、しらじらしいお芝居のように、うつったのも無理はない。

事実、一号にしても三号にしても、心から従順に服従している訳ではない。いつの日か、この悪夢のような場所から脱出するまでの

辛抱と、お互いに励まし合っては屈辱の毎日を堪えている二人である。いきおい、許しを乞う態度も少しオーバー気味になるし、ピノキオのムチ打ちを避けることも、少しずつ、のみこんできていた。

「三号！ お前はどうか。お前にも言いつけた筈だぞ！」

「すみません。よく言っただけです。でも……」

「馬鹿野郎！ そんな口の利き方を誰が教えた！」

ついうっかり自分を忘れて答えた三号に、ピノキオの電気ムチがさっと伸ばされた。

「ヒッ！ ヒエッ！ グウッ！ ギャア！」

人間の声とも思えないような、けたたましい悲鳴をあげた三号がその場に昏倒すると、だらしなく開いた両足の辺りに、みるみる黒い染みが拡がり始めた。

「四号！ そうじをしろ！」

何の交番もない、ただのアンテナの棒のようなものが、ただ触れただけで人間を昏倒させるほどの威力を持っているとは信じられない四号は、まだ大袈裟な芝居を見せられているような気持で、自分に言いつけられた言葉の意味を理解できなかったのである。

「そうか。お前にも、このムチの味を、教えとく必要があるようだな」

ピノキオは四号の久江に近づくと、無造作に電気ムチをブラジャーの中へ差し込んだ。金属の冷たい感触にビクツと身を震わせた久江は、まだその瞬間まで、今見せられた三号の狂態の意味が、つかめなかった。

「ふっふっふ」

卑猥な含み笑いをしながらピノキオの手は、にぎりのスイッチを

ゆっくりと親指で押したのである。

「イヒッ！ ギェッ！ うぐう！ ヒッ！ ヒッヒェッ！」

久江が生まれて初めてと喋っているいい声をあげた。ただでさえ敏感な女の乳房へ、ほんの少し触れられても身を貫く不快感におそわれる電気ムチを、完全に気絶するまで押し当てられたのである。電流は、脳髓をかきむしり、身体中を駆けめぐって、ぐったりと久江が動かなくなるまで流れつづけた。

×

×

木戸大造は年甲斐もなく、昨夜は、よく眠れなかった。SMクラブの入会テストが今日、行なわれるのである。入会できるかどうかは先方次第で、何とも心もとない話であるが、今日は二匹の新しい女奴隷のお目見えがあるということである。

映画や芝居では見た事のある女奴隷も、現実のそれは、まだ一度もお目にかかった事がない。いやそれどころか、毎月のように購読しているSM誌の中に表われるマゾ女にすら、一度も出喰わした事がないのだ。第一、そんな都合のいいマゾ女が、そう沢山いるわけではないし、また仮に、いたとしても、自分からマゾ女である事を世間に吹聴する筈はないのである。告白手記と銘打って掲載されている投稿作らしい告白文も、詳細に読めば、どこか作り物めいて創作くさく感じる。よく女性名で掲載されているそれも、大造のように一度もSMプレーの経験を持たない読者が読んでも、作者が男ではないかと疑われるような文章が多い。大抵のSMは雑誌の末尾に読者同志の交換室や通信欄を設けているが、そこに寄せられている手紙の内容も、どこまでが本当か疑わしいものが多い。大造のような小心者は、その欄を通じて呼びかける勇氣など、とても持てなかつ

たし、また女性名で男性の奴隷になりたいと書いてある手紙のマゾ女に対しても、うっかり手紙を出したりしたら、とんでもない事になりそうに思えるのである。

事実ひどいになると、実際の名前で出ているそれが、当人の全く知らない間に出された手紙で、突然に舞い込んだ露骨な誘いの手紙に驚いた人が警察に届け出たりして一騒動、持ち上った噂などを知るにつけても、うっかり自分の本名で、その種の雑誌の呼びかけに乗ったりして警察に調べを受けるような事にでもなればと思うと大造も慎重にならざるを得なかった。

そんな大造が、ついSMクラブの会員募集に応じる気になったのは、会の状態が、はっきりするまで自分の正体を知られないで済むという事が魅力だったのだ。いや、これは何も大造一人ではない。この募集に応じた人の大部分が、大造と同じような気持なのだ。中には堂々と本名で応募した人もいないではないが、SMコァンと称する人の大半が、大造と同じような善良な社会人であり、自分の特異な性癖に対して、甚しい恥らいとコンプレックスを抱いて日夜、暮しているのである。

しかも、SもMも、それぞれに、その好みがあり、強度なものやごく軽度なものまで千差万別なのである。大造などは、おこがましくもSMクラブに入会を希望したものの、果して自分にその資格があるかどうかすら、疑わしいのだ。女を逆さ吊りにしてムチを振るい、皮膚が裂け血が流れて相手が失神するまで止めようとはしないサジストから見れば、大造など、えせサジストもいいところで、大造の願望など稚戯に類した事と軽蔑されそうなものである。

サジストの語源を残したマルキド・サドが、墓の下から苦笑しそ

うな、ささやかな大造の願望が今夜、叶えられるのである。まだ一度も実際に見た事のない世界が、今夜のぞけるかも知れないのだ。大造ならずとも胸を躍らせて一睡も出来なかったのも無理もない話であろう。

「どうぞ、こちらへ……」

控室のようなところで、黒いマントと三角頭巾の覆面をかぶらされた大造は、薄暗い廊下を通って、フロアーのボックスへ案内された。正面は一段、高い舞台になっていて、その場所がキャバレーである事が大造にも察しられた。途中、迎えの車の中で目隠しをさせられて、どこへ連れて行かれるのか不安だったが、自分と同じかっこうでボックスに腰を下ろしている人達の姿を見て、ようやく、ほっとした大造である。

暗いボックスではあるけれど、たしかに二十人位の人影が数えられた。いずれも黒い三角頭巾をしていて、年令はおろか、男女の区別さえ、定かでなかった。

「大変、お待たせをいたしました」

大造を始め、その場の三角頭巾の人達は、その声が電話で聞いた事である事を悟った。

「本日は、ようこそ当会に、ご出席頂きまして、有難度うございます。まず皆様方に、お詫び致さねばならない事態が生じました事をご報告致します。本日は我々のSMクラブの例会を行うつもりでありましたところ、いつも利用致しております会場が、都合により使用できなくなりました。これが、いつもの例会ですと、又、日を改めてという事に致すところですが、何分にも本日は入会をご希望なさ

っていらっしゃる方々にも約束を致しましたあとでもあり、こちらから延期や、中止の連絡をしようにも、皆様方の住所をお聞き致しておりませんので、急遽ここを臨時に借受けまして皆様方を、ご案内致した次第です。本来ならば、当会の例会に出席して頂き、我々のプレーぶりや、奴隷の調教を見て頂けるのですが、ここには、そのための用意がございません。従いまして、今日行う予定でありました入会テストは、又、別の日を選んで行いたく思っております。しかし、折角、今日の日を楽しみにしておられた入会希望の方々をこのままお帰し申し上げるのも忍び難く、そこで本日は、この度、新しく我々の所有物となりました女奴隷を二匹、お目見えさせまして当会よりのご挨拶に、かえたいと思います」

突然、舞台の上手にスポットライトが当たった。と、女が突きとばされたように、つんのめって姿を現わした。そのうしろから、プロレスラーの悪役がかぶる覆面をつけたタイツ姿の男が、手にロープとムチをもって、つづく。

「よし、そこで止まれ！」

マイクロホンの声に、ビクッと立ち止まった女は、赤いイヴニングドレスに身を包んだ洋子であった。うしろの覆面男は、言わずと知れたピノキオである。

「よし、服を脱げ！」

奴隷一号の洋子は、右手を背中にまわしてジッパーを引き下げると、ゆっくりと恥らいを込めて脱ぎはじめた。

「よし、そこに坐って挨拶をしろ！」

肌が透けて見える薄いパンティとブラジャーだけの一号の姿は、却って全裸で見るよりも煽情的だった。正面を向き、正座をして、

恥らいながら両手を床について深々と頭を下げる一号の様子を見たボックスから、かすかな、ため息がもれ、それは、さざ波のように拡がっていった。

「両手を、うしろに組め！」

マイクの声に、一号の両手が、おずおずと、うしろに、まわされる。

「高手小手に縛りあげろ！」

長いロープを手し、一号のうしろに控えていたピノキオが、躍りかかるようにロープを、かけはじめた。鮮やかな手つきである。背中の上から、のしかかるように、うしろ手にくくった両手首を、ぐいぐいと高手に吊り上げる。もう何度も縛られて経験済だったが、腕も折れよとばかりに引き絞られた苦痛は、一号が、かつて一度も味わった事がない、厳しい緊縛だった。

「ううっ！ つう……」

みだりに声を出すなど、予め申し付けられていたが、その余りの苦しさ、つい一号の口から苦痛の呻きが洩れた。

「立て！」

マイクの声は、冷酷に何の抑揚もなく、ひびく。一瞬、立ち上ろうとした一号だが、思い切り高手小手に縛られた身は、すぐには平衡がとれずに少し、もたついた。ビシッと待ち構えたようにピノキオのムチが床を叩いた。

「ヒエッ！ お許し下さい」

悲しい性^{さが}であった。二カ月に涉って続けられたムチによる調教はムチの音に対して反射的に屈服の姿勢と言葉を、さそってしまったのだ。

うしろ手の縄尻を、ぐいっと吊り上げられるようにして立ち上がった一号に、

「よし！ 両足を開け」

とマイクの声が容赦のない命令を下す。

「ああ……」

一号の口から声にならない、ため息が洩れた。ライトを浴びているので目の前の様子は、よくわからないが、何人かが自分の方を凝視しているのが感じられる。あの地下室の奴隷部屋で、今日のために、もう何度も練習を重ねさせられた一号であったが、まるで中世の奴隷市場の見せ物のように、殆ど裸に等しい姿で両足を開く屈辱感に、しばらく忘れていた熱いものが目に、したたり始めた。

「股間縄をかけろ！」

マイクの声が終らないうちにピノキオの手は、余ったロープを一号の股間にくぐらせると、うしろから一号を抱きしめるような形で引き絞った。

「ヒエッ！ ヒッヒッヒエッ！ ううっ！ ああ、おゆるし……いたい、お許し下さい！」

練習にはなかった股間縄である。やや細目のロープは、薄いパンティの上から、ぐいぐい苦痛を加えてくる。両足を、みじめに開き正面を向いて苦悶する一号は、屈辱も羞恥も忘れて耐えに耐えた。ボックスに坐っていた大造は、思わず無意識のうちに腰を、ずらした。五体のすべてが狂いだし、じっとしてられないような血のたかぶりが始まったことを感じながら、大造の視線は釘付けになって舞台の責めを凝視していた。

カット・岡 たかし



友達の警察官が僕に言った事がある。

「私は幽霊は怖ろしいと思うが、生きている人間は全然、恐くは無い」と。いかにも警察官らしい心構えであると思った。

人によっては、幽霊や死んだ人よりも、生きた人間の方が怖ろしいという。ある意味では、ごく当然の事であり、むしろ、その方が現実的である。僕も、やはり生きている人間も恐ろしい。しかし、年甲斐もなく未だに存在しない事がわかっていながら、幽霊もまた凄く恐ろしいと思う。

子供の頃、夏になると縁台で涼んでいて、

△奇妙なマゾの告白▽

『暗闇、穴』悪霊に

魅せられた男

岩元

浩

近所の上級生や大人から怪談話を聞かれて、キヤアキヤア騒いだのを覚えている。暗い夜道を一人で帰る時、駆歩で帰ったり、大声で歌を唄いながら怖ろしさをまぎらした事も、よく有った。子供心にも、そんな事は大人になれば感じなくなるものだと考えていた。

しかし、お恥かしい話だが、大人になった今でも、真暗な森の中の夜道なんかを一人で歩く時は、やはり恐いと思う。いや、この程度だったら、おそらく誰でも感じるものではないだろうか。

最近では墓場といっても、賑やかになり、夜

でも照明物が、やたらと増え、昔のような陰惨なイメージが無くなってきているので恐さは少ない。それに世智辛い世の中になったので、夜中でも車のライトや音、それに、やたらと人もよく通る。僕の今、住んでいる所は今でこそ団地なんか出来て賑やかになったが十年程前は、殆ど家もなく松林だった。

それが、たった十年で、この変わり様だ。アパートも沢山、建った。その住人達は、おそらく知らないと思うが、あのアパートの下に昔、野井戸があって、その中に殺されて投げ込まれていたのを僕は知っている。いや、

昔から、その附近で住んでいる人なら誰でも知っている筈だ。平和な村に突如として起った殺人事件だったからだ。

最初の発見者は野良仕事にきた農家の主婦だった。僕は偶然その場所に居合わせたのであるが、警察の白いテントの間からコチコチになった死人の青白い足が見えたのが、当分の間、忘れられなかった。だが、今は、そんな事をいつている程、のどかな世の中では無く、ブルドーザーが山も木も井戸も一緒に掘り起して、宅地造成に大忙しだ。

ああ、ここで僕の事をいっておこう。僕は今年三十三才の男、職業は土方をしている。

僕は仕事場で奇妙な体験をした。それは、決して偶然に出くわしたものでなく、僕自身が、その方へ、その化け物の方へ、この身を投じて行ったものと思う。意識的に――。

僕の体験。そして、僕の変な性癖を聞いてもらいたい。僕のような人間も、世の中には他にも居るのかどうか、大変興味がある。

僕は仕事の関係上、夜勤もたびたびある。

鉄橋の夜間工事、鉄筋の建物の穴掘り、土管の埋設、排水工事、等々、夜の仕事は至って多い。さっきもいった様に、僕はとても怖がり屋なのだ。しかし、何時の場合でも、た

った一人で仕事をするという事はない。必ず仲間がいるので、僕にとっては助かる。

その荒くれ仲間、僕がこんな「怖がり」である事が知れたら、それこそ、皆の笑い者になってしまう。それなのに、僕は特に真暗闇には異常なほどに恐怖を感じるのだ。

ある日の事である。仕事終了後の夜食時、そう、夜の十一時頃であった。現場から持ち帰る筈の茶瓶ちやびんが来てないので、事の成り行きで僕が取りに行く事になった。

何の気なしに飯場はんばを出たのは良いが、ほいしまった、と思っても後の祭である。茶瓶のある所は、もうすでに真暗闇である。といって、一旦、出掛けた大の男が、今更、怖いからといって引返すわけにも行かなかった。その場所に茶瓶はある筈なので、まさか無かったともいえないし、僕は困り果てて胸が締めつけられる思いだった。

とにかく電池を取りに一度飯場へ戻った。なんとか口実はないものか、なんとか自分が行かなくても良い方法はないものかと考え、心が動揺した。自分が怖がりでなければ、さげなく人に頼めたかも知れない。が、今更人に頼むのも不自然である。自分が怖がりであるという事実が人に頼むのを拒んだ。

恐怖のあまり顔が、ほてって来た。まさかいい年をした大の男が、恐ろしくて行けないとは、どうしてもいえなかった。仕方なしに重い足どりで現場近くまで行くと、その前で僕の足は、はたと止まった。真暗な建物の入口を見ると益々恐ろしくなってきた。

「何を、もたもたしている。早く取って来なければ駄目じゃないか。いつ迄、こんな処につっ立ってるんだ」と自分自身に、そういい聞かせた。私は無理に平静を装おうと心掛けた。さっき迄、ほてっていた顔は、今は逆に血の気が引いて、ひきつっている様だ。

僕は意を決して、こわごわ建物の中へ入った。四方を囲まれているので、外と違って物音をたてないのが、怖さを紛らわす方法だった。ここで物音を出せば、急に何かに襲われるような錯覚に陥るからだ。僕は忍び足で、そろそろ歩いた。そうする事によって、この中にいる僕に、これほど迄に恐怖心を与えている何物かが、目を覚まさない様な気がした。

もし今此処で、僕の気配に気付き、野良猫でもガサッと音を立てて走り出したとしたら僕はおそらく気絶して、ひっくり返っただろう。それに騒音を立てる事によって、この暗闇の中の僕の存在を知らしてしまうことにな

る。この場合、僕は自身の存在を否定しなければならぬ。自身の存在を認めてはならないのだ。生きている事を強く意識すればする程、恐怖心は増すのである。

もう逃げ場はない。そう思うと、更に恐怖心が増した。どうだ、この全身からスーッと血の気の抜けて行く様な恐怖感。まだ茶瓶のある場所迄は相当、距離があった。なんて遠いんだ。この二十メートルが二百メートル三百メートルの遠さに思えた。気が滅入りそうであった。立っているだけが、やっとであった。僕の横から、そして後ろから、何かに狙われている様な気がして来た。

それでも気を取り直して少し宛、進んだ。今迄オドオド、ビクビクしていた自分に変化が起りつつあることに気がついた。何時の間にか、もう自分は、どうにでもなれと思う様になっていることに気が付いた。それは糞度胸が坐るというのではなく、全く逆の、恐ろしさの余りに神経が麻痺したために観念した様な気持だった。今迄の恐怖感の蓄積が、既に快い被虐的な陶醉に変わっていた。

ようやく、その場に辿り着いた。その場に茶瓶はあった。しかし、これから又、今来た所を帰らなければならないのかと思うと、ゾ

ツとした。

さあ、後もう一息だと自分にいい聞かせて行こうとした時、僕はふと、すぐ左前方にある一メートル平方の地下室用の入口に目が吸い寄せられた。それは天窓の様になっていた。なぜか僕は、じっと、その穴を見つめていた。

怖い怖いと思えば思う程、僕の被虐的な悦びが、ふつふつと湧き上ってきた。こんな形で、僕の短所がある意味で長所になるなんて世の中、良くしたものだと思った。

僕の体は、引きつけられる様に、ふらふらと、その天窓に吸い寄せられていた。見るからに不気味であった。

中を覗くと真暗で、何も見えなかった。何も見えない事が僕を更に恐怖に落し込んだ。この穴が自分を見えない糸で、たぐり寄せている様に思えて来た。僕の目は、ただ果然とその中を見詰めていた。

「何をしている。早く、この場から去れ。こんな恐ろしい所から、早く立ち去れ」

僕は心の中で自分に対して、そう叫んだ。すると、もう一人の僕がいった。

「お前は、この中へ入りたいんだろう。何をためらっているんだ。早く入るんだ」

僕は竦んだ様になって、その場を動く事が出来なくなっていた。蛇に見込まれた蛙も、恐らく、こんな状態になるのだろう。

僕は夢遊病者の様に、鉄梯子を伝って、その穴の中へ身を投じて行った。足から腰と、徐々に暗い闇の中へ下りて行った。ゾクゾクする快感が、僕の体を、すっぽりと包んだ。

僕は、すっかり穴の中へ没入した。もはやここ迄来れば、もう恐怖心も観念した気持ちになり、更に被虐の悦びさえ、生じて来た。

何年か前の本誌で、長岡変一郎というマゾヒストが、誰もいない夜中を見はからって、田舎の肥溜めの中に、とっぷりと首まで我が身を投じて漬り、いい知れぬ快感に浸ったという告白文を読んだ事がある。

当時、それを読んだ僕は、若いせいもあった、それを滑稽以外の何物にも感じなかったのだが、今は違う。本当のマゾヒストという者は、そんなものではないだろうかと思う様になった。汚い所へ身を投じるのも、恐ろしい所へ身を投じるのも、結局、同じ事の様に思える。

事実、僕自身、今、その様な体験をしている。どちらかといえば、僕の場合、プラトニックな要素が多いと思う。

僕にしたって、女学校の便所の中、女性専用の排泄物の中なら、何の躊躇もなく、そのドロドロの中へ素裸になって、身を漬けるかも知れない。いや、それが出来ると思う。

こんな自分のマゾヒスチックな性癖も、自

分本来の先天的なものと思い込んでいたが、嘗て読んだ長岡交一郎氏の告白文が、何らかの形で僕の体に影響して、僕が、こんな事に共鳴しているのかも知れない。

僕の場合、いずれにせよ、被虐の願望があ



イメージギャラリー

『謁見の儀式』

マエダヒオミ

るのだが、対象になる相手に恵まれない為、自然に、この様な形で欲望を充たす様になったのも、至極当然であるとも考えられる。

高校を卒業していながら、土方という職業を選んだのも、一つには被虐心の満足の為かも知れない。排水工事なんかで、道路脇に溝を掘っている時、僕の顔のあたりを若い女がハイヒールの音も高く、「なんだ土方か」という蔑みの目で見下しながら歩いて行くのを眺めたりしたら、僕はいい知れぬマゾの感覚に胸を熱くするのである。

シャベルと鶴嘴を手に、汗にまみれて穴を掘る人夫に、職業の貴賤はないといっても、最低ギリギリの肉体労働に頼る僕達に対して世間の目は冷たくても温かくはない。しかしその様に肉体だけを唯一の元手に汗と土埃に塗れて働く自分に、限らない被虐的な歓喜さえ味わう僕なのだ。

話が、ちょっと横道へそれたが、その時である。「おい」と人の呼ぶ声がした。誰かこの建物の中へ入って来て、僕を探しに来ているのだろう。僕は、その声に、「はっ」と我に返った。「あっ、そうだ。あれから大分時間が経っているんだ。すっかり忘れてしまっていた。茶瓶を持って帰るんだった。どう

しよう」と思案している時、男は、どんどん中へ入ってきた。

「おい、おい」声は、どうやら、親友の田中らしかった。僕は息を殺して、じっとしていた。田中は暫くあたりを見回している風だったが、人の気配がないので外へ出て行った。僕は、今の中に、この穴から出なければと思い、穴から出て建物の外へ出ようとした時、入口付近でバッテリーと田中と出くわしてしまった。

後で会ったのなら小便をしていたと胡魔化すつもりだったが、田中に、この建物の中から出てくるのを見られてしまったので、僕がどぎまぎしていると、田中がいった。

「おい、どこにいたんだ。お前の帰りが、あんまりおそいんで、どないしてるんかと心配して見にきたんや」

僕は咄嗟に、こんな事を口走っていた。

「ううん、ちょっと気分が悪くなってな。休んでいたんや」

「あれっ、どこにいたんや？ さっき、見に行った時、お前、いなかったぞ」

「うん、あのブロックの横の所だと思うが、いや、あの材木の後だったかな」

僕は、しどろもどろの言訳をした。僕にマ

ゾヒストの性癖があるだけに、なんでもない事を、どうしても不自然に言訳してしまう。

複雑な気持ちで食事を済ませたが、その事が気になって、さっぱり味はなかった。

その夜、寝床の中で一人考えた。もし肥溜めの中に入っていて通行人に見つかったら、どう言訳するだろうか？僕はそんな事を真面目に考えてみた。変な話だが、なぜか人事とは思えなかった。道を歩いていて、よろけて、その中へ落ち込んだというのか、いや、それも不自然だ。そこで僕は考えた。

昔から、狐に化かされて風呂へ入ったつもりが、気が付いてみると、肥溜めの中であつたという話は、よくある。これも、こうした類の人間の苦しまぎれの言訳ではないかと僕は、かんぐるのである。狐に騙されて肥溜めの中へ入っても、又自分から好んで入ったとしても、入った事には変りはない。だが、入るに至った動機が違っているのである。

僕の場合、偶然、大人になって、その様な体験をしたわけであるが、その潜在意識となるものは、子供の頃にも経験しているのである。意識的に、僕の持ち合わせているマゾヒストとしての虫が、再び今に至って動き出したのだと思う。

僕の通っていた中学校の校庭の裏に、小高い丘があつて、その麓にコンクリート造りの昔の防空壕があつた。昼間は探偵ごっここの格好の遊び場で、三人、五人と一緒に真暗な穴の中へ入って、きゃあきゃあ、騒いだものである。出る時は怖がりの僕は、いつも誰よりも早く出たのを記憶している。一人で残るといふ事は、とても耐えられぬ位に怖かった。

入口の鉄の扉は錆ついた頑丈な鍵が掛かつており、小さな天窓だけが子供の出入口となっていたので、穴の中は昼でも真暗で、ひやっとした感じが、とても気味悪かった。

それでいて、僕は一人で、その真暗な防空壕の中へ入って、怪しい雰囲気にとっぴりと漬つてみたいという気持ちにかられた。皆と一緒に入って、出る時、取り残されそうになつて、恐怖でスーッと自分の体が穴の奥へ吸い込まれそうになる、あの感覚が、とても、たまらない魅力であつた。全身がブルブルとふるえ、思わず小便をチビリそうになる恐怖感が、今ではマゾヒストの快感となつて僕の体に住みついていくのだろう。

その真暗な穴を見つめていると、ゾクゾクする様な快感が僕の身内を走るのだった。穴の中に入りたくて、入りたくて、仕方がない

様になってしまった。僕が、この穴の中に静かに深く身を沈めた時、僕はすでに僕自身ではなくなるのであった。

何かしら、目に見えない絆に、雁字搦目に縛り付けられているのだった。怖い、怖いと思えば思う程、それが妖しい被虐の悦びとなってしまうのだった。恐怖の余り、目を閉じ穴の隅っこで体を縮めて小さくなっていると更に恐怖心が増してくる。

少年時代の防空壕の、あの暗闇の経験が、三十才を越した今でも、僕の体を支配しているという事は否めない。真暗な穴の中へ入ってみたいという気持は今でも変りはない。その場合、必ず足の方から入って行くのが好ましい。そして体全体を没入してしまうだけでなく、穴、又は床から首だけ出しているのも又、変った別の味がある。

僕は自分の職業柄、解体作業に行った時など、今にも倒れそうな古家に出くわす事が多い。そんな狐狸の棲む様なアバラ家へ、たった一人で入って行くのも好きだ。真黒に煤けた古い家の床の節穴に、指を突っ込んだ時のあの指先に感じる何ともいえない気味悪さ、ゾクゾクとする様なあの感触……。

破れた壁の穴、腕の一本位入る隙間を見つ

けて、その真暗な中に腕を挿し込んで、じっとしていると、今にも他の冷たい手が自分の手を握ってくるかと思えて、不気味にくる。その不気味さをこらえていると、もう体全体が蕩けそうになってくるのだ。これは被虐心に通ずるものだと考えるのだが、果してどうだろうか。他にも、僕と同じ様な経験者はいるのだろうか。

僕にとっては、暗闇にある未知なもの、それに、穴とか隙間の様な外部から見えないものが無類の恐怖心呼び起すのだ。これは暗闇恐怖症とか、密閉恐怖症とか称するものなのだろうか。例えば入口の鉄の扉にはガッチリと鍵がかかっていて、天窓も閉まっていてもう自分は、どこへも逃げられない、と想像するだけで、もう居ても立ってもおれない様な恐怖心にかられるのだ。

そんな事を空想した時は、口の中で「助けて、助けて」と叫び、一人で悶えるのだが、そうする事によって、或種の快感を覚える事も事実である。今はもう皆、電気釜式になったので姿を消したが、以前は昔式の煉瓦造りの死体焼却炉があった。その中に一晩中、入っていた事もあった。それから、僕は古いお寺の床の下やお堂の床下へも潜り込んで一夜

の宿をとった事もある。だが、この場合は、余程注意しないと、泥棒と間違われる事があるので、その意味では、防空壕や死体焼却場の方が無難であるかも知れない。

僕が毎夜毎晩、夢遊病者の様にフラフラと暗闇の中にさまよい出て、穴に吸い込まれて行く光景を人が見たら、さぞ不気味に思えることだろう。この僕の話に共鳴された方は、一度、試してみると良い。解りそうな気がする人も、やって見られると良い。

最初は恐怖心ばかりで、抵抗を感じるかも知れないが、しかし、僕のように、この様な要素が多少でも有る場合、やがて、それが快感となってくるだろうと思う。

私が数年前、あの長岡交一郎氏の告白文に共鳴した様に――。

それから最後に、これは、もう、僕は金輪際、誰にもいわないでおこうと考えていたのだが、僕には、もう一つ、それはそれは、怖ろしい物がある。

その為に、僕は此の年迄、結婚しないでいるのだが、それは女の髪の毛である。この世の中に、こんな怖ろしい物はない。

――（おわり）――



S & M の考察

塚本鉄三論……点描

△S Mルポ・ライター第一人者としての

塚本鉄三氏をM女性の面から考察してみる▽

前 河 恵 一 郎

△苗木陽子の巻▽

最初に断っておくが、私は決して奇ク二十数年の歴史にふさわしいような生え抜きの古い愛読者ではない。いわば、近々、ここ数年来の気まぐれな読者、S Mについても、ほんの駆けだしに過ぎない。

それが臆面もなく、こんな大それた文章を書くようになった動機と言え

奇ク十二月号で、塚本氏のカメラルポ『畜化願望の女』を読んで感激したからに外ならない。

△カメラルポ▽は、私の最も愛読しているものの一つであったが、特に十二月号の文章は素晴らしく迫力に満ち満ちていた。

“苗木陽子”という初対面の女が一段と光彩を放っていて、氏の辣腕はさすがだ——と、感心した。陽子さんのフォトを一瞬見て、私はもう、胸が打ちふるえ、今までにない、夢

幻の世界を、しばし彷徨した。

むくむくと、肥えるだけ肥えるにまかした淫猥なまでの肉塊。白豚と呼ばれる、よくもここまで羞かしげもなく肥満させたと思える脂ぎった女体——。それが、ひとたび、氏の手にかかったら、まったく素晴らしいの一語につきる苗木陽子に変貌してしまっていた。

だぶだぶの、零れそうな腹。皮肉に深く喰い込んだ縄。剃毛のギリギリにまで露出したふっくらとした丘。それらを見てみると、股間縛りに痛めつけられた花芯や、また浣腸されたアヌスが目に浮かんでくる。もう、どれもが、すべて、たまらなく刺激なのだ。

苗木陽子さんの白豚は、まったく素晴らしい一語につきる。だらりとたれた肉塊は、淫猥そのものでありながら、縛られ、責められると、これほどまでに美しくなる女性も珍しい。

平常は、上品で淑かな婦人が、一旦、白豚いや、牝豚になってしまうと、これほどまでに淫らなケモノになり下ってしまうのだろうか、私は自分の目を疑った。そして、この淫らな肉塊が、氏の手にかかって縄掛けされてしまうと、これほどまでに責めの極致の美態を見せるとは、まったく驚きである。

塚本鉄三氏こそ、奇クに

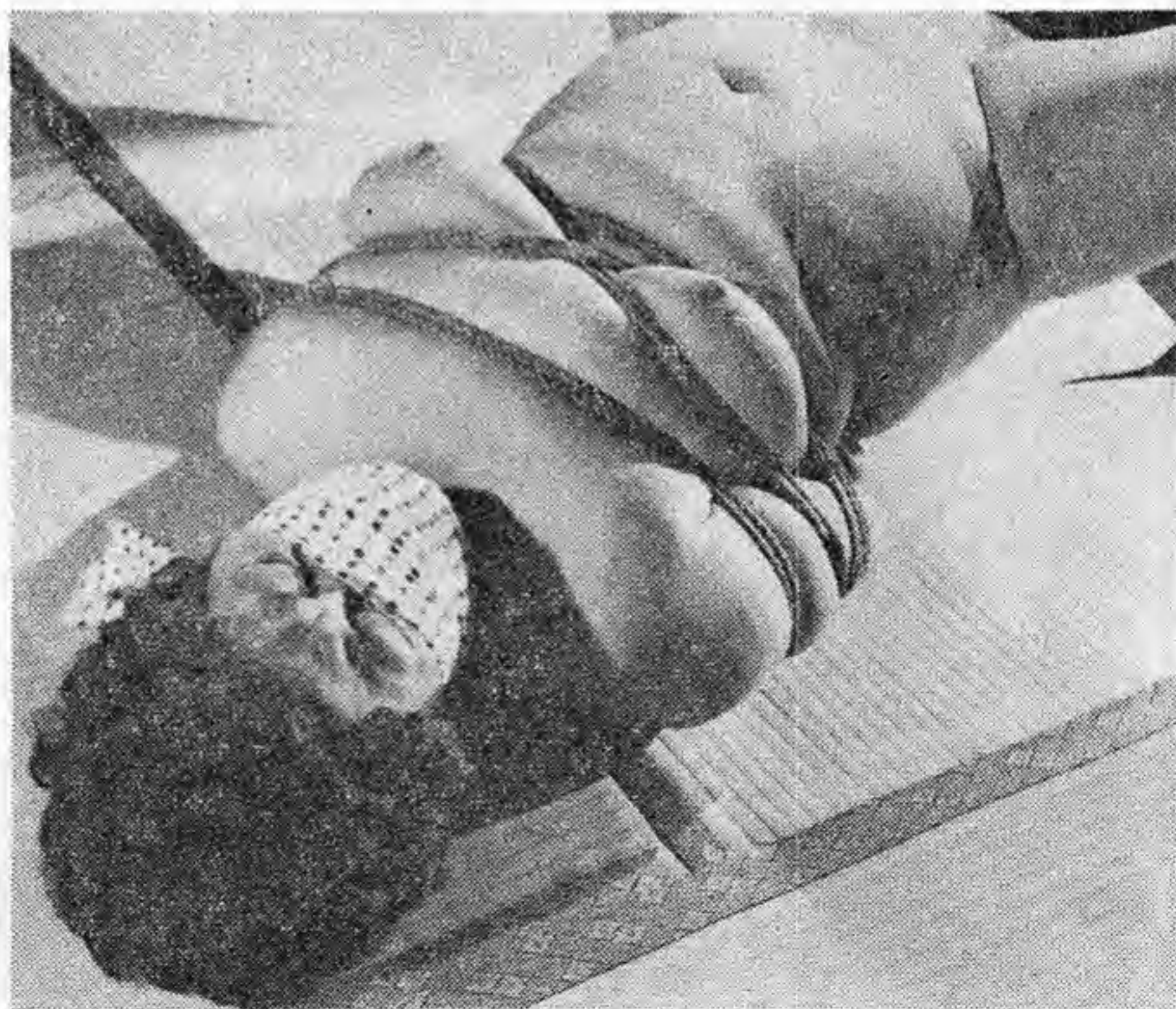
は欠かせないベテラン・ルポライターである。若くて瑞々しさの溢れたバイタリティが満ちている。私のようなSMマニアの駆け出しには、限らない親近感を覚えるのである。辻村氏の枯れたSMを過去のものとすれば、塚本氏こそは、次の奇クを背負うパイオニアといえよう。

☆

苗木陽子の飼育で、私が一番感心したことは、初対面の女性を氏が一日にしてこれまでに仕上げたということである。

聞けば、陽子さんは、この日、初めて縛られ責められたということである。い

わば、SMに関しては処女地といえる。それを、これほどまでに完璧に近いルポを書けたということは、氏の並々ならぬ敏腕を示すとともに、過去の経験の深さを物語っていると



いえよう。

十二月号のカメラルポは、今までにない最高傑作といってよいだろう。私の受けた感激もまた最高だったからだ。

次に、お世辞にもスタイルが良いとは言えないし、また年令的にも若いとは言えない苗木陽子を、これほどまでにSファンを熱狂させ、狂喜させる迫力のある素材として活用した氏の情熱と執念には頭が下った。

塚本氏の体当りの文字通り、身を挺してのルポは、その卓抜した写真技術とともに、私の高く評価している処だが、この十二月号の苗木陽子では、最高に發揮されたと思っている。小手先の文章の綾で読ませたり、空想で書いたような皮相的なルポ記事は多い。

それは読んでいて、敏感な私達マニア独特の嗅覚が、すぐに嗅ぎ分けてしまうものだ。そうした、お座なりの文章は、「これはホンモノでない」と、即座に感じとってしまう。

塚本鉄三氏の文章は、そこが違う。体験に裏打ちされた重量感のあるタッチは、実写真を待つまでもなく、そのすさまじいばかりの迫力が、読む私達の胸に突きささってくるのである。体験した者でなければ絶対に書けない真実味溢れる血のにじむような文字が、単なる文字の羅列としてではなく、生きたルポ記事として、私達に迫ってくるからだ。

SMブームといっても、空想や想像で書いている作品の如何に多いことか。今や、私達

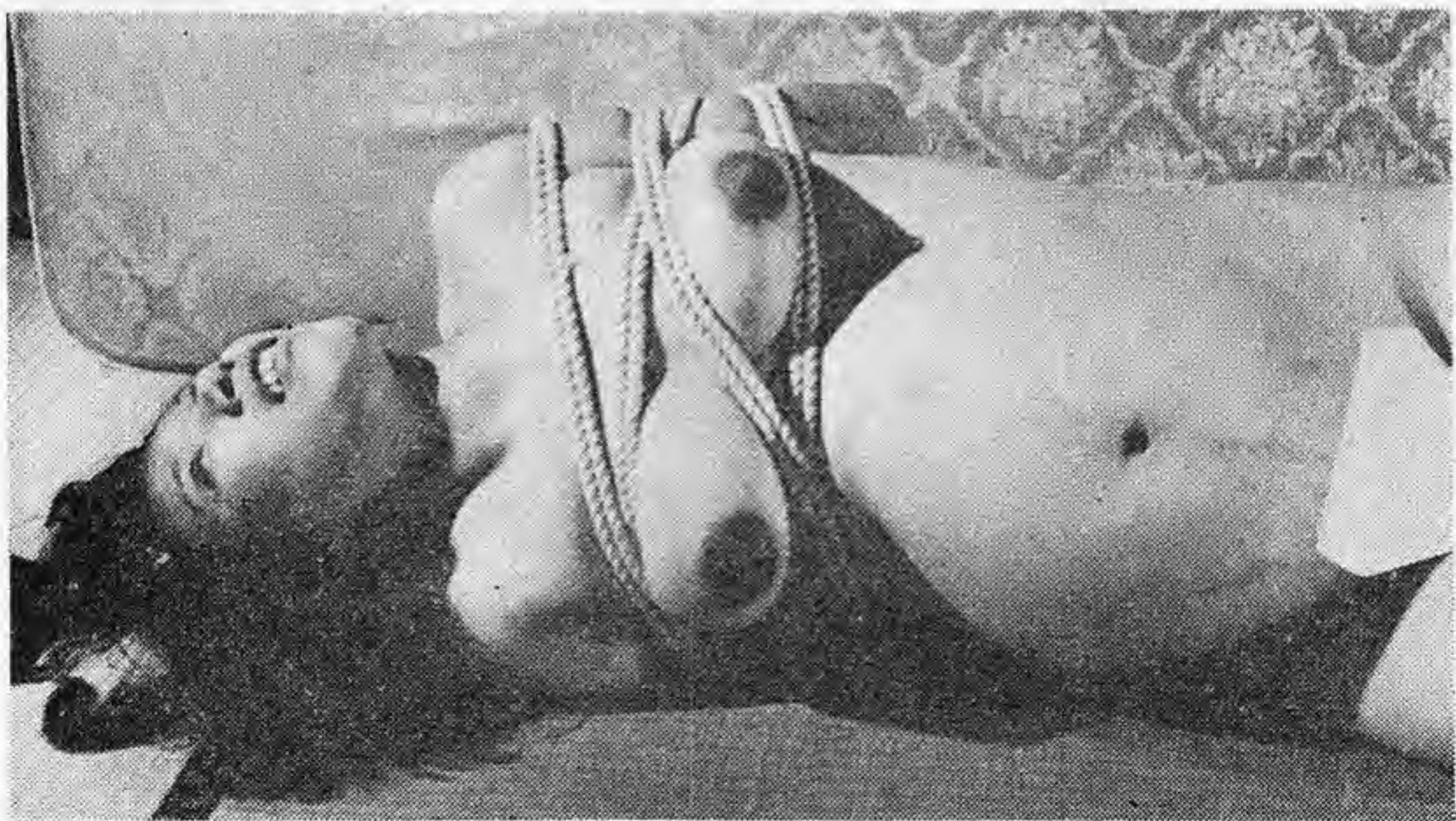
は、そうした通り一遍の急造的なSM作品に食傷しきっている。私は、声を大にして、そうしたSMマニアに、奇ク十二月号の塚本鉄三氏のカメラルポ△畜化願望の女▽を読んでみなさい。そして苗木陽子の写真を見てごらんない——と叫びたい。

塚本氏の手腕は、一躍、苗木陽子をSM舞台のスターダムに推し上げてしまった。私はこれからのM女としての彼女の進境に、多大の興味を持っているが、必ずや、さらに素晴らしい開花の成果を、今後の誌上で展開して見せてくれるだろうと、大いに期待している。

△南加津子の巻▽

奇ク十一月号のカメラ・ルポで塚本鉄三氏が取り上げておられる南加津子は、△臨月の妊孕美を暴く▽と題した、まことにルポらしいルポ記事であった。

出産間際の便々たる太鼓腹は、それ自体、こうしたSM雑誌においても、容易に眺められるものではないが、さらに、その上、ギリギリと高手小手に縛られているのであるから私達SMマニアに





としては、まったく、こたえられない魅力のある女体緊縛写真であった。

ここにも、氏の体当りのな若さとバイタリティが満ち溢れていたが、同じく奇ク九月号で、△M女加津子がすすり泣くとき▽、そして、さらに一号前の八月号で、△同棲時代の甘い優雅なSM生活▽の二つのルポが発表されていて物語的な魅力が、倍加していた。

それは氏が、南加津子というM好みの若妻を妊娠中期から末期、出産直前に至るまで飼育していった過程が詳述されていたからで、私達初心者にも、大いに参考になった。

先ず私は、南加津子の写真で、その腹部が八月号——九月号——十一月号と号を追うにつれて、すなわち、彼女の妊娠月が加わってゆくにしたがって、目に見えて大きくな

って描写されているのを見るにつけ、氏の偽りのなき、ルポ精神を知って嬉しく思った。

「南加津子」という初産の若き妊婦を追って数カ月にわたって、△マゾの妊婦▽の神秘を追求したことは、他に類例のないことで、その労を多とするものである。他にも妊婦の記事は、特に奇ク誌上においては、数多く散見していたが、この塚本氏のカメラとペンによる南加津子の三回の連載は、正に圧巻といってよい。その鋭敏な観察力と適確な描写によって『M女加津子』が、私達の眼前に、いきいきと生きたばかりでなく、風俗文献誌としての奇クの紙価を高からしめた。

例えば奇ク八月号の氏の文章で、三十三頁に次のような初めて逢った時の描写がある。△私は気軽に、そう言って椅子から立ち上がり彼女に近づいて、軽く肩に手をかけた。

私は、はっと驚いた。

彼女の全身がオコリのように、ガクガクと激しく、ふるえているのである。

もう、立っているのさえ、おぼつかなくて部屋の隅に身体をもたせかけて、やっと倒れかかるのを、防いでいた。▽

勿論、氏の文章は簡潔にして、必要なことだけを要領よく書いていて、うまい。しかし

この新しく、若々しい物の見方というのは実際に「南加津子」という女性と、プレイをした上でのルポの文章だけに迫力がある。そして、その文章にマッチした39頁の、開股縛りの写真なんか、たまらない魅力がある。M女ならではの緊縛写真ばかりである。

この点、塚本鉄三氏の、文章のうまさばかりでなく写真に対するなみなみならぬ卓越した腕前が、この八月号の南加津子の写真からだけでも十分に窺えるのである。SM写真というものは、こうして撮るのだというお手本を示しているような写真の数々。それが、九月号のルポ『M女加津子がすすり泣くとき』に掲載された写真では、八月号とはまったく異なった大胆きわまりない構図で私達の目を楽しませてくれた。氏の貪婪なまでのSMに対する探究精神には、ただただ頭が下るのである。



一種のSM求道者のような氏の考えや立場を如実に示しているのも、九月号の『共犯者意識』の項において、よく理解される。塚本氏が対象となった女性のうちに融け込み、そして一体となって肉迫してゆくことによって「M女加津子」の実態が、まるで読む者が、その場に居合わせているような気にさえ、さ

せられるのである。これはとても、机上で考えて書ける文章ではない。

幾度となく「読者通信」や「奇クサロン」に投稿してきた。この愛すべき（私達奇クファンにとっては）南加津子という若き女性のMとしての生長過程を思うとき、私は一編の人間ドラマを見るような気がしてならない。

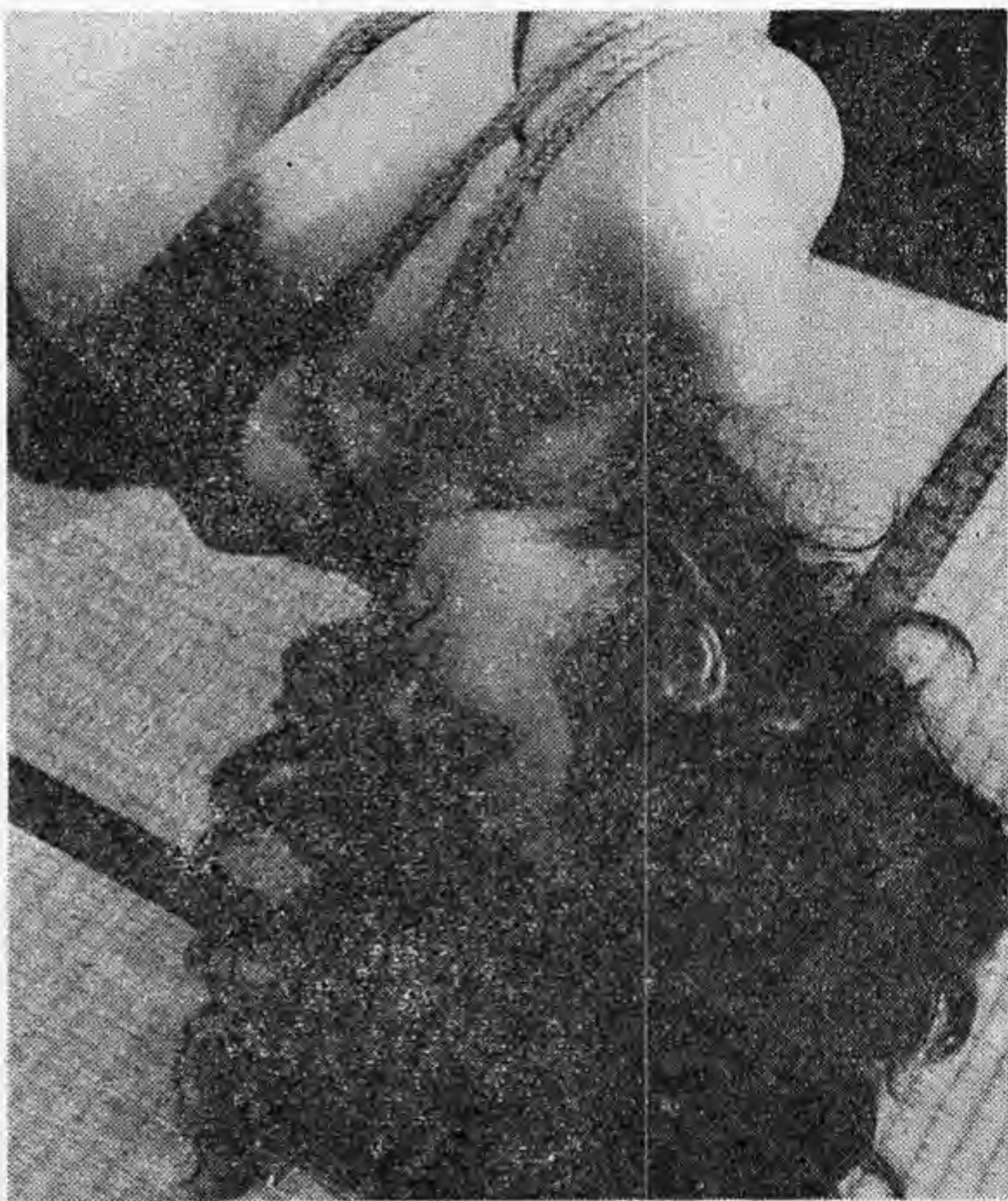
このように貴重な女性をルポするのは、対象に肉迫して絞れるだけ絞りとってくるという態度の氏を措いて、他に適任者はいないと思う。私が塚本氏を高く買ふ所以は、観察の緻密で適確なこと。写真技術の卓抜していること。文章の流暢なこと。その外に、あくまでSMが好きで、それに没頭する人間であることを挙げねばならない。氏は言っている。八彼女が、幻想的な被虐の心に、さいなまれている女性だけに、汲めども汲めども、尽きせぬSMの泉が、そのプ

レイの中から溢れ出てくるように思えてならなかった。Vと。そこに執拗なまでの氏のルポライターとしての求道心がある。

これでもか、これでもかと畳みかけるように、次々と押し寄せてくる文章は、一面、氏のエネルギーが若さが窺えて嬉しい。辻村老大人がともすれば、スタミナ不足から息切れがして、時には投げやりのなところが多かったのに比較して、塚本氏の場合はいつの場合でも全力投球なのが好ましい。

だが、この粘っこさは、氏の性格的なものもあると思うが、やはりスタミナ十分の若さと健康がないことには果たせぬことだと私は考えるのである。今や、文章を机の上で弄ぶだけでは、私達は満足できなくなっている。

現場へ、第一線へ、エネルギーが豊富な体力でアタックしてこそ、血沸き肉躍るSM文学の金字塔が打ち樹てられるのではないだろう



か。私は、その意味でも、塚本氏の今後に、大いに期待しているのである。

☆

十一月号のカメラルポ「臨月の妊孕美を暴く」は、南加津子の「妊婦責め」の圧巻といつてよい。ここでもまた、塚本氏の敏腕は写真と文章に、遺憾なく発揮されている。

へいつも、溢れるような新鮮な気持で身も心もありたいと思う。Vと、氏は言っておられるが、私は氏の、この対象をじっと見詰めて放さない驚異の眼にこそ、私達SMマニアの代表選手としての資格を認めるのである。いつも、新鮮で飽きることのない眼、これこそこの未知の世界を開拓する精神なのだ。

十一月号のルポで見せた109頁と115頁の南加津子の捨身のポーズこそ、マゾヒスチックのきわみではないだろうか。ここにおいても、氏の対象を鋭く観察して、その中から、抉るようにして奪ってきたものが、南加津子の緊縛フォトとって具現されているのだ。

——もう、自分の身体は、どうなってもよいのだ——というマゾの極致が、114頁から116頁にわたる一連の写真に、いきいきとして、巧みに表現されている。

正面に向って開股した臨月妊婦の112頁の写真を見ると、こちらに向って投げだした右足が裏を見せながら反りかえっているあたり、

ローアングルのカメラの位置といい、氏が何気なくふるまっていたながら、細心の注意を払って、被写体の特色を把握しようと努力していることが、はっきりとわかる。

大胆で奔放に縛り、かつ責め、深い愛情をもって、細心かつ緻密に観察してルポするという氏一流のやり方が、この十一月号の文章と写真を見ていて、よく掴めた。ここにおいて「南加津子」という、こまめに筆のたつ、類稀なSMに対する理解者の全貌が、余すところなく剔抉されたわけである。

私は△SMプレイの共犯者▽である塚本氏がさらに、この珠玉のM女を把握して、マゾの決定的瞬間を私達マニアの前に披露してほしいものだと思う。

そして、△私を暴力で犯してほしいのよ。その方が、私、凄く興奮するんですもの▽とマゾの叫び声を挙げている南加津子という可憐な女性を、（恐らく、すでに出産は済んでいるものと思われるので）氏の辣腕によってさらに、より奥深く謎の解明に努力して貰いたいものである。

「孕み女」という特異な条件を払拭した南加津子が、そのとき、如何なるマゾとしての激情の発作を見せるか——と思えば、私のSの

血は、ふつつつと煮えたぎるのである。

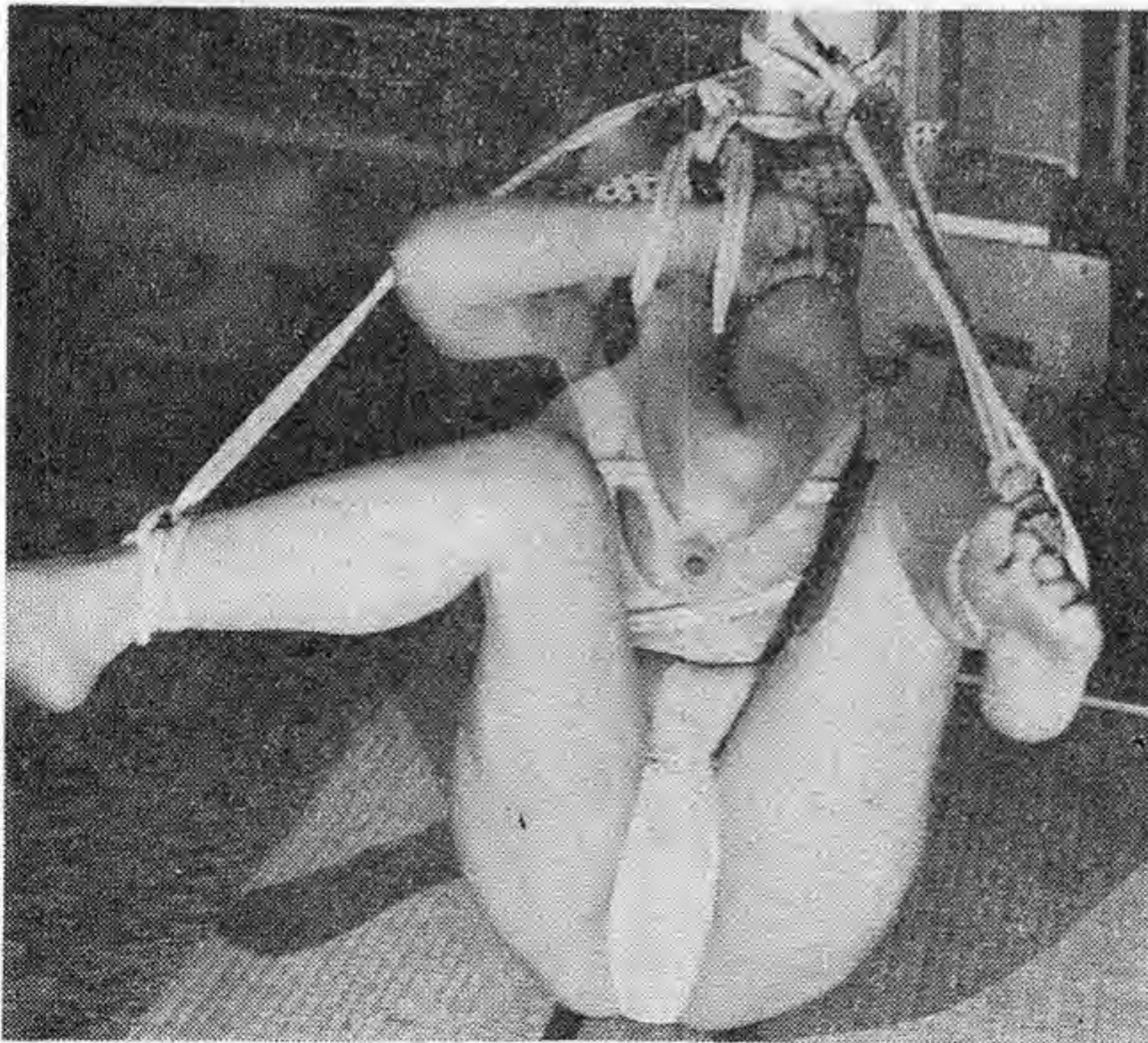
△木村洋子の巻▽

木村洋子という女性は、まったく不思議な女性である。不思議な——というのは、勿論

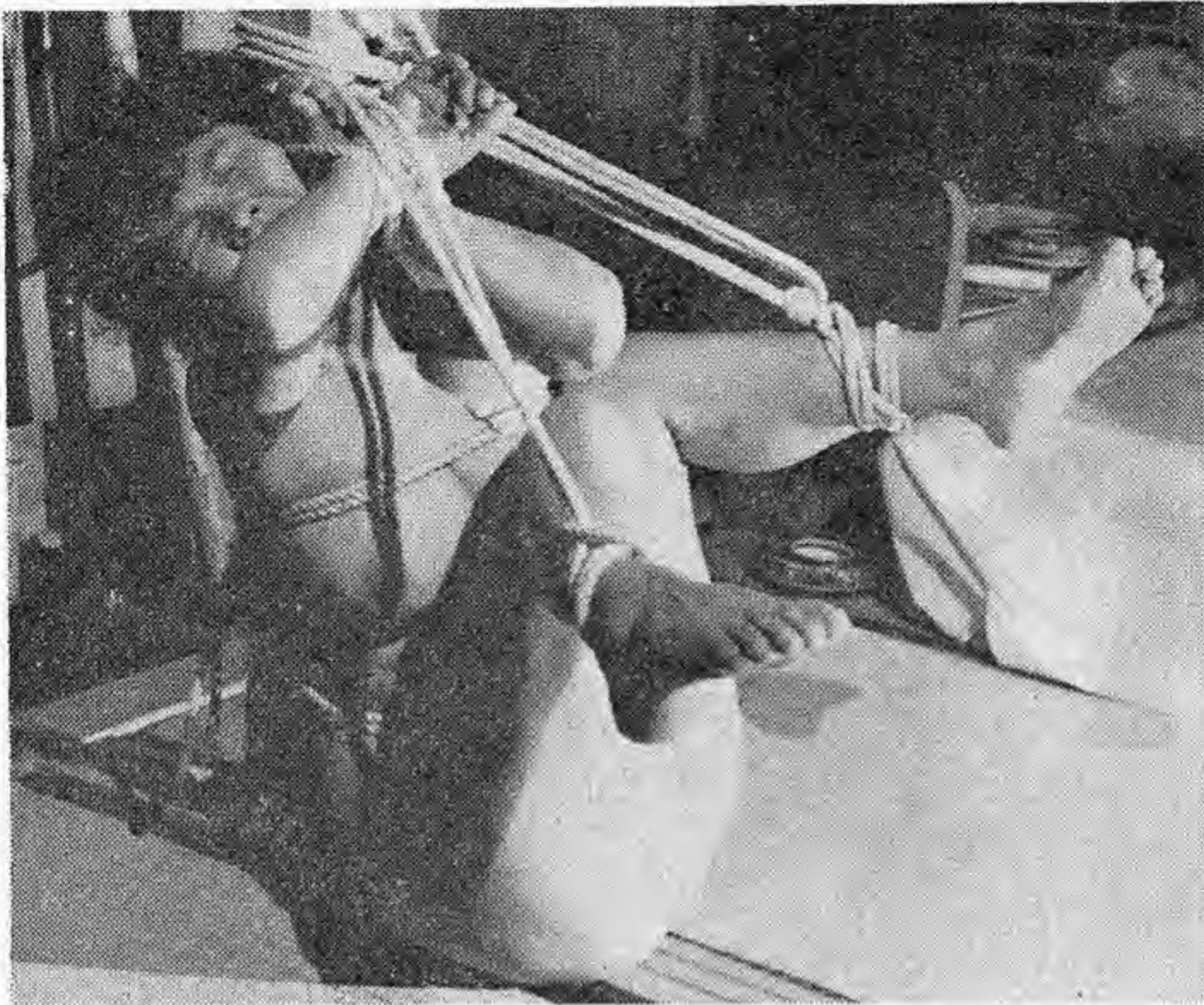
SMのMとしての彼女は、世間一般から見ても、「変っている」と見られるのは当然だが、私が今、ここで言う△不思議さ▽というのはそういう意味の不思議さではなくて、私達の仲間意識（SMマニア同士の仲間）から見て、M女として多分に謎を秘めているという意味である。

塚本氏は、△正真正銘のマゾ▽と木村洋子のことを評している。私は一体、本当のマゾ女性が、本来のマゾ性を発揮したならば、どのような形になるのが、理想的なんだろうかと、考えてみたことがある。

本誌の愛読者の方々から



の通信を読んでいると、その千差万別なのは私も驚く。鼻を苛めたい人、浣腸の好きな人、ムチ打ちを好む人、猿ぐつわに情熱を燃やす人、擦り責めや掴りに熱中する人、蠟責めや、針責め、アヌスとか臀部に狂気する人



……等々、数えあげれば、きりが無い程だ。
Sの中でも、最もオーソドックスな高手小
手縛りにしたって、それを好みの上から変化

を求めてゆけば、「吊り」にのみ、興味を示
す人や「海老責め」に特に好感を持つ人がい
たからといって、不思議ではない。

塚本氏が、十月号のルポ

「天神祭に來た女」で木村
洋子に示した剃毛責め、抜
毛責めにしたって、多分に
氏の嗜虐的な好みに、一方
的に彼女が屈したというこ
ともいえる。

へさて、このマゾ女、とい
っても、それは秘められた
密室においてのことだが、
それ以外のときは、世間普
通一般のOLと何ら変わっ
たところはない。Vと、塚本
氏は、この木村洋子を評し
ている。

「世間普通一般のOLと何
ら変わったところない」女性
を、この十月号の写真に示
しているような吊り責めに
出来るのだろうか。171頁の
写真を見給え、まるで額縁
にはめたように、全裸の女

体の前面を、すっかり、丸出しにしてしまっ
た、この木村洋子の「吊り」は、私達Sマニ
アにとっては、まことに垂涎おくあたわざる
嗜虐的なポーズである。

完全に、無防備のまま、宙に浮いた女体。
それは限りない無限の可能性を秘めた被虐姿
態である。私は、こうした緊縛女体を眺め
ると、思わず胸が熱くなってくる。

『四つ手綱責め』と『鶯の谷渡り』によって
塚本氏の思いのままに責められ、その挙句の
果て、『極楽往生』させられている木村洋子
という女性は、真のマゾ女性か、どうか、知
らないが、いささか主体性がないようにも思
える。与えられるものは、すべて受入れる許
容性の豊かさが、マゾのマゾたる所以か知ら
ないが、それでは、余りにも個性がなさすぎ
ると思考するが、読者諸氏は如何？

ここで私は、奇ク九月号に載っている木村
洋子の告白『二人の男性に責められた私』の
一文に目を通してみた。それを一読してから
さらに、七月号の告白『Mの性に泣く私』と
いう彼女の文章にも目を通した。

そして、塚本氏が飽くなき情熱をこめて、
捕捉した「木村洋子」という女性の内面生活
の一部が秘かに窺えた気がした。

連載・S時代小説

紫

蘭

の

門

(30)

カット・マエダヒオミ



穴沢流逆人の字

さかさひと

「お景。今日という今日こそは戌夜のロザリ

入ってきたのは、いつものとおりの白豚、黒馬、それに赤狐たちであったが、どうやら今日は殺気だった気配を感じさせた。

「いつまでも、甘えさせておくわけには参ら

オの秘密、白状してもらうぜ」

赤松材の牢格子のむこうから、よびかける羅卒の鞭兵衛の声に、お景はハッと居ずまいを、ただした。

南京錠がピーンと金属音を、ひびかせたかと思うと、ドヤドヤと

人間はその知恵をもって縄を発明し、北京原人が火を「発見」したように、その縄に依って創り出す事の出来る、本能との合致点を「発見」したのだ。

風流極道軒

ぬ。徹底して責めてみよ。との元禄屋の大旦那のご命令だ。覚悟してもらうぜ」

やにわに浅黄木綿の囚衣が剥ぎとられ、むちりと、こぼれ出た乳房の上下に早くも赤狐が愛用する真紅の縄を喰いこませていく。

お景は、あわれみひとつ請わなかった。身も心も捧げて愛している徳夜叉が、ここ麻布六本木の別邸を急襲して自分を救い出そうとしてくれたことは聞かされていた。それが失敗したことも、誰かが捕虜になっているらしいことも知っていた。しかも、どうやら徳夜叉が深傷を負ったらしいという噂である。

(もう、ダメなのかも知れない……このままこの地獄のような別邸の土蔵から外へ出るこ

とは不可能なのかも……)

縛りあげられた身を牢から土間へと、ひきずり出されながらお景は、じいっと唇を、かみしめるのであった。

一步、土蔵から外へ出ると寒さが身にしみて、みるみるお景は鳥肌立った。

「姐御。責められる身でも、やはり寒さは感じるんですかい」

目ざとくも、それを知った赤狐の擲擲を背にうけて、石畳を裸足で踏みながら、となりの土蔵へと歩いていくお景の影が、池の面にうつると、

——ポチャン……

一尾の緋鯉が、夕陽をあびて燦爛と虚空に躍った。

「よいものを見せてやるぜ。今日こそは白状してもらうためにな」

半開きになっている扉のそばで、ためらっているお景の肩をつかんで、土蔵の中へと、

前号まで——天保四年の春を迎えて雑司ヶ谷の寮で老中筆頭水野出羽と、貴子を「狎馴り」にかけて楽しんだ元禄屋は次に、麻布別邸に捕えている小紫のお景を責めて、戌夜のロザリオのありかを白状させるよう鞭兵衛に厳命した。

ひっぱりこんだ鞭兵衛は、

「この黒幕の向うに、なにがあるか、お楽しみなことだな。フッフッフ」

黒ずんだ壁には、突棒、さすまた、袖がらみ、それに床には、そろばん台や三角木馬のたぐいが並べられて、この土蔵もまた、あきらかに拷問部屋の雰囲気漂わせていた。

ただ黒幕で、しきられた向うは見えない。はたして、何があるのか——。

いや、ものではあるまい。いままでの鞭兵衛たちのやりくちからみて、誰か人間が、それもお景の、よく知っている男か女が、いるに相違ない。

(誰かしら……まさか徳夜叉さまでは！)

突然、心の臓が早鐘のように鳴り出すのを覚えたが、もしも徳夜叉さまが捕えられているのであれば、今日まで放置しておくはずがないと思ひ返す。が、胸の鼓動は、いっこうに鎮まらない、お景であった。

「いやに興奮してるようじゃあねえかよ、ええ。フッフッフッフ、おい、黒馬。声をきかせてさしあげな、姐御に」

「合点、承知」

黒幕をはねあげて黒馬が、なかに入っただと思うと、すぐ

——ピシ、ピシッ！

肉を打つ激しい鞭の音がひびいて、まるで手負いのけだものが呻くような叫びが、きこえてきた。

お景の背後で縛りあわされた両手の指が、キュツと、にぎりしめられる。その手が自由であれば、どんなにか耳をおおいたかったことであろう。それもできないまま、陰惨な音と叫びを、きくほかはない。

「どうでえ、こきみよい叫びじゃあねえか。フッフッフッフ……女なら、もっと、よいのだがな」

鞭兵衛の言葉を、まっまでもなく、責められてる人間が男であることを知ったお景はそれが、どうやら徳夜叉の配下の一人にちがいないことを知る。五百をこえる配下の中で誰が、いったい、つかまっているのだろう。大力無双の越中松か、学識第一の六孫王か。それとも飛香の小式部か、杖舎の茶々丸か。

あまりの、もの凄い呻吟に、耐えきれなくなった、お景が、

「だ、だれなの……鞭兵衛さん。いったい、こ、この声は誰なの！」

「知りてえか。知りてえなら教えてもやるがそのまえに、徳夜叉の隠れ家を吐いてしま

な。八王子から、奴は、いったい、どこへ逃げてしまいやがったんだ。お景、情婦のおめえが知らないはずはなからうぜ」

何十回、聞かされた言葉であらう。だが、それだけは、八つ裂きにされても教えてやるわけにはいかぬ。

キッと怒りの表情をうかべるお景の、赤い縄目から、はみ出た紅珊瑚のような乳首に目をやった鞭兵衛は、

「強情な阿魔だぜ、まったく！ だが、今日という今日だけは、必ず白状させてやらあ。吠面かくんじゃあねえぜ！」

ひぐまのように吼えたかと思うと、毛むくじゃらの腕をのばして黒幕をサアッと、よこに引いた。とたん、

「アッ！」

眼前の、あまりに無残な光景に、お景は、おもわず息を、のんだ。

「穴沢流、^{さかさ}逆人の字——よく拝んでおくことさ」

天井の梁から一人の男が逆さ吊りにされているのだが、両足を張りさけるほど開かれているので、鞭兵衛のいうとおり、全体の形が「人」の字を逆さにしたように見える。幾重にも縛りあげられた太い荒縄もさることなが

ら、煮しめたような越中褌ひとつの丸裸ではないか。しかも、

「アッ！」と、ふたたび喘いだお景が、あわてて目をそらしたのは、褌のそとへはみ出して下へと、ぐんにやりと垂れていた一物の、せいであつた。

「なにを恥かしがることがあるんですかい、姐御。この野郎のこれに見覚えがあるとでもおっしゃるんで」

六尺棒を手にした赤狐が、さも面白そうにつついてみせたが、お景は、よこを向いたままであつた。

その視線のなかに、誰が、いけたのか紅梅の一枝が映る。それは、この場の陰惨な情景のなかにあつて一陣の清涼の気を、あたりに香らせていた。

（もう春が近いのだわ。だが、妾の身には、いったい……いつ？）

ふとお景が、そう思ったのも、つかのまのことであつた。

「この男を見てやらねえんですかい、姐御。徳夜叉四天王のひとりの」

「な、なんですって！」

思いがけない黒馬の言葉に、ハッとなったお景が振り返ると、

「杖舎の茶々丸！ ちつとは聞こえた男なんですがね」

刹那、

「茶、茶々丸！ お、お前までが！」

つんざくような声がして、

「徳、徳夜叉さまはお元気かえ！ 茶々丸、徳夜叉さまは！」

縄尻をとる白豚の手をふりはらって、逆さ吊りにされている茶々丸の顔ちかくに、身をすりよせる、お景であつた。

「ひさしぶりの御対面だ。よく見えるようにしてやろうぜ」

鞭を捨てた黒馬が、赤狐といっしょになつて上半身を持ちあげてやると「フウッ！」と大きい、いきを吐いて、ぼんやりと茶々丸の目が開く。

「茶……茶々丸……」

もうろうとしていた視野のなかに女の顔がうかび、やがてそれが明瞭なかたちをとったとき、茶々丸の裸体がピク、ピクッと痙攣をおこし、つづいて、

「姐……姐さん……」血を吐くような声が湧いた。「お、お景姐さん……よくご無事で……頭領は、頭領は……」

「なんだって、茶々丸！ 徳夜叉さまのこと

知らないのかえ」

悲しそうに、うなずくのをみて、お景の顔が蒼ざめていく。

だが、お景救出のために襲撃をかけたおり銃弾をうけて倒れてしまった茶々丸が徳夜叉の安否を知らないのは当然。

「そうだったわね……お前の知らないのも無理はない……」

と、自分を救い出そうとして捕えられてしまった、この四天王のひとりに（有難う……茶々丸……）と感謝の気持ちを伝えようとしたが、そのとき、グイッと縄尻をひかれて、「アレッ！」

と悲鳴をあげ、わずかに許されている紅梅色の湯文字のなかからニョキ、ニョキと双つの脚をあらわにして、その場に、しりもちをついてしまう。

「見えた、見えた。香箱、見えた。茶壺に満紅、見えた」

「茶柱、逆鉾招いてる。きれいな襟足それ見えた」

赤狐と黒馬に、民謡でも歌うように奇妙な節をつけて囃したてられたお景の頬がパアッと赤く染まった。

「風になびくか春の草。内陣・外陣、奥の院

中高舟は、どこを漕ぐ。ひよどり越えか四つ目屋か。それとも谷地箱、お雛さき」

白豚が、あとをうけた。

「なにをカッポレ踊ってやがる！」

鞭兵衛の大喝一声が、とんだ。そして

「穴沢流中高舟！ お景の阿魔を、その子分のまえで責めて責めて責めまくれい！」

「中高舟ですかい、親分。合点、承知。待ってました！」

「こいつにかかっちゃあ、お景姐御も、かたなしさ。ヘッヘッヘッ」

「よく見てろよ、茶々丸。お前の大事な大事な姐御が、これから色っぽく哭いてくれるってさ」

黒馬たち三人は両手に唾すると、部屋のすみから弓をよこにしたような台を持ち出してくるのであった。

穴沢流中高舟

なかたかね

「茶、茶々丸。見るんじゃあないよ。た、たのみますから、目をつぶっていて頂戴！」

毎日、顔を合わせ、三度三度の食事もしっしょにしていた子分の前で、よってたかって台の上に仰向けにされていきながら、お景は

声を、ふりしぼって呼びかけた。

が、またたくまに半円形の台の上に「X」字型に四肢を縛りつけられたお景は、その子分・茶々丸の眼前に運ばれていき、そのうえ無情にも、湯文字を、いとも簡単に剥ぎとられてしまったのである。

「ア、アッ。ひ、ひどいじゃあないのさ！」

これだけ云うのが、せいっぱい。あとは悪寒にでも、とりつかれたように裸身を震わせつづける。

「穴沢流穴焙り、綱渡り、夫面恋、四つ搦み——いままで、どんなに責めてもねをあげなかった、お前だが、この中高舟の拷問を、はたして耐えきれるかどうか」

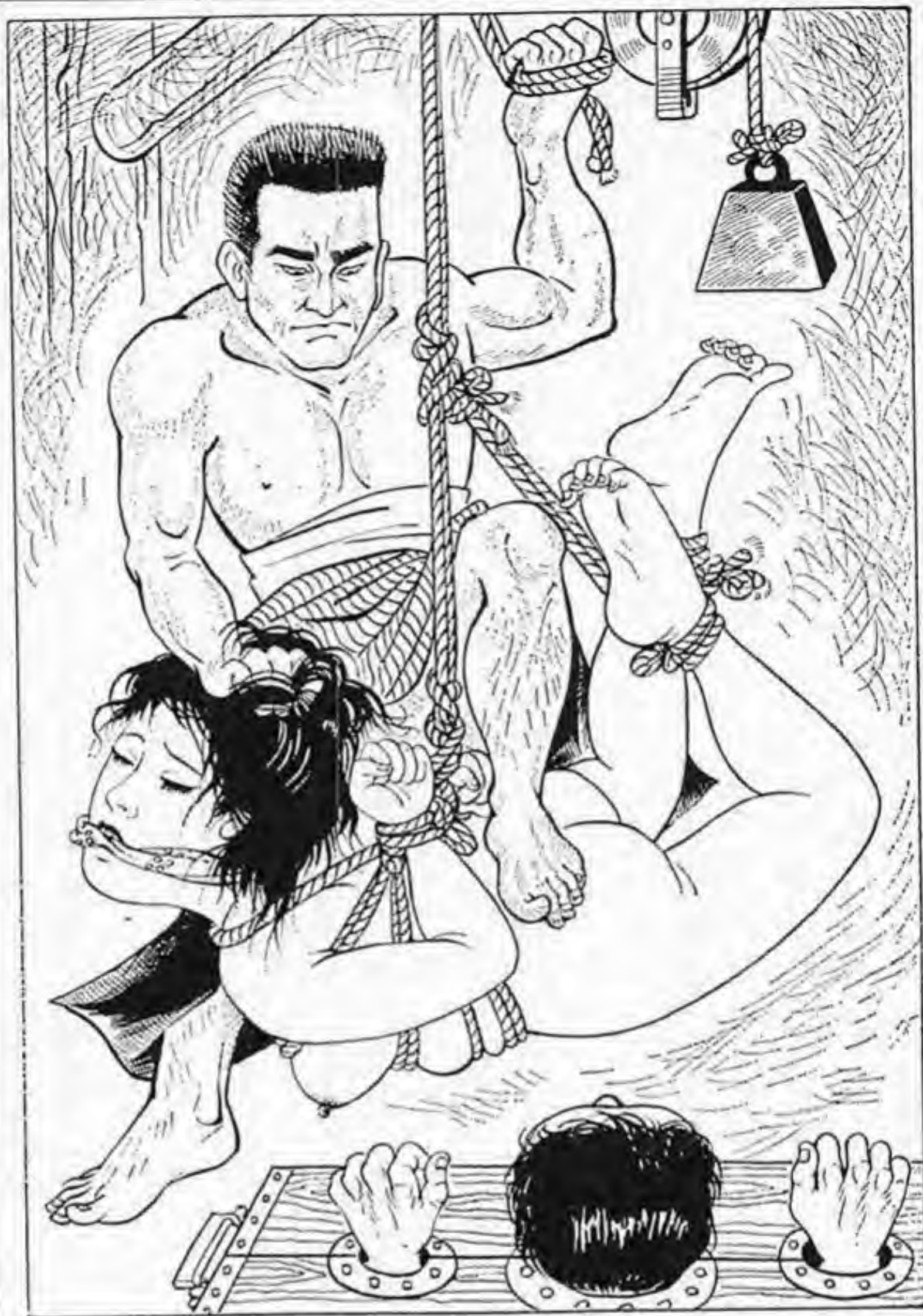
両手に、それぞれ一本ずつ、計八本の百刃蠟燭をかざした四人のやくざたちの中で、ひととき大きな鞭兵衛が、ニヤッと、お景の顔をのぞきこみ、

「中高舟ってえのを知らねえとは云わさねえぜ。知ってるはずだ」

どうやら今度という今度こそ、極めつきの責苦を受けるらしいと知ったお景は、羞恥と恐怖で目の前がボオッとかすんできて、返事するどころではなかった。

「知ってるくせしやがってさ、ほれ！」

イメージギャラリー 『裏切りの報酬』 岡 たかし



フウーツと赤狐に、いきを吹きかけられたところが、焰をあてられたように熱くなる。「それにしても親分。中高舟とは、よくも名付けたものでござんすねえ。外観、舟のごとく舳があって舳があって胴の間があって、そ

して中が高くなっていやがってさ」黒馬が鼻をこすりつけるようにして、「それにしてもお景姐御。どうしてお前さんは、こうも男心をとろけさすような香りを四六時中、ただよわせていなさるのかねえ」

「そりゃあ、黒馬の兄貴。いつでも男を欲しがってる証拠でがしようよ」

「あれだけ抱いてやっても、まだ足りねえというのか」

「そりゃあもう、女には限りというものがござんせんからね」

「チエツ。そりゃあ、親分の台詞じゃあねえのか」

「い、いけねえ」

白豚が頭をかこうとしたとき、右手にもった蠟燭から一滴の蠟涙が、ポタッと乳房の谷におちた。

「バカ野郎。命中させなきゃあダメじゃあねえか」

鞭兵衛に叱りつけられた白豚が「すみません！」と頭を下げたたん、今度は左手の蠟燭からこぼれた一滴が、牝鹿のようにひきしまった右太腿にある小さな黒子におおいかさって、「バカ野郎！」と、も一度、どやしつけられて、「へ、へい……」と半歩、後退して恐縮しきった顔になった。

「中高舟の拷問は、中高舟だけを責めつけるのだ。ほかのところに落したんじゃあ効果が半減する、わかってるな。さあ、行くぜ！」八本の蠟燭の焰に照し出されたお景の裸身

が、その妖しい影を、壁に並べたてられた突棒や、さすまたに投げかけて――

静寂。

しばし、呼吸の音も聞えない深くて淫らな沈黙が、部屋にたちこめたかとみえたが、

――ヒ、ヒヒッ！

突如、悲鳴がおこった。

「親分、おみごと！ 命中だ！」

赤狐のはずんだ声がひびきわたる。つづいて、

――ポタッ……

と、今度は、はっきりと雨だれのような音がして、お景の唇から、ふたたび、絶え入るような叫びが、ほとばしった。

「胴の間に命中ですぞ、親分」

「それにしても、この胴の間は、ずいぶんと海の水を、ひっかぶっているじゃあねえか。

これじゃあ坐ることもできねえぞ」

「ちげえねえ、ハッハッハッハ」

黒馬のだじゃれに、鞭兵衛が肩をゆすって笑う。と、白豚がおずおずと、

「でも黒馬の兄貴。坐ってたのでは役に立たないんじゃないか」

さきほどの失敗をとり返そうとするように奇妙な声で口を挟んだものだから、「このパ

カ野郎！」と、またもや怒鳴りつけられた。「つぎは、あっしの番で。舟べりと舳とを狙ってみましよう」

黒馬の右手が動く、いまにもこぼれそうなくらいほぐちにたまった蠟涙が、スウーッと白い糸をひき、

「キ、キャアッ！……」

お景の眸が、今にも、はり裂けるかと思うほど、見開かれた。

落とされる熱蠟の狙いはあやまたず、次々と鼠色の花が咲く。つづいて舟べりへと垂れた蠟涙が、つるりつとすべて幾つもの小さな花びらとなって散っていく。

三番目の赤狐の最初の滴がしたたったのは右の胴の間であり、二滴目は舳の近くで渦をまいた。

お景の苦痛は言語を絶するものと云えた。

かつて「穴焙り」にあったときよりも遥かに烈しい衝撃とよんでもよかろう。なぜなら、「穴焙り」では、いくらかの部分は青白い炎からのがれることができた。ところが「中高舟」は、真上からの責めであり、のがれようがないのである。例えてみれば、世界に誇る日本の巡洋艦である妙高・摩耶・那智・高雄などが、グラマンF6FやロッキードP38、

P51ムスタングなどの雷撃銃撃下にさらされるようなもので、艦首も艦尾も甲板も檣楼もどこあますところなく見おろされているのである。しかも今の場合、港に繫留されたまま、身動きひとつできないのだから、これこそ「据え物斬り」にされているようなものであった。

「こんどは、俺、俺の番ですぞ」

赤狐を押しつけて真上から眼下によこたわっている巡洋艦のまたとない優雅な艦型の全貌を見おろした白豚は、

「真中に、いっちょ落としてやりますぞ。

親分、いいでしょう」

と鞭兵衛を見あげたが、

「ダメ。そこは親分が攻撃をすることになるの」

と、赤狐に、べもなく云われ、

ゴクツと生唾をのみこんで、

「姐御、堪忍して下せえよ。あっしは姐御をこんな痛い目にあわせたくはねえのだけど黒馬や赤狐の兄貴たちが無理矢理やれやれっ！と、けしかけるものだから」

またぞろ心にもないことを言って鞭兵衛に怒鳴りつけられる。と、そのはずみに、

――ポタ、ポタ、ポトッ……ポトッ、

溢れそうになっていた蠟涙が、いちどに数滴、したたったのだが、これがまた偶然にも全弾みごとに檣頭から艦橋にかけて命中してしまったから、鞭兵衛が怒った。

が、その怒鳴り声よりも、お景の唇からあがった絶叫のほう、はるかに凄まじいものであった。

それは、車裂きの刑をうける、美女の叫び——とでも形容するほかはなかった。

まるで、骨から生身を剥ぎとられるような苦痛に、はりつけられている裸身を、お景は狂ったように暴れさせた。こうも責めたてられては、たまったものではなく、もし同じ苦痛を男がうけたとしたら、失心してしまうことは疑いのないことであった。

それを耐えているのは、女が拷問されることには強いという一般の通念だけではなく、お景の意志力のせいであった。

金輪際、野獣のように狡猾で残忍な鞭兵衛たちには白状してやらないという、信念の力とでも云うべきものであったろうか。

そのお景の心を見抜いているのか、いないのか、白豚に先手をとられた怒りを、まだ抑えかねるように鞭兵衛は、

「お次は、片舷だ。行くぜ！」

いま鞭兵衛は右側にいるから、この片舷は右舷にあたる。そこへ、一尺もない高さにある二本の蠟燭から、ポタ、ポタッと、蠟涙がしたたったから、たまらない。

お景が狂ったように吼えた。そのあまりの凄絶な光景に、天井から逆人の字に吊られている杖舎の茶々丸が、たまらなくなつて、

「やめろ！ やめてくれえエエ！ な、なんでかよい女を責める！ や、やめろオ！」しわがれた声であったが、逆さ吊りにされている身では、これがせいはいっぱいのところであろう。だが、あざ笑うように鞭兵衛は、「やめたら白状するとでもいうのか。ええ、おい！ 戊夜のロザリオのありかを知らせてくれるとでもよッ」

太い梁から垂れている滑車が、ギシギシッと鳴って、

「する！ するから……姐さんを、姐さんだけは許して、すぐ、すぐに自由に……」

「まことか、それは」

鞭兵衛たち四人が顔見合わせて、ほくそ笑んだときであった。

「ダメ……ダメです……茶、茶々丸さん、そ、それだけは、絶対に、許しませんよ」

息も絶え絶えにいうお景は、どこまで意志の強い女なのであろうか。

「ええいっ！ それ、やっちゃまえ！」

八本の蠟燭が、鞭兵衛の怒声とともに小さな炎をひとつにする、と、

——ポタ、ポタッ、ポタッ……一斉に猛攻撃を再開した。

方一寸もない咫尺の地に、数十発の爆弾を注がれたらどうなるであろう。旧大日本帝国陸軍の各種典範令によれば一メートルの正面に一分間三発の敵弾を浴びれば、それを「死地」とよび突撃喇叭は吹奏されなかった。世界無比と謳われた日本陸軍すらかくの如し。ところが雨のように、にえたぎる「灼熱の弾丸」を投下されながら、小紫のお景は、女の身で、ついに弱音を吐こうとはしない。

穴沢流玉壺縛り

業をにやしたのは鞭兵衛であった。是が非でも今日は白状させよという主人、元禄屋の敵命をうけているとあっては、いっそう焦立つのも無理はない。

「くそっ！ 黒馬。穴沢流池頭縛りにするから三の糸をもってこい！」

三の糸とは、もちろん三味線の三の糸のことであり、一の糸は太くて調低く、三の糸は細くて声高く、二の糸は、その中間——いずれの糸も絹糸を、よりあわせ、黄色にそめたものであり、強くて、且つ、しなやかで、めったに切れようものではない。

その三の糸で、「池頭縛り」にすると鞭兵衛は云う。池頭が、たとえば、どこであってもよほど指先の器用なものでなくては、このつとめ、勤まるはずもない。

「あつしに任せておくんなさい、親分」と云ったのは、赤狐であった。

「ヘッヘッヘッ……こいつには年期が入っておりますので」

援手しながら黒馬が部屋のすみの小簞笥の引き出しから掘み出した糸のなかから三の糸を摘みあげると、

「池頭縛り——またの名を玉壺縛り。ひさしぶりのことでやんすなあ」

二度三度、黄色い糸を、しごいてお景にみせつけると、

「お景姐御。いよいよ最後でござんすよ。早く白状したほうがよいと思ひやすがね」

よほど自信があるのであろう。三尺余の糸のなかほどを輪にすると、涙と汗で、くちや

くちやになったお景の頬を指先で、つつき、「さあ、どうしやす。戊夜のロザリオのありかを、ひとおもいに饒舌ってみては」

「な、なんで、お前たちなどに！」

と折り重なってくる男たちを、必死で見上げて云ったものの、一糸まとわず、しかも、「中高舟」の拷問までうけている身では、せっかくの啖呵も、なんの効果もない。

「そうですかい。こんなに嵯峨菊の匂いを、むんむんと漂わせていなさるというのに、これ以上、いったい、なにを見せてくれなさるとでも……」

「そりゃあ、きまつてるじゃあねえですか、内陣・本陣・奥の院……」

白豚が、またぞろ、相の手を入れたが、めずらしく真剣な顔付で、それを無視した赤狐は、緋鯉のえらでも抜くような、かつこうで十本の指を働かしていく。

えらを抜く手先にさわる鰯の脰いなへそ

何やらの手ざわりに似た鰯の脰

など、多くの川柳があるが「いな」とは、棘鰯亜目鰯科の淡・鹹両水域にすむ魚のことで、成長度に従って「おぼこ」「いなっこ」「すばしり」「なよし」「いな」「ぼら」「とど」と呼称が変わる。一般には「いな」と、

よばれているようであるが、その「いな」のえらを抜くときと「何やらの手ざわり」が、どう似ているのか。

いま一句——

瀬戸貝が呑みこんでいるいないなの脰

さて、——

あざやかな手並みで、三の糸を括りつけた赤狐は、

「姐御、云わんことじゃあねえ。白状したほうが身のためですがね。これとこれを、ほれこのように引きしぼると、とてもじゃあねえが、我慢のできる女など、いませんよ」

黄色い糸の両端を、のけぞっているお景の眼のまえに、つきつけてみせたが、うっすらとひらかれた眸には「屈服」する気配は感じられない。

「では、姐御。こんな、ひでえ責めかたで、いためつけるのには惜しいが……いたしかたありますまいねえ」

ニヤリッと細い吊りあがった眼を不気味に光らせた赤狐は、両手にもった糸を徐々に、ひきしぼっていかうとした。

「……アッ、アッ……」

乾ききった唇が喘いだ。

「白状しなさいかい、ええ、姐御」

イメー
ジ
ギャ
ラリ
ー

『燭

台』

小川茂正



「だ、だれが、お前さんたちに……白、白状など……す、するものですか！」

白い歯並びが、のぞいたが、それも、やがてキリキリッと喰いしばられて、

「お、おやりよ、おやりってば！ お景は、どんな責めでも……た、た、耐え抜いてみせるから……さ……」

瞬間――

「この阿魔！」

赤狐の手で、ゆったりと垂れていた三の糸が急激に、ピーンッ、と右、左へと張りつめられて、

「ク、クッ、クッククッ……」

地獄の底から、ひびいてくるような呻きが洩れ、裸身が一挙に縮まってしまったかと思われた。

「こ、これでも、まだ我慢するとでも！」

三の糸を握りなおした赤狐の両手が、いっそう左右にひらか

れると、

「ム、ムムムム……ムッ、アウ……」

二度三度、はげしく顔を、よこに振ったお景は、はりつけられている裸身を大きく波立たせていたが、やがて、半円形の台の上で、ぐったりとなってしまうのであった。

乳房の谷から、にじみでて脂汗が、スウーッと稜線に沿って、ながれおち、右太股の黒子をおおう、蠟涙のそばで、いくつにも砕けた。

「親分、どうやら、気を失ったようで」

三の糸を手ばなして蠟燭を持った赤狐は、お景を正気づけるために、蠟涙を紅珊瑚のような乳首に、したたらせながら、あまりの強情さに、ほとほと困りはてたようにいう。

「まったく驚いた女だ。こんなに意地っぱりな女は、みたことがねえ」

同調するように云った黒馬も、ぐったりとなっっている蒼白い頬から鼻へと蠟涙を点々とおとしながら感心する。

「フッフッフ。たしかに強情っぱりな女だが、それはなににも、いまわかったことじゃあねえだろうよ」

「で、これから、いったい、どの手で責めますんで」

「穴沢流逆人の字——お景も、茶々丸と同じように、ひとおどり、やらせるのさ」

鞭兵衛の含み笑いのおわらぬうちに、

「そ、そうですとも。茶々丸を餌にして罫をかけりゃあ、きっと白状しますよ、ねえ」

さっきの失敗をとりかえそうとでもいうのか、白豚は早くもお景の足と手の縄を、といていく。

「さすがだ、親分。やりましょう！ この強情な阿魔が、どんな顔をするか面白え、みものでしょうぜ」

赤狐と黒馬も、どうやら息を吹き返したらしいお景を押えこむと、反抗ひとつすることのできないくらい疲れきっているお景の上半身にあらためて、ひしひしと縄をかけ、両足にも太い荒縄を搦ませていくのであった。

お景屈服す

お景の眸に最初にうつったのは紅梅の花であつた。つづいて、おぼろげに天井の梁が見え、やがて鞭兵衛たちの足、腰、胸と、淫らな笑いをうかべている顔が、うかぶ。

「な、なにを、しようというのだえ……く、くるしいじゃあないかい！」

「穴沢流、逆人の字——すこしくらいは頭に血がのぼってこようぜ」

黒馬がニヤツとして、

「ほれ、これで、お二人の顔が、ぴったり、くつつこうというものさ」

くるりと半回転させられると、そこには茶々丸の顔があつた。

「茶々丸！」

「姐さん！」

部屋の中央、梁に仕掛けられた滑車から逆さ吊りにされた二人は、しっかりと見つめ合つのであつた。

「さあ、やってみな。早くしねえと全身の血が頭におりてきて血へどを吐くことにならねえとも限らねえ。さあ、早くやれってんだ」

黒馬がお景の双臀を鞭で、ひっぱたくと、赤狐は六尺棒で茶々丸を、つつき廻す。

と、白豚が、

「早くやれやれと云つても兄貴。これで、ほんとに、うまくやれるんですかねえ」

「バカ野郎。持ってやらせるんだ。お前は茶々丸の尻を、もっと前へ、つき出させろ」

「赤狐の兄貴。このあつしが男の尻を押えるんですかい。あつしにゃあ、そのほうの趣味は、からっきし、ありませんので、ひとつ、

お景さんのほうを、へエッへッへッ」

揉手しながら、お景の双臀に手をかけたが鞭兵衛に睨まれて「へエーッ！ 親分」あわ

てて茶々丸の尻を両手で持ちはしたものの、「チエッ。いやな役廻りだよな、まったく。

なんで、この白豚さまが野郎の尻などを」ぶつぶつ云いながら前へ押す。

一方、黒馬が、お景を抱えるようにして前へ進める。どうやら高さが、ちょうど、よいくらいに調節されているらしく、お景の顔が茶々丸の胸のあたりに触れる。

「姐さん！」

「……茶々丸、ど、どうしよう！」

子分の肌に直接、触れることになろうとは想像もできなかったことだけに、お景は苦痛も忘れたように頬をそめた。

「どうしようもくそもねえでしょうよ。茶々丸も男に交りはねえんだ。どうでえ、お景」

「キ、キャアッ！ や、やめて、やめて！

こ、こんなハ、ハレンチな……」

「何がハレンチですかい。子分のまえで、スッ裸にされて罵られるほうが、はるかにハレンチじゃあねえのですかい」

赤狐の繊細な指が、肌を覆っている蠟涙をすこしずつ、おとしていく。

パラパラッと降ってくる、そのうす鼠色の粉のようなものを鼻にも頬にも浴びながら、せめて茶々丸のほうに背を向けようとするお景の努力も、両足をひらいて吊り下げられていては、おもうようには、いかなかった。

「アッ。や、やめ、やめてったらー！」

どこにそのような氣力が残っていたのか、信じられないほどの抵抗をみせて、逆さ吊りの豊満な裸身が宙におどった。

「こいつは驚きだ。ほんとに、おどりやしたねえ、兄貴」

「姐御が姐御なら子分も子分。まったく凄えものだぜ」

勝手放題なことをいいながら悦に入る男たちの顔が、斜め下から見上げるお景の視野にいやもおうもなく、とびこんでくる。

「ち、ちくしょう……ひ、ひとおもしろに殺しておくれ！ こ、こんなことをされるくらいなら、殺しておくれったらー！」

——ギィ、ギギ……と滑車が鳴り、黒馬が、

あざ笑う、

「殺されてえとは、こりやまた、お景、おつなことを、いうじゃあねえか。殺してもらいなよ、茶々丸にさ。そうだよなあ、赤狐」

「そうだと。死ぬ、殺して……あ、あな

たア」とくらあな。女の世迷い言は、きまつてるようなものだ」

「さあ、お景。もっと暴れなよ。おめえのおどりが、おしめえだとすると、こっちにも都合ってえものがあるんだからよッ」

「茶々丸さまもお待ちかねのようだし……」

と白豚が、茶々丸を押し出そうとして、すつとんきような声を立てた。

「あ、兄貴。こりゃいけねえや」

皆の視線が茶々丸に集まったのと、逆人の字の遅い裸身が、がっくりとオチたのがほとんど同時であった。

「ちえッ！ とうとう氣絶しやがったか」

鞭兵衛が、いまいましそうに舌打ちした。

「これじゃあもうどうにもなりますめえよ、兄貴」

と白豚が残念そうにいうとおり、たしかにこの期に及んでこの状態では拷問継続は、むつかしく思われた。

逆さ吊りにされて小半刻——尋常の男なら

とつくに氣を失っているであろうに、それを今の今まで耐え抜いてきたのだから、この茶々丸、よほどに非凡な男と云えよう。

白豚の言葉で、あらためて茶々丸の状態をしらべた赤狐が、

「黒馬の兄貴。これ以上は、無理というものでござんすよ。第一、生命があぶねえ」

事実、吊り下げられた裸身は白蟻のようになって、ほとんど血の氣がなかった。

「チエ！ 意氣地のねえ野郎だ。これからという時に」

と舌打ちしながらも黒馬は、万一を考えて親分の顔をうかがったが、

「男のほうは殺したってかまやあしねえ。水に漬けてみな。水責めだよ」

鞭兵衛の言葉には、ほんとに茶々丸を殺しても、かまわないという情容赦のない、ひびきがあつた。

「よおし、じゃあ親分。やりやすぜ！」

滑車の綱を、にぎった黒馬が、

「赤狐、白豚！ 聞いたとおりだ。ぶっころしてもかまわねえ。その飼葉桶でお顔を洗ってさしあげな」

「承知しました、兄貴。じゃあ、おろしておくんねえ」

赤狐が、まんまんと水をたたえた馬の飼葉桶のそばで身構えると、

——ギ、ギ、ギギギ……

重い体重を支える滑車が軋み、つづいて、——ゴ、ゴボボッ……

逆さ吊りのままで茶々丸の肩のあたりまで
が水のなかに沈んでしまふ。

「あけろい！」

「よおし！」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十三日 確実発売！

一月分	1冊	四〇〇円 (送共)
三月分	3冊	一二〇〇円 (送共)
半年分	6冊	二四〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四八〇〇円 (送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、
或は地方のため、入手することが出来ないとか、
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い
目に、手に入れたたいという御要望をよく承り
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御
予約下さるようお願い致します。毎月製本完
成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには
大阪市住吉局私書箱第四十一号 曉出版株式会
社宛（郵便番号五五八）表記予約購読料をお
払込みの上、何年何月号より何力年分と御指
定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代など
は、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為
替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替
（大阪四二七八三番）』のいずれかをご利用

ふたたび水の音がして、その水責めで正気
に引き戻されたとき見える茶々丸は、苦しそう
に顔を左右に振ったが、それは、いかにも精
魂つきはてたという動作であった。

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法
ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇
〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂
ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方
の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何力月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細を雑誌に添附致します。何
月号からとお書きにならないときは、重複や
欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に
△本号にて前金切△の判を捺印致しますから
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方
は、毎年二十三日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受
取りになりたい郵便局（特定郵便局でも結構
です）と受取人のお名前とをお知らせ下され
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから数日後その局で御受領願います。
局での留置期間は十日間でその間にお受取り
にならないときは、発送人に返戻されます。

「漬けろい！」「よおし！」

滑車が軋み、不気味な水の音。

三度——四度……このままでは、いかに茶
々丸でも生命が危ない。

そのとき——

「お、お止めよう！ やめておくれよう、鞭
兵衛親分！ 白状するからさ、もう、それ以
上は、や、やめておくれよう……」

血を吐くようなお景の叫びであった。

「フッフッフッフ……」

鞭兵衛の顔が、ほころび

「お景。そりゃあほんとうか。ほんとにロザ
リオのありかを白状する気になったのだな」
「す、するから、するからさ。茶々丸を許し
てやっておくれよう」

ホッとした表情で鞭兵衛が念を押した。

「それに、もうひとつ。徳夜叉の隠れ家も吐
くというのだな、お景」

逆に吊られたまま、お景のあごは、もの悲
しく、たてに振られるのであった。

牢格子に、いけられた紅梅の花が、裸蠟燭
の光のなかで、ひとひら、ふたひら、音もな
く、その花びらを散らしていた。

——（つづく）——

「ノゾキは一ぺんしたら、やみつきになりますヨ」

(笑福亭松鶴「旅と酒と女」より)

告白

ノゾキとSMプレイ

志手原 茂

カット・若江正史



の水の美味さは又、格別だ。唯、欠点としては冬期は雪深く、道は凍結し、その寒さといったら神戸市街とは約4度の差があり、運転を日課とする私なんか、走行に危険を感じたりすることがあって、うんざりすることもある。

私は有馬温泉という関西では有名な温泉町に五年前から住んでいる。

周囲は山々に囲まれ、温泉は豊かで、又飲料水は澄みきっていて、その美味なこと、絶品という他はない。都会の喫茶店などで出されるカルキ臭い水の不味さから比べると、そ

それと有馬温泉自体、他の温泉宿と比べて色気を期待しているとガッカリする。それ程健全な保養地といった色彩が濃く、温泉特有の淫猥なムードに乏しいのだ。

この土地へ来て、最初のうちは自分の好色の心を充たしたいと思ったものだが、今では

その方は諦めて、専ら暇な時は小川で小魚を相手に釣りを楽しんでいる有様だ。

私は今年三十八才、保険の代理店業。一時は都会の華やかなネオンの街々で暮したこともある私だが、今は生活の不満を僅かに釣りでもぎらわす状態なので、ある時は、なにかしら、暇に身体を持て余すマンネリ状態に陥ることがある。

突然の自動車事故などで、加入者よりの呼び出しの電話などが掛かってきた時は、俄然私の神経は緊張し全身に活気が漲ってくるがそれも、その場限り、再び退屈の日々が訪れてくる。そんな私の日々の退屈の虫も、毎月の奇クが発売日から数日は救われる。

毎号、絶妙なタッチの文章で、私達読者の心を引きつけてくれる塚本鉄三氏の『カメラルポ』の頁が、私を感激のルツボに追い込んでしまう。私は氏のファンでもあり、奇クの発売日を鶴首して待つのも、『カメラルポ』を見たいからに他ならない。

殊に奇ク十二月号の塚本鉄三氏が取材した苗木陽子さんのルポ八畜化願望の女Vは、近來にない出色の記事であった。息もつかせずとは、このことを言うのかと思うほど、次から次へと、追い立てるように読まされた。そ

して、何度読み返しても、新鮮な感激を改めて思い起こさせる文章だった。

最近のSM小説というと、現代物にしろ、時代物にしろ、只の一度も女を縛ったこともない男が空想の上でだけ、やくざを引き合いに出してきたの、でっち上げで、いかにSMマニアといったって、いい加減、食傷気味になってしまふ。ひどいになると、筋だけは一緒に現代物を時代物に直したのなんか飛び出して来る。それで結構、大家だということだから、呆れ返ってしまふ。

それはさておき、上方落語の笑福亭松鶴が『旅と酒と女』で書いている『ノゾキの極意拝聴』では、「一度やったら、病みつきになりまっせ」という「ノゾキ」について、この夏、体験したので書いておこう。

今年の夏のことだった。同業の友人Aが、突然来訪して、「この近くに、絶対満足間違いないという穴場があるが、知っているか」と言うのである。「私も、ここに五年も住んでいるが、そんな穴場なんて知らない。もっとも、附近にアベックが来るといふ噂はチラホラ耳には入るが……」と答えた。

まるで、私の心の内を見通しているかの様に、ニヤニヤと笑い乍ら、その穴場での見聞

した時の詳細の模様を言葉巧みに喋っては、私をあふるのであった。

私は官吏生活、芸能プロなどを転々とし、各地で様々な楽しみを味わい、殊に芸能プロの時代には女のヌードを、いやという程、見えたので、その方面では或程度、飽和状態になっていた。だが、ことSMプレイ、ノゾキということになると、話はまた別で、私の関心は物凄く強いのであった。

私は友人の誘いにのって、その穴場へ一緒に行くことになった。場所——、ここに詳しく明記すれば、すぐに判ってしまう所なので困ってしまうのだが——、とにかく、宝塚から有馬へ向う幹線沿いから、脇へそれる道路（山間）を少し行くと、その脇道路の傍に、入江のようになっている広場がある。

広場の入口は車が二台並んで入れる位のもので、入口右手に丁度、自動車（軽）二台がすっぽりと樹々にかくれて停められるようになっており、周囲は明らかに人の手で折って作られたと思われる自然の車庫と云った状態になっていた。広場の周囲は約一〇〇米程あり、辺りは木立といっても、余り大きくない雑木が茂っている丘のような山が、四方からそっと包んでいるというような所なのだ。

車を、その入口の右手にかくし、徒歩で少し山手へ入ると、単車が一台置いてあった。

「あつ、カメが来てるナ」

と友人は私を顧って言った。私は彼の後から遅れぬように、道なき道を、木の枝や灌木の根っこに気をつけ乍ら歩いて行く。

「カメって、なんだい？」

と問うと、のぞく姿がカメに似ているからノゾキストのことを「カメ」と言うのだと教えて呉れた。

「あの車は、常連のカメのものだ」

と小声で笑いながら友人は言った。

急斜面を、やっこのことで這うようにして山へ登ると、ビックリするではないか。ベトコン戦争の写真で見える如き、木立を利用した陣地（見張り用の）が作られているのだ。

移動し易いように小路や足場も作られていて、その巧妙なことには全く啞然とした。友人は手提げ鞆から倍率三十倍ニッコールの双眼鏡を取り出し、その一つを私に押し付け「ここで、ゆっくり待ってるんだナ」

と言ってタバコを取出し、火を付けた。と
その時、どこからともなく、草色の服に身を固めた四十五、六才の男が現われ、「やあ、久しぶりですなア」と友人に言葉をかけ、私

の横に腰を下したのには、本当にビックリした。足音が少しもしなかったからだ。

もうすでにお解りの如く、この所に来る途中に置いてあった単車の主なのだ。そして、ここで、この入江の様な広場で、自動車を駐めて、今流行のカーセックスが行われているのを、双眼鏡でのぞいて、人知れず楽しもうという魂胆なのだ。

私が友人の話に大いに期待して一緒について来た理由の一つは、今まで覗いたカーセックスの中で、幾組かの烈しいSMプレイを見たという事を聞いたからであった。

この場所から覗いたプレイの迫力は抜群で離れているため、声こそ聞えないが、双眼鏡の視野の中に拡大されたそれは、全く息もつけない有様だったとのことである。

その場で合同した単車の男は、私にも、もう何年も前からの旧知の如く、気易く話しかけてきた。このノゾキ場で二年前から余暇を見ては楽しんでいるが、同好のカメは既に十数人になる——という話だった。そして、今迄の見聞録を、いろいろ聞かせてくれた。

なんでも、その人は遠く堺市から来ているのだという話だったが、いずれにしても、御苦労なことだ。私を相手にして口角泡をとば

して喋る中年男の話しぶりは熱を帯びていてまるで十七、八の少年のようだ。

カメにはカメとしての約束事があったて、絶対にノゾキの範囲から逸脱しないこと、例えば、アベックに手出ししたり、邪魔をしたりしないこと等の鉄則を教えてくれた。

「ノゾキは一遍やったら、やみつきになっ忘れられなくなりますよ。わしら、堺みたいな遠いところから、いそいそと、それが楽しみでやって来ますんやから……」

そう言うてから、その男は、私の耳元で、今日は3時頃に一度、入って来て、少しペッティングなどして直ぐ出て行ったクラウンが一台あるが、あの車は必ずもう一度、帰って来て、それはいいのが見られるよ——と、その車のナンバーまで言うて囁いてくれた。

私が殊に彼の話で胸を熱くしたのは、その車の主が雑木を利用し、裸身の女を縄で縛っている情事は、見ていても、しばし夢の中のようで、忘れる事が出来なかった——という話の内容だったからだ。

その時、バリバリと砂利を噛むタイヤの音がしたかと思うと、一台の車が、この広場の中へ入ってくるのが見えた。

「あっ、クラウンだ」

中年の単車の男が言う迄もなく、一台の黒塗りの車が、私達の場所からは最もノゾキ易い絶好の位置に駐車した。双眼鏡で見る迄もなく木の葉がくれに、車内にいる男女二人の姿が、はっきりと見える。助手席の女の顔だけは屋根に邪魔されて、かくれてはいたが。

周囲が小高い雑木の茂った丘で囲まれ、入口は細い道が一本あるだけ——という、この秘密の場所は、また、アベックにとっても、絶好のプレイの場所でもあるわけだ。入口の方さえ気をつけておれば、人のくる気づかいはないと考えるのは当然だろう。まさか、こんな道なき山の上からノゾいている男はいるとは、夢にも思わないだろう。地勢の上からすれば、まさにアベックの別天地、プレイの天国といってもよい場所なのだ。

ノゾキの初心者というわけでもない私だったが、やはり双眼鏡を持つ手が、なんとなく小刻みにふるえた。ストリップ小屋の楽屋では女達の裸をいやという程見なれていた筈の私に、こんな興奮が、どうして起るのか、自分自身でも不思議だった。

暫く、車内で談笑している男女。男は五十才位で、よく太っており、女性は二十を少し出たくらいの小柄なBG風、可愛いピンク

のブラウスを着ており、出ている手が如何にも白そうだ。このような組合わせのカップルの時に限って、その交渉も相当に烈しいものだという話だった。

「おい、こいつ等だ。きっと縄を使うから、楽しみだぞ。この顔には見覚えがあるゾ」

双眼鏡から目を離した単車の男が、私達に向って叫んだ。このノゾキの場所へ初めて来た日なのに、ノゾキの最高であるSMプレイの現場を秘かに覗く機会に恵まれたとは、私は、思わず心の中でブラボーと叫んでいた。

空想と想像で、私の咽喉はカラカラに乾い



イメージギャラリ

『誘拐ムード演出』

三鷹 I・O

ていた。奇クを愛読していた私は勿論、SM

ファンの一人であるが、その目に通していたさまざまな記事や写真が、目の前に浮かんだり消えたりした。そして、それにオーバーラップして私の空想がダブってゆく。

今や、空想ではなくして、現実に、そのSMプレイに接する機会に私は当たったのだ。胸が高鳴り口が乾くのも無理はないだろう。

男はキチンと背広を着ており、女は水色のミニスカートを付けていたが、それが目にしみるように鮮やかに見えた。

私達三人が、じっと息を殺して見つめているのも知らず、五分程カーステレオをかけていたが、急に男はドアを開けて外へ出たかと思うと、トランクの蓋を上げて毛布と縄を取り出した時のよろこび――。

しばらく周囲を見まわし、人の気配のないのを見定めてから、男はクローバーが一面に生えている上へ毛布を敷いて、助手席にいる女を手招きした。たしかに、ここなら、青空プレイするには、もってこいの場所だ。

周囲が山に囲まれていて絶対に人から見られ心配はないし、たった一本ある一車線ほどの入口は、車を駐車してふさいでおけば、他の車が入ってくる気づかいはないわけだ。

女が外へ出てくると、ブラウスのホックを無造作に外し、ドアにもたれるようにして、後手に縄を、さっさと掛けていた。その早いこと、驚くばかりだ。ブラウスの下はブラジャーのみでシユミーズは着けておらず、午後陽ざしの中で肌の白さが目に痛い。

夜ならいざ知らず、白日のもとなので、やるとしても、きっと車内の狭いシートの上でと勝手な想像をしていたのに、堂々と車外の青空のもとでプレイをやるとは驚いた。

だが、そこでプレイをやるのだと考えた私の想像は違っていた。男は一旦、敷いた赤い毛布を小脇に抱えて女の縄尻を持つと、勝手知ったる所とばかり、奥まった木立の方へと入ってゆくではないか。

「おい、移動するゾ」と、見ていた友人と単車の男は、私の耳元で囁いて、一斉に腰を上げると木蔭をツツと這うように歩いた。その動作の素早いこと。びっくりした。地形に慣れていない私は、モソモソと後に続く。

静寂の中で、私の心臓の音が、ドッキン、ドッキンと痛いように鳴る。勿論、私達は用心深く、音を立てぬように隠密行動だ。木立の中で這うようにしての素早い移動なのだ。

約一〇米ほども進んだらうか。見ると目と

鼻の先の雑木に囲まれた窪地の、芝生のように短い草が一面に生えた処で、男が毛布を敷いているところだった。なるほど、ここだったら絶好のプレイ場所だ。それに、この観客席も特別席だ——と感心していると、友人が「足もとに気をつけろよ」と耳打ちする。

たしかに、こんな近距離だったら、咳ばらい一つにしても、ボキンと木の小枝を一本折る音を立てても、万事休すだ。静かに慣れているこの別天地では、忽ち、私達カメの存在が見破られてしまう。息を殺して、吸う息吐く息にも気を配りながら、じっと待つ。

何から何まで、私にとっては感心づくめの一日であった。私は、双眼鏡に目を当てて間近に二人の動作を視野に捉える。

先ず眼鏡に入っただのは、女の白い二本の足だった。徐々に上へ向けると、今や男はブラジャーの紐をはずして、片方の豊かな乳房を撫んでいるところだった。可愛い乳首をいじっているところだった。眼鏡でのぞくと、形のよい両乳房はピンク色に輝いていた。

「余り時間がないからナ……」そのようなことを男は口にしていた。後の言葉は、よくはわからない。男の手は、ごく自然のようにミニスカートを、ずりおろす。まるで最初から

計算された映画のシーンを見るようだ。

真白いパンティが、なまめかしくて私を益々興奮させる。辺り緑一色の中で女の白い裸身が愈々白く、ほんとうに美しい。その羞ら顔の顔が、また、たまらない。

男は女を毛布の上へ坐らせたかと思うと、両膝、両足首に縄を掛けて開股縛りにしてゆく。上半身は簡単な縛り方だったのに、下半身の方は中々念入りだ。ニヤニヤと、うすうす笑いを浮かべていた男が、手にしている物を見て私は驚いた。いつの間に、どこから取り出したのか、それは一丁の鉄だった。

ユックリと、ユックリと、時間をかけて楽しみながら、開股縛りにされた女のパンティを、ゴム紐のところから鉄を入れてゆく。

むき出しの裸身。やがて、眼鏡の中に、はつきりとアップになって黒い茂みが鮮やかに映った。白い白い、真白い肌。それが木立を洩れる陽光に映えて、全く美しい。目を奪うような美しさなのだ。

「ムムムム」

声にならない女のうめきが手にとるように聞える思いだ。二の腕と腰あたりの筋肉が微妙に動いているのが、双眼鏡だから、よくわかる。なんとエロチックで見事な姿態であ

ろうか。女の呻きや荒い息づかいが、離れて
いる私達の耳にも伝ってくるよう錯覚するほ
ど、あたりは静かだった。

開股縛りは開股縛りなのだが、大開きとま
ではいけないので、かげりの奥は覗くすべも
ないが、それがまた余計に、私の胸をうずか
せ、期待に胸を、わななかせる。

じっと息を殺して、眺めつづける男三人。
男女二人は、私達がこんな近くから、ノゾイ
ているなどは夢にも知らない。青空の下、
更にプレイは続けられてゆくのだ。

男は何か女に囁きかけ乍ら、ポケットから
何やら棒状のものを取り出した。眼鏡を向け
ると、それはいつも見慣れたパイプだ。だが
少し違うことは、パイプの末端に紐がついて
いる。紐付きのパイプ——。私は、アレアレ
と思った。どんな効果をもたらすものだろう
か、と、興味を持った。

……と同時に、男の顔が真剣になり、女のウ
メキにも似た声が洩れ、裸身が、ゆるやかに
……。そして、それから、ここには書くを憚
かる数々の感動的な場面が展開された。

そして、最後の仕上げとばかり、男が女の
下半身の縄目をはずして、さて、いよいよ、
SMプレイのクライマックスの場面が、後手

に縛られた女の肉体の上で行われようとした
とき、最悪の事態が突発した。

車を駐めてあった広場の方角で、プープー
とクラクションの音がしたのだ。男は女を毛
布でくるむと、あわてて車の方へ下りて行っ
てしまった。

その時、その男女の行ったSMプレイが、
私の心の中に与えたショックは大きかった。
家からその秘密の場所は近いことでもあり、
私は以来、暇を見ては、そこへ数度通った。
しかし、再び、その機会はなかった。

あの悪夢のようなSMプレイの強烈な印象
は私の脳裡に灼きついて離れない。今のいま
で只、奇クを読んで空想するだけだった私に
あの強烈なショックを与えてくれた緊縛プレ
イの羞恥責め——は、異様な、もやもやを与
えてしまった。

いつか、自分が責めの主人公となって、女
に対して羞恥責めを行ってみたいという強い
願望が、ふつふつと湧いてきたのだ。

只無心？ に、奇クを読むだけで満足して
いた私に、SMプレイを実行してみたいと、
日夜夢にまで見させるようになってしまった、
あのノゾキの一瞬を忘れることが出来ない。
その点、毎号の奇クの誌上を飾るカメラ

ポの塚本鉄三氏は、ほんとに幸福な人だと思
う。絶妙なタッチで描く、あのルポの文章を
読み、素晴らしい写真を見ていると、思わず、
身体中の血が逆流するようで、居ても立って
もいられなくなる。

塚本鉄三氏の凄腕で見事に開眼させられた
畜化願望の女、苗木陽子さん。天神祭の女、
木村洋子さん。全く勇気のある素晴らしい女性
だ。偽りのない自分を、ありのままに引き出
して、SMプレイの甘美な旨酒の中に、とっ
ぷりと全身を浸している、この人達もまた、
塚本氏と同じく幸福な人だと思う。

幸いにして、私はカメラと暗室処理に、い
ささかの自信を持っているカメラ狂だ。SM
プレイのよろこびをフィルムの上に印したい
という希望も捨てきれない。それが果された
ときの感激は如何ばかりだろうか。だが、私
は秘密主義なのか、性格なのか、願望は願望
のまま、空想から空想へと走るだけで終って
しまう。事実を曲げないフィルムの助けをか
り、私もその仲間入りをしてみたい。

そして、偽りのない自分を、見つけたい。
そんな見果てぬ夢を胸に抱きながら、私は
今日もSMプレイを心に描いている。

<告白>~~~~~〔夫婦SMプレイ報告〕~~~~~

妻の純子を久々に縛りて

夫婦プレイのマンネリに就いて

三 浦 敬 一

大変ご無沙汰いたしました。久方ぶりでお便りさせて頂きます。

私たち夫婦は、毎月欠かさず奇クを愛読させて頂いております。殊に『奇クサロン』と『読者通信』は興味深く拝見しています。

妻の純子は「三浦純子」として、塚本鉄三様のカメラテストを受けて以来、ずっと、奇クに関心を持ち、発行所から郵送されてくると、私より先に手にしています。

私は、女の体に傷アトを残したり、血を流したりといったことは大嫌いで、いわば、空想的なSであるのではないか、と自認してお



りますが、妻の純子の方は、自分の体を提供して、二度、三度、四度——と、裸身を緊縛されて、第三者の方々のカメラの前に立ってみると、そのスリルが忘れられないらしく、そうしたことを、再度期待する言葉を私の前で折り、口にすることがあります。

元々、純子は物静かで控え目な性質なのでそうしたことも積極的に私に迫るといったこともなく、又、私も日々の仕事に追われて、いつしか、一年ほどの月日が経ってしまいました。その間、一度、夫婦で上阪した折り、編集部へ電話したこともありましたが、いろ

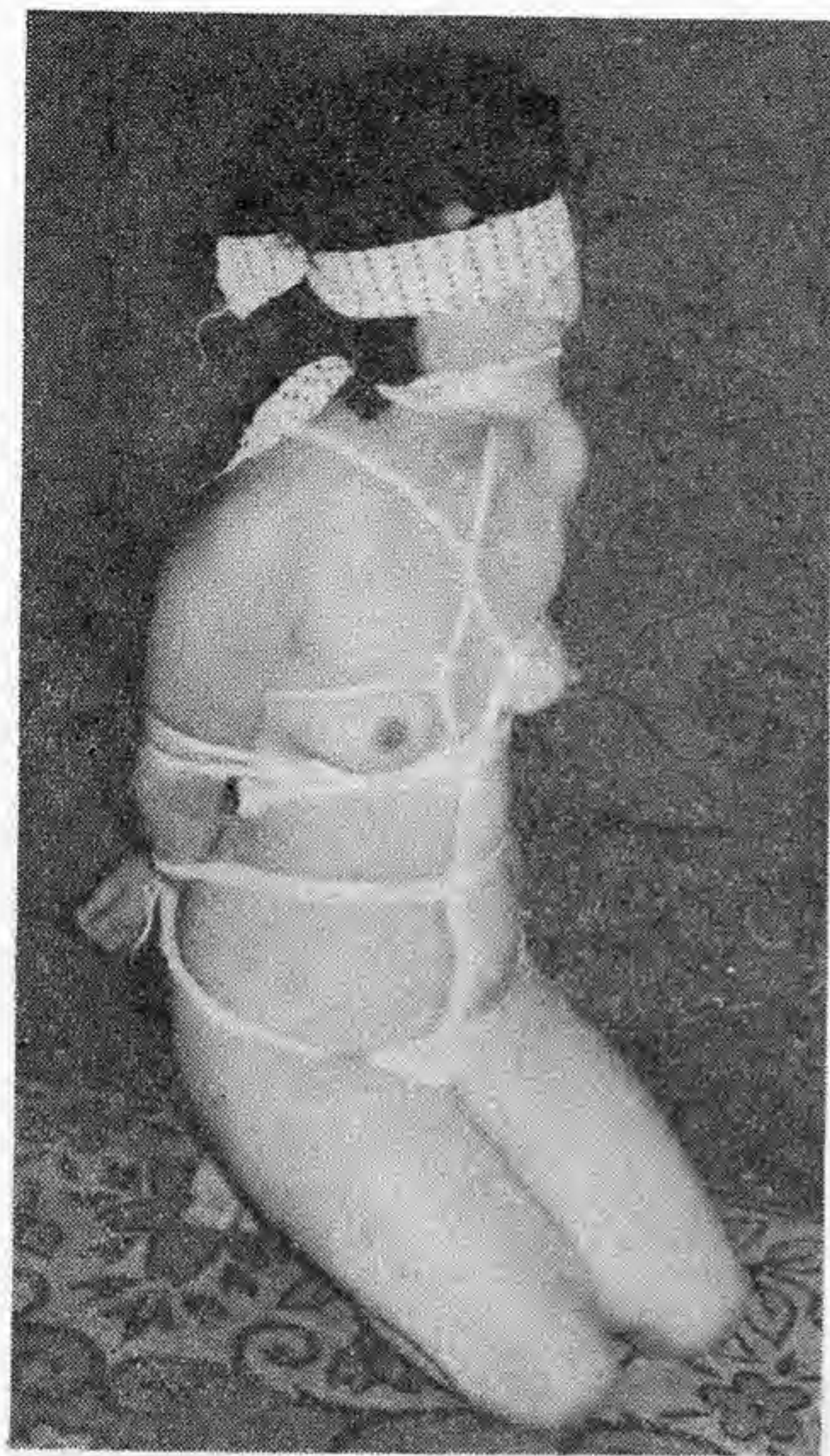
いろんな都合で、SMプレイや写真撮影にまでは至りませんでした。

毎月発行される奇クを読むということ、私達夫婦の生活に潤いを与えてくれ、潤滑油としての役目を曲がりなりにでも果してくれていました。奇ク誌上を度々に飾った八三浦純子Vという女性を、自分の妻として持ちながらも、「いつも自分の傍にいて、いつでも自分の思い通りにプレイ出来る」という気易さから、かえって、SMプレイをやらない日

が多かったのかも知れません。

三浦敬一の奴、毎晩のように、純子とSMプレイをやっているのだらう——と、誌上に出た「三浦純子」の記事や写真からは、思われたかも知れませんが、実際は、いろんな都合で、殆どプレイらしいプレイは、やっていなかったのです。

妻の純子を縛ってみたい——と、いう気持が常々ありながら、それが、どうしても、実行には、つながらなかったのです。



それは、あながち、SMプレイには限りません。他のことだって、例えば、家の一寸した修繕仕事だって、次にはやろう、次にはやろうと思いつながら、半年や一年、すぐ経ってしまうということが、よくあります。また、それだけ、我が家に於いては「夫婦のSMプレイ」は、日常茶飯事になっているということとも言えるわけですが……。

さて、どうした風の吹きまわしか、一年ぶりで、妻の純子を縛りました。SMプレイをやったのです。毎月、奇クを愛読している純子のことですから、縛られるということについては、至ってスムーズに入れました。

女体を縛る——という私の男性としての軽い興奮。全裸にされて縛られるのだ——という純子の期待。それらは、私たち夫婦に、楽しいひとときを与えてくれました。

私は妻の純子を、色々に縛り、そして責めて或程度の満足を得ました。しかし「縛り」について言えば、色々に縛った——と自分では思っていたのですが、そのときに撮った写真をごらん頂いても、よくお分りのことと思えますが、つい同じスタイルになってしまっ

て、意欲が湧かないのです。

自分では、ああいう縛り方をしたい、ああ

もしたい——と思いつつ、やっているとなんだか気が抜けてしまうのです。

「責め」にしても、そうです。あれだけ、奇クを読んでいる時は胸を熱くし、寝床の中で純子と一緒に読みながら燃えたものが、今、実際にプレイをやってみると、おかしいほど戸惑い、空転してしまうのです。

御参考までに、その時、撮影したネガを同封致しますので、どうか御診断して下さい。

もし、この純子の緊縛写真をごらんになって、現在の純子でも、SMプレイが出来るとうでしたら是非お願いしたいと思うのです。一年ぶりの今回のプレイで、私達二人は急になんだか第三者の方を混じえたプレイをしたい気持ちにかられました。

それと、忍び寄る、私達夫婦のSMプレイのマンネリ化を、このあたりで打ち切りたいという願いが、底に潜んでいるのも事実なのです。『夫婦プレイのマンネリの打破』ということについては、奇ク愛読者の御夫婦の方々の中でも、いろいろと考えておられる方が多くおられることと思います。

十一月号誌上で八私達夫婦のプレイ旅行の記録Vを書かれた早坂信治、郁子のご夫妻なんかは、いろいろの豊富なアイデアを次々と

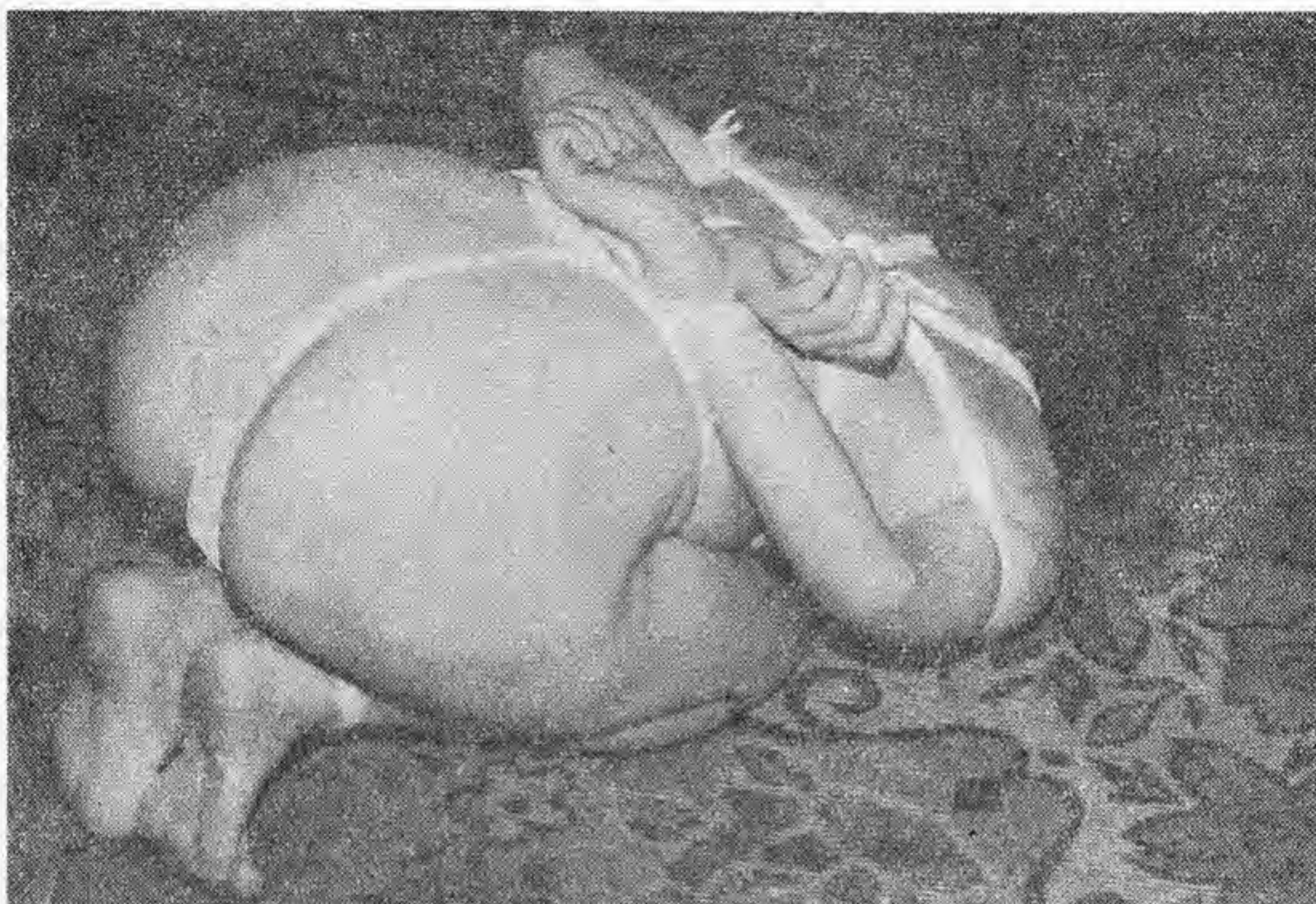


考えられて、実に多彩なSMプレイを展開しておられるので、いつも感心もし、羨ましくも思っております。私達夫婦も、早坂ご夫妻のような「夫婦生活」をしてみたいと常々考えていますが、なんといっても、早坂さんには、お子さんがおられないということが、SMプレイにとっては有利ですね。

でも、ご夫婦の気持がぴったりと呼吸が合っていて、他の生活の面でも、さぞ幸福な家

庭だろうと想像されます。その点、私達の夫婦も八夫婦随Vで、まあまあ及第点を与えて貰えるとは思っています。が、やっぱり、夫婦生活の慣れといえますが、情性といえますか、平穩無事な日々の生活だけに、また一種の倦怠的な気持のダレというものが、忍び寄ってくるということも否めません。

最近ばかりお書きになりませんが、一時、毎月のように誌上に顔を出しておられた渡部



光雄、好美御夫妻は、如何お過しですか。その後の消息を御洩らし願えば幸いです。

一時期、私達は渡部氏ご夫妻をお手本にして、奇クを読みながら気持を高め、夫婦生活の楽しみを倍加させておりました。

さて、私達夫婦の一年ぶりのSMプレイについて、只、私が縛りや責めが大好きだということだけで、忽ちのうちに大ハッスルするということがなく、従って、ここに、愛読者の皆様に参加になるような報告書が書けないのが残念至極です。

それで、私が一つ思い起こしますことは、以前に、塚本鉄三様に純子の写真を撮って頂いたり、辻村隆様にカメラハントされた時の二人の興奮ぶりです。正直いって、この時は私も純子も異常なまでに燃えました。あの大人しい純

子が——と、私も驚いたくらいなのです。夫婦のSMプレイのマンネリ打破としては、これに過ぐる妙薬はないと思っています。もう一度、この痺れるような快感を味わってみたいと願っている次第です。

近頃、塚本鉄三様のカメラルポが非常に人気があるらしく、十二月号誌上で苗木陽子さんが、「白豚」として調教、飼育、虐待されていますが、この記事を読み写真を見て、たまらなくなりました。妻の純子も、このようにして責めてほしく思いました。塚本氏のカメラ・ルポで、妻の純子の緊縛裸身を誌上に載せて貰ったら、どんなに素晴らしいことでしょう。きっと純子も、凄く悶え抜いて泣くことだと思います。そんなことを考えると、私の胸も思わず知らず熱くなります。

塚本鉄三様。妻の純子を、無条件で提供致しますから、どうか、思いのままに、責めてみて下さい。そして、カメラ・ルポとして写真と共に、誌上に載せて下さい。甚だ勝手なお願いですが、私達の夫婦SMプレイのマンネリ打破のために、どうか御協力下さい。

そんなことを考え、今、こうして、ペンを持って書いているだけでも、私は妖しい亢奮に包まれてしまっています。

〃耽奇房〃 我楽多控（第十二回）——二十四時の悪魔シリーズ——

午前零時の悦楽

（後）

江呂川淫歩氏の
優雅な推理生活

辻村

隆

カット・志羽利也



バーテン殺害さる

百合子から聞いたのか、大谷健は、かなり執拗に、秘密パーティー参加を奨める電話を掛けてきたが、一旦、山荘へ戻った淫歩氏の足は重い。

肉体にからきし自信のないこともさることながら、阿奈子が必死に足止めして、全身これ性の権化となって献身しているからかも知れなかった。

意馬心猿の淫歩先生であったが、どこへでもついてゆく阿奈子を引連れて、秘密パーティーに出掛けてゆくのも、何となく面映く、且つは自信ゼロの肉体を卑下してか、つつい機会を失して、日一日が経っていった。

あの夜から一週間、経った朝、ツジムラの来訪でスナック『縄』の元バーテン、今はクラブ『ケン』のマスター大谷健が、何者かによって殺害されたことを知り、淫歩氏は愕然とした。

心臓を鋭利なナイフらしき刃物で一突きにされて、淀川に浮かんでいたのを、近所の通行人が発見したというのであった。

警察で、彼の身許が割れたのは、発見後二日、経ってからであったが、ツジムラは、この大谷健が殺害されたという事実を、身許の割れる前に、既に淫歩氏に連絡していた。ということは、ツジムラはこの殺人事件を、何らかの方法で、既に逸早くキャッチしていたということになる。

痴情と怨恨の線で、当局は必死の捜査を始めているらしかった。

ここに於いて江呂川淫歩氏独自の推理ゲームが開始されたのである。助手の阿奈子をフルに使って金に糸目をつけず聞き込みを始める一方、大谷健によって脅かされていた四人のプレイヤーのアリバイや動きを徹底的に調査し始めた。殺害の動機が四人のプレイヤーに一番、関連していると睨んだからである。

再度の脅しに、切羽つまった四人のうちの誰かの犯行だと氏は推理する。

阿奈子の報告によると、事件記者や刑事の口裏から察して、今の処、四人のプレイヤーは浮んでいなかった。

水はのんでいない点からみて、殺害後、淀川へ放り込まれたのは決定的で、解剖の結果、直接の死因は、心臓をつらぬいた、鋭利なナイフの刺傷によるものであった。

犯行の時間は、土左エ門になった彼を発見した時から、推定して二日前の深更という。

当局は今、全力を挙げて大谷健の身辺を洗い、女性関係や交友、地廻りのやくざ、客とのもつれなどを探っているということ、或は遡って、銀子の屍体遺棄に関する一件を探り出すかも知れなかつ

た。

阿奈子が、顧問の私立探偵に依頼して、四人のプレイヤーの、事件当夜のアリバイを調査した結果は、左の通りである。

大谷健が殺害されたと推定する三月二十四日、夜の十一時から翌午前二時頃までの間、

一、繊維会社々長A氏は、山陰の城崎温泉へ、なじみの料亭の女将をつれて、チヨネチヨネのお忍び旅行で、温泉ホテルのフロントの証言では、夕食後、一杯気嫌の二人はブラリと街に出て、土産物をヒヤカして歩き、十時頃、戻ってからは一歩も出なかったといっている。一晩中、出入自由の温泉ホテルでも、そんな時間から、城崎—大阪間を往復は出来ない。A氏は完全なシロであった。はしなくもA氏の浮気が、ばれた程度のお負けつきで、料亭の女将を念の為にしらべてみると、これがまた、かなりのマゾ性の持主と分り、A氏の城崎温泉行きはSM旅行だったのか、さこそと頷けるのであった。大谷健に百万円は払い済みであった。

一、農協理事長B氏が当夜、自宅に帰ったのは午前一時頃であった。大阪のキタから、B氏の住むI市までは、車で飛ばしても、優に一時間半は、かかる道程である。午前一時に帰宅したということ、は、仮にキタで遊んでいても、夜の十一時過ぎには引揚げていなければならなかった。彼は当夜、幸か不幸か、関係官庁の役人二人を連れて、クラブ『ケン』を訪れ、宵の九時頃から一時間ばかり、ここでのもんでいたことは『ケン』のホステスの証言で判明。しかし、秘密パーティの催される新大阪駅まで走って、パーティに加わっていたら、到底、午前一時には帰宅出来ない。役人と別れたあとの、午後十時からの一時間ばかりの、B氏のあしどりは不明であったが

医療器具屋のC氏に、この時間の足どりを聞いてもらったところ、B氏はゆきつけの小料理屋で一杯のんだあと軽い夜食をして真すぐ帰ったということであった。念の為、小料理屋をしらべたら、女将が間違ひなく証言し、B氏の当夜の行動も殆どシロといってよかった。大谷健へ、百万円の小切手を渡して、特別会員になっている。

一、医療器具店主C氏のアリバイ。彼は恰度その夜、月例の秘密パーティの開催日だったので参加して、午後十一時過ぎから午前二時頃まで、淫靡な快楽の渦の中に耽溺していたのであった。払った分は取返さねばという大阪商人のド根性丸出しで、値切ったり泣きついたりする癖に、助平精神は最も旺盛なようであった。

原則として、男女は平等人数で、参加者は、すべて裸身の上、双眼を黒マスクで蔽う。緊縛や責めを伴う乱交パーティといってよかった。

彼自身の告白によれば、主催者大谷健は、紛れもなく秘密パーティのアジトの受付で客を迎えており、午前零時頃、魔窟めいたこの淫靡の部屋に一度、這入ってきて、パーティが順調に進捗していることを確かめた上、部屋を出ていったという。

ということは、大谷健は、午前零時現在、確かに健在だったということになる。

これは、C氏の発言を、全面的に信用した上でのことであるが、反面、彼に殺意があれば、一番、犯行を行い易い距離にあったともいえるのではなからうか。

医療器具店だから、鋭利なメスの入手もお手のもので、将来も又度々大谷健から脅迫されるおそれなきにしもあらずと考えた時、彼が殺意を抱いたとしても不思議ではない。

裸身にナイフは隠しようもないが、その気なら、脱衣の折、どこかへ隠すことも可能である。幸いに、一様に黒マスクで眼を蔽っていて誰が誰かは分らない。

あとを追って、大谷健の油断をみすまし、一刺しに即死させ、屍体を一時、隠しておく。

乱交パーティの薄暗い密室の中で、一人ぐらい暫くの間、不在でも、すべてが酔って狂ったような痴態に耽っている時、ひとのことに気付く程の余裕は懼らく、ありはしないだろう。不特定多数の、未知の人間の中での殺人は、やり易く、又、仮に気付いたとしても悪徳の坩堝に悦楽する自己の保全が優先して、黙秘していたに違ひなかった。

C氏の殺人動機は十分である。疑惑の眼でみた時、最もクロに思える。日頃はフェミニストの小心翼翼者でも、思いつめると窮鼠猫を噛むで、反ってやりかねないのではなからうか。しかし殺害後、どうして淀川へ捨てたのか――。目につかぬところへ隠しておいた屍体を、パーティの終わったあと、車のトランクへでも放り込んで運んだという推理も出来るが、目撃者なしとは不可能に近い。パーティの出席者の目撃の男、女、誰かが、密告することも考えられるのだから――。

一、〇〇組々長のD氏は、犯行のあった前日、九州から上阪して在阪の大幹部保釈の花会に出席して、数百万、負けていた。

翌夜――すなわち大谷健が殺害された夜、賭博でスってしまったムシャクシャもあって舎弟達を引連れてミナミのナンバ新地で酒のみ、かなり荒れていた。馴染みの芸妓に、既に客がついていて、顔を出さなかったせいもあって、気嫌も悪い。大谷健の泣き脅しで

内心プリプリしていても、今回だけは仕方なく金を渡す気でいたがその金も、バクチで負けてしまったのでカラッケツである。午後十一時過ぎ、クラブ『ケン』を訪れたが、大谷健は既に新大阪駅近くの秘密パーティのアジトへ出掛けていて不在であった。彼のあとを追うように秘密アジトに到着し、パーティの門を叩いたが、金を払っていなかったで、会員名簿に氏名はなく、門前払いを喰わされている。彼が訪れた時、既に大谷健は、アジトから姿を消したあとであった。偶々路上で二人がバッタリと出くわした時、D氏に殺意が湧くかも知れなかったし、その可能性は充分である。しかも組長がこのアジトを立去って、午前三時半、大阪駅裏のニュー阪神急ホテルへ戻るまでの、三時間ばかりの足どりは不明である。組長のアリバイはない。

淫歩氏の推理によれば、最もクロに傾いていた。組関係の人間は口が堅いので、私立探偵は難航し、在阪の大親分と親しい事件記者に依頼して、やっと判明したのであった。

「と、いうわけで、ワシの推理では医療器具屋か組長かの、どちらかがやったとみるね。淀川へケンの屍体を捨てにゆけるのは、医療器具屋の方が可能性がある。商売柄、窓なしのパンを数台、持つとるからね。それに、あの主人は運転が出来る。組長もアリバイなしでクロだが、殺害後どうして処理したかだ。かなり酔ったようだし、九州から鉄道で来たのでは、タクシーでも拾わん限り、運搬は出来まい。又、組長の場合、ケンをやたら殺したら、わざわざ淀川くんだけまで捨てにはゆかず、犯行場所に放置して、逸早く逃走するとワシやみるね。どうかねツジムラさん」

「流石です先生——。となると、結論として、犯人は、医療器具屋

だということになりますね」

「ウン、断言は出来んが、一番クサイ。諸般の情勢を判断してみても秘密パーティにも出席しておるし、最後のケンを見たのも彼だ。どうも、そうなるのじゃよ。いやネ、彼が君の同好仲間だということは勿論、知っとるよ。ワシの推理で犯人を割出してみたところで、サツヘなど売り込まんから心配し給うな。ワシや、好きでやっとなるのじゃから」

「オーソドックスなアリバイという点から考えますと、確かに医療器具屋が一番、怪しく思われます。しかし彼にしても、危ない思いをして何故、淀川へ屍体を運ぶ必要があったのでしょうか。黒マスクに蔽われた、パーティの全裸の男女の痴態の中なら、ケンを刺したあと、一緒に紛れ込んでプレイを続けていた方が、反って安全だとも思うのですよ。私の調べたところによりますと……」

ツジムラは、そこで思わせぶりに口を、つぐんだ。

「なに、なに——。君もこの事件について調べたというのかね」

淫歩氏は、特徴のあるドングリ眼を、更に大きく見開いて、ツジムラを、にらむように見据えた。

「ええ、何しろ同好仲間の一人が、もし殺人の容疑でもかけられたら可哀そうなので、チョイと、ちょっかいを出してみました。社長理事長、組長は私の関係のない人間ですが、先生の疑われた彼が私の仲間となれば、これは調べずにはおられませんからね。事実、彼は疑われる立場にあるのです。彼は、身に覚えがなく、シロだとい切るものですから、過去の秘密の事件もあるし、サツの手の廻らぬうちに、私なりに調べてみたのです。どうぞ、お気を悪くなさらないで下さい」

「気など悪うはしとらん。それで、君に真犯人の目星は、ついたというのかね」

「現在のところ、きめ手はないのです。しかし、明日の夜になれば分ることです」

「明日の夜？ それは又、どういう意味なんじゃね」

「この山荘へ、シロ、クロの別なく、ケンと関わりのあった四人の仲間を、医療器具屋の肝入りで呼んだのです。お許しもなく勝手なことをして、申し訳ありませんが、先生の退屈しのぎにと思ひまして……。いけなかったでしょうか」

「外ならぬツジムラはんのことや。ワシやいいで。いいとも……。それで、その四人のうちに、真犯人がいるとでもいうのかね」

「かも分りませんし、或は、いはいかも知れません」

「頼りない話じゃなあ」

「ええ。どうせ真犯人が分っても、先生のお遊びでしょうからね。過去のSMプレイ嘶もいいじゃありませんか。ついでに、何かの参考人や証言人になるだろうと思って、クラブ「ケン」のホステスを五人ばかり、わたりをつけておきました」

「ほほう、ますます嬉しいぞよ。勿論あの、ムチムチの百合子嬢もそのメンバーに入っておるじゃろうね」

「それは抜かりありません。先生のおめあてと推察し、阿奈子さんの手前、あとの四人は当て馬で、四人のプレイヤーにでも抱かせましょう。但し、これとても、医療器具屋の采配ですが――」

「とすると、ワシや、四人の連中はええが、肝心のあんたの相手、おらんことになる。もう一人、追加し給え」

「いや、私はいんです。それより一夜を愉しくやりましょうや」

「ウン、流石にツジムラはん――ワシやもう推理なんか、どうでもようになった。いっそ、この山荘で、SMパーティーでも、やらかすかね。ああ、そやそや。うちの阿奈子を君に貸してあげよう。ワシがよう飼育していたから、可愛がってやり給え。フヒフヒフヒ」

淫歩氏は、嬉しい時の、それがクセの、奇妙な笑い声を発して、忽ち悦に入る。かかるところは、至極単純であった。

「大切な阿奈子嬢を賜り、恐悦至極に存じます。百合子嬢以外、秘密パーティーに出掛けているホステス達であります。ケンが殺された折も折、四人の仲間が、SMプレイする気になるかどうか。過去の過失の殺人で、すべてが怪に傷もつ身ですから、内心は、明日の会合を、ケンの殺人事件と関連ありとみて、戦々きょうきょうのようですが」

「そこがツジムラはんの腕のみせどころよ。反ってハッスルしよるかも知れん。こりや早速、うちの専属レストランに申しつけて、スペシャル料理を注文しておかにゃいかんの」

かくの如く、江呂川淫歩氏は、ことSMの絡んだ推理事件となると、もうソワソワとして、さながら幼児が玩具を与えられるが如く愉しくてしょうがないのであった。

お出入自由のツジムラは、そんな点をチャンと心得ていて、うまく利用する。それをまた、淫歩氏は利用されて喜んでいるのだから話は早い。

心に期するところがあるのか、明日の夜、ホステス達の勤めが終った午前零時、四人の仲間と五人のホステスが、この山荘に会合することになったが、すべてはツジムラのお膳立であることはいふ迄もなかった。

意外な真犯人

静まりかえった山林に囲まれた、豪奢を極めた山荘には、いつになく明るい灯が洩れていた。

山林これすべて、江呂川淫歩氏の持山であるから、覗き見されるおそれは全くない。

山荘に通じる舗装道路は、いうまでもなく私道であって、最後の一人が到着したら、私道の入口の鉄扉は堅く閉ざされてしまう。誰かが、この扉に触れた時、電動ベルは、けたたましく門外漢を驚かすことであろう。

当夜の料理を配置し、盛付けるため、淫歩氏が最も信用するコック長一人だけが、山荘につめかけていて、曾々野阿奈子と二人、あれこれと、ワインや珍味に気を配っていた。

このコック長、味賀良造とて、いう迄もなくプレイの理解者であり、彼自身、その過去に、かなりのプレイ歴を持っていた。年令五十七才、酸いも甘いも噛みわけた。淫歩氏心酔者の一人である。

山荘から国道の或地点まで、阿奈子は再三、車を駆って、ホステスや仲間を迎えに走っていた。多人数が深夜、山荘に集合することを、さとられぬためである。

社長は自家用車。農協理事長は医療器具屋の車に同乗して、阿奈子の案内で既に到着している。

組長とホステス二人をのせた阿奈子の車が私道の扉を閉ざして、最後に到着したのが午前零時半――。

ブスツとした組長の顔が大広間に揃ったところで、ツジムラは司会のような恰好で口をきった。

「今夜お集り願ったのは外でもありません。皆さんも御存知の、クラブ「ケン」のマスター大谷健が、三月二十五日の深更、何者かによって殺害され、淀川畔に屍体が浮かび上がりました。ホステスの皆さんも含めて、彼と何らかの係累のある方ばかり集まっていたかもしれませんが、今夜この山荘を提供され、山海の珍味でもてなし下さる江呂川淫歩氏は、知る人ぞ知る、耽美派の推理作家でして、且つは人生悠々、何御不自由なき優雅な生活を送られている方なのです。先生の御趣味は、SM的な事件の推理でありまして、今回のマスター殺人事件が、SM的要素が、かなり含まれていることを知られ、いたく興味をもたれまして、かくは御協力下さったのであります。先生独特の、広汎、博識の推理によりますと、その容疑者は、医療器具店のC氏ではなからうかと……」

そこまで喋った時、急に大広間は、ざわめき、参会者の射るような視線が、医療器具屋に集中した。彼はキョトンとしていたが、ハツと度胆を抜かれて、忽ち顔面蒼白になり、それが須臾にして紅潮すると、

「バ、バカなッ。私じゃない――。そんな、バカな推理があるものか。私は断じてやってはいない」

と拳を振上げて絶叫したのであった。ツジムラは、ざわめく一同を制して、

「よく聞いて下さい。C氏ではなからうかという御推理ですが、彼によき同好仲間である私は、絶対に彼をシロと信じております。私の拙い推理の結果、淫歩氏には申訳ありませんが、真犯人は別にいることの確認を得たのです。しかもこの場に――」

再び人々は、ざわめき始めた。ホステス達の表情は、さまざまの

……イメージギャラリー……『艶火の点る部屋』……四馬孝……



思惑に、めまぐるしく変化していた。

「但し、ここは警察ではありません。真の犯人が判明しても、その者を罰するだけの権限はなく、又、淫歩氏御自身も、それは好まれません。謂わば真犯人当てのゲームに外ならないのです。殺人は一般に兇悪犯罪と限ったわけではありません。怨恨や痴情の場合など、むしろ、加虐者に同情すべきような動機も多いようです。理性が制御出来ず一時的にカッとした時、誰だって犯罪者になり得る要素を包含しているのではないのでしょうか。殺人者は案外、皆様の隣にいる人かも知れない、というのが、今の社会機構です。それを気にしていいたら、この世の中に住んでもおられません。まあ、そういった観念で、皆さんはどうか気分をラクにして下さい。今宵のような愉しい集いで、本当は大谷健をやった者など誰だっていいのです。目的はそんなことより、今宵ひとときを、思いきりデラックスに、淫靡に、快楽のSMプレイに打興じて貰うことなのです。ホステスの皆さんのうち、百合子さん以外はすべて、あの淫蕩のアジトでSMパーティーを味わった経験者であることを調べた上で、お誘いしたのですから、甞かし愉しい一夜を、この場の紳士諸君とお過しと思えます。とも角、我々のSMプレイの前途を祝してカンパイとゆこうではありませんか」

一体、目的と真意は奈辺にあるのか、のんきな司会振りでツジムラは、コック長と曾々野阿奈子に眼で合図を送った。心得て、二人は参会者の中を泳ぎ廻ってゆく。阿奈子嬢からホステスの一人一人に、そっと手渡されている紙包みは、懼らく深夜の狂宴の報酬なのであろう。奇妙な雰囲気の中も、現金な女達の嬌声で、忽ちにしてリラックスしていったのであった。

四人の仲間のうち、組長以外は既に百万円出して特別会員になっていたから、ホステス達も先刻御承知の顔なじみがいるようで、磊落な社長など、忽ち相好を崩して、おめあての女に近づき、早くも脱がせにかかっていた。ツーカーの陰陽が四組、揃えば、さしたる時間にもかからない。組長とて、もともと好きなSMの道のこととて寄添ってきた女を抱きしめて何事か囁いているし、容疑者と目された医療器具屋にしても、先程のショックもどこへやら、鼻の下を長くしている。

ツジムラは淫歩氏に近づくと、

「お目当ての百合子さんを例の別室へ、どうぞ。先ずは、あの耽美房で美酒を酌み交し、あとは……」

と、氏の耳許に一言、二言、ひそと囁く。

「いいねえ。しかし大丈夫かな。彼女本当にマゾ気があるのかね」

「若い女はムードに弱いものですよ。そこは先生の腕のみせどころで、持ってゆき方じゃないですか。阿奈子嬢は、私がお預りしますから、さあどうぞ——」

ツジムラに促されて、淫歩氏の顔中の筋肉は、ゆるみ放しになり涎を垂らしそうな甘ったるい表情で、嬉しげに、百合子の肩を抱いて、SM的な、あらゆるものが完備した耽美房へと消える。

酒池肉林の大広間のシャンデリヤは消え、仄暗い、低いルックスの彩色の飾り灯が、あちこちに蠢く男女を微かに照らしていた。

淫歩氏からお許しの出たツジムラは、阿奈子を膝に抱き上げ、廻した手の指先が、彼女のかたちよく膨れ上った胸許をなぶっていたが、小声で交す囁きは、どうやら甘い愛の語らいではなく、事件の推移について、お互いに情報を語り、検討していたようである。

二人は皆に気附かれぬよう、そっとこの大広間を抜け出したが、数分後に再び戻ってくる。

ツジムラはグラスをとって、野獣のように戯れたり、羞恥の体位で縛られているホステスに近づくと、軽い冗談を飛ばし乍ら、女の口にワインを注いで廻っていた。

数分後、縛られた俤や、全裸で仰向けになった恰好で、四人のホステス達は、次々と眠りこけていった。一時性の強い催眠剤が、ワインに混入されていたのである。

全裸や半裸の四人の紳士にツジムラは、ひそひそと何か告げて廻る。男達は一様にハッとしたように立上り、身なりを整え始めた。

ツジムラと阿奈子を先頭にした一団は、山荘の長い廊下を歩き、外気が肌にしみるのを覚えながら、小さい谷間にかけられた吊橋を渡って、別棟に到着する。十六世紀の館を模した耽美房の前に来て阿奈子は、重々しい扉にとりつけられた金獅子頭の把手を握ってコツコツと叩いた。

扉は電動で、音もなく左右に開いた。

異様な飾りの間を抜け、次の間の中国風の彩色も、けばけばしい居間の紅彩の潜り戸を開くと、ブルー一色の照明の部屋は、かぐわしい薫香に満たされていた。

おどろおどろした雰囲気、漂う部屋の中央に、四本柱のピカピカ光る組立てパイプのプレイマシンの置かれ、人々は眼をこらすと、その中央に蒼白い女体が、うごめいていた。

両手足を大の字に開いて、細い鎖で、四本柱のパイプの取付環に吊り下げられた百合子が、さながら深海魚のように、柔らかいジュータンの海底に身を沈めていた。

傍らのロッキングチェアに腰を降して見守る淫歩氏の手には、特別製の肉肌のパイプが握られている。思う存分に開股された大の字仰臥の手足吊りに、百合子は羞恥を蔽うすべもなく、一同の闖入に必死に身をくねらして愧らしい悲鳴をあげた。

阿奈子が壁のスイッチを次々と押してゆくと、みるみる耽美房は明るくなっていった。

「どうですか、皆さん。唯一人、アジトのSMパーティに参加しなかった、この百合子さんの体を、じっくりと観賞してみようじゃありませんか——」

ツジムラの声がかかるまでもなく、好奇の紳士達の、嗜虐の視線は一斉に、明るい部屋の中央に曝された百合子の全裸身に集中されていった。

「あッ、銀子だ——。銀子……」

社長が突拍子もない声で叫んだ。

「そうだ。違いない、長い——。こんなに長いのは、銀子以外にはない」

医療器具屋が、仰天したように絶叫した。

どっと憑かれたように、咫尺の間で、彼等は確認する。

かたちよい繁みの一端は、異常なまでの長さで、銀子自身であることを証明していたのであった。

人々の肩越しに、そっと覗き込んでいた阿奈子は、同性の羞恥に頬を染め、流石に顔をそむけて逃げるように淫歩氏に寄り添った。

銀子は、あの夜の凄惨なプレイの挙句、彼等の犠牲^{いけにえ}となって、惨死したのではなかったか——。

四人のプレイヤー達の顔は一樣に蒼白になり、さながらその場に

幽鬼を見たかのように、体を震わせるのであった。

「ケンを殺^やったんですね。そうでしょう、銀子さん——」

ツジムラは、四肢を吊られた全裸の、銀子の顔のあたりに、しゃがみ込み、静かに声をかけた。この真相劇を計画した彼一人だけが冷静なようであった。

「……………」

無言の銀子の表情は苦悶に歪んでいった。あきらめたのか、首をもたげて微かにうなずくと、ショックの余り、反動をつけて、女のうなじはガクンと大きく床に垂れた。

淫歩氏の、眼の玉の飛び出そうな驚愕の顔は、みものであった。

「こ、これは一体、どうなってるのじゃ。ワシャ、カナワンヨウ」
ツジムラは非礼を詫びるように、淫歩氏に深々と一礼したが、古いジョークに、思わず苦笑を洩らしていた。

その真相

ツジムラは語る——。

「ギネの同好の医師は、こんなことを、いつか話してくれました。カーテンで蔽われた、向うにある女性の顔は、よく覚えていなくても、何かの折に診察したら、忽ちにして何処の誰だと、思い出すというのです。一人一人、顔が違う如く、それも又、形態に特徴があるということです。」

彼女は整形手術によって、本来の容貌を、痕跡もとどめぬくらい変貌させたのですが、流石に、そこまでは整形出来なかったのですね。裸身になっても、うわべからでは分らぬし、プレイや愛情の交換などによって、あからさまに確認されぬ限り、分りっこないと考

えていたのかも知れません。更に用心深く、特定の男性にのみ知られた肉体の特徴ですが、万一の発覚や噂を恐れて、アジトでの秘密パーティにも出席しなかったのでしょうか。

今宵、当て馬のホステス四人の中へ、さりげなく混じえて、淫歩氏が大のお気に入り、おだてて、やっと連れ出したのですが、淫歩氏の御協力で、こうして皆さんの確認を得て、銀子自身であることを確かめたのです」

淫歩氏は大きな眼をパチクリさせている。ツジムラに契められておそろおそろ始めたSMプレイが、協力したなどといわれては内心くすぐったかったが、百合子が予想外に、あっさりと脱ぎ、大の字束縛のポーズをとって、特製パイプに、身も世もあらず歓喜に悶え始めたのも、今にして思えば、根っからの彼女のマゾ性が、優雅な雰囲気の中で、知らず知らずに発揮されていたように、思えるのであった。

(さき程、二人で様子を、みに来た時、あらかじめ知らせておいてくれたら、ワシヤもっとハッスルするんじゃないツジムラや。もう少し、ゆっくり登場すれば、ええのに。長いのに気付かんとは、ワシも、うかつじゃった)

淫歩氏はそんな内心の不満と、旺盛な探求心を抑えて「フーン、大した眼力じゃよ、ツジムラさんは……ところで、百合子が銀子のヘンシンであること、又、彼女がケンを殺害した犯人であることがどうして分ったのかね。最初から精しく謎解きしてくれないと、ワシヤ、もうチンプンカンプンじゃよ」

淫歩氏の言葉は、一同の思いを代表していた。

「そのことは、銀子自身の口から告白してもらったら一番、確かで

すが、ショックの余り彼女は御覧の通り失神状態で無理でしょう。

淫蕩な女ほど、往々にして快楽の極みで失神しますが、淫蕩の度が激しければ激しい程、その失神状態も強く、さながら仮死状態を呈することは、ハバロックエリスなどの精神分析にも記載されておられます。極端な時は、脈膊も止り、顔面白臘の如く死相化するというのです。偶々、組長さんのプレイは、幾度となく恍惚と陶醉の谷間を彷徨した挙句の強烈さで、銀子は、肉体の怪奇な態位と相俟って、極度の失神状態に襲われたのではないでしょうか。

ケンと銀子は、バーテンとマダムという関係以上であったことは月に一度の、紳士諸君の秘密パーティ以外の日でも、常に銀子の肉体が、絶えず生傷や打撲痕、紫のあざなどで、いろどられていたことでも明白です。懼らく二人は、しばしば激しい耽溺の世界に埋没していたに違いありません。

だからケンは、銀子の発作的な強度の失神状態を知っていた筈です。慌てふためく貴方がたを前にして、組長氏のおあつらえの発言があつて、ケンは咄嗟に一芝居、仕組む気になり、銀子の状態を観察して蘇生する確信があつたのだと思います。でなければ、いくら組長氏の発案にしても、殺人の代理人は、そうおいそれと引受けられるものではないと考えるのです。

私の仲間の医療器具店C氏が最近、百万円脅されたことで相談をうけ、彼の為に一肌ぬぐ気になったのです。一度ならず二度まで甘い汁を吸った奴は、手を変え、しなを変えて再度、脅迫する可能性が多かったからです。

私は私なりに、同好仲間の、興信所の所長に依頼して、スナック『純』の、あの事件発生以来の動向を探ってもらいました。いかに

蒸発ばやりの時代とはいえ、女性一人が殺された。その後始末に目撃者が一人もなく、また誰一人、気付かぬというのも可怪しく、更には警察が全然、関知していないというのもヘンな話だと思ったのです。調査の結果、図々しくもケンハは、あの八階のプライベートルームを『ケン』の或ホステスの名義で借りていて、プライベートなSMプレイの場とし、整形で、すっかり容姿の変った百合子こと銀子と、のうのと、プレイの耽溺を続けていたのですよ。

事実、私も、ケンと百合子がナニワ食道ビルの八階へ消えたという、興信所長の連絡を受けた時点では、百合子が銀子のヘンシンであるという確信はありませんでした。てっきり銀子が死んだと思い込んでいらっしゃる皆さんは、関わり合いを恐れて、あのビルを敬遠なさったのでしょうか、誰かにナニワ食道ビルを張り込ませていたら、もっと早く、大谷健の巧妙なカラクリに気付かれたのではないのでしょうか。所詮、ああした風俗営業の経営者やマダムなどは、めまぐるしく変り、噂も七十五日はおろか、一、二カ月もすれば忘却の彼方に消えてゆくのでしょうか。

一度、死んだ銀子は、ケンに口説かれてクラブのママさん業を断念し、情夫のケンが表立っての経営になりましたが、自分は整形して百合子にヘンシンし、クラブの隠れマダム的な存在になったのです。ケンの浮気性が心配で監視する気もあったのだと思います。

若しケンが色と慾心を出さなかったなら銀子の一件は、永久にわからずじまいであつたと思うのですが、ケンに女が出来て、その女に、例の『縄』をもう一度やらせようと色気を出し、百万円を四人からとり、まだまだ過去の事件にかこつけて、ふんだくる腹づもりが悪運の尽きになったのです。

銀子の特異な肉体が、いくら旨い御馳走でも、いつも同じものを喰ってれば飽きる道理で、且つは、百合子監視のクラブ『ケン』の経営を、一人占めしたくなったのです。

百合子とケンが、こうした関係らしいと知ってから、私は二人の動向を秘かに観察して貰いました。

カタストロフは意外に早く、彼は事件の当夜、愛人と秘かに待ち合せて、アジトの秘密クラブへタクシーで走り去ったのでした。

クラブ『ケン』から、嫉妬に狂った百合子が出てきて、慌しく彼等のあとを追ってゆきました。

所長の事実の確認は、ここまです。ホステスや客の帰り際の雑踏で、流しのタクシーをつかまえようとウロウロ探している間に、もう追跡は間に合わなくなったのです。

事件当夜、幸か不幸か、秘密パーティに参加していたC氏の話や前後の事情、私の推理を総合すると、こういうことになりはしないでしょうか。

多分、タクシーに愛人を残して、秘密パーティーの企画者の彼は、席上に顔を出しうまくコトが運んでいることを確かめた上、車に戻ろうとして、アジトの前で嫉妬に狂う百合子とバツタリ出くわしたのでしよう。

路上で喚く百合子に彼は辟易し、争いがもとで秘密パーティーが発覚するのを恐れて彼は、うまく百合子をなだめてタクシーを拾い、^{ひとけ}人気のない場所へ走りました。既にその時、ケンに殺意があったと思うのです。この際、一度は死んだ銀子をバラしても、もし発覚の場合、四人の連中に罪をなすりつける気でいたのかも知れません。タクシーで待っていたケンの愛人は、事態を察して、逸早く姿を消

したのでしょう。

しかし淀川べりに近づくに従い、百合子はケンの殺意に気付き、先手をうって川畔で、うまく丸めこもうと体を、すりよせてくるケンを、ハンドバッグに隠し持っていた刃物で油断をみすまして一突きにやってしまった。犯行時間は多分、午前一時半から二時頃の間でしょう。致命傷を受けたケンを、淀川堤から転がして川に落とし、その場を立去った——と、私はこの様に推理したのです。

死んだ筈の銀子が、百合子にヘンシンしたのに違いないという確証は、スナック『縄』の、食品衛生法の登録を調べた時、マダムの名で登録されていたのですが、手続きには、彼女の本籍、現住所が必要です。或は偽名かとも思いましたが、念の為、北海道の彼女の出生の役場へ照会してみました。銀子はバーやクラブを転々とした時の源氏名で、本名は望月ユリ子——。そこで私はピンときたのです。しかも、ちゃんと生存になっています。まあ、蒸発の場合も戸籍の抹消はしないと思いますが、銀子と百合子が果して同一人物か否か——。

あとは、彼女の肉体の特徴の、異常に長いといわれた部分を、皆様に確認してもらっただけだったのです。

殺しの場は、勿論、私の推理に過ぎませんが、おそらく当らずといえど遠からずではないかと思えます。皆様方は、この女の巧まざる性技に、うまうまと欺された挙句、占めて一千三百万円、いかれたという次第です」

深夜の狂宴から五日、経って、望月ユリ子はナニワ食道ビルの八階に潜んでいる処を、大谷健殺害の容疑者として逮捕された。

あの夜の、淫歩氏の温情や、ツジムラ始め四人のプレイヤーの、

純粋なSMプレイ精神に感激したのか、例のスナック『縄』の一件や、四人のプレイヤーについては一切、黙秘した儘で、四人のSM紳士に波及することは遂になかった。

ツジムラの推理と、事実の違っていたところは、ケンの愛人も共謀だったことで、三角関係を清算すべく、淀川べりへ三人で走り、刃物はケンが隠しもっていたことと、望月ユリ子の殺意は偶発的でむしろ正当防衛に近いということであった。

思わずケンを刺した時、愛人は腰が抜けてヘタヘタと、その場に坐りこんだのを、その儘にして夢中で逃げ去ったという。後難をおそれてケンを淀川へ投棄したのは、その愛人であった。

望月ユリ子の逮捕は、その時の三人を淀川堤で降したタクシー運転手の申し出と、ケンの身許が分った以上、発覚は、いずれ時間の問題だと覚悟した愛人の自首からであった。

ケンが、銀子のヘンシンの事実を、愛人に告げていなかったのが幸いして、ユリ子は、大谷健を痴情による殺害の一件だけに絞っていたのは賢明であった。

過去の、SM的な余罪が発覚しない限り、望月ユリ子の許される日は、案外、早いかも知れない。

道化役で踊らされた江呂川淫歩氏は、しばらくはプリプリしていたが、ツジムラが遠慮して顔を見せないととなると、矢張り淋しく、十日も経たないうちに、愛すべき曾々野阿奈子を、彼のもとへ使いにやったのである。

百合子の長さに魅せられた淫歩氏は、彼女の保釈金をつむ気であり、釈放のその時にこそ、インポ返上して張り切ってやるぞと、息まいておられるが、さて、いつの事やら——。

(第一話終)



LATEX BLOW UP SUIT AND HOOD-

\$249.00

Here is another "Unusual Costume" in Rubber. Look like a man from outer space in this Blown Up Latex Suit with Blow Up Hood and Breathing Tube. It fits closely at the wrists, ankles and neck and is actually two suits in one with the air being blown into the middle section so that latex hugs the skin and the air pressure between the two layers of latex creates a strange and thrilling sensation. The suit alone may be purchased for \$169.00 or the Blow Up hood alone may be purchased for only \$89.00.

—ゴム愛好家の呼びかけにお答えして—

外国製ゴム下着

のことなど

弾 六 夫

五月号でのゴム衣着奴様、ならびに大阪のゴム男様。大変お返事が遅れましたことを深くお詫び申し上げます。

このところ、にわかに多忙に成り、海外出張やら来客接待に、連日の午前様で、そのため、お返事を差し上げねばと気になりつつも筆をもつ気力も無い日が続き、とうとう今日まで連絡が出来なかった次第です。

しかし、そのような中でも奇クの販売日だけは忘れることなく、何時もの本屋に行き確実に入手して、むさぼり読み、誰方か私に対して呼びかけはないか、また、佐々木信子さんか梅川幸子さんからの連絡文がないかなど

期待に胸ふくらませ、眼を皿のごとくして活字を追っている自分が、時として衰れとさえ思う時があるのは私一人だけでしょうか？

さて、例のゴム責めにしたOLの件ですが告白文でも申上げた通り、佐々木さんや梅川さんと異なり、真のゴムマニアでないためにまことに申し訳ないのですが羞恥心が強く、なかなか、貴方様が思うように行きません。

また、「ゴムの部屋」は現在、資料集めの段階ですが、何時の日か、きっと作ってみせます。

何かの本で読んだのですが、「何か物事をしようと思った時、それは、すでに出来たの

だ」

と言う文がありました。貴方の「ゴムマニアの花嫁を求む」というのと、私の「ゴムの部屋」は、すでに出来ているのかも知れませんが。そのような意味で、お互いに頑張ろうではありませんか。

お問い合わせの、アメリカよりのゴム製品、その他の購入方法ですが、まず最初に外国雑誌を置いている書店に行き、普通の見方より逆に、つまり右から開き、種々雑多の広告文の中でラバーのR、ラテックスのL、と言う活字を目標にして探して行きます。また光る衣裳を着た写真などがある広告文は、特にた

んねんにその英文を読んで行きます。

そのようにして、第一回に見付けたのが、「GENT」と、言う外国雑誌で、所在地は、

「RENEE. FASHION. CO. DEPT. 470 BOX 2804 HOLLYWOOD 28 CALIF. U.S.A.」です。

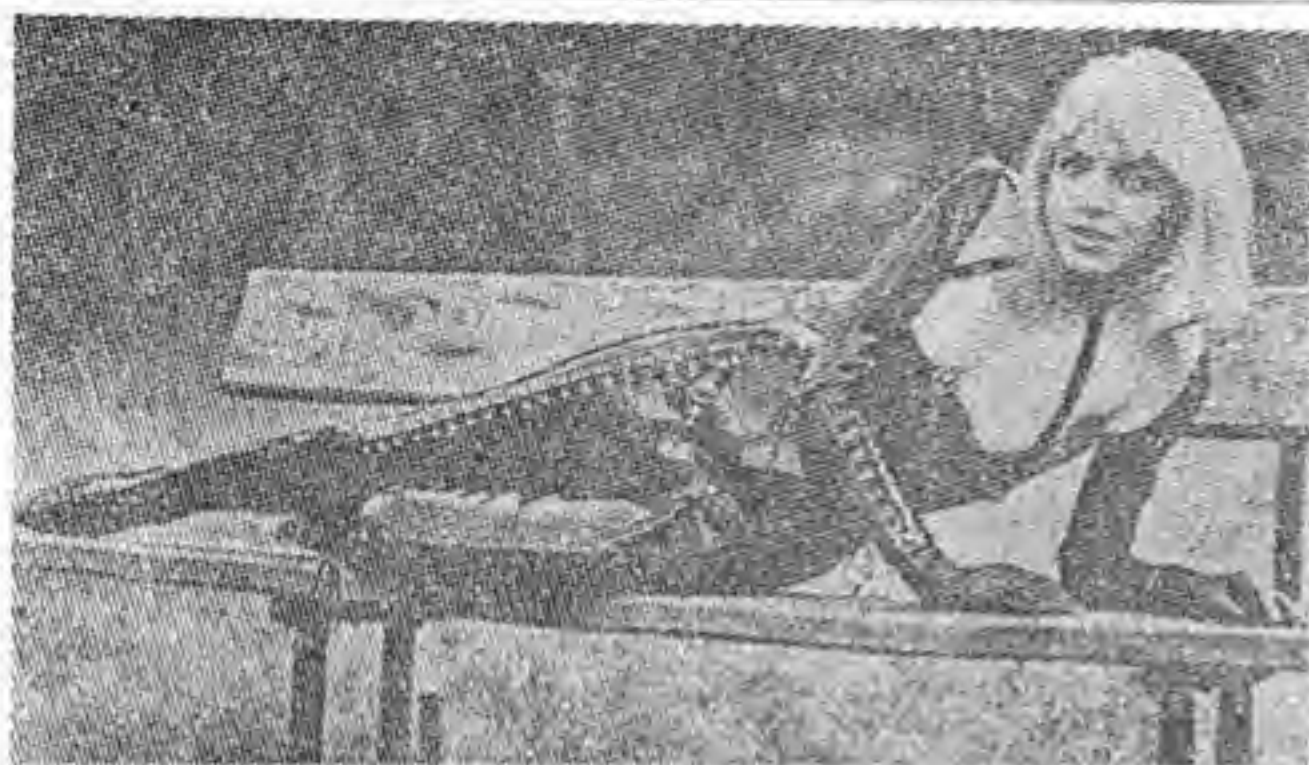
カタログ代二ドルと、エアメール代を一ドル、外国両替銀行で両替してもらい、早速送りしました。約十日位で待望のカタログが入手出来た訳です。その間、どれほど待ち遠しかったことか。封を切るのもどかしく、ざっと眼を通します

あるある。期待通りのゴム下着の数々、まさに歓喜の瞬間です。ようやく落着いたところで、その一つ一つのゴム下着に説明文がついているのを字引片手に訳して行くのが楽しみです。ライトラバー、とか、ヘビウエイトラバー、とか、ゴムの種類を注文者にわかり易くしてあり、その他光沢の有無、フリルとかジッパーとかのデザインの説明、ならびに色は何色と、はっきり書いてあり、すぐにでも欲しいものばかり。私はその中から第一回として、ラバーシート（ピンク色）と、ラバー

レインケイプ（黒色）を注文しました。

しかし、エアメイル代が不足とかで先方から手紙が来て、また追加のドルを送ったりしたため、一ヶ月位かかりましたが、二つとも充分に満足出来る品で、特にラバーレインケイプは、梅川さんがお好きな総ゴムマントで手にズッシリと来るゴム特有の重量感にはシビれます。

その次に注文したのが、ゴム衣着奴さんが五月号でも書いてらっしゃる「キラキラ輝く



LEATHER BOUDOIR SUIT-

\$455.00

This exciting, Leather Suit is completely lined in Latex and has calf length boots attached. It has fully laced legs and arms, crotch strap, neck collar, restrictive chains and "O" loops. We can make the identical suit shown in vinyl patent at only \$400.00, or we can make it in vinyl without the attached boots with laces ending at the ankles for only \$320.00. See page 6 and 7 if you wish to purchase boots separately. While the prices may, at first, appear steep, when you consider the tedious hand work involved by artisans skilled in the making of such unique garments, and when you experience the thrill of wearing these unusual garments of unsurpassed quality, you will realize the workmanship is worth every penny you paid.

Note: Send \$3.00 for 60 page photo story, "Latex Maid" in which this Boudoir Suit is shown.

ゴムレインコート」「ラバートレイングスシート」「カバーオール」（股間より首まですっぽり入るゴムブルマーで、浣腸プレイなどに最適な品）「ラバーブラウス」（色はブルー）です。

レインコートの方はサンゴ色で、肉厚総ゴムのこれも重量感ある品です。また、外国のゴムは日本のゴムと違って、全然ベタつかずそれでいて充分ゴムの感触、ならびに臭い、弾力等は抜群です。大体、肥満体の女性がゴムを着て汗を流し、美容に使用するところから、そのようなゴム質が発達したのではないかと思考します。

一店だけでは承知出来ぬ私のこと、その後もずっと探索を続けておりましたところ、これは雑誌名は忘れましたが「WENDY'S」BOX 25111, HOLLYWOOD, CALIF 90072, U.S.A.」を見付け、前記の通りカタログを請求しました。

この「ウェンディー」と言うゴムショップには非常に手のこんだゴム衣があり、新宿の「マルゴ」で売っている「ゴムネグリジェ」はこの店の品ですが、アメリカで買うのもマルゴで買うのも、値段的に余り変わりなく、その点マルゴ

が、われわれゴム愛好家にとって、非常に良心的にゴム衣を販売してくれていることに感心します。

さてこの店からは第一回「インポータッド、ラバー、レインケープ」(ピンク色)を買いました。例のウェンディのゴムマントの色違いですが、このピンクは非常に鮮やかでした。首のところに西ドイツとありましたから、西ドイツよりの輸入物です。

次に「ラバー、パンティース」を注文、二枚なら十ドルと言うことで、二枚注文したのですがスモールを注文したのにガバガバで、男の私がいっても、まだ充分ゆとりがありますが、そのまま風呂につかると、ピッタリとゴムがまといついて気持ちの良いこと、この上ありません。

また、このラバーパンティースは、説明文にショッキング・ピンクとありますが、まさにその通り、前記のゴムマント同様、素晴らしい鮮やかなピンクで、期待以上の品でした。特にその肉質が何とも言い難い肉厚で、しかも肌にはピッタリとなじむゴムの感触は、日本製には絶対に、ない物です。

RUBBER LEOTARDS

This striking exercise suit has a leotard type top of shiny molded, black rubber & below the knee, capri type pants. Because it fits you like a second skin, it is also suitable as a skin diving liner. Black only.

Sizes: Small, Medium, Large

LEOTARDS- \$15.00
CAPRIS- \$10.00
BOTH FOR- \$22.50



LEOTARD SUIT

This is a one piece medium weight latex garment suit which has long sleeves & is ideal for water skiing or slimming off unwanted inches. This form fitting suit is carefully hand made to your measurements with your choice of back or front zipper in all standard colors. Hands and face are free.

\$65.00

28

今、私は第三回目として注文したのは「ラ

テックス・ストッキング」(黒色に光り輝く美しいゴム靴下)と「ジッパー・ラバー・スーツ」(ブルーのみとのこと)で、このスーツは、前にジッパーが付いていて着易く、全身を包むように出来ており、特に足は全部爪先まで被って、ゴムプレイに適したものです。もう、ぼつぼつ入手出来るものと、毎日、鶴首の思いで待っているのですが……。

その他の傑作は、「ヒモ付きラテックス靴

ゴムを愛する女性のユニフォームでしょう。

その他、ラテックスで二重になっており、これこそ頭から爪先までスッポリと被り、唯一の呼吸は口にくわえたゴム管だけで、頭の後にある空気注入口よりエアを送り込むと外側がふくれ、内側が顔から腕、足、と全身を圧迫するゴムスーツがあり、絶対に欲しいのですが、代金が六万七千五百円では一寸、手が出ません。

一度このようにして注文すると、その後は

下」「ラテックス・ハイヒール・ブーツ」「黒光りするラテックス・ゴムマント・パリースタイル」(これ等は足首までとどく重量感ある総ゴムマントです)「ヒモを使って、全身をしめつけるラテックス・スーツ」「赤ゴムで光るキャット・ガールズ、ゴムスーツ」「ラバー・プレイスーツ」「ゴム女のコスチューム」「ゴム愛好と言う名のレッド・ラテックス・ドレス」で、これは赤く光るゴムドレスで脇に黒ゴムでトリミングしてあり、赤ゴム靴下をピッタリとはいいた、正に

思い出したように一枚の紙に、フィルム、写真、新しいカタログ等が、来るようになります。それ等から適当に選んで注文すれば、例のゴムを愛撫する女のハミリとか、ラバー娘とかの雑誌が入手出来るのです。

ごく最近に見付けたのは、ヨーロッパのゴム下着だけのカタログと言うロンドンの広告文。光るラテックスのカラー写真のカタログと言うカナダの広告で、すでに、注文済みです。これ等が上手く入手出来れば、またお知らせ致しましょう。

ヨーロッパとかその他の先進国にはゴム愛好家が多く、それぞれゴム好きを何の抵抗もなく楽しんでる姿が多いのは、われわれ日本のゴムマニアも一考の余地が、あるのではないのでしょうか？文化が進むとゴムファンが増すのではないか。何かゴムと文化がつながりをもっているように思えてなりません。六月の「特ダネ登場」というテレビ番組でもゴムのビキニ水着を堂

々と発表した女性デザイナーを見たことがあり、その説明として、未来の水着をデザインすると、ゴムとか皮とか、ビニールとか、素材として充分、考えられるとのことでした。われわれゴムに愛情をもつ者として、一日も早くその未来が来ないものか。そして私の理想とする（第一回の告白文に書いた通り）真夏の太陽が照りつける海辺に、色とりどりのゴム水着を着けた女性が、日光浴をしたり水と戯れる日は何時のことでしょうか！きっと太陽に照らされて、強烈なゴムの臭いが

あたり一面に、ただようことでしょう。さて、青木順一様。貴方が探してらっしゃるサヨランコート。先日、九州旅行の折、大分の市内で「ゴムセンター」と言う店名のゴム店を見付けました。その店で、サヨランコートと言う名ではありませんが、裏地がゴムで表は絹と言う、昔懐かしいゴム衣を見付けました。フード付きのゴム上衣、ならびにゴムズボンのセパレートで、色は、エンジ、紺、クリームと三色あり、値段は三、〇〇〇円中心でした。住所は、大分市昭和通郵便局前、

ゴムセンター株式会社です。一度手紙などでお問い合わせしてみても如何ですか！

私はそこで、田植時に使う総ゴム脚絆、ゴム手巾を買いました。これ等は絶対都会では見付けられない出来ぬ品で、久しぶりの嬉しいゴムショッピングでした。

なお前記のロンドン、ならびにカナダへの注文で、カナダだけが入手出来て、ロンドンには遂に今日まで返送して来ません。しかし、カナダより来たラテックスのカタログは、オールカラーで素晴らしくまさにゴム衣ファッションです。ではまた、ラバーフレンドの皆様にお便り下さい。

LACED
LATEX SUIT- \$165.00

Want to be a "Rubber Dolly" for your Rubber Lover? "He" will love you forever in this skin tight, Latex Suit that will fit you like a second skin. He will not be able to stop caressing this Super 25 Latex Suit that is fully laced on the side from ankle to hip, from wrist to shoulder and in back from hips to neck. It can also be custom made to "His" measures at the same price. Complete measurements, please!





カット・岡 たかし

連載・M派交友録 (47)

グラマーな猛女

植座たき子の巻 (10)

鬼山 絢 策

シロクロのぞき

白浜温泉の密室、横に長いガラス窓のよう
なところから覗いているのは、たき子と橋本
宇吉、それに温泉芸者でガイ骨のように瘠せ
たのとデブの婆あ芸者の四人だった。

「アレアレ、あらまあ、もの凄い！」

芸者達は興をそえるように、はやしたが、
宇吉は、そんなに興奮も覚えなかった。

たき子は、隣室の男女が、ほんものの泊り
客ではなく、シロクロ専門のプロであること
を知っていた。丁度うまく泊まり客がなかつ
たので、番頭がプロを、はめこんだのだ。

長襦袢姿の女は、巧みに男を挑発し、四十
八手を次々と披露した。

芸者達は卑猥な讃辞を露骨な表現で言う。
たき子はシロクロショーは始めて見たが、
想像していたものとは、かなりかけ離れてい
た。

女は素晴らしい美人、男は筋骨逞しい美男が
演ずるものと思っていたが、いま見るガラス
窓の向うは、何か汚ならしくて動物的で、わ
いせつであった。

「あの男の人、タフだわね」

芸者達は男ばかり、ほめる。たき子は、
——そりゃ商売だもの、当り前だわ。何だか
イヤイヤやってるみたい。あきおさんだって
あのくらい保たせることは楽にできるわ——
と思った。

宇吉は最初、退屈だったが途中、花菱責め
のあたりから興味を持ち出した。

ショーが終り芸者達は引き上げて行った。

宇吉も立とうとしかけたが、たき子は芸者
を出したあと、扉に錠を下ろすと、

「ああ、おなが、すいちゃったわ。ここで
食べて行きましょうよ」

いままで手をつけなかった膳部の料理に箸
をつけ、宇吉にも酌をした。

いま、ここで宇吉に帰られては困るのだ。
たき子にとっては、これからが「本番」の

ショーを始めるスケジュールだったからだ。
いままで明るかった隣の部屋に見えるガラ

スの窓の明りが消えた。
「プロなことは、すぐ分ったけど、演技にし

ては迫力があつたわね」
「そうかね」

「本では見たけど、実際にああいいうやり方が
あるのは始めて見たわ」

たき子は昂奮した態を装い、しどけなく片

膝を立てた。浴衣の前が割れて、ムッチリと
した内股の肉づきを現した。

「ねえ、パパ」

膳部を片寄せて、たき子は宇吉に抱きつき
自ら唇にキスした。

もう隣に、あきおさんが来てるころだわ。

覗き覗かれる窓

前の日の夕方、湯の峰温泉で、たき子と安
井安芸雄は、東の間の逢う瀬を楽しんだ。

「この旅行も明日で、お終いね。も一度、ゆ
っくり、あんたと寝たいわ」

「爺さんが居ては無理だよ」

夜中に抜け出そうと思ったが、イザ実際に
夜を迎えると、老人は目ざとく、たき子が起

上っただけで目を覚ます気配を感じた。
それに夜中に部屋を脱け出すのは一番、愚

かな方法である。勝浦のホテルでの夜、たき
子は安井の体が、たまらなく欲しくなって、

部屋を脱け出し、安井の部屋に電話したこと
があった。

「だめだ！ 夜中は絶対にやめた方がいい。
もし爺さんにどこへ行っていたと質問された

ら、何と答えるの？ 言い逃がれできないじ

登場人物紹介

植座たき子、27才。1米72、70キロ。
美術学校卒業。学生の時、アルバイトに
モデル、ホステス、バーニーガール等をや
り、橋本宇吉に見出され、援助を受けな
がら、絵の仕事をしている。一方、安井
安芸雄という恋人と秘かに交際し、将来
は結婚するつもりでいる。辺見マリを、
ひと廻り大きくしたようなエキゾチック
でグラマーな美人。

橋本宇吉、70才。中央生命専務。初恋
のアメリカ娘サリーに似ている、たき子
を溺愛している。平素は不能に近く、オ
ーラルセックスで、たき子を愛撫してい
るが次第にM的傾向に陥っている。
安井安芸雄、33才。たき子と同じマン
ションに住む画家。たき子の部屋とイン
ターホーンを通じて、たき子と宇吉の異
様な愛のプレイを盗みぎきしている。

やない。お風呂もトイレも部屋についている
し、真夜中に女一人で散歩という手もないだ
ろう」

たき子が腹立たしくなるくらい、安井は冷
静だった。女は欲情に心が奪われると、前後
の見境がなくなる。

「バレたっていいわよ」

「そんな乱暴なこと言うもんじゃない。会う

チャンスは、いくらでもある。好んで危険を冒すことはないじゃないか」

意地を張る、たき子を安井は、だだっ子をあやしめようとして説得した。

たき子は、いままで毎日のように夜、安井と会ってきた習慣から、夜になるとイライラして我慢してきたのだ。昼間では何となくムードが出ない。

たき子は何とかして夜、ゆっくり安井と会う、安全な方法を考え続けてきたのだ。

今夜、ホテルの番頭に連れられて、この部屋にきた時、番頭から、ガラス窓のライトがつくと隣室が見える。だがライトを消すと、今度は逆に隣室から、こっちの部屋が覗かれる仕掛けになっているのだと聞かされた。

その瞬間に、たき子はこの二、三日来、考え続けてきた思いを果すプランが、ひらめいたのである。番頭が、

「お客さんのお泊まりが、どうしてもなかった時は、私どもの方で、しかるべく手配いたしますから……」

それはプロのショーを見せるという意味だったのである。

そこで、たき子は「そのカップルが引きあげたあとに、この人を入れてあげて下さい」

と安井を呼んで番頭に頼んだのである。

もちろん宇吉には内密にするために、たき子は別にチップを、はずんだのである。

かねてから安井は「爺さんと、どんなことするのか、いつも聞いてばかりいるが、一度見て見たい」と言っていたのを、この機会にそれも兼ねて果そうと思いついたのである。

宇吉は感激した。たき子の方から挑まれ、キスまでされたのは久しぶりのことだ。

浴衣の裾から、はみ出た太腿を、なでてみろ。スベスベとして弾力のある素晴らしい皮膚だった。半分、掩っている浴衣を払いのけても、すべすべした肉の丘は、どこまでも続いている。

宇吉は、その皮膚に唇をつけて、行くてを上目で追った。

広い。実に広い、さばくのような肉の丘である。

——ああ、何という美しさだろう——

さばくを歩く、らくだのように宇吉の唇ははるか、かなたに見えるオアシスを目ざしてゆっくりと這って行った。

宇吉は、若い頃、旅行したネヴァダの荒原を想い出した。

あの美しいサリーの太腿も、恐らく、このようにスベスベした肌だっただろう。

何という柔らかな快い感触であろう。

ピチピチとした弾力のある肌、たぐいまれな美女が人に見せたことのないこの美肌を、老人の自分にだけ惜し気もなく、さらけ出して拝ませってくれるのだ。ムンムンする女の体臭が、オアシスに近づくに従ってドリアンのような芳香をまじえて、白い壁一ぱいに香ぐわしく、むれてくる。

白い肉の壁は、ゆるやかに揺れている。両頬を、やわらかに包み、撫でてくれる。ツルツルと卵の白味のような甘い舌ざわり。

——こんな年より、ここまで気を許してくれる、たき子。サリー。ああありがたい——

宇吉は幸福の絶頂に立っていた。

オアシスは次第に近づいてきた。

宇吉は、ひきつけられるように進もうとしたが、そこで左右の太い肉の柱が、にわかに狭まり宇吉の舌の突進を拒んだ。やわらかく顔全体を、おし包むように。

神秘の扉は、すぐ目の前にある。だが、軽々しい参殿を許さぬ威厳があった。

宇吉は舌を一ぱいに伸ばした。もう少しのところ、はばまれているのだ。

「ウフフ。パパ、ほしい？」
 気ままな女神は老人を、からかい、焦らしているのだ。

「ウフフ、好きよ、パパ。パパ可愛いいわ」
 「ああ、サリィ。ありがとう。ぼくは、ほんとに幸せだ。君のためなら、何でもしてあげる。イヤさせてもらう。だから」

「そんなに欲しいの。アハハ、じゃホラ！」
 はばまれた肉柱が、やや弛んだ。

突如、肉の柱は崩壊し、顔一ぱいに崩れてきた。宇吉の視界は暗黒になった。

グググッ、と押し潰すような圧迫感！

想いを叶えてくれた女神は意外にも惨酷であつた。その雄大な圧力は、やわらかく、次第に重味を増してきた。

——苦しい。だが、幸せだ。思いを叶えてくれた。苦しい、だが、幸せだ——

宇吉は頭の莖までジーンとくるような、しびれを感じた。

だが、パトロンとして女神に触れたいと思うのは不遜な行動だと思った。

ひたすら、舌で御機嫌をとるのが、よいのだ。老人は老人らしく、よく動く舌で勤めるのが、ふさわしいのだ。

——ああ、ありがとう、たき子さん。あなた

が、どんなに我がままをしても、僕は献身的に奉仕しますよ。ああ、苦しい。でも、できるだけ我慢しなければ……。

ノビた男を見ながら

一方、たき子の方は、

——ホラ、このくそ爺いめ。苦しいか、もっと苦しめ。もっと上手に勤めやがれ。お前のそのぶざまにもがくところを、あたしの恋人が面白がって覗いてるんだよ。てめえは知らねえだろう。ざまあ見やがれ。これでもか、これでもか——

口には出さぬが、かくし鏡の窓の方に向かって、宇吉の苦しむさまを見せてやっている、ますますサジスチックな気持になってくるのだった。宇吉が苦しめば苦しむほど、楽しくなり、それを見ている安井も喜んでいだろう。

——あたしは、こんな助平爺いなんか、ちっとも愛しちゃ、いないのよ。ホラ見て頂戴、このだらしない男の姿を。あたしにかかったら、腑抜けのように言いなりになるのよ。見て分かるでしょ。あたしの大切なひとは、あきおさん、あなた一人だけよ。分かったで

しょ——

安井安芸雄の姿は見えないが、鏡の方に向かって時々ニッコリ笑って見せるのだった。

——そろそろ息の根をとめてやろうか。これだけ、なぶってやれば、お前も本望だろう。あたしは、これから、あきおさんと、うんと楽しまなければならないんだからね。お前が居るために、この三日というもの、ろくろく会えやしない。ほんとに邪魔な野郎だよ。たまには粹をきかすもんだよ。始終ベタベタくっついていやがって。サア往生しろ——

たき子は、グッと力を入れて顔を締めつけた。そして上から70キロの体重をグーッと重石をかけた。

「ウ、ウッ、ウ……」

なにを言ってるやがんだい、この野郎。早くくたばっておしまい。

まだ、それほど力を入れているわけでもないのだが、宇吉の方は真赤になり、わずかに見える目が、上を見上げて、力を弛めてもらうよう、哀願していた。

——この爺い、許すもんか。どうだい。これでもか、どうだッ。こん畜生ッ！

両股にジットリと汗が、にじみ出てくる。宇吉は遂に堪えきれなくなり、トントんと

畳を叩いて「参った」の合図を送った。

——フフ、いつもなら勘弁してやるが、今夜は、そうは行かないんだよ。早く、ノビてしまえ。ホラ、どうだ——

ますます締めつける。

宇吉は必死に頑張っていたが、心臓が早鐘のように鳴るのを、たき子は感じた。

——そうかといって、ほんとに殺してしまうわけにもいかない。何しろ年寄りだから、こっちが、いい加減にやっても参っちまうと、あとが面倒だわ——

もういいだろうと、たき子は力を弛めた。

フーツと大きな息が吐かれたところを見ると、まだ窒息はしていないが、しかし、宇吉は気絶寸前に追い込まれていた。

気絶寸前でとめるコツは、始終やっているから、のみこめているのだ。

「パパ、大丈夫？ ごめんなさいね。あたし夢中になっちゃったのよ。パパが、いけないのよ。フフフ、苦しかった？ 少し休んでなさいね。あたしお風呂へ入ってくるからね」

老人はハッハッと荒い息使いをして、たき子の言うことも聞えなかったかもしれない。

——フフ、このくらい、責めておいてやれば一時間や二時間は、おとなしくしているだろ

う。じゃあ、あたしは恋しい、あきおさんとタツプリ楽しんでくるからね。お前は、ここで、おとなしく待っていていな——

たき子は、傍のタオルで両足の汗を拭い、部屋を出て隣室の扉をノックした。

中から安井がロックを外した。

「ウフフ。どう、見えた？」

「すさまじいね。女ってのは、おっかねえ動物だなあ」

「何言ってるんよう。あなたが見たいって言うから恥をしのんで見せてあげたのに、もう少し何とか言いようがないの。あたしの努力も買ってよ」

「努力するのは女が股へ力を入れるってことだったっけな」

「またまた、人の気も知らないで。ねえ、あんな爺いとは、いつ別れてもいいのよ。あたし、別れようかと思ってるの」

たき子は宇吉を嫌いではないし、別れる気持はないのだが、そう言って安井の気を引いてみたのである。

——別れるためには、安井との結婚という保証がなければならぬ——

その意味である。

「でも、いい爺さんじゃないか」

「そりゃ、いいひとよ。でも、いつまでも、あんな変態じみたことも、してられないでしょ」

「君は変態じゃないのかい」

「冗談じゃないわよ。あたしは正常な女よ。

爺いが、そうしてくれというから、仕方なくやってあげてるんじゃないの。ねえ、あきおさん。あなたも、そろそろ、身をかためる頃でしょ」

たき子は安井に抱きついてキスした。

「ウム、そりゃ考えてるよ」

「じゃ、結婚してくれる？」

「爺さん、大丈夫かね。まさか、死んだんじゃないだろうな」

安井は鏡の方を見て言った。

宇吉は、あれ以来、仰向きのまま、ビクツとも、しないのだった。

「大丈夫よ。息してたから」

「何しろ、この身体で乗っかられちゃ、ひと堪まりもねえな、全く」

安井は、たき子を寝かせながらいった。

「ねえ、結婚しましょうよ」

「結婚か。爺さんの方は、どうする」

「ちゃんと話せば分かる人よ。祝福してくれるわ。あのマンションも、あたしにくれたく

らいだし」

「ああしてノビてるところは、だらしないがあの人は、なかなかの大物だよ」

「でも、あんたの方が大モノよ」

宇吉のノビている姿を想像するのは、二人にとって強い刺激になった。

今日は安井も安心してか、タツプリと時間をかけて一時間以上も楽しんだ。

その間には宇吉も起き上がり、しばらくボンヤリしていたが、番頭を呼んで何か話をしてから、部屋を出て行った。

宇吉が居なくなると、何だか張り合いがなくなつて、二人は起き上った。

「爺さん、部屋へ戻ったんだらう。そろそろ行ってやれよ」

「アフターサービスするところを見せてあげようと思ったんだけど、フフフ」

たき子是不敵な笑い声を立てた。

——部屋へ帰って、今度は、可愛がってやろう。若い蜜をタツプリ吸わせてやろう——

愛 の 変 化

翌朝、大阪から新幹線で東京への帰途にいた。グリーン車はガラガラに空いていた。

さすがに遊び疲れたか、二人とも、どちらが先ともなく目を閉じていた。

だが、橋本宇吉は眠っていなかった。

今度の旅行で、たき子に何か腑におちぬものを感じたのだ。

新しい土地に着くたびに何かキョロキョロとして落ちつかない。景色を見ると言うよりも、誰か人を探すような素振りだった。

初めて見る風光明媚な南紀の名勝を見ても大して嬉しくないようだった。人の話を上の空で聞いていることがある。

そして最後の晩、昨夜のことだった。

あの惨酷なまでの荒々しさは、かつて、ないことだった。自分が許しを乞うサインをすれば、いつもやめてくれていた。しかも、宇吉が疲労して一時間余も眠っている間、たき子は何処に行っていたのだらう。そのあと、

たき子の体は平常とは違っていた。それは湯の峯でも同じ経験をした。しかし旅先で、そんなハプニングが、おきるはずはないが……

——自分の錯覚だろうか。老人の嫉妬が潜在的に變形して、そう感じさせたのだろうか？

宇吉は冷静に判断したが、どうもそうではないようだ。

東京に居ると、仕事の多忙さに紛れて、た

き子の行動は、夜だけしか知らないし、あまり神経を使わなかった。

しかし、いま思い合わせてみると、腑におちぬ個所が、ところどころ思い出せる。

——たき子に恋人ができているらしいことは薄々感ぜられる。そうだ。東京へ帰ったら、ひとつ探偵にでも頼んで調べてもらおう、と決心した。

一方、たき子の方も、眠ったり目覚めたりする間に、旅行よりも宇吉との、これまでの生活と感情の変化を反省していた。

眠った振りをして宇吉に寄りかかる。宇吉は、あたたかく受けとめてくれる。それは慈父のような頼り甲斐のある肉体だった。

——かつては、この人を真剣に愛したことがある。一時は結婚してもいいと思ったことさえある。だが、それは年令の差とか環境の差とかで到底、無理なことなのだ。そこへ安井

安芸雄が現れた。安井への愛情の移動につれて、宇吉は単なるパトロンとしか考えられなくなった。安井は自分を愛してくれている。

結婚の話を何度か持ち出したが、いつも、はつきりした返事は得られないが、それは時期の問題だらう。自分が宇吉と別れば結婚し

てくれるに相違ない——

たき子は、ふと花井悠子のことを思い出した。

悠子が、三石銀行頭取の鈴木と別れた時、鈴木から金ばかり、せびって、そのあげく、浮気の仕放題をし、鈴木頭取も我慢できなくなって遂に別れたのだ。別れたあとの悠子はみじめな生活に戻った。

——あたしも結局、悠子と同じことをしてるんだわ——

と反省もしたが、

——でも、悠子のは浮気。あたしのは結婚だから土台から違うわ——

と自分に言い訳をした。

たき子は、宇吉に対する愛がさめたのは、安井という愛人ができて、そっちへ愛が移行したため、と思っているが、それよりも、もっと大きな原因を見逃しているのだった。

絵の学校へ通っていた頃は、モデルをしたり、バニーガールになったり、少しでも収入の多い職業を選んでいた、たき子だった。

そして、お金に執着はないのだが、生活に必要な経費は、稼がなければならなかった。

汚いアパートに住んで、あれもこれも欲しいものばかりだったが、手に入らなかった。

それが、宇吉の援助を受けてからは、豪華

なマンションを与えられ、家具、調度、洋服指輪、何でも欲しいものは、どんどん買ってくれた。

あの頃のたき子は夢のような気持だった。男の愛情にも始めて触れた。だからこそ、年令を超えて宇吉を愛したのである。

絵の学校を卒業すると、挿絵やカットと、絵の仕事で大分、収入も増えてきた。

もはや、宇吉の援助がなくても楽に生活できるようになった。愛人も他にできた。そうなる宇吉から受けるものは、何もなくなってしまったのである。

たき子が、もっと金銭に執着の強い女だったら、まだ宇吉を大切にしていたであろう。だがたき子は、まだ若かった。お金は欲しいけれど、どんなことをしても絶対、欲しいというような意欲は、もうなくなっていたのだ。生活状態も現在で満足してしまったのだ。

それが宇吉への愛情を失った最も大きな原因なのだ。

愛情の微妙な変化は、お互いに敏感に察知するものである。「愛は盲目」というのは夢中になって熱を上げている期間である。それを過ぎれば平静な愛情になる。その時は、お互いの愛情に敏感になれるのだ。宇吉も、ひ

と頃は、たき子を熱愛した。いまでも愛してはいるが、若い者のような一途のものではない。

たき子も宇吉を愛した。その後、安井を愛した。それでも宇吉に対する愛情は変らず、また宇吉を尊敬していたから、父親への愛といった風に変化した。それが、いまは、どうだろう。父親に対して、あまえる気持はあっても、尊敬の念は薄れてきてしまったのだ。

たき子は、宇吉を決して軽べつはしていない。心の中では、まだ尊敬しているのだが、安井と居る時は「くそ爺い」だとか「助平親爺」などと悪態をつく。口で言っていたのが今度の白浜温泉のように、なぶりものにまでして見せる。財界の切れ者も、セックスの世界では一人の女のために痴者と化するのだ。

たき子は、かつては尊敬し、畏怖さえしていた宇吉を、いまは「あまいパパ」あたしのためなら何でも言うことをきく男、奴隷とまでは思っていないがあまく見くびっている。

三年の間に、そう変化したこと、それもまた、気づいていないのだった。

決

断

橋本宇吉は三石銀行時代、取引先の信用調査に、よく使っていた興信所があり、山下という調査員は特に目をかけていた。その山下に、たき子の調査を依頼した。

中央生命の常務室で、宇吉は山下からの報告書を読んでいた。

「この安井という男は、どんな男かね。つまり容貌とか体格といった意味なんだが」

「ハイ、一見、平凡な男でございます。さして好男子というのでもなく、体格は、身長は一・六五メートルぐらい、体重六十五キロほどの男でございます」

「フーム、部屋がくつついていては毎日毎晩会ってるわけだな。それは、いつ頃から分かるかね」

「サア、よくは分かりませんが、一カ月や二カ月程度ではなく、少なくとも一年以上、前からの交際と思われます」

「たき子は、この男と結婚するつもりでいるのだね」

「ハイ、そのようでございます。いっときの浮気ではないように見受けました」

「よし、分った。御苦労でした」

「あ、それから、もう一つ、御注意申し上げておきたいがございます」

「何かね」

山下調査員は一瞬、ためらったが、

「たき子さんのお部屋にインターフォンがついてございます。御存知でいらっしゃいますか」

「エッ、何のためだ。どこへ通じてるんだ」

「安井の部屋へ通じています」

宇吉は羞恥で、みるみる、あかくなった。

しばらくは絶句して、狼狽の色を隠すことさえできなかった。自分と、たき子の情事が筒抜けに安井に聞かれてしまっている。

「その安井という男だが、最近、旅行した形跡はないかね」

「ハイ南紀の方面に旅行していたようです」

宇吉は、またも愕然とした。

「やはり、そうか！——」

それで、すべての謎が解けた。自分の勘は誤っていなかったのである。哀しい勘の適中であった。

「イヤ、有難う。よく調べてくれた」

「いかががいたしましたよう。今後も調査を続行いたしますようか」

「いや、結構。どうも御苦労さんでした」

山下調査員は、苦悩の色を隠せぬ宇吉を気の毒そうに見ながら、一礼して引き退った。

探偵に調査を依頼している間は宇吉は、た

き子を訪れることを控えていた。何か自分が覗き見られるような気がして、行く気にならなかったのだ。電話は、ちょいちょい、かけていた。旅行で暫く明けたので仕事、たまっている、忙しくて行けない、と言っておいた。自分が行かなければ、もし男が居るとすれば必ず男に会うに相違ない。その方が探偵が調べやすいだろう——と、そこまで気を配ったことだった。

宇吉は常務室で一時間も考え込んでいた。そして決心を、かためた。

卓上の電話をとって、たき子にかけた。

「あら、パパ。どうなさって？ まだ、お忙しいの」

「うん、やっと、かたがついたよ。今夜は、行けそうだよ」

「あら、うれしい。何時頃、来て下さる？」

「そうだね、宴会が終ってからだから十一時頃になるだろう」

「そんなに遅いの。いいわ、きっと来てね」嬉しそうに、はずんだ声——それも、すべては虚偽の言葉か。いままでは彼女の声に、

その若さのほずみに釣られて、こっちも浮き浮きとした期待をもって行ったのだが……。

イメージギャラリー 『商談成立』 岡 たかし



認知の屈辱

宇吉は夜になって、十時頃、人目を忍ぶようにソツと、たき子のマンションに行った。部屋の鍵をソツと開け、扉を注意して音を立てぬように閉めた。

まるで、泥棒みたいだな。

苦笑しながら寝室と境の上方にあるクーラーの傍の小さなインターホーンを見出した。椅子に乗ってスイッチをONにする。

とたんに男女の激しい息使いの音が聞えてきた。安井の部屋からだ。たき子が、こんなにも昂奮するのを、宇吉は聞いたことがなかった。

宇吉の胸は痛んだ。

「ねえ、今度、二人きりで旅行しようよ」

「うん、仕事の段取りをうまくつけなきゃ」

「もう爺いとの旅行は、こりごりだわ。あ、

そうだ。もうそろそろ、来るかも知れないわ

スイッチ、入れてくるわね」

たき子の立ち上がる気配がした。宇吉は慌てた。いまさら、外へ出てもヘタをする鉢合せするかもしれない。宇吉はインターホーンを再びOFに戻しておいた。

愚なり、橋本宇吉！

自分を叱咤して、宇吉は微笑を浮かべた。

浮世の苦勞をなめてきた男には、心の転換

が早いのだ。すでに宇吉は冷静さを取り戻し

ていた。

宇吉は、すぐ自宅を呼び出し、妻ののり子

に急用ができて名古屋まで行くから今夜は向

うに泊まると電話した。

咄嗟に宇吉は寢室のベッドの下に潜り込んだ。部屋に何か置いてきたものはないかと気になったが、部屋へ戻る時間はない。

間もなく、たき子がやってきて、インターホーンをONに切り替え、鏡台の前で、ちょっと化粧を直すと出て行った。

——なるほど、いつも、こうして自分の来訪を知っていたのか——

これは誰の知恵だろう。男の入れ知恵だろうか。そう思うと安井という男が憎くなる。

安井の部屋に戻った、たき子は、また安井と、さっきの続きを始めたらしい。

途中で宇吉を悪罵する声が入ってくる。

「くそ爺い」とか「助平爺い」とか「舐めろしか芸のないヨボヨボ犬」だとか「これをタップリ吸わしてやるんだからね。フフフ」と不敵に笑う、たき子の声を聞いた。

だが、宇吉の心は、もう平静だった。いや平静になろうと懸命に努力し、そして怒りをおさえているうちに、何か奇妙な楽しさに変化してきた。

——よし、ちょっと意地悪してやろう——

宇吉は音を立てぬように部屋を出て、今度はパタンと扉を閉める音を聞かせた。部屋に入ってもウイスキーのグラスをカタコト言わ

せて取り出した。

途端に向う側の音がピタリと聞えなくなつた。スイッチを切ったわけではないだろうが何かそういう仕掛けがあるのだろうか。

いま、ちょうど上り坂へ向う途中なのだ。そこへ邪魔を入れた、つもりだった。

——こうすればイヤでも、たき子は途中でやめて、部屋へ戻ってくるだろう——

という宇吉の目算は見事に、はずれた。

服を着たり、髪のを直したりで、五分や十分は遅れるかもしれない。

と思ったのが、十分たっても二十分たつても、やって来なかった。音が聞えないので、何をしているのか分からない。だが、およそ想像のつくことは、やりかけたことを途中でやめるなんてイヤなこった。と十分に堪能しているのだ。そう思って待っていると、時間が長く、イライラしてきた。

山下探偵は、かなり前から二人の関係は続いていると言った。自分が留守に来て待っているのを知っていながら、たき子は、すぐに来なかった。そういえば、以前は留守に来ると偶然のように、すぐ、たき子が現れた。それが、この頃は、いつも、なかなか帰って来ない。それだけ、近頃はバカにされているの

だ。と気がつく、腹が立つよりも哀しくなつた。

いつもは一時間、待っても、長く感じなかったのに、今夜は二十分から五分、経つのも三十分ぐらいに長く感じた。いっそ、このまま帰ってしまおうかと思ったが、今夜は家に帰れないので、見知らぬホテルに一人、泊まるのも味気ないと思い止まった。

扉が開いて、たき子が悠然と現れた。

「あら、パパ。いらっしゃい」

宇吉は、しげしげと、たき子を見つめた。

初めて見た頃は、はつらつとした可愛い娘だった。いまはグツと落ちついて若奥様といった貫録が出てきている。妖艶で一段とセクシーな魅力が、あふれている。

「ウフフフ」

「恋人とデートかね」

「まあね。フフフ、パパも忙しくて大変だったわね」

たき子は勢いよくワンピースを脱ぎ捨てる、と、シュミーズもスルスルと足元に落としてブラジャーとパンティだけになった。

この頃、また肉がついて、七十キロを越すグラマーな肉体はセックスの塊りのように見えた。

「ジンフィズ、つくってくれない、パパ」
たき子は寝室に入り、パンティもブラジャーもとって、赤いシースルーのガウンを着て戻ってきた。

「絵の仕事の方は、どうかね」

「ウン、やっぱり旅行したあとは仕事が溜っちゃって忙しいのよ」

ソファに腰をおろし、大きく足を組むと、ガウンの裾が割れて逞しい太股が大胆に露出した。

「パパが、しばらく来ないから、淋しかったわ」

「ごめんよ。いま、大切な仕事のやまへ来てるもんだから、もうじき片づくけどね」

しばらく話をしていたが、たき子は、ふといつもと違うムードを感じた。宇吉が何か、よそよそしく感ぜられた。二人の間に何か柵を立てて話し合ってるような感じだった。

話をしている間にジロジロと、ひとの身体や顔を観察する目つきが、いつもと違う。

「何よう。そんなに見つめないで。パパ、こっちへ、いらっしゃい」

遂に、たき子の方から誘うはめになった。組んでいた上の方の足を、高々と上げる。その瞬間に、宇吉の目が吸い込まれるように注

がれるのを、たき子は、ちゃんと計算に入れていた。両足を、ひらき気味にすると、ガウンの裾前は、大きくはだけて、たき子自慢の太腿がニョキリと、はみ出した。

宇吉は、たき子の傍の、毛足の長い、じゅうたんに腰をおろして、匂う桜色の太股へ身体を擦り寄せるようにして座った。

その途端に、たき子の大きな片足が、勢いよく跳ね上がり、待ち構えていた獲物を捕えるように宇吉の首に巻きついた。

「ウフフフ、パパあ……」

あまったれた声にしては野太く、ふてぶてしい声音である。

——こっちを、お向きよ！——

と足が命令するように、宇吉の顔を前向きにして、太腿でピッタリと、はさんだ。

——こうすれば、どうすることもできないだろう。もう、お前は金縛りにあったようなものだよ——

と足は誇っていた。

事実、このふくやかな触感と、芳醇な女性の香りの前に、宇吉は、いままでの冷静さを溶かし消されてしまった。

「パパ、ハイ、キスして！」

宇吉の後頭部に、たき子の手がかかった。

否応なく、強烈な匂いが宇吉の理性を麻痺させた。

宇吉はつい今しがた、荒い息使いと、今まで聞いたこともない、たき子の嬌声を、この耳で聞いたばかりだ。

まだ顔も見たことのない、たき子の愛人が抱いたばかりの肌。

それが分っていても、宇吉はジーンと頭の蕊が、しびれてくるような思いに溺れた。

たき子は勝ち誇ったように、じゅうたんの上に宇吉を仰向けに寝かし、顔の上に馬のりに跨がった。

——フフ、今夜は妙に、よそよそしくしている。あたしが何をしてきたか、この爺いは気づいているんだわ。それでも、あたしに、こうされれば、いやでも応でも、あたしの言いなりにされちゃうじゃないの。お前は、こうされるのが好きなんだろ。変態爺い——

たき子は、宇吉がマゾヒストだと思っていて、自分は、ほんとうはノーマルな女だが、宇吉が変態だから、それに合せて、やってやるだけのことなんだ。満更、悪い気持でもないし、安芸雄も爺いを虐めてやるのを聞いて喜んでるし、だから面白半分にやってるのだと思っていた。

——こうまで羞かしめてやっても、やきもちひとつ、やくこともできず、あたしのおもちやにされている。それほど、あたしに参っているんだわ——

そういう快感もあった。その快感を確かめるように、グイグイ締めあげた。無意識のうちに体重をかぶせすぎていた。

宇吉は苦しくなって、じゅうたんを手で叩いた。

——フン、もう降参か——

たき子は力を、ゆるめ、

「パパ、ベッドへ行きましょう」

ベッドで、たっぷり時間をかけて責めてやろうと思った。

最後の夜

ベッドへ先にあがった、たき子の前に、宇吉は、

「サリー、見てごらん、ホラ」

と、ガウンの前を捲って見せた。たき子は汚いものを見たように、一瞬ハチをよせた。

「このところ身体の調子が、とてもいいと思ったら案の定、久し振りで元気になったよ」

宇吉はベッドに上がった。

「いつも、すまないと思っていたんだよ。君と一緒にになった頃の元氣さを取り戻そうと思って努力してたんだ」

拒む理由は、ひとつもない。受け入れるより、しようがなかった。

宇吉は、ひっきりなしに、しゃべり、声を出した。

たき子はインターホーンがONに入れてあるのが気になった。

何とかインターホーンを止めなければ——

安井に聞かれては、まずい場面が急に展開したからだった。

たき子は声を出さずに、宇吉のおしゃべりに首をコックリして、うなずいた。

「こんなにハッスルするなんて、ほんとに、ほんとに久し振りだね」

それは事実だった。

十分に聞かせてやる、わしにも、この位の實力があることを。君の恋人に思い知らせてやるんだ。人に絶対、聞かれたくない恥を晒した、そのお返しを、してやるのだ。

たき子も宇吉も、脳裡に同じ人物、安井芸雄を描いていたのだ。

宇吉を、ここまでハッスルさせたのは、かつて受けたことのない屈辱によって刺戟され

たためであつたろう。

だが、宇吉とて真のマゾヒストではない。

愛する、たき子に責められる時はマゾヒスティックになるが、第三者を意識した時、憤然とファイトが、わいてきた。もともと人の何倍も強いファイトで、世を渡ってきた男なのだ。

十分経っても二十分経っても、宇吉の勢いは一向に衰えを見せなかった。

たき子は、もはやインタホーンを、とめることは断念した。安芸雄の姿も脳裡から消えた。

自然に、老人の懸命な努力に報いていた。

「サリー、ホラ！」

何度も何度も念を押すように、声を上げた。

宇吉は、たき子の唇に唇を重ねたまま休んだ。たき子は宇吉の唇をはずして、顔を横に向け、頬で受けた。

再び安井の怒ったような顔が浮かんだ。

まずいこと、聞かれちゃったわ。

「老人は臍抜けで、あたしの奴隷よ」と安井に放言していたことに、ひっこみがつかなくなってしまう。

——パパが帰ったら、も一度あきおさんの所へ行って、どんな気持でいるかを確かめなく

ちゃ——

たき子が起き上がった。宇吉は死んだように疲れ果てていた。たき子は立ってキッチンに行き、ウイスキーにローヤルゼリーを、まぜた。

——元氣をつけて早く帰してしまおう——

「ハイ、パパ。ゼリーを、まぜたわ」

「ありがとう。ああ、疲れた」

宇吉は、うまそうに、ひと息で飲んだ。

「サリ、君に話がある」

「なあに？」

「君も、そろそろ身をかためる頃だろう」

思いもかけぬ時に、だしぬけに言われて、たき子はドキリとした。

「フッフ、そんなこと、まだ考えてないわ」

「いや、結婚というものは、時機をはずすと折角の幸福を、とり逃がしてしまうよ。安井君という青年は、なかなか立派な人物だそうじゃないか」

こんどは、ほんとうに胸をドンと衝かれたようなショックを受けた。

「僕は、いつも言っている通り、君の幸福を妨げる気持は毛頭ない。僕は心から君を愛している。だが、君の大きな幸福のために、もしも僕が障害になっているのなら、潔く身を

退くよ」

「何言ってるの、パパ。そのお話なら、また昼間にでも、ゆっくり聞いわ。もう一時よ」
「イヤ、今夜は君のところに泊って行くよ」
宇吉のパンチが、また、たき子のストマックに刺さったような感じだった。

「夜の方が、ゆっくり落着いて話ができる」

「じゃ、あっちで、お話ししよう」

たき子は宇吉を洋間の方へ移らせ、その隙にインターホンのスイッチを切った。いくらかこれで、たき子の気持も落ちついた。

——安井のことを、どこから嗅ぎつけたのだろう？ ああ、そうだ。村中二郎が、つげ口したに相違ない。あん畜生！——

たき子は鏡に向って自分の顔を見た。何か不安に、おびえているような顔だった。

——何も恐れることは、ないじゃないの。いつかはバレることだと、あきおさんも言っていたわ。その時が来ただけじゃないの——

髪のをを整え、厚手のガウンを着て、洋間に出て行った。

「君は安井君を心から愛しているのだろう。ほんとの気持を言ってくれ給え。僕は決して悪いようには、しないから」

たき子は黙って、うつ向いた。

「結婚するつもりなんだろう」

黙っているのは、肯定したしるしである。
「勿論、安井君は僕のことを知っているね」
これも肯定せざるを得ない。たき子は宇吉が二人の仲のことを、どこまで知っているのか推し測りかねて、とまどっていた。

「僕のことを、よく知っているとする、僕と君の仲が、いつまでも、こうしたかたちで続くのは、いいことではない」

——このひと、あたしと別れるつもりだわ。たき子はチラと不安のかけが、はしった。

——これだけ愛している、あたしと、いますぐ別れる気はないだろう——
と、いままで樂觀していたのだった。

「僕は君を手離すのは死ぬほど辛いけれど君の幸福のことを考えると、諦めるよりないと決心したんだ。何と言っても、君と僕との関係は裏の生活だからね。君を陽の当たるところへ出すためには、僕は潔く身を引かなければならないと、自分に言いかけたんだよ」
「でも、まだすぐ結婚するとは決まってるのよ」

たき子の心に不安が残るのは、安井に結婚の話をすると、いつも何だ、かだと、はぐらかされてしまう。自分を嫌っては、いない。

確かに愛しては、くれているのだが、結婚の具体的な段階に入ると、はっきりした返事をしないのが気にかかる。だが、それは時期の問題で、いずれは結婚するだろう。

「いや、だからと言って僕と君の関係を、このまま続けているということは危険だ。安井君は恐らく僕が君と別れるのを待ち望んでいるのだと思う。立場を替えて僕が安井君の身になって見れば、やはり、それを望むことははっきりしているからね。僕のために、もしも結婚に破綻でも来たら、それは僕の責任になる。君に怨まれる」

「怨みなんか、しないわ」

「それは、なって見なければ分からない。僕も、いずれは君と別れなければならぬならお互い、円満に行っているうちに解決するべきだと思う」

宇吉は、いつになく厳しい表情だった。

「一体、どこまで嗅ぎつけてるのかしら？まさかインターホンのことまでは知らないだろうけど——」

たき子は宇吉の恐い顔を見つめているうちに『この人は口で、きれいなことを言ってるけど、あたしに愛想が、つきたんじゃないかしら』そんな不安も感じてきた。

——フン、いままで気に入るように相手をしてやってきたのに、やはり飽いたに違いないわ。男なんて勝手なものだ——

たき子が見る宇吉は、いつもニコニコしている。過失をしても怒らず、寛大そのものの好々爺であった。こんな恐い顔は見たことがない。

——だけど、あたしは負けないわよ。そっちがその気なら、別れてやるわ。確かに、この爺いと縁を切ったら、安井も結婚に踏み切ってくれるかもしれない——

たき子は、宇吉と別れる時は、自分の方から切り出す事になるだろうと想像し、そう思いついていた。

涙を流し、泣いて訴えれば、このひとも涙してOKするだろう。そんなことを考えていたのに、宇吉の方から切り出されたのは、先を越されたようで、癪にさわった。

「わかりましたわ。あたしもパパを、ほんとうのパパと思って慕ってきたのよ。パパと別れるなんて考えたこともなかったけど、パパに言われて見れば、その通りかもしれないっていう気持ちにもなってきたわ。でも、パパ。あたし哀しいわ」

たき子は泣き声になり、真実、悲しそうな

表情を、してみせた。だが、内心は

——とうとう、この爺いとも、お終まいか。今度は邪魔されずに大っぴらに、あきおさんと会えるわ。フフフ——

と心では嗤っていた。

宇吉は、洋服ダンスの洋服のポケットから一通の封筒を、とり出した。

「これは、いままで僕につくしてくれた、心ばかりの、お礼だ」

五十万円の小切手が入っていた。

「僕としては、このマンションが君に対する最大の贈り物だと思っている。今夜限りで僕は引き下がるよ」

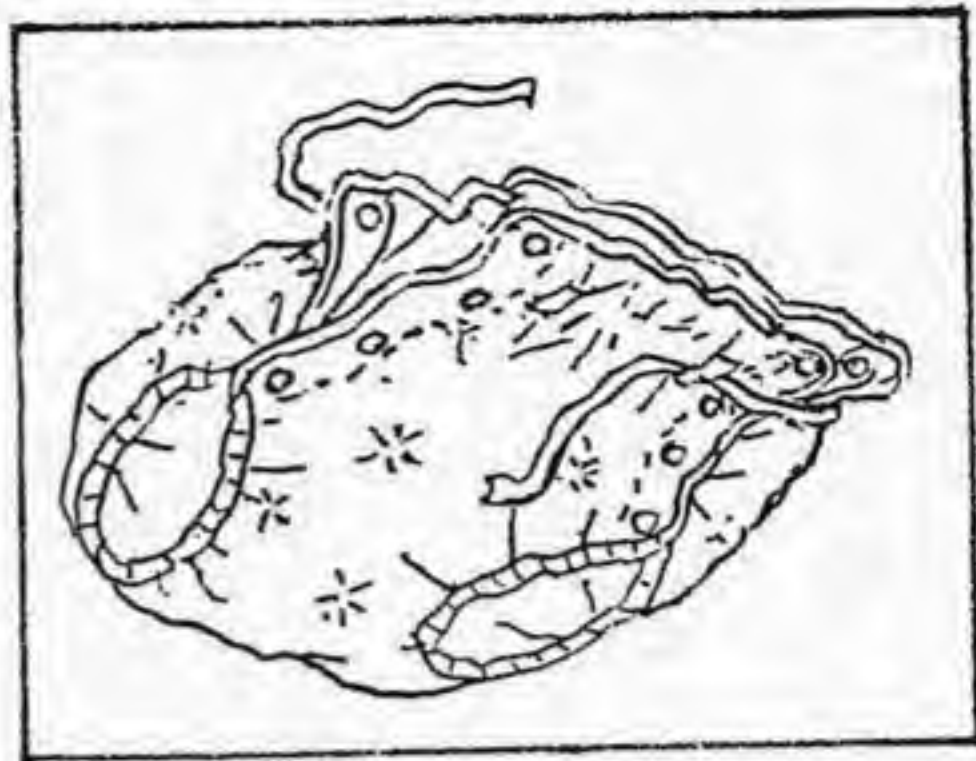
三年もつき合って五十万円とは少ないと、たき子は思ったが、宇吉の言う通り、マンションを自分のものにしておいて、よかったと思った。

——フン、まあ、いや。もらうものは、これで全部、もらった。あとは、こっちからお返しにプレゼントをやるわ。この爺いの口へ、おしっこを注ぎこんでやる——

たき子は、老人にしては赤く薄い、宇吉の唇をジッと見つめていた。

——（次号完結）——

カット・原由貴子



——山田氏に答えて——

洩
ら
せの
び
の
び
と

岩 手 信 夫

(一) 洩らすことの是非

おしめカバーが洩らし心を誘うのか、それとも洩らし心がおしめカバーを慕うのか、いづれにしても、おしめカバー愛好者にとって洩らすことは是か非かの問題になる。

問題の核心には「洩らしてはいけません」という母の教えがある。洩らさない子は「良い子」であり洩らす子は「悪い子」である。本誌11月号山田氏の「洩らさないでも資格がある」という主張は、良い子の枠内でおしめカバー愛好者であることが可能であるとの見解であろう。その主張の是非はともかく、お

しめカバー愛好者が「母親の過失によって」作られた「憐れな存在」であるという山田氏の見解は的を射ていると思われる。

(二) 母の過失

山田氏の言う「母親の過失」とは、育児技術上の巧拙に類するものでなく、もっと本質的な問題に関するものである。私なりに言わせてもらえば、それは、社会や家族の事情を背景にして幼児に接する母親の態度に、幼児の心を閉ざしてしまうような、何らかのかげりがあったことを指している。この種の一種独特な、むしろ宿命的かも知れない不幸

の幻影は、外見上どんな幸福そうな母子関係のなかにも存在する可能性がある。

おしめカバー愛好は単なる趣味や道楽ではなくて、その人の精神構造の欠陥を示す兆候である。欠陥とは、情緒の発達が「おしめカバー段階」で停止したまま固まっていることである。おしめカバー愛好者の性格が、山田氏も指摘しているように、規範意識過剰型である原因は、洩らしてはならぬという人生最初の規範を過剰に植え込まれたからである。

「おしめカバー段階」とは、おしめカバー使用の末期に幼児が、おしめカバー内でそのことを意識しつつ排尿する時期の状態を指す。

この時、幼児は尿をチロチロと垂らしては、その感触の変化を味わっている。この行為には、後に自己の存在感となるものの萌芽が含まれていると思われる。順調に行けば短期間で通過するに違いないこの段階も、かげりのある母親の下で存在に不安を覚えている幼児にとっては永遠に留まりたい段階となる。ここに情緒の発達の停止が生じ、洩らすことで自ら慰める習慣が成立する。

この種の幼児は、おしめカバーを外すと排尿が困難になり、当てると快調に洩らすとい

う形で躰に抵抗する。しかし母親は、そのことによってもっと早く外すべきだと思つうようになり見通しが立たないのに外してしまう。順調に行けば「おしめカバー無し的人生」のスタートは、おしめカバーが不必要になることで自然に行なわれるが、問題の幼児の場合には不必要になる日が来ないので自然に放つておいたのでは、おしめカバー無し的人生に移れない。だから母親は必要であることを知りながら外してしまうのである。かくて、おしめカバー無し的人生のスタートは粗相につぐ粗相ということになる。

(三) 躰の跡

粗相の多い幼児を抱えた母親は「洩らしてはいけません」という規範を命がけで有無を言わず強制し、守らせる必要に迫られる。この努力が奏功すると「洩らしたら大変だ」という意識だけが異常に肥大した奇妙な人間ができあがる。この種の人間は、その後の人生において遭遇する、すべての事件に対して「〇〇したら大変だ」という発想をする。あきらかに、これは一種の情緒不安定である。しかし、洩らせまいと苦闘して来た母親の立場から見ると、このような精神状態に幼児

を追いつみ得たことは、躰の成功に他ならぬ。

幼児が母親の苦心にも拘らず相変らず洩らすようであれば、躰は不成功である。しかし母親なるものは、躰の不成功を認めるほどの度量を持ち合わせていない。教養のない母親は、どうして良いかわからなくて殺してしまうことすらある。教養ある大多数の母親は夜尿を夜尿症に仕立てて「お医者さま」に持ち込み、自分が被害者になりすまして体面を保とうとする。

私は、右のような論理により、規範意識過剰型の人は、おしめカバー愛好者であるか否とに關係なく、「洩らしてはいけません」という規範を骨身に沁みるようにたたき込まれて成立したものと推論する。かれらは、おしめカバー無し的人生の初期から母親の強力な監視を受けており、自分の意識を持つことができなかったに違いない。そうだとすると、規範意識過剰という性格には、形影相伴うように、自己不確実感や敗北感、あるいは無力感などが共存している筈である。ともかく、おしめカバー愛好という心理は、話の種としての面白さとは似ても似つかないような深刻

な側面があることを否定できない。

(四) おしめカバーの意味

言うまでもなく、おしめカバー愛好の衝動は、おしめカバー段階を追体験したいという意味を含んでいる。それは、私に言わせれば精神の自己修復作用の一環である。おしめカバーが自分に最も相応しい心の逃げ場であることを本能的に発見しているのである。

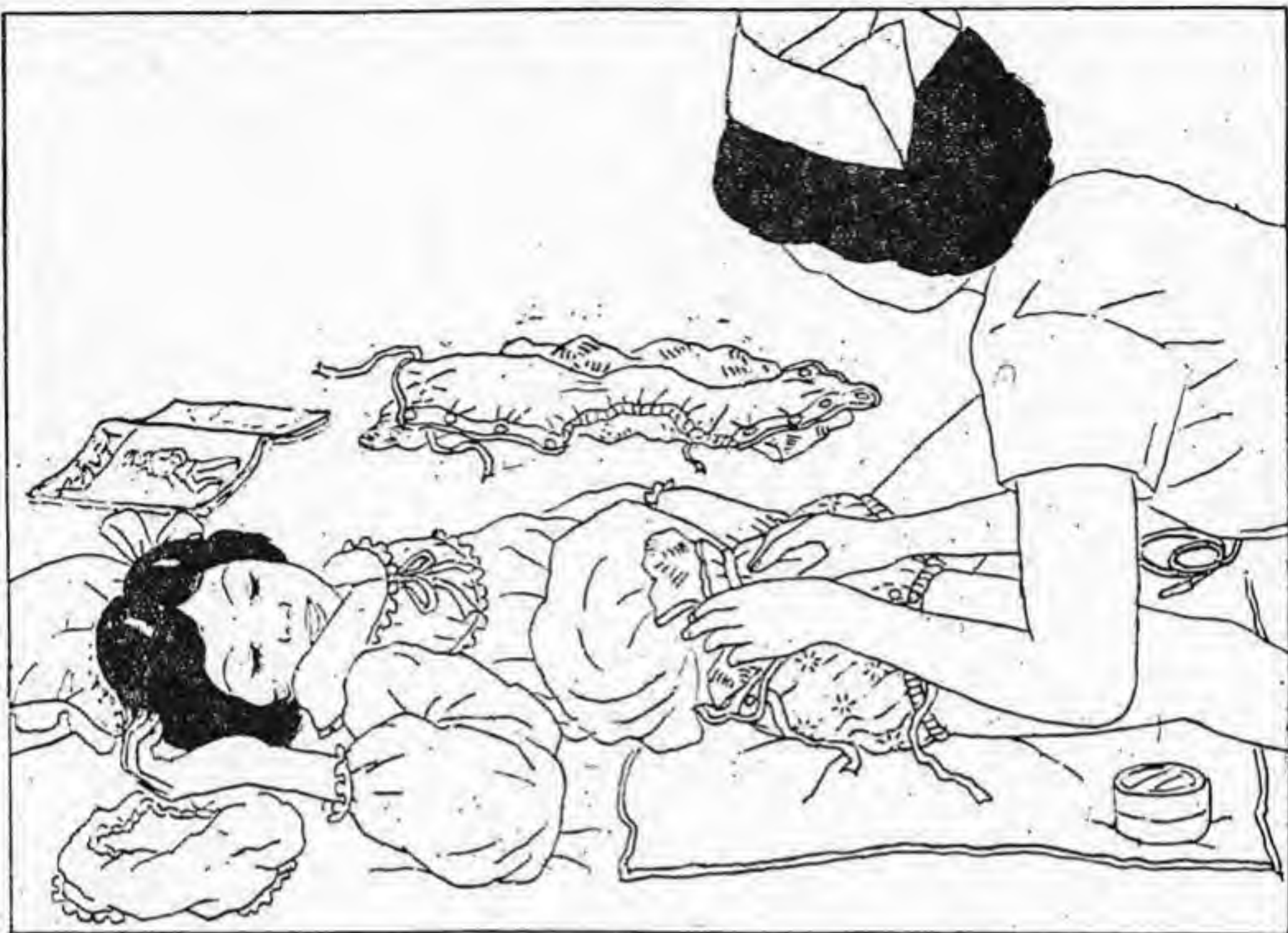
悩みということを美化し、これに耐えることを称讃する時代は終っている。逃避とか退行とか、軽蔑の意味を持つ言葉は、リラックスとか、ストレス解消とかの積極的な言葉に取って代られた。(少なくとも日常会話のなかでは)

むしろ現代では、各自が自分なりに心の逃げ場を作ることが、悲惨な精神障害の予防のために推奨されている。おしめカバー愛好者にとって最良の心の逃げ場は他ならぬおしめカバーである。山田氏はおしめカバーの「合法的使用」を考えているが、私は、心の逃げ場としての使い方が、それを代表するように思われてならない。

(五) 洩らすことの価値

実は、この文の冒頭で問題にした「洩らす

イメージギャラリー 『診察の時間』 原 由 貴 子



こと」の是非を考えるのに、おしめカバーがどんな意味で使われるかが条件として必要だったのである。今ここで、おしめカバーを心の逃げ場として用いる場合を考えると着用したとき幼児に帰ることに価値を認めなければならぬ。このことは洩らすことを一般論として認めるもので、洩らさない約束での着用を無意味として排斥することになる。

私の考えによる正しい使い方とは、洩らすも、洩らさぬも成行きに任せることである。

洩らしたい気持が生じなければ洩らさないでおき、洩らしたくなったら素直な気持で洩ら

すのである。したがっておしめカバーとしては、洩らしたくなるとき素直な気持で洩らせるような状態が必要になる。それは具体的には粗相の不安と後始末の煩わしさが解決されていることである。

山田氏の「洩らさないでも、おしめカバー愛好者たる資格がある」という主張に私は異存がない。この考えは、無理して洩らす必要はないとする私の考えと矛盾しないからである。しかし私は、洩らしたいのに洩らさないでごまかすような人や、洩らせるような状態を、一度も作ったことのない人は、おしめカバー愛好者と呼びたくないのである。私が真のおしめカバー愛好者として尊敬するのは、45年5月号で私が引用した二人の女性のように、おしめカバーに本当に気を許して夜尿症になるくらいの人々である。そして私自身はおしめカバー内でしか許されないような、のびのびとした放尿を夢見心地でやりたいのである。

(六) 気を許すこと

私が「おしめカバー内でしか許されないような」と表現するのには理由がある。「のびのび」とは「気を許した状態」を言うが、実

は日常の体験から明らかなように、「気を許す」ことは排泄の開始に不可欠な精神操作である。一瞬でも気を許せば、それ以後は自動的に排泄が進行し、それを中断することが不可能であったり、容易でなかったりする。この点については浣腸と夜尿症という全く異なる原理の排泄同志が共通した性質を持っている。どちらも直前までは気を許していなかった（びくびくしていた）のに、ほんの一呼吸の間だけ気を許したために出てしまうのである。私が求めているのは排泄開始のための精神操作として気を許すのではなくて、心の逃げ場として毎日幾許かのまとまった時間を気を許した状態で過すことである。気を許した状態では尿が一定の量に達すると催して来てその勢いで排尿が起ってしまう。だからいつ洩らしても良いような服装をしている必要がある。これが即ちおしめカバーに他ならない。

（七） 排泄の快感追求と保健効果

気を許すことは普通の人にとっては排泄開始のための精神的手段に過ぎないが、この手段そのものが作り出す気分——幼い日の安堵感——を狙って模索を繰返せば必然的におしめカバー愛好に到達する。この種の目的と手

段の取り違えは、「性のよろこび」とか「食のたのしみ」などのように、その本来の生物学的目的を著しく損わない限り許されるべきである。もちろん奨励されるべき理由は見当らないが、排便においては浣腸の例がある。

浣腸は強力で手軽な快感追求手段として用いられるが排便のリズムが乱され、往々にして浣腸がないと排便が順調でなくなるという現象（習慣性）が見られる。しかし耽溺して頻繁に実行する人は習慣性の問題を表面化させないで済み、むしろ排便促進効果をフルに利用できて、生活上、自然排便で得られないような利益を満喫することができる。

排尿におしめカバーを用いて快楽を追求することは気を許すことであるが、これを好きなどきに行なうことはできない。一日の生活時間の配分において昼間は一般におしめカバーの使用に不適であり、着用しても気が許せる状況ではない。排泄について気を許すことは全精神活動にわたって気を許すことで、たとえば排尿開始のとき我々は他の方面への気配りを一時、中断せざるを得ず、一瞬、無防備となる。長時間にわたって気を許していられるのは就寝中であり、したがって夜尿

のみが実際的な快感追求むきの排尿となる。

寝る時、おしめカバーに気を許すと夜尿することが多い。気を許すことに目的があるなら夜尿は副産物である。ずるいことを言えば徹底的に気を許した上で夜尿が無ければ後始末や粗相の点で大助かりである。量が少なければ、おしめは簡単で済む。気を許している事を目に見える形で知るために時々夜尿するのも悪くないがその場合は月に一回か二回で十分である。気を許しても夜尿しないという現象は夏季に尿量が激減したときなどに普通に見られるとおりである。いかに甘ったれた子どもでも尿量が催すに足りなければ洩らしようが無い。また、おしめカバーを着けた夜も尿意を便所で解消すれば、おしめカバーに気を許しつつ夜尿を免れることができる。

確かに、洩らす心配を無くしてやれば誰でも、おしめカバーに気を許すことができ、それなりの精神的安らぎを得ることができ。しかし私は、このような使い方は一つの便宜的な略式であると思う。本式の使い方は洩らすとわかっている状態で気を許すことであると思う。これは「良い子」にはできないことである。つまり「悪い子」になるのが本式の

使い方であると思う。この考えに到達すると夜尿の快感追求を生活に組込むことが可能になる。これは山田氏の「合法的使用」を私なりに拡張したもので、本来きわめて憐れな存在である、おしめカバー愛好者の洩らし心を満たしながら保健効果を得ようというものである。

(八) 合理的な夜尿の仕方

まず第一に、夜、おしめカバー着用前先立って完全に排尿しておき、朝、おしめカバー脱着に先立って完全に洩らしておく。これでおしめカバーは夜間に生じた尿だけのものとなり、夜間に生じた尿は、すべて、おしめカバー内に放出されることになる。

第二に睡眠優先とし、放尿は眠りを妨げないように、むしろ眠りを誘導するようにタイミングを考えて行なう。就床後に生じた尿のため、眠りつきが害されるようであれば、就床直後であっても放出して、おしめカバー内を濡らすことを、ためらわない。尿意が無いのに放尿する努力は眠りを妨げるので避けるが、催したときは遅滞なく放尿できるように神経を膀胱や尿道に集中しておく。これにより周囲の騒音や光線が感覚的に遮断される。

放尿と睡眠の関係は眠りながら洩らすことでなく、洩らしながら眠る気分で行なう。夢を見ているときは、それを絶ち切らないように努め、できるだけ夢心地を保存する。特に、洩らしに関係ある夢を見て驚かないように、「悪い子」になり切ることが望ましい。

第三に「本物のオネショ」をするように飲食をコントロールする。夏は尿量が不足するので適当に補う。寝る前に水分を取ることに抵抗を感じるのは、尿の後遺症である。これを克服するため「本物のオネショ」を目的として、水分の摂取の楽しさを取戻す必要がある。ただし尿量が多ければ、あるいは取入れる水分が多ければ必ず目的が達せられるとは限らない。子どもの夜尿予防に、多量の水を飲ませるといふ一見、逆に見える方法があることから知れるように適量というものがある。この適量は普通量より必ず多い所にあり、普通なら夜間、小用が近くなつて悩まされる量に当る。なお、水分をどんな飲食物の形で、何時ごろ取入れるかによって「おねしょ」の様相は大いに異なる。尿量が増えてオネショし難くなることもあれば、しやすくなることもある。

私がおしめカバー内で右のような洩らし方を推奨するのは保健効果として安眠快夢、こらえないことによる泌尿系の保護、尿を薄くすることによる腎臓の負担軽減(尿の濃縮が負担になり、多尿は負担にならない)、および水分摂取量の回復による(子ども並みとまでは行かなくても)新陳代謝の活発化が相互に矛盾なく実現できるからである。もちろん心理的な効果も、これらによって高められるので、心身双方のプラスになる。

(九) オネショが恐い人のために

夜尿願望を私が告白(43年12月号)して以来、多くの人々から批判を受けたが表現の不適切は反省するにしても基本的な方向は正しいと今でも思っている。少なくとも、おしめカバー愛好の路線上で、夜尿を否定するのと肯定するのでは周囲の光景が本質的に違つて来ることは確かである。洩らさない良さはそれとして私も認める。夜尿と紛らわしい洩らし方を避ける気持ちも痛い程、理解できる。洩らさないでも十分、満足できるなら、それに越したことは無い。しかし、のびのびと洩らすことの価値を認めるならば、それを現実に実行して心身の益たらしめるべく洩らすこ

とを自から期待し、実現するように工夫しなければならぬ。それが夜尿願望であり、夜尿の工夫であり、実現されたものが「おしめ性夜尿症」なのである。

今の私は、おしめカバー愛好者の平均にくらべれば、のびのびと洩らしていると思っいるが、自分なりに満足できるほど、のびのびしているわけではない。のびのびと洩らすことは語るほどには容易でない。粗相に対する不安が予想以上に深刻であり、オネシヨそれ自体が願望の対象でありながら恐怖の原因であるという矛盾を内在させている。粗相は

おしめカバーの工夫で防げるから良いが、オネシヨそれ自体への恐怖は、心に刻まれているので消せない。願望が叶ったという感動は失敗感で帳消しされる。

のびのびと洩らすにはオネシヨが直接に見えないようにすることが必要らしい。したらしいことは、わかっていても良いが、ずばり見せつけられると動揺する。これを防ぐため、眠りつく前か、朝さめた直後に、洩らしたという記憶が確実に残るように排尿するというのが私の工夫の一つである。このため、着けたおしめカバーは必ず濡れることになり、本物

新発足 懸賞入告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めま

す。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

のオネシヨに直接は気付かないで済むのである。私が、いつまでも夜尿願望を持ち続けていられるのは、こうやって夜尿シヨックを緩和しているからであろう。この作為は逃避の一種であるが、幼い時に夜尿で、ひどく叱られた人が、のびのび洩らすために欠かせない夜尿願望を守るために許される作為だと思ふ

(十) のびのびとゴムカバーに

私は、おしめの洗濯や、旅行の不自由などの負担や不便にも拘らず、のびのびと洩らすことを、あくことなしに追求している。そのことから逆に、のびのびと洩らすことの素晴しさが、おわかり頂けると思う。人間は自分の心や体に益になるものしか、真剣には追求できないのである。

それにつけても私は、おしめカバー愛好者となって良かったと思う。山田氏も述べているように、それはゴムの、おしめカバーのおかげである。洩らすことの是非については何の関係もない材料の問題であるが、議論の対象になり得ると思う。私にとって「洩らせ、のびのび」とは、ゴムのおしめカバーを暗黙の前提としている。洩らせ、のびのびと、ゴムのおしめカバーが臭うまで。

S小説新人シリーズ

夜

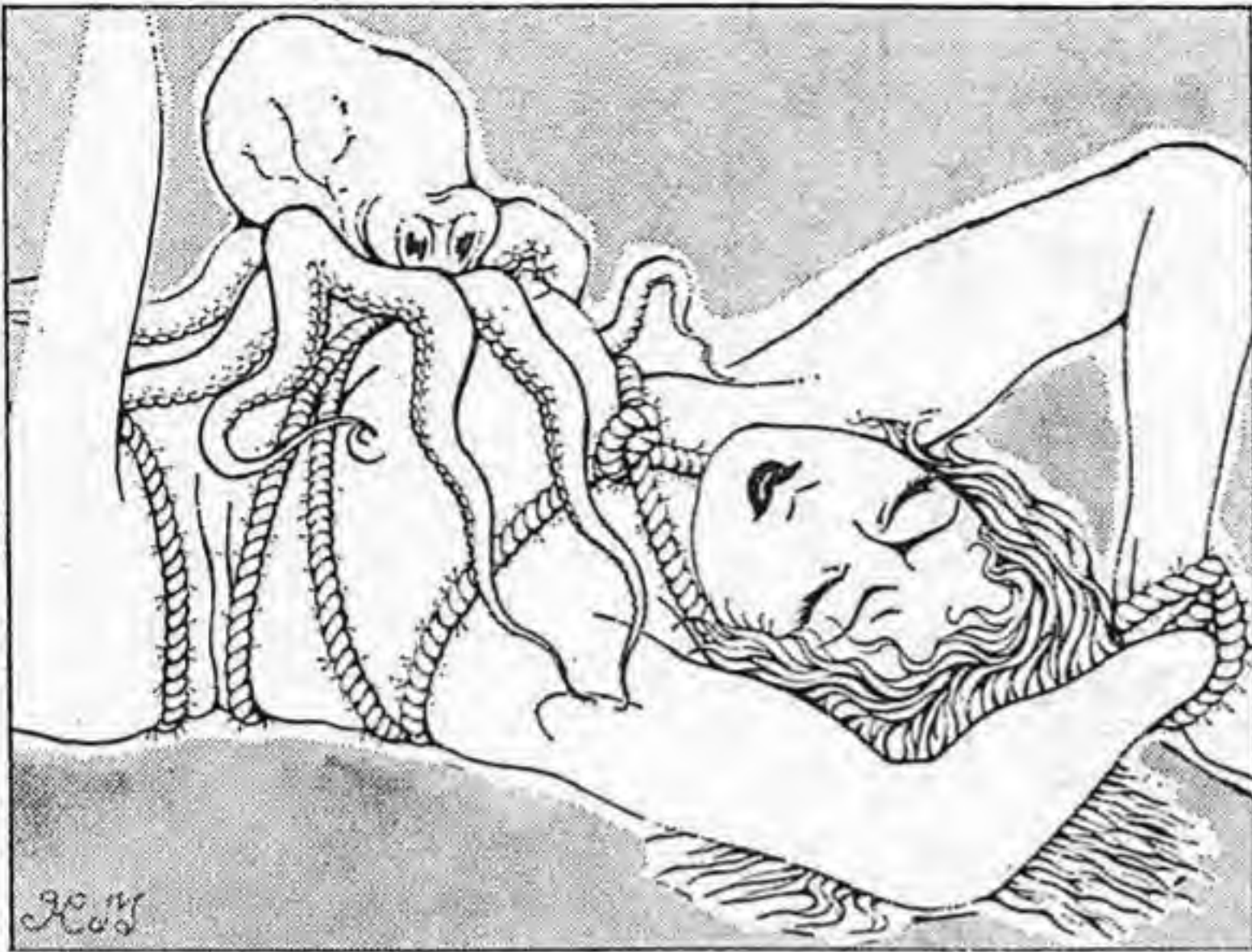
の

叫

び

吾妻 竜 一

カット・もりひでを



竜次が手にしたのは、幅2センチ位の、薄い、しなやかな竹の筥であった。

以前、彼は、ものの本で、竹の中では最も弾力に富むといわれる真竹から、筥を作る話を読んだことがあったが、それを真似て自分でも作ってみたのだ。

勿論、真竹ではない。

壁土を塗る時などに、編んで使われる極く普通の竹べらである。竜次はそれを、建築現場から一本、失敬してきたのだ。

そのせいか、出来あがった筥は、やや弾力性にとぼしく、ゴツゴツした感じが残っていた。そこで彼は、表皮一枚を残して、出来るだけ薄く削り、その上にセロテープを巻き、さらに、黒いビニールテープで覆ったのだ。

手を加えただけのことはあり、思ったより見事な出来ばえであった。

彼はそれを、早速、雪江で試した。雪江には、どんなことでも平気で出来る気安さがあったからだ。

竜次はこれまでも、想像のおもむくまま暇にまかせて作りあげた、さまざまな責具を雪江で試したが、彼女はその都度、的確な反応を示し、その印象を、語ってくれるのだった。

その意味では、雪江は格好のパロメーターであり、彼女が堪え切れず悲鳴をあげれば、それは、かなり激しい責めだと判断できた。初めて、その竹筥を使った時、雪江は何やら不満げな顔つきで、むきだしの臀部にそれを受けた。

いつもの革バンドの時より、痛みが軽そうである。そして、雪江は苦痛にもだえるというより、自分の置かれた姿に羞恥を覚えるように、しきりに尻をくねらせた。鞭打ちの際

彼女が肉体よりも、心理に痛みを感じることは、以前には、ないことだ。

事実、それを使う竜次にしても、普段とは趣きを異にしていた。

革バンドの時は、いくら打ちすえても、鞭を駄目にする気づかいはなかったが、竹笞の場合、笞が破損せぬよう手加減しなければならなかったからだ。

手塩にかけ、入念に仕上げた責具が簡単に壊れたのでは楽しみがない。

そこで、竜次は大きく振り下す感じではなく、真すぐ伸びきった笞の先端の、しなやかにしなうバネを利用して、ピシリピシリと颯々ように打ったのである。

すると、今まで不満げな様子で腰をくねらせていた雪江が、次第に息をはずませ、押し殺したような叫びを洩らし始めたのだ。

それは明らかに、彼女の肉体に生じた官能の高ぶりを示していた。

「何だか変だわ……」雪江は、うめいた。

「どうしてだ……」

「あまり痛くはないんだけど、ムズムズと感じるの……、そんなことばかりされたら、気が変になっちゃうみたいよ……」

小さきみに打ち震える竹笞の痛みの中で、

雪江は、そんな言葉を吐いた。

「ねえ、我慢できないわ……いっそのこと、もっと強く打って！」

雪江は、いかにも堪え切れぬといった風情で腰をうねらすと、竜次の責めを誘うように臀部を強調したのだ。

竜次は思わぬ効果に、血をわきたたせた。だが実際は、もっと多くの偉力を、その笞は秘めていたのである。

それは竹笞がフェンシングの剣のように、つき立っていることだった。

鞭の場合、バンドであれ、他の愛玩用であれ、通常、手元から、だらりと垂れ下ってしまふ。したがって、打ちつける以外に、使い道がない。

しかし、竜次のは、打つ以外にも、突いたり、きりもみしたり、ひっかいたり、複雑に応用でき、しかも、狙った場所へ思いどおりの刺激を加えられるのだ。

それが彼の好みに合い、都合が良いのだ。

その時、雪江は初めての洗礼で、完全に燃えあがった。

痛みには相当、堪え得る雪江も、チリチリする不思議な感触には、まいったらしく、思わず知らず、われを忘れ、巧緻な、いたぶり

の罫に、はまり込んだのだ。

そして、その後部に責めを受けた時、雪江は、最後の号泣とともに悶絶したのである。

竜次は、その責めを若いマリに加えようと思った。

そして、そう決心した途端、その考えは、随分、以前から彼の心に眠っていた欲望であることに気づいた。

マリが初めて、店に顔を見せた時から、竜次は無意識に、その責めを彼女に加えることを夢見ていたのだ。

竜次は自分の罪深さに、一瞬、ギクリとなった。

マリは相変らず、瑞々しい白い伸びやかな姿態を晒し、ベッドの上に横たわっている。

胸と股間にくい込む縄目の痛みにも慣れたのか、彼女の顔には、女が愛を待つ時の、ごく自然な表情が戻っていた。

竜次は、その、おしげもなく晒された、若い女の肌に、軽い憎しみを覚えた。

彼が既に失ったものが、そこには、ある。

いや、竜次の汚れた心を洗い清め、ゆがんだ過去を浄化し、その中に溺れ込みたい誘惑にかられる程の美しさが、そこには、あった。

だが彼は、かろうじて自分を抑え、マリ

の身体に手をかけた。

マリは全身の力を抜き、彼のなすがままになっている。そして、時々、竜次の望むように身体の向きを変えた。

竜次はマリの身体から全ての縄を取り去った。

慣れ切った縄目の痛みは、最早、ひとつの心地良い衣裳にしかすぎない。その居心地の良さを破壊し、もう一度、新しい羞恥の中につき戻す必要があるのだ。

彼は縄をはずすと、

「立て！」

マリの耳もとで命令した。

マリの顔に驚きの色が浮ぶ。

「聞えないのか。立てと言ってるんだ」

「どうするの、怖いわ」

マリが言葉を、ふるわせた。

「いいから、立て！」

竜次は、つき返すように、抑制のきいた冷たい声で続けた。

「いいか、マリ。今夜はお前が、どんなに泣き叫んでも許さないぜ。何故なら、そうさせたのは、お前なんだからな」

竜次は、そう言うと、マリの太腿のあたりに、竹笞を飛ばした。

マリの身体に電流が流れたような、戦慄が走る。

「ああ、マスター。ご免なさい……」

「さっさと立って、両腕を広げるんだ！」

マリは観念したように、ゆっくり身を起すと、両手を左右に広げ、十字架に、はりつけにされたような形で立った。

目を閉じ、顎を、やや上に向けた感じで、身を、すくませている。

その裸身は見事だった。

竜次は、ふと平均台の上に立った体操の選手を思い浮べた。贅肉のない、ひきしまった肉体。その鍛えられ、磨きぬかれた曲線には男の欲情に火を注がずにはおかない、健康なエロチシズムがある。竜次は、ブラウン管を通してしか、彼女達の肉体を知らなかったが神聖な競技の中に、隠しても隠しきることが出来ない、自然で本能的な性の魅力が介在しているのに圧倒されたことがあったのだ。

マリの裸体には、それがあった。

特に、研を競うように、そそり立つ乳房の隆起や、ムチムチと張りきった下腹部から太腿にかけての流れるような線の美しさに、神聖なまでの汚れのなさがあった。マリが男を知らないという意味ではない。汚しても、汚

しても、それを拭いおとってしまう強靱な肉体があるのだ。

「よし、なかなか、いいぞ！」

竜次は言った。

「今度は、両手を上にあげ、腰をゆっくりと動かすんだ。お前が若い男と寝る時のようにな……」

竜次は次第に、なぎるように、わきあがる嗜虐心を、おさえて言った。

「前後、左右、たっぷりと感じを出して振るんだぞ！」

「いやいや、そんなこと、出来ないわ」

マリが肩をふるわせ、嘆願した。

「お願い、許して……」

「駄目だ！」

再び竹笞が、しない、太腿に幾筋もの赤い線が浮き上る。

諦観の表情とともに、マリの両手が頭上にあがると、ゆっくり腰が動きはじめた。無防備で、無垢なマリの白い下腹部が、羞恥に追われる白兔のように、ゆれ動く。その中心の黒い密集と、腋下の体毛が別な生物のように竜次の目を射た。

「よし！ 今度は、足を開くんだ」
酔ったように、竜次は叫んだ。

「俺が、よしと言うまで開くんだ。もし、倒れたら、もっとひどい目に合わせるぞ！」

「いやよ、いやよ」

マリは、その無慈悲な要求に困惑したように、眉を曇らせると、哀願の目で竜次を見つめた。

「もう堪忍して、マリが悪かったわ……」

だが、その奥に、つきあげてくる激情を、どう堪えて良いのかわからぬ、別の目があるのを、彼は見逃さなかった。

「どうした。もっと肢を広げ、もっと腰を振るんだ。ボーイフレンドには出来ても、俺には出来ないのか」

「もう、だめだわ。これ以上は広げられないわ」

確かに、マリの両肢はすでに、限界まで開ききっていた。それ以上、開けばバランスを崩し、倒れるのは必至だ。

「よし、広げるのは勘弁してやる。その代りに、腰をゆっくり振り続けるんだ」

そう命じて、竜次はマリの前に寄ると、竹筥を彼女の開ききった内股のあたりに、近づけたのである。

マリの腰が前後にゆれるたびに、どうしても、その黒いビニールの細く、しなやかな物

体に触れねばならぬ。

しかも、それは彼女の意志とは、かわりなく、生きもののように、まといつくのだ。

マリは竜次の目的を察すると羞恥に身を火照らせ、大きく、あえいだ。

「マスター、許して。そんなこと、駄目よ」

マリは言葉を、つまらせた。

マリの裸身は、今や羞恥と官能の高ぶりに上気し、うっすらと紅みを帯びている。そして、乳房や内股のあたりは、じわじわと、しみ出る汗が体液で、鈍い光を帯びて光っていた。

両手を上にあげ、両肢を開ききった無理な姿勢で腰を振り続けることは、決して楽ではない。しかも、あくことのない強烈な刺激が加えられるのだ。

だが、竜次のいたぶりは、執拗であった。

ややもすると動きを弱め閉じられそうになるマリの内股に、竜次の竹筥は鋭く突きたち再び追いたてられるように腰がゆれると、今度は竹筥の、なめらかな冷たさが襲いかかりその不可思議な感触が、マリの悦虐をそそり甘美な刺激に、さそいこむのだ。

「どうだ。いじめられるのも、いいもんだらう」

あくなき、繰り返しの中で竜次が言った。

「お前のボーイフレンドと、どっちがいい」

「あ、あ、あ」

マリの叫びが高まった。

「言えと言ってるんだ！」

「マ、マスターの方が……いい、いいわ」

「どんな風に、いいんだ！」

「……」

「言えないほど、いいのか！ よし、それじゃ、今度は、もっと感じるやつだ！」

「あ、あ、やめて！」

「それ！ もっと激しく振るんだ！」

マリは最早、こらえ切れぬ悦虐に、全身を波打たせて、肩で大きくあえぎ、豊かな乳房を、ふるわせる。

そして、必死に腰をくねらせながら、あたかも自ら筥の洗礼を求めるように、身を開いた。

「ああ、もう駄目だわ。我慢できない。マリは、もうどうなってもいいの」

「だめだ！ 倒れたら、許さんぞ！」

「ああ、助けて！」

紅潮したマリの額に、悦虐の苦悶が浮ぶと唇が、わなわなと震え、豊かな腹部から太腿にかけての筋肉が細かい痙攣を、くり返す。

「マスター許して。マリが悪かったわ。どんなことでもします。だから、もう堪忍して」

「その言葉に嘘はないか」

「嘘なんか、言わない」

「よし。だったら、後ろ向き、そこに四つんばいになるんだ」

「ああ、マスター」

「どうしたっ！」

「そんな……」

「じゃ、よすんだな。俺は、どっちだって、かまわないぜ」

竜次は、ブルブルと両股をふるわせ、笞の触感に狂おしく身悶えるマリの姿を正面に見すえながら、ゆっくりと言った。

マリの落城は、もはや時間の問題である。しばらくして、部屋には再び、静寂な時間が戻って来た。

つい先ほどまで、あえぎ、もだえ、興奮のつぼと化した部屋とは信じられぬ、静かさが、そこにはある。

竜次は、部屋の中央に胡座をかき、放心したように座っていた。

どこで鳴るのか、隣家の時計が、ものうく時を告げる音が聞えて来る。サイド・ボードの置時計を見ると、三時ジャストであった。

雨は、やんだようだ。

竜次は座したまま、久しぶりに味わった、快樂の余韻を、じっくり咀嚼していた。

それは未だに、現実とは思えぬ、夢の時間であった。マリは、それほどに素晴らしい愉悅を彼にもたらしたのだ。外見から受ける印象とは、まったく異なった、赤裸な女の肉体が演ずるドラマが、竜次の強い嗜虐心を満足させたのである。

だが、その満足感を深く味わえば、味わうほど、竜次の心に、一つの疑惑が広がるのを禁じ得なかった。

それは、マリをそうした被虐趣味の女に仕立あげた男が、必ずどこかに存在するとしか思えないことだった。さもなくば若いマリの肉体が、あれほどまで激しく、敏感には反応する筈がない。例え、マリが生来、そうした欲望を秘めた女であったにしろ、それは必ず誰か他の者の手によって引き出されなければはつきりと形あるものにはならない種類の快樂なのだ。

ハ一体、どんな男だろう……V

竜次は考えてみた。

どんな男がマリの秘密をさぐり出し、それを白日の下にさらけ出したのか。どんな風に

マリを責め、どんな風にあえがせるのか？自分よりも、もっと酷い、もっと巧緻な、やり方でマリを歓喜にむせばせるのだろうか。

竜次の心に痛みが走った。

それは嫉妬にも似た感情である。そして、竜次は、未だ見も知らぬ、果して存在するか、しないのかさえ、はっきりとはしない男の存在に、おびえを感じると同時に、その男にマリを奪われたくないと思った。

しかし、竜次にしてみれば、そうした感情こそ、消し去らねばならぬ種のものだった。この世の一切は行く川の流れのごとく、流れ去るもので、何人といえども、この巨大な流れを、せきとめることは出来ない。ただ、多くの人は、その流れに身をまかせることの恐怖から、せき留め得るという幻覚を抱き続けているに過ぎない。

愛とて同じ。愛もまた、水のように流れ去るものだ。しかし、人は愛が消え去ることの恐怖から、愛にしがみつく。だが、その時すでに、人は愛に見捨てられたのと同じなのだ。これが意次が己に課した戒律だった。

竜次はマリへの感情を、たち切るように立ちあがると、手を腰にして目をつぶった。

その瞬間、竜次の心に、再び、屈折した、

どす黒い欲望が湧きあがり、彼の心を噛み始めた。

愛するが故に憎む感情に似たものだ。いや愛そのものを憎む故なのかも知れない。

荒涼とした彼の心に、一つの風景が広がった。

それは、数日前、店の客である写真屋のオヤジが彼に見せたポルノ雑誌の一シーンであった。勿論、それは緊縛の写真ではない。極く、普通のポルノである。ただ、竜次の心を動かしたのは、女の前と後を同時に責めるものであったことだ。

二人の全裸の女が、一人の女をいじめ抜いている。いじめられる受身の女は、ひじかけ椅子に、屈曲した形で身体を押しつけられ、両肢を左右に広げられ、足元にひざまずいた二人の女達によって、ゴム製らしき責具で責められている。

外国女に特有の、ぶよぶよと肥った太腿と二つの責具をうめ込まれた、あからさまな谷間の光景が竜次の注意をひいたのだ。

それを目にした時、彼は、いまさらながら外国における性の享楽に驚異を感じた。そこには、最早、性の享楽を、はばむ何物も存在しない。ただ、ひたすら、快楽を求めて突進

する数匹の雌豚が、いるだけだ。

だが、それを雌豚と呼ぶならば、自分は何だろう。残念ながら、それに対する答は、彼には、なかった。

竜次は押入を開けると、中から数条の縄をあらたに取り出し、マリに近づいた。

その、おびただしい量の縄をすべて、マリの身体にからめ、その緊縛の中で、彼女を愚弄したい気持が湧きあがったのだ。そして、その責めの中で、マリの口から、彼女の肉体の秘密を聞き出すことも、竜次の目的であった。

「マリ、起きろよ！」

竜次は言った。

「まだ、許してもらえないの」

未だ快楽の余尽が消えやらぬ風に裸身を、もの憂げに、よじらせマリは、つぶやく。

「夜明けまでには、相当時間があるんでね。」

それに、お前の身体だって、まだまだ、もの欲しげだぜ」竜次は言った。

「マスターの、いじ悪る。マリを、どれだけ泣かせたら、許してくれるの」

「さあな、それは、お前次第さ。お前を本当に満足させるまでは、退くにも退けない気持なんでね」

「私は、もう充分よ」

「そうかい、それは調べてみれば直ぐに判るさ」

竜次はマリの手を取ると、ベッドから降りし、部屋の中央に立たせた。マリの身体は、ぐったりとしていて、手を放すと、そのまま崩れそうに柔らかかだ。

竜次は、そんなマリを背後から抱きかかえ前にまわした手で、マリの左右の乳房を、ゆっくりと、試めすように、もみしだき、首筋から肩にかけて、唇をはわせた。

「ああ……」

マリが幽かに、うめき、首をよじると、竜次の唇を求めて、口を開いた。

竜次も、それに応えて、マリの口中深く、固く尖った舌を差し込む。

「もっともっと男が欲しいって、お前の身体は言ってるぜ」

竜次は右手を下腹部の方へ移動させながら耳元で、つぶやいた。

「それとも、今夜はこれで、よしにするか」マリは、それには答えず、竜次の腕の中で身をくねらせ、竜次の腕をしめつけた。

「どうするんだ！」

竜次はマリの耳を軽く噛んで、マリの乳房

と腹部を揉み続けながら、問いつめた。

「ああ……」

「はっきり、しろよ！」

「好きにして頂戴。マスターの言うことだったら、マリはどんなにでもなるわ」

「そいつは嬉しいね。じゃ、ひとつ、腕を後ろにまわしてもらおうか……」

マリは素直に両手を後ろに組むと、竜次の前に差し出した。

竜次は、長い細引を手首に巻きつけ、それを、マリの首に回し、上の方へ、引きしぼった。

「あっ、痛いわ」

背後に曲ったマリの腕が、くの字に、たわみ、指先が虚空をつかむように開いていく。竜次は、そこで、ひとまず縄を固定すると、再び、マリの乳房に手をやった。両手の自由を奪われた女の身体を思う存分、愛撫するのは、両手が自由の時とは格段の相異がある。男の手に加える刺激に身もだえる、女の姿の美しさが違うのだ。

マリのあえぎが一段と激しくなり、身をもむたびに、背中の縄が張りつめて、その痛みから逃れるようにマリの胸が、そり返った。「マスターって、ひどい人ね」

「何故だ？」

「女の弱みを、とことん、ついてくるんですもの。こんな風にされたら、女って本当に駄目になっちゃうのよ」

「そうじゃないさ。お前は俺でなくたって、こんな風にされると燃えあがるんだ。今まで何人位の男に、いじめてもらったんだい」「そんなこと言っちゃ、いや。マスターが初めてよ」

「俺は信じないぜ。お前を、こうした女に仕立てあげた男が、必ず、どこかにいるんだ。そいつは、どこの、どいつだい。俺は、そいつの代用品なのか」

「そんな男は、いないわ」

「まあ、いいさ。それを聞き出すのは、今後のお楽しみさ」

竜次は、そう言って、マリの手首から垂れ残りの縄をつかむと、それを、じっくりと乳房のあたりに、くい込ませ、ぎりぎりと、しぼりあげた。

一重、二重、三重と、幾本もの細い縄が、マリの乳房をはさみつけるように打ち込まれると、二つの隆起が極端なまでに、ゆがみ、今にも、はち切れそうに突出する。豊満な白い乳房に静脈が浮きで、先端の乳首が紅みを

加え、固くなった。

「マスター。もう、それ位で許して。おっぱいが、とても痛いわ」

痛みに堪えかねて、マリが片膝をつき、縄を打たれた女囚のように許しを乞うた。未だ縄目の恥かしめを受けていない、つるりとむかれた下半身のたよりなさが、身の置き所がない風情で、ゆれている。

竜次は、そのままマリを部屋の片隅の柱のところへ引き立てると、彼女を坐らせ、その柱に、しっかりと固定した。

横坐りになり、太腿をぴたり合わせたマリが、不安げな視線で竜次を追う。竜次は、そのマリの前へ、さまざまな責具を一つ一つならべ始めた。

注射針、ローソク、バイブレーター、乳液クリップ、太い筆、長いビニールパイプ、大人の玩具、さまざまな小道具が膝元に置かれる。

竜次はまだ、それらの小道具のいずれを使うかは決めていなかったが、それらを、一つ一つ、集めならべるうちに、ふつふつと湧きあがる嗜虐的な感興を心の中で追っていた。

マリの胸が大きく波打ち始める。彼女の肉体に早くも、これから加えられる責めへの予

感が広がっているのだ。

後手に緊縛され、乳房をきつくしぼりあげられたマリは、白い豊かに脂肪ののった大腿を、にじらせ、顔をうつむけにし、自然に口をついて出るらしき深い吐息を、はきながら肩を大きく、あえがせた。

「どうしたんだ、マリ。まだ何もしちゃいないぜ」

竜次は、マリの傍に腰を降ろしながら、マリの膝のあたりを軽く撫でて言った。

「だって、どうされるのかと思って……」

☆SM画稿募集!☆

◎SM雑誌の草分けとして、二十数年の歴史を誇る本誌にふさわしいSM画を募ります。画材はどのような傾向のもので結構ですが、女体緊縛画、男性に対する責絵などを主体として、フェチズムに関連したものなどを望みます。

◎必ず自作—もので白い用紙に黒色の毛筆、ペンを御利用願います。大きさは自由ですが、ハガキ大から雑誌大位までが適当です。掲載作品につきましては、作品に相当した画料をお支払いします。アイデアだけの時は鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるようお願いいたします。

△奇譚クラブ編集部△

「想像は、つくだろう」

「恐いわ。お願いだから、あまりひどくしないで……」

「これは何だか知ってるだろ」

竜次は、こけしを手にとると、マリの脇腹を軽く、こすった。

「こけし」

「これは？」

「乳液」

「だったら、何も、恐がることはないじゃないか。どちらも女の子なら誰でも欲しがるもんだぜ」

竜次は乳液のフタを指で回しながら、言った。

「それとも、何か恐がる理由でもあるというのかい」

「そんなこと、知らないわ……」

マリは顔をそむけると、すねたように、身をくねらした。それにつれ、二つの桃色の乳首が挑発的に、そそり立つ。

「そうかい。じゃ、これから、たっぷり教えてやるよ」

竜次は乳首をつまみ、軽く、ひねった。

「だが、その前に、もう少し、準備があるんだ。その太い足を何とかしなけりゃ、あばれ

られたら仕末に終えないからな」

竜次は、あらたに用意した縄を手にとるとマリの足首に結びつけ、それを太腿のつけ根のあたりに固定した。それで、マリの両足はいざりになったと同様、まったく、偉力を失った訳である。

マリの肉体は、すでに物体と変らない。

竜次は膝を折りまげたために、たくましく盛りあがった太腿の量感に、くい込む縄目の厳しさに、言い知れぬ快感を覚えた。

それは二本の白い肉の棒だ。

竜次はその二本の棒に手をかけ、思いきり押し開きたい激情にかられたが、先への楽しみに延ばし、乳液の容器を、とりあげた。

「マリ。両方の股をぴったりと閉じておけ。畳を汚したら後が、ひどいぞ」

と言いながら竜次は、Yの字の線を描く窪みのあたりに一滴、二滴と液体を注いでいった。

マリの太腿の中心に、白い小さな湖水が出来あがる。

だが、それはYの焦点から、たちまちにして流れ去る湖水であるのを、当の竜次が一番よく、承知しているものだった。

——(おわり)——



—△受難を待つおんな▽—

M 子 再 来

泉 一 郎

M子は、あたかも睡眠薬を飲まされたかのように眠っていた。呼んでも、眼もあかなければ答えもしない。本当に熟睡の状態であった。こんなことがあるだろうか。まるで催眠術である。

実は、眠ったお芝居をするといっていたのに、M子はモナ・リザを出す前に「R」という睡眠薬を飲んだのだった。これは同名の注射薬は静脈用の麻酔剤として使われるもので服用後三十分位で熟睡に入り、二時間程で覚醒するのである。

このことについて、後でM子は、こういつていた。

「眠ったふりだけでは、筋書通りに犯され刺

毛される時に、じっとしておれるか心配だったの。そしてもう一つ、睡眠薬を本当に飲んだとわかったら、先生、筋書以外に何かなさるかも知れないのが、心配だったのよ。ウフフ」

○

M子の期待とは逆に、私はM子がRを飲んだと直ぐにわかった。「M子受難」のT課長がM子に飲ませたのも、実はこのRという想定であったのだ。しかし、私はどうしても眠ったままのM子を、犯す気にはなれなかった。たとえそれがM子の願いであっても。もちろん私もM子を心憎からず思っているし、据膳食わぬは男の何とかとは云うけれども、

あまりに準備された据膳は食う時の味はよくても、後味がよろしくないのである。

いずれにしても、「M子受難」の再現をするのがM子の目的であるならば、筋書きの最初の部分の役者として、私はT課長になりきらねばならない。そして同時に、カメラマン兼ライターの泉一郎でもあらねばならぬ。これは大変なことになったわいと思いつながらも今日の、収穫を予想して張り切ったのであった。

○

先ずM子の衣服を脱がせて欲望を遂げたT課長は、洗面所にあった剃刃で剃毛する。かねて用意した細引きでM子を緊縛し、無抵抗

な身動き一つしないM子を後に部屋を立ち去る。これが大よその筋書きである。この後は目覚めたM子の演技にまかせればよい。カメラマンとしては、できるだけ多くの場面を撮影しなければならない。

さあ、いよいよ幕が開く。いやもう開いているといってもよい。M子は本当に眠っているのだ。私はM子のブラウスのボタンに手をかけ、まるで大切な品物の包紙を解くようにして脱がせた。次に私の手はスカートの横のホックとチャックをはずす。この時M子は少し腰を浮かせて、脱がせやすくするような素振りを見せた。これはR剤が完全な熟睡には入らないからである。いいかえればお酒に酔っぱらっていても10%位の意識があるというのに似ている。スリッパの肩ひもを左右におとすと、少し垂れ気味ではあるが豊かな乳房が現われた。最近流行と聞く、ブラジャーとの兼用のスリッパを下ろしてゆく。真白な太腿、なだらかな腰への線。やや年増とはいえずばらしい曲線が現れた。

○

余談のようだが、私は女性の体を見るのに全裸というのは、あまり好まない。何故ならば、繁みが美しい曲線をこわすからである。

女性の曲線の中で最も美しい部分は、下腹部のカーブである。この曲線を描き出す皮下脂肪というのは、成熟女性に特徴的なものであって、自然物のなかで最も美しいものの一つと思う。それが隠されてしまうのは実に惜しい。そのために、ぴったりと皮膚に張りつくようなパンティをつけた女性は、その美しさを観察するのに、ふさわしい。それも花模様等のものは、だめである。美しい曲線を表現するのに花は、いらない。最近、ポルノ解禁をせよといって、女性のヌード場面に一部をばかしたりするのは、けしからん。と唱える運動があるが、緊縛や、その他のSMフォトのように現実を強く訴える作品はよいとして芸術的なヌード写真では、そのままでは美的でないと思う。むしろ、剃毛でもして表現した方が、女体の美しさを表現するには適していると思う。以上、くだらない私見として少々。

○

さて、スリッパを剥ぎ取られたM子は、淡いベージュ色のパンティをつけていた。これは私の最も好む色である。M子は、それを知っていたのであろうか。私はM子を横たえたまま、その豊かな乳房を両手ではさむように

して、口づけしてみた。T課長が、そうしたであろうように。すると、M子もピクと動いて、「うー」とおしつぶされたような声を出した。

「M子、わかるの？」

と声をかけると、M子は何か口の中で、もぞもぞと返事をして口もとに少し、ほほ笑みを浮かべたが、やがて、のど仏が、ごくんと鳴ったと思うと、再び眠りに入ってしまったようである。

しばらくM子の肢体を眺めた後、私はM子を抱き上げた。重い。五十六キロは、あるわといってはいたが、それにしても、眠っている人間は本当に重い。やっとベッドのところにたどりつき、ほうり出すように、M子を置いた。それでもM子は寝入っている（或は、これからの段階に期待？　して眠りかけているふりをするのに精一杯なのかも知れない）。ベッド中央に真上を向かせると、静かにパンティに手をかけ、脱がせてしまった。案の定私の一番、美しいと思う、カーブは隠れている。

ここで私は一寸、順序を変更することにした。といっても、「M子受難」のT課長が、どのような順序でM子を犯したかは記述して

ない筈である。私は私の好みに従うことにした。まず洗面所にある剃刀と浴場の桶に、お湯、そして石鹸を持ってくる。こういう場合安全カミソリは使いにくいものである。しかし、それだけに、時間がかかるのは、かえって楽しみでもある。

M子は再び醒めかけたのか、時々、右に左に体をよじった。美しい曲線が現われて私の目を奪った。湯で濡らしたタオルで綺麗に拭き上げ、洗面所にあったローションを塗ると「あーん、うう……」

と弱い呻き声を出すM子であった。

さて次の手順である。私はM子のアタッシェケースから縄を取り出した。木綿縄を撚り合せた径七ミリ位のものである。先ずM子の両手を横上に持ってゆき、手首に巻きつけ、ベッドの下を通し、次に両足を思いきり開いて、足首にまわしたのもベッドの下を、くぐらせる。こうすると、軀幹は自由だが、大の字に開いた手足はベッドに固定されて動けなくなる。あわれM子は、その白い体を惜しげもなく、さらし大の字に縛りつけられた。

いよいよ第三の段階である。ここでT課長はM子を犯したわけであるが、今の私には、そのような気分になれないことは前にのべ

た。再び、M子のケースを抜き、先刻M子がこれを、といって取り出した包を開いた。やはり、私の思ったとおり、バイブレーターがあった。そしてもう一つは、10CCの注射器に白い液体（実は牛乳であった）を詰め、先端にはゴムキャップをはめたものがあった。

一しよにあった紙片には、
（これをお使いになるとき、M子は先生を恨みますわ）

と記されていた。M子は私に犯されたかったのか、それとも犯されることによって、この後の切腹の場面への内面的盛り上りを高めようというのだろうか。

○

私はパイプを取り上げた。スイッチをいれてみると、軽いブーンという音がして振動が手に伝わってくる。一応スイッチを切って、静かにM子に近よる。

M子は手足を縛られているので大きくは動けないが、体は、みるみる紅潮してきた。不自由な全身のもだえ、顔面のひきつり、荒い息。

私がミルク入り注射器を取り上げた途端、M子は遂に悶絶してしまったが、私はそれにかまわず、手早く小道具を仕末し、カメラを

構えた。これからはM子が主役である。これまででは、M子の切腹のプロローグにすぎない。

私は物音を立てないように、ベッドルームの隅に、カメラを構えて立った。M子はまだ身動きもしない。五分経過……十分経過。私は少々心配になってM子の顔に近づいた。その気配を感じたのか、

「うーん」

と呻いて目をあけるような素振りだった。私は、あわてて元の位置に逃げ帰った。さはいよいよ後篇の幕は切って落されるのだ。これから後は私は、ただ黙って写真を撮り続けるのだ。この舞台では私は役者ではなく、観察者になればよいのだ。

○

M子は頭を、ゆっくりと起した。はっと驚いたように起き上ろうとするが、手足を縛られていては自由にならない。しきりに手足をくねらせているうちに、右手の縄が、はずれたようである。左手、そして両足の縄を、はずすと、M子は放心したように上体を起したまま二、三回、左右を見ていたが、やがて剃毛に気づき、あわてて坐りなおした。しばらくは、驚きと悲しみの表情。やがて、静かに

立上り、浴室へと歩むが、その間、全く私の存在やカメラの音を意識していないようなのである。

私はカメラを持ったまま浴室に近より、声もかけないで扉をあけた。M子はシャワーの前に両足を充分、拡げて腰をおろし熱い湯を浴びていた。シャッターを押そうとしたが立ちこめる湯気の濛々たる有様に、恐らくは写らないだろうし、カメラのためによろしくないといい、あわてて寝室にカメラを戻し、手ぶらのまま、じっとM子を眺め続けた。

私に見られているのも知らぬ氣にM子は熱湯を浴びつづける。やがて真赤に上氣した全身から水滴を垂らして浴室から出ると、狂氣のようにバスタオルで拭き始めた。特に剃毛跡は念入りに、まるで宝石についた小さなゴミを、ふきとるように。

しばらくしてM子は、浴衣も着けず寝室に入ってきた。静かな歩みではあるが、その内に何か斗志のようなものを、秘めた態度である。ケースから一振りの短刀、一帖の懷紙。そして、奉書に書いた自刃の書を取り出し、ベッドに上り、ぴたりと正座した。先刻まで縛られて悶えていたM子とは、まるで別人のようである。

やがて懷紙を右横に、短刀を膝の前、約五寸の処に横たえ、それと膝の間に奉書を置いた。一呼吸の後、奉書を取り上げ、おし頂いてから静かに広げた。そして、小声ながら、はつきりと、一言々々を噛みしめるように読み始めるのだった。

「自刃の書。一、自害には幾多の法あれど、武士たるものにありては、割腹をもって最も面目あるものとする。」

——略——

一、妊みたる婦にありては……横一文字に切りたる上、臍より縦一文字に、ことさらに深く切り下げるをよしとすべし……。

あだし男に操奪われしたため自害せんとするときは、腹裂きたるのち、汚れし肌身を剔るをよしとす。そのためには、はじめより腰のものをまとわずに座に着くべし。腹裂きたる刀を持ちかえ、膝にて立ち、刃先を当て、そのまま坐すべし。刃先の向きをかえつつ、兩三度これを繰返せば、可なり」

○

ここに誌した自刃の書の部分は、M子が特に、はつきりと、そしてゆっくりと読み上げた部分である。ことに、最後の辺りを読み上げる時、M子は顔面だけでなく、全身を紅潮させるかのようにであった。色白のM子の紅潮

した体は、若し、これから、くり広げられる切腹が真刀を用いる本物ならば、華々しく血潮を噴き上げ、美しくもまた、凄絶なものになるだろうと予想され、カメラを構える私も身の内にゾクゾクするものを覚えた。

奉書を元に戻したM子は両手を膝に置き、正座のまま冥想すること、しばし。やがて、両掌を下腹にあて、これから切り割こうとする肌を、いつくしむように、なでた。ついで予行演習のつもりであろうか、いわゆるシャドウボクシングに比較すればシャドウハラキリともいうべく、右手は短刀を持った構えで左脇腹に当て、右へ引きまわす。正中で一呼吸。更に右へ。次に、臍の、やや上より真下へ。そして両膝を開いて立ち上り、膝の間に両手を置いたまま、ぐっと腰をおとす。次に両手を揃えて左乳房へ一刺し、と全く、これから行なう模擬切腹の予行演習を一動作ずつ確かめるように行なった。

○

再び、両手を膝におき、一呼吸、このあたりの気合と間合は実に堂々たる名優である。あるいはM子は、本当に受難のM子になり切っているのかも知れない。つと、右手を伸ばし短刀を取り上げ、左手を添え、眼前に一度

ささげ、うやうやしく一礼。膝上にきめてから意を決したように、さっと抜き放った。そのさまは、茶道の名人の点前の所作に似たものがあつた。プラスチック製の玩具刀であるために、刀身がキラリと輝くようなりアルさはないが、M子は真剣そのものである。鞘を膝前に置くと懷紙を取り、刀身に巻くこと二巻き三巻き。切先、約三寸を残している。左手で、左脇腹というよりは臍下約一寸。左へ約四寸のところの皮膚を、ぐっと伸ばしている。切尖を一度、その部分に静かに当てたと、やや顔を上に向け、

「あなた、お先に」

と、はっきり一言。切尖を三寸程、離れたかと思うと、勢いをつけて、一思いに、ぐっと突き立てた。勿論、玩具刀であるから突き立つ筈はないが、思わずハッとさせられた、すさまじさである。

「うむーっ」

そして左手を柄頭に添えるや、両手に満身の力を込めて、再び押しつけたかと思うと、

「うううーっ、うーっ」

ゆっくりと右の方へ引き回す。たとえ玩具とはいえ、これだけ力を入れては、その苦痛は、並のものではない筈だ。切尖の通過した

あとに、赤い痕ができてゆくのが見える。正中線で、もう一度、深く切り込む。

「あうっ。うっ、うっ、うーんっ。うっ」

そして更に右へ。右脇腹で、もう一度、強く、ぐっと押すと、ぱっと勢いよく、刀を離れた。刀身を見つめながら、肩で大きく息をしている。

「あーっ、切った。切ったわ。苦しい。でもまだよ。まだだわ。もっと深く……お腹の中を、深く……」

両の手に短刀を持ちかえ、再び勢いよく臍の上、約一寸をめがけて、思いきり、ぶつける。

「あーっ。うーっ。あー」

ぐぐぐっと下へ押し下げる。さすがに痛いのか、苦しみまわる態であるが、なおも刀をぐいぐいと押しつけている。

「いたいーっ。いたたたーいっ、もう少しーもうーもうーだめーもうー少しーがまんーあなたー」

M子の下腹には見事に十字の、みみずばれができ上って、左手をベッドにつき、右手に短刀を持ったまま呼吸を整えている。

「いよいよ、最期よ——今から——汚れを、——剔り捨てます——あなた——許して——」

下さい」

M子は両膝を、じりじりと、開いていく。一尺も開いたであろうか。すっと膝立ちになると、両手に短刀を持ち、切先を立てた。右手を切尖の方へ、すべらせ、尖端の位置を確かめているようだった。

「あなた！ お許し下さい！ うーむっ」
さすがに、こればかりは、ゆっくりとした動作であつた。

ありとあらゆる叫び声が、押し殺すようにして発せられる。

これと似たような行為は、オナニーとしてしばしば女性の間で行われるようであるが、今、M子が悶えているのは、そんな生優しいものではない。M子のは戦いである。激しい痛みと戦い、汚れを洗い捨てようというのである。その呻きは戦士の叫びである。武士が真剣勝負をする時の気合の入った掛声と同じである。

M子の戦いは、まだ続いている。ある時は上体を、のけぞらせ、あるいは前にかがめこみ、ある時は片手を床について、やっこの思いで体を支えながら……。そして、ふと静寂の瞬間が訪れたかにみえた途端、

「うむっ」

とばかりに、短刀が宙を流れたかと思うとへなへなというような感じで、坐り込んでしまった。あまりの激しさに、もう限度だと思つて、私が声を掛けようと一歩、踏み出すときつと顔を上げて、目で制した。

(最後まで独りでやりとげますから……)

という目つきであった。

しばらく静寂が続いた。短刀を右手に握つて膝におき、じつと正座しているM子の息声は次第に静かになっていった。そして、やがて身を正すと、短刀を両手で、しっかりと握り、その切尖を、ふくよかな、左乳房の下にあてた。

「あなた。お先にまいりますM子を、お許し下さい」

ぐつと両肘を張るとみるや、「えいっ」とばかり押しつけた。私は思わず本当に刺さつたのではないかと、ぎくつとした。そのまま二度、三度と切りこむようにしたと思うと、前へかがみこみ、左手を床につき、一瞬、そのまま右横へ倒れこんだ。私が傍に駆けよると、M子は薄目をあけながら、

「うれしい——」

といって全身の力を抜き、そのまま息絶えた風情であった。

○

この真に迫ったM子受難の再来を見て、私も、ついつい芝居気をおこしてしまった。M子の夫の役を演じてみようというのである。心配した夫が、あちこちと探しまわった揚句やつと居場所を、つきとめたという想定で、血の溜った中に、胸に短刀を突き立て瀕死のM子を抱き起こす。

M子は、虫の息で、

「あ、あなた、来て下さったの。もう、だめ……だわ。早く——これ——これを心臓の奥深く——刺して。あなたの手で——早く——一思いに——」

「M子、しっかりするんだ」

「私は、もう汚れた体なの、許して——」

「M子、君が死ねば、僕も生きていない」

「お願い。息のあるうちに——お願い——最後に——私を潔めて——」

私は、その迫真の演技につられ、とうとう芝居の筋書に乗ってしまった。

「M子、苦しい？ もう少しの我慢だよ」

○

何十分が経つたろうか。明るい電灯の下で見ると、M子の下腹部には、はっきりと十文字の、みみずばれができ、特に強く突いた左

右の脇腹と中央に、うっすらと皮下出血さえみとめられた。私が心配になって訊ねると、

「ええ、大丈夫よ。実はあのプラスチックの短刀はね、一寸、細工がしてあるの。先の方だけは尖ったキャップにしてあって、それはずすと先は丸くなるのよ。それでなければあんなこと危くて、とてもできないわ」

「なんだ、そうか。いくらプラスチックでもずい分、大胆なことをするなと、びっくりしたよ。それにしても、傷ができてるんじゃないの。一寸、調べてあげよう」

「いやっ、もう今となつては恥ずかしくて。お芝居の最中だったら喜んで調べて頂いたんだけど」

「本当に今日は、すばらしかったよ。最後に胸を刺して倒れた時、うれしいといったね。あれは筋書にあったの？」

「あれは、そうじゃないの。本当にうれしかったの」

「じゃあ、それから後のことは？」

M子は顔を赤らめながら、

「いやっ！ わかってらっしゃるくせに——」

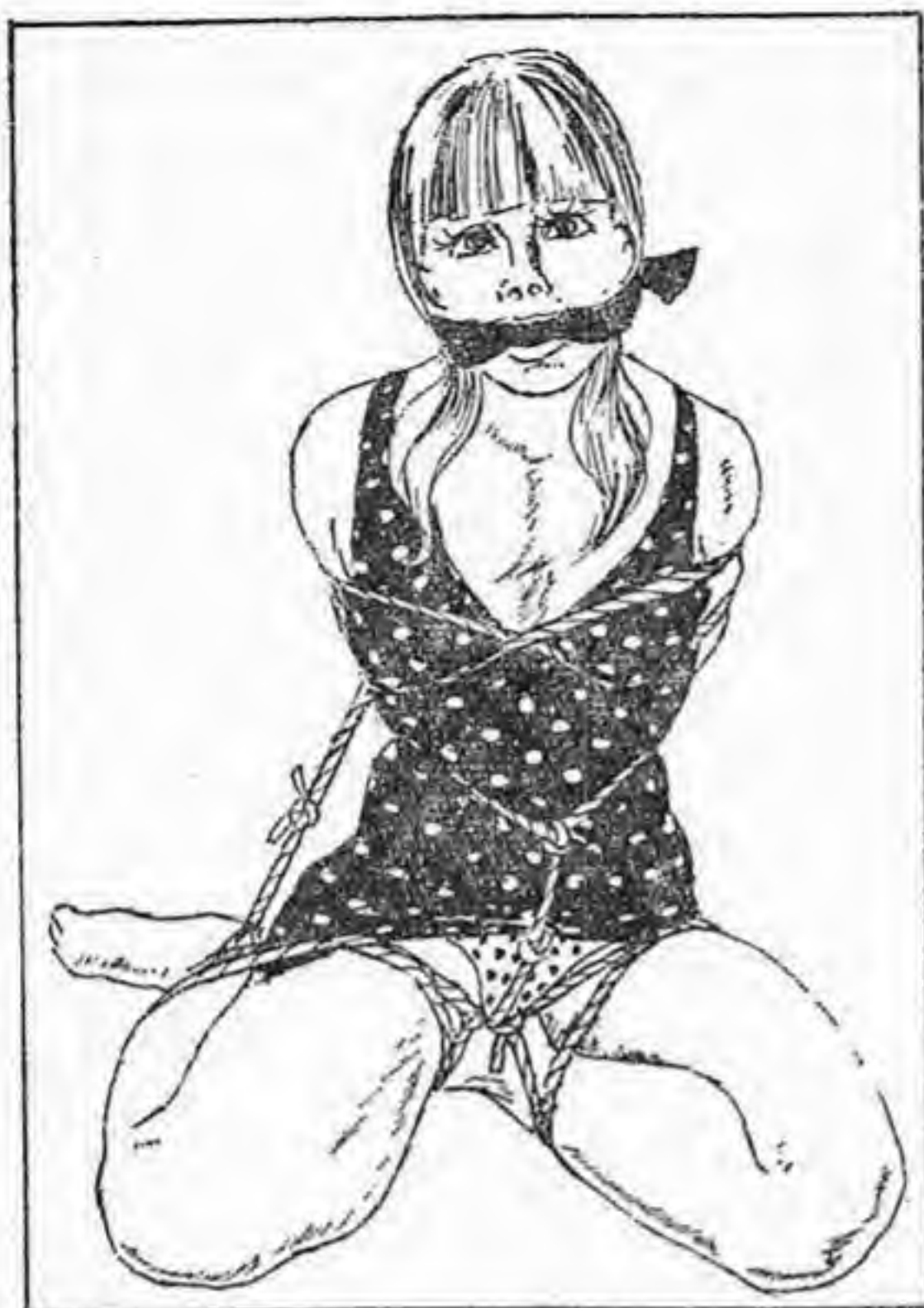
M子は私の胸に、もたれかかってくる。

——(完)——

△浩が行く③

産業スパイは美人秘書

カット・志羽利也



久留木

栄

おう」と気軽に声をかける
ところだったが、気がふさ
ぎがちで、考えごとをして
いたので、ついうっかり見
落し、五、六歩、行き過ぎ
てハッと思い当たり、立ち
どまった。

「山根君じゃないか」

池野は、あわてた声で呼
びかけた。

「おや、お気づきで」

「久しぶりだなあ、どうしている」

「それは、こちらのいうせりふで」

「お茶でも、のもうか」

山根といわれた男は、ゆっくりと立ち止ま

り、だまって突っ立ったまま、余り表情も変
えず、しばらく、考えていたようにみえたが
おとなしくついて来た。

チャコールグレーのアメリカ風のスーツを
粹に着こなした池野に比べると山根は一回り
ほど、ふけてみえた。しかし二人は中学生時
代の同級生であった。山根が陰気であるのに
池野は陽気。山根が貧しい母子家庭の育ちで
あるのに池野は大橋産業会長の跡とり息子だ
った。それなのに仲が良かったのは学業では
山根が常に一位、池野が二位だったからであ
る。高校も出ず、社会に出た山根にたいし、
池野は一流大学を出、アメリカに留学。親の
あとをついで今や大橋産業の企画と営業を担
当する重役として、敏腕をふるっていた。二

大橋産業専務、池野平三郎は社を出たとこ
ろで旧友に、ぱったりあった。日頃ならよ

(一)

人は、ときたま、のみ屋で顔を、あわせた。気軽で身分など気にしない池野の性格に、山根がひかれたからである。こんどは約半年ぶりの再会であった。池野の浮かぬ顔が、山根には気になった。それでも相手から声をかけられなければ、行き過ぎたかもしれない。親しい仲でも山根には、そんな冷たさがあった。

池野が案内したのはブルー・シャトーという喫茶店で、ブレンドコーヒーをパーコレーターでいれてくれるのが巧みだった。

「きょうは、やに無口だな、何か心配事でもあるのか」

「ない。ないといえはウソになるかな。いつでも、しかたないよ」

「じゃ聞くまい。どうせ、酒か女か仕事か、その三つのうちの一つだろう。気楽になればなおる、ぜいたく病だろう」

「ま、そんなものかな」

池野は逆らわなかった。

池野のゆううつ病は、さいきん、昂じていた。とにかく顔色が、さえない。会社の医師が「肝臓疾患ではないでしょうか」と心配するぐらいだが、検査をしても、たいして悪くはない。では何が原因と考えれば、やはり自

分の担当している営業の実績が、のび悩みというところらしかった。しかし業界が後退気味である中で現状を維持できているというところは大きな成果であったが、池野はそう思いたくなかった。そんな矢先、企画部で検討した販売プランを相手産業の健道電気販売に盗まれるということもあって、よけい減入っていた。なんとしてでも、今までのプランにもまさる販売計画、宣伝計画を立てて相手の鼻を、あかさねばならぬと、あせっていた。

そんなある日、日頃、仲の悪い常務の村野力が「お前の秘書が、くさいぜ」と忠告した。秘書に健道電気の手がのびて

いるということは、考えられないことではない。しかし秘書の畑野恵井子は、自分が調べ自分が採用した女だけに、そう思いたくはなかった。いったい、どうしたらよいのか、池野は思いあまり、この地方のボスというより父の代からのよきアドバイザーで、幼い頃から主治医、井上光博士に相談しようと会社を出たばかりだったのだ。

だから池野は、それを山根に相談することではできなかった。だが、山根に逢ったことで自分が、しょげ、あわてていたことに気付き落ちつきをとりもどすことができた。

「君にあったのが、いい幸いだ。こんど、うちで新鋭機種を出そうという話があるんだ。イメージ・チェンジをはかるのには、どうしたらいいと思う」

「電器業界は、このところ、不景気というではないか。新機種やイメージ・チェンジなどより、まず需要の開拓じゃないのかね」

「それは、わかる。だが、それも、もう一巡している。だからイメージ・チェンジでもしなければ需要は、ふえない」

「そんなものかね。そういえば、このごろは大人よりも高、大生、若いサラリーマン層の利用者が多いのだった」

「そうだ。若者にアピールしたいと思う」

「なるほど、わからんでもないな。しかし、みかけだましで中身変わらずじゃ、この戦いは、むづかしい」

「でも、やらねばならない」

「なるほど」

そこへ、コーヒーが来た。二人は黙ってコーヒーを、すすって、わかれた。

山根は、それから、まっすぐバー「蟻」に帰った。マダム有馬広子の用心棒になったことから、いつしか、この二階に住みつくことになり、さいきんは、その妹鶴子をいじめる

ことに興味を持っていた鶴子は山根からいじめられるうちに山根に好意をもったらしい。

ベッドに寝ころがっている山根に、

「きょうは何もしないの。寂しいワ」

と謎をかけてきた。

「考えごとをしているんだ」

「じゃ仕方ないワ。今夜また、いじめて」

「ああ、その時になったらな」

山根は、さきほど逢った池野のことを考えていた。明らかに池野は悩んでいた。酒、女で悩むような男ではない。とすると、やはり仕事か。そう思い、新しい業界誌を、よみかえして見た。すると激烈な電器産業の販売合戦が手にとるように描かれ、その最前線に立っている池野の苦しみが、わかるようでもあった。

「やっぱり健道電気との販売合戦だな」

山根が、そう小声で、ひとりごとをいったとき、久しぶりに広子が笑顔をみせた。

「博士から電話ですよ」

「OK！」

山根が受話器をとると、博士のいつもながらの張りのある声が聞こえてきた。

「ワシのノイローゼ患者を今夜、そこに連れて行くから、みてやってくれ。父の代からの

ワシの患者で、こんどの病氣はオレの手におえない。君の分野だな」

「わかりました」

「断わっておくが、女遊びではない。仕事の相談だな。もっとも女が関係してないことはないが、患者は元大橋産業社長の一人息子、平三郎だ」

山根浩はアッと息をのんだ。その気配をさとられぬよう、受話器をそっと置いたが、胸は高鳴っていた。やはり、そうか。

浩は、そこを離れると広子に「夕方まで鶴ちゃんを借りるよ」といった。

「また、いじめるの」

「うん、あの娘も好きだから、いいだろう」

と浩は、やっと日頃の浩らしいペースをとりもどしていた。

ベッドの上でパンティ一枚にむいた鶴子を雁字がらめに縛りあげるまで何分かつたろうか。縛りあげ、サルグツワをかませると、安心したように鶴子をだき、毛布をかむって浩は、すやすやと、ねた。鶴子は、浩の胸にもたれ、それが東の間の幸せであっても、むさぼりたいと息を、ひめていた。

(二)

夜は浩の時間であった。昼間のとぼけた顔は、かげをひそめ、はつらつとした顔で、目が冴えていた。むっくり起きあがったとき浩は、鶴子のことも姉の広子のことも皆、忘れていた。ただひたすら親友を迎え、そのトラブルに対処しようと願う、ひたむきな姿があった。

「やっぱり魅力あるワ、私の浩ちゃん」

やっと縄から解放された鶴子は、自分の体をいとおしむ前に、精かな野獣のニオイをふりまく男に、圧倒されていた。あくまでもニヒルに、頭はクールで、計りがたい男。そのくせ変態で、理性的な不可解な男、浩！

白っぽいイギリス風のスーツに身を固め、こざっぱりしたナリで階段を降りようという浩に、鶴子は淡いピンクの大きな水玉をあしらったワンピースを派手に着こなし、影のように、よりそっていた。パーに行くと、まだ博士らは、きていなかった。カウンターのすみの浩の指定席に陣どると、すっかり浩は貴公子のような風格を身につけていた。

「やっぱり夜の男ね」

とスコッチのストレートをつきながらマダ

ムの広子が笑いかけた。浩はニヤツと笑っただけで、それを口に運ぶ。二階では時たま、冗談をとばすことはあっても、バーでは、ほとんど、しゃべらぬ男。浩は、そんな人間だった。

「やあ、待たせたな！」

といって博士が入ってきたのは、それから十分ぐらい、たってからである。浩は黒めがねをしたまま、二人を迎えた。池野は浩の余りの変身に気づかなかった。

「この男だ。何と呼べばいいかな、マダム」

「黒木さんですか、白木さんですか」

「何でもいいよ。とにかく、君の仕事に絶対欠かせない人間だよ、平三郎」

「ハイ、初めまして……」

と池野は浩の方を向きなおった。その時、浩は、にやっと笑った。そして、ゆっくりと黒めがねを、とった。

「オレだよ、平さん」

「あっ！ 山根！」

「おや、君たちは知り合いなのか」

「中学の同級生です」

「そりゃいい。話は速い。頼んだよ」

「わかりました、博士」

「うん。よかったな——平三郎。この男の頭に

は不可能の文字はないんだ。そうか幼なじみか」

「ライバルでした。どうしても私が勝てなかった男です」

「そうか、天下の平三郎にも、そんなライバルがいたのか。これは奇遇だな。広子、酒だ酒だ」

「ハイ、ハイ。いわれなくても、ちゃんと用意してあります」

その夜、二人は博士を家まで送ったあと、肩をならべてノレン街に出かけた。がっちりとして怒り肩の池野と、着やせする色白の山根とは対照的である。のめばのむほど快活に弁舌になる池野と、顔色一つ変わらず、のめばのむほど口数が減る山根とは、まったく正反対だった。それが氣にあったのだろうか。最後は池野のいきつけの待合「松の家」にあがり、若い芸者をあげての落花浪籍となっていた。

「オレが子供のころ、美代ちゃんをいじめたことを覚えてるか」

「覚えているとも。あれも、いい嫁になり、二児の母だぜ」

「そうか、母か。縄とびの縄で縛ったら泣いて、お母さんにいうというのを、お前が脅し

て、とめたっけ」

「あのころから君は乱暴者だったが、いまもそうか」

「ああ、女を縛るのが趣味だ」

「悪趣味だな！ といいたいが、オレのオヤジも、その氣があつたらしい。松の家のオカミが、そう教えてくれた」

「そうか、じゃ縛りつくらでもするか」

「よからう」

と二人は、オカミの松江にロープをもってこさせた。池野の横には池野には、もうなじみの花枝という若くて、いかにも色気たっぷりな芸者が坐っていた。浩の横にはオキヤンな感じの、まだあどけなさの残っている仙龍という芸者がいた。

「おい、聞いたろ、うらみっこなしだ」

と平三郎が芸者に引導を渡した。

「ひどくしちやいやよ、平さん」と花枝はそれでも、あいそよくなっとくしたが、仙龍は

「ヒャー縛られるの。姐さん、こわい」

と首を、すくめた。そして、こわごわ松江のもってきたロープを、なげた。

「何いってるの、万更でもないくせに。そんなこというと、平さんにいって一晩中、いってやらないから——」

と花枝は、仙龍をおどした。

「おお、こわ。ね、この人、浩さんといったわね。お手柔らかにね」

「オヤ、もう決心したの」

「仕方ないワ、平さんのお客でしょ」

と二人の芸者は、なかなか陽性だった。

「じゃ、一、二の三で」

と松江が、けしかけた。それでなくても、もう上体が、ぐらぐらするくらい、酒のいつている二人である。「よし」と、いっせいに縛り始めた。

「あっ！ もっと、ゆるく、痛あ！」

と大仰に騒いでみせるのは花枝だった。

「バカ、そんなに……ほら、もっとおとなしくしろ」

と池野も派手な縛り方だった。それに比べると浩は、いっさい無口、仙龍の方も無口で二人の縛り方は、これまた、妙に好対照だった。縛りあげたとき、比べてみると、池野が女五方という方円流の縛り方をしているのに対し、浩は我流だったがムダな縄が一つもなく、きっちり手首と二の腕にロープが喰いこむという嚴重さで、二人の性格が、よく出ていた。

「さあさあ、花枝。もう、といてよいぞ。と

け！ とかないと酒を、のませるぞ！」

と池野平三郎はコップに、なみなみとついだ酒を花枝の口に、もっていった。

「とけ、とけ！ って、とけるわけないじゃないの。のめば！ のめば、いいんですよ。ウィーッ」

と花枝は、ゆれる池野のコップに、うまく口をあわせながら、一気に酒をのみ干した。凄艶といってよいほどの、のみっぷりで、それは見事というほかは、なかった。一方、浩は、ゆっくりした手つきで自分だけ、酒を口に運んでいた。仙龍は、その横にひっそりと坐って、じっと目を閉じ、観念していた。

それから、どれだけ時間がたつたろうか。平三郎が縛られた花枝を、ふとんの中で抱いているころ、浩は、縄をほどいた仙龍を自宅まで送って行っていた。

「抱かないの？」

「ああ、女は嫌いだからね」

「私も？……」

「皆、同じだよ」

「それなら、縛りあげたまま、放置しておけば、いいじゃないの」

「いや、いくら肉体をいじめても、嫌いの解消には、ならないよ。抱いても好きになれな

いのと同じだ。縛るのは一時の気まぐれさ。

酒と同じだよ。いくらのもんでも、よえない。いくら抱いても、女がすきになれないのなら抱かない方がいい。それだけだよ」

「冷たいのね」

「多分」

「厭な人！ でも、このままじゃ、いや！」

仙龍は家の前で、そういった。浩は、軽く、ひたいにキスしてから、さつと、まるで風のように音もなく去った。仙龍は、その跡を熱っぽい目で見送っていた。

(三)

その夜、家に帰ってくると、鶴子が寝ずに待っていた。

「また遊んできたのネ」

むしろぶりついてくる鶴子を押えつけるのは何のたわいもなかった。ピンクのネグリジエの上から、赤いしごきで、きっちり縛ってやると、鶴子は満足したような顔をして口をつきだしてきた。口にキスし、そのあと、さるぐつわをかまして、ベッドに運び、ねせつけると、かなり酒をのんでいた鶴子は、すぐにねてしまった。

その横に、もぐりこみ、浩は池野から聞い

た事件のあらましを思いかえした。

秘書の畑野恵井子が、あやしいと常務にいわれたこと、実際に企画がぬすまれたこと。

問題をしぼれば、この二点につきる。これを調べるにとぐらい、浩にとっては朝飯前であった。だが、実際に犯人が恵井子であった場合、どうするか。恵井子を首にするだけで池野の気がすむだろうか。恐らく、すむまい。

池野も首にする気はないと、いった。すると首にもせず、かといって、処罰する気もないとなれば——結局、池野は恵井子を縛りあげて、いじめたいのであろうか「泣かせるくらいのは、できるでしょう」といったもの。そんな意味だろう。しかし、秘書に復讐ではどうも大会社の専務のすることではない。そうすれば、どうあつかえば、よいか——浩はそこを考えていた。

浩は、恵井子を利用して相手方の機密を盗む案も考えてみた。しかし、それも余り効果は、なさそうであった。あとは恵井子を利用して何か池野のイメージアップ、大橋産業のイメージアップを、はかる方法はないか。その時、ふと浩は、弘田三枝子が、ある電気メーカーの宣伝スチールで手錠をかけられた写真があったのを思い出した。

この方式を、もっと推し進め、私は電気の奴隷（とりこ）です、というキャッチフレーズで、SM写真の大家の大谷進に恵井子の写真をとらしたら、どうだろう。大谷は前衛作家としても一流なので前衛的なコミーシャルを考えるだろう。玄人のモデルもよいが、素人のよさもある。これなら、池野も喜ぶだろう。スタジオ撮影もよいが、会社の寮やロータリー、花壇、工場を使うのも一興だ、と浩は考えた。

花壇で写すのを、もじって花一号作戦とすれば面白い。浩は、そこまで考え、やっと安心して、ねむりにつくことができた。

(四)

「平さん！ タベは、ねむれたか……」

翌朝、早速、浩は池野に電話を入れた。

「君は新製品のイメージ・アップを、はかりたいといっている」

「ああ、そうだ」

「その宣伝材料に、電気エレキの奴隷作戦というのは、どうだ」

「電気エレキの奴隷？」

「奥村チヨの恋の奴隷、という歌があったらう。それをもじって花の奴隷、家電の奴隷、

テレビの奴隷というのは、どうだ」
「うむ、しかし、何だか、おしつけがましいな」

「奥さまは電子エレキの奴隷（とりこ）です、というのは悪くないぜ」

「なるほど、考えてみよう」

「考えることもなからう。このイメージでポスターやCMフィルムを構成したらどうだ。

君も、よく知っている前衛作家の大谷進あたりを起用したら、少しは変わったフィルムがとれるだろう」

「わかった。ところで、この企画と例の件と何の関係があるのか」

「そこに君の例の秘書、いるかね」

「いるよ」

「きれいだろう」

「まあな！」

「それをモデルに使っては、どうだ」

「え！」

「自分がモデルに出る企画を相手には洩らさぬだろう」

「なあーるほど」

「でも、出演するかなあ。こんなことは前代未聞だよ」

「細工は、りゅうりゅうだよ。とにかく彼女

のことは、ふせていて、企画の方は、企画会議にかけて、専門家の間で、ねってほしい。

きつと、いいプランというだろう。花一号作戦と名づけるんだね。家電を花でうめるというアイディアと平行して進めると、いいぜ」

「ありがとう。正式に決まるまで一週間は、かかるだろう。そしたら、知らせる」

「吉報を待っているぜ。それから彼女には花一号作戦といって、花でうめるプランの方をしゃべって聞かせておいてくれないか」

「なぜ」

「細工だよ。…恐らく、内通していたら、彼氏のところに、それを言いに行くだろう。花一号作戦の花だけなら平凡なプランだ。これだけなら、いくら洩らしたって、かまわないよ。そこが、つけ目だ」

「わかった」

「それから彼女の顔写真を一枚、くれないかい——いや、見にいいうか」

「こいよ」

山根は、そこで電話を切った。それから、ぶらりと町に出ていったが、再びマリの二階に帰ってきたときには、鶴子も驚くような英国型紳士に化けていた。王朝風の背広を着く着こなし、浩は、まるでパイヤーのような、

いでたちで大橋産業に向かった。

社の門で外車を止め、名刺を見せ、池野専務に会いたいといった。名刺には花村貿易渉外部長取締役・マンズフィールド浩と印刷されてあった。

浩は守衛が電話している間、会社の前庭を見ていた。芝が美しく、見事なバラが何十本と植えられ、素晴らしい環境だった。

「どうぞ、この道を、まっすぐ行って左に曲がると、本部の入口にでます。そこで秘書の畑野さんが、お待ちしているそうです」

「その人は一目でわかりますか」

「多分。とび切り、美人ですから」

「ありがとう」

山根は、にやっと笑い、車の中に消えた。いわれるとおりベンツを運転して行くと、たしかに一人の美人女性が立っていた。薄紫のスーツをフィットさせた近代美人だった。山根は、その前にスーツと車をとめた。

「ミスター・マンズフィールド？」

「イエス」

「池野がお待ちしていますので案内します。私、秘書の畑野です」

「オーアリガトウ。オジョウサンに案内されて光栄です。ニッポン会社、美人多い。池野

さん、シアワセですネ」

浩は、おどけていった。ニヤケタ銀ぶち目がね、ツケヒゲで、どうみても昨夜の無頼の人とは思えなかった。

平三郎は、ソファに坐って待っていた。

山根をみると、あぜんとしたように口をあけ浩の顔に見入った。

「久しぶりです、池野さん。アメリカ以来です。私ニッポンにきて花村貿易やっています。家電メーカーの中で、大橋産業、一番信用あります。これからよろしく」

浩は、さち久々の対面のように名刺を出して、ふるまった。そんな浩を、じっとみつめていた池野は、やがて破顔一笑。

「どんな奴かと思ってたら、カルフォルニアの浩じゃないか。グッドラック」

と握手を求めてきた。

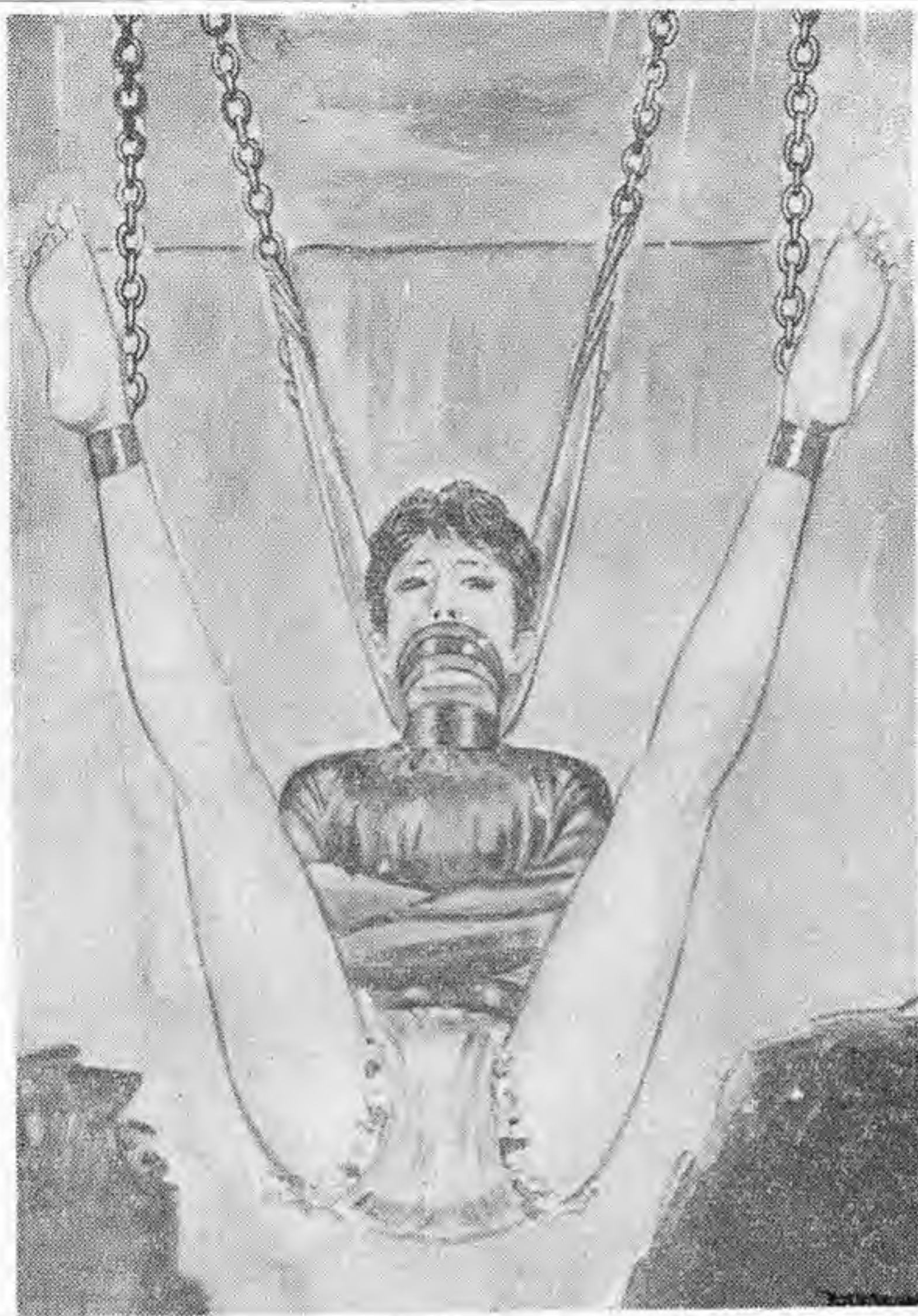
まさに役者であった。浩は鮮やかな英語で話しはじめた。それにつられ池野も英語で答える。こんな会話が秘書に、どんな感情をもたらすか、山根は計算していた。こうして畑野の人柄に、まずアタッチしたのであった。

(五)

浩はその夜、昼の英国紳士と全くちがった

黒メガネ、黒セビロ、黄色いネクタイの、やぐざっぱい夜の紳士のスタイルをしていた。浩は、そんな姿で、スバルの中で会社を出てくる恵井子を待った。藤色のスーツをグリーンのスーツに着替え、恵井子は足早に出てき

た。午後六時を十五分過ぎていた。浩がつけているとも知らず、グラマーな体を夜風になぶらせながら、恵井子は町をつつ切り、丸越デパートの喫茶部に入って行った。浩は急いで、そのあとをつけた。そこで浩はある男が



イメージギャラリー

『皮搾衣の軋み』 四馬

孝

恵井子に金包らしい紙袋を渡すのを見、それを隠しカメラで撮影することができた。その男と女の話も、もちろん隠しマイクで、ちゃっかり、いただいた。こんなことは、調査しつけている浩にとっては朝飯前の仕事だったのだ。浩は、しばらく、その二人が話すのを遠くから観測していた。二人は楽しそうであった。そして十分間も話していたらうか。男が立ち上がり、金を払って外に出た。

男は、チェックの粋な若者向きの背広に、西陣のネクタイをしめたスポーツマンタイプの若者だった。浩は恵井子をすて、その男をつけた。そして男の家を確かめた。郊外のアパートに住む、その男は島田といい、健道電気企画課員であることが、わかった。

浩は翌日も、その島田を、はった。島田は会社が終わったあと、同僚と飲みに行った。そのあと、午後八時半ごろ別れて自宅に向かったが、島田が一人になったころをみて、浩は島田にぶつかり、ケンカをしかけた。予想どおり、島田はケンカにのってきた。そして大立ち回りとなった挙句、お巡りがかけつけてきたとき浩は、いち早く逃げ出していた。その浩の手には、いつ抜きとったのか、島田の写真つきの身分証明書が、はっきり握られ

ていた。

浩は二、三日、なりをひそめた。マリの二階に待機していると、三日目に平三郎から花一号作戦の決定を伝えてきた。あさって親友の新進カメラマンの大谷進に逢いに行くのでつきあえという。浩は、もちろんOKした。

(六)

その夕、浩は恵井子を、はった。

ベンツに乗り、イングリッド紳士に化けた浩は、恵井子を追って、ゆるやかに車を走らせた。きょうは、まっすぐ家に帰るらしい。繁華街を突っ切って人通りの少ない道に出たところで、浩は恵井子の横に車をつけた。

「ミス・ハタノ」

浩は渋い笑顔をつくり、黒い目で恵井子をみすえた。

「まあ、ミスターマンズフィールド。これはいったい、どうしたのです」

「いま、仕事帰りです。美人の秘書さんをつけたので……いかがです、夕食」

「まあ、叱られますわ、専務に」

「そんなことない。専務はボクの親友。よかったら、いまからおさそいしても……ハ、ハハ。ボク、イケナイ男ですネ。でも、ちよっ

と、お耳にいたいこともあります。ミスター島田、知ってるでしょう。お嬢さんの学校の先輩。あの男、この前、よっぱらって町でケンカしていました。悪い男、あまりかわりない方ヨイネ。ユックリ話しませんか」

浩にそういわれると恵井子は、思わずハンドバッグを、とり落した。

「さあ、いらっしゃい」浩にいわれると恵井子には、ことわる勇氣はなかった。

浩はベンツの後部座席に恵井子をのせると夜風を切って郊外のプリンス・ホテルに横付けした。このホテルは一流の人たちの集うホテルで外人客も多い。恵井子は専務に連れられ、得意客招待に二度ほど、きたことがあった。屋上にグリルがあり、夜景を見ながら食事をとることができた。

ボーイが来ると鮮やかな英語で食事を注文した。平三郎の秘書で、通訳もかねることのできる恵井子は、浩の、その英語に驚いていた。専務は「カルフォルニアの浩」といったが、浩の英語にはアメリカなまりはなく、全くのキングス・イングリッシュだった。

いったい、どんな人間だろう。まったく得体の知れない人。と恵井子は、背筋に寒気すら覚えるのだった。浩は、しかも、無口だっ

た。だから、とりつくシマもない。何とか話の口を切りたくても、それすらつかめない。

そうこうするうちにオードブルが運ばれ、ビールが持ってきてられた。

「ひとつ、いかがです」

そういわれて、操り人気のように恵井子はコップを握った。

「乾杯といきましょうか。専務とミス恵井子のために」

と浩は疲肉をいった。ピリッと恵井子の口びるが、ひきつった。

「あなたは、いったい、どういう人なの」

「専務の幼なじみですよ」

一転して流暢な日本語だった。思わず恵井子の目がみひらき、あわてて、コップを落そうとした。それを支えてやりながら浩は、ゆっくりと話しはじめた。

「ぼくと専務とは小学校の時から同級生。彼が社会の表街道を歩きはじめたとき、ぼくは裏街道の顔役になろうとした。それだけです。だから、あなたが島田と会っていることも知っている。金をもらったことも、なんでもそうだったかも。……お母さんが亡くなって寂しかったでしょうネ」

浩は、ちゃんと恵井子の泣き所を知ってい

た。恵井子はまったく呆然と浩を、ながめていたが、やがて、あきらめたように目を落した。

「で、私をどうしようというの」

「さあ、専務が君に、ご執心なのでネ。どうしたものかな。オレの女にしたいといったら君は、なるかな。それとも専務に泣きつくかな。島田の奥さんを追い出す手もあるな。妹の就職も決まったことでもあり、アメリカに逃げ出す、でもあるな」

浩は、ゆっくりと、まるで猫が鼠をいじめるように恵井子を攻めていった。

「専務は、まだ君を疑うていないからネ。君が犯人だと知ったら殺すかもしれないよ。専務に代わってボクが殺すかもネ」

浩は、そういうながらも、うまそうにオードルを、つつき、ビールをのんだ。恵井子は、そんな浩をみつめ、みじろぎもしない。

「ところで、こうなったら君はどうするネ」

「専務に言っ、やめます」

「それでいいのかね。君はやめて、それで知らぬ、存ぜぬで、いいだろうが、顔にドロをぬられた専務は、かわいそうだよ」

「では、専務の気のすむまま、妾にでもなれというのですか」

「さあネ、あの男は、そんな男ではないよ」

「じゃ、どうせよというのです」

「汚名挽回の方法しかないよ。まず、こんどの一連スパイ事件は、これで、忘れることだネ。これ以上、いくら、せん索しても君にプラスになることはないし、大橋産業のプラスにも、池野のプラスにもならないよ。島田のことはオレにまかせ、二度と会わないことだね。島田から逆情報をとってもよいが、そんなことは、君のすべきことではないね。村野常務から君が怪しいという噂が出たのは、もう三カ月ぐらい前だ。それ以来、池野は悩んできたが、だれにもいえなかった。池野は君を見つけ、自らが保証人となって君を会社に入れた。そんな人から裏切られたのでは、専務として社内の人心をつかむことはできない。それに君を好いていた。好いていることを知られても、まずいと気を使っていた。池野とは、そんな人だ。君の、母の病氣のことや、その後の葬儀のとき、十分めんどろみでやれないと、こぼしていたよ。君がやめることで、そんな好い人を傷つけるわけには、いかないだらう」

恵井子は、うなずいた。うなずくより仕方がなかったのだ。

「じゃ、この一件は、このくらいにして、すっかり忘れることだね。君の会社では、こんど花一号作戦として新しいPR作戦を展開するそうだね。君も知ってるだろう。この責任者は専務だ。池野が、どんな手を打つか。君もアシスタントとして積極的に協力して、これを成功させねばならないと思うよ。そしてこの作戦が成功したら、ほとぼりがさめるまで、アメリカ支社にでも転勤させてもらったらどうだ。それなら、だれも傷つかず、うまくおさまるではないか」

「ハイ」

「わかったら、さ、たべよう」

「ハイ」

そうはいったものの恵井子は、まだまだ食べ物はノドを通らなかつた。コップを支えた手に涙がポロポロと、こぼれ、淡いグリーンフレアスカートの上に消えていった。

「泣くのは、よせよ」

そういわれると、逆に泣きなくなるものがある。浩は、時をかけるより仕方がないと、じっくり待った。

恵井子が、気をとり直したのは、それから一時間半も、たっていた。

「どうだ、気晴しにダンスをしようか」

そういつて浩は、予約してあった浩の部屋に入って行き、そのステレオのスイッチを入れた。ゆっくりとしたブルースが流れだした。恵井子の好きなブルースだった。浩は恵井子をリードして、ゆっくりしたテンポで踊った。だれもない部屋で一面識の男と踊る——以前の恵井子には考えられないことであつたが、相手が悪すぎた。曲は、いつしかタンゴに変わり、軽快なリズムが恵井子の心をそるように、体を泳がせ、ワインの酔いが心身ともにリラックスさせた。

「恵井子は悪い女だったのね」

「そうだよ。悪い女は罰を受けねばいけないね。パリの監獄に20年ぐらい幽閉して、毎日、ムチ打つ。昔ならそうされるよ」

「いまなら——」

「さあ、優しく罰してと、甘えたいんだろ」
「そうよ。浩って、どうしてそんなに人の心がわかるんだろ。すばらしい人ね。今夜は、すばらしい夜になるんだワ。浩、優しく罰してよ、ネエ」

恵井子は、浩にとりすがって嗚咽した。

「よし、よし。じゃ最初に、手ぐさりの刑だな。といっても、くさはりはない。これで、がまんするんだな」

と浩は、えび茶色の赤と青と緑の交織のネクタイをはずし、恵井子の手首を軽く後ろ手に縛り、縛りあげたまま、わきの下に手を入れて、ダンスをリードした。曲はワルツに変わっていた。

「これ、懺悔の曲だよ」

そういつて浩は太股で、ゆっくりとターンしながら恵井子を、ひき回した。

恵井子は、こうして浩の術中に陥り、次第に浩のあやつるまま、見はてぬ夢を見はじめていた。

(七)

翌朝、池野は企画主任の東田規郎部長と、一緒に芸術工房の大谷進をたずねたのでよろしく願ふと電話してきた。浩も池野も大谷とは仲よしだった。というより浩は、井上博士の紹介で大谷を知り、そのアイデアに感心したのだ。たとえば大谷は、こういう話をした。一点を長くみつめると、人間にはその点が動き出すように見えることがある。あまり正常な生活になれすぎていると、正常な生活が歪んで見えるものだ。芸術は、その歪みに光をあて、そこから熱狂をひき出す……と。

浩が鶴子を縛りはじめ、女に興味を持ち

じめたとき、大谷は良い指導者でもあった。大谷には「みどり」という姪がいて、いまでもよくモデルに使っているが、浩が行くと大谷は、みどりを厳重に柱に縛りつけ、浩と対決させた。この女は動けない。だが、みつめるうちにこの女が動き出すように見える。それは、いったい何だろう。オレたちが女を縛るのには、縛られた女が、どうであろうとも、無から有が生じる瞬間を愛せんがためではないのか——浩は、そんな理論は、わからなかったが……ともかく、そうでもいわねば生きられないような切迫感が大谷にあることだけは認めた。

大谷は根は優しい人間だった。人生の道をふみちがえて少女苑にいた姪をひきとって育てたのも、そのあらわれだと、大谷のサポーターである実業家から聞いたことがある。父母に裏切られ自殺を図ったこともある、みどりが、大谷の言うままに、緊縛モデルに甘んじているのは、大谷の、そんな一面があったからだという。

そんなこと、こんなことで浩は大谷と、いつしか、心を許す友となっていたのである。

一方、池野が大谷を知ったのは松の家のおかみ松江の紹介であつた。松江は会長だった

父から可愛がられた女で、平三郎に男が大人物になるには何でも実験し、何でも知らなければいけませんよ、と平三郎の女遊びの手ほどきをし、平三郎がSADISMの気がある」と知ると大谷を紹介したのだった。大谷は池野の父には、ずいぶん可愛がられたという。それだけに、こんどの企画ものどりが早かったのである。

三人が大谷の芸術工房についたのは、午後一時ごろであった。アトリエの入口まで迎えに出た大谷は専務に、浩さんかと笑った。企画部長の東田の方は見向きもせず、

「平さんから電話で聞いたとき、どうもおかしいと思ったよ。やはり二人の合作か」と、いった。「バレタか」といったのは平

三郎だった。浩は「進さんは、どう思う」と早速、切り出した。

「そうだなあ——キャベジンの宣伝、知っているか。一世をふうびした玉川良一のCMそれが昭和四十一年に森繁久弥に変わった。だが商品は変らない。CMのイメージチェンジは新鮮さのみをねらうのではない。商品の信頼性を打ち出さねばならないのだ。」

そう考えると、新鮮さは「電気」の奴隷で十分だろうが、信頼性となると「現代は電気

の奴隷の時代です。しかし奥さん。あなたは奴隷になつては、いけません。よく調べて、よい品物を買ひましょう。大橋電器は、これに答える商品を作っています」ということになると思う。だから、あくまでも、女の縛りを使つてもバックグラウンドの点景で、あくまでも商品のよさ、花の美しさ、女の美しさを強調。画面も、ばかしたり、ダブらせた方がいい。そう思ったところだよ」

大谷は、そう一気に、しゃべった。そして応接室に入った、三人に一枚のフォトをみせた。それは、みどりが電気冷蔵庫に縛られているポーズと、奥様然として、それを使っているポーズを、だぶらせて、巧みに仕上げたものだった。

「まあ、試作品だ！ 実際はどうなるか、モデルも、みどりでは、だめだろうな」

「モデルは素人がいいのか」

「もちろん素人もいい。玄人もいい。多いほどいいが、困るのは、素人モデルを探すことだ」

「素人には心当たりがある。社内から起用しようかとも思っている」

「へえ、社内から——」

「うむ美しい娘がいる。いずれ紹介しよう」

「それは、ありがたい」と大谷は喜んだ。

それから東田をまじえ、具体的な打ち合わせが始まった。浩には関係のないことなのでぼんやりしていると、進は

「浩、みどりがスタジオで待ってるぜ」

というので、浩は一人でスタジオに入つて行った。カメラがデンと坐ったスタジオは、いつもなら助手が二、三人いるのだが、誰もいず、シーンとしていた。

「ここよ、浩」

という、みどりの声がした。声の方を向くと、みどりが柱に縛りつけられていた。

「あいかわらずだなあ。小父さん、解いてくれないのか——」

「助手の人が、とこうとすると、そのままにしておけといったのよ。あなたが来るから、その方がいいんでしょだって」

「へえ——」

浩は勝手知った他人の家だと思った。フラッドランプをともし、みどりの前にすえてあるカメラをのぞいてみた。素裸にされ、腰のところに赤い布一枚を下げられたみどりは浩とはいつも、そんな対面だったので気にはならなかった。浩もまた、きょうのみどりの

イメージギャラリー

『観察素材』

マエダ・ヒオミ



ポーズは、そうエロチックとも思えるポーズではなかったので、特別の感情はわかなかったが、カメラのファインダーでのぞくと、不思議と生きている情感が、あふれ出ていた。

それというのも、限られた世界に、美女がクローズアップされるからだろう。「不思議だなあ——あいつのポーズのつけ方には、いつもこんなところがあるんだ。平凡

の非凡かな、みどり君。そんなことを意識する？」

「どんなこと？」

「色っぽいポーズ」

「さあ、それは。いやねえ、浩——そんなこといったら恥かしいじゃないの。小父さんの前で、そんなことを考えるわけじゃないの」

「そうかなあ——だから、あいつの仕事は不思議なんだ。まあいい。それより、痛くないか」

「平気よ。こうされていると、どんなことがあっても、平気なの」

「そりゃまあ、そうだろう」

「それより、浩。お茶のませて」

「OK」

と浩は、そばにあった急須から茶をついでのませてやりながら、ふとこの女を、幸福にしてみたいかと考えるのだった。

話が終ったのか、皆がそろそろ仕事場に入ってきたのは、約十分ぐらいたってからだった。浩は、みどりの横に腰かけ、進のといった写真集をみていた。

「やあ、おとなしいな」

「どうしようもないじゃないの」

「それもそうだな。おい、平さん。そのファインダーを、のぞいてみるよ。もう一時間以上、放っておいたから、この女、いい加減、疲れて、からだの力がぬけてるはずだ。色っぽく見えるだろう。女のフォトをとるときは第一課だよ」

「へえ、そんなものかな」

池野は言われて正直にファインダーを、のぞいた。そのあとから東田が、のぞいた。東田にとっては見ることも、聞くことも、初めての世界だった。だが、浩や平三郎は、もうすっかり、なれていて、大谷が、なぜ池野にそういったのかも理解できた。と、いうのは進進にかわって、いろんな作品を東田に見せ、説明した。東田も企画部長に坐るだけの男である。理解は早いように思われ、浩の大好きな写真を一枚とりだし、盛んに、ほめ、溜息を吐いていた。

三人は、しばらくして、そこを辞したが、東田は「さすがですねえ、専務」と、すっかり感心、大谷にシャッポを脱いだ、かたちだった。

(八)

それから二、三日たって、突然、浩のバー「蟻」に恵井子から電話が、かかってきた。寂しいの。スナックに一人いるの。来て」という。浩は、さっそく黒い背広に着替えて風のように「蟻」を出、スナック・スリー・Aに行った。恵井子は一番奥のテーブルで一人しょんぼり坐って「レスカ」を飲んだ。

「レスカか」

「そうよ。一人でウイスキーをのんでも仕方ないでしょ」

「で、きょうは、どんな風の吹き回し？」

「専務から、モデルになれと口説かれたワ。」

あなたのいうとおりよ。OKといったら、縛られたり裸にされたりするかも知れないぞ。

こんどのポスターは大谷進がとるのだから、というのよ。覚悟は決めていたので、それでも承知しましたワ。といったら、ありがとうと手を握ってくれたの。きょうは大阪の株主招待なので、あす夕食を、ごちそうしようだって。結構です、と断わったら、悲しそうな

目をしたのよ。それで寂しくなあって……」

「わかったよ。ボクが代用品か」

「そんな。でも、きょうは覚悟しているの。」

この前のときから、そう思ったの。ね、わかるでしょ」

「わからんなあ、オレはヤボ天だから。まあいい。ともかく、ここを出よう——」

そういつて改めて眺めた恵井子は、ピンクのレースのカジュアルなワンピースを巧みに着こなして、ほんのり、うれしいをふくんで、思いつめた女の美しさがあった。

町に出ると風が、ひやりと顔を打った。この前のようにプリンスホテルに行くわけにもいかない。いきおい足は、郁子ママのいる、バー「宇都木」に向いた。「蟻」とちがってこのバーには華やかさがあった。それが恵井子に、ふさわしいと浩は思った。

扉の鼻環をたたき、中に入るとママの平田郁子が顔を見せた。

「まあ、友常さん、珍しい」

「彼女を連れてくるんだ」

「まあ、おごちそうさま。この方ですのね。」

郁子です。よろしく」

いわれなくても、ここでは浩にはスコッチを持ってくる。恵井子のために浩は、そのハイボールを注文してやった。平三郎から、かなりいけると聞いていたので、それがよいだろうと思ったのだ。

(九)

それから三時間後、二人はホテル「梓」の一室で向かいあっていた。

「悪い奴だな、君は。でもボクにとっては、いい奴かな」

浩は小声で、そういったものの、心が、ちよっぴり、とがめた。自分の意志より、むしろ恵井子に口説かれた形になった。そうなるであろうことは予想できないことではなかった。そうすることが円満な解決になるかも、と思う心もあった。それだけに、やりきれない。

「もうなにも、いわないで」

「ああ。じゃ、うんと、いじめてやる」

浩は、そういつてロープを、とり出した。

「まるで、こんどやるCM撮影の予行演習だな。まあ、いいや」

浩は、なんとなく弱味が口に出る。それに比べると恵井子は、さばさばしたもので、のんだウイスキーが、ほんのり顔を、いろどり色気が、にじみ出ていた。

手を背中に回し、手首にロープを巻きつけると、恵井子の体がピクリと動いた。それが合図のように浩は一気に足首まで縛った。十

分前、

「ねえー浩。私の頼みを聞いて——」

とバー「宇都木」を出たあと、なおも行動をおこさない浩に、じれた恵井子が、車の中で、せつなそうに口説いた。

「わかった。でもどうなっても知らないぞ。

オレはサジストだから」

「いいわ、その方が、いいの。だから……」

そういう争いの後で、たどりついた仮寝の宿だった。だが、いざとなると、なかなか、そう女を口説いたり責めたりは、できるものではない。まして相手は昨日までのお嬢さんとなると、悪人には、なりきれない弱さが浩にはあった。しかし、そうまでいわれ、女を征服しないと相手に笑われると浩は思った。

浩は縛ったあとで、ゆっくりとハンカチをとり出し、顔の汗をふいた。それから

「サルグツワだ、口をあける」

といった。恵井子が泣きそうな顔になりながら、あけた口に、浩は、そのブルーのハンカチを、つめ込み、その上からロープを二巻きして、きびしいサルグツワをした。美しい顔が一瞬、ゆがんで苦しそうになった。

「ザマーミロ」

そう思うことで浩は悪に没頭しようと思っ

た。そこまで細工が進むと、後は楽だった。

浩は、ゆっくりワンピースのホックをはずし、楽しむように、いくしむように恵井子を裸にしていった。すっかり体をかたくし、ブルブルふるえている、この娘は、心配そうに浩の手つきをみていた。それが浩に激しい愉悦を呼びおこした。浩は、できるだけ、ゆっくりワンピースをはぎ、スリッパをはいていった。ピンクのレースのワンピースが手もとにたぐられスリッパが足もとに落ちると真っ白い肌が目に、しみるようだった。なだらかな脇腹が、清楚な感じを、いだかせた。うしろに回り、ブラジャーのホックをとり、これはずすとブラジャーは肩のヒモが手首にかかり、スリッパの上に白い影を、おとした。

形のよい、グラマーなブーザムが浩の目にとびこんできた。ワンを伏せたようにもりあがったバストのトップに赤いチェリーのようなニップルが鮮かに青春を誇っていた。

浩は、それを、そっと、さわった。恵井子は思わず顔をふせた。浩は前にまわり、のぞきこむように顔を見、そして、胸を見た。急に激しい情熱が浩を、つらぬいた。浩は、とっさに恵井子を抱き、激しいキスを額から、うなじ、縛られた唇の上に浴びせた。

「あ、う」

と、せつなそうな、呻きが惠井子の口から洩れた。浩は一息つく、しばらく、そうして、じっと抱いていた。それから、だまってパンティをはいた。惠井子が体中を固くして、こらえているのが、わかった。浩は、ゆっくりと足の縄をとき、スリッパやパンティを抜きとると、こんどは足を曲げさせ、足首を交叉させて縛った。そして裏がえすと、手首の縄をとき、手首にたぐまったワンピースやブラジャーをひきぬいて、再び両手を、しっかりと足とは別の縄で縛りあげた。これで惠井子は完全な裸となった。それから浩は、ゆっくりと惠井子の胸に縄を回し、ちょうど昔の罪人のように乳房の周りに白いロープをかけ、最後に腹を、ぐるぐるまいてとめた。足を、あぐらのようにさせ、股の縄とつながると、もう惠井子に自由はなかった。

「どうだ……フ、フ、フ」

と偽悪ぶって浩は、ぐいと乳房を掴んだ。それから、わざと荒々しく突き倒した。すると足が天井を向き、尻が上にあがって娘の体は、もっとも恥かしいポーズとなった。

「アーツ、アツ、ムームツ」

と、女のせつなそうな悲鳴が洩れ、女の目

に涙が、たまった。浩は、できるだけ自分が

大悪人であるかのように考えることにした。

惠井子は処女ではなかった。浩は、それを告白させて、ほっとした思いだった。もしそうでなかったら……浩は自分が惠井子の中にめりこむのではないかと思った。惠井子はそのくらい、すばらしい女だった。

(十)

それから半年、経った。

撮影のとき、見にくいといった平三郎の誘いも断わり、忘れるともなく忘れていると、平三郎から二十枚ばかりの写真と、三枚の美しいポスターが送られてきた。ポスターは花一号作戦の完成した作品で、写真は惠井子のポーズの傑作集だった。

浩は、まずポスターを、あけた。美しい花畑だった。ユリの咲いた白い花園の中に白い電器冷蔵庫がいくつも冷たく置かれ、その扉があけられ、中から美しい女が果物を、とり出していた。それが惠井子だった。そのバックに浅いヌードの足に、くさりをつけた女がいて、そのクサリが、かげのように別の冷蔵庫に、まつわりついて、電気の奴隷になるなといった反語が、よくきいていていた。

ポスターは三枚とも同工異曲だったが、それとは別に貰った写真は、どれも鮮かに惠井子を写していた。王冠をつけ、クサリで括られたものや、縄をつかったものなど、さまざま責めポーズだった。

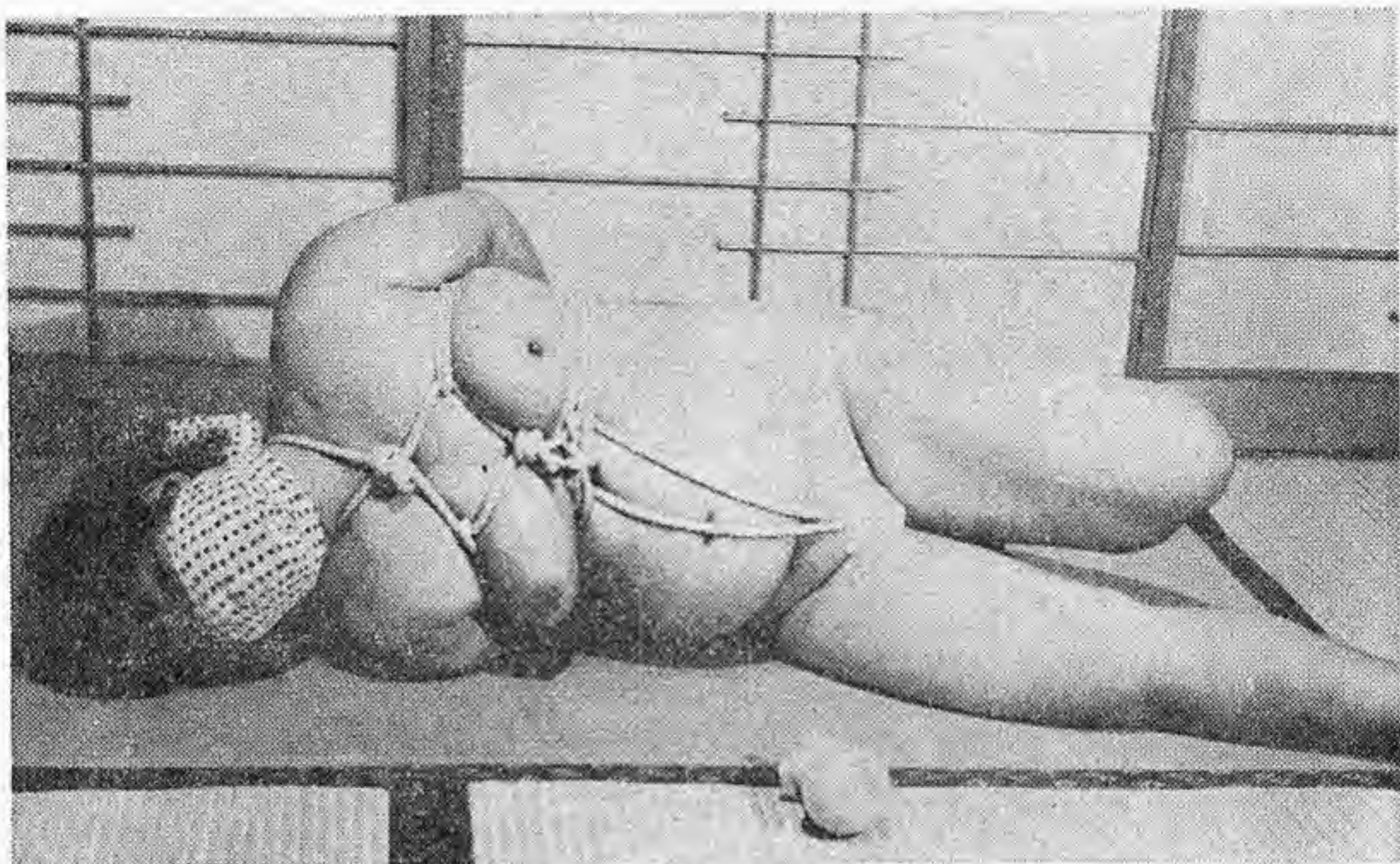
浩は急に惠井子に会いたいと思った。

だが、もう惠井子は日本には、いないのは……ふと、そんな予感がした。浩は、たける心を、ぐっと抑え、その夜も鶴子をいじめ泣かせてしまった。

その浩の予感が的中したのは、それから十日目だった。ロスアンゼルスから、惠井子がアメリカに赴任したことを知らせてきた。

『旅の空で、はるかに故国を思うと、優しかった人より、きびしかった人の方が思い出されるのは、弱い女心のせいでしょうか。惠井子は、その心を、いたわりながら、この地に永住したいと思います』と、したためてあった。浩の目に一夜の惠井子の姿と、大谷進の写真とロスの風景が重なって、にじんで消えていった。

平三郎といっしょに、また「松の屋」に芸者を縛りに行こうか——浩は、ふとそう思った。



／＼畜化願望の女から編集長へ／＼

ルポの

『写真と記事』に

しばれて

苗なえ 木き 陽よう 子こ

編集長さま

その後ごぶさた申しあげました。
十一月の声を聞きますと、めっき
り秋らしくなってまいりました。お
元気でご活躍のことと、蔭ながらお
喜び申しあげます。

先月二十六日、電車にて三十分ば
かり行きました街の書店にて、奇ク
十二月号を、買い求めてまいりまし
た。恐いもの見たさの心境でこわご
わ手にいたしましたものの、トップ

のルポ『畜化願望』の女を見ましたときは、
あっと、思わず声を出して、雑誌を手から取
り落しそうになりました。

あられもない肥満体のぶざまさを、満天下
の人々の前にさらけだしてしまっている自分
の責められている姿が、目の中に飛び込んで
まいりましたときは、もう、本当にどうして
いいのか自分でもわかりませんでした。

体中が、かっかっかと熱く燃えたぎったかと
思いますと、汗が掌にまでにじんできて、そ
の次には、両足が、がたがたとふるえ、しば

れたように動けなくなってしまいました。パ
タツと本を閉じて、それから、どのようにし
てお金を払って買い求めたのかさえも、自分
でも、はっきりと覚えておりません。

編集長さま

でも、私は本当にうれしいのです。いろい
ろご配慮いただきましたことを、厚くお礼申
しあげます。奇ク十二月号を求めて帰ってま
いりましてから、もう幾度、あの記事を読ん
だことでしょうか。いや、そればかりではござ
いませぬ。あのルポの記事を読み、自分の責
められている写真を眺めて、私は何度、自分
の体を、慰めたことでしょうか。

私って、こんなに好色で、マゾな女なので
す。きつと、あきれ果てられたことと思いま
す。でも、どうしても、この気持ちで、おさ
えられないのです。SMのない生活なんて、
今の私には考えられないのです。

こうした私の気持ちで、ご理解いただける
でしょうか。

編集長さま

私は十二月号を拝見いたしましたして、直接、
縛られ、責められ、いじめられているときに
味わったとは、また別なマゾの気持ちを、しみ
じみと味わっております。

奇クの誌上に載せていただいた、ぶざまで
あられもない自分の肥満体が、多くのマニア
の方々の目にふれ、そして、その無格好さを
笑われている、と考えただけで、私のマゾの
心は最高に燃えあがってしまうのです。

四つん這いにさせられて、その上、後から
……犯かされているケモノのような私。それ
が沢山の読者の方々に見られている——そう
考えただけで、もう体中が、かっかします。

塚本さまの巧みな文章を読んでおりますと
あのときは、こうされたのだ、ああされたの
だと、いろいろプレイのことが思い出されて
もう、どうしても、自ら慰めずにはいられな
くなってしまいます。それに、そのとき撮っ
ていただいた写真が、一層、ありありと、そ
の場面を思い起こさせてくれます。

何度、読みかえしてみても、そのたび毎に
いつも変わった気持ちで、私のマゾの心をゆさぶ
りつづけてくれるのです。

口絵写真の白豚の肥え太った姿態は、我な
がら情ないくらい見事に醜態を、さらけだし
ています。そして、剃毛のあとが白々と、私
の恥を読者の方々の目の前に、さらしている
のです。皆さんに、自分のこんな格好が見ら
れている——そう考えますことは、ああ、な

んという快樂でしょうか。

犬か豚にさせられて、首輪か首枷をはめら
れて、四つん這いで、後から犯されたら……
私は死ぬ程、うれしいのです。

編集長さま

私って、本当に動物的に出来ているのです
のね。ムチで打たれたという願望も、きつ
と、そこからきているのだと思います。そし
て、四つん這いという姿勢に、すぐくエキサ
イトするのです。

顔さえわからなければ、どこの誰だか、わ
かりさえしなければ、苗木陽子が、一匹の牝
犬か牝の白豚となって、どんなハレンチなポ
ーズでも、恥知らずなことでも、やってのけ
ます。いや、それが、本当の私の希望なので
す。どんな凄いポルノ写真でも、私は撮って
ほしいのです。

あそここの大写真なんかも、それを強制され
るのだと考えただけでも、私は物凄くエキサ
イトします。ローソクを使われることなんか
いつか、雑誌で読んだことがあります。私
はそんなことをされるのが大好きです。

両足を左右に大きく開かされて縄で固定さ
れ、そして火のついたローソクを立てられる
と思っただけでも、身ぶるいいいたします。

編集長さま

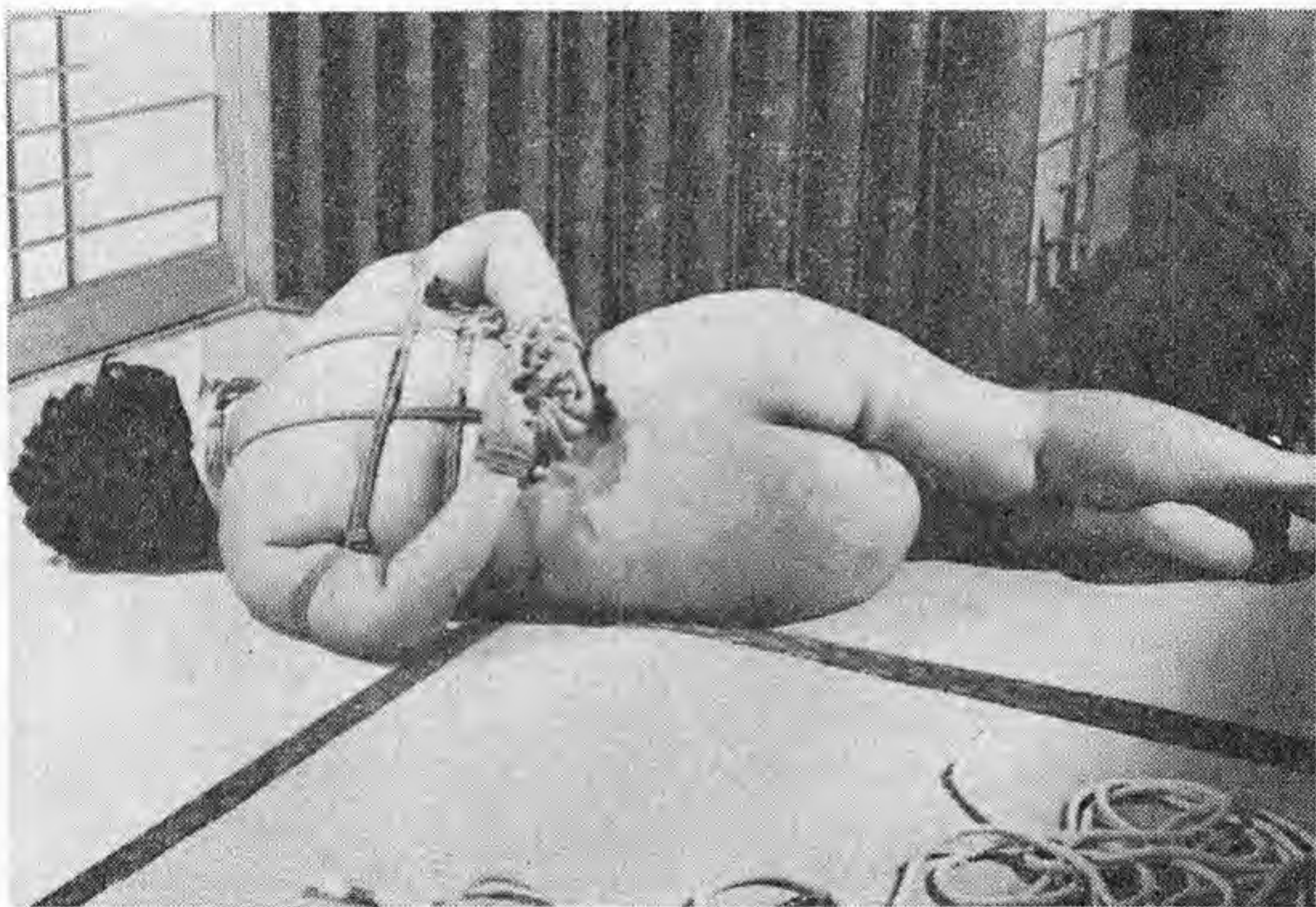
いつも一方的に勝手なことばかり書き送りまして申し訳もございません。

十二月号を拝見しまして、燃えに燃え、そうして、思わず知らず、ペンを走らせてしまいました。お忙しい方のお目を止めることは、いけないと思いますが、つい他に、こんな恥知らずな手紙を出す相手ありませんものから、お目を煩してしまいました。

八月の末、私は生まれて始めて、あの素晴らしいSMプレイを経験し、一晩中、休みなしに喘ぎ、悶え、狂い泣きしつづけました。

その甘美だった体験は、私をして、SMを忘れられないものにしてしまいました。そして九月には、再び塚本氏と激しいプレイを交歓する機会を持ちました。僅かな出先での時間を利用したので、かりそめのプレイだったのですが、それでも、第一回とは、また違った楽しい、ひとときを経験しました。

最初から、私は徹底的にケモノ扱いにされ一匹の飼い馴らされたペットとしての取扱いを受けました。旅の空で



の数時間、私はSとMとの美酒に酔いしれ、燃えに燃えて泣き叫びました。そして、こんなに快く楽しいプレイだったら、もっともっと続けてやりたいものだと思願しました。

十月は、二回も関西へ旅をする機会がありながら、いろいろな事情や手違いから、とうとう、一回もプレイ出来ませんでした。

SMのない生活なんて考えられないと考えております私にとりまして、これは大変に辛いことでございました。出来たら、毎日でもSMプレイに耽りたいと願っております私ですが、それは無理といたしましても、せめて、月に一回ぐらいは、あの、身も心も、とろけるような素晴らしいSMプレイを楽しみたいものでございます。

今のところ、局留で送っていただきましてお心づくしの写真と、奇クの十二月号によって慰めております。もうあれから、今日までで、私は何回ぐらい、自らを自らの手で慰めてまいりましたでしょうか。

犬のように四つん這いで這いずりま

わり、白豚のような、みだらな肥満体の全裸をさらした私が後から犯されている……あられもない姿を、沢山の人達に誌上で見られているということは、なんという感激でしょうか。

自分の胸が、ドキドキと早鐘を打っているのが、よくわかります。笑われ、嘲笑され、いたぶられ、なぐさみ者にされたいのです。それだけでなく、最もみじめな格好で、辱かしめられ、犯されたい私なのです。

一人より二人、二人より三人、いや四人、五人と、出来るだけ多くの方々に、見られ、辱かしめられ、犯されたいのです。

私は、どんな苦痛でも、快感にすりかえることが出来る動物的な女なのです。ですからマゾ資料作成のモルモット代りのマゾモデルになんか、一番、適しているのではないかと思っています。

編集長さま

再び、お願いばかりで恐縮ですが、もし、奇クにおいて、そうしたマゾ女の資料作成のために、どこの誰ともわからないM女を、三日でも四日でも、檻に閉じ込めて、飼いや殺しにされるような実験がございましたら是非、この私を使っていただけませんかしょ

うか。最もみじめな白豚として、取扱っていただきたいと願っております私ですから、どんなに、むごたらしく取扱われましても、決して異存など申しあげません。

はつきり申しあげて、陽子は見世物になりたいのでございます。檻に入れられて、動物園の動物のように、ケモノとして見世物になりとうございます。四つ這いのケモノとして後から犯される……それが私の最高の願いなのでございます。

また、もし許されますものならば、秘密クラブなんかで、沢山の酔客たちの見守るなかで縛られた全裸の私が、ムチ打たれて牛馬のように、こき使われ、あらゆる体位で犯されるというような女に、なりとうございます。

幸い、体力がございますから、二時間、三時間、いや一晩中、ぶっ続けで責められましても、私は本望です。見物しておられる酔客の方が、飛び入りで私を責めて下さることなんか、最も望むところなのです。

見ておられる男の方々がSMマニアの人であって、私が責められているのを、ご覧になって、きっと興奮されるだろうと想像するだけで、私は物凄くエキサイトします。私はSMの泥沼に溺れ、体中、泥まみれになって、

溺れ死にしたいのです。

奇ク十二月号の塚本さまの書かれましたカメラ・ルポを読まれて、陽子の責められている写真をごらんになって、愛読者のSMマニアの方が、どのように興奮されたかと思えますと、私はたまらないのです。

ああ、陽子が、こんなみじめな格好で縛られ責められているところを見られている。そして、そのときのこと、細大洩らさず文章にされているのを読まれている——。そう思っただけでも、エキサイトしてしまい、どうしても自らを慰めてしまおうのです。

編集長さま

もし、苗木陽子につきまして、いささかなりとも、反響といったものがございましたらどうか、誌上にお載せ下さいますように、伏してお願ひ申し上げます。陽子は、その方の文章を拝見しながら、激しく自らを慰めたいと思います。今のところ、空闊をなぐさめますものとて、こうした事しかございません。長々と、つまらないことばかり書きつらねまして申しわけもございません。なにとぞ、お読みすて下さいませ。

苗木 陽子

奇ク編集長さま



カット・マエダヒオミ

マニアのノート

この醜くて

美味なるもの

特集<北陸飲み食いの旅>

とやま・かづひこ

11月19日(月) 6時、東京発新幹線ひかりは、早朝のためか、かなり空席が目につく。あるメーカーから渉外を兼ねた取材のしごとを依頼され、11号車の中央あたりの指定席に、私は坐った。

東京―名古屋―岐阜―高山―富山―黒部―高岡―金沢―小松―福井―米原―岡山―新見―米子―安来―倉敷―広島―新大阪―京都―東京。

以上のコースを各市役所を訪問し、農協をたずね、取引会社をあるき、幹部と面談し談話をとり、写真を撮影し、テレコ(テーブルコーダー)の録音までやって、そのうえ、営業上なにがしかの成果をあげる義務を負わされている。本来なら、アシスタントを一名同伴するところだが、なまじのお供は、かえって足手まといになるので、一人旅は、私のほうからの注文だった。

そのかわり、取材、日当、接待費は、たっぷり使う、やくそく。だから、大荷物抱えての強行軍も、それほど苦にはならず、八泊九日の旅を、おおいに楽しもうと、名古屋までの二時間は、そんなことばかり考えていた。

飛驒 高山

高山へゆくには、名古屋のりかえ、岐阜經由でゆくのが順路。岐阜では、用事がスピーディーに済み、午前中に、高山線にのることができた。ローカル線は、ガタツと落ちる。うすぎたない車内の上に、ごていねいに前方に濃霧(ガス)発生で、ダイヤどおりに動かず、ついイライラしてしまう。

車内には、名古屋市からという、婦人会の元気のよいオクサマ連中、二〇人が一緒であった。

中年のオバサマたちは下呂(げろ)温泉へ一泊。あすは、高山市内見物の由。にぎやかなのが何よりで、人みしりしない私は、持参のテレコで彼女たちの、のど自慢の録音をサ―ビスしたりして、たちまち仲よくなった。中年のオバサマのなかに、たったひとり、三〇才前後の、色白小柄の和服女性がいた。それが、どうも車酔いの気味らしく、青い顔を伏せ、苦しそうだ。

仲間のオバサマたちは、たのしいふんいきで、病気など気づかぬようであった。

みるともなくみていると、その女性は、十五分おきに、トイレへ立つので、なんとなく気になる。

そのうち伝染したのか、私もトイレの必要を感じ、ソツと席を立った。

ハコのきたなさにくらべて、トイレは案外キレイだった。

水洗の水が、たっぷり出るのも快く、完全に清められるのを見とどけて、用をたし、私は席にもどった。

こんどは、またまた、いれ代りに、れいの彼女が席を立った。

そのうしろすがたを見送って、東京へ置いてきたハズの、私のれいの『クセ』が出るのだから、われながら、おかしくなる。

かなり、ながいトイレだった。

そう、15分はタッピーかかったろう。

やっと、彼女は出てきた。タイムは、大きいほうの、ご用らしい。こうなると、もうジッとしては、いられなくなってしまう。

しかし当方は、たったいま行っただけでまた行くというのも、気がひける。

とはいえ、その美人の入ったあとも、気になつて落ちつかぬ。

一行の目をえんりょして、ガマンすべきかそれとも、おのれの趣味に忠実であるべきか

思案のすえ、もちろん私は、後者をえらんだことは、いまさら言うまでもないだろう。

『となりのハコの、助手に用ができたから』と、居もしない助手ドノをこしらえて席を立ち、一応、通路づたいに、隣をのぞき、

(おかしいな、席にいないや)

とかの思い入れよろしく、とってかえしてさも思いたったふうでトイレのドアを開く。

そのゲイのこまかさよ。

一行は、私が提供したカートリッジのテレコがお気に召して、誰ひとり私のあとなんかに、目をくれようともしない(いささかサミしいが)。

ドアのカギをかけ、便器に目をやって、私はそこに何をみたらうか。

その美人は、水洗を忘れたらしく、便器の底には、白い花びらが、大量に放りこまれてある。彼女のあと、誰も入っていないのは確認してあるのだから、これは彼女の用済みのものにまちがいない。その花びらを持上げたらあぁ、いともカンタンにそれが二つ、三つ。

小ゆびの太さに、コロンと水にひたり、車の動揺とともにゆれている。思わず私は床にひざをつき、目を光らせた。

私が使用後、水をたっぷり流しておいたから、不潔感はない。いや少々の不潔はカクゴだ。こんなチャンスは、めったにない。私はためらわず、顔をさしのべた。

ついに意を決し、小指のひとかけらを持参の紙のうえに、うつした……。

あまり長居すると、怪しまれよう。まして、それを手に入れた、いじょうは、長く止まるのは、無用であろう。

すまして、包みをポケットにおさめ、もういちど、助手のいるハズのない前のハコをのぞいて、ゆっくりと席にもどる。

みれば彼女は、ハイセツが終ったらサッパリしたのであるか、先ほどとは、うってかわって元気になって、私のテレコに、なにやら民謡をいれていた。

(あなたの分身は、いまボクのポケットに入ってるんですよ)

万一、においでもかぎつけられてはいけないので、わざと通路をへだてた反対の席にもどり、美しいその横顔をぬすみながら、つぶやく。

これで今夜のたのしみが、できたというものだ。

汽車は、山路をのぼり、数年前、観光バスを呑みこんだ恨みの飛騨川の流れを、右に左にみつつ、やがて下呂へつく。

『ありがとうございます。おかげで、楽しかったですわ』

小指女史は、私に、テレコを返しながらいふ。美しく、やさしい声音だった。

(どういたしまして。拙者は、これから楽しい思いをさせてもらいます。あなたのおかげでございます。)

そんな、ざれごとを、口のなかで、かみこ
ろした。

目的地、高山駅までは、まだちょっと時間
がある。とても紙包みを、夜までそのままに
しておけそうもない。ガラあきの車内をさい
わいに、四人掛けのボックスに一人占めで、
私は紙包みを開く。

ひるめしは、かねて評判のたかい、高山の
『飛驒弁当』を求める予定だったが、どうも
その必要はなさそうだ。

→見チョレートふうのそれは、少量で満腹
感、プラス不潔感、プラス屈辱感、プラス被
虐感など、金で買えない味覚で私を、なぐさ
め、悩ませ喜ばせるにちがいない。

舌に、そのふくざつな味わいをかみしめつ
私は呆然として、食道を通過する一種の異物
感に戦りつした。まさに、小指の思い出とは
これを言うのだろう。

富山にて

富山駅へ下車したら、日が暮れていた。

まだ宿は、きまってなく、荷物が重い。

ままよ、と、一時預り所へ荷物をあずけ、
夜の駅前を、さまようことにした。

なんとなく、ネオン街のバーへ入って、ハ
イボールをたのんだら、となりに年増の女が
一人、ポツネンとタバコをふかしている。

正体のわからない女性だった。やや男性み

たいな、いかつい顔だちで、色気がなく私の
趣味に合わない、女子プロレスラーといった
タイプ。

でも、彼女が、

(あなた、東京からでしょ)

と、話しかけてきたので、にわかに親近感
が湧いた。

東京、杉並区の生れという。杉並なら私も
六年あまり暮らした、なつかしいところだ。

『あたしのアパート、二間あるの。よかった
ら、泊まってらっしゃい』

そんな、セリフをはかせるまでに、三〇分
とは、かからなかった。

タクシーで十分ほど、くらい道を走ったら
車をとめ、

『ここよ』

と私を、うながした。

そのころは私もかなりの銘酩で、そのおん
ながプロレスラーどころか、ミスなんとか
みの美人にみえてきたのだから、ウイスキー
とは調法なものである。

しかし、二間のアパートは、ウソだった。

裸電灯の佻しい四畳半。家具もろくになく
サケの空ビンだけがころがり、カベには、彼
女の普段着がかけられ、生活のきびしさを語
っていた。

『オシッコなら、階下よ。いまのうちにいっ
とかなないと、暗いから、おっくうよ』

親切に、おしえてくれた。

オシッコの一ことは、急に私の酔いをさま
すのだから、われながら、げんきんだ。

『きみは、どうするの?』

こういうことは、たしかめてソソはない。

『あたし? フフ。そこに、洗面器がある
わ。終わったら、流しにあげるの。水道出しっ
ばなしなら、ヘイキよ』

室内には、三尺間口の流し台があり、おっ
しゃる通り、ピンクいろの洗面器が、ちゃん
と、置かれてある。

ほんらいなら、炊事に使用されるべき流し
台が、専用のトイレ。きけば、外食のため、
ここをつかうのは、洗顔と『水捨て』オンリ
ーの由。

『よし』

私は、心にきめた。捨てるのは勿体ないか
ら、いっそ、流しの代用に、こちらに流し込
んでもらおうではないか。

善はいそげとばかり、さっそく交渉開始。

『バカねえ。きたないじゃない。そんなこと
いやよ』

あっさりノウだが、ここでオメオメ引き下
がるほど当方は、おとなしくない。

けっきょく、いつもの通り洗面器を使用す
るから、そのていどで、ガマンしなさい。と
の返事。

話をここまで持ってくれば、もう成功もお

なじこと。洗面器にとらせれば、いいじゃないか。

『あたしって、量がすくないのよ』

てなことを言うのは、テレくさをかくすためなのであろう。

なるほど、量は少なかった。

コップに一杯ていどの、貴重な分量だったが、そのかわり色はコゲ茶で、なかみが濃くけっこうコクがあった。

夜中と明け方の2回で計2合強。

まことに思いがけないラッキーだった。

朝、調子にのって大きいほうをせがんだ。

『あげてもいいけど、けさはダメ。あたしって、このほうも少ないんだなあ。四日も、ごぶさたなのよ』

洗面器シーンをみせたあとは、おたがいに妙な親近感が湧いて、そんなベンピ談義が、はずんだ。

きけば、イチジクが大好きで、いつも半ダースは用意してあるという。

ひとつ、それを使ってみせて、と、哀願したが、いくらなんでも、それはイヤ、とハッキリ断わられた。名ごりは、つきないし、きょう一日、ここに泊まったら、ゼツタイ、イチジクは使わせられるんだが、ざんねん、汽車の時間がきた。名残りを惜しみつつ、席を立たなければならぬ。

おそらく再会は、できないであろう彼女に

もういちど、とせがんだら、快く三度び洗面器を据えてくれた。とたんに私の面を、妙な風が吹きぬけた。ガスだ。ハナの曲りそうな特有の香氣。

『あら、恥ずかしいわ』

オシッコが、恥ずかしくなくて、ガスが恥ずかしいのは、いささかりクツに合わないがそんなものかしら。

『あなたのこと、一生わすれないわ』

そんなうれしいことを言うてくれるなよ。

当方、酔いがさめたら、再び彼女がプロレスラーに見え（なんでオレは、こんなブスッタレのなんか呑んだんだ）と自責の念。

市役所まで送るワ、というのを振りきって単身、市のオエラガタに面会。ボスは、イスにふんぞり返っていた。このボスに、ゆうべ洗面器の大盃をあけてねえ、てなことを告白したら、ひっくり返るかもしれぬ。なんて、くだらないことを考えつつ、談話を取ったのだった。

高岡にて

早朝、高岡駅へ着いた。

高岡は、金物のまち。銅の置物工場などでむかしから知られている。

とにかく、荷物の始末をしなきゃ、と、駅前の、一時預り所へ、カバンをあずけ、新調のペンタックスSPを、肩にかけて、まだ眠

ってるみたいな、駅前ネオン街をあるく。めずらしく書店が一軒、店を開いており、KK誌の12月号がボツンと、あった。

旅でみるKK誌は、ひととき懐かしく、一冊買い求める。（あとで、これがすぐく役にたってくれることになるのだが、そのときはそんなことユメにも思わなかった）

そこに、小ざれいなホテルがあった。

フロントをたたきおこして、交渉したら、

コミコミ、（税、サービス料込のこと）四、〇〇〇円、ビール一本サービスときた。

ちょうど、フロも沸いたというので、とにかく、そこにきめた。

係の女中は、まだ若く、キビキビと、室内してくれた。

テーブルの上にKK誌をバサッと置いたら彼女の目が光った。

『お客さん、これ読んでるんですの？ あたしも、三年ばかりの読者よ』

ときた。

読者といっても、買って読むのではなく、工場へいってのヒト（彼氏らしい）が毎月、見せてくれるので、いつのまにか好きになり、いまでは、次号が待ち切れないという。

お茶ももってこないで、ひとしきりKK談義に花が咲く。

だが彼女、Mのほうだそうで、塚本さんならよからうが、こちらは、せっかくだが、オ

……イメージギャラリー……『四畳半のモテぶり』……岡 たちし……



ヨビでない。

考えることがあって、一応、軽く応待して朝食をたのみ、九時に一たんホテルを出て、トナミまで取材行。

夕方、また帰ってきた。

乞われるままに、12月号は置いていってやった。

ホテルは、すいていた。

だから、夕めしにも、ちゃんとつきあい、すすめたら、ビールも空けてくれた。

いける口とみて、じゃんじゃん、すすめたのも、お察しの通り、ホットビールを呑んでやろうと思いたったからだ。

そのつमりのチップが効いて、彼女、かん

たんに、水差しにビールをみたして、枕もとに置いてってくれた。

水差しなんかじゃ、いやだ。じかに、とせがんだが、さすがに、堅気のホテル。それだけは絶対ダメ。

そんなことしたら、クビになる。と、お断わり食っては、それ以上ともいえず、そのかわり、そう、コップに、たっぷり三杯はあったろうか、それを置いてってくれたわけ。

冷えたそれには、それなりのヨサがある。私は、コップにとって、淡いスタンドの明りにてらしながら、チビリチビリやった。

まるで、ウイスキーみたい。

呼吸を深く吸いこむと、かすかに舌に、ハッかに似た刺戟が、のこった。

あれだけ、堅気を強調したところを見ると、まずまず病気の心配はなさそうだ。

じかに味わうのは、最高だけど、しかし、こうして、色をながめ、ゆっくり香気をかぎあかりにあてて味わう余裕がない。それよりも、こうして、チビリチビリやるのも一興だろう。

それにしても、KK誌という媒体がなかったら、こんなラッキーな目には会わなかっただろう。

香りたかいそれに酔いつつ、高岡の一夜は楽しく更けていった。

金沢にて

金沢—そう聞くだけで、ロマンティックな旅情が湧く。駅前からタクシーで、ひとまず金沢が誇る名園、兼六園へ。

何かヨキエモノはないかと、いつものようにイヌのようにハナをきかせて、さまよう。

中年の品のよい、小肥りのおくさまふうのそう、年齢は四十才くらいの女性が、ひとり前の小径を足早やにいくのが目にとまる。

どうも、そのうしろすがたがくさいので、とにかく尾行と、きめた。

案の定、その女性は、植込みに消えた。広い園内には、トイレが少ない。

女性は向うむきに中腰になった。腰をズイトおろすのは、まさに排水作業とみえた。

とっさに、ペンタックスのズームレンズをここに、ねらいをつける。

〔伝言板〕○本誌へ寄稿された方、投稿された方、モデルに志願された方、読者通信を寄せられた方々の住所氏名は絶対御安心の上、通信をお寄せ下さい。尚、手紙の転送や、郵送などは双方が納得されない限り原則として取扱いは致しておりません。御理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。電話連絡が必ず必要な際は、当方からその旨を記してお返事申し上げます。

中年の、平凡なおくさん風だけど、おシリはゆたかに、白く丸く、仲々よいポーズだった。いよいよ作業が、はじまった。

ここぞ、とシャッターを切る。ところが、その音の、いやに、でかいこと。

「バシヤッ」

静かなあたりをかきみだす、その音に、私のほうが先にビククリ。

そして、ご本人も、その音を不審と感じたのであろうか、心もち、尻を上げたようだ。

排水は、まだ完了していないのに、あわて、着物をおろす。見つかったのは一大事と、こちら木のかげへ身をひそめる。

そそくさと立去ったのを見届けて、現場へ行ってみた。枯小枝をぬらし、五〇センチほどの尾をひいて、たしかに流れのあとは、そこにみられた。でも、土が乾いているので、それは地面に吸いこまれて、水たまりはなく

これでは手も足も出ない。

ああ勿体ねえと、私は、ためいきまじりに、でも、念のため、その流れのあとをカメラにおさめることは忘れなかった。

立去りがたい思いで、イヌのように、地面に顔を近づける。せめて香りでもと、まだユメを追う私だった。

むすび

さて、北陸をかけめぐり、たっぷり飲み、

且つ、食らった私の旅行報告は、このへんでそろそろザエンドとなるのだが、日程を二日ずらしての仲々に、なかみの濃い旅だった。

福井の宿では、トイレの中の、『紙以外のものは、このなかへ』と注意書きされたツボから、みごとに、レッドリリーフをとりだしたことも、米原のうすぐらい宿で、若い女性と偶然、風呂がいっしょで、たのんだら面白半分は湯ぶねのなかへ、滝のようにしてみせてくれたことも、山陰のまち、安来市（安来節の本場）では、旅館の若いおかみさんが出た直後のトイレで、同様、底のほうに、赤いバラのかたまりをのぞき見たことも、勝山の駅のトイレでは、カベの穴のむこうで、若いセンイ工場の女工さんだろうか、放水のスタートから終了までを、まるでカラーフィルムのごとくおがみ、十五分もドアのなかで釘づけされたことも。まったく、その日その日が、ハプニングの連続。しかし、そんな痴態ばかりを毎日、くり返していたわけではなく、帰京後、徹夜でまとめたレポートは一〇〇パーセント依頼者の満足を頂くことができた。だから、本来の目的は完全に果たしたといえるだろう。

プレイと本業をドライに割切った、私の、夜のほうの報告記、ご笑読いただけたら幸いである。

カット・よみじどり



——体験的 S M 小説——

パ ナ ナ

千 束 美 能 留

〔前書き〕いつも奇クを愛読している一読者ですが、いつか自分も自らの体験をもとにして作品を発表したいものだという希望を抱いてきました。しかし、残念なことに誌上に満ちあふれる縛りや、むち打ちの物凄いやつは到底、経験がなくて駄目でありさりとて、文才、想像力の方も覚束なく、とても書けるとは思えませんでした。たとえベテランからは他愛のない話だと思われるでも、奇クの読者の中には、実際に物凄

♡

夏の日の夕暮れ前、街が一日中で一番、賑わうときであった。私は商店街を抜け交差点を左折し、大通りに出て、そうした車や人の波を、ぼんやり眺めながら、トルコ遊びも今日を限りに少し遠ざかろうかと呟いた。

私は二十八才になる独身で、性欲を月四、五回の割で、もっぱらトルコの本番で、はき出してきた。ために私の稼ぎの半分以上は、この種のための出費となる。父が鋳物工場を経営しており、一銭も家に入れずに、親に寄生している身で、小遣いには恵まれていた。

その日も昼過ぎ家を出て、ロックをうろつき、千束通りの喫茶店でコーヒーを飲んだりして、旧吉原のトルコに行ったのであった。

その日は、気紛れから、前の日曜日に来た

ことを行なうことが出来ず、私のような程度のことで満足しておられる方もいるのではないかと思い、恥を忍んで書き上げました。

なお、私はその後、浣腸も経験し、ようやく、縛りなども、そのうち行なうことができるのではないかと思っています。この告白小説の反響如何では、次回次々回と自分の体験に基づいて小説形式で書いてみたいと思っています。

とき、ほとんど出来上りかかっていた新しいトルコに行ってみる気になった。

受付のおばさんに呼ばれて現われた女を、一目、見て失望した。新しい店とは対照的にいかにも、この商売を渡り歩いた感じの女であった。新築開店のトルコなら、それにふさわしい新鮮な女がいるとの錯覚があった。むしろ、トルコ遊びに慣れた私なら、新しい店程つまらぬ女が多い、つまり、あちこちの店を渡り歩いた、客扱いだけ上手な女が引抜かれて来ていることを、経験として知っている筈であった。前の日曜日に、この店から左程離れていない『松』というトルコで始めて対した女と、次回は小水をして見せてくれる約束をしていた。そのことを改めて思い出し、後悔しながら階段を昇った。

浴槽に身を浸している間も、背中をぞんざいに流されているときも、ここは本番も何もせず、一回分、浮かそうかと考えていた。入浴料千円はともかく、チップは本番なら五千円が相場だが、何もしなければ五百円ですむからである。

しかし、おざなりのマッサージをすませた女に「何かする？」と聞かれると、私の女体というものの度し難い好奇心が、むくくと起き上り「本番あるの？」「あるわよ」「いくら？」「五枚ね」「じゃあ、やろう」と相成った。こんな顔つきの女は一体どんな持物だろうか、という好奇心があるのである。

結果は、さんざんであった。女は下だけしか脱がず、私が「見せて」と哀願するような声を、できる限り、やさしく籠めて、顔を近づけるのを「なにをするのよ！」の一声のもとに、私の手を乱暴に、はねのけた。

前述のごとく私は、ほぼ毎週、トルコで本番をしているのだから、女体経験の乏しい男や一カ月に一度位の男のように、女が股をひろげたからといって、直にどうできるものではない。

金は前金で渡してあった。返してくれる筈もないし、この俤では、みすみす丸損になる

のがわかっていた。何とかしなくてはと焦り力むのだが、一向に、ゆうことを聞かない。

途方に暮れながらも、ひたすら哀願する体をつくって、じっくり見たり、指で愛撫したりしないと、うまくいかないのだがと、両腕を顔の上で交叉させて、ふてくさった女に甘えるように、いった。

女は、さも面倒だといわぬばかりに起き上りながら「洗っていたときは、あんなに元気だったのに」と詰ったが、それでも、私の甘えが利いたのか、女の顔色を窺いながら、指をそっと持って行ったのを拒みはしなかった。

♡

店を出てから、ずっと、私を憂うつな思いが支配していた。あの商売女と、ことを終えた後の、けだるい後悔の念が、さっきの女とのやりとりの情景とともに、何度も蘇った。

店に入る前、もしこの店で、あまり楽しめなかったら、サービスも良く容姿も好みに合った、この前の女に入り直せば、気持良く家に帰れると決めていたのも、何故か失せた。小水をして見せてくれるといったって、始めての経験でもないのだからと思ったりした。

商店街に出て、やや気を取直し、パチンコ屋に入った。時がたてば、生理的にも、再び

やる気が起こるかもしれないと思ったからである。

しかし、この助平さでは、そう人には引けを取らぬ筈の私が、ますます、その気から遠ざかった。トルコ遊びという、女を扱うという行為が、つまらぬことと思えてきた。私はこの種の女には、割とモテる方だと思って来た。事実、人に語りたようなことを、してもらったことが度々あった。しかし、それもこれも、女にとって、しょせん私は、遊び慣れた多少、好感の持てる客に過ぎないのではないかと思った。むろん、女がどう思おうと私自身が悦びを感じるのなら、それで良い事なのだが、思い出しても、身心共に痺れるような快感というのは、まず味わえなかった。やがて、パチンコ屋を出た私は、何としても、身を灼き尽すような快楽に溺れてみたいものだ、と思いながら商店街を歩いていった。

♡

大通りは、さすがに人通りも少く、歩みとともに、次第にさびれていった。いつも通いなれた路であった。あたりは、やや暗みを増し、夜が近付いていった。

ふと、私の進む歩道の前方に、一人の若い女が立っているのが眼に入った。私の方を見

ているようでもあった。

私が近付くと、女は私の少し先を私の進む方向へ歩み始めた。私と女の外には、ほとんど人影はなかった。私は意識して、サンダル
の足音を高くさせ、出まかせの流行歌を口ずさんだ。

しばらく、そのまま雁行して、女の肩あたりに、女も私を意識していることを肌で感じてから、歩を早めた。

女に並ぶと、そのまま、女の足並みに揃えた。女の背は私の肩程であった。ほとんど肩を付けるばかりにして、並んで歩く間、女は再三、私の顔を下から覗きこんだ。光線の具合で、女からより、私の方が女の顔が良く見えた。いくらか、きつそうだが、整った顔であるのに驚かされた。誘えば、お茶ぐらい付合うだろうと感じたが言葉が掛けられない。私は高校生の頃から、女に好意を見せられることは、度々あったが、どうも誘うことのできない性質であった。

諦めて、足早に立去ろうと、少し女を引離しかけたとき、女が、上ずった声を、

「ねえ、あなた」

と、私の背中に浴びせてきた。休業中のガソリンスタンドの前であった。

女は、一米位、離れて私に向かい、早口に

一番仲の良い女友達と喧嘩して、頭にきたがヤケ酒を飲むには、まだ早いし、一人で映画を見るのもつまらないし、と、あれこれと迷っているところに、私が来たので声を掛けたのだと、あちこち忙しく視線を動かしながら言った。

女は、やや瘦型で美しい顔立ちをしていたが、その顔から、あまり幸福でない生い立ちだったのだらうと思われた。

女から話し掛けられた気安さから「どう？ 良かったらお茶でも交際つぎあわない」と、微笑みながら割とスムーズに誘えた。



喫茶店での二十分程の雑談の後、あっけない程、簡単に、つれこみ宿に直行した。

宿に落ついてからの女は、それ迄の下町娘丸出しの、やや、伝法な軽口が、すっかり引っ込み、狭苦しい部屋の中を落着きなく見廻したり、急に、ぶすっとした顔付きになったりして、黙りこんでしまった。

いつも商売女を相手にしていて、金の交渉さえ終われば、さっさと女の方から裸になるのに慣れている私は、すっかり、うろたえてしまった。

しばらくして、やっと女が、

「明るくては恥ずかしいわ」とポツンと、いった。

その言葉に弾かれるように立上って、豆電球だけ残して明りを消すと、そのままの位置に座り込んだままの女と背中合わせになって着物を脱いだ。裸になってから、まだ部屋の鍵をかけてなかったのに気がつき、女の脇を抜けて、入口に向って座っている女に全裸の背中を向けながら鍵をかけた。

そのとき、狂暴な何かが私をけしかけた。くるっと一回転して、まともに私のものを女の眼前に剝出しに突付けた。女はアッと驚き一瞬、後退った。その虚をつき、勇をふるって、のしかかっていった。

やがて、女は、
「着物を脱がせて」

と、恥かしそうに囁いた。

殆ど女は、なすがままであった。指を活躍させ、撫でさすり、広げて見、嘗め廻し、しやぶり、……トルコ遊びで習得した技術の有りったけを女に注いだ。その度に、女は恍惚の呻き声をあげ、身体を、激しく揺り動かし

すべてが終ると、やや潤んだような眼をし

て、女は、

「貴男って、すごく御上手ね。こんな気持ちになったの、始めてだわ」

といい、私を喜ばした。

女は着物を着終ってから、少し、もじもじしていたが、すまなそうに小声で、

「いくらか、お金、借してくれない？」

といった。

私は、煙草をゆっくりと吸いながら、この次、会う約束をしなければいけないと思ったり、女から誘ってきたも同然の経緯からいっても、そのことに対する金銭的要求があつてしかるべき筈なのが、行為後迄、言われないのを交に思ったりしていたそんな訳で、女から請求されたことで、むしろ、ほっとした。

「いくら？」

「どうしても、ほしい洋服があるのよ。あと二、三千円もあれば買えるのだけど……、私って、ほしいと思うと何がなんでも買いたくなるの。お給料日迄、待てないのよ」

「……………」

「必ず返すわ。この次も会ってくれるでしょう？」

女は私の顔を窺った。私は黙ってズボンのポケットに、手を差入れた。七、八千円は

ある筈であつた。丸められたままに取出し、そのうちから、四千円を女に渡した。

女は、両親は無く高校生の弟と二人暮らしのこと。弟の学費迄、面倒を見なければならず喫茶店勤めでは生活が大変なこと。しかし、こんな風に男を誘うのは生まれて始めてなのだとかを、私が問質しもしないのに、独り言のような口調で語ったが、女は私あまり無口なので、怒っていると思つたのか、

「お金は、必ず返すわよ」

と、ややヒステリックにいった。

私は別段、金を返してもらふ事を、あてにしていなかった。それどころか、四千円をやってしまったことにしても、いつものトルコ遊びと比べ、充分堪能できたし、安い買物だったと胸算用していた。私が女に八金を返さなくてもいいよVと言わなかったのは、貸借関係のままの方が次回から私の思うがままに行なうことができる気がして、わざと曖昧にしていた。自然に、私の女をいじめたいという苛虐性が意識の中に湧出てきた。

私は、その種の雑誌や単行本を密かに愛読していて、燃えるような憧憬を抱いてきた。トルコ遊びでは所詮、満たされない。せいぜい小水をさせて見たり、変った型で行なつて

いくらか、その気になつてみる位である、それも、相手は単なる商売上で、羞恥心を失つた彼女らでは、女をいじめるという気持ちからは程遠い。

この女となら、いきなりといつては無理だろうが、長く付合つていれば、望みを叶えられると思ひながら女と腕を組んでいた。



次の日曜日。休日には、いつもは昼過ぎ迄寝ているのが、九時には起出し、家族を驚かせた。日曜日としては、久しぶりに家族と一緒に朝食をして、しばらく、テレビを見たり新聞を読んだりしていたが、落着かず、昼前に家を出た。

私は、この一週間、その女のことばかり考えていた。女のことを考えるというよりは、次に会ったとき、どのように遊ぶかと思ひ巡らし、ふと、縛り（それは、雑誌の写真や、ピンク映画で見ただけで、むろん未経験であつたが）が頭に浮かぶと、しばらくは、仕事中でも、女の裸の姿態を思い浮かべ、柱に縛り付け、脚を、宙に吊り上げ、開き、彼女の××××を丸見えにし、私の指、舌が責めている。白日夢は次から次へと……。

毎夜、自室に籠つて、雑誌を何冊も今迄に

イメー
ジャリー
『剝玉子』 小川茂正



ない熱心さで読み耽ける。この種の雑誌を読んでも、それ迄は自分には、とても経験不可能な絵空事として、読んでいたのが女との出会いによって身近に感じられ、実感を伴って身に追ってくる。

しかしながら、いきなり縛りを持出して不安があった。色々思い悩み、ある号の雑誌をパラパラ捲くっていて、一枚の写真に眼がいった。それは全裸で縛られた女が股を開いていて、その前にバナナが置いてある写真であった。バナナ責めという文句が、その説明に書かれてあった。

その写真を見て、私は『バナナ責め』の文字に深く引付けられた。これなら、できそう。まず、これからやって行こうと思った。

♡

家を出た私は、浅草に直行して、少しづらつてからピンク映画館に入った。女が三人のヤクザに無理矢理、裸にされ犯されたり、柱に縛り上げられたりする画面を見ているうちに、私の脳裡には、その日、会う女の顔が浮かび、さらに、女とのことが首尾良く行くかどうか、気になりだし、落着かず、三本立のうちの一本だけ見て、外

に出てしまった。

やがて、足はいつのまにか、ロックと旧吉原のトルコ街の中間の、いつも私の通う、商店街を進んでいた。

果物屋の前を通るたびに、店先に陳列された、黄色く熟した果実の、そり返った張りを一瞬、はっとして、思わず赤面し、店員や近くの通行人に心中を見透かされたような気持ちになった。何軒もの果物屋の前を行ったり、来たりして、ようやく、客の途絶えていた果物屋の店先で、一山二百円のパナナを買った。

約束の二十分程前に、待合い場所の喫茶店に行き、女を待った。

女は、四時きっかりに現われた。席に着くやいなや、

「待った?……どう、この洋服? 貴男にお借りしたお金を足して、買ったのよ。見て……」といった。

私は曖昧に笑いながらお世辞を、いった。

「なかなか、似合うじゃないか」

「そう。貴男に喜んでもらって、嬉しいわ。

……それにしても、一週間って随分、長いわねえ……。あれから、ずっと貴男のことばかり考えていたわ」

と、嬉びる眼付きをして、女は私に顔を近づけてきた。

女の顔を見詰めながら、バナナのことを、どのように切出したら良いかを考えていた。

「早く二人だけになりたいわ」

注文したソーダー水を、半分程しか飲まずに、女は促した。私の左手には大事そうにバナナの房が入った紙袋が抱えられていた。

♡

連込み宿の立並ぶ裏通りに着くと、私は、この前、遊んだ旅館を避けて、いくらか上等と思われる旅館へ女を連込んだ。

部屋に案内されるや、入口の座敷の隅へバナナの包みを置き、△暑い、暑い▽を連発して、素早くパンツ一枚になる私に、チラ、チラッと視線を向けていた女が、

「先にトイレに行かせて」といった。

小水だけだろうから、すぐに出て来ると思っ、座敷の真中で扇風機の風を裸の胸に受けていたが、女がなかなか出てこないの、これは大の方かと思うや、ゾクツとした感興が頭を突き抜け、無意識に、便所の方へ抜き足で進んだ。

女は扉の鍵を掛けずに用を足していた。私は、いきなり扉を開け、驚く女を強要して、

私の眼前で、排泄させたいとの思いが忽然と湧きあがって来る。

しかし、かろうじてその行為を押し止め、左耳を、扉の隙間に押し付け、全神経を集中した。聞こえる。その中の物音は、すべて。

女の△うん▽と、かすかに力む音も。

やがて、ちり紙を手で揉む音が聞こえたので、あわてて、それでも拔足でもってトイレから離れ、扇風機の前へ戻った。

私は座ったまま脚を伸ばして、パンツをぬいで、女の出て来るのを待った。

女は笑い顔をしながら、

「ごめんね。なかなか、出なかったのよ」

と、私に傍に座って、

「あら！ もう脱いじゃったの。あせってるのね」と、いった。

私が、ひと風呂浴びている間に、女は浴衣に着替え、蒲団の敷かれてある奥の座敷に寝そべって待っていた。一緒に風呂に入るように誘っても、恥ずかしいからと断わり、それでは私のあとで一人で入るようにと勧めても風邪気味だとい、入ろうとしなかった。

私は濡れた身体をバスタオルで拭きながら頼まなくても飛んで来てやさしく拭いてくれるような女ならなあと思ったが、かえって男

が寄添ってくるのを寝床で、じっと待つ方が男ずれをしないと喜ぶべきかと思い直し、

トルコの遊び過ぎかと苦笑し、怪しげな赤電燈に、かすかに点された女の待つ寝所に座り込み、女の浴衣の紐を、ほどきに掛かった。

女は観念しているといわぬばかりに、眼をつむったまま、胸の上で合わせられた両掌を開いて、私を受入れた。

そのとき、はっとバナナのことを思い出した。隣の座敷に取りに行こうと思ったが、女を興奮させた方が、変態的な申し出を承知させられそうな気がして、よし、まだまだと口の中でひとりごち、女の浴衣を両方に開いて行った。

女の唇を吸い、そのまま唇を喉に走らせ、胸を舐め廻し、絶えず、右掌で女の……を愛撫しながら……。女は少しずつ脚を上にならずに、せつつ開き、やがて、足裏が蒲団のシートから離れていった。かすかに呻き声をあげ、私の舌は、やや縦割れの脛を通して、女のもっとも女らしい神秘なるものへと……。

やがて、女は

「もう……で、……てしまいそう……。だめお願い……」

と、泣くようにいった。

私は「よし、ここだ」と意を決すると、や

さしく作った笑顔を、女の顔に近づけ、

「ごめんね。俺は、女の人を悦ばす方が好きだから……。もう……。するから。……。その前にトイレに行ってくるからね」

女から離れ、トイレに行く振りをして隣の部屋に急ぎ、バナナを二本、房からもぎって一本の皮を剥き、手に持って女のところに戻ると、

「疲れたろう。どう、食べない？」

と、皮の剥いた方を女に差出した。

「丁度、喉がかわいているの。頂くわ」

と、女はいつ、口に持っていった。

私は、食べる振りをして手に残った、もう一本の皮を剥きながら閉じられた女の脚を開いて股の間に座ると、唇を、そっと女の……へ持っていった。

しばらく、女の……を、やさしく……して頃はよしと、「バナナ入れちゃう」といいつつ、濡れた女の……へ……てた。

女は口にくわえていたバナナを、あわてて吐き出した。

「嫌よ！ そんなこと、汚ないわ」

と、いいながら顔を持上げて抗った。

「食べちゃう。食べちゃうから……。いいだろ

う。奥迄、入れないよ」

右手で女の両脚の膝裏を押さえ、上半身の重みを加えて、女の身体を海老のように丸めて、顔を女の……へ近づけ、左手に持ったバナナを、ゆっくり……。んでいった。

バナナは、すぐ、途中で折れ、そのまま見ていると外に吐き出されて来そうになった。あわてて、バナナを持つ指から、薬指と小指を離して、薬指を使って丁寧に押入れ、再びバナナを握り直して……。った。

「少しだけよ。奥迄はいやよ、気持ち悪いわ」

と女はいい、腰を、もぞつかせる。

私は、身も心も、えもいわれぬ恍惚感に満ち、その興奮は極に達していた。

真夏の炎暑に熔け出したアスファルトのように、ぐにやぐにやして、白茶けたバナナを指を……。れ、掌で押し、舌で……。、ゆっくりと感触を楽しんだ。

やがて、どす黒い情欲の虜になった私は、両手で女の両脚を押え込み、……。した……。を挿入物で一杯に塞がった女の……。へ……。ていった。

「うわっ——、やめて！ やめて——。ひどいわ……。、やめて！」

女は激しく首を左右に打ち振り、身もだえ

て絶叫した。

あまりの大声に、外に聞えはしないかと、狼狽し、繋がたまま腰の動作を止め、上半身を倒して、女に……。ぶさり、両手で女の顔を押し込み夢中で唇を奪いにかかった。

女はのけぞって、よける。しかし、やがて観念して、唇を合わせる。

しばらくして、静かに……。を……。いて、女の両脚を開かせ、右手の親指、人差し指、中指を使って、ぐにやぐにやになった果実の残骸を取り出そうとするが、旨くない。

始めてのこと故、私は、さすがに当惑したが、よし、五本の指でなら事は簡単、まさか毀れはしまいと思^{もた}った。

その残虐な考^{もた}えが頭に抬げると、再び胸が高潮し、さもおどおどした調子で、「大変だよ。手を……。れなくては、とても出ないよ」といった。

「嫌よ、嫌よ。やめてよ」と、女の言い終らぬうちから、右手を……。と……。た。

「ギャッ!!」という悲鳴と共に、女は激しくのたうち、

「早くして、早く……」と哀願する。

温水に漬けられたように、生暖かく、どろ

っとした感じの抽出物を掌にのせ、ほの明りで、顔を近付けて見つめ、匂いを嗅いでいたが、がぶっと、噛み付いた。

口いっぱい広がったその味は、この果物本来の甘さは消え、ただ酸っぱいだけで、美味とは程遠い代物であった。

むせびながら、半分程を嚥下した私は、大の字にぐったりとしている女に「食べる、食べる」と迫って、胸におっかぶさり、右の掌に、まだ残っているやつを、女の口許に近付ける。

女は眼をむき、「いやーん」と懸命に逃れんとする。

あまりの抵抗の激しさに、これ以上、強要するのは、どうかと諦め、女が枕許に用意して置いてあった懐紙で、掌のものを拭い、肩籠に捨てた。

それを境に、私は気持ち次第に落着き、あまり強烈にやり過ぎたか、少なくともバナナを……するだけに止めるべきであって、さらに……したのは、一回目としては、やり過ぎではなかったかと、反省の気が起こり、女の顔色を、そっと窺う。

女は放心し切った風で、あらぬ方に眼をやっていたが、「ごめんね」という私の声に、

じっと私を見詰めたが、すぐに「ふん」と拗ねたように、横を向いてしまった。

私は途方にくれ、萎えた一物に目をやって見た。少しして女は、すっと起上がり、

「もう帰ろうか？ 身体を洗って来るわね」と返事も待たず、風呂へ立って行った。

やはり女は私の変態的行為に呆れ、怒っているのか、と悲観的な気持ちが広がり、ぼんやりと風呂場のお湯の飛沫する音に注意をひかされながら、蒲団の上で腕を組み、天井を見上げていた。

風呂から出た女は、物もいわず、さっさと着物を着始める。着終わるとハンドバッグを抱え、私の傍に正座して、

「ねえ、もう出ましようよ」といった。



旅館を出てからも、女も私も、無言であった。金は五千円札一枚、帰りがけに渡してあったが、そのときも女は、有難うも言わずに受取った。

人通りの多い商店街に出たところで、私は唾を呑みながら女に聞いた。

「喫茶店へ寄らない？」

「うん」

と一言、女は頷いた。

やがて、行付けの喫茶店に女を案内して、入ろうとしたところで、女はフト立止って言った。

「ねえ、貴男って、いつも、あんなことするの？」

「いつもって、そんなに、女の人と付合ったことないもの」

私は咄嗟に答えた。女は

「突然なので、びっくりしちゃったわ」と、始めて笑顔を見せた。

喫茶店で向い合って、女の方から、

「この次は、いつ会えるの？」

と聞いてきて、私をほっとさせた。

すでに暗くなりかけた大通りを、一人歩きながら、先程のしよげぶりは、どこへやら、妙に自信に満ち、女が終ってから素気ない態度を示したのも、始めてのこと故、驚きと恥ずかしさのためで、決して嫌だったのではないと勝手に決め、よし、この次は、もう一度バナナをして、その次は……と、次々と妄想とも願望ともつかぬものを、頭に浮かばせていた。

——(おわり)——

美貌のサジスチン春日ルミの偽らざる告白



春日ルミ近影

舌人形

との

Mプレイ

春日ルミ

暮夜ひそかに、自分の過去をふりかえって
みますと、私の半生は、自分の意志に正直に
生きてきたということに誇りに似たようなも
のを感じます。偽りのない人生を曲りなりに
も送ってきた私は、自分の性癖に対しても極
めて忠実であったが故に、こうして、一風変
ったサジストの女として見られるようになって
しまったのだと思います。

女性のなかには、私と似たような性癖、即
ち所謂、Sという性格の持主も案外、多いと

思うのですが、その人が無知のために、その
何たるかを自覚しないか（実際に私も奇クを
見るまではSMについては深くは知りません
でした）或は、知っていても、勇気を出して
それを外面に現わさないかのどちらかです。

その頃の私は、Mフォートの写真撮影がある
という連絡を受けますと、その日までの二、
三日は楽しくて、何だか落着かなかったもの
です。前日の晩なんかは、こういう縛り方を
しよう、ああいう責め方をしようと、いろい

ろ考えて、眠れなかったくらいです。

暇があると、百貨店を回って責めの小道具
になるようなものを買求めたりしました。

その気になって街を歩いていると、案外、
責めに使えるような物があるものです。日曜大
工の材料を売っているコーナー、台所用品売
場。それに屋上なんかで小鳥を飼ってあって
ペット用品を販売している場所では、犬の首
輪やくさり、それに調教用のムチなんかも並
べてあります。操り責めに使おうと孔雀の羽

を買ってきた時など、「やはり、女の方の責め道具の見方って、やさしいですね」と云われたものです。

私が男性を責める時には、鋼線入りの鞭で力一杯打って血を流す様なのは好みません。麻縄で海老責めにして放っておいて、肌の色が変色するまで眺めているなんて云うのは、

いくら相手がそれを好んでいても、私は少しも快楽を感じません。むしろ、哀れさと軽蔑の眼で、冷やかに眺めるだけです。人によっては「ルミさんの、その冷たい軽蔑しきったような目で見られるのがたまらない」という時もありました。

Mの男性って、女性とは違って、はっきりしていますからね。例えば、私が強い口調で「洋服も下着も全部、脱いで裸になれ」と命令しますと、大概の男性は、暫くもじもじしていても、やがて仕方なさそうに、自分で洋服を脱ぎます。まあ、シャツぐらいまで

の段階はいいのですが、最後のパンツになると、そこで脱衣の手がとまるのです。

私の罵声とかムチが飛ぶことになるのですが、もう、その頃になりますと、明らかに、男の興奮していることが、パンツの上からでも私の眼に、はっきりとわかります。それだからこそ、一層、男はパンツを自らの手で脱

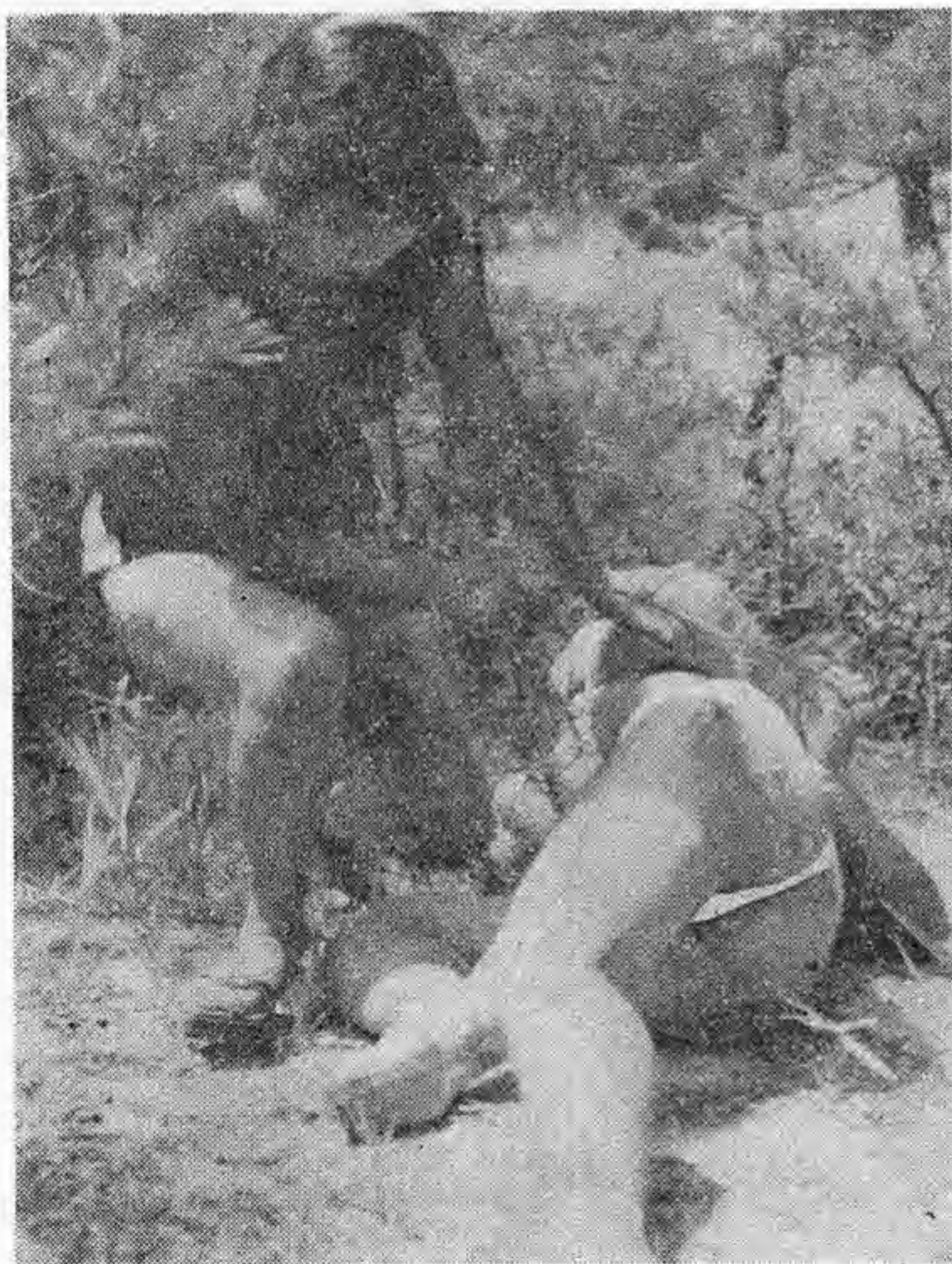
ぐことを、ためらうのでしょうか。

私としては、何としても、彼自身の手で、自らのパンツを脱がさせたいのです。みじめな男の裸を、衣服をちゃんと身にまとった女主人の私の前に晒させたいのです。

「私の命令が聞えないと言うのかい？ 脱げなければ、脱ぎたくなくなるようにしてやるっ」

そう言って、私はムチで男の脛や太腿を、ぶつのです。ハイヒールの踵で足の甲を踏んでやったこともあります。大概の男性は気の毒なくらいあわてて、パンツを脱ぎます。

その時の一瞬が私は大好きです。M男性は私の目の前で、これ以上は……ならないくらい張り切って立っています。それは見事と言いますか、咄々と言いますか、本当に素晴らしい眺めです。彼の周章狼狽ぶりを思うと私は、愉快でならないのです。そして、私は、目の前の男に対して、完全に優位



に立っていることを自覚して、思わず快感にむせます。

男は、自分の意志とは違って暴走する眼前の肉体的変化に対して私に対する隷属の気持を一層、しっかりと確かめるでしょう。それから、極めて従順になります。

私は、それを、いろいろと言葉さたなく揶揄して罵りますが、それによって、男性は消え入りたげに、羞らっています。そんな風情を見るのも私は大好きなのです。

椅子に腰を下して足を組んで眺めている私の前で、全裸の哀れな姿を晒しているM男。私が罵っている間は、彼は小さくならないので、それはそれは、素晴らしいというか、見事というか、それこそ、それだけで、SMの絶妙の醍醐味を私は味わう事ができます。



ムチの先とか、指の先で、殊更、色とか形を下品に批評しながら弾いてやりますと、相当長時間、保っているものです。そうになると彼は、もう完全に私の言う通りになる奴隷になり下ってしまうわけです。

それから以後、彼の興奮度は、まるで寒暖計のように、私の目の前で、はっきりと数値

を示すことになります。男性という者は、そう長時間ずっとそのままにいるということは大変であるという事を私は知りました。

そんな時、尻にムチを一発くれてやると、忽ち元気になる事も知りました。もっとも、余りプレイが長時間に亘った時など、一発や二発では、元気が回復しない事もあります。

縄で縛る時、面白い場面を見た事がありました。後手首を縛り胸へ一巻きしたら、少し元気になり、二巻三巻きと締めつけてゆくと、角度がぐんぐん増してゆくのです。完全に縛り上げて縄止めした時、それは最高度に達していました。

それから私の責め——決して手や足を使ったり、道具を用いたわけでもありません。

只、言葉で責めただけですのに、その仁王立の先からは、たらたら……と、液体が垂れてきたのです。私が、何一つ手を下さなかつ

たというのに……。

女体責め——の際も、よく私は、アシスタントとして責め役の方と同行したり、或は縛りの手伝いをしたり、時には、私も女を責める役を買って出たりしました。そうした経験から見ますと、M女性の方が、しぶとい様に思えてなりません。言えばM男性の方が単純なのです。ですから、どちらかと云えば、私は男性を責める方が好きです。

男性を責める時の方が熱意が持てますし、また、後の楽しみも大きいのです。しかし、数あるM男性の中には時たま、全く不能の人もあります。例えば私に対して舐陰の奉仕をやっている際でも、顔面は紅潮して汗みどろになり、口はハアハア喘いでいても、あちらの方は全く平静そのもの、異常なし、なので



す。数度、MSプレイをやった人ですが、いつも、そうでした。喜々としてやってくる所を見ると、M的興奮度は相当なものです。アノ方は全く駄目でした。

気立も優しく大人しくて、まるっきり女性的でしたが、Mプレイとなると、執拗で貪婪なばかりでなく舌戯の方は素晴らしく、達人の

域にありました。それで、私はそのM男性を「舌人形」と勝手にアダムしていました。

T氏に、「舌人形」の事を話したら、「よし、それだったら、その時の場面、特に君ののけぞった顔面を撮るから、一緒に行こう」と言う事で、三人プレイをした事がありました。舌人形氏は、私の話に非常に喜んで

「ルミ様とT氏のお二人に責めてほしい」と大いに乗り気でした。

今までの「舌人形」と二人だけのMプレイの時と違って、T氏が一枚加わっている事で私は凄くハッスルしてしまいました。殊に、『舐陰の儀式』の際に、T氏がスナップ用の小型カメラを持ち出して、その時の私の顔面ばかりを連続撮影しだしてからは、今まで、かつて味わった事のない快感に、思わず取り乱してしまっ、それはそれは凄いい形相？ と叫喚を露呈してしまっ、たものです。

写真を撮っているT氏も凄く興奮していることは、そのカメラの扱い様でもわかりました。私を中心とした三人それぞれ、各々の立場で、最高度の満足を得たのは勿論の事です。この三人プレイが、このままでは決して終わってしまう性質のものではなかったのは勿論の事です。これを第一次のプレイだとすれば、第二次は、私とT氏との交歓を舌人形に見せつけるというSMプレイに発展してしまっただけです。不能者の舌人形は、引立役の道化師を勤め終えろと、指をくわえて眺めていなければならなかったのです。

もっとも、果たせなかった自分の分身としてT氏のスタミナ抜群のハッスルぶりを目の前にして、ある程度、慰めていたのかも知れません。びっくりした様な顔つきで、それでも熱心に見ていたのですから……。

第二ラウンドが終って、第三次のMSプレイは、私とT氏と二人で、舌人形を責めるといふ構成になってしまいました。これは、今回の儀式のスポンサーである舌人形氏に報いるためのT氏一流の配慮であったのかも知れませんが、実際は、疲れている筈の私達二人にとっても、非常に興味がありました。

美味しい御馳走を一遍に満腹する迄食べて

しまわずに、後に残しておいた別口の御馳走を、ゆっくり食べている様な気持ちでした。そればかりでなく、つい、さっき食べた御馳走の素晴らしい味が、再び思い出されるといった関連性のある楽しいプレイだったのです。

素裸にした舌人形を後手首縄縛りにした上で、余った縄で両足首を揃えて括り、いわゆる

逆エビ縛りというのにしたのです。くるりと仰向けにすると、彼の前面が全く露呈してしまいます。男性は女性と違って、足首を揃えて縛ってあっても、無防備に裸身を晒しているという感じは強いものです。

私は舌人形の顔の上に、ぴったりとお尻を据えました。私のお尻で鼻も口もふさがれ



て、彼は殆ど窒息寸前です。それに、もがけばもがく程、首縄が締まってくるのです。なんとという息苦しい地獄責めでしょうか。

T氏は舌人形の下半身の責めを担当しながら私に対して責め方を、いろいろアドバイスしてきます。男女二人の体重の重圧の下に下敷きになった後手首の疼痛を訴えるまでもなく、伸ばすに伸ばせぬ足首に喰い込んだ縄目は全く凄いものでした。

私は、もう舌人形の顔の上に、でんとお尻を据えているのが、やっとで上半身は、くたくたとT氏の方へ倒れかかってゆき、窒息寸前で必死になってもがいているM男に僅かに呼吸をする自由を与えていました。

舌人形の吐く荒い息は見ないでも、私には、よくわかっていました。それは濡れたお尻の肌で直接に感じていたので。時々パツとお尻を浮かして、股の下から覗き

込んだM男の顔といったら、鼻といわず、口といわず、頬、顎、それに額に至るまで、それはそれは、大変なものでした。

そればかりではありません。T氏が、「こいつは無反応だよ」と言って、さんざん責めておきながら、でんと裸のお尻を、その上に据えて私の方を向き、唇と唇とを合わせて、強烈に吸ってきたのです。上の唇と下の唇と

を同時に刺戟されるということは、これは耐えられないことでした。でも、T氏は、更に私の上半身でも一番弱い個所に、両手で攻撃を加えてきたのです。

二人の男女の下敷きになっている舌人形はそれは哀れなものでした。後手逆エビ縛りで上向きに寝かされているのですから、仰向けでそりかえったようになったまま、手も足も

自由がききませんから、もう、どうする事もできないのです。只、僅かに彼を救っている事と云ったら、マットレスとフトンが、その縛られている手首の痛さを軽くしている事です。いや、今の彼にとっては、手首の痛さなんか、感じる余裕なんかなかったでしょう。

私の上半身が前屈みになる事によって、僅かに、お尻のすき間から、やっと呼吸する自由があったのでしようが、自分の唾液やなんかで、顔面と私のお尻との密着度が増してきていたのも事実ですから、まるで濡紙をかぶったように、呼吸困難から酸素欠乏という、この世の地獄を味わっていたわけです。



目も見えず口もきけず、ただ暗闇の粘膜責めの中で、舌人形の苦悶。そうです死寸前の緊迫した責めが続いていたのです。それは私にとっては、ほんの、自分の快樂のための遊び（プレイ）であつたかも知れませんが、彼にとつては、まかり間違えば死を賭けた必死の行（ぎょう）だったのかも知れません。

あとで舌人形に聞いた話によりますと、その一瞬の恍惚とした状態はまるで天国の花園をさまよっているようで、いついつ迄も、そうしていたいと強く願っていたという事でした。でも、現実の私とT氏とは、もっと、もっと人間くさい、生ぐさい事をやつてのけていたのです。もし舌人形がM男として、仮にあの方が元気だったとしたら、私は彼をこのような縛り方にしておいて、女上位を実行していたかも知れません。

どうしても女上位になりたい私。そうしてM男を責めているルミを犯したいVという衝動を捨てきれないでいるT氏。その二人の要求と期待の妥協が、舌人形の身体の上で、奇妙な形で行われたのです。

私は、遅いものに貫かれながらも、女上位を全うしていました。しかも、M男の舌人形の身体の上で、——。T氏もまた、自分の

膝の上で私を爛熟した一個の女として翻弄し去つたのです。それは長い時間のようでしたが私にとつては、マッチの軸が燃えつきるような須臾の悦樂でした。

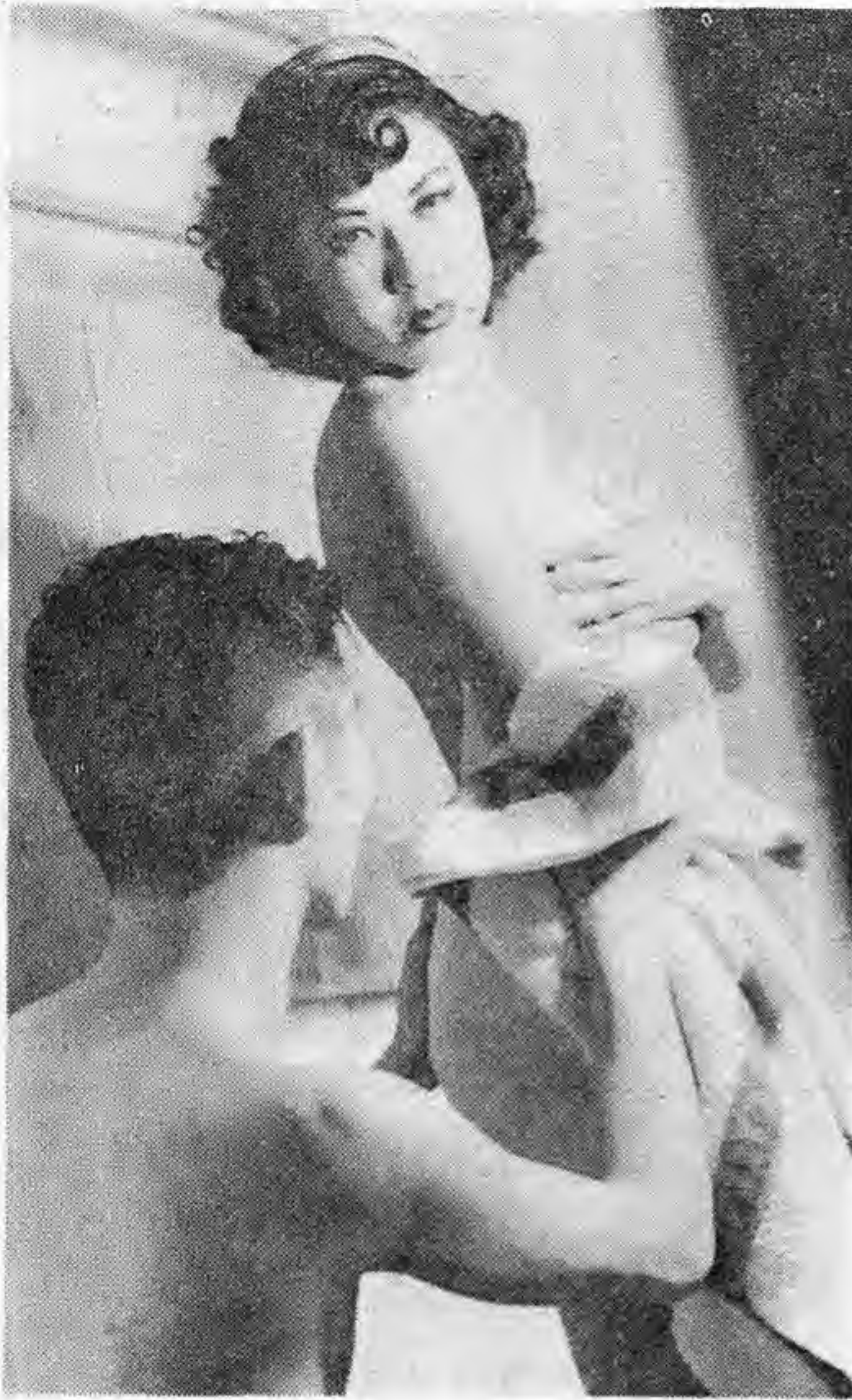
一本のマッチが燃えつきると、次々と更にマッチはすられてゆきました。私は舌人形の顔面に戻りたいという気持が体の中で、じりじりしているのに、その場所に無理にとめられているようで、その焦燥が、一種云うに云

われない、今迄にかつて味わつた事のない快感となつて私の体を痺れさせていました。

T氏が入浴している間、私の後始末を請負つたのは舌人形でした。快樂の余韻が静かにあとを引いている私にとつては、それは心のなごむひとときでしたし、舌人形にとつてもまたと得がたいマゾの屈辱と隷属の作業といつてよかつたと思います。

顔面騎乗というのは、いわば中膝のような





格好になるものですから、案外、太股にミが入るものです。そんなプレイを長くやった時は、家へ帰ってから、二、三日は太股の外側や内股の筋肉が痛い事があります。

その時、私は足の裏、胫、内股太股、それに臀部に十分、力をこめながらも、前屈みになって、ごつごつした縄目に胸を当てていました。これで舌人形の舌が大いに活躍する余地ができたわけです。

「いよう、やってるナ」

T氏が、風呂から戻ってきました。しばらく立って見ていましたが、パツ、パツ、パツと三回ばかり角度を変えて写真をとったかと思うと、でんと舌人形の額の上に腰を下したのです。私にとっては見られたり、写真をとられたりするのには、凄く気持ちよかったのですが、こうした体位は、一番、嫌いなものの一つでした。

気持ちの上では、冷水を浴びせられたように感じたのに、事もあろうに、舌人形の顔の上で演じられたそれは、燃えつきんとした私の余燼に更に火をつけて燃え上らせてしまいました。こんな事って、私はそれ迄に一度も味わった事はなかったのです。

舌人形にしても、自分の顔面の真上で演じられる人間ドラマを見て、どんな気持ちになったでしょうか。私は、今でも、その時の事をありありと、一時間前の事のように思い浮かべる事ができるのです。

一対一の二人プレイよりも第三者の介在する三人プレイの方が、いくら快感度が高いかという事を私は始めて知りました。M男は、なんと云っても受動的なものです。私が自分の気の向いたまま、やりたい責めを思いのままに行っていくのが二人プレイの際の常道でしたが、T氏という責めのベテランが一枚加わる事によって、この三人MSプレイは一層華やかで複雑なものになってゆきました。

女性の私だけであつたら、とても出来ないような責めを私と二人して舌人形の肉体の上に加えていったのです。いや、肉体ばかりではありません。精神的にも泥にまみれさせてしまったのでした。

(おわり)

奇クサロン



カット・マエダヒオミ

猿轡と浣腸の妙味への特別招待

羽村真介

一月号で、玉木章子さん、貴女のルポを楽しく読ませていただきました。何回も何回も読みかえました。そして、僕は一遍に貴女が好きになってしまいました。貴女のような、すばらしい方が、この世にいることを知って僕は嬉しくなっていました。

僕は一月号のルポの記事「M女26のマゾぶり、まさに拔群」を何度も読んでいます。貴女を縛り責めている、夢を見てしまいました。

た。玉木章子さん、僕はどうしても、貴女を縛り責めたいのです。若くて、ピチピチしていて、SMに理解のある貴女。貴女は他の男の人に責められたいと言っておられましたね。それで僕は、ここに、貴女に対して「猿轡と浣腸」の特別招待状を貴女に発送する気になりました。

僕のような初心者にとっては、玉木さん、貴女のようなベテランの方が、とても適しているのです。

吾がSM歴

奇譚クラブに想う

嵐

竜次

小生、24才の独身男性です。SMに関心を持つようになったのは、今から約10年前、当時のSMに関する出版物としては、『奇譚クラブ』と『裏窓』ぐらいで、他は、いわゆるヌード雑誌の類でした。もっとも、今もSM雑誌といっても、女性のヌードに縄が巻き付いているのに過ぎないだけのものも多いようです。

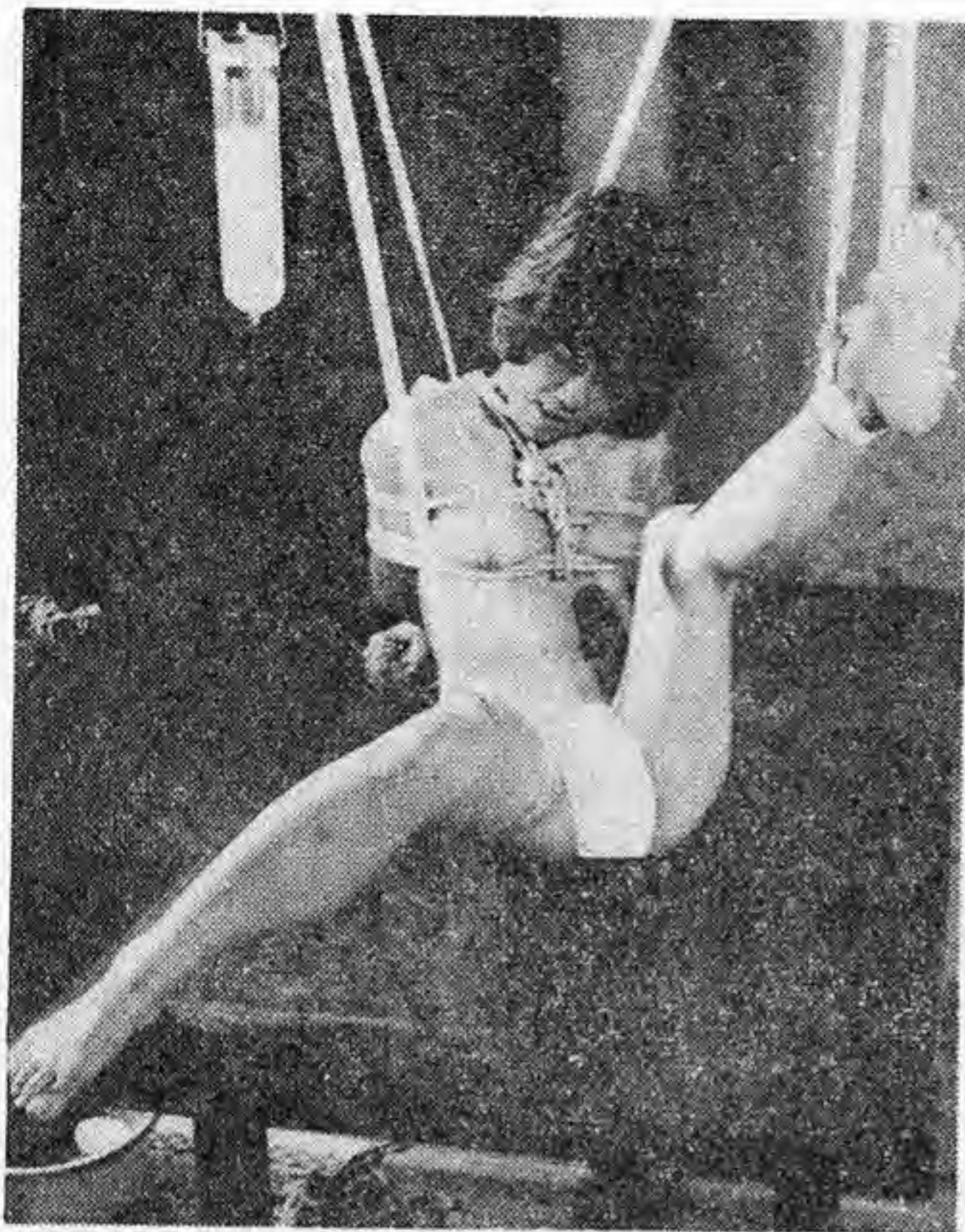
小生が縛られた女性の裸を初めて見たのは奇譚クラブの辻村先生の「SMカメラ・ハント」でした。本屋で何気なく雑誌を見ていたら、いやにユニークな表紙だなと、気が引かれて手にしたのが奇譚クラブでした。

思い切って買い求め、家へ帰る途中、何だか胸がドキドキするのを感じていました。自室へ戻ってページを開いて、ゆっくり読みましたが、ハッキリ言って内容がむずかしくて、ピンとこず、この様な世界(SM)も

あるのかと感心したり、何かいけないう物を見てしまったという二つの正相反対な気分になりました。

それから何日も目をかけて隅から隅まで、ゆっくり読みました。数カ所、載っていた写真とイラストに大変興奮したのを覚えています。それ以来、SMに関心を持つ様になりました。今では、奇譚クラブを初めとして、現在出版されている、あらゆるSM誌を買い求めては一人で読みふけています次第です。

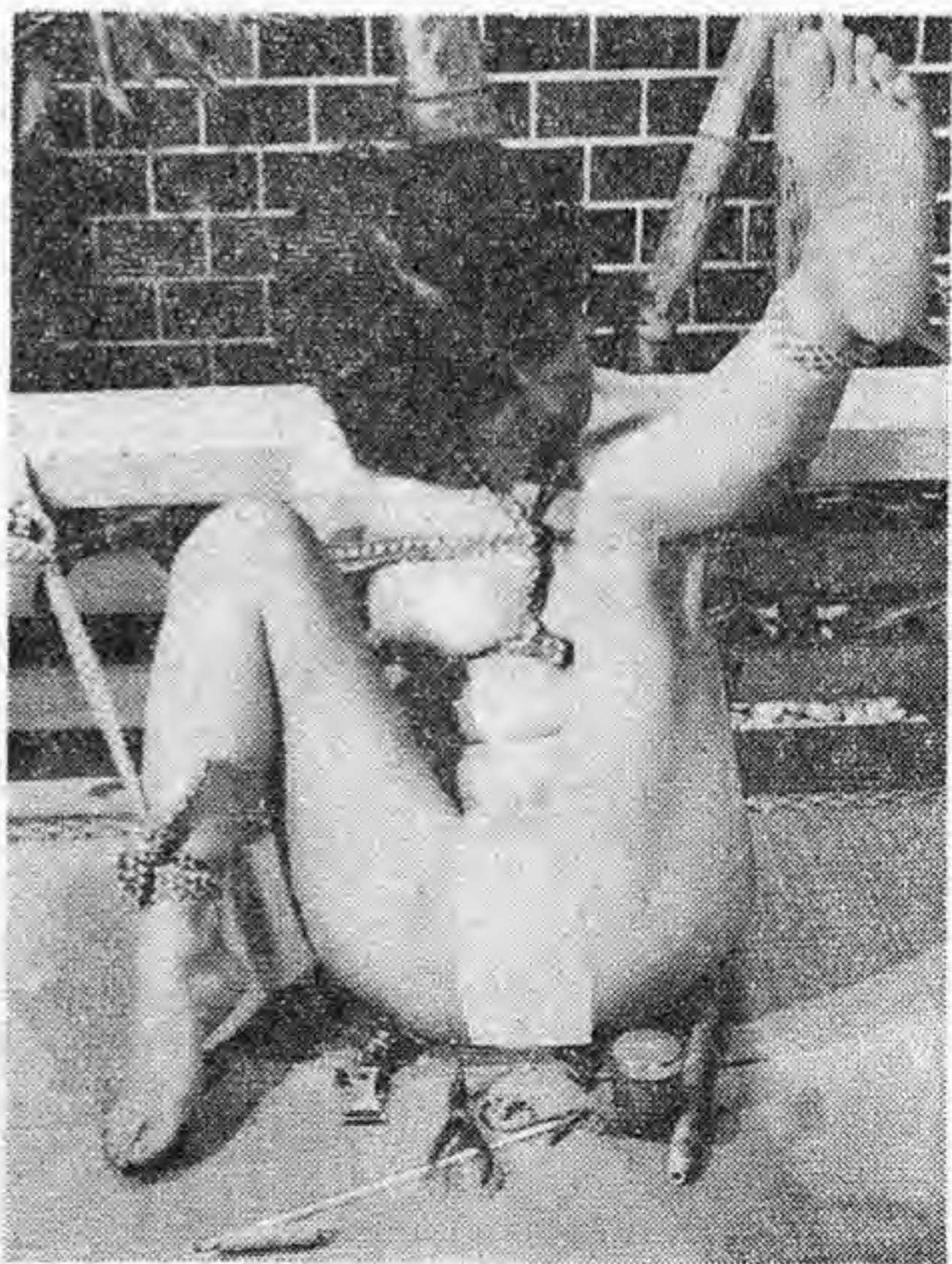
この10年間、まだ一度もSMプレイをした事もなく、自分の手で女体に縄を掛けた事もありません。SMの魅力は、判り過ぎる位、判っているのですが、どうも勇気がなくて、以前、交際していた恋人にも、SMに関する事は一言も口に出すチャンス無くしてしまい、今では雑誌を読むのが唯一のSMの楽しみになってしまいました。



理想的なM女といってよいでしょう。貴女が「M女26」だったら、僕は、さしあたり、「S男25」です。（申しおくれましたが、今年25才の男性です）この招待状を、お読みになった上、何分のお返事下されば、大変嬉しく思います。「猿轡のない縛りはクリープのないうコーヒーのようだ」と言われませんが、僕はクリープは大嫌いですが、猿轡は大好きです。章子さん貴女は、猿轡は好きですか。も

し貴女が、それを好きでなくても僕は貴女に猿轡を噛ませたいのです。女は縛られると特別に美しくなります。そして声の出ないように猿轡をすると、たまらなく魅力的に見えます。殊に、貴女のような美人系の顔は、目が、いきいきと輝いてきます。

SMプレイは、本当におもしろいものだと思います。男がS、女がMといったことを通越して、それが「遊び」であるところに、



余計たのしさが湧き、夢中になれる要素があるのです。

一月号のルポでは、貴女は浣腸されましたね。あれは大変すばらしかった。僕も浣腸は好きだから、あれを読んで、とてもエキサイトした。貴女に猿轡を噛まして浣腸をしたら、どんなにすばらしいことでしょう。

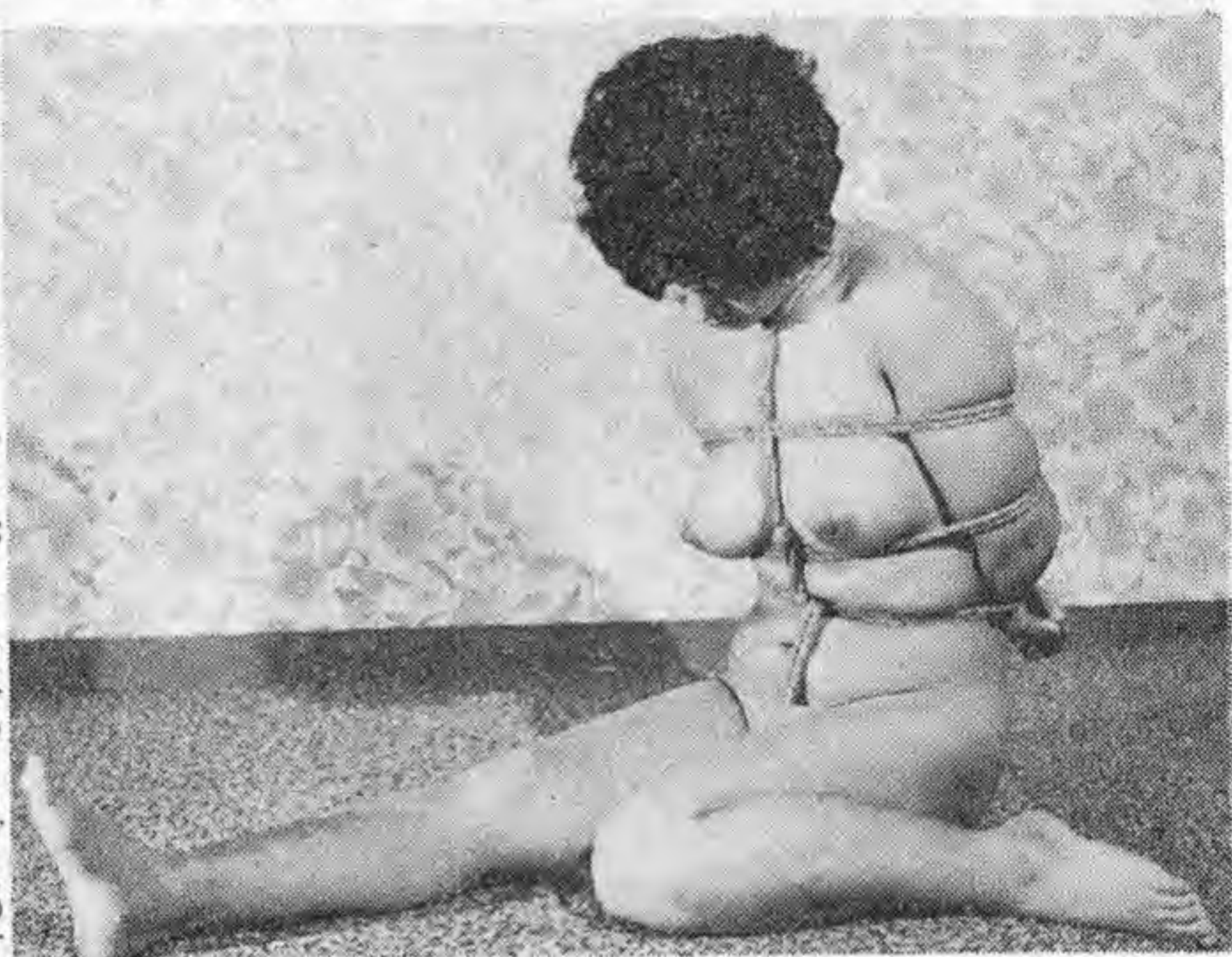
玉木章子さん、貴女のアヌを僕に、思いのまま責めさせてくれませんか。僕の大好きな玉木章子さんのアヌを見るだけでも、僕

は、たまらない。それなのに、思いのままに責めることが、もし出来たら、僕はもう、あまりの感激と興奮で狂い死にしようかしれません。

こんなに僕が貴女に思い焦がれているというのに、玉木章子さん貴女は今日も安らかに眠っているのですか。もし、そうだとしたら僕は貴女を恨みますよ。僕は、どうしても、玉木さんに猿ぐつわをして、浣腸をしてあげたい。それが望みです。

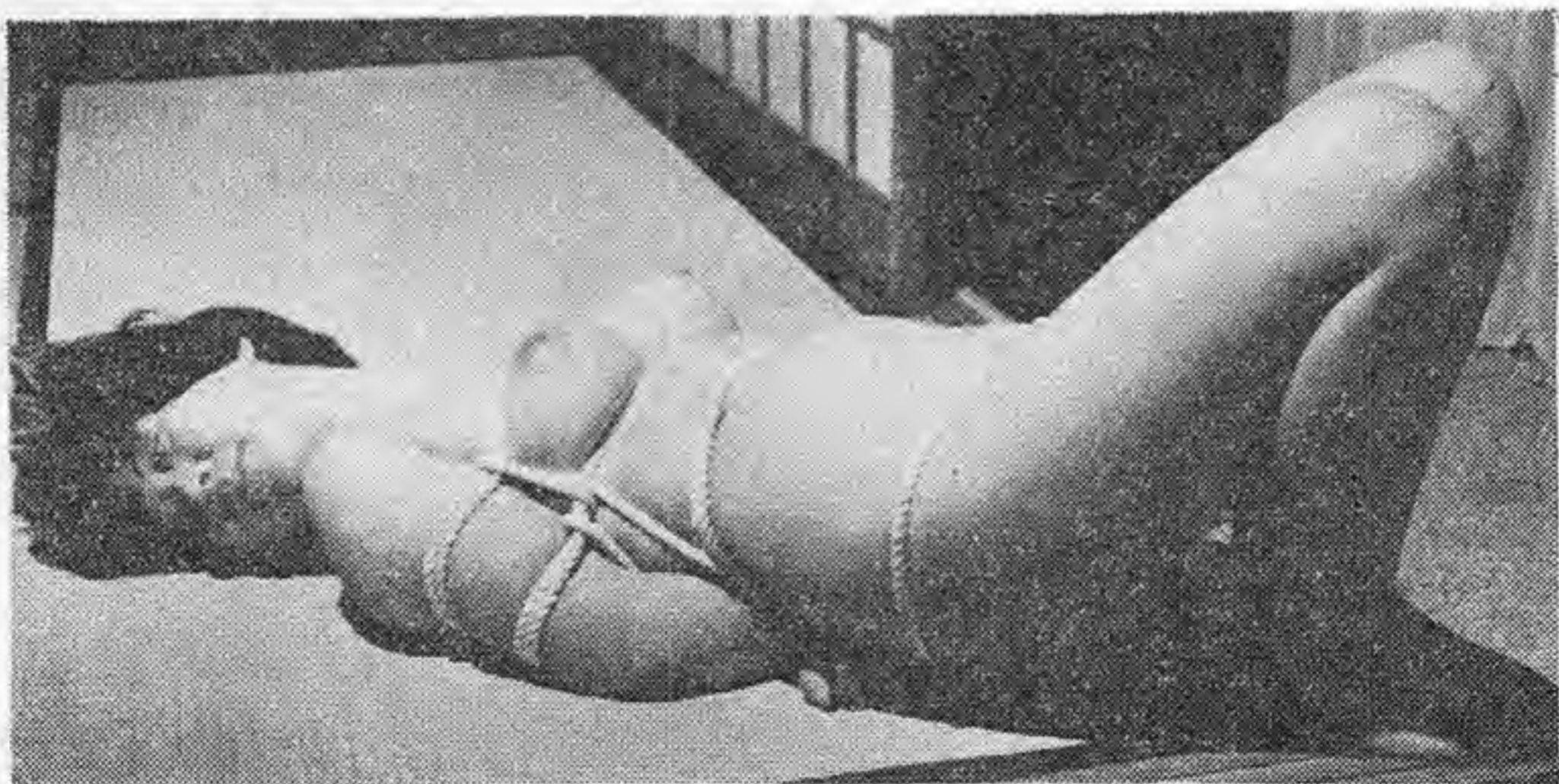

~~~~~城章夫さんの呼びかけに答えて~~~~~  
 余<sup>よ</sup>呉<sup>ご</sup>湖<sup>うみ</sup>に遊ぶ~~~~~荒尾慶子~~~~~

こうしてペンをとりますのも、  
 幾月ぶりになりますでしょうか。  
 亡夫の愛読していました忘れるこ  
 とのできない、なつかしい奇譚ク  
 ラブに、そのときの思いのたけを  
 書きつらね、何回となく誌上に載



った私。もう自分のくりごとのす  
 べてを、あの告白の文章で吐きだ  
 してしまった気持の私でした。  
 それが沢山の読者の方々から、  
 お手紙をいただき、その余りの反  
 響に、私自身もおどろいてしまい

お便りの熱意におされて  
 しまった私でした。心動  
 かされる内容のお便りも  
 幾通かはございました。  
 お返事をだしたくなるよ  
 うな、お手紙もありまし  
 た。でも、私は、なにか  
 しら、そら恐ろしい気さ  
 えしました。童女よう  
 にしてほしいと願ひ、そ  
 の上、股間縛りにしてほ  
 しいと願っていた私です  
 のに、これは、どうした  
 心の変化でしょうか。  
 待合わせの時間と場所  
 を指定してこられた方に  
 は、申しわけないことな  
 がら、今にも、のめりこ  
 んでゆきそうになる自分  
 が、そら恐ろしくて、と  
 うとう、よう参りません  
 でした。余りにも、真面  
 目で、よい方だったので  
 自分の心を偽ることがで  
 きなかったのです。  
 もし、その方のおっし  
 ゃるように、お逢いして  
 いたら、私はもう、お家  
 に帰ってこれないような  
 気がしたのです。編集部から、二  
 度ばかり、何か書かないかという



お手紙をいただきましたが、なに  
 もかも、書きたいことは、あら



ざらに書いてしまった私には、もう、何も書くものはありません。

——と、お返事を出しました。

一通は、たしか、私が少し体をこわして、転地のために都会の雑踏をはなれているとき、その転地先に転送されてきましたので、その頃の私の気持は、今でも、よくわかります。はりつめていた気持が、ゆるんでしまった、あのひととき、私はなんとなく張りあいがなく、ぼんやりと放心状態で沈んでいました。とても告白の文章なんて書ける余裕とてございませんでした。

今度、一月号で、はからずも城章夫さまの「雲を呼びもどそう」という私へのお呼びかけの文章を拝見して、とても、なつかしく思いました。貴方のお名前、よく存じ上げております。そして、あの頃のこと、泣けてきそうになる、なつかしさで、私の胸のなかに蘇ってくるのです。そして、こうした貴方の文章を拝見すると、胸がいたく、苦しくな

ってしまいます。私は溺れてしまいいそうになる自分自身に対して、そら恐ろしいのです。

一人身だった私は、家をあけて泊りがけで塚本さまに責められ、童女のように剃毛され股間縛りにされた、あのときの快楽を、忘れることが出来なかったのです。でも、それが余りにも私を、しびれさせてしまったために私は、あらぬ夢をえがき、そして、自分からその夢に、自ら背を向けてしまったのです。



城さま。私が、もし貴方とお逢いしてしましたら、きっと、身も心も、溺れきってしまったていたことでしょう。それでも、貴方は、およろしかったのでしょうか。全裸で縛られ、剃毛され、そして力づくよく抱きしめられたとき、私は、お恥かしいことながら、前後の見さかしく、とり乱しておりました。それを自ら制する力は、とても私には、ございせんでした。

先月、私はお墓参りをかねて法事のために夫の故郷へ帰ってまいりました。木之本駅という田舎の小さな駅を下りますと、歩いて五分ばかりの所に、お寺があります。そこに、夫は永遠に眠っているのです。

翌日、自転車を借りて一人で余呉湖へ遊びに行きました。都会住いの私には別天地と思える

ような静寂なところで、湖を一周する道路を自転車で走ると、まるで自分が天女にでもなったような気持になりました。湖畔に羽衣伝説の碑が立っていたので、そんな気持になったのかもしれない。賤岳の古戦場のあったところですが、私には木之本の町の落着いた静かな家並みが、とても好きでした。

夫が愛読していたというだけでも、なつかしくてたまらない奇譚クラブ。それに、私のつまらない繰り言でも、時たま、載せて下さるのですもの、淋しくて、悲しいときには、また、書かせて頂きます。

荒尾慶子が健在であるというしるしに、最近の写真を一枚、同封しておきます。

#### △編集部注▽

荒尾慶子さんの書かれた本誌掲載の告白は左記の通りです。

46年7月号

「流れる雲に身を托して」

46年9月号

「地平線の彼方に」

46年11月号

「行く川の流れ」





## SM研究会 (S研) のことなど

塚

本 鉄

三

奇ク十二月号の「奇クサロン」で、△SM研究会の提唱▽という一文を載せて貰ったところ、早速全国各地の多数の同好の方々から通信を頂き大いに意を強くした。

時間の許すかぎり返信を書き、電話連絡の出来る方には電話をしたが、勿論、私とて遊んでいる身ではないので、一度に全部の方々に通信するという離れ業は出来る

ものではなかった。今後も事情の許す範囲で密接に連絡を保ちながら、△SM研究会の成果▽を、この誌上を借りて発表してゆきたいと思っている。△研究会▽の会員になりたいと云われる方々の多くの人が一番に懸念されていることは異分子の混入を危惧していることだった。

この件に関しては、私は時間を見て、一人一人、それぞれ同好の方に直接、逢って話し合ってみることが最も大切だと考える。この人だったら大丈夫だという信頼感の上に立って△研究会▽の運用を計るのが大切で、その点については不安はないと信じている。

次に費用の点についてだが、私は十二月号では「会費とかいった費用は一切とらないで」と書いたが、それは会費とか入会金とかいった費用は一切、とらないといった意味で書いたつもりだった。それを誤解されて、旅費交通費や食費ぐらひは負担させて下さい——と言って来られた方が多かった。

はつきり言って最初から交通費や食費まで、私が負担するとは思ってないかったし、それほど私も金持ではないのだ。ただ入会金とか会費とかは、一切、頂かないと

いう意味だったわけだ。

例えば通信費だとか、会場の費用だとか、私が連れてゆくスタッフ（女性を含めて）の費用だとかは私が負担し、会費という名目での費用徴収は一切、しない考えであつた。但し交通費や食費（飲食をされるとすればの話だが）宿泊費（遠方の方で必要のあるとき）は自弁してほしいものだ。

私が今一つ考えていることは、私の手元に便りを寄せられた方々の近くの温泉地なんかを歴訪して△SM研究会▽をやりたいということだ。このプランについては畜化願望の白豚こと苗木陽子も、大いに賛同しているの、差し当り彼女と一緒に適当な場所から観光を兼ねて回ってゆきたいものだ。

この私のプランに対して食指を動かして、是非にと言っているのが、深田菊子、西条紀代、それに毛色の変ったところでは福井桃子それに藤坂氏と玉木章子などである。藤坂氏に休暇がとれないようだったら玉木章子の単独参加も可能のようだ。これは私にとっても見果てぬ一つの夢でもある。

深奥きわまりない未開拓の分野であるSMに関しての研究は、いくら研究しても研究し過ぎるとい



うことはないだろう。私は、こうした同好の士と手を携えて、SMの甘美な正体を見極めるための努力を続けたいと思っている。殊に最近は、三人四人五人——と、複数プレイを望むM女性が増えているので、そうした女性対象を研究資料として、SMプレイに耽るのも至極、楽しいことと思う。

もっとも、これは、飽くまでSMの研究であるから、本来のSMプレイ即ち一対一のSとMの火花を散らすプレイでは、その研究成果を十分に發揮して貰いたいものだ。或は私の紹介する女性と意気投合して激しいSMプレイが両者の間で展開されるかも知れないが、それも△SM研究会△の一つ

の成果、或は目的といってよいだろう。

「SM」といっても徒らに陰微な隠花植物のままであってよいだろ



うか。風光明媚な観光地、或は温泉地の最もデラックスなホテルの一番豪華な部屋を予約しておいてそこへ同好の士を招待しよう。昼間の観光によって浮き浮きした心と体には、明るくて、おおらかなSMプレイが、きっと展開されるに違いない。猛烈にハッスルしたプレイに依って、△SM研究会△も一段と弾むことだろう。

この文を書いている間にも、苗木陽子からS男性の前に自分の裸身を提供したいと言ってきた。私は時間の許すかぎり、通信に返事を書き、そして同好の士と連絡をとってゆきたいと思っている。先ず手始めに、苗木陽子を研究資料として責めてみようではないか。

## 奴隷妾の恍惚の歌

北川まりこ

久々に主の連絡いただきて  
受話器のコード手首に巻き締む

責道具一つ一つを調べつつ

ドレイメカケの心ときめく

一枚のエプロンの素ハダカで  
靴音待ちわぶ玄関のタタキで

○ お迎えのキスに変わりはなけれど  
も、わが唇は御靴の先なり

○ 早速の縄にわが肌燃えたちて  
しばしは立てずキツチンの板間で

○ 後手で運ぶ料理のわが手際  
ほめられ嬉し練習の甲斐あり

○ わが肌の縄目の深さまさぐりつ

グラスを空ける君の手に頬寄す

○ 深々と乳房に埋りし君の爪  
痛さとウズキどっと湧き立つ

○ 君のため酒の肴の余興にと  
縛られ裸女の狂態のすべてを

○ 鞭打たれ足蹴り受けて悶え泣く  
ドレイメカケの恍惚のひととき

○ 浣腸の苦しみ耐えて身悶えの  
われ蹴り転がさるタタキの上へ

○ セメントの固さ素肌に冷々と  
しみ入りきたりてわれを苛む

○ 水かけて汚れは流し給えども  
君のおん手は縄解き給わず

○ 踏み給う君の足裏感じつつ  
次なる責めを待ち望むわが肌



# トイレでの写真撮影は気をつけて下さい

「特に福島和夫氏などへ」 山口 老婆 生

先日、当地（名古屋）の新聞紙上に、次のようなことが報道されているのを見ましたので、わが誌友が、このようなことにならないように御注意を促したいと思ひ、老婆心ながら一筆しました。特に福島和夫氏、資料蒐集に熱中されるのもいいですが、気をつけて下さい。

〔昭和四十八年十一月六日付〕

女子トイレで写真撮影

岐阜にハレンチ高校教師

【岐阜】岐阜市内でさる三日と四日に開かれた演劇関係の催しを見物にきていた高校教師が、女子トイレで写真撮影をしていたのを見つかり、四日、岐阜南署に軽犯罪法違反で検挙された。

このハレンチ教師は岐阜市則武二六二、岐阜県立可児工業高校教諭、大谷栄一（四）。

同署の調べによると、大谷は四日午後二時三十分ごろ、同市加納丸ノ内、岐阜南市民会館の二階女子トイレで、トイレに入った女性の写真を撮っているのを同市内、

同県立高校三年A子さん（二七）に見つかり逃げた。Aさんはすぐに近くにいた男子生徒などに連絡捜していたところ、約十分後に再び二階に上がろうとした大谷を見つけて捕え、かけつけた同署員に引き渡した。

大谷は三、四の両日、同市民会館で開かれた演劇の催しを見物に來ていたが、三つ並んでいる真ん中のトイレへ入り、下のすき間から写真を撮っていた。同署の調べに対し、大谷は「暗いところでも写るかどうか面白半分によつてみた」と自供しているが、撮った写真は35ミリ白黒フィルムの三十六枚撮りで二本半にもなっており、計画的な犯行とみられている。

横山勉県教育長の話本人も事実を認めているようだし、弁解の余地はない。警察の調べで事実関係を確認したうえで、教育委員会にはかり、厳しく処分する。

〔昭和四十八年十一月八日付〕

停職後、諭旨免職に

ハレンチ写真狂教師

【岐阜】岐阜県教育委員会は七日同県立可児工業高校教諭大谷栄一（四）岐阜市則武二六二を地方公務員法（信用失墜など）の規定により同日付で停職一カ月、追って諭旨免職による懲戒処分を決めた。

大谷は、さる四日午後、岐阜市加納、岐阜南市民会館の女子便所で女子高校生らの写真を撮っていた。

## 飼育妻の能力を試したい！

中村

宏

小生、貴誌十数年来の愛読者です。年令三十八才、妻三十三才。妻の身長一五三、体重五一。十年位前からSMプレイを仕込み、以來、年に二、三回のスワップ又は二対一、三対一で妻を飼育してきました。特に極端なものではなれば縛り、ロー責め、浣腸など一通りは、こなすようになりました。

突然お便りしましたのは、来る十一月×日夜、京都宿泊。翌日、奈良見物の奈良に宿泊。出来れば比叡山にも登り、大阪空港より帰

るところを見つけられ、軽犯罪法違反の疑いで岐阜南署に検挙された。35ミリ判白黒フィルムの三十六枚撮りで二本半も写っていたことがわかり、かなり計画的な犯行だった。

事務局の説明だと、関係校長から参考意見を聞いた結果、大谷の勤務状況は普通でこれまで不審な行動はなかったと判断、本人も深く反省しているので情状をくんで懲戒免職より軽い処分にした。しかし一カ月以内に諭旨免職が発令される。

京したいとプランを樹てていますので、京都、奈良に宿泊の際、合流の上、妻を責めて戴きたいと思つたわけです。

八月号で井上浩氏が書かれた、「古都を訪れて」の様に、行きずりに按摩さんでも呼んでと思つたのですが、その気のない人に当たった場合シラケます（一度、浅草でやってみて失敗）ので、たまの旅行であるし確率一〇〇%で行きたいと思つたわけです。それに出来る事なら最近、奇クを飾っている



## 浣腸の好きな女の子

県

(アガタ) 信子

私は浣腸することが好きです。でも、それがなぜなのか、わかりません。浣腸器が水に濡れてヌメヌメと光っているのを見ると、たまらなくなります。殊に、浣腸を終ったあとのガラスの先のふくらんだところを見るのが好きです。私って、変った女の子でしょ。平常はそうでもないのですが、時々

とても浣腸したくなるときがあります。それはノドがかわいたときに水が飲みたくなるようなもので浣腸をすると、すぐに直ります。それで私は、いつもハンドバッグの中に、イチジク浣腸をしのばせています。こんな私は少し異常なんでしょうか。一人で浣腸をするときの気持ちって忘れられないの。



犬とのプレイもやらせて貰えたら考えたのです。(最初、犬とのプレイは妻も中々承知しませんでした。したが、やっとOKさせました) そちらのメンバーとしては、塚本鉄三氏と同好者御夫婦の方一組と、中型犬一匹という組合わせでお願いしたいのですが、塚本氏のお都合が悪い場合は、どなたか編集部の方でも結構です。まだ妻のプレイ写真は撮ったことはありませんが、撮影もOK、妻の顔さえはつきり出なければ誌上掲載も歓迎です。

また更にお問い合わせしたいことは、中河恵子さん、田中美佐子さんの妊娠写真各一枚、鈴木千鶴子、大塚啓子、シーラケニー、荒尾慶子さんの緊縛写真、各一枚ご惠贈願えれば幸いです。

当夜のプレイの構成は、次の様なもので如何でしょうか。ビールでも飲んで雑談の上、気分がほぐれた所で小生がワイフに手錠をかけます。それを合図にすべてをそちらにおまかせしますが、羞恥責めを加え乍ら全裸縛りにし、パイプその他で責め立てます。盛り上って来たら先方の奥様も同様になります。

次に、四肢を伸ばしてゆわえつ

け、ロー責めに移ります。声が大きい様でしたら、さるぐつわをかませます。

裏表ともロー責けにしたら、次は猪吊り又は両手吊りと併せて軽い鞭打ちを行います。小休止のあと、風呂場に連れて行き、シャワーによる水責め、熱湯責め、更にエネマによる、浣腸責めを行います。

そのあと、相手の奥様とレズを行わせます。気分の盛り上ったところで犬とドッキングさせます。

(犬とのプレイは始めてなので高田信正様ご夫妻とご一緒なら心強いのですが)責め道具等については用意してきて下さい。

京都と奈良の各宿泊には別紙のホテルに部屋を予約してあります。普通の観光ホテルなので犬の連れ込みは無理と思いますが、こちらで適当なホテルがあれば確保しておいて下さい。連絡は小生が予約したホテル宛、行方事とし、小生は前日夜、同ホテル宛電話し塚本氏名義の予約があったかどうか、何か伝言がなかったかどうかを確認し、別なホテルということがわかれば、同ホテルをキャンセルして指定のホテルへ直行する事にします。



## マゾヒストの異常な生活の一端

……… 浣腸を主とした自虐……… 門 田 益 夫 ……

奇クを愛読して十一年になる三十才の一マゾヒストですが、始めてお便りいたします。奇クに投稿されるマゾヒストも、かなり多いようですが、大部分の方が、一方では正常な夫婦生活を営み、妻子もある方が殆どの方です。

それでは真のマゾヒストの喜び悲しみが解らないと思います。私は幼少の頃より夜尿症に悩み、その劣等感から女性恐怖症となつてしまひ、その結果、神経性の性的不能者に陥っております。

一時は、結婚もしたいと思ひ、商売女と接してみましたが、勃起するどころか、益々小さく萎縮してしまひ、尿まで洩らしてしまう始末で、軽蔑と失笑を買うだけでした。もう一度、試してみようと思つて街娼のボン引きに誘われて行つてみましたが、その時は、大人しそうな年のいった

女でしたので、あらわに軽蔑はされませんでした。が、気味悪がられて逃げて帰りました。

そんな時、奇クを知りました。当時は、絹川文代、大塚啓子、東浦ひかる、梨花悠紀子などのモデルさんが盛んにグラビアを賑わしていた頃です。吉村英子さんという浣腸マニアの方が、数回、告白を書いておられたのを覚えております。



以来十年の間、私は浣腸の用具

と女性の下着集めに熱中し、アパートの一室で自ら剃毛をした上、浣腸をして生理バンドを着け、三面鏡に自分の姿を映して「女王様、お許し下さい」と情ない声を出して、孤独なオナニーに、ふけて来ました。

今年の夏、始めて女王様のドレイとしての飼育を受けることも経験しましたが、バーのママとの契約でマゾとして飼育してもらったかわりに、ホモの売春夫として、ママの指示する男客をとるよう強要されることになってしまいました。色白で、お尻のポッチャリした私は、ホモの女役として、そうした趣味の人達の間では、かなりの人気があり、かなりママを儲けさせたようです。今では、もう、この道からぬけられませんか。といいますのは、ママの一匹のドレイ犬として、縛られ、いじめられ、全身に尿をかけられたり、或は浣腸させられて、アヌバンドを着用させられるといった生活が忘れられなくなつてしまったからです。



# 告白『オムツと私』の生活

日下部 登

毎月、奇譚クラブを楽しく読ませてもらっています。記事の中にオムツの事が書いてある時は、特にうれしく思います。今月号（十二月号）は、「独身の理由はオムツ」「欲しいフォト」「浣腸とオムツ」又、新潟の睦月ノ夫さんのオムツ使用の記事と、私をよろこばせる物が沢山ありました。

イメージギャラリー、「洗濯日和」私のイメージ「眠ったふりして」の原由貴子さんのさし絵は、目にやきついて放れません。出来れば原由貴子さんに、もっとベビースタイルでオムツのさし絵を書いてほしいと思います。

私がオムツに興味をもったのはまだ幼い頃でした。近所の女の子と、赤ちゃんごっこをして、オムツをさせられたのが、きっかけでした。オムツとオムツカバーは家の押入れの奥から幼児用のものを見つけてきて、自宅の裏の小屋の中で、ひそかにしました。

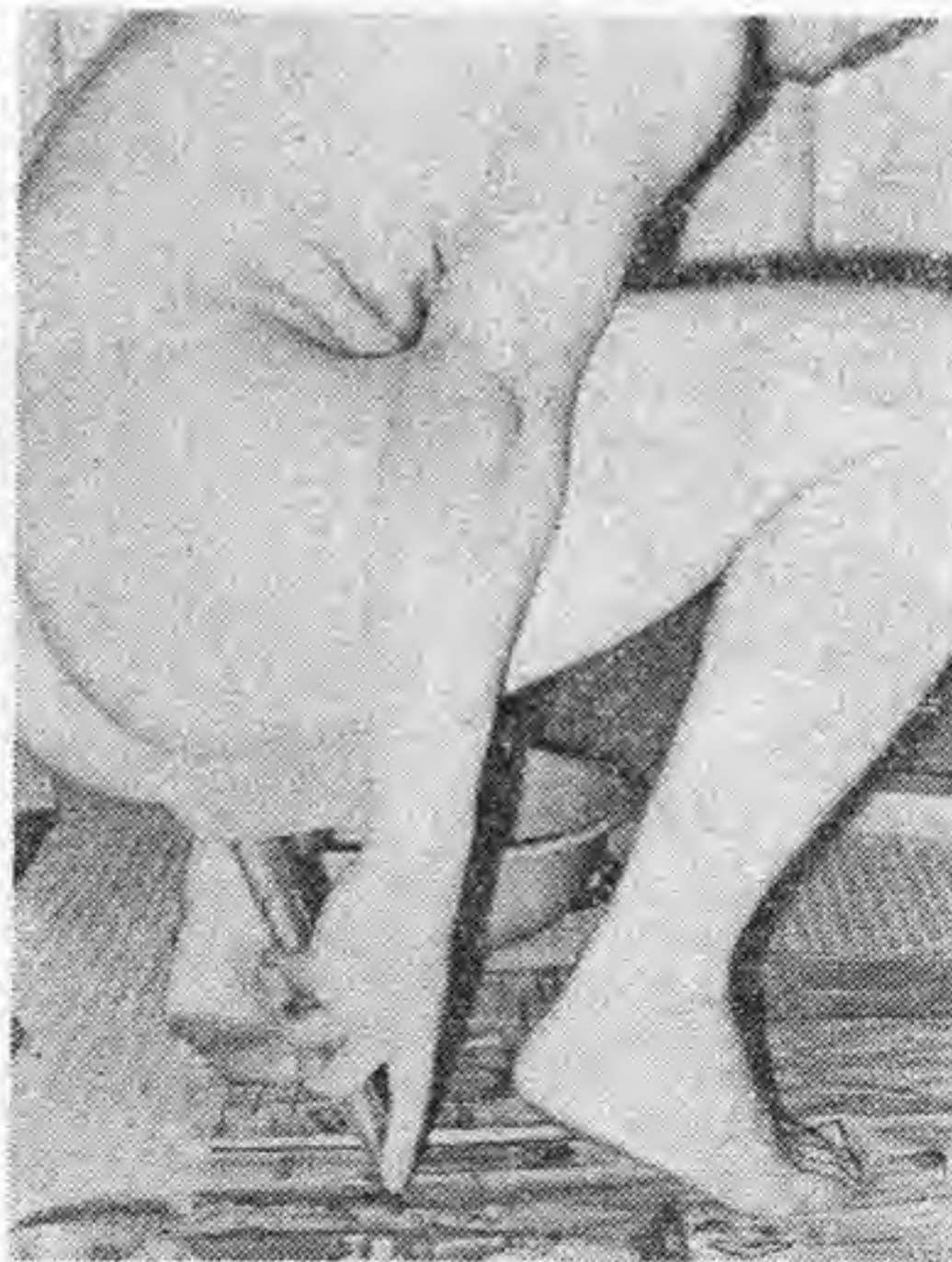
その後、高校時代に急にオムツが恋しくなり、夜、戸外に干してあるオムツを盗みに行き、オムツ

カバーは町の衣料品店を探して歩き、やっと黄色のオムツカバーを見つけ買い求めてきました。そのオムツとオムツカバーを毎夜、着用して寝たものです。

現在は約一年程前からオムツが恋しくなり、ベビー用品売場から80cmのオムツを求めオムツカバーは薬局から病人用のを買い求めて使用しています。こんな私は小児願望というのでしょうか。赤ん坊みたいになりたくて仕方ありません。オムツとオムツカバーを着用して、よだれかけをされ、オッパイを飲ましてほしいのですが、適当な人がいないため、一人でオムツとオムツカバーを着用して我慢しています。

今ではオムツをする時には、グリン溶液を約一〇〇CC浣腸してから当てます。昼はズボンの下にオムツを当てて洩らしています。すので常時、交換のオムツを三組から五組持っていて、便所でひそかに交換しています。夜は必ずオムツとオムツカバーを着用して寝ますが朝まで濡らすことはありません。

ここに、私の『独りプレイ』の写真と同封しますから、是非、誌上に載せて下さい。私が常用するアヌスバンドの略図も書いておきます。これは同封したプレイ写真でも着用しているもので、黒いゴ



ムチューブ製です。その他、SM夫婦の寝室ドレイとしてのプレイ体験や、マゾ犬として飼育される傍ら、ホモの女役として調教を受け、売春夫となつた体験など、この10年間の異常な生活の事をいずれ、告白したいと思ひます。

が、ママのマゾ犬で居る間は、もちろんペンが持てませんので、なかなか告白文も渉らないというのが現状なのです。

せん。出来れば寝小便をして朝までには濡らしたいのですが、なかなか思うようにはいきません。

毎日オムツを使用しているせいか、最近はおムツかぶれが困っています。それでもオムツを放す事の出来ない私です。誰か母親みたいに私を扱ってくれる人が現れないかと毎日、願っている

のですが、今のところ、そういう人は現れません。オムツが約三十枚、オムツカバーが十枚あります。私とオムツは今や切っても切れない関係にあります。オムツを楽しむために、家を借りて一人で生活している私です。誰か私のオムツの世話をしてくれる人はいますか。



# 短信往来

苗木陽子さんへ

佐賀武雄より

「SM」というものの  
不可思議さ

十一月の奇クに投稿されました苗木陽子さん。貴女の手記「私に御主人様をお与え下さい」を読みまして、思わず、身ぶるいする様



な感慨をおぼえました。

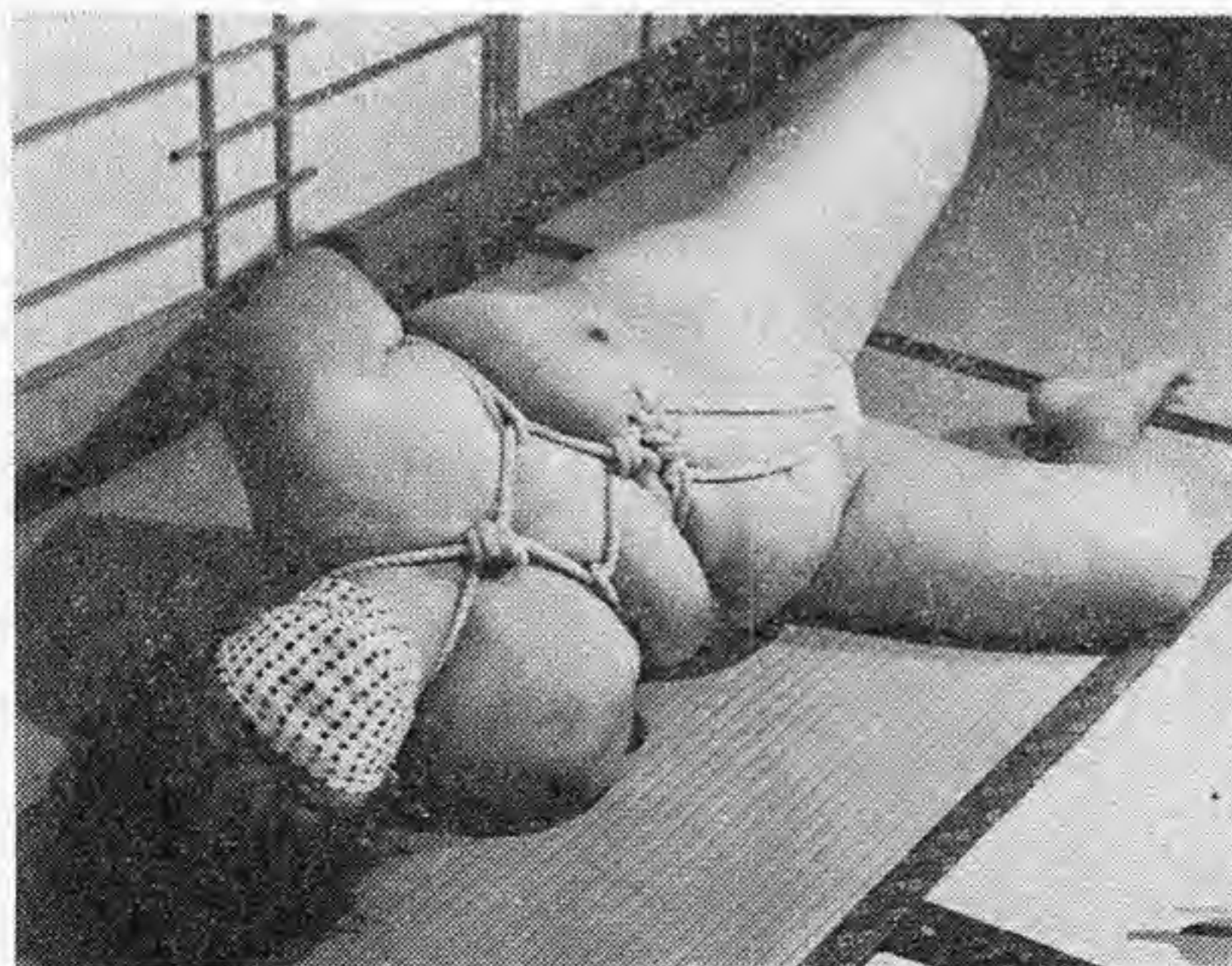
手記で知りました貴女の境遇には、心から同情の念を禁じ得ません。而し、その苦しみに耐えて、女一人、たゆみなく生き抜いておられる様子が身にしみ、且つ、不運をつきやぶるような、おさえることの出来ない本能の叫びを聞くようで、同じ境遇に身をもてあまして、同じ小生にとっては、ほんとうに身近に、心のふれ合いを感じさせられるような近親感をおぼえます。

誠に人間とは、やっかいなもの

だと感じます。犬猫のように本能的に生きられる動物のほうが、どれほど幸福かわからないと、時々考えることがあります。

幼少の頃から周囲の環境に知らされ、堅苦しい道徳感に攻められ、知性と教養をたたき込まれて、表面的には、

一ぱしの紳士に仕立てあげられてしまっている小市民的な私達は心の奥底に果喰ってしまった秘密の欲望を表現し、実行し得ないままに、無意味な日常生活を、くり返している小生から貴女を見ますと誠に勇氣ある訴えと感心いたしている次第です。



小生も十五年の永い年月をかけて育てあげた最愛のM妻を、二年前に一瞬の内に病により失ってからは悶々の生活を続けて居りますが、今更、正常な妻をめとる気がさらさら不起りませんので、気長に身辺にM女性のあらわれるのを



待ち望んでいる次第です。

小生、妻の生前は縄一筋に、あらゆる緊縛をこころみ、被縛による姿態の曲線美、羞恥感覚の極をきわめ、SMプレイによる男女の一体感に耽溺して参りましたが、身体に傷をつけたり、血を見るような加虐は好まず、あくまでも、お互いが性的な刺激と感覚的な悦

楽を共に追及し合うようなプレイで、ありたいと思っているものです。

貴女の豊満な姿態が、ぎりぎり緊縛によってゆがめられ、妖しい曲線美をかもしたして、羞恥心にもだえるさまを想像すると、たまらない気がします。こんな男が九州に居ることを氣にとめていた

だきたいと思えます。

小生、堅苦しい勤めの身であり余暇は日曜祭日を除いては自由がききませんが、遠路はいとません。ぜひ一度プレイを共にしたいものと考えて居ります。同じ境遇下にある私達の後半生に、再び輝きを見出し、人並みの幸福をつかもうではありませんか。

## 〔感想〕

春 木 順 次

## 新刊の奇クを手にして想う

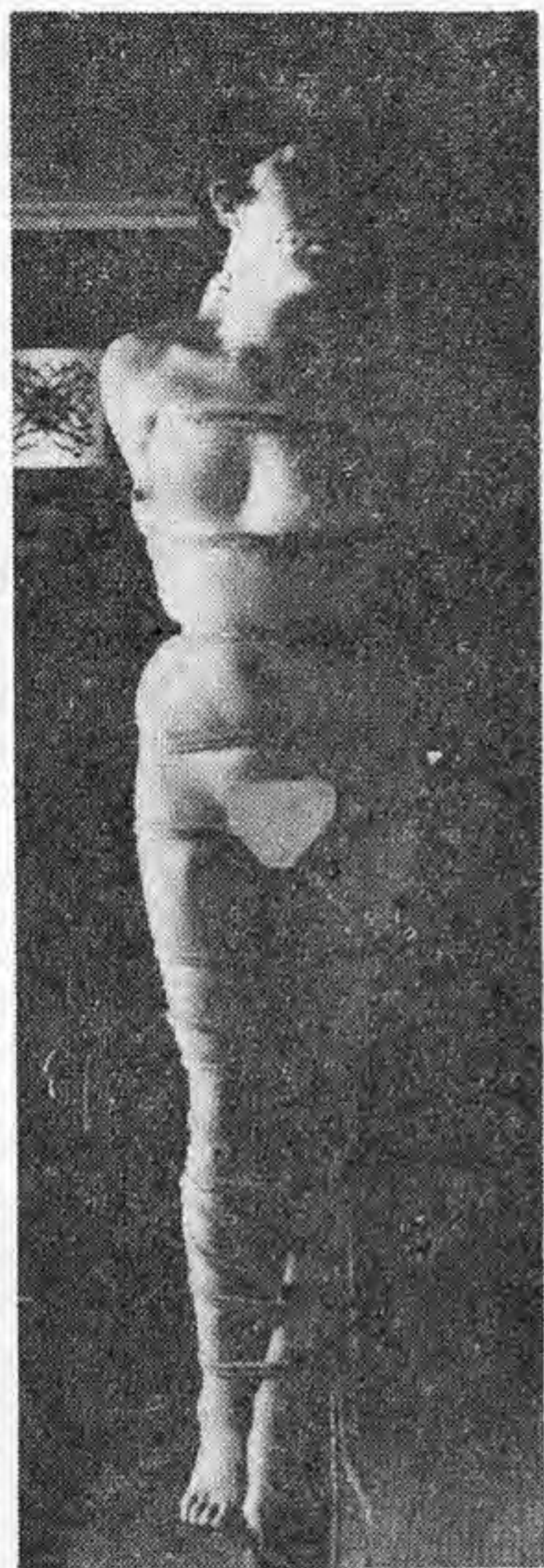
インクの香も匂う新しい奇クを手にとると私の心は子供のよう躍る。今では自分の体の一部のようになった風俗誌への興味。二十数年一日の如く、終始一貫してSMに精進された奇ク

に、私の青春から中年への変遷のなつかしい歴史を見るような気がする。

奇クと共に笑い、奇クと共に泣いた私の青春の歴史が堆高く積まれた奇ク誌の山を見る毎に胸が痛

むように思い出される。あの中にこそ、自分のかくされた真実が宿っている、秘められた情熱がこもっていると考えると、胸は熱くたぎり立ち、切なくふるえるのだ。

今も尚、私は少年のように奇クの新刊を手にして、手をわななかせるのである。



松 本 た え

奇クで貴女の手記を発見し、この人こそ、小生の境遇なり気質なり好みなりに、ぴったりの女性だと直感したので呼びかけて見る気になった次第です。

〔追伸〕去る十一月六日、博多の書店で十二月号を買い求めました。処、初頁から苗木陽子さんのグラビアが掲載され、更に本文のしょっぱなから、堂々四十二頁にわたる、塚本鉄三氏の『カメラとペンのルポルタージュ』が発表されておりましたので、びっくり致しました。いち早く、ルポを企画され直ちに誌上に発表された編集部の情報事務処理の早さに感心すると共に、且つ塚本氏に対する羨望の念を禁じ得ませんでした。

読者通信等を見ておりまして、今まで関西を中心とした中央地域からの投稿が殆どで、九州地方からの投稿がめったになく、九州の数少い同好の士の中で、かくも積極的な手記を寄せられた女性の存在は小生等九州人にとっても極めて貴重なM女性であると、よろこびにたえません。小生もぜひ苗木陽子さんとプレイを通じて永年いだし人生の幸福と快楽を共に致したいと念願いたしております。



# 腹ボテのヌードに寄せて 子を孕んだヴィーナス

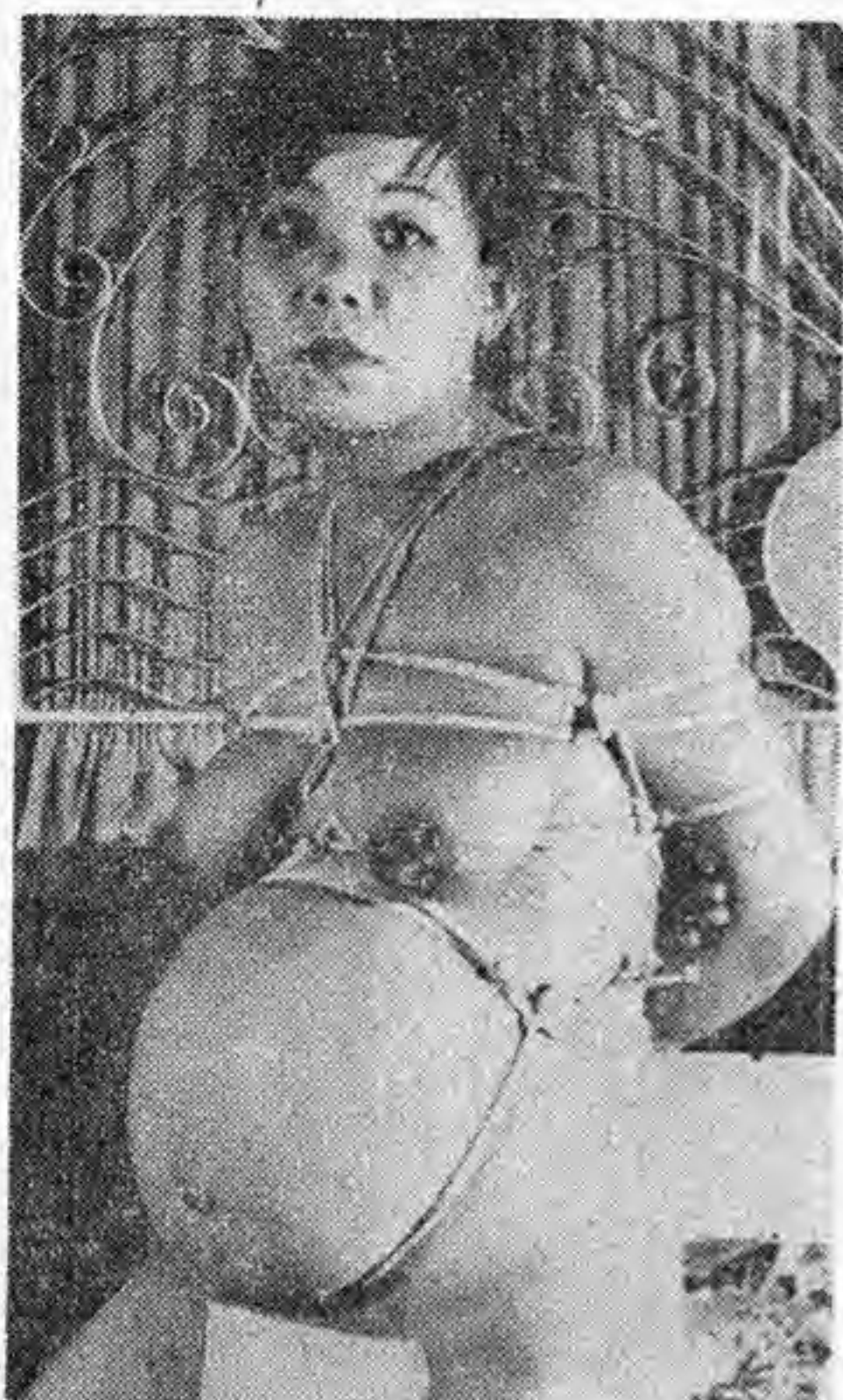
大 原 女 生

妊娠した腹が大きい女性を裸にして写真に撮り、その西瓜を呑み込んだようなグロテスクなヌードを分譲する——このような途方も

ないことをあえて思い付き、しかも実行したのは、恐らく戦前戦後の風俗史を通じて、奇譚クラブだけではなかったかと思えます。この空前のアイディアは多分、羽村京子さんの提唱がもとで、辻村先生や塚本先生の熱意によって実現

したものだと思いますが、考えてみれば、その奇抜さ、すばらしさ等々において、全く驚くべきものだと言えましょう。

戦前のエロ・グロ・ナンセンスの時代のことは、小生は知りません。戦後のこともよくは知らないのですが、過去幾多の風俗誌、現在、花盛りの感があるSM誌のどれをとってみても、腹ボテの妊婦のヌード写真を意識的、系統的に



追求しているのは皆無ではないでしょう。カメラ雑誌などに時たま載る妊婦のヌードだって、ごく偶発的なものに過ぎないように思います。

奇ク誌で妊婦のヌード写真が本格的に分譲されるようになったのは、正確に言えば、ここ十年位の間のことだと思えます。小生は児玉昌子さんというのはよく知らないし、安原さゆりさんののも、多分三十歳代の妊婦を撮っただけという、素人写真に、過ぎないようです。奇クがハッキリ意欲的に妊婦

のヌードにとりくむようになったのは、昭和四十七年二月号で辻村先生自身が書いておられるように「妊婦緊縛第一号」——田中美佐子さんからではないでしょうか。それ以後のことを年代順に書いてみれば、

一、昭和39年 田中美佐子 24歳 妊娠九カ月。当時は分譲のみ。前記昭和47年のカメラハントであらためて紹介記事。

二、昭和40年 なし。

三、昭和41年 増田みゆき 26歳 妊娠七カ月から臨月まで。年末



から翌年にかけて分譲と記事。珍しい双胎ということで猛烈に大きな腹部。写真非常に多数。

カラー・プリントも出る。妊婦マニアをアツと言わせたホームラン。ただただ驚嘆する外なし

四、昭和42年 なし。

五、昭和43年 木戸悦子 9歳

妊娠九カ月。分譲とハント記事

六、昭和44年 金原奈加子 19歳

妊娠九カ月。分譲とハント記事

特筆すべきは、彼女について、妊婦の逆吊りを敢行したこと。

七、昭和45年 なし。

八、昭和46年 富田由美子 20歳

妊娠八カ月。分譲とハント記事

九、昭和47年 福井桃子 26歳

妊娠八カ月から臨月まで。三回にわたる分譲と記事。増田みゆきの時に比べると、はるかに改善された美しい色の鮮明なカラー・プリントを含む相当多数の写真。

十、昭和48年 南加津子 24歳

妊娠七カ月から臨月まで。三回にわたる分譲とルポ記事。分譲は、カラー・プリントが相当多く多数。記事の量もずっと多くて読ませる。腹ポテ女をハダカにして写真に撮るといふ異常趣味追求十年目の蓄積を感じさせ



る。

以上の外に、中河恵子さんのカラーを含む相当多数の分譲写真がありますし、また分譲されませんでした。飯田カオルさんのハント記事、それに読者の投稿により寄せられたものが多数あります。小生の手元にある資料の制約もあって、いちいち述べませんが、編集部と読者の協力により、よくぞここまで来たものだ、と、思います。十年前には全く予想もされなかったことではないでしょうか。過去十年間に右の年表だけで七人

の妊婦、中河さんを入れれば八人の腹ポテ女性、その異様なヌード姿を晒したことになります。これとに昭和46年から48年への三年間は、毎年切れ目なく必ず妊婦が登場しているのです。奇クのこの分野にかける熱意がうかがわれるというものです。それとともに、世の中には、妊婦マニアと言われる人たちが決して少なくないこともわかりました。

妊娠した腹が大きい女のヌードを撮るといふこと——小生はたまに、昭和三十三年八月号の羽村

京子さんの提唱「浣腸と妊娠」を持っていきます。当時は白表紙の目を忍ぶ姿で発行されていた奇クですが、そこでは控え目に次のように書かれています。

「……奇譚クラブの口絵に妊婦のヌード写真のつたり、分譲写真としても売り出されるようになれば、こんなうれしいことはないと思います」

「……万一、それ（妊婦のヌード写真）が一般の人の注目をひかないのなら、同好者だけで、たとえば奇譚クラブなどで問題になってもよさそうに思います。モデルがえがたいといっても、写真の普及した今日、家庭でもヌード写真がとられているにちがいないことをおもえば、かえって妊婦のヌードモデルも、えやすいのではないのでしょうか。……また、家庭外でも妊婦のヌード・モデルは案外、えられるのではないのでしょうか」

「……奇譚クラブが妊婦のヌード写真という新しいジャンルを開拓できたなら、すてきだと思います」

昭和三十三年から、十五年以上経ちました。そして今では、羽村さんが希望された通りのことが実現しているのです。随分長く、かったものだと思います。





## 私の求めるM女性~~~~山形須奇男

△SM研究会の提唱▽に賛同する

私は本年三十六才になる男性ですが、自分のこうした性癖に気づいたのは十数年ほど前、その頃は、すでに奇クも発刊されていました。自分が何故、こうした性癖を持つようになったのか、その原因や理由については一向に心当たりがありません。以来、むなしい

欲求不満の日々を送ってきたわけですが、奇クは、そうした私にとって、まことに千天の慈雨のようなものでした。

この世にM女性という人が果して居るのだろうと疑いたくなる程私の周囲には、そうした傾向の女性は見当りませんでした。私とし

## △SMに関する私の持論

△SM研究会の運営について▽西宮利夫

奇ク十二月号塚本氏御提唱のSM研究会の件につき、とりあえず心から賛同する旨のお手紙を差し上げておきましたが、其の後、此の会の実現や運営につき、私なりに色々考えましたので、拙い意見ではあります。筆をとりました。

此の様な会の重要なポイントは入会者の資格審査と其の後の会の運営方法につきると思います。まず入会者の資格審査ですが、此れには二つのポイントがあると思います。一つは身元が明かである事

次に真にSMを愛する者である事の二つだと思っています。第一の身元の件ですが、要するに住所が明らかであり定職をもっているということではないでしょうか。次に真にSMを愛好しているか如何のチェックですが、此れも、たとえば

女性の裸を見る為にストリップ小屋へ行く位の気持で来られたり、本会を売春の斡旋所のつもりで来る様な手合いを締めだす為にも是非、チェックしたいと思っています。

その為に必要なことは先ず面談だと思っています。直接面接してSMについて小一時間も話しておれば

大体その人が真のマニアかどうか見当がつくのでは、ないでしょうか。又、念の為、同伴で来てもらってプレイの実演をしてもらってテストすることも是非やりたい事です。しかし、不幸にしてプレイのパートナーには恵まれないが真実SMを愛するという者もおりましようから、その様な者にも入会の道を空けておいてあげてもよいかも知れませんね。その時、結論から言えばSオンリーというのはお断りしては如何でしょうか。

(尚、私は女性の応募者は余程の不資格者でない限り問題にしません。無条件で入会していただいてよいと思います)

ここで私はSMについて、一つの持論がありますので、それを述べたいと考えます。普通、SMとありますが、私の持論はSMであっても、その原点なり本質はMであるということ。つまりSの性向は普通の人間、誰でも持ち合せているもので、それだけでもって直ちにSMマニアとは言えません。それ以外にMの性向があつてはじめて真のSM愛好者として、





て、それなりの努力は一応してみたのですが、むなしいという言葉の示す通りの結果が、私の心の底にオリのように残るのでした。この世にM女性が如何に少なくそして、S男性は如何に多いかということを痛感するのです。それは奇ク誌の読者通信欄を見てもよくわかります。婿八人に嫁一人とあった有様です。でも、奇クを読んでいると、世にかくれたM女性も決して少なくないように私には思えるのです。只、いろんな事情で表面に出るのを、ためらっているのだと思います。

私は、まだ一度もSMプレイな  
るものを経験してはおりませんがやはり、そうした際、M傾向の女性が相手でないといつまりません。SMに理解のない女性を相手にプレイをしたって砂を噛むようなものだろうし、場合によっては逆効果だろうと考えます。こうしたとき塚本鉄三氏が、SM研究会を提唱されたことは、非常に有意義です。私の大好きなM女性は、今まで誌上に姿を見せた人としては、中河恵子さんです。私にとって中河恵子さんは理想的な女性です。こうしたM女性を中心にしてSMの研究をやったら、どんなに楽しく愉快だろうかと考えます。

そうでない者と区別出来るというのが、私の持論なのです。

SアンドMを愛する者がSMマニアであり、Sオンリーの者はSMマニアの範疇に入れないというのが私の主張なのです。従って此の持論に基づけば当然Sオンリーの人には入会お断りという事になります。そこで応募者には皆、Mとしてのテストを受けてもらいます。それに合格した者は晴れて入会ということになります。しかし、此処で私が一つ考えるのは男女のバランスという事です。此の会は男女の数がバランスしてこそ良い雰囲気が保持出来ると思います。是非共そうありたいと願っております。だからこそ、私はペアでの入会が最善と思うわけです。

ゆるSMマニアではないという事です。

次に会場の問題ですが二人だけのプレイならホテルで簡単に解決出来ても、多人数のプレイとなりますと適当な会場がありますかどううか、この件に関しては私は全くとお手上げで塚本氏に頼る外ありませんが……又、費用の点ですが塚本氏は金銭はトラブルの原因になるから云々と、おっしゃっています。又、其の他の雑費も当然、要るところです。どうしても会費という問題は必要になるのじゃないですか。出来れば入会金もキッチリ取る、会費も勿論、当日チャンと納めてもらう、という様にした方が会としての格式も上がり、長続きもするのではないだろうかと思うのですが……。

以上、思いつきに色々と書き並べましたが、中にはペテランの塚本氏に対してピントはずれのことと言ったと思います。その点は何卒御容赦下さい。尚、最後に、私は現在、仕事の上でも時間的に割と自由の身です。会発足運用の面で人手不足の場合は、使い走りでも雑用でも喜んでさせていただきます。



じょこんび

## 女 禪 美 に つ い て

田園調布 村 山 生



かつて、大家辻村隆氏もプレイの女性に晒の禪をさせて、「女斗美」だといっていたのを読んだが他のSM誌でも、こういう誤解は公然としている。それぞれ、理解は守備範囲の外には及ばないものらしい。

女禪美（ジョコンビとよむ。来日のきまつたジコンダとは少しちがう……さしあたり、モナ・リザ

はゴロだけなら「女禪だ！」女闘美をメトミーとよまず、ニョトウビとよむなら、これもニョコンビでもよい）、古くは、室井英山、女斗彦といった人々が、さかんに讃美していたものだ。

確かに女闘美の主役である「女すもう」は、女が禪をしめて斗うのだから、女の禪姿を見れば、女すもうを連想するから、女禪美即

女斗美だ、というのかもしれないが、そして、女すもうのファン達は、お見うけするところ、海野氏も雄松氏も奮斗士氏も、この女の禪美と不可分の趣味をお持ちらしいが一方では別に女禪美とは関係ない女斗美があり（女子プロレスや、エスカレートするとバレーボールまで）、他方では女斗美と関係ない女禪美があつて、上記のような女すもう愛好の人々は、この接点にある、趣味の人々と考えるべきだろう。

そこで、女禪美マニアについては、正負両極のタイプ（SとM）がある様だ。

第一に、古く山田克郎氏は、禪を、サド女性とのプレイの衣装としてマゾ的な好みを書いていた。つまり禪姿の女性に責められたいとの願望。

第二は、ムリヤリに禪をしめさせられて、はずかしさにたえかねている女の姿を、すばらしいとする立場（小生はちょっとこれ）。これはしばられた女でもいいわけだ（一般の女禪美はロープを嫌うらしいが）。

第三は、女すもうマニアの人々のカラッとした（かどうかわからないが）女の格闘を演出する意味で

の、戦いのアクセサリーとしての禪。

もしも、この第三の場合のことを「女斗美」というのなら、第一と第二は別の「女禪美」というものであると思う。

もっとも、女の禪美から、それぞれ自分の好む連想をするだろうから、一括して「女禪美」マニアの同類とはいえる。SとかMとかのリクツを離れていえば、結局は女性の「尻」のすばらしさということになる。顔よりも乳房よりもどこよりも「尻」が美しいというのは、人間も、哺乳動物の一種だから当然かもしれない。しかし素裸の尻やパンティをはいた尻は面白くない。

禪でもこのごろの（男の）力士のしめ方はダラシない。立禪（タテミツ）を太くして、まるでサルマタ、のように股間にまわしている。立禪は細くキリツと喰い込んで締めてこそ、美しい。

最後に十一月号の雄松比良彦氏の「女相撲書誌拾遺」のカット、とくに立合つてとびかかる二人の少女の図が、よかった。

——「大噴火」も愛読しています（カット・雄松比良彦画）





## 少年の禪姿の美しさ 岸田輝太



少年の禪姿の美しさというものは本当に純真な汚れなきものです。最近、下着としてのフンドシの良さというものも見直されつつあり、多くの雑誌にも取り上げられております。SMの面から見た「禪」に、私は常に関心を持っていましたが、機会がありましたので、禪風俗をスナップ、してみました。

毎年、九月八日と九日の二日、京都上賀茂神社で行

われる『カラス相撲』での一コマです。八日の晩、八時から内取式といって、本番の組合わせを定めます。九日には、美人の巫女が出場少年の数だけの晒木綿を切り揃えて分配します。裃（素裸になつて水をかぶる式）を終った少年はこの巫女（みこ）から晒を受取って締め込むわけです。

晒木綿を締めて禪にすると、神社へ行って御祈りが始まるわけですが、それまでの少しの時間、憩いの場所で、くつろいでいる所を

スナップしたものです。

少年達のピチピチした双臀に喰い込む晒木綿の禪は現在では全く見られない貴重なシーンです。のびやかに育った少年達と、この白いフンドシとのコントラストは、まったく美しい一幅の風景画を見るようです。

何十年前前なら、少年の禪姿など珍しくもなかったのですが、今では貴重な風俗となつてしまったものです。拙作が読者諸兄の御目に触れれば幸いです。



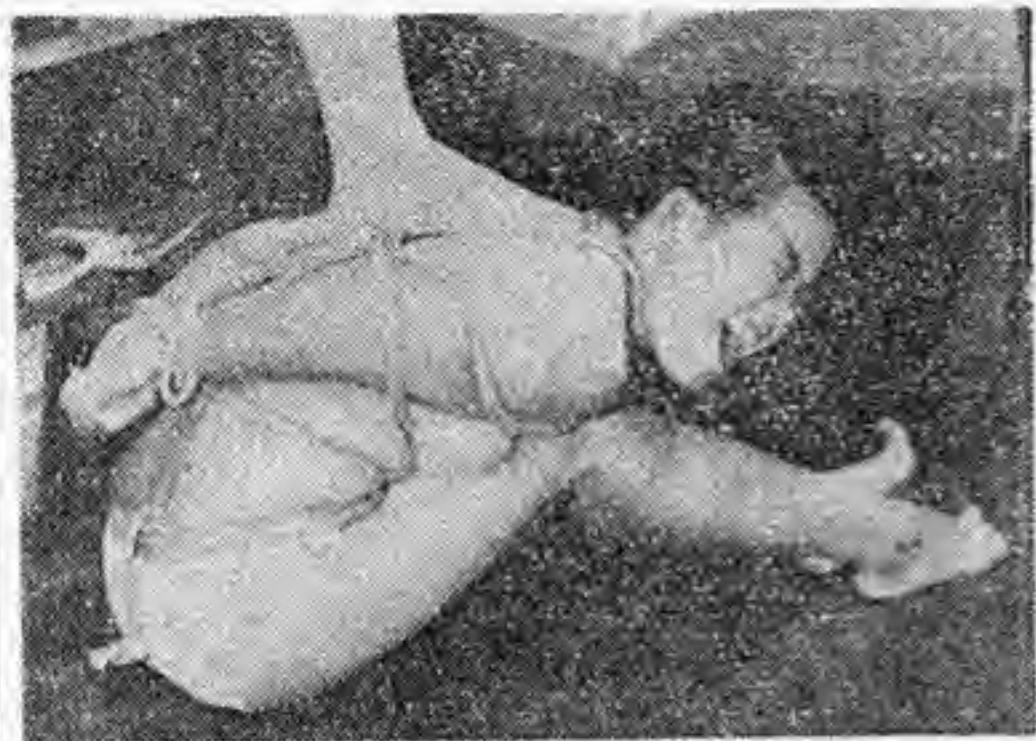


## 塚本鉄三氏提唱の

## 『SM研究会』に寄せて

青木順一

諸物価、殊に紙の値上り、不足人件費の膨張、粗製SM誌の写真盗用等々、中々やり難い世上、相変らずの奇クの編集、誠に御苦労とマニアの一人として厚く感謝致します。扱て本日は最近感じました事を一つ述べさせて頂きます。



が今日の奇クを支えている事は申すまでもありませんが、最近、類似の粗悪なSM誌がはらんするに及び、それ等と比較して断然奇クが輝いているのは、なんともマニア投稿の写真作品の多様に亘っている事です。作られた物でない生のSMの模様が直接、読む者に迫ってくるからでしょう。素人っぽさの中にマニアに迫ってくるもの、泥臭くてもよいから生々とした、真に息づくようなSMフォトが欲しいのです。只、美しさを強調するようなのは、とかくマニアの意向からは、不満です。我々は、あくまでもリアルな責め(但し残酷でないもの)と羞恥責めを求めてやみません。演出されないナマのものの中にこそ、真のSMがあるのではないでしょうか。

次に十二月号の奇クサロンで、(二三九頁)塚本鉄三氏が『SM研究会の提唱』なる一文を呈しておられますが、吾々古きマニアの待望久しき意見でSM心を刺戟す

る事大です。それに就いて、二、三質問させて頂きたく存じます。

一、恐らく希望者は極めて多数と存じますが、その選択は如何なされますか。参加資格は如何?

例えば男一人女一人にて可なりや又夫婦者同伴にて可なりや。

二、夫婦同伴にて参加の場合、妻をMとして限られた人々に提供する様な事も出来ますか。

三、金銭的なトラブルもなんでしょうが、マニアのモラルに反したり又後日参加者殊にM(♀)になつた者に迷惑を及ぼす様な人物の混入を如何にして避けられますか。

今回の提唱は待つ事久しの感がある程にて何とか早く実現されん事を切望致しておりますが実際面になると塚本鉄三氏は勿論、参加希望者にも夫々各人各様の悩みがあり、さぞ大変な事と存じます。

就中、その人選に於いて最大の難関があるのではないのでしょうか。

古くからのマニアで殊に夫婦者等で対象に一応、事欠かぬ人達ですが、比較的に、若く対象を求めて得られぬ様な人達が一度SMの真味を味わって忘れ得ず、而も、その後、対象に困って深追いしたりしてSEXの重大なトラブルとな

りはせぬかと心配します。

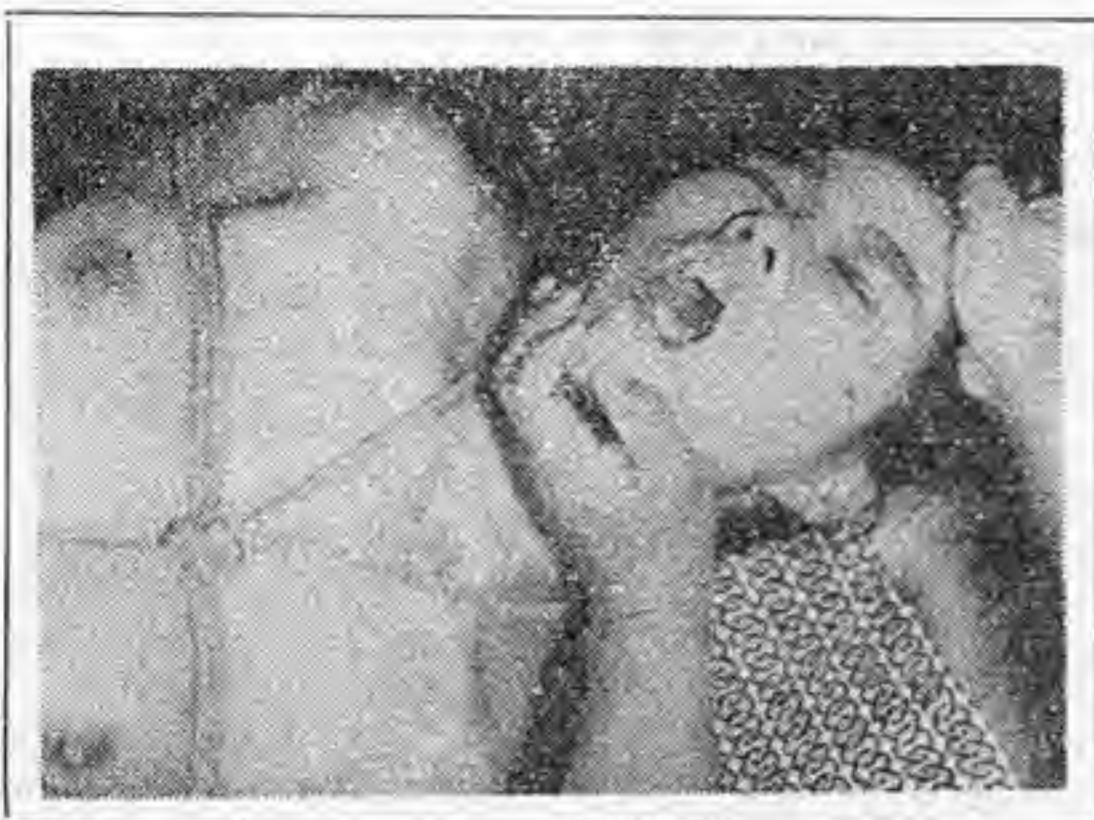
塚本氏の構想を勝手に早々と想像して、一つのSM会の型のようなものを作り上げ、その上で色々駄言を提しましたが、何卒不悪お許し下さい。尚、小生は時々誌上に投稿させて頂いています青木順一でございます。皆様の御意見を伺えたら幸いです。

……………

〔追伸〕一月号で苗木陽子さんの緊縛フォト拝見しました。モデルとして多少、肥満気味の嫌いがありますが、小生は、こうした素人臭いモデルの方が好きです。如何にも作られた様な羞恥よりも、遥かに実感を感じます。陽子さんの羞恥度は最高の素晴らしさだったと思います。







片桐久子様へ

## 誌上プレイの便り

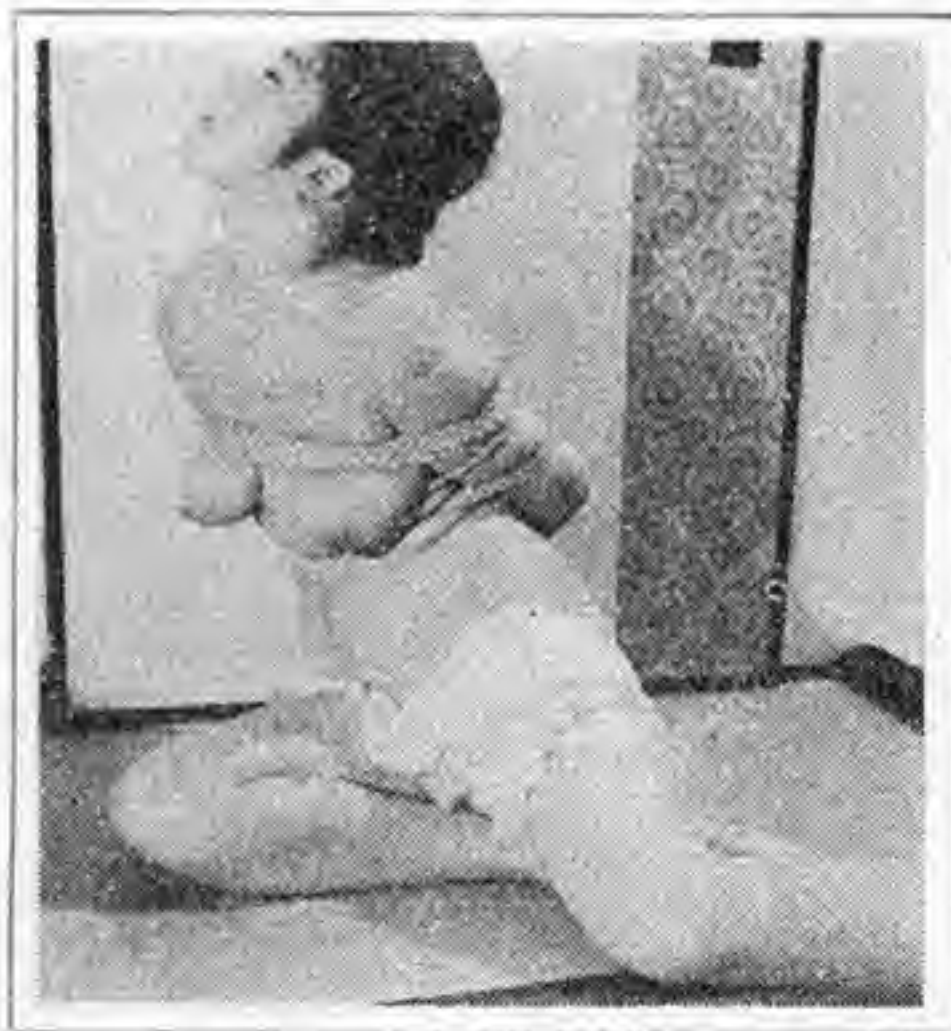
末広節男

貴女は、なんと素晴らしい女性なんでしょう。自分の心に忠実である貴女、勇気のある貴女が一遍に好きになりました。勿論、奇くに投稿される当っては、悩まれたかもしれないませんが、アナル責め、刺毛責め、バイブ責め。それに木村洋子嬢のように責められたいとはなかなか言えないものです。だから好きになったのです。

私が奇クを知って、もう十数年になります。この世界は不思議な世界で、一度知ってしまうと、もうその世界から、なかなか抜け出せない所です。貴女も抜け出す努力をなさったようですが、体が知った快楽は、精神的快楽で補いきれません。貴女は貴女自身の心の赴くまま青春を思いきり謳歌して下さい。

随分と前置きが長くなりましたが、私のプレイの主流は、浣腸Ⅱアナルプレイです。カメラ・ルポの塚本氏のように洗練したプレイは出来ませんが、そこそこのプレイはやれます。また写真も撮るところができますので、貴女のプレイフォトを撮り、青春時代の楽しい思い出として残しておくことができます。

そこで貴女に対する私の誌上プレイですが、まず後手縛りで、ゆっくりと貴女のペールを剥がしにかかります。着衣を一枚また一枚と取るにしたがって、貴女の心は早鐘のように打ちだすことでしょう。



う。遂に美しいプロポーションの全容が現われ、貴女の羞恥のボルテージは、今や最高の状態になり可愛い体がかがめ次の魔手を待ち望んでいることでしょう。

開脚股間縛りで、重要ポイントにはコブができ、貴女の美しい音色をききたがっているのです。その紐を、ある時は強く、ある時は弱く、伸縮自在にあやつり、貴女のボルテージをより以上あげた次の責めに移行します。まず貴女の上体を足の間に入れて一諸に縛り、横に寝かせて検査です。私の眼前には可愛い口が、魔手を恐れて小さく動いているのです。この可愛い口にタップリとクリー

ムを塗り、静かに、指が潜航していくことでしょう。検査が終ればポンプとエネマによる浣腸で貴女のアナルを柔らかくして、バイブ、コケシ等で責め続け、最後はAとVにバイブを入れての仕上げで今回の誌上プレイを終わります。

プレイにはパターンなんかありません。その時のムードにより、いろいろ変化するものです。実際のプレイは、もっと軽いか、強いかは、その時の状態で、ここに書いたプレイは私自身のプレイ思考を知ってもらつて書いたものです。もし神が二人を引合わせてくれたなら、貴女を、うんと楽しませて上げることができると思います。

最後に、土曜の午後から日曜でしたら、私も十分、時間がとれます。私は現在、貿易会社をやっております。これから寒くなりますゆえ、お体を大切にしてSMプレイに、はげみ、片桐ファンの為にまた誌上に投稿されることを祈りつつ、ペンをおきます。

(大阪府豊中市・末広節男)

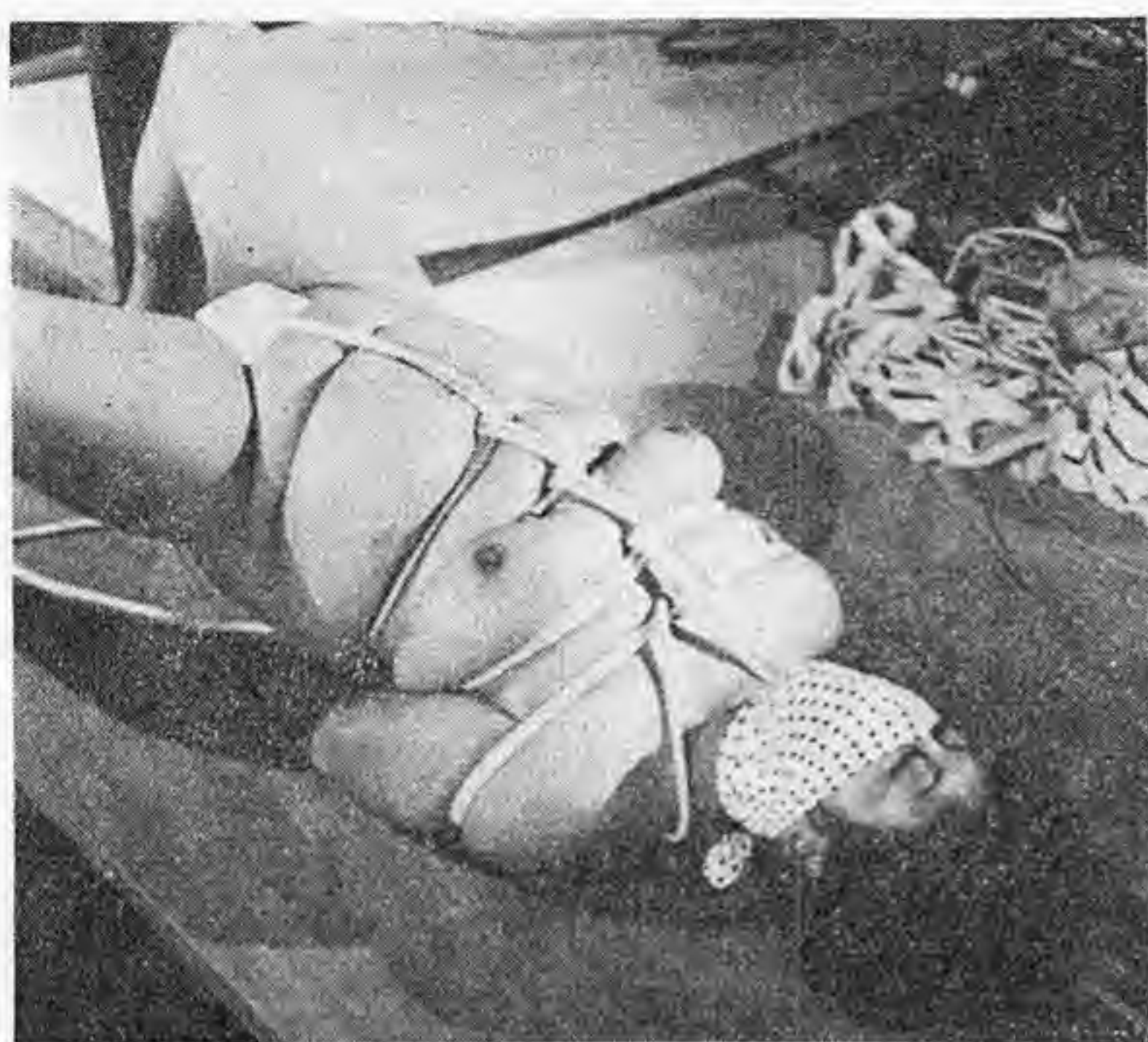


# 白豚に憧れたボク

藤川冬一郎

十一号で苗木さんの通信を読んだ。ボクは彼女こそ長年、待ち望んでいたマゾ女性だと思った。これほどまでに、マゾの心理を抉って赤裸々に書いている文章を、ボク

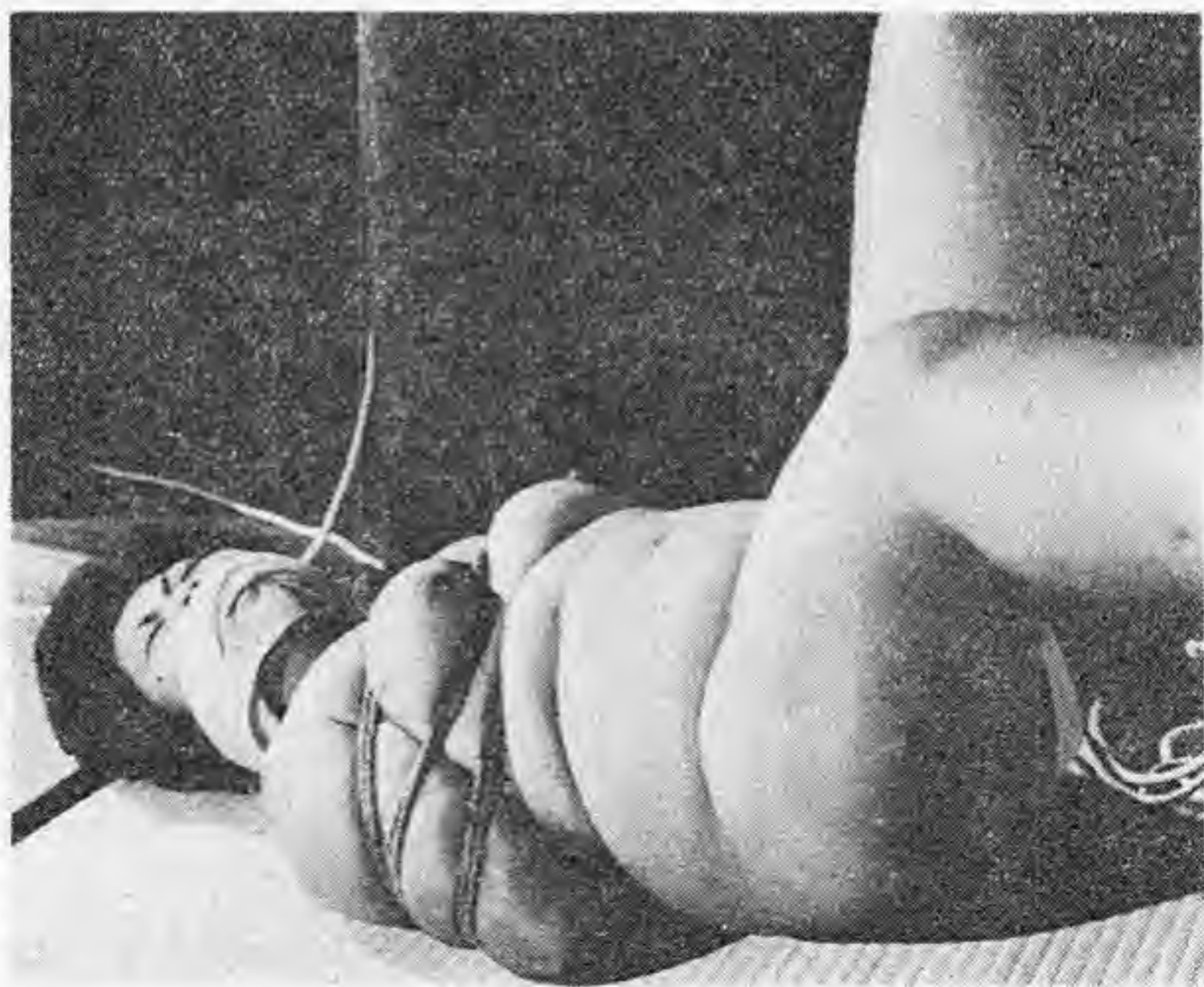
はまだ読んだことがない。ボクは奇クの読書歴十数年を誇っている者だが、これほど感激したことはなかった。ボクは、まだ見ぬ苗木陽子さんに、一人のS男として、完全に恋をしてしまったのだ。



ボクはS Mラブレターを出したいとさえ思っていた。出来れば苗木さんを、自分の手で縛り責め、そして、彼女の体の奥底に淀んでいるマゾ性のある限り、白日の下にさらしたいと思っていた。ああ、そ

れなのに、なんたる事ぞ。十二月号を見てボクはガク然とした。あっと思った。塚本鉄三氏の余りにも見事なペンで、苗木陽子のすべてが裸にされているのではなにか。ボクは正直いって塚本氏に嫉妬した。爛熟した陽子さんの肉体を、これほど巧みにリードし、むさぼりつくした彼の手腕に敬意を表しながらも、ボクは実際、嫉妬と羨望に、さいなまれた。

そして、ボクの憧れ恋した苗木さんが、これほどまでに、燃え、狂い、泣き——していることに、ボクは体中が切り刻まれるような辛い気持がした。それほど、あの十二月号のルポはボクの気持を逆



なでした。だが、塚本氏の手腕には、とてもボクなどかなわない、足もとにも及ばないと考えて諦めた。

塚本氏のルポの文章。クールで冷酷で、いささか冷酷とさえ思える内容。文章に責めのすべてを表現して、一分のすきもない、あの



## SM一年生の提案

### 川西研究生



すさまじい迫力。文章のテンポの早さは、作家の黒岩重吾に比敵するものがある。このSMに徹したルポは、過去に相当の経験を積んだ者でないと決して書けないものだ。或は、有名作家の匿名ではないかとさえ、思う。

重厚で、ふてぶてしいと思えるほどの自信に満ち満ちた、この執筆態度は、決して、昨日今日、ブ

ームにのって書き出したっていう代物ではない。見様見真似で書いたルポの文章でないということは、目のある者が読んだら、一遍に、わかる。

ボクが目のある者というわけではないが、それでも、グツと腹の底まで響いてくる、この迫力は唯者ではないということに五体八脚に感じさせた、うまさは、全く兜を脱

ました。昨日、行きつけの古本屋にて、本誌の65年1月号を手に入れたところだ。

その巻頭を飾るグラビアには、私の好きなポツチャリ型美人の山原清子さんのが出ていました。

さて、本論に入らせてもらいます。昨今、特にこの二三年の間に、SMという言葉は、我々マニアの間だけでなく、それこそ世間一般の常識です——といえる程、ひろがりをみせた言葉です。

私はまだこの年令で、いわゆる女を知らない訳なので、デシヤバツテ大きな事はいえませんが、夫婦の間をうまくまとめる八まとめ役Vというのが、このSMの心情だと思ふのですが、どうでしょう

いだものだ。

塚本氏の一匹狼のようなタブーをタブーとしない逞しさは、一体どこから派生してきたものだろうか。ボクは氏に、あやかりたいものだと思う。教師という職業についていたとのことだが、石坂洋次郎が教師をしていた経験から名作「若い人」を書いたが、塚本鉄三氏は、嘘のないこのカメラ・ルポ

か。というのも、本誌によく出てくる夫婦プレイを行っている方の仲むつまじい事は、うらやましい限りです、本当に。

それにつけても、塚本鉄三氏の提唱されたSM研究会Vは有難い事です。テキストは、毎月のKK

としては如何ですか。本誌の読通を見ると、沖縄の女性から長野県の男性と、それこそ全国的、幅のある世界なのです。といって確かに、この様な会は大きな声を出してやるものではないと思います。それこそ、カクレキリシタンのような形式が、いいのではないですか。私はそんなに思います。

いろんな方と知り合いになる、それが私の目的の一つです。現代は、よく個人主義の世の中だなんて言われますが、それは淋しくて

で、不朽の名作を物してもらいたいものだ。

ボクは苗木陽子さんに限りない憧憬の念を抱くと共に、塚本氏のルポに対して、深甚の敬意と驚異の念を抱くものである。もし、彼が一流作家の匿名の執筆でないとするならば一度是非、拝眉の榮に浴し、ご教示にあずかりたいものである。

悲しい事です。心おきなく自分の思っている事が話し合える友のいるグループがあるという事は楽しい事です。特に、こうしたSMの世界に於いては、たいへん貴重な会合だと思ひます。心から賛同する者です。

私は年令25才、身長一・六四、体重六〇、どちらかといえば骨太の方です。SMの世界の他、休日は京都奈良方面の古寺仏閣を巡ってカメラに収め、音楽は琴、尺八そしてナツメロを、こよなく愛する現代青年です。

正直いって、こうしてペンを持つのも恐い位でしたが、本誌74年1月号を手にして、一気に読み終え、その興フンのさめやらぬうちに、思いきってペンを走らせました。

私は当年25才になる大阪市内に勤務する一サラリーマンです。私がこの世界(SMの世界)に足を踏み入れてから、まだ三月しかたっていない。無論、縛り、浣腸、剃毛などのプレイはまだ一度もやったことはありませんし、実際その場を見た事もない若輩者ですが本誌は昨今を含めて13冊入手し



信

＜通

## ひぎゃくのうたげ 小杉千恵



女のマゾのはじまりは、まず衣服をぬがされることに端を発し、ワイセツな視線を注がれることによって、これを意識すること、いかえれば、羞恥を着ることで最高に、たかまるのです。

女のヌードとワイセツとを同一に考える人は、いない筈です。しかし、悦虐を求めアブを愛するた

めには、先ず丸裸になるのが順序です。私は倒錯を愛そうと決心しながらも自らの裸形を人前にさらす勇氣はありません。

私は塚本鉄三氏撮影の奇クのグラビアに肢体をさらす人達の美しさに、いつも嫉妬を感じます。そして、△奇クサロン△などより浮かび出た女性の姿態や表現には、

Mそのものの耽美さが、にじみ出ていて、思わず、うっとりと思われてしまうのです。

九カ月から臨月にかけての妊婦腹を全裸でさらした南加津子さんの羞恥あふれる表情や、生まれたままの恥かしい裸身をそのままに開股した羞恥の悶えは、女の私にも、はっきりと体が濡れるのを覚ええました。南加津子さんという女性、体ごと羞恥責めに、ぶっつけてゆくといった情熱の人です。

臨月腹の堂々とした素晴しさはまことに見事な逸品でした。まだ△妊娠△という生理的現象を経験したことのない私にとって、羨ましいような女体の変化でした。敏感そうなふくらみにふくらんだ乳首が、刺戟を求めるかのように、豊かな乳房の頂で、ツンと突き出していたのが、とても、印象的でした。

縄で縛られて、身動きできないまま、責められた加津子さんが、「いや、いや」と悶えたのに、ルポハンターが遠慮えしゃくもなく責めたので、倒錯の羞恥の美しさを表現して余すところのないお尻や足が、あんなに躍っているのは、私にとっては鮮烈なショックでした。それに引きかえ、顔が

## 編集部たより

○用紙の値上りと不足とはSM雑誌にとっても大きな脅威となってきた。もっとも本誌が創刊した頃は蘭の仙花紙を買ったために札束をリュックに背負って出かけたものだから、その頃から比べると、今はまだ極楽かも知れない。電話一本すれば手形で買えるのだから。創刊しばらくして背広まで質に入れた、貨車一杯の更紙を求めたところがあるが、前金だというのに銀行が、なかなか金を貸してくれず泣いたことを覚えている。

○それから二十数年、再び紙飢饉とは考えたくはないが、それにしても貴重な用紙を消費するのだから、やはり後世に残るような文獻的価値のある内容を盛り込まないことには存在価値がない。地味ではあっても輝く珠玉のような雑誌にしたいものだと思ふ。

○本誌を同人雑誌的だと言う人がよくある。奇譚クラブというネームを信用して文句なしに買ってくれる固定読者を、奇ク同人と見なしたならば、そういう見方も成り立つかも知れない。読者の手にな



無表情だったのは、本当に責めのムードの中に、とつぷりと浸りきってしまったのですか。そのときの幸福そうな貴女の心が、その表情から、私は読みとれるのです。

南加津子さん。貴女は、一月号の「奇クサロン」で

『出産後の私のことなど』という珠玉のような一文を書いておられますが、貴女の鋭い、とぎすまされたような観察力には同性として、とても共感を持ちましたし、また理解できました。そして、またその一面、ぞっとするような感激をも受けました。ハンターのことを「塚本さんは嫌いです。嫌いというよりも、こわいのです。私となにしたあとでも、ふつと気づくと、冷静な眼で、じっと私を見ているのです」と抉るように正直に書いています。

私は貴女の、この



鋭いペンに、ハンターよりも、貴女の方に、作家的な眼というものを感しました。ハンターと南加津子という女性が、お互いに相手を観察しあうということは、これこそ、SとMの相剋ではないでしょ

うか。私は、この二者に非常な興味と関心を持ちます。

南加津子さん。

これから、是非、この鋭い嗅覚の持主であるハンターの前に、その麗しい裸身を、さらして下さい。「正直なところ、塚本さんは嫌いです」と言っています。貴女の体の底に巢喰うM心が、「冷たい目や態度に、大いに興味がある」との違いますか。女の私には、そう思えてならないのです。

私は、今は小さくなたであろう加津子さんの可愛いお臍の上にのせられて人肌で温められた茹玉子や、ねっとりとした太腿の上に積みかさねられたバナナの房などが目に、浮がんできます。一月号の貴女の「通信」を読んで再登場をお願いしたく、貧弱な女性読者としての空想力を働かせてみました。

私のこの空想図が現実のフォトとなる日をお待ちしています。

る読者のための雑誌を標榜する本誌としては、同人雑誌的という評を甘んじて受けたと思う。

○そうした意味からも、男女を問わず、読者の方々からの投稿や通信を大歓迎する。読者と密着した読者の側に立つ雑誌という性格を一層発揮するためにも、読者の方々の声を共通の広場で大いに謳歌したいのである。作ったものを只頭ごなしに与えるというのではなく、奇譚クラブという雑誌を、皆さんと一緒に作るという立前で編集してゆくのである。

○その意味あいから今月号の「奇クサロン」は若干の増頁をした。読者の方々からの投稿を期待すると共に、今まで送稿になつていない告白、体験などを今後共、極力掲載したいものだと思っている。

○女性読者の方々に對しても努めて執筆して貰えるよう懇懇してゐるので、その成果が、いずれ今後の誌上に現われることと思う。百花擡乱とSMの花の咲き誇る奇クの黄金時代が、必ずや幾度となく訪れることを信じて、より一層の充実を計りたいと考えている。真摯なファンの方々からの応援と鞭撻とを、双手を挙げて心から期待し、且つ、お願いしたい。





本誌には、縛りとか責めとかを  
始めとして、浣腸とか、切腹とか  
ゴムとか、オシメとか、時には女  
相撲、女斗美といったものが多彩  
にとりあげられています。

そうした平凡ならざるものに、  
私は大変興味を持っています。が、  
昨今、甲斐千恵子様が提唱された  
「獣姦」という分野には、今まで  
と違った強い刺激を受けました。  
真実といって虚をつかれたようなシ  
ョックでした。

責めとか、SMとかの果てのS  
EXを考えただけでも、私はしび  
れます。正直いって、ルポの文章

## 甲斐千恵子様と苗木陽子様 「獣姦」というアブのジャンル

本 村 信 介

と写真からは、単純なポルノとは  
違った迫力を受ける私ですが、甲  
斐千恵子様の「獣姦」のテーマと  
その体験からは、神秘的な境地を  
感じとりました。

SMのプロセスを経てからのS  
EXに、奇巧の耽美の世界がある  
わけですが、獣姦という別の世界  
に展開されたSEXには、また別  
の味があるものと思います。

甲斐千恵子様の場合、今、自分  
が獣に犯されているという強い被  
虐意識が体の中にあるために、精  
神的な快感が、肉体的な快感を倍  
加させているのと同じです。も  
し、肉体的快感のみで満足してい  
るのだったら、その文中で、他の  
人に見せたいとか、ショーに出た

いなどとは書かなかった筈です。  
犬との交歓による肉体的な快感  
だけであつたなら今まで話に聞い  
たこともよくありました。しかし  
精神的な快感を体内から発すれば  
こそ、甲斐様は、より以上の快感  
を得ようとして、鏡を第三者に見  
立てて行ったり、また実際に第三  
者、それも複数の人々に、その行  
為を展開したいと考えるのでしょ  
う。

苗木陽子様が、「ケモノになり  
たい」と願望していられるのも、  
やはり、そうしたケモノに犯され  
ているという耐えられない被虐意  
識が、より素晴らしい精神的な快感  
につながるのだと思います。淡白  
な人と人との交わりでは得られな

い、微妙な肉体的快感も、実際に  
はあることは充分想像されますが  
私には、やはり精神的な快感が大  
きいと思います。

甲斐千恵子様が、首に犬の首輪  
をつけられて、くさりで結ばれ、  
犬としての扱いを受けた上で、S  
の人から、犬のように犯されたと  
したら、どうでしょうか。私は、  
苗木陽子様のルポ記事を読んで、  
ふと、そんなことを考えました。  
男と女と犬が、三匹のケモノとな  
って、交わりあうのです。これこ  
そ、文字通りの「獣姦」ではない  
でしょうか。黎明期の「獣姦」と  
いうジャンルが、奇巧によって皮  
切られることを望みます。

その意味で、奇巧に甲斐千恵子  
様や苗木陽子様のような素晴らしい  
女性がいられるということは、無  
限の可能性を夢のように描いてし  
まうのです。

## 鎌倉氏の「浣腸」についての疑問に思う

竹 迫 誠 也

奇巧一月号、鎌倉氏の「浣腸に  
ついての疑問」は、志を同じくす  
るものとして、もっともな説で、  
浣腸をこれ程までに憂え、信じて  
いることにファンとして、むしろ  
心強く思う者の一人である。只氏

があげている浣腸マニアと浣腸を  
空想の中で描いている人と混同し  
ているのではなからうか。いわゆ  
る浣腸マニアとは、いわば麻薬の  
ような浣腸のとりこになっている  
人達で、例えば団氏、辻村氏、塚

本氏等は浣腸を施す経験はあるに  
しても、とりこにまでなっていな  
いので、むしろ後者の空想の中に  
生きる部類といえよう。  
鎌倉氏は、浣腸写真はマネゴト  
が多い事を嘆いているようだが、

マネゴトでもよいではないか。た  
しかに浣腸器をモデルのチマチマ  
入し、グリセリン液を腸の奥深く  
注入してゆく、その過程をとりあ  
げる事にした事はないが、現法  
制下では、これを望むことはドダ  
イ無理。この位は読者として理解



イメージ画……『お遊びセット一式』……マエダ・ヒオミ



してやるべきだ。  
では、浣腸写真の定義とはなにか。モデルは別に美人でなくてもよい。むしろプロポーションがよければ、浣腸モデルとして十分。しかし太股を折り曲げた時、双尻がとがったようなヤセの臀部では浣腸写真は通用しない。肉づきのよい太股、その延長にプリプリした白桃のあのまろやかさを思わせる、むっちりした双臀こそ、二百

CC浣腸器の外筒をも、もろにのみ込んでしまうのではなからうかというお尻でなくてはならない。いわゆるケツ美人こそ、浣腸写真の第一条件になる。さて次に浣腸モデルの表情だが、演技になれた女優なら、その時の表情はある程度こなすが、登場するモデルの殆どが素人の女性である。またこ

なるのだ。だからこそ、ここにカメラマンの鋭い感覚というか冷淡なまでの感覚が要求されてくる。奇ク一月号を例にすると、冒頭口絵写真のなかの玉木章子の『オシメのある責め風景』は拔群だ。この表情は正に、グリセリン浣腸をされ、オシメまでされ、グググーウツと、おし寄せてくる強い排泄感を息もたえだえに辛抱し、肩で切なそうに、ハッハッと息を出している表情が、まことに、うまく出ている。

すなわち、この写真一枚だけでも、ひとつのストーリーとなって読者の胸に、グーッと迫まってくるのである。浣腸写真は、こうなければならぬ。このようにやってゆけば浣腸写真だからといってあながち、モデルに実際浣腸しなければならぬという事はない。

要約すれば、プロポーションがよくて、ケツ美人で浣腸としての動き、表情が十分であれば読者はリアルな浣腸写真として感ずる。

また鎌倉氏は、果して二百CC浣腸器が、あのちいちゃな人間のアヌスに通用するであろうかと言っているが、これは浣腸への理解が不足のようだ。たしかに二百CC浣腸器を使う場合、馴れない

と浣腸液が腸の奥まで注入できずアヌスから、あふれこぼれる懸念がないではないが、千から二千CCのイルリガートルでさえ使えるのだから、たかが二百CC浣腸器が女体に使えぬはずはない。

だが、矢張り馴れさせるためにも、最初三〇CC位から始めて五〇CCそして百CCといった具合に徐々に浣腸器を大きくしてゆく事も肝心だ。また浣腸後、排泄を耐えさせるのもアヌス栓として当初は一口ソーセージの小さいのから始め、徐々に大きいソーセージを使う事が大事だ。鎌倉氏は専ら三〇CC浣腸でよしとされているようだが、その場合、アヌスに栓をして耐えさせても羞恥ある苦悩は、なんととっても二百CCの方が遥かに強烈だ。

浣腸して、すぐ排泄させては浣腸のよさは全くない。浣腸の素晴しさは、浣腸して排泄ができぬようにガッチリとアヌスに栓をし、とことんまで辛抱させ、縛られた両手、両足を苦悩のために、よよとよじり、双尻をうごめかせ、羞恥にあふれた声にも耳もかかず、あぶら汗をにじませながら排泄の極限まで持ってゆかせる処に、浣腸の最大のよさがあるのだ。





私の

## 新案飼育調教法

西村 真

奇ク9月号に「SM的アバンチュールの一夜」と題して書かれていた乃美対造氏の記事が目にとまり、14日間で一応のマゾとしての飼育調教された、21才の三枝と言う人妻に興味を感じ、すぐに、以前奇クに連載されていた鬼六氏の「花と蛇」の静子と思った。

現実には、そのようなことが常々と行われていると言うことを知りながらも、暴力団の資金源になっているようなのでショックである。しかし、乃美氏も最後に書いておられるが、私も機会があれば、こ

のマゾ一年生、三枝には申しわけないが、この目で、じかにじっくりと見てみたい。帰国後、はやくも妻を奴隷妻に一日も早くせんがための飼育調教の続きにとりかかった。フランスへ出かける前に鼻輪は障子が破れそうなものをつけておいたが、まだ気持の面で百パーセント奴隷妻になっ

ていないように思える。もちろん腰から股にかけての鎖は永久的な形で妻の力では取れないよう、普通に測って60センチ弱あるウエストを、52センチにまで現在は鎖を縮めて、ペンチでしっかりとめている。

今は新案の飼育調教法を行なっている。主人の足を舐めさす方法（責め）は、ある程度のSM夫婦なら行なわれているのだろうが、ジャムパン責めは、おそらく私達だけではな

いとは思われる。この責め方法は、妻がトイレで大便をするとき、便が落下しないように専用ザルで受け、それを普通の食パンにぬって食べさすという、ただそれだけが、最初はやはり、妻は泣いて許してくれと言っ

想随縛緊

慶子さまは神さま

早木 夢二

菱縄マニアだから女囚、お白洲拷問、引廻しなどと連想して、私たちのプレイが成り立っている。

この永い年月に、初めて慶子に縄をかけ、お目当ての菱縄に定着してから、どれだけ変化があったか考えてみると、股間縛りが加わったことと、上半身の前後に菱縄をかけていたのが、下半身の前後にも菱縄をかけるようになったこととぐらいで、菱縄という基本線はちっとも変わっていない。我ながら持ちのいいのに感心するが、菱縄という形の縛りが、私の永い人生を通じて、終始一貫、つきまとい



ある時期、縛りに狂熱的に打ち込んだが、その後、ふっとこの道から足を洗って（おかしい言葉だが）しまった人もいるようだが、私はもう、あくまでも菱縄縛り一途、あの世までこの一念を持ち込むつもりでいる。

それにしても、一糸まとわぬ全裸の慶子に菱縄股間縛りを施し「女囚」

「お役人さま」

と叫び合って、拷問プレイに、いそしんでいる図など、傍から見ると、ずいぶん、いただけないものだろう。

「縛ったり、叩いたり、惨めな姿にして楽しむのがサジスト」と、奈良林祥先生がラジオでおっしゃっていたが、すると私は完全なサ



毎晩のように妻を後手に縛り、鼻をつまみ無理矢理、食べさせていました。今では時々妻から求めてくるようになりました。

奇クに出てくるマゾ女性はいろんな形で洗腸をされていますが、洗腸の方法で、新しい方法を発見いたしました。テレビのCMでよく知られているバスクリンの原材料

映画『美女拷問』より



## 最近の緊縛映画から

東山映史

藤奈監督の『日本俠花伝』の拷問シーンが撮影中から話題になっており、『藍より青く』の真木洋子が、貧しい四国の漁師の娘ミネに扮して責められるのだが「拷問は本当に痛かった」と言っていて、さすが拷問指導名和弓雄とあるように、すさま

じいものだった。を、そのまま菊花にふりかけるだけで効果は、てきめんです。一度試してみてください。

最後に、苗木陽子に「花電車をやりたい」と言われる塚本鉄三氏のお考えには、私も大賛成です。ぜひ実現して、その結果報告を奇ク誌上で発表していただきたいと思っています。

じいものだった。

米騒動をアジリ、殺人犯の俠客清次郎（渡哲也）をかくまっている容疑で逮捕される。その逮捕シーンが、すさまじい。

細い黒縄で後縄で緊縛され、首縄もかけられ、痛々しそう。それで連行される。そしてハダカにされて縛られ、碁盤の上に正座させられ、竹刀で打たれる。

最後はギョウギウと両腕を縛られ、逆さ吊るし責めにあう。

本当に、これまでにない、すさまじいシーンだった。

前半に、女斗士のつる（任田順好）が特高に捕えられ、ハダカで鉄砲縛りの拷問にあう。その、すさまじい悲鳴がミネをふるえ上がらすが、それが後の拷問の伏線となっている。

ジストということになるが、考えてみると、縛られた慶子の姿が惨めかというところ、そうは思えない。全裸の慶子が誇らしげに菱縄がけの胸をはって乳房をつき立て、上気した顔を上げて、私の責め問いに答えている拷問プレイの姿は他人目には惨めに見えるかもしれないが、私にとっては、この上もない。

日活の『マル秘・女郎残酷肉地獄』で、中川梨絵の女郎の責め。最後に侍を殺し、首縄、菱縄縛りで引かれて行くシーンがよかった。また、逃亡をはかった女郎が、赤い腰巻一枚にはがれ、両手縛りで吊るし責めにあい、ピシピシ打たれる。そして太い柱に両足を投げ出して縛られている。もう一人の女郎もリソチにあう。

東映ポルノの『痴女の秘技』で不能の夫をもつ、望月節子扮するOLが、国電内の痴女行為を見つかり、カメラマンに手錠をはめられスタジオに連行され色々の責めにあう。木馬責め石抱きなどで責められ、写真をとられる。このシーンは短かったのが惜しいと思う。

なく美しく尊く、全く慶子さまは神さま、なのである。「髪の毛をひっぱったり、縛ったりするのはサジズムっていうんだってね」

その女は、したり顔で私をなじるように、いったものだ。そんなヤツに限って、縛りとなると頑強に拒否する。今度、会ったら素っ裸にひん剝いて、菱縄をびっちりかけ、ごつい結び玉を作った股間縛りとともに、強烈な海老縛りにして、ごろりとひっくり返し、あられもない羞恥責めを、たっぷり味わわせてやりたいもんだと、私は思っているのだ。

こういう姿を惨めな姿というのだろうか。

すると、やっぱり私もサジストのはしくれということになるのかと思ったりする。

「そんなこと、どうだっていいじゃない」

慶子さまは、やっぱり神さまでいらっしゃる。

恬然と、そうおっしゃって、ちやうどその順番になっていたの裸馬の私の背に股をひらいて跨がった。

神さまの裸引廻しなんて、あるのか知ら。



最新作カラープリント「M女狂えり」

可憐さと妖艶さを併せ持った深田菊子の奔放であやかな姿態。清純で知的な風貌の中に秘められたマゾの火を燃やす前田真知子。脂ぎった豊満な女体に、あくなくMを發揮する苗木陽子。女体の内奥までさけ出して、あくなくその個性を玉木章子と、それぞれ特の責め場面を持った三人のM女が、その責め場面に、その真迫性によって皆さまの裸身をさらします。責められの裸身をさらします。

巻蒲団責めに狂う

カラー三枚組 一〇〇〇円  
深田 菊子 略号八ろく  
バラの花のようにあでやかな菊子の全裸を巻蒲団に縛りつけての羞恥責めで狂うように悶えさす。

鉄柵開股放尿責め

カラー三枚組 一〇〇〇円  
深田 菊子 略号八ろく  
両足を思いきり左右に開かせられて無理に強要される排尿の責苦。

濡れたタイル責め

カラー三枚組 一〇〇〇円  
深田 菊子 略号八ろく  
排尿で濡れたべちよべちのタイルの上へ全裸で縛った菊子を引き回して、そのマゾ性を賜ぶる。

開股足挙げの白豚

カラー三枚組 一〇〇〇円  
苗木 陽子 略号八はせ  
むくむくと肥え太った白豚の脚を容赦なく開ききって、その花芯にあくなく侮蔑と弄戯を加える。

ムチ打に狂う牝犬

カラー三枚組 一〇〇〇円  
苗木 陽子 略号八はせ  
打ちごたえのある豊満な臀部にバシッバシッと鞭をふるえば、火のように燃えた女体は狂い舞う。

犬化願望の女の謎

カラー三枚組 一〇〇〇円  
苗木 陽子 略号八はせ  
犬のようにならなりたいと願う畜化願望の女を犯されたいとこんな面白ものだと知ったのは

足枷手枷の犬畜生

カラー三枚組 一〇〇〇円  
苗木 陽子 略号八はせ  
ケモノにしてほしい女体に手枷足枷して悪戯の限りを尽せば、泣き悶え喘いで果ては失神した。

拷問椅子の羞恥責

カラー三枚組 一〇〇〇円  
前田 真知子 略号八ろく  
淑やかな乙女を、こんな裸椅子の上で全裸にして縛りつけ伸びやかな脚をいじり回すS的な感興。

腰掛けの上の飜弄

カラー三枚組 一〇〇〇円  
前田 真知子 略号八ろく  
木製の腰掛けに茹卵のように剥いたM女を高手小手に縛り、知的顔と肢体を思いきり責める。

生々しき全裸責め

カラー三枚組 一〇〇〇円  
前田 真知子 略号八ろく  
成熟した女性の肉体の隅々まで目を前でつくづく眺めながら縄掛けして微妙な動きを見守る眼。

羞恥の中にあえぎ

カラー三枚組 一〇〇〇円  
前田 真知子 略号八ろく  
マゾ的な興奮に身をふるわせながら、全裸で縛られる羞恥には耐えられずに半開きの口で喘ぐ。

放恣な開脚の悦楽

カラー三枚組 一〇〇〇円  
深田 菊子 略号八ろく  
大胆にしかも奔放に真白い脚に縄掛けしてアヌス責めの好きな菊子の陰微な翳に視線を向ける。

両足首を縄で操る

カラー三枚組 一〇〇〇円  
深田 菊子 略号八ろく  
足首を縛った縄を引き、緩めかばいながら次第に開脚する。

諦観を楽しむ陶醉

カラー三枚組 一〇〇〇円

深田 菊子 略号八ろく  
責められて狂えば狂え、その上で悦楽の極みに恥も外聞もなくなり捨てて惑溺してゆく女の心情。

操り人形浣腸責め

カラー三枚組 一〇〇〇円  
玉木 章子 略号八ろく  
手と足と併せ縛られ臀部をつき出した全裸の女体にイルリの管が黒々と襲ってゆく真迫の浣腸。

浣腸の恐怖に悶ゆ

カラー三枚組 一〇〇〇円  
玉木 章子 略号八ろく  
一糸まとわぬ真白い裸身を晒してイルリからの尿管をアヌスに挿入される縛りなしの浣腸ポーズ。

開股縛り排泄責め

カラー三枚組 一〇〇〇円  
玉木 章子 略号八ろく  
浣腸後両足を八の字に開かせられ排泄を強要される羞かしさ。

淫虐クリップ責め

カラー三枚組 一〇〇〇円  
玉木 章子 略号八ろく  
股を思いきりひろげさせられクリップ責めの甘い快樂ムード。

◎お申込みは、前金にて略号をお書きの上、大阪市住吉区大領町四丁目六八、曉出版株式会社宛にてお申込み下さい。送料当方負担にて急送致します。



妊婦資料を蒐集しておられる方にとつて、それこそ垂涎の出産予定日を旬日に控えた初産婦の生々しいフオートをカラーにて提供するのことにしました。どうか貴重なコレクシヨンの一端にお加え下さるよう自信を以ておすすめします。

南加津子 出産を間際に控えた、はちきれ  
そうな臨月腹を抱えた妊婦の全裸  
を正面から大胆に捉えた写真。

カラ一三枚一組  
南加津子 略号△○○○円  
もうこれ以上大きくならないと  
いうところまで膨らんだ妊婦の妊  
娠線も鮮かな全裸の肢体を開陳。

特に出産予定日十日前から待って、  
主に撮影を果した見事な太鼓腹の  
持主のいろいろな姿態を披露す。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円  
南加津子 略号△やと▽  
今まさに破裂せんばかりに膨ら  
んだ巨腹を、このようにカラ―カ  
メラの前に晒す異常な美しさ。

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
 南加津子 出產直前の妊婦に危険を冒して  
 膨大乳房蛙腹緊縛 格の高小手縛りを施し、その  
 カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
 南加津子 鼓腹をいやが上にも誇張さす  
 メロン腹ばかりか乳汁の迸る豊 太鼓腹を更には被虐美で熱く彩る  
 常美を更に被虐美で熱く彩る  
 太鼓腹をいたぶる  
 カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
 南加津子 強烈な縛りに出產直前の妊婦は  
 強腹をゆすつて悶えるのに対し 更に嗜虐の念がいや増すのだ  
 胎動の巨腹で呻く  
 カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
 南加津子 巨腹の中で胎児が盛んに動いて  
 る妊婦を厳しく縛れば泣くよう 呻き声を洩しながら転がる  
 むごき臨月の責め  
 カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
 南加津子 全裸にされるだけでも初産婦の  
 身としては恥かしいのに身動きで きぬように縛られて検身される  
 強烈責に喘ぐ妊婦  
 カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
 南加津子

いのマゾ売りもの

カラー三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号△ふろ▽  
極度のマゾ性が彼女をして吊り  
下げられながらも尚も見世物にな  
りたいと動物的に願うのだ。

羞恥の臨月腹開陳

カラー三枚一組 一〇〇〇円  
南加津子 略号△つけ▽  
臨月妊婦の美しさと羞かしさと  
を余すところなくヌードになって  
さらけ出した稀有なチャンス。

カラー三枚一組 一〇〇〇円  
南加津子 略号へつむV  
まんまるく膨らんだ美しい蛙腹  
を中心にして初めての妊娠に恥か  
しがる一糸まとわぬ裸身を写す。

カラー三枚一組 一〇〇〇円  
南加津子 略号△つろ▽  
今まさに乳汁を洩らしそうな豊かな乳房と便々たる臨月の太鼓腹との見事なコントラストを描く。

カラー三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号△ふほV  
男の手で無茶苦茶に凌辱してほ  
しいと願うマゾ女に對しては、こ  
のように晒すのが一番効果的だ。  
◎お申込みは前金にて大阪市住吉  
区大領町四丁目六八号出版Kへ  
略号記入の上御注文下さい。送料  
当方負担にて急送申上げます。

カラー三枚一組 一〇〇〇円  
南加津子 略号△つは▽  
十カ月の便々たる妊娠腹の異色  
美を適確に奇麗なカラーにて把握  
した妊婦マニア垂涎のフォト。

カラー三枚一組 一〇〇〇円  
南加津子 略号△つへ▽  
はち切れそうなた鼓腹の妊婦が  
高手小手に縛られた上で思い切っ  
た強制開股させられている場面。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円  
南加津子 略号△つと▽  
脚を高々と頭上に挙げさせられ  
ての羞恥責に臨月の妊婦は大きな  
乳房をゆすって悶えるのだった。



## 女体緊縛美オンパレード

美しき縛られた女体の種々相

## Y字型宙吊りハリツケ

大手札四枚一組 略号△ちね▽

## 強烈菱縄縛り柔肌いじめ

大手札四枚一組 略号△ちや▽

## 豊満魅力的な臀部への責め

大手札四枚一組 略号△ちみ▽

## 猿ぐつわの緊縛裸身を晒す

大手札四枚一組 略号△おふ▽

## 後手縛りで引回される瘦身

大手札四枚一組 略号△おく▽

## 椅子利用の強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号△おき▽

## 股間首縄女体縦縛り

大手札三枚一組 略号△やひ▽

## 後手吊りでもたえる女

大手札四枚一組 略号△むれ▽

## 両手吊りにもかき苦しむ

大手札二枚一組 略号△むさ▽

## 菱縄バスト縛りの裸責め

大手札四枚一組 略号△むて▽

## 美貌の踊子正面全裸縛り

長野 良子 略号△へな▽

## 猿ぐつわでムチに狂う

大手札三枚一組 略号△へも▽

## 後手縛り匂うが如き全裸体

関谷富佐子 略号△へめ▽

## 竹棒による開股責め強要

大手札三枚一組 略号△へた▽

## 縄で飼育された美少女

大手札三枚一組 略号△れと▽

## 後手首を縛れた可○な乙女

小池 美喜 略号△れへ▽

## 鞭の激痛を耐える表情

関谷富佐子 略号△わつ▽

## 鞭打ちに昇天した女体

関谷富佐子 略号△わめ▽

## 立縛り女体正面裸○し

金原奈加子 略号△ゆえ▽

## 豊満な臀部強烈いためつけ

大手札四枚一組 略号△ゆほ▽

## 縛られたホステスの全裸

佐々木真弓 略号△こち▽

## 麗姿を緊縛して光で彩る

佐々木真弓 略号△こほ▽

## あくら縛りの全裸を羞らう

左近麻里子 略号△こえ▽

## 腰元の折檻と拷問

大手札四枚一組 略号△こく▽

## ゴム責めの女体アップ

東浦ひかる 略号△こあ▽

## 生ゴムにて全裸を責める

東浦ひかる 略号△こみ▽

## 緊縛写真の中で悶える

大塚 啓子 略号△けよ▽

## 初めての縄目を羞らう女

松本アサ子 略号△まつ▽

## 逆エビ縛りの種々相

愛知 葉子 略号△つか▽

## 寝館の中の緊縛裸女

山原 清子 略号△ねか▽

## 牝犬と奴隷女の生態

大島 照代 略号△しむ▽

## 強烈なエビ責めに呻吟

大塚 啓子 略号△えり▽

## 逆エビ縛りを痛める魔手

大島 照代 略号△ねそ▽

## 階段に晒す緊縛の全裸

左近麻里子 略号△つく▽

## 縄に悶える白肌を俯瞰

左近麻里子 略号△つめ▽

## 菱縄縛りに喘ぎ伏す美女

中河 恵子 略号△とる▽

## 足挙げ開股縛り羞恥責め

中河 恵子 略号△とろ▽

## 強烈エビ縛りに苦悶表情

中河 恵子 略号△とに▽

## 膝頭竹棒縛り開股凌辱責め

中河 恵子 略号△とほ▽

## 菱縄バスト縛り猿ぐつわ

中河 恵子 略号△とり▽

## 片足挙げ縛りで晒す裸身

中河 恵子 略号△とは▽

## 股間縛りの縄に恍惚表情

中河 恵子 略号△とち▽

## 竹棒足首縛り開股羞恥

中河 恵子 略号△とへ▽

## 足吊りの見事な責め三態

山原 清子 略号△いと▽

## 全裸で高手小手縛り立像

山原 清子 略号△いに▽

## 縄に悶える刺青の女体

山原 清子 略号△いへ▽

## 全裸の羞恥柱立縛り

東浦ひかる 略号△らめ▽



## 〔秘蔵版SM資料一覧表〕

従前一時的に分譲中止しており  
ましたSM資料の中で特に好評だ  
った左記の写真は特に御希望の方  
に限り焼増し致します故、前金に  
て曉出版宛お申込み願います。

## レインコートの拘束

大手札四枚一組 六〇〇円  
大塚 啓子 略号△いろ▽

## 猪吊りの美女

大手札三枚一組 五〇〇円  
梨花悠紀子 略号△いの▽

## 色禪の開股縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
長野 良子 略号△いふ▽

## 椅子責めの果て

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号△いす▽

## マニヤの全裸緊縛フォト

大手札三枚一組 五〇〇円  
栗本 ミチ 略号△いな▽

## 日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号△いら▽

## 洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号△いこ▽

## 日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号△いさ▽

## 可憐島田髷全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号△いみ▽

## メンスバンド責め

大手札五枚一組 七〇〇円  
東浦ひかる 略号△はん▽

## ハリツケ

大手札三枚一組 五〇〇円  
新宮 夫人 略号△はみ▽

## 鼻責めのアップ

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号△はす▽

## メンスバンド足挙げ

大手札三枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号△はそ▽

## 鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一四〇〇円  
鈴木 晃子 略号△はた▽

## 鼻いじめ三態

大手札三枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号△はね▽

## 浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はゆ▽

## 投げだす緊縛裸身

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△はよ▽

## 待望の脚挙げ姿態

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△はて▽

## ニツ折女体エビ責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はお▽

## 開股縛りにて喜悅する女

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△はわ▽

## 全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はふ▽

## 診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
田中美佐子 略号△にし▽

## 臨月腹開陳(座位)

大手札四枚一組 六〇〇円  
田中美佐子 略号△にり▽

## 臨月腹開陳(立位)

大手札三枚一組 五〇〇円  
田中美佐子 略号△にす▽

## 突き出した臨月腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
田中美佐子 略号△にい▽

## 臨月の裸身像(座位)

大手札三枚一組 五〇〇円  
田中美佐子 略号△にぬ▽

## 柱縛りの妊産婦

大手札二枚一組 四〇〇円  
田中美佐子 略号△にや▽

## 臨月の妊婦緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円  
田中美佐子 略号△にち▽

## 膨隆七カ月腹鑑賞

大手札五枚一組 七〇〇円  
増田みゆき 略号△にひ▽

## 縛られた妊婦の裸身

大手札二枚一組 四〇〇円  
田中美佐子 略号△にる▽

## 九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
安原さゆり 略号△にん▽

## 八カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
安原さゆり 略号△にへ▽

## 乳房強調妊婦菱縄縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にめ▽

## 双胎八カ月腹大写真

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほり▽

## 双胎妊娠線の出た蛙腹

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほぬ▽

## 後手縛りの双胎妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほか▽

## 八カ月の双胎の猿轡と緊縛

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほよ▽

## 股間縛りに喘ぐ妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほつ▽

## 初産双胎妊婦開股縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほえ▽

## 双胎妊婦腹の凄愴切腹

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほら▽

## 八カ月の双胎革具責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほね▽

## 九カ月の双胎首枷責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△への▽

## 逆さ吊りの正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円  
増田みゆき 略号△つる▽

## 手と足の宙吊り

大手札三枚一組 五〇〇円  
梨花悠紀子 略号△つた▽

## 弓吊り責め

大手札二枚一組 四〇〇円  
梨花悠紀子 略号△つき▽



## Mフォト決定版と画集

思わずMファンをワクワクさせる迫力溢れたマゾの素晴らしい写真と絵とを特集しました。お申込み次第即刻焼付けてお送りします。

二人の女の餌食になる男

大手札36枚一組 六〇〇〇円  
山原清子外 略号△ほや▽

M男が屈伏するまで

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふそ▽

女の臀の下に呻吟する男

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふれ▽

二人の女になぶられる男

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふた▽

二女の股責地獄に泣く男

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふぬ▽

逆エビとムチ打ちで責める女

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふち▽

鞭の強打で男を責める女

大手札10枚一組 二五〇〇円  
山原清子外 略号△ふよ▽

口中の汚水処理器(唾吐き)

大手札9枚一組 二三〇〇円  
山原清子外 略号△ふり▽

M男の顔を玩弄する美女

大手札8枚一組 二〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふわ▽

二人の女の馬になるM男

大手札7枚一組 一八〇〇円  
山原清子外 略号△ふる▽

女の臀臭をかかされる男

大手札6枚一組 一六〇〇円  
山原清子外 略号△ふお▽

男の口中に痰唾を吐く女

大手札6枚一組 一六〇〇円  
山原清子外 略号△ふね▽

縛り人形を踏むサジスチン

大手札5枚一組 一四〇〇円  
山原清子外 略号△ふつ▽

男の顔を踏みつけるS女

大手札3枚一組 一〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふあ▽

股責め地獄に狂う女

大手札4枚一組 八〇〇〇円  
大塚啓子 略号△まそ▽

牛男をのりこなす女

大手札10枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△はま▽

夫を責める新妻

大手札10枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△はや▽

肩車の下にうごめく男

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らと▽

奴隷の誓いを契る男の生態

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らき▽

ハイヒールの足下に呻く男

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らろ▽

女に縛られるM青年

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らに▽

M青年をいたぶる女王様

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らへ▽

女が女に責められるまで

大手札10枚一組 二〇〇〇円  
山原・鈴木 略号△さる▽

女が女を縛りあげる

大手札10枚一組 二〇〇〇円  
山原・鈴木 略号△さあ▽

女が屈伏させられるまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円  
鈴木・山原 略号△さや▽

啓子をいじめ抜く清子

大手札8枚一組 一八〇〇円  
山原・大塚 略号△うの▽

啓子を厳しく縛る清子

大手札8枚一組 一八〇〇円  
山原・大塚 略号△うな▽

清子を責める華麗なブレイ

大手札8枚一組 一八〇〇円  
大塚・山原 略号△うね▽

二女の馬にされるM青年

大手札8枚一組 一八〇〇円  
清子・啓子 略号△うま▽

二女のなぶりものになる男

大手札3枚一組 八〇〇〇円  
清子・啓子 略号△うる▽

女を縛り上げて責める女

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△えの▽

強烈くすぐり責め

大手札4枚一組 六〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△えぬ▽

くすぐり責め地獄の女

大手札3枚一組 五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△えな▽

手吊り股間縛り責め

大手札5枚一組 七〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△えお▽

豊臀の下に喘ぐ(マゾ画)

大判判五枚一組 一五〇〇円  
春川ナミオ 略号△こね▽

女体下敷力作M画決定版

大判判七枚一組 二〇〇〇円  
春川ナミオ 略号△ぬけ▽

女学生・流腸悦虐姿態

大判判二枚一組 六〇〇〇円  
四馬孝画 略号△せか2▽

女体・流腸美の媚態

大判判三枚一組 一〇〇〇円  
四馬孝画 略号△のゆ▽

全裸妊婦の媚態画集

大判判三枚一組 九〇〇〇円  
四馬孝画 略号△にん3▽

強制流腸に泣く責め図絵

大判判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△しき▽

緊縛女体の流腸責め図絵

大判判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△しえ▽

凄絶妊婦の切腹図絵

大判判四枚一組 一二〇〇円  
四馬孝画 略号△せつ4▽

女体・流腸と排泄画集

大判判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△えい▽

女体吊り責め特集画録

大判判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△えほ▽

女性の鼻責めと美貌汚辱

大判判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△えは▽

女体・流腸嗜虐場面図絵

大判判八枚一組 二〇〇〇円  
四馬孝画 略号△かき8▽



本誌のカメラルポに登場した数  
 々の魅惑のマジック女性たちが、その  
 奔放なSMに喘ぐ姿態をマニアの  
 方々の手中で開陳して、その目を  
 楽しませて参りましたが、今回更  
 に、その強い要望に応えて、ここ  
 に華麗で若い美しいアブ肢体を捧げ  
 て御機嫌を伺うことにしました。

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号△たふ▽  
一〇〇〇Cのイルリの微温湯  
が白いアヌスへ注ぎ込まれる。

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号へたほV  
二〇〇CC硝子製沅腸器とエネ  
マシリンジ、イルリの三種の沅腸  
器でそれぞれ変った姿態の沅腸

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号入たてV  
お尻を高々と天に向けて差し込  
んだ漏斗に次々と温湯を注いで、  
お腹の中は今やポンポコポン。

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号△たち▽

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号△たわ▽  
浣腸の三種の神器、エネマとイ  
ルリとポンプ。中でも二〇〇℃  
硝子製浣腸器が大活躍をする。

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号 八たゆ

に耐えながら、裸身に流れる電流の  
ようなショックを噛みしめる。

大手札三枚一組 五〇〇円  
 玉木 章子 略号△れお▽  
 責められて責められて、尚その  
 良さに燃えあがる裸身のなかに、  
 ベテラン女性の片鱗が見える。

大手札三枚一組 五〇〇円  
玉木章子 略号△れか▽

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条紀代 略号ハたひV  
柔軟な肢体に加えられたエビ責  
めに若さに漲る肌は激しい反応を  
示して微妙に蠢動を続けてゆく。

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条紀代 略号 八たえ  
猪吊りの準備に手足を揃えて縛  
られると遅ましい臀部がきわだ  
て強調され淫らにさえ見える。

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条紀代 略号へたよV  
後手に縛り上げると両手首のよ  
く上る娘の拳を逆手にして高々と  
吊った絶妙の高手小手後手縛り。

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条紀代 略号ハたつV  
嫌嫌というのも構わず片足だけ  
が頭上よりも高くあげてゆけば、  
あられもない姿が展開される。

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条紀代 略号八たとV  
若さと肢体の柔らかさを利用し  
て情容赦なく逆エビに吊つてみれ  
ば流石の紀代も悲鳴を挙げた。

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条紀代 略号へたみ▽

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条紀代 略号八たまV  
縛られながらも、うねうねと全  
裸の姿態を妖しくも淫らにくねら  
せて縄付きのまま悶えてゆく。

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号 八たせV  
股間縛りで引き回すと、次第に  
縄の快感にむせびながら、にじみ  
出るような媚態を展開するのだ。

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号 八たもV  
縛りマニアこそ、こうした後手  
の高々と首筋近くまで上った縛り  
方の良さを心から知ってくれる。

大手札三枚一組 五〇〇円  
 西条紀代 略号ハためV  
 菱縄で裸身に喰い込む縄目の痛  
 さに転々としてころげながら、や  
 がてマゾの心境にひたってゆく。

◎送料はすべて当方にて負担いた  
します故、御希望品の略号をお書  
きの上、前金にて、市大阪住吉区  
大領町四丁目六八 曉出版KKへお  
申込み願います。



天然色(カラー)SM資料

極彩色印刷紙焼付プリント

柱縛り女体強烈ムチ打ち

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みあ△  
臀部に炸烈する激しいムチ

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みこ△  
ムチにのけぞる豊満女体

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みけ△  
悦虐に悶える妖艶な女体

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みて△  
鞭打ちに泣く美貌の女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みも△  
転り回って悦虐に泣く女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みひ△  
鞭に喘ぐ美女の全裸全身

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みの△  
双胎の臨月蛙腹の写真

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△れや△  
増田みゆき 略号△れや△  
双胎の臨月腹強烈縛り

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△れゆ△  
増田みゆき 略号△れゆ△  
双胎の臨月太鼓腹の媚態

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△れえ△  
増田みゆき 略号△れえ△  
股間縛りの開股羞恥責め

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れよ△  
中河 恵子 略号△れよ△

股間縛りに羞らうM女の生態

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れに△  
黒縄縦縛りの羞恥媚態

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れぬ△  
立縛りにあう全裸の女体

カラー三枚一組一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れね△  
開股された股間縛り

カラー三枚一組一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れの△  
豆絞りの猿轡で強烈責め

カラー三枚一組一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れむ△  
独りで遊ぶ浣腸プレイ

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△るむ△  
美少女に淫らな開股縛り

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るの△  
責めぬかれた美少女の諦観

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るお△  
高手小手後手縛りの裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るや△  
真紅の腰巻姿での緊縛姿態

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るま△  
羞らしいの裸女正面縛り

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るけ△  
若肌に喰い込む無惨な縄

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るふ△  
一宮百合子 略号△るふ△

美しき緊縛の裸女立姿

カラー三枚一組一〇〇〇円  
左近麻里子 略号△なひ△  
転落寸前の緊縛された裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
左近麻里子 略号△なも△  
羞恥の椅子責にあう裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
左近麻里子 略号△なす△  
緊縛の裸身を長々と横たえる

カラー三枚一組一〇〇〇円  
左近麻里子 略号△なえ△  
女相撲迫力投業の連続動作

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△なる△  
高手小手の全裸の美しき肢体

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△なゆ△  
豆絞りの猿轡での全裸緊縛

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△なめ△  
赤い絨氈に悶える緊縛裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△なさ△  
豊満な臀部を晒して悶える

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△なし△  
真赤な腰巻姿での緊縛

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△うこ△  
真赤な腰巻着用フェチ写真

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△うお△  
悶える二女の緊縛色模様

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△うて△  
大塚・東浦 略号△うて△

柱縛りにあえぐ裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やか△  
高手小手縛りに悶える全裸

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やき△  
緊縛に喘ぐ刺青の美女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やく△  
脱された着物の中で悶える女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やも△  
縄にのたうつ全裸の妖女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やし△  
腰巻一つで縛られる刺青女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やみ△  
ポリウムの女体を縛る

カラー三枚一組一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△てん△  
猿ぐつわに呻く強烈縛り

カラー三枚一組一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△てめ△  
後手高手小手縛りの裸像

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△てま△  
豊麗な裸身に縄目がむこい

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△てこ△  
全裸後手柱縛りの構図

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△てか△  
刑罰足枷開股縛りの責め

カラー三枚一組一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号△ゆな△  
愛知 葉子 略号△ゆな△



|                                                  |                                          |                                         |                                                 |
|--------------------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 若妻初妊娠の哀歎<br>大手札三枚一組<br>略号△さい<br>五〇〇円             | 岩田帯をする双胎妊婦<br>大手札四枚一組<br>略号△はた<br>六〇〇円   | 白肌に喰い込む縄目<br>大手札三枚一組<br>略号△とわ<br>五〇〇円   | 完全逆さ吊り責め<br>大手札三枚一組<br>略号△さつり<br>五〇〇円           |
| 妊娠腹の緊縛又ード側面<br>大手札三枚一組<br>略号△さみ<br>五〇〇円          | 双胎懐妊の生態を探る<br>大手札四枚一組<br>略号△ほれ<br>六〇〇円   | 一糸まとわぬ白い柔肌<br>大手札三枚一組<br>略号△とら<br>五〇〇円  | 少女全裸アグラ縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△てへ<br>五〇〇円           |
| 若妻の緊縛妊孕美<br>大手札三枚一組<br>略号△さま<br>五〇〇円             | 全裸の双胎妊婦を見せる<br>大手札四枚一組<br>略号△ほそ<br>六〇〇円  | 開陳した華麗な肢体<br>大手札三枚一組<br>略号△とゆ<br>五〇〇円   | 少女全裸屈伸縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△てほ<br>五〇〇円            |
| 膨満腹妊婦の乳房責め<br>大手札三枚一組<br>略号△さむ<br>五〇〇円           | 便々たる双胎初産妊娠<br>大手札四枚一組<br>略号△ほま<br>六〇〇円   | 縄目に喘ぐ麗人諦観の相<br>大手札三枚一組<br>略号△とえ<br>五〇〇円 | 鬼面と接吻する少女<br>大手札二枚一組<br>略号△てち<br>四〇〇円           |
| 臨月腹若妻全裸晒人形<br>大手札三枚一組<br>略号△さち<br>五〇〇円           | 臨月の妊婦又ード<br>大手札三枚一組<br>略号△にわ<br>五〇〇円     | 縛られた美女二人<br>大手札三枚一組<br>略号△とそ<br>五〇〇円    | 緊縛女体撮影風景<br>大手札四枚一組<br>略号△むら<br>六〇〇円            |
| 躍動する妊婦の裸像<br>大手札三枚一組<br>略号△さほ<br>五〇〇円            | 臨月妊婦の裸身立腹<br>大手札二枚一組<br>略号△にた<br>四〇〇円    | 全裸の美女二人の連縛<br>大手札三枚一組<br>略号△とれ<br>五〇〇円  | 柱縛り宙吊り晒し<br>大手札二枚一組<br>略号△つめ<br>四〇〇円            |
| 妊娠という異常美<br>大手札三枚一組<br>略号△さへ<br>五〇〇円             | 九カ月の妊娠腹<br>大手札三枚一組<br>略号△にの<br>五〇〇円      | SとMの美女の甘い一瞬<br>大手札三枚一組<br>略号△とさ<br>五〇〇円 | 柱縛り全裸臀部晒し<br>大手札五枚一組<br>略号△つま<br>七〇〇円           |
| 見てほしい若妻の臨月腹<br>大手札三枚一組<br>略号△さよ<br>五〇〇円          | 首枷手枷で責められる妊婦<br>大手札三枚一組<br>略号△にゆ<br>五〇〇円 | 縄に通うSM愛情の焰<br>大手札三枚一組<br>略号△とけ<br>五〇〇円  | 柱正面縛り折檻<br>大手札三枚一組<br>略号△つも<br>五〇〇円             |
| 金原奈加子<br>若妻妊婦の全裸全身肢体<br>大手札三枚一組<br>略号△ささ<br>五〇〇円 | 双胎妊婦腹強調縛り<br>大手札四枚一組<br>略号△にき<br>六〇〇円    | 全裸の豊満な女体にムチ<br>大手札四枚一組<br>略号△もた<br>六〇〇円 | 豊満な双乳の強調縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△そう<br>五〇〇円          |
| 八カ月の妊孕腹鑑賞<br>大手札四枚一組<br>略号△ほち<br>六〇〇円            | 緊縛と猿轡双胎妊婦虐待<br>大手札五枚一組<br>略号△にけ<br>七〇〇円  | 両手吊りで悶える裸身<br>大手札三枚一組<br>略号△もえ<br>五〇〇円  | 長野 良子<br>八の字開股縛り羞恥責<br>大手札四枚一組<br>略号△そか<br>六〇〇円 |
| 双胎妊婦の乳房と腹部<br>大手札四枚一組<br>略号△ほる<br>六〇〇円           | 後手縛りの双胎妊産婦<br>大手札四枚一組<br>略号△にさ<br>六〇〇円   | 女奴隷を飼育するシーン<br>大手札五枚一組<br>略号△きて<br>八〇〇円 | 菱縄縛りの全裸を晒す<br>大手札四枚一組<br>略号△そえ<br>六〇〇円          |
| 増田みゆき<br>八カ月の双胎腹菱縄縛り<br>大手札四枚一組<br>略号△ほわ<br>六〇〇円 | 動物的な双胎妊婦の生態<br>大手札四枚一組<br>略号△にな<br>六〇〇円  | 凌辱されるマソ女の恥態<br>大手札五枚一組<br>略号△きと<br>八〇〇円 | 全裸二つ折り縛りの苦悶<br>大手札四枚一組<br>略号△そむ<br>六〇〇円         |
| 増田みゆき<br>増田みゆき<br>増田みゆき                          | 増田みゆき<br>増田みゆき<br>増田みゆき                  | 大塚・東浦<br>大塚・東浦<br>大塚・東浦                 | 中河 恵子<br>中河 恵子<br>中河 恵子                         |



パイプ責めに呻めく女

大手札三枚一組 五〇〇円  
松本 たえ 略号八きわ

両足挙げ柱宙縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
松本 たえ 略号八きろ

強烈黒縄縛り悦虐地獄

大手札三枚一組 五〇〇円  
松本 たえ 略号八きる

羞恥責めに陶酔する女

大手札三枚一組 五〇〇円  
松本 たえ 略号八きは

猿轡と縄に涕泣する瞬間

大手札三枚一組 五〇〇円  
松本 たえ 略号八きへ

柱宙縛りと逆さ縛り責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
松本 たえ 略号八きた

足を吊られた悦虐に泣く

大手札三枚一組 五〇〇円  
松本 たえ 略号八きは

浣腸溶液を圧入される

大手札三枚一組 五〇〇円  
深田 菊子 略号八みは

全裸で受ける三種の浣腸

大手札三枚一組 五〇〇円  
深田 菊子 略号八みふ

イルリの嘴管挿入浣腸

大手札三枚一組 五〇〇円  
深田 菊子 略号八みほ

突き刺さる浣腸器の恐怖

大手札三枚一組 五〇〇円  
深田 菊子 略号八みち

自ら施す浣腸の悦楽

大手札三枚一組 五〇〇円  
深田 菊子 略号八みそ

体内に奔流する浣腸溶液

大手札三枚一組 五〇〇円  
深田 菊子 略号八みや

浣腸ブレイを楽しむ美女

大手札三枚一組 五〇〇円  
深田 菊子 略号八みぬ

オシメから生ゴムカバーへ

大手札三枚一組 二〇〇円  
深田 菊子 略号八みめ

おムツに排便する乙女

大手札三枚一組 二〇〇円  
深田 菊子 略号八みし

生ゴム製のオムツカバー着用

大手札三枚一組 一八〇円  
深田 菊子 略号八みせ

メロン腹白縄縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八えす

正面柱縛りの蛙腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八えき

開脚縛り妊娠腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八えけ

蛙腹を晒す開股責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八えこ

太鼓腹強調片足吊り

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八えさ

妊孕緊縛美の極致

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八えあ

美しき妊孕腹緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八えか

八カ月の妊婦裸身開陳

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八えせ

柱縛りの九カ月腹妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八さて

引き回された妊婦腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八さり

膨隆妊婦腹の股間縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八され

鏡に映る太鼓腹縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八さえ

蛙腹誇張の緊縛美

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八さう

足挙げ縛り蛙腹妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八さた

卓の脚に縛った蛙腹妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八さつ

九カ月妊娠腹の緊縛美

大手札三枚一組 五〇〇円  
福井 桃子 略号八さゆ

豆絞りの猿ぐつわ哀情

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号八ぬも

逆エビ地獄の美女

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号八ぬや

麻縄亀甲菱縄縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号八ぬむ

後手高手小手縛り三態

大手札三枚一組 五〇〇円  
鈴木千鶴子 略号八ぬみ

卓上の緊縛悦虐姿態

大手札三枚一組 五〇〇円  
鈴木千鶴子 略号八ぬる

全裸浴室での股間縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
鈴木千鶴子 略号八ぬひ

悶える踊子の欲情処理

大手札三枚一組 五〇〇円  
鈴木千鶴子 略号八ぬま

美しき全裸の縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
鈴木千鶴子 略号八ぬふ

柱縛りと脚挙げ縛り

カラ一三枚一組 一〇〇円  
前田真知子 略号八すき

麻縄高小手首縄縛り

カラ一三枚一組 一〇〇円  
前田真知子 略号八すめ

荒縄強烈エビ縛り

カラ一三枚一組 一〇〇円  
前田真知子 略号八すけ

荒縄悦虐羞恥責め

カラ一三枚一組 一〇〇円  
前田真知子 略号八すら

悶える強烈海老責め

カラ一三枚一組 一〇〇円  
前田真知子 略号八すへ

柔肌をくびる厳しき縄目

カラ一三枚一組 一〇〇円  
前田真知子 略号八すれ

緊縛の全裸女体をいびる

カラ一三枚一組 一〇〇円  
前田真知子 略号八すろ



## M資料分譲品一覽

## ○新人S女性出現○

- 遅しき股に挟まる  
大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり  
大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円
- 縛った男をムチで料理  
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる  
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 蠟涙の雨を全身に浴びる  
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男  
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女  
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神  
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽  
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香  
大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円
- M男性を尻に敷く  
略号(あこ) 一二〇〇円

- 大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円
- 人間犬の芸仕込み  
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる  
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子  
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女  
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め  
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景  
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女  
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く  
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔  
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男  
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女  
大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

- 人間椅子の御褒美  
大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円
- 飼犬に餌を与える  
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女  
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首  
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻  
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教プレイ  
大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制  
大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円
- 股責めにあう男の顔  
大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円
- 女に縛られて弄ばれる  
大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円
- 踏みにじられる顔面  
大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円
- 肩車に奉仕する青年  
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

- 男を縛って玩具にする  
大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円
- 首を太股で絞めあげる  
大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円
- 灰皿にされた男  
大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ  
大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態  
大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円
- 美女の手で縛られる過程  
大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
- 女御主人に使役される男  
大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く  
大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味  
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者  
大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
- 素足を舐める構図  
大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円





岸本勝美・え

私は、奇ク十数年来の愛読者です。読むばかりでなく、過去に三組の同好の夫婦の方と知り合いSMプレイを楽しみました。カメラや小道具（大人のおもちゃ類）なども使ってみました。もう一つ奇ク誌上に載っているような悦びは味わえませんでした。塚本鉄三様のカメラルポは何時も第一番に愛読しておりますが、最近号の木村洋子さん（10月号）南加津子さん（11月号）苗木陽子さん（11月号）なんかのルポ、素晴らしいですね。殊に12月号の苗木陽子さんの文と写真、思わずぞくぞくしました。初対面の女性に、これほどまでのSMプレイを展開される塚本氏に、一度ぜひ、私共のプレイの

指導をして頂きたいと願っております。と申しまして、お忙しい氏のことでですから、愚妻をモデルに提供ということ、如何でしょうか。縛りから浣腸まで一通りの訓練はいたしますから、仕込み様では、なんとか

なると思います。愚妻は三十三才身長は一五五で体重は五四キロ、中肉中背です。他に、いつも塚本様の噂をしている友人夫妻がありその方の細君は少し若くて確か二十八才です。二人と一緒に責めて下さってもかまいません。私達を立会いに一手、御教授願いたいものです。愚妻はスワップの経験、再三度あり、SEX責めもOKです。誌上掲載も写真によっては構いません。そんな事を考えていると二人共、燃えるのです。御親交頂ければ幸いです。

（東京都江戸川区・境川冬二）

○ 一月号の扉で林繁三様の記事とフォトを拝見致しまして、なつかしさのあまりペンをとりました。

私がその「責めてみたい麗人」自身だからです。たとえ写真であっても、裸身を多くの男性にさらしているかと思うと、私の心の底のM性が燃えてきます。そして、もっともっと、はずかしめられたいという欲望がわき出てきます。写真でなく実際に大勢の男性の前に裸身をさらし、私の肉体のすみずみまで、あますところなく、さらけ出す。そして、男性の注文に応じて、あらゆる姿態をとる。それはもう一人の人間性を捨てた一匹の牝犬でしかない。そして、多くの男性を可能な限りの方法で満足させる私は、息をはずませ、肉体のあらゆるところを使って奉仕する。それは奉仕する私自身のM性を満足させるためでもあります。これは私の初夢でもあります。正夢になったら願っていますM女です。

（川路むら子）

○ 12月号のトップを飾った塚本氏のルポは近來にない魅力に満ちたものだった。苗木陽子さんは11月号の「通信」によって、どんな方かと注目していたが、ルポ登場によって、迫力満点の美しい責められの肢体を眺めると、まるで、自分がその場に居合わせているよう

な気持ちに胸をドキドキさせたものだ。早速、分譲フォトを申し込んで身近に彼女の縛られた全裸の姿を見てみたいものだ。12月号はこの苗木陽子さんの一篇で買い求めた価値があったと思う。片桐久子さん、貴女もSMプレイの経験を持っておられる由、是非、誌上にその時の体験を書いてみられたら如何？ 私達読者は大いに、それを期待している。お友達の出来た女性の愛読者が、そのまま顔を見せられないのは淋しい。お友達が出来たら出来たで、そのいきさつを投稿してほしいものだ。花井美恵子さんは、まだ24才という若さで結婚歴を持っていられる由。過去の不満が必ずしもSM的偏好が原因であったとは思わないが、そのところを、もう少し詳しく投稿されたら如何？ 勇気を出して編集部申し出てカメラの前に立つのも一つの解決方法だと思う。12月号では特に女性からの投稿が多かったが村田恭子さんのように継続的に投稿される方には好感が持てる。マゾ女性の生長過程を私達は見たいのだ。

（東京都千代田区・南川潤一）

○ 十二月号の読者通信に僕と同じ



性癖の人がいたのでペンを取りました。僕も四十五才ぐらいの豊満なお尻の主婦の方に強く魅せられます。いつも頭の中で、そんな女性のお尻を舌で舐めさせられて自分の自分を空想して興奮します。又イラストを自分で実際に描いてみてオナニーします。例えば座間明子さんを十五才ぐらい年を取った様な少し彼女より醜い顔の（彼女は美人すぎる）和服を着た女性にして、着物の裾をたくし上げて横向きに寝そべってもらいます。そして僕の顔が大きなお尻の方へ向って両股で蛇に呑み込まれた哀れな蛙の様に挟み込まれています。僕の口は、ぴたっと彼女の汚いアナルに密着しているのです。マンガのように言葉も書き入れます。「さあ、今日から、お前を完全に私の物に、してやるからね」僕は

「御送金についてお願い」  
現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願ひ致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もあり、普通小為替の利用下さい。便宜上「切手代用」にても結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

心の中で、この女め！と思うと同時に昇天してしまいます。ところが現実はどうでしょう。知らなければよかった。空想は無限に期待をふくらませ官能を高ぶらせます。幻想の世界の方が現実より遙かに五感に感じ満足出来るのも人生の不思議さです。初めて御奉仕してみても、女性のアナルが、あれほど綺麗なものは思ってもみなかった。もっとも夢中だったのが気が付かなかったのかも。そして女性がこれほどまでに慎しみ深く奥ゆかしいものとは、マゾにとって、これほど悲しい事は有りませんでした。女性というのは、どこまで男に従順であるのだろうか。かと思ひ、僕も出来る事ならSになれたらなあと思ふのだが。

（大阪府・岩本弘）

○ 今年の八月、旅行先で奇クを見つけ、こんな素晴らしい雑誌はないと病つきになってしまいました。僕の気持ちにぴったりで、何故、もっと早く気がつかなかったのだらうかと、悔まれてなりません。古本屋で目につく限り買い求めましたが、中々思ったように集まりません。上京した折、神田や新宿で大分、揃えたのですが、どうして

も入手できなかった分を直接申し込みますから送って下さい。それから奇クは三百号を突破するほど二十数年も前から発行しているのですが、ずっと以前に発行した雑誌は手に入らないでしょうか。それから十二月号で塚本鉄三氏が「SM研究会」の提唱をしておられました。新参者の僕ですが、是非一員に加えて頂きたいものです。全国を股にかけての出張の多い仕事をしています。それだけ地方都市の穴場も熟知していて連絡係としては、もってこいと思うのですが。とにかく遅ればせながら、これから一生懸命勉強して愛読者の皆様に追いつきたいと思っています。（京都府・甘樫清次）

○

「奇ク」十二月号巻頭のルポ、  
「畜化願望の女」は本当に楽しく読ませて頂きました。久しぶりに豊満な肉体をもつM女性の登場はさすがに迫力が有って、第一頁から「ホッ！」と溜息が出るほどの衝撃を受けました。暴虐無惨に責めさいなまれる苗木陽子さんの赤裸々な写真四十二枚からは、美と淫と欲と涙泣が入りまじった異様な生々しさが溢れてくるようにS願望の私をしばし恍惚とさせ、

彼女の緊縛美に幾度も見とれては胸の高鳴る思いをかさねました。塚本先生の「ルポ」は辻村先生の「ルポ」とはまた異なるリアルさがあります。ドラマチックな展開も責めのやま場も見事で、我々ファンを充分にたんのうさせて下さいます。巻を重ねるごとに益々期待を寄せている次第です。さて、小生は三十六才の会社員です。「奇ク」を愛読しはじめてから三年余り。S願望を月々につのらせ乍らも勤務の都合上、なかなか同好の女性とめぐり合う機会もなく残念に思っています。そこで今回思い切って読者通信に投稿する事にしました。「奇ク」愛読の女性の方で、緊縛・羞恥責・浣腸など、男性に責められるプレイをのぞんでいらっしやる方、どうかお便りを頂きたいと思ひます。お互い同好者どうしの夢や希望を話し合う事が出来たら本当に嬉しいことです。幸い私は独身でありますので、どなたからお便りを頂いても別段さしさわりはありません。「畜化願望の女性」にめぐり逢った時私も「責め願望の男」と変身して聖なる欲びの炎を、ともどもに燃やしてみたいのです。

（大阪市・山たけひこ）



○ 前田真知子様。突然、こんな手紙を書いてごめんなさい。私は23才になる男性です。奇ク誌の写真を見てから、すっかりファンになり、写真を見てみると、とてもたまらなく好きになり、ここに一筆しました。貴女も会社に勤めていたとのこと。毎日毎日、忙しい体と思ひますが、もしよろしかったらぜひよくに貴女の体を縛らせてもらえないでしょうか。その美しい肌に鋭く喰い込む縄目跡をつけたいと思います。貴女と友達になり二人だけのSMプレイの記念にしたいのです。塚本鉄三氏へ「SM研究会」の提唱は小生も大賛成です。なぜならば、日本各地のSMプレイを愛好している者にとつてこんな素晴らしいことがないからです。この提唱の実現によって、全国のSMに興味を持っている人達の大同団結が出来ると思えるからです。塚本氏の提唱を心から喜んでゐる次第です。

(三重県・上野愛宕)

○ 奇ク十一月号で書かれた八田輝雄氏の「夫婦交換プレイの妙味」に興味深く読ませていただきまし。私たちは主人が三十四才、私

が三十才の夫婦で、二児がおります。奇クを通じて常々いろんなSM的想像を二人でたのしんでおりますが、まだ何一つ実行した経験はありません。しかし興味は大それた抱いております。雑誌なんかについていますスワッププレイには特に関心があり、そうしたことが可能な方と、お知りあいになれたらと、いつも思っております。

(埼玉県・相川悦子)

○ 小杉千恵様、ずっと以前からA責めに関心を持っておられる貴女には興味をもっておりましたが、8月号に掲載された貴女の素晴らしいヌードを見て、より一層あこがれの人となつてしまいました。肉付きのよい貴女なら、きつと縛り甲斐があると思います。そして何よりも、その肉付きのよい大きな双臀の真中に、可愛いらしく花開く貴女のアヌスを想い浮かべるとき、そしてそれが私の意のままになることを想像するとき、たまらなく悩ましくなるのです。幸いにして小生はポラロイドカメラを持っておりまして、貴女の破廉恥な姿の数々を撮り、すぐに、そのあられもない写真を見ながら、更に次の恥かしいポーズを二人して

楽しみながら研究し、よりあらねもない身も世もあらぬ羞恥にもだえるM女、否叱と化した貴女を責めまくり撮りまくりたいと思ひます。貴女の可愛いらしいアヌスが私の不肖の息子を精一杯口をひろげて、くわえこんだ写真など想像するだに興奮してしまいます。尚京都近郊でプレイ希望のM女の人また写真を希望される方、御一報下されば愛機持参で参上します。

(京都市・丘久志)

○ 私は教育関係の仕事に従事している29才の者です。妻はおりますが、彼女はSMには全く興味を持っておりません。奇クは数年前から愛読し、様々な傾向の女性の存在を知り、それによって僅かに心を慰めております。私自身も知り合つた二人の女性の方と軽いSMプレイをやつたことがあります。実際には空想していたようにうまくゆきませんし、一般的に、そうしたチャンスも少なく、どうしても奇クを読んで慰めてしまうのです。そんなとき塚本鉄三氏からSM研究会の提案がありました。私達初心者にとって、又とない機会だと大賛成です。種々の女性や男性と共に、SMを研究すること

が出来れば、こんな素晴らしいことはないと思ひます。氏によれば、既に数名の女性の心当りがあるのか、是非実現して頂きたいと思ひます。

(東京都品川区・田中逸人)

○ 山村園子様。貴女はバスガイドというお仕事の関係上、毎朝浣腸する習慣がついたそうですが、それは素晴らしいことですね。小生も浣腸には特に興味を持っています。一人です。女性の最も恥かしい部分への浣腸、それを身に受けて悶絶する女性の美しい姿態など、とっても興味深い事です。恋人がいらいしゃらないそうですが、趣味を同じくする者として、お友達になれば幸いです。SMプレイの経験はないのですが、貴女とプレイしたい気持でいっぱいです。

(大阪市・嵯峨小一郎)

○ 「ピアスイヤリングと私のSM」と題しまして投稿しましたところ早速十二月号の奇クサロンに掲載され、うれしく思ひました。最近街を歩いてもピアスイヤリングをしている女性が大変多くなりまして、センスあるオシャレとして大変魅力的であり、目を楽しま



せてくれます。奇くご愛読の女性の方々、モデルの方々も耳たぶに小さなイヤリングホールをあけてピアスイヤリングのオシャレを大いに楽しまれるよう願っております。施術料が比較的高いため逡巡していられる方も多いことと想われますが、奇くご愛読の女性の方であれば、ご自分で簡単に出来るのではないかと思います。片桐久子様。勇気あるお便りを拝見し、私でよければプレーのお相手をして頂きたいと思えます。あまり若くはありませんが、SMを通じて女体美を追求して参り随分になります。責めのアイデアも色々ありますので、ご満足をいただければいいかと思えます。プレーのお札には貴女の耳たぶに、すてきなイヤリングホールをプレゼント致します。

(東大阪市・益原俊夫)

私は長身やセ型色白の二十八才になる青年です。私はSMに興味を持っており奇くを愛読していますが、経験は皆無です。恐らくMではないかと思えます。と言いますのは、奇くにのっています女性のように、自分が素裸にされて責められたら、どんなに気持がよい

だろうかと思えるのです。私の様な者でも調教してやろうと思われまして、一度シゴいて見て下さい。今の私はM的な空想ばかりしてオナニーしております。でも、本当に全裸にされてロープで全身の自由を奪われて、ムチやローソクで急所を責められたら耐えられなかろうか、自信がありません。今まで通り、責められている女性を見て、それを自分に置きかえて空想している方が楽しいのかもしれない。でも一度でもいいから高橋様のような女性に、死ぬほど責められてみたいとも思えます。

(大阪市・色白良男)

朝夕めっきり冷たくなっています。街路樹の落葉が舗道をカサコソとまわっているのも淋しい気がします。私のわがままな通信に對しまして、たくさんのお返事をいただき、ほんとうにありがとうございます。うございました。それに編集部の方々からも誌上に出てみないかと身の余るお誘いをいただき感謝しております。私って、そんな暗れがましい勇気はございません。平凡な女でございます。今、一人の方と知り合い、土曜日の午後、二度ばかりデートいたしました。

私って、ほんとうにSMの好きな女なのです。その方とはじめてプレイをして、そんなに思いました。SMプレイのことを思っています。一週間は心がうきうきしています。お手紙をいただきました。沢山のお友達の方に大へん申しわけございませぬが、久子は今、たった一人の方とお知合いになれて、とても幸せです。移り気出来るような性質ではございませんので、あしからずお許し下さいませ。そのうち、また、お便りさせていただきます。(大阪市・片桐久子)

私は28才の男性で、奇く、特に塚本鉄三先生のファンです。私は奇くを知るまでは女の子を縛るということは相手に苦痛を与えるだけの野蛮な行為であり、現実には行われぬ異常な世界と信じていました。しかし、奇くを見て、初めは信じられなかったのですが、SM夫婦や同好者の告白、それに塚本先生のルポなどを読んでいくうちに、このような男女の愛情の交流があつていいように思うようになりました。でも小説に出てくるような暴力行為は許せません。やはりSMプレーというものは、お互いの愛情、もしくは信頼関係

◎妊婦資料と縄による凌辱◎

初妊娠に羞じらう女

大手札三枚一組 五〇〇円  
南 加津子 略号八みい V

妊娠腹の膨らみを曝す

大手札三枚一組 五〇〇円  
南 加津子 略号八みる V

妊婦の乳房と腹部を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円  
南 加津子 略号八みに V

アグラ縛りで責める妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
南 加津子 略号八みへ V

開股縛りに悶える妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
南 加津子 略号八みえ V

足吊り開股の羞恥に泣く妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
南 加津子 略号八みる V

妊婦の海老責め地獄

大手札三枚一組 五〇〇円  
南 加津子 略号八みり V

豊満な妊娠腹M女の哀歓

大手札三枚一組 五〇〇円  
南 加津子 略号八みと V

が大切な前提条件だと思います。それのないSMは男性の一方的な暴力行為になりキケンです。又SMを興味本位にとりあげすぎるため、世間一般にはSMは異常行為とみられ、とくに女性からの反発が強いのだと考えます。あくまでも、お互いの愛情行為の現われの



一つであって、全てではないといふこと。だからSMを常に強要すれば、それは異常と考えます。又SMに対する女性の受取り方に三つあると思います。(一)はたとえ愛する男の望みであっても、けがらわしいと拒否する女。(二)は時々ならばSMの相手になってくれるが好きではない女。(三)はその行為から、セックスの喜びを本能的に感じる、いわばプレイの相手としては理想的な女。この三つのタイプがあるようです。ここに三枚同封しました写真の女性とは、あるサークル活動で知りあったのですが(四)のタイプです。私は羞恥責めが好きです。塚本先生の写真を参考にしているのですが、どのように縛っているのかわからず、へんな縛り方になってしまいました。でも生の写真は迫力がありますね。この女性は自分のを見るのは嫌がりますので見せていませんが他の女性の写真を見せてみたいのです。もしよろしければ先生の作品、お願いします。

(滋賀県・大津那美夫)

庭先で泣いていた虫の声も聞えなくなり、朝めっきり冷えこんだ日曜日。久し振りに押入れを掃除

カラー新作女体緊縛資料

カラープリントに依るM女の美しくも可憐な姿態を皆様のコレクションの一端にお加え下さい。いずれも各組極鮮明な大手札判プリント三枚一組一〇〇〇円です。

アグラ縛りに悶える美女

前田真知子 略号／まへ

襟り責めに呻く美女

前田真知子 略号／まほ

悦虐の裸身を大胆に晒す

前田真知子 略号／まよ

成熟した女体のマゾの謎

前田真知子 略号／まち

明眸を汚すむこい縄目

前田真知子 略号／まお

全裸の開股開脚開陳縛り

深田 菊子 略号／ある

白肌と赤白まだら紐の変態

深田 菊子 略号／あり

浣腸と緊縛の弄戯

福井 桃子 略号／あや

縛りの羞恥に喘ぐ乙女

笠井奈保子 略号／あむ

羞らいのルツボの中で呻く

笠井奈保子 略号／あも

衆人に晒された緊縛女体

笠井奈保子 略号／あめ

猿ぐつわに悶えるマゾ女

笠井奈保子 略号／あみ

全裸で見せる挑発の狂態

松本 たえ 略号／あき

強烈な後手縛り展開

松本 たえ 略号／あい

臨月腹緊縛の発端

福井 桃子 略号／あろ

便々たる太鼓腹を縛る

福井 桃子 略号／あね

拘束された臨月の蛙腹

福井 桃子 略号／あれ

蛙腹に強烈な縄目を掛ける

福井 桃子 略号／あよ

以下二枚一組八〇〇円

海老責めの後手吊り

江口 淑子 略号／あお

苦痛と喜悅の不思議な交錯

江口 淑子 略号／あわ

している、湿気くさいフトンの下からビニール袋に入ったオムツカバーが出てきた。小さくたたまれているせいか、とても可愛い感じだ。急いで取り出し、誰もいないのを確かめてから、そっと身につけてみた。ビニールの匂いがプーンと鼻をつく。ああ、なんと心地良いことか。私はオムツカバーの上から下から自分自身を愛撫した。この数分間に私は、少年期の或日の事を思い出していた。それは終戦後、間もない昭和二十一年頃だった。雑貨屋の店頭でゴムだけのオムツカバーが初めて出回るようになった。もちろん赤ちゃん用だが、私はそれが欲しくて欲しくて、学校の帰りには遠回りしてそれを見たものだ。これがあれば母に叱られる事もなく、地蔵入りのフトンも人目にさらす事もなくじっくり眠る事が出来るものにとどれだけ思った事か。それから二十余年。押入れで発見したビニールのオムツカバーを身に着ける事が出来、とても幸を感じている。夜尿がなくなった今も、オムツカバーに対する憧れは変わらない。そして出している愛撫したり、持って寝たりしている。だが最近、ビニ

(東京都足立区・北風令人)

強度のM男性です。私は30才、神酒愛飲を夢みている奴隷です。どなたか私の希望をかなえて下さいませんか。いかなる女王様のご命令にも絶対、服従致します。縛り、鞭打ち、ローソク責め、何でも結構です。舌と口による徹底的



な奉仕の強要、及び女王様の偉大なるお尻での窒息攻め（私が最も夢にまで見ていた奉仕）等、女王様のその時その時の御気分によって人間馬、人間椅子、人間犬、女王様の専用タンツボ、女王様の専用人間便器、及びトイレットペーパーの代用等として奴隷である私を充分、御利用下さい。

（川口市・鈴木正夫）

○ 川路むら子さん、私は貴女の大ファンでした。ぼってりと肉のりした貴女の縛られた写真を眺めていて、私は思わずオナンしたものです。川路さん、貴女こそ、私のオナペットだったのです。一月号の通信によりますと、更に肉がつかれたということです、是非再度、誌上に、その麗しの姿を見せて下さい。モデルになるのは肥満気味なのは絶好です。それは苗木さんを見てもよくわかりでしょう。川路さんは、もう姿を見せられないと私はあきらめていましたが、大いに安心しました。貴女のような真性のM性の方を、思いつきり縄でぐるぐるに縛って責めたら、どんなに気持がよいでしょう。むら子さんも、きっと私の羞恥責めに泣かれると思います。も

し再度、誌上に出不れないのでしたら、是非、私に貴女を責めさせて下さい。（京都市・絆友三）

○ 十二月号は久しぶりに見えたえがあった。辻村隆氏の、前に連載されていたSMカメラハントを思わせるような写真と記事。それに塚本氏のカメラとペンのルポルタージュは、決して見事なプロポーションとは言えない苗木陽子をモデルに色々な責めを行い、そのルポの様子を、これまでになく多くのページを使って書かれたのは、何カ月分にも相当する読みごたえがあった。初めての責めで、すっかりM性を見せた苗木陽子は根っからのマゾの女性だと思われる。読み物の方では三回目を迎えたSM企業が良かったと思う。今後、大いに期待しているものの一つである。また、特に目立ったのはモデル希望の女性が、ふえたことである。塚本氏も一人で大変だと思

（長崎市・小池明男）

○ 小生、二十七才。体は小柄ですが、スポーツ万能で、いたって健

康な独身のサラリーマンです。数年前、ある本屋で奇クを見つけてから、自分と同じ仲間がいることに喜びを感じ、それから毎月、かかさず奇クを求めて、本屋のおばさんとも顔なじみになってしまつたくらいです。自分の性質はSでもMでも、どちらでも受け入れることができると思います。要するにSMプレイそのものが根っから好きな男です。女性を裸にして縛り、恥かしい姿を写真に撮っていじめたり、または、その反対にお姉さま（自分より年下でも）に無理なことを言いつけられて、おしおきをうけたりすることを望んでいる男です。奇クの愛読者の女性の方なら、こんな私の気持もわかってくれると思います。たがいに一般の人には言えないことを打ちあけあってプレイを心から楽しみたいと願います。こんな私とプレイをし、また写真を撮りたい、撮ってはほしいと思われる方、お便り下されば幸いです。写真の方は自分で現像も焼付けもできますので心配はいりません。ある程度の遠方でも自ら参上いたします。名古屋の武井綾子様にも一度お会いしたいと願っています。

（愛知・国柄薫）

○ 私は三十一才になる男性です。奇クは、ここ七、八年、読ませていただいています。自分ではSだと思っ

（東京・木村文男）

○ 私は刺青に対する魅力、特に彫る方のS、彫られる方のM的な快感、そして完成したときに見られる冴しい美しさ。そうした諸々のものに強く魅かれ、趣味として極致のものと思ひ愛好しているもので



## うら若き初産婦出産間際の裸身を晒す

## 臨月の妊孕美鑑賞

大手札三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八つあV

妊娠という生理現象によって起った女性の美しさを、とことんまで追究して、その裸身をあばく。

## ベッドの上の妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八つあV

巨大なお腹をほうり出してベッドの上にて、いろんなポーズをとって見せる露出症気味の妊婦。

## 鮮明な蛙腹妊娠線

大手札三枚一組 五〇〇円

すが、奇クのモデルの山原清子さんに願わくば、もっと沢山、刺青をしてみせてほしいと思います。

十一月三日夜のSTVテレビ番組で横浜のOLの阿部昭恵さんの見事な極彩色の総身に施した刺青を見ましたが、本当に身内が、ぞくぞくするような感激でした。海外は勿論、日本国内にも全身彫をした女性が沢山おられるので、もしその方達と文通ができたなら、とても楽しいことと思うのですが、今のところ、それができなくて残念

南加津子 略号八つわV  
妊娠線も鮮やかに蛙腹は日を追う毎に、お臍を中心にして次第に下にさがって出産も間近だ。

## 突き出した太鼓腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八つそV

息を吸い込み腰を引いて精一杯太鼓腹を前に突き出して誇張した巨腹をバッチリと狙ったフォト。

## 臨月の妖しき裸像

大手札三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八つこV

たおやかな女性の腹部と乳房が異様なまでに膨隆して裸身に醸しだす妖しいムードをおさめた。

## 開設する若き妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八つちV

便々たる妊娠腹をさらしながら左右の足を八の字に自ら開いて、妊娠した女性の悦楽に酔うのだ。

## 臨月太鼓腹の神秘

大手札三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八つてV

妊娠した若き女性の神秘を、これほど間近に、しげしげと眺めることが出来るのは今だ。

## 羞らう全裸の妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八つらV

只でさえ裸になるのは恥かしい若き女性が、異様なまでに膨らんだ腹部をさらして恥かしがった。

たら嬉しいと思います。

(北海道・亀田明)

花井美恵子様。貴女の通信文、十二月号の奇クで拝見しました。貴女も奇クを愛読しておられるとのこと、他の雑誌には真似のできないこの奇クの魅力は、長年のたゆむことのない編集部の方々の努力と愛読者らの支援によるものでしょう。私は初めて奇クを手にしたとき、果してこのような本があったのかと、思わずにはおられ

ませんでした。私のSMへの具体的な興味は数年前、偶然、古本屋で奇クを手にしたことから始まります。それ以来、自分がSMに魅せられるのを、どうすることもできず、いろいろ悩んできました。果して本に書いてあるようなM的女性が存在するのだろうか。また自分は、めぐり会うことができるのだろうか。生まれつきの性、あるいは幼少時の環境のせいで、こうなったにしろ、今さら、どうにもなりません。花井さんは二十四才のOLだそうですが、まだまだ若いですね。結婚歴があると書いてらっしゃいますが、気にすることは無いと思います。男性に見出すのは難しいもの。なかなか自分が納得いく女性はいないものだと感じていた頃です。私は女性に對する責めとして、羞恥責め緊縛が好きです。女性が恥かしさに身を震わせているのは、美しいとさえ、思います。私は二十五年の独身の男性ですが、花井さんとおつき合ひできたら、と思います。いろいろHな話も、してみたいと考えています。

(東京・森田俊一)



大阪の片桐夕子さんも、私と同じ経験をされたとの由。私も過去五年間、上司の浣腸妻でしたが、

## ☆白豚豊満美緊縛

### 剃毛の白丘を晒す

大手札三枚一組 略号五〇〇円  
苗木陽子 略号八〇〇円  
剃毛責めによって、あんな膨らみ、あんなに陽子が、豊かな膨らみを、あからさまに露呈して縛られた気持、良さを全身で満喫している。

### 股間縛りのコブ玉

大手札三枚一組 略号五〇〇円  
苗木陽子 略号八〇〇円  
ゴワゴワとした白ロープに固く結び目を作った股間縛りに、陽子の喘ぎようは、すさまじい。

### 羞恥剃毛責め失神

大手札三枚一組 略号五〇〇円  
苗木陽子 略号八〇〇円  
身動き出来ず縛られて剃毛されるという羞恥責めを受けた陽子が、真白いすべすべした肌を晒して、「気持ちいい」を連発していた。

### 淫らな白豚を縛る

大手札三枚一組 略号五〇〇円  
苗木陽子 略号八〇〇円  
脂ぎった女盛りの豊かに肥えた女体を思うさまに縛り上げて、その淫らな尻、太股などを、情容赦なく、さんざんに虐め抜く。

今年、彼の転勤で手が切れたので、貴女と同様、今になって彼の長年の浣腸責めが私の肉体から脱けず、うずく身を一人で、いたぶり続けています。女としてのうのは所詮、体で覚えさせられたものを拭い去ることは、本当にむつかしいものです。引き出しには二〇〇CC浣腸器、一〇〇CC浣腸器、二〇〇CCイルリガート、エネマ、十五号カテーテル、アヌス栓、ろうそく、こけし、パイプレーター、ソーセージ、清酒ワンカップ大関のビン、日出盛のトックリ瓶等、いつでも浣腸やアヌス責めができるように用意しており、その日の気分によって色々使い分けております。そのせいか私の部分は他の人より遥にゆるんでおり、大きくなっているようです。誰か男の方にでも責めて頂ければと思っておりますが、知らない男性では後が面倒で、むしろ、この際、私と同様な立場の同性とならと思っていた矢先、貴女の文をみて早速、私の心境を述べている次第です。幸い貴女はアナル責めの経験もあるとの由、お互いに生まれたままの姿でアヌスを責め合ったら、どんなに楽しいものでしょうか。私独得の浣腸を貴女に施

し、時間を忘れ本格的アヌス責めを味わいたいです。最後は強烈なドナンと食酢の混合液で、お互いに浣腸し合い、腹の中がただれはしないかと思う位の排泄感を辛抱し続け、どちらが強いかを試みたいと思います。同じ心境の貴女と共に、お互いの体で確かめたいものと思っております。

(東京・柴田朝子)

滋賀県の横田良子さん。十二月号の通信を特に興味を持って読んで五十才の男性です。小生は若いときから女性を責めてみたいという欲望を持っておりましたが、プレイの相手とすべき妻が十数年前に結核を患い、胸部手術をしたため、縛り上げていじめるというような激しいプレイは到底、不可能になり、且つ、妻はその方向には徹底した拒否反応を示しており、また今までに、自分の望むような女性にも会えず、もんもんとしておりました。しかし小生は、プレイの対象にするにも、あまり若い女性には興味はなく、三十才代の女性を相手にしたいと思っております。年来の求めていたものがかなえられるのではないかと考えております。

す。貴女が望むのであれば、他の二、三人の男性と一緒に、いじめて上げて結構です。

(西宮市・牧祿郎)

甲斐様。いかがお過ごしですか。

十二月号には、あなたのご投稿がございました。非常に期待していたものですから、がっかりしてしまいました。私は「チコの飼育法」以来、あなたのファンになってしまいました。先月号(十一月号)には、やむにやまれず投稿したものが掲載され、しかも、あなたのご投稿と隣り合わせで、もう幸せ一ぱいでした。編集部の配慮を感謝し、天にも昇る心地で、何度も読み返しました。おつきあいただければ幸いです。おつきあいができれば、せめて誌上に、ご登場願います。お姿の写った写真(お差しつかえがあれば顔は結構です)など、あわせてお載せ下さい。もちろん、あなたの愛人であるチコと一緒に……。

(舟橋一郎)

千葉県の花井美恵子様。十二月の読者通信で貴女を知りました。私は三十三才の独身男性です。貴女のおっしゃる、女の喜びを与え



次号(三月号)は一月二十二日に発売いたします

ましよう。写真撮影もできますので、きつと貴女の御希望に、そえ

ると思います。縛り写真も多数ありますので、送って差し上げたいと思います。それに、変なお話、恥かしいお話等、語り合いたいと思います。私は特に羞恥責めが得意です。貴女のサイズとエッチなお手紙を待っております。

(横浜市・田中良雄)

高千穂順子様。どうか僕を奴隷にして下さい。貴女のことを本誌で知って以来、僕の頭は、ごく近くに住みながら何もできないというもどかしさで、いっぱいです。これまで半年間、湧き上がるようなMの情念を必死で抑えて来ましたが、今はもう限界に近づいたという思いを否定できません。僕はまだ学生ですが女性に奉仕したいという思いは誰にも劣りません。お一人で住んでおられる女王様の退屈しのぎ程度に使って頂ければもう奴隷として最高の理想といえるでしょう。僕は自分では先天性のMだと思っています。一生のお願いです。どうか僕の得意の舌技

をお試し下さい。

(尼崎市・田岡M造)

大阪市の片桐久子様。私は二十四才の男性で、奇クを読み始めてから二年程、経ちました。最初の一年間は奇クを読むだけに終っていたのですが、今年の二月に、ふとしたことから知り合った女性とSMプレイをするようになりまし

相手が見つかる訳もなしと思って

いた私ですが、十二月号の片桐様の通信を読んで、何ともいえない喜びが胸に、こみ上げてくるのを感しました。こんな私で良かったら、あなたの相手をつとめたいと思っております。この私にお便りを下されば、すぐにでもとんで行きます。早くあなたとSMプレイを心がとろけるまで、やりたいものです。

(京都市・箕浦利典)

少なかっただけに喜ばしい事である。

(長崎市・小池明男)

私は結婚五年になる三十三才の男性です。中学生頃よりセックスには異常な興味を持ち続けてきました。最近になりSMに殊に興味を引かれております。中でも奇クは特に私の体質に合うように思われます。それは過度の残忍さがないからだと思ひます。私のセックスに對する考え方は女性に満足を与え、自らも満足することにあります。その延長上にSMがあると思ひます。このことは奇ク誌上での告白記事や通信欄における女性の意見の中にSMによる快感をうたっているが、衣の下に、ちらりとセックスによる喜びを主張されていることが多いことから、うなずけます。すなわちM性を前戯として、とらえたいと願っているものであります。つまりセックスぬきのSMプレイでは女性にとって真の喜びは得られないのではないかと思ひます。一方、男性にとつてSMは飽くことなき征服欲とマンネリ打破インポへの挑戦でありましよう。しかし、男性によつてSMの深追いは、ミイラとりのミイラではないが、インポと



りのインポになったりする。これも誌上SMレポーターの言葉の端にうかがえます。以上の考えから私は尼崎の南政子様、東京の甲斐千恵子様の記事は興味を持って読ませてもらって居ます。私に猥姦の模様を見せて下さい。そして彼女の好みのポーズで仕上げをして真の喜びを与えてあげたい。名付けて「仕上げ人」

（三重県・仕上太郎）

私は47才、大学出で、現在、妻と2人の子供あり職業はインテリ

の職業です。私は、いわゆるSだろうと思います。いわゆるSというのは普通Sの好む女体緊縛といったものには興味がないのです。私は女性に恥ずかしがる事、特に女性を患者に仕立てて、いろいろセックスに関するお医者さんごっこや、女性を全く赤ん坊の様に扱う事に、この上ない喜びを感じずる者です。ですから興味あるプレイは浣腸、排尿、排便、フェラチオ等です。妻はセックスに至って淡白でM気もなく、セックスライフは、まあまあ満足しているもの

の、ぞくぞくするような喜びを味わった事は、一度もありません。一生に一度でいいから私のこの願望に合うM女性と一度、心ゆくまでプレイをしたいと日夜、願っています。私も、いろいろSM雑誌を読んでもみましたが、矢張り、貴誌が抜群です。他誌の場合はモデルの女性などは殆どプロで、お義理にしばられたり、わざとポーズを取っているような感じで、写真に迫力がありません。貴誌のものはプロの感じや、お義理といった感じは少しもありませんし、又、

体験者のレポートやルポルタージュなど、所謂これこそ本物だといった貴誌こそSM誌の本物であると感じます。今後も貴誌のノンプロタレント集団の目指す方針を貫き通して下さい。貴誌のモデルさんでは、前田真知子嬢が大好きです。かなわぬ願いながら彼女とプレイをしたいなどと空想しています。ともあれ、すばらしいモデルを開発され、私達の目を楽しませて下さい。

（岐阜県・土木生）

### ☆奇譚クラブ既刊号在庫一覧表☆

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますので、お申込み次第、折返し急送致します。  
○送料は総べて当社にて負担致しますから、誌代のみ前金にてお送り願います。多数まとめて御注文の際は、一括して、△小包▽にて発送申し上げます。

#### ☆既刊雑誌在庫案内☆

|          |           |           |          |          |          |          |          |          |          |
|----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 昭和43年3月号 | 昭和42年11月号 | 昭和42年10月号 | 昭和42年9月号 | 昭和42年8月号 | 昭和42年7月号 | 昭和42年6月号 | 昭和42年5月号 | 昭和42年4月号 | 昭和42年3月号 |
| 送共三五〇〇円  | 送共三五〇〇円   | 送共三五〇〇円   | 送共三五〇〇円  | 送共三五〇〇円  | 送共三五〇〇円  | 送共三五〇〇円  | 送共三五〇〇円  | 送共三五〇〇円  | 送共三五〇〇円  |

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|



V

「値上げ」をお願いせざるを得ない状況に追い込まれてきたからであります。

◎うれしくはありませんがズバリ書きますと「次号〆三月号」より、巻頭の口絵写真を出るだけ増頁することをお約束して、本誌定価を一部「五百円」に改めさせて頂きます」という訳です。これを御愛読者各位が、「奇譚クラブ、おまえもか！」と思われるか、はたまた、諸物価値上がり慣らされた昨今のこと、「フーン」だけで済ましていただけるかは別と致しまして、「実社会のセチ辛さが深まるからこそ、夢園に息抜きされる愛好者の、ささやかなるベンチ代りを務めるのが本誌の使命」と手前ミソをすりたいスタッフの気持と共に諸事情御賢察の上、一カ月、金百円也の出費をお願いする次第であります。

〔告白、手記、体験〕

読者の皆さまが御自分で親しく体験されたことや秘められた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には五千円以上の謝礼を贈ります。

## 小説、読物、創作

本誌の編集内容に適した異色ある力作を大いに期待いたします。すべて自作の未発表

の作品に限ります。これはと  
思ふ作品は、必ず誌上で取り  
上げます。腕だめしの意味で  
ふるって御寄せ下さい。採用  
篇には五万円迄の稿料贈呈。  
〔奇クサロン向原稿〕

〔奇クサロノ向原稿〕

小品、写真、挿絵、通信、短信往来、感想、批評、読後感、モデル編集者執筆者への通信、夫婦プレイの報告、S M ニュース、映画雑誌新聞からの見聞記など、本誌独特の奇クサロンに適した投稿を求めます。記念品、写真資料又は二千元以上の謝礼を採用篇に對して、お贈りします。

「イラスト、カット」

本誌の内容に適したS M画を求めます。大きさは自由ですが必ず白い紙に黒色で描いて下さい。優秀な作品は誌上に継続的に掲載の上、当方からテーマを与えて制作して頂きたいと思ひます。腕に自信のある方は、どうか、習作をお見せ下さるようお願いいたします。画料については、作品に応じて御相談申し上げます。

◎御応募下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故悪しからず御諒承願ひます。

## ☆ 本誌御購読の葉 ☆

予約に限り

|         |           |
|---------|-----------|
| 一月分(1冊) | 四〇〇円△送共▽  |
| 三月分(3冊) | 一二〇〇円△送共▽ |
| 半年分(6冊) | 二四〇〇円△送共▽ |

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手難い方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 四〇〇円

二月号  
(第二十八卷第一号  
通刊第三百十二号)

昭和四十九年二月二十日印刷  
昭和四十九年二月一日発行

編纂人 杉原 弘  
 發行人 吉田 俊  
 印刷人 北村 夫

大阪市住吉区大領町四丁目六八

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番  
 (昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
 (昭和四十二年四月二一日)  
 国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集いたしてあります。本來成人向として發行を企圖して、りませんが、關係上、十八才未満の方には、絶對販売さらないよう。特にくれぐれも、お願ひ申し上げます。